EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03030 3424

(18)
I
945 c

昭和五年九月十五日印刷
昭和五年九月十八日發行

第十四回配本

昭和漢文叢書
莊子新釋
（上卷）

不許複製

著作者　坂井煥三
東京市神田區北神保町十一番地

發行者　辻本卯藏
東京市神田區今川小路二丁目一番地

印刷者　山縣精一

東京市神田區北神保町十一番地
發行所　弘道館
電話九段一三六八・一三六九番
振替口座東京八一一五番

印刷所　山縣製本印刷株式會社

莊子新釋 上卷終

は斲輪の手加減内にて言ひ、甘苦は材料其の物の配合上にて言ふなり」今之に從ふ。）○得二之於一レ手而應二於心一（得は感の如し、手と心との感應同交によつて爲し得らるゝなり。）○有レ數存二焉於其間一（數は術なり、コツ。此の句、倒裝法を用ふ、於二其間一有レ數存焉と同じ。）

書物は何う云ふ人の言つたことが書いてありますか。」桓公が曰はれるには「聖人の言が書いてあるよ。」輪扁が曰ふには「其の聖人と申すのは今生て居られますか。」公の曰く「そりや、もう疾くに死んで仕舞つて今頃生きて居られはしないさ。」扁の曰く「でしたら御殿樣の御讀みになつて居らつしやるのは古人の糟粕に過ぎません。」之を聞いて桓公、機嫌を損じ「この方が本を讀むのに、車師風情で、かれこれと批評すべきでない。無禮な奴だ。若し何か尤もな意見があればよいが、無かつたら其の手は見せぬぞ」とまくし立てた。そこで輪扁が曰ふには「私は外のことは存じませんが、たゞ私の職業の上から考へて見ますると、輪を削づゝて仕組む場合に其の削り方がユツクリでありますると自ら削り過ぎまして、仕組むのに容易でありますが、堅固でない。又いそいで削りますと自ら削り不足で、箝め込むのに澁つて中々はいりません。ユツクリして削りすぎもせず、いそいで削り不足でもない其の程よい加減は、たゞ〳〵手に感じて心に應ずることに依つてのみ出來ることで、口などではトテモ言ひ現はすことが出來ない微妙なるコツと云ふものが其の間に存在して居ります。されば私は之を私の伜に敎へることも出來なくば、伜も亦私から受けつぐことも出來ませんので、私は七十歳にもなつて猶ほ輪を削つて居る次第です。此の點から推しますると、古の聖人と其の傳へることの出來ぬ心術とは、疾くと昔に死んで居りまするから、御殿樣の今御讀みになつて居らつしやる本も、つまりは古人の妙道中の眞髓がなくなつた糟粕に過ぎません哩。」

語釋　輪扁（輪匠、名は扁、職業を以て名となす。庖丁、匠石の如し。）　○徐則甘而不レ固、疾則苦而不レ入（口義に「甘は滑なり、苦は澁なり、徐は寛なり、疾は緊なり。寛なる時は甘滑にして入り易くして堅からず、緊なる時は澁りて入り難し。」瀧洲牧野氏は別解を出して曰ふ「今按ずるに丁寧に削る、故に徐と謂ふ、而しておのづから少しく削り過ぐる意あり、雑つと削る故に疾と謂ふ、而して自ら削り足らざる意あり、削り足らざる故に苦澁にして入り難く、削り過ぐる故に甘滑にして堅固ならざるなり。即　徐疾

之子臣之子亦不能受之於臣。是以行年七十而老斲輪。古之人與其不可傳也死矣。然則君之所讀者、古人之糟魄已夫。

訓讀 桓公書を堂上に讀む、輪扁、輪を堂下に斲る。推鑿を釋てて上り、桓公に問うて曰く、敢へて問ふ、公の讀む所は何の言と爲すかと。公曰く、聖人の言なりと。曰く、聖人在りやと。公曰く、已に死せりと。曰く、然らば則ち君の讀む所のものは、古人の糟魄のみなる夫。桓公曰く、寡人書を讀む。輪人安んぞ議するを得んや。說有らば則ち可、說無くんば則ち死と。輪扁曰く、臣や臣の事を以て之を觀る。輪を斲ること徐なれば、則ち甘にして固からず。疾なれば則ち苦にして入らず、徐ならず疾ならず、之を手に得て、心に應ず。口言ふこと能はず、數あつて其の閒に存す。臣以て臣の子に喩すこと能はず、臣の子も亦之を臣に受くること能はず。是を以て行年七十にして、老いて輪を斲る。古の人か、其れ傳ふべからずして死せり。然らば則ち君の讀む所のものは、古人の糟魄のみなる夫と。

大意 前章の意を喩を以て再說す。

通釋 齊の桓公が或る時、御殿の上で書を讀んで居ると、車師の扁と云へる者が御殿の下で輪を削つてゐたが、何を思つたか、椎と鑿とを捨てゝ置いて御殿に上つて來て、桓公に問うて曰ふには「殿樣が今讀んでおいでになる

道の眞實を得るに十分であると考へて居るのは誠に悲しいことではないか。一體形色名聲では、もとより道の眞實を得るに足らないから、かの老子も眞に道を知る者は言葉で以て傳へることが出來ないことを知つて居るから默して言はない、從つて道を口にするものは道の眞實を知らぬのであると曰つて居るが、愚かなる世俗にはトテモ此の言葉の意味は解からぬ。

語釋　世之所レ貴レ道者書也（宣注に「世、道は書籍に在りと謂ふ。」）　○形與レ色也……名與レ聲也（又「書の言、譬へば此の類のみ」と。書物や言葉が道を傳へて居る程度は之を物に譬へて見れば物の眞實内容でなくて其の形色名聲ぐらゐに過ぎぬとなり。或は形色を直に文字と解し、名聲を概念と音聲と解してもよし。）　○彼之情（彼は道。情は實。）　○知者不レ言、言者不レ知（老子に見ゆ。）

桓公讀二書於堂上一、輪扁斲二輪於堂下一。釋二椎鑿一而上、問二桓公一曰、敢問、公之所レ讀爲二何言一邪。公曰、聖人之言也。曰、聖人在乎。公曰、已死矣。曰、然則君之所レ讀者、古人之糟魄已夫。桓公曰、寡人讀レ書。輪人安得レ議乎。有レ說則可、無レ說則死。輪扁曰、臣也以二臣之事一觀レ之。斲レ輪徐則甘而不レ固。疾則苦而不レ入。不レ徐不レ疾、得二之於手一而應二於心一。口不レ能レ言、有レ數存二焉於其閒一。臣不レ能三以喩二臣

あり、意の隨ふ所のものは、言を以て傳ふべからざるなり。而して世、言を貴ぶに因つて書を傳ふ。世、之を貴ぶと雖も、猶ほ貴ぶに足らざるなり、其の貴きは其の貴きに非さるが爲めなり。故に視て見るべきものは、形と色となり、聽いて聞くべきものは、名と聲となり。悲しいかな、世人形色名聲を以て、以て彼の情を得るに足ると爲すこと。夫れ形色名聲、果して以て彼の情を得るに足らざれば、則ち知るものは言はず、言ふものは知らず。而るに世豈に之を識らんや。

大意 前章に道の至大至廣を說く。此の章道の心傳すべくして口耳筆紙の能く所傳すべきに非ざるを言ひ、以て上を承け又下の一說話を記す。而も其の間斷ゆるが如く續くが如く、正に結構の用意深きを看る。

通釋 世人は道を研究するのに貴いものは書物であると考へて居るが、書物と云ふものは言葉を載せたものに過ぎない。言葉はそれ自ら貴くはなくて、別に貴い點がある、それは言葉で表はす意義が卽ちそれである。言葉の意義はそれ〴〵指し示さんとする微妙な方面があつて、それは到底言葉で以て端的に表現することは出來ぬ。然るに世人は言葉を貴ぶによつて書物を傳へるのであるが、書物に道が傳はつて居るのではない。されば世人が如何に之を貴んでも、やはり貴ぶに足らない、なぜならば其の貴いのは本當には貴くないからである。かく言葉も書物も道の眞を傳へ得るものでないから、人が如何に書物に於て氣をつけて視ても其の見得るものは道の形式であつて譬へて見れば物の形と色（道の形式）とぐらゐに過ぎないし、又言葉に對してどの樣に注意して聽いても其の聞き得るものは道の表面であつて譬へて見れば物の名と聲ぐらゐに過ぎない。然るに世人は斯かる外面的な形色名聲によつて

ず。既に其れ能く小、能く大、故に萬物に備在するを知る。」釋家の語に小には無間に入り大には方所を絶すとは此の謂。）　○形德仁義、神之末也（形は物の形を云ふ、宣穎は別解をなして曰ふ「其の德を仁義に形はすなり」と、之に依れば道の現れたる仁義は神妙なる道の末であると云ふことになつて意味をなさぬ。）　○奮レ棅（棅は柄と同じ、權柄、權力の本。）　○審二乎無假一、而不三與レ利遷二（德充符に出づ、無假は齊物論の所謂眞宰。利の字を物に作る、其の意は同じ。）

○極二物之眞一能守二其本一（德充符には命二物之化一、而守二其宗一とあり、參照。）　○外二天地一遺二萬物一（外亦遺、忘なり超越の意。）　○神未三嘗有二所レ困（神は上の神とは異なる、精神の意。困字は上の累擯遷を收結す。）　○賓二禮樂一（郭注、賓を賓客の賓となす、案ずるに成疏は數句と併せ解して「仁義の澆薄を退け、道德の淳和に進み、禮樂の浮華を擯けて無爲の虛淡を主とす」と曰ひ、賓を讀んで擯となす。兪樾亦之に同じて「禮樂を擯斥するを謂ふ、上句退二仁義一と一律」と曰ふ。今之に從つて郭を採らず。）

世之所レ貴レ道者書也、書不レ過レ語。語有レ貴也、語之所レ貴者意也、意有レ所レ隨。意之所レ隨者、不レ可二以レ言傳一也。而世因レ貴レ言傳レ書。世雖レ貴レ之哉、猶不レ足レ貴也、爲二其貴非二其貴一也。故視而可レ見者、形與レ色也、聽而可レ聞者、名與レ聲也。悲夫世人以二形色名聲一爲レ足三以得二彼之情一。夫形色名聲、果不レ足三以得二彼之情一、則知者不レ言、言者不レ知。而世豈識レ之哉。

訓讀 世の道に貴ぶ所の者は書なり、書は語に過ぎず。語は貴ぶ有り、語の貴ぶ所のものは意なり、意は隨ふ所

偕にせず。無假を審にして、利と遷らず、物の眞を極めて、能く其の本を守る。故に天地を外にし、萬物を遺れて、神未だ嘗て困しむ所あらざるなり。道に通じ、德に合し、仁義を退け、禮樂を賓けて、至人の心定まる所ありと。

【大意】前二章皆老子に托して道を說く、因つて又此に老子の言を引きて之を收結す。一章の意は道の廣大と至人の偉大とを說く。

【通釋】老子が嘗つてから云ふことを曰つて居る「一體道は普遍であつて大に於ても極みなく、小に於ても遺す所なく、細大漏らすことがないから天地萬物皆其の中に具在して居る。卽ち道は廣大にして包容せざるなく、深遠にして測ることが出來ぬ。實に至大至高の實在である。かの形や德や仁や義などは固より神妙なる道の末たるに過ぎないが、道を體得した至人でなくば、其の之が末であることを定めることが出來ない。して見ると至人が天下を有つ事業は何んと廣大ではないか、廣大なれば自ら物の累を受くべきであるが、無爲の玄道に體達して居るから廣大な事業も其の煩累となるに足らない。蓋し無爲の眞人は天下に權柄をふるへども、それに心を惹かれて偕に動き偕に行くことなく己は靜寂の位に安住し、眞實無假なる道を認識して利の爲めに遷ることなく、物の眞實を究めて能く其の根本を守りて失ふことがない。かるが故に天地萬物を忘れて精神は常に安樂であり、上は道に通じ德に合し、下は仁義を退け禮樂を斥け、其の心は安住不動である。

【語釋】夫子（成疏に「莊子、老君を師とす、故に呼んで夫子となすなり。」）　○道於レ大不レ終云云（又「二儀（天地）大と雖も、猶ほ道の中に在り、道の量を窮むること能はず、秋毫小と雖も之を待つて體を成す、此れ則ち小に於て遺さ

しむ。副墨に頬は頬の中央廣くして兩頭銳きなりとあり。）　○䦧然（口義に「口呿くの貌」とあり。）　○而狀義然、似₌繫ₗ馬而止₋也（義然は郭慶藩によれば、義讀んで峨となす、義然は峨然なりと。高く構へて居る樣か。下の句諸注皆別句となす、今は上句に屬して解す。）　○知巧而覩₌於泰₋（口義に「自ら其の知巧を恃んで驕泰の意、外に見ゆるなり、竟は境なり。」）　○邊竟有ₗ人焉、其名爲ₗ竊（竟は境なり、竊は賊なり。口義に「邊境の間に若し此等の人あらば必ず之を指して以て賊とせん。」宣穎曰く「土成綺の狀貌志氣、此くの如し、虛靜無爲と相去る遠し。是れ大道の賊なり、故に其の名を竊となすと曰ふ。」其名爲竊の一句、奇々妙々。）

夫子曰、夫道於ₗ大不ₗ終、於ₗ小不ₗ遺、故萬物備。廣廣乎其無ₗ不ₗ容也、淵乎其不ₗ可ₗ測也。形德仁義、神之末也、非₌至人₋孰能定ₗ之。夫至人有ₗ世、不₌亦大₋乎、而不ₗ足₌以爲₋之累。天下奮ₗ棅而不ₗ與ₗ之偕、審₌乎無ₗ假而不ₗ與ₗ利遷、極₌物之眞₋、能守₌其本₋。故外₌天地₋、遺₌萬物₋、而神未₌嘗有ₗ所ₗ困也。通₌乎道₋、合₌乎德₋、退₌仁義₋、賓₌禮樂₋、至人之心有ₗ所ₗ定矣。

訓讀　夫子曰く、夫れ道は大に於て終らず、小に於て遺さず、故に萬物備はる。廣廣乎として其れ容れざること無きなり、淵乎として其れ測るべからざるなり。形德仁義は、神の末なり、至人に非ざれば、孰れか能く之を定めん。夫れ至人の世を有つは、亦大ならずや、而かも以て之が累とするに足らず。天下棅を奮へども、而かも之と

老子に近づき、更めて問うて曰ふには「身を修むるには如何にしたならばよいでせうか。」老子が答へて曰ふには「汝の容貌は全體から見て、人ときはだつて異つて居る。先づ其の目はイヤニ飛び出て居り、額はイヤニ廣く、口はイヤニ大きく、そして汝の素振はイヤニ高く構へて居て、馬を繋いで引き止めて居るに似て居る。そして胸には野心鬱勃なれども強いて之を抑制し、心が事に觸れて發する時は頗る機敏で、是非を明察し利害に審らかであり、知巧に長けて居て驕慢の氣が外にまで現はれて居る。要するに行ふ所は凡て眞實を缺いて居て虛僞である。若しも汝の如き人物が物騷な邊境にでも徘徊して居たならば、人は必ず呼んで泥棒と曰ふであらう。されば汝が身を修める志があるならば、顏付も身風も心構へもスツカリ立て直してかゝらなくては駄目だよ。」

語釋 百舍重趼（成疏に舍は逆旅なりとあり。之によれば百舍は兩宿の如し。一說には舍は三十里、從つて百舍は三千里。趼は口義に足趼の厚皮なりとあり、足のかゞとのタコ。成疏に脚に泡漿創を生ずるなりとあり、之によればマメのこと。）○鼠壤有ニ餘蔬一而棄レ妹不仁也（陸西星曰く「齋齋（林希逸のこと）妹を以て昧となし、蔬を暗昧の地に棄つるを謂ふと、未だ安ならざるを覺ゆるに似たり。直に妹を以て解するに若かず、蓋し意ふに妹氏、蔬を鼠壤に棄つ、聖の德、儉嗇を主とす、故に其の暴殄（亂暴な捨て方）を責めて之を疎棄す。」異說あれども今陸氏に從ふ。）○漠然不レ應（口義に不答を以て答ふるなりとあり。漠然の二字、殊に味ふべし、ボンヤリして取り留めなきさま、渾沌然に同じ。）○吾心正郤矣（口義に「郤は退る所あり、今其の心誠く退然として有ることなし、旣に見てつ後、忽然として覺ることあるを謂ふ。」）○巧知神聖之人、吾自以爲脫焉（口義に「巧智神聖は有爲の學なり、脫は離なり、其の上に出づるを言ふなり。」因に云ふ、上み聖人に非ずの句に應ず。」）○呼ニ我牛一也、而謂ニ之牛一、呼ニ我馬一也、而謂ニ之馬一（應帝王に一以レ己爲レ馬、一爲レ己爲レ牛とあるに同じ、參見。）○吾服也恒服、吾非ニ以レ服有一レ服（焦氏筆乘に「服は服從なり、吾の人に服從するは、乃ち是れ平日常々此くの如し、心ありて以て之に服するに非ざるなり。」は服を以て行と解す、必ずしも從はざれ。吾非ニ以レ服有一レ服と上文の非レ曰ニ靜也善故靜一也と句法相似たり。）○履行（又「步を躡して前むと」あり、長者に對する禮なり、趨行の意か。）○崖然（口義に崖異の状ありと。きはだつてことなること。）○衝然（又「突視の狀あり」と。）○顙頯然（顙頯は大宗師にも見ゆ、頯は眞人の顙を狀し、此は小人の貌を狀す。解に苦

休まないで遙々難儀をして尋ねて參りました。然るに今貴方の身邊をツク〲見ますと、噂さと違つて聖人とは思はれません。なぜならば貴方は鼠の巢に野菜の切れ端があるのを見て、自分の爲めに炊事をして吳れる親味の妹を疎んじ見捨てになつたが、それは不仁である。又貴方は生のものや熟したものが自分の前に有り餘る程あるのに、猶ほ財を積み物を收めて限りがない、實にアキレタ慾深かな不義な方である。」老子は之を聞いても、ぼんやりした顏して一言の應へもしなかつたので、士成綺は其のまゝ引き退つたが、復た翌日老子を見て曰ふには「昨日私は貴方に對して惡言を申しましたが、今日は不思議にも昨日のやうな心がスツカリ無くなつて居ります、之は一體何う云ふわけなんでしやうか、自分ながら分かりません。」老子が曰ふには「そも〳〵巧知神聖の人は有爲の人であつて感服出來ぬ、俺れは斯樣な人々の仲間から離脫して無知無聖を立場として居るつもりだ。されば昨日汝が俺れを不仁不義、聖人に非ずと刺つたが、モツトひどいことを言つて、俺れを牛と罵倒しても、牛ならば牛でもよい、俺れは平氣で牛を以て居るであらう、又俺をば馬と罵倒したら、俺れは亦平氣で馬になつて居るであらう。且つ苟くも其の實があつて人が之に相當する名を與へた場合に、何んのかんのと云つて、與へられた名を拒んだならば、更に殃を招くことになるであらう。これが俺れの態度であるから、昨日も汝の呼ぶに任せて、一向平氣で居たわけである。且つ俺れが人に服するのは常に服して居るので少しも變りはなく、又服することが善いからと云ふやうなわざとらしい心があつて服するのでなく自然に服するのである。」かく言ひ終りて老子は其の場を去つたが、士成綺は此の話を聞いて全く畏れ入り、老子の影を踏むことを避けて、斜の位置を取つて後を追ひ、恭しく小股で歩いて

人焉、其名爲竊。

訓讀 士成綺、老子を見て問うて曰く、吾れ聞く夫子は聖人なりと。吾れ固より遠道を辭せずして、來つて見んことを願ふ。百舍重趼して敢て息はず。今吾、子を觀るに、聖人に非ざるなり、鼠壤に餘蔬有りて、妹を棄つるは不仁なり、生熟前に盡きずして、積斂崖なしと。老子漠然として應へず。士成綺、明日復た見て曰く、昔者吾、子を刺ることあり、今吾が心正に卻けり、何の故ぞやと。老子曰く、夫れ巧知神聖の人、吾、自ら以爲へらく脱焉たりと。昔者子我を牛と呼ばば之を牛と謂はん。我を馬と呼ばば、之を馬と謂はん。苟くも其の實あらんに、人之に名を與へて受けずんば、再び其の殃を受けん。吾が服するや恆に服せり、吾は服するを以て服することあるには非ずと。士成綺鴈行して影を避け、履行して遂に進んで問ふ、身を修むること若何と。老子曰く、而の容は崖然、而の目は衝然、而の顙は頯然、而の口は闞然、而の狀は義然、馬を繫いで止むるに似たり。動かんとして持、發するや機、察にして審、知巧にして泰を觀る。凡て以て不信たり。邊竟に人あらば、其の名を竊と爲さんと。

大意 本章亦老子の言に托して機警知巧の人は與に道に入る可からざるを描寫し、自から虛靜無爲の德を贊す。行文至つて奇なり。

通釋 士成綺と云ふ者あり、或る時老子を訪問して尋ねて曰ふには「私は先生をば聖人であると聞いて居りましたので、遠路をものとせず、是非御目に掛かりたいと思つて、百日も宿りを重ね、足ダコを幾つも作くり、少しも

擔負して强いて世に行ひて以て蒼生を教ふるは、何ぞ大鼓を打撃して亡子を求覓するに異ならんや。是れ鼓聲愈よ大にして亡ぐる者、愈く離る。仁義彌く彰かにして道を去ること彌く遠きを以ての故に之を得るに由なし。」）○意、夫子亂人之性也（成疏に「亡子の獲られざるは、罪、鼓を鳴らすに在り、眞性の明かならざるは、過、仁義に由る、故に喟歎を發して之を總結するなり。」）

士成綺見老子而問曰、吾聞夫子聖人也。吾固不辭遠道而來願見。百舍重趼而不敢息。今吾觀子非聖人也。鼠壤有餘蔬而棄妹不仁也、生熟不盡於前、而積斂無崖。老子漠然不應。士成綺明日復見曰、昔者吾有刺於子、今吾心正卻矣、何故也。老子曰、夫巧知神聖之人、吾自以爲脫焉。昔者子呼我牛也、而謂之牛、呼我馬也、而謂之馬。苟有其實、人與之名而弗受、再受其殃。吾服也恆服、吾非以服有服。士成綺鴈行避影、履行遂進而問、修身若何。老子曰、而容崖然、而目衝然、而顙頯然、而口闞然、而狀義然。似繫馬而止也。動而持、發也機、察而審、知巧而覩於泰。凡以爲不信。邊竟有

て亡げた倅を探すやうな無駄なことをする必要はない。先生が本を忘れ、順序も踏まないで出し抜けに仁義などを説かれるのは、人間の本性を掻き亂すもので、誠になさけないことである。」

語釋 孔子西藏㆓書於周室㆒（呂注に「孔子、道行はれず、其の言を藏めて以て後の君子を待たんと欲す。」書は己れの著書を云ふ。西と言ふは魯が東、周は西に在るからである。）○徵藏史（釋文に「司馬云ふ、徵藏は藏の名也、一に云ふ、徵典なり。」成疏には「猶ほ今の祕書氏の如し、職墳籍を典どる」と案ずるに徵藏は書物をしらべ藏むることにて、史記老子列傳に守藏とあるに同じきか。史は史官。つまり今日の圖書寮の司書官を日ふ。）○繙㆓十二經㆒以說（釋文に「說くもの云ふ、詩書禮樂易春秋の六經に又六緯を加へ、合して十二經と爲すなりと。一說に云ふ、易の上下經并びに十翼を十二と爲すと。又一に云ふ春秋十二公の經なり」とあれども何れも十二の數に合せんが爲めの憶說たるものゝし、寧ろ雖谷が「十二經は終に何の書たるを知るべからず、蓋し莊生亦大概して之を言へるなり」と曰ふの妥當なるに如かず。繙は成疏に「委曲敷演するが故に繙覆して之を說くなり。」即ち繙は反復詳說するの意、諸解多く之に本ふ。陸樹芝は繙は經旨を抽繹するなりと解す。今前說に從ふ。）○中㆓其說㆒曰、大謾（中㆓其說㆒とは其の說を終へしめず話しなかばでとの意。大は太に同じ其なり、謾は冗謾、說が長くてクダ〳〵しきこと。或は散漫、パツとして居る意に解してもよし。）○君子不㆑仁則不㆑成（論語に所謂君子去㆑仁惡乎成㆑名（里仁）の意。）○不㆑義則不㆑生（所謂生を捨てゝ義を取る意、孟子參照。）○中心物愷、兼愛無㆑私（成疏に「愷は樂なり、忠誠の心、物と樂を同じうす」と。陳祥道曰く、「兼愛は仁なり、無私は義なり」と。）○意、幾㆓乎後言㆒（意は噫に同じ、アヽ、前にしば〳〵出づ。幾は近なり、後言には諸家皆解に苦しむ、先づ成玄英は「後發の言、浮僞に近し」と解す、明快を缺く。林希逸は「後言とは猶ほ淺近の言と曰はんが如し、幾乎は危乎なり」と曰ふ、後字に即しての解に非ず。陸西星は「猶ほ失言の如し」と爲す、大膽な說なり。後字に失の義ありや否や。方恩善（非義然嗣の著者）は後へに落つるの說話に近似すと解す、後の字を解し得て面白し。宣穎は陸方二子の說を併せ採りて「失言、寧んぞ人後に落つ」と斷ず、どちら付かずの說なり。要するに諸說紛々適從する所を知らず、予又一說を出して曰はん、後言の後は上文に所謂末學の末に同じ、「そんなことは恐らく末の議論であつて根本論でない。」然し又後言とは無㆓後言㆒（あとからグズ〳〵言はぬこと）などゝも用ひらるゝが故に「それは恐らく後からつけた理窟で、根本の議論でない」とも解せらる。何れにしても後言とは根本論でないとの意か。然れども、未だ定說と言ふに非ず、姑らく諸家の說を列擧して閱者の選擇に任かす。）○兼愛不㆓亦迂㆒乎（方恩善曰く「兼愛とは愛に心あれば、道を去る已でに遠し、故に之を迂と謂ふ。」）○無㆑私焉乃私也（陸樹芝曰く「無私に心あれば即ち私たる所以なり。」）○牧乎（牧は養なり、こゝは特に心養の意に解す。）○天地固有㆑常矣云云（固有も味ふべし、無心にして作爲を待たざる處。成疏に「天地覆載、日月照臨、星辰列比するは並に自然の理なり、人事に關するに非ず、皆に唯三種のみなり。」）○何偈偈乎揭㆓仁義㆒、若㆓擊㆑鼓而求㆓亡子㆒焉（郭注に「之を得るに由なし」とあり明快。玄英疏して曰ふ「偈々は力を用むる貌也、揭は擔負なり、亡子は逃人なり。言ふ心は孔丘、身心を勉勵し仁義を擔ならんや亞物）悉く然り。」）

承知しなかつた。そこで孔子は己れの學說を紹介して彼れを納得させやうとして、携へ來つた十二經を反覆丁寧に說き出した。老聃は其の說明を中途で遮ぎつて曰ふには「先生の說は甚だくだ〳〵しくて解かりにくい、どうか其の要點を聞きたいものです。」孔子が曰ふには「吾が說の要點は仁義です。」老聃が曰ふには「更に御尋ねしますが、其の仁義と云ふのは、一體人間の本性なんでしやうか。」孔子が曰ふには「勿論然うです。苟も人格のある者は仁に背いて名を成さうとしないし、義を無視して生きて行かうとしない。其の點から見て、仁義は眞に人間の天性であつて、仁義を措いて外に爲すべき重要な事はありません。」老聃が曰ふには「然らば更に御尋ねしますが、仁義とは一體どんなものなんですか。」孔子が曰ふには「中心から凡ての物の安樂ならんことを願ひ、凡ての物を平等に愛し、私心を挾まないのが仁義の內容であります。」老聃が曰ふには「あゝ、先生の言はるゝ所は恐らく末の議論であつて、根本論でない。全體兼愛など云ふことは既に愛と云ふことに執はれて居るのであつて、實に迂遠な話であり、私心を挾まぬと云ふのも、無私と云ふことに執れて居るのであるから、反つて私心があることになる。されば先生が若し天下の人々が其の修養の道を誤ること無きを希望せらるゝならば篤と御考になつたがよい。かの天地はもと〳〵何物の力も借ることなくして萬物を覆載して變ることなく、日月も亦同樣に萬物を照臨し、星辰も固より其の位に列なつて亂るゝことなく、禽獸は固より類を以て群をなし、樹木は固より自然のまゝで生立つて行くのであつて、何れも皆何ものゝ作爲を待つて斯くあるのではない。されば先生に於かれてもやはり自然の德に因り自然の道に順つて行けば、それで十分と申すもので、何も骨を折つて仁義の看板を高く揭げて之を宣傳するのに、大鼓をたゝい

老聃許さず。是に於て十二經を繙して以て說く。老聃其の說を中ばにして曰く、大謾なり、願くば其の要を聞かんと。孔子曰く、要は仁義に在りと。老聃曰く、請問す、仁義は人の性かと。孔子曰く然り、君子仁ならざれば則ち成らず、義ならざれば則ち生きず。仁義は眞に人の性なり。又將た奚をか爲さんやと。老聃曰く、請問す、何をか仁義と謂ふ。孔子曰く、中心物と愷んで、兼愛私無きは、此れ仁義の情なり。老聃曰く、意、後言に幾し。夫れ兼愛は亦迂ならずや、私無きは乃ち私なり。夫子若し天下をして其の牧を失ふ無からしめんを欲せんか、則ち天地固より常あり。日月固より明あり、星辰固より列あり、禽獸固より群あり、樹木固より立つあり。夫子亦德に放つて行き、道に循つて趨かば、已に至らん。又何ぞ偈偈乎として仁義を掲ぐること、鼓を擊つて亡子を求むるが若くなる。意、夫子は人の性を亂るなりと。

【大意】孔老の問答に托して仁義は人の性を亂るを說き、首章の餘にして形名賞罰を語るは道の本始を知らざる意を證言す。宣穎曰く、仁義すら且つ人の性を亂す、則ち分守形名より以下は言はずして知るべし、故に無爲に若くはなきなりと。放レ德而行、循レ道而趨、これ此の章の眼目。

【通釋】孔子は嘗て西のかた周に赴き、己の著書を周の圖書室に藏めて、後世に傳へやうとした。弟子の子路が孔子の爲めに謀つて曰ふには「私は周の圖書館の役人に老聃と云ふ者があるが、近頃職をやめ隱居して居ると云ふことを聞いて居ります。先生がこの度書を藏めやうとなさるなら、先づ試しに老子をたよつて行かれたら如何です。」孔子はそれは至極結構だと言つて、そこで往いて老聃を訪問して來意を告げた。然し老聃はどう云ふものか之を

子欲藏書、則試往因焉。孔子曰、善。往見老聃。而老聃不許。於是繙十二經、以說。老聃中其說曰、大謾、願聞其要。孔子曰、要在仁義。老聃曰、請問、仁義人之性邪。孔子曰、然、君子不仁則不成、不義則不生。仁義眞人之性也。又將奚爲矣。老聃曰、請問、何謂仁義。孔子曰、中心物愷、兼愛無私、此仁義之情也。老聃曰、意、幾乎後言。夫兼愛不亦迂乎、無私焉、乃私也。夫子若欲使天下無失其牧乎、則天地固有常矣、日月固有明矣、星辰固有列矣、禽獸固有群矣、樹木固有立矣、夫子亦放德而行、循道而趨、已至矣。又何偈偈乎揭仁義、若擊鼓而求亡子焉。意、夫子亂人之性也。

訓讀　孔子、西のかた書を周室に藏めんとす。子路謀つて曰く、由聞く、周の徵藏史に老聃なるものあり、免じて歸居すと。夫子書を藏めんと欲せば、則ち試みに往いて因れと。孔子曰く、善しと。往いて老聃を見る。而して

しみ、幼者を愛し、婦人を憐れむと云ふのが吾が心の用ひ方である。」舜が曰ふには「それは成程、立派なことですが、然しまだ偉大とは申されません。」堯が曰ふには「それなら何うしたらよいのか。」そこで舜が曰ふには「天に合した德があれば世の中に出て政治に從事しても寧靜であります。譬へば日月下土を照し、春夏秋冬の四時行はれ晝夜の交替は誤ることなく、雲起りて雨降るが如く、何事も間違なくスラ〳〵と自然に行はれるものであつて、帝王の心掛はか樣でなくてはならぬと思ひます。かくと聞いて堯が「成程、さうして見ると、吾がこれまで爲して來た事は煩雜擾亂なことであつたかな……汝が無爲の德は天と合し、吾が心掛は僅かに人と一致するのみである。」と曰つて贊嘆したと云ふ話である。此の話の通り、一體天地なる者は古より偉大とされたものであつて、黃帝も堯舜も共に皆之を美とした所である。されば古の天下に王たる者は、たゞ無爲にして天地の自然に順ふのみである。

語釋 天王、(舜が堯を呼ぶ敬稱、後の陛下と言はんが如し。) ○不レ敖二無告一(敖は侮慢なり、無告は鰥寡孤獨にして自己の苦悶を告げ所なき民。孟子參照。) ○苦二死者一嘉二孺子一而哀二婦人一(苦は哀なり、嘉は愛なり、哀は憐なり。) ○天德而出寧(而は則に同じ、郭注に「天と德を合すれば則ち出づと雖も靜かなり。」) ○日月照而四時行、若二晝夜之有一レ經、雲行而雨施一矣(宣穎に云ふ「日月、四時、晝夜、雲雨は皆爲さずして自然なり、所謂天道運りて積む塡なき者なり。」晝夜之有レ經とは、口義に「既に晝にして夜、夜にして復た晝なり、常々此くの如し、經は常なり。」又云ふ「雲行き雨施すとは時に隨つて自然なり。此れ皆無爲にして爲すの意を形容す。」若の字は上にあるに同じ、行文の單調を嫌つての修文法なり。宣穎云ふ「若字中間に安在して句便ち錯落たり」と、よく文を評するものなり。) ○膠膠擾擾(成疏に「皆擾亂の貌」となり。或は膠々は滯なり擾々は亂なりとも解す。) ○子天之合也、我人之合也(子合レ天也、我合レ人也の倒裝形なり、兩の之字は助字。) ○天地而已矣(宣穎云ふ「天地は虛靜無爲なり。」)

孔子西藏書於周室。子路謀曰、由聞、周之徵藏史有老聃者、免而歸居。夫

何如。舜曰、天德而出寧。日月照而四時行、若晝夜之有經、雲行而雨施矣。堯曰、然則膠膠擾擾乎。子天之合也、我人之合也。夫天地者、古之所大也、而黃帝堯舜之所共美也。故古之王天下者、奚爲哉、天地而已矣。

訓讀　昔は舜は堯に問うて曰く、天王の心を用ふること何如と。堯曰く、吾れ無告に敖らず、窮民を廢てず、死者を苦しみ、孺子を嘉し、而して婦人を哀れむ。此れ吾が心を用ふる所以のみと。舜曰く、美は則ち美なり、而かも未だ大ならざるなりと。堯曰く、然らば則ち何如んと。舜曰く、天德なれば出でて寧し。日月照して四時行はれ、晝夜の經有り、雲行いて雨施すが若しと。堯曰く、然らば則ち膠膠擾擾たるか。子は天に合するなり、我は人に合するなりと。夫れ天地なるものは、古の大とする所にして、黃帝堯舜の共に美とする所なり。故に古の天下に王たるものは、奚をか爲さんや、天地のみと。

大意　此の章、堯舜の問答に托して、古の天下に王たるものは無爲自然なることを證す。古來多く本章を以て前章に下屬せしむ。今宣說に從つて別章となす。以下二章亦前章の意を例證す。

通釋　昔、舜が堯に問うて曰ふには「陛下が天下を治めらるゝに、如何やうに心を用ひられるのでありますか」堯が答へて曰ふには「己が苦しみを告げ所のない孤獨者を侮ることなく、困窮な民を見捨てることなく、死者を哀

大意 形名賞罰は治の具(末)にして治の道(本)に非ざることを再言して、篇首より此に至る數節を結ぶ。宣穎曰く「以上、無爲有爲、本末先後の辨を言ふこと此くの如し、一篇の意此に至りて已に完し。下はたゞ數人の語を引いて點證するのみ。」

通釋 古の大道を語る者は上にも述べた如く天道を明かにしてから五變して始めて形名を擧げ、九變して賞罰を言ひ得たのである。然るに道の次第を無視して唐突に形名や賞罰を語るのは道の本末、事の終始を知らぬ者である。かく道の次序を倒まにし、道に逆つて言說する者は人に治められる者であつて、人を治めることはトテモ出來ぬ。されば出し拔けに形名賞罰を語るのは、此れ政治の道具は心得て居るが政治の大道を心得ぬものである。かゝる人は天下に使役せらるゝ位が關の山で、天下を用ふる資格などは少しも無い。かう云ふ人をば顯だけが達者で事の大局に通じない人と謂ふのである。要するに上に掲げた禮法數度形名比詳の如きは古人も時に用ひたことはあるが、此れはどこまでも下が上に事へる具であつて、上が下を養ふ道ではない。

語釋 五變而形名可レ擧(前節に詳らかで天から道德、道德から仁義、仁義から分守、分守から形名に五變す。) ○九變而賞罰可レ言也(更に因任、原省、是非、賞罰と云ふ風に天から賞罰まで凡てゞ九變す。) ○迕レ道(迕は逆なり。) ○此之謂二辯士一曲之人一也(此れを之れ辯士と謂ふ、一曲の人なりと訓むもよし。一曲の人とは一曲部を知るのみで大曲に通ぜざる人、逍遙遊に蓬の心とあるに同じ。)

昔者舜問於堯曰、天王之用心何如、堯曰、吾不敖無告、不廢窮民、苦死者、嘉孺子而哀婦人。此吾所以用心已。舜曰、美則美也、而未大也。堯曰、然則

（知愚等しく能力の實際を發揮し隱す所なきを謂ふ。此の思想は韓非に多く見ゆ。參照。）　○必分其能（因に「必ず其の能を分つて敢へて自ら其の力を惜まず。」）　○必由其名（又云ふ「必ず其の名に由つて（自ら）敢へて其の實を責めずんばあらず。」）　○知謀不用、必歸其天（又云ふ「仍ち無實の意に歸す。」天は上の天字に照應、先づ天を明かにし遂に又天に歸するなり。）

古之語大道者、五變而形名可舉、九變而賞罰可言也。驟而語形名、不知其本也。驟而語賞罰、不知其始也。倒道而言、迕道而說者、人之所治也、安能治人。驟而語形名賞罰、此有知治之具、非知治之道、可用於天下、不足以用天下。此之謂辯士一曲之人也。禮法數度、形名比詳、古人有之。此下之所以事上、非上之所以畜下也。

訓讀　古の大道を語るものは、五變して形名擧くべし、九變して賞罰言ふ可きなり。驟にして形名を語るは、其の本を知らざるなり。驟にして賞罰を語るは其の始を知らざるなり。道を倒まにして言ひ、道に迕うて說くものは、人の治まる所なり、安んぞ能く人を治めん。驟にして形名賞罰を語るは、此れ治の具を知ること有れども、治の道を知るに非ず、天下に用ひらるべくして、以て天下を用ふるに足らず。此を之れ辯士一曲の人と謂ふなり。禮法數度形名比詳は、古人も之れ有り。此れ下の上に事ふる所以にして、上の下を畜ふ所以に非ざるなり。

の名に由る。此を以て上に事へ、此を以て下を畜ひ、此を以て物を治め、此を以て身を修む。知謀用ひず、必ず其の天に歸す。此を之れ太平と謂ふ、治の至なり。故に書に曰く、形有り名有りと。形名は古人も之れ有り、而して先にする所以に非ざるなり。

大意 先哲治國の次序を歷言して、自ら道の本原たる天を明かにすべきを説く。

通釋 されば大道を明知せる先哲は先づ無爲の天道を明かにして道德を第二次に置く。道德を明かにして其の次ぎに仁義を明かにし、其の次ぎに職分を守ることを明かにし、次ぎに實績と議論と比較對照することを明かにし、次ぎに才に因りて職に任ずることを明かにし、次ぎに行を原ねて心を省察することを明かにし、次ぎに是非、次ぎに賞罰と云ふ具合に事の本末に從つて順序を追ふて究め明らかにする。かくて愚者も知者も各其の適所に處り、貴賤其の位を履み誤ることなく、仁賢不肖のもの各〻其の實情を現はして隱すことなく、必ず其の能力を分ち用ひて惜むことなく、又其の自ら言ふ所に從つて實績を擧げることになる。されば先哲は此の九法を以て臣としては上に事へ、君としては下を養ひ、外は物を治め、内は身を修め、終始己の知謀を用ふることなく、一に無爲自然に歸するのみである。之こそ眞個の太平であつて、政治の極致である。されば古書にも「實際あり理論あり」と述べてある如く、此の形名の學は古人も研究はしたが、決して之を先きにしたのではない。其の先きにした所は云ふまでもなく無爲自然道の究明であつた。

語釋 因任（宣注に「人に因りて職に任ず、」才に應じて職を授けること。）○原省（又云ふ「行を原ねて心を省みる。」此の說明快、諸解不通、皆取らず。）○襲ㇾ情（郭注に「各自ら其の能くする所の情を行ふ」とあり。上、無爲なる時は

非ざれども明快を缺く。）　〇盛衰之殺（殺は差等なり。）

是故古之明大道者、先明天、而道德次之。道德已明、而仁義次之。仁義已明、而分守次之。分守已明、而形名次之。形名已明、而因任次之。因任已明、而原省次之。原省已明、而是非次之。是非已明、而賞罰次之。賞罰已明、而愚知處宜、貴賤履位、仁賢不肖襲情。必分其能、必由其名。以此事上、以此畜下、以此治物、以此修身。知謀不用、必歸其天。此之謂太平、治之至也。故書曰、有形有名。形名者古人有之、而非所以先也。

訓讀　是の故に古の大道に明かなるものは、先づ天を明かにして、道德之に次ぐ。道德已に明かにして、仁義之に次ぐ。仁義已に明かにして、分守之に次ぐ。分守已に明かにして、形名之に次ぐ。形名已に明かにして、因任之に次ぐ。因任已に明かにして、原省之に次ぐ。原省已に明かにして、是非之に次ぐ。是非已に明かにして、賞罰之に次ぐ。賞罰已に明かにして、愚知宜しきに處り、貴賤位を履み、仁賢不肖情に襲る。必ず其の能を分ち、必ず其

大意 前節の本末の字より又先從の二字を翻出し來つて文を起す。言ふ心は人倫に先後尊卑の區別あるは天地運行の次序に象りて聖人の定むる所、人若し此の序を辨ぜざれば道に入る能はざるを說く。其の意、正に大學に所謂「物有二本末一、事有二終始一、知レ所二先後一則近レ道矣」と、符節を合するが如し。愈〻以て儒敎的色采を加へ來る。

通釋 さて君が先となりて臣が之に從ひ、父が先となりて子が之に從ひ、兄が先となりて弟が之に從ひ、年長者が先に立つて年少者が之に從ひ、男子が先に立つて女子が之に從ひ、夫が先に立つて婦が之に從ふ。是れが人倫の次第である。元來物に尊卑あり事に先後あるは天地自然の運行中に自ら存するのであるから、聖人が之に象りて人倫の序を定めたのである。卽ち天は尊く地の卑しきは、自然に定まつた神聖なる天地の位であり、春夏が先きに來て秋冬が後で來るのは四季の順序であり、萬物が化生するに當りては伸長なるものあり、屈小なるものありて其の狀形一樣でなく、又其盛衰に自ら等差のあるは萬物變化の顯現である。元來天地は此の上もなく神聖であるが、而も猶ほ斯くの如く尊卑先後の順序がある、況して人間の道に於ては言ふまでもない。されば宗廟に於ては親近なるものを尙び、朝廷に於ては高位のものを尙び、村里に於ては年長のものを尙び、事を行ふには賢能のものを尙ぶと云ふのは大切なる人道上の秩序である。されば道を語るに當つて其の秩序を無視するものは眞の道に適はない、語る所が其の道でないやうなことでは、トテモ道を我がものとすることは出來ぬ。

語釋 天尊地卑、神明之位也（下文の天地至神、而有二尊卑先後之序一と意同じ神明なる天地を以てしても猶ほ尊卑あるを云ふ。神明は卽ち天地を形容す。）○萬物化作、萌區有レ狀（化作は化生なり。伸生を萌と曰ひ、屈生を區と曰ふ。言ふ心は萬物化生するに當りて伸長なるものあり屈小なるものあり其の形一樣ならずとなり。口義には「萌は萌芽なり、萌は區別なり、物生じて其の狀、同じからざるを言ふ」と之は區の字を論語子張篇に譬二諸草木區以別一矣とある區の意に解せるなり、通ぜざるに

君先而臣從、父先而子從、兄先而弟從、長先而少從、男先而女從、夫先而婦從。夫尊卑先後、天地之行也、故聖人取象焉。天尊地卑、神明之位也。春夏先秋冬後、四時之序也。萬物化作、萌區有狀。盛衰之殺、變化之流也、夫天地至神、而有尊卑先後之序、而況人道乎。宗廟尙親、朝廷尙尊、鄕黨尙齒、行事尙賢、大道之序也。語道而非其序者、非其道也。語道而非其道者、安取道。

訓讀　君先だちて臣從ひ、父先だちて子從ひ、兄先だちて弟從ひ、長先だちて少從ひ、男先だちて女從ひ、夫先だちて婦從ふ。夫れ尊卑先後は天地の行なり、故に聖人象を取る。天尊く地卑しきは、神明の位なり。春夏先だち秋冬後るゝは、四時の序なり。萬物化作して、萌區、狀あり。盛衰の殺は、變化の流なり。夫れ天地は至神なり、而して尊卑先後の序あり、而るを況いや人道をや。宗廟に親を尙び、朝廷に尊を尙び、鄕黨に齒を尙び、行事に賢を尙ぶは、大道の序なり。道を語つて其の序に非ざるものは、其の道に非ざるなり。道を語つて其の道に非ざるものは、安んぞ道を取らん。

五末は本たる精神や心術が活動をした後で始めて起つて來るもので、ツマリ精神心術の粗迹殘骸である。此等五末に關する學問は古人も之を修めたが、然しそれは止むを得ずして學んだもので勿論之を先きにしたのではない。

語釋　本在二於上一、末在二於下一（口義に「無爲を以て本となして、有爲を以て末となす。」陸西星も曰ふ「又有爲無爲上より本末の二字を翻出す。蓋し虛靜恬淡寂寞無爲は道の本なり樸散じて器を爲す、則ち有爲の法、是に繇りて以て生ず、故に五者を詳擧す、皆世法の末務なり。」本末は下句の要詳に同じく、上下は主臣とあるに同じ。成疏に「本は道德なり、末は仁義なり、言ふ心は道德は淳樸、治の根本にして上古に行はれ、仁義は澆薄、治の末葉にして下代に行はる。」是れ一解となす。）○要在二於主一、詳在二於臣一（成疏に「要は簡省なり詳は繁多なり、主道は逸にして簡要、臣道は勞して繁冗、繁冗なるが故に有爲にして上に奉ず。簡要なるが故に無爲にして下を御す。」口義にも「要在レ主とは君道の無爲なり、詳在レ臣とは臣道の有爲なり」とあり。）○三軍五兵之運、德之末也（軍は一萬二千五百人、三軍は大國にして能く備へ得る兵。春秋戰國に於ても能く三軍を有せし國は稀なり。故に三軍とは大軍の意に用ひらる。五兵とは弓、殳（矛の形した刃のない杖ぼこ）矛、戈、戟（皆ほこの類なり。）を云ふ。口義に「威武は文德の輔助なり、故に三軍五兵の運は德の末なりと曰ふ」とあり。）○賞罰利害五刑之辟、敎之末也（成疏に「賞は軒冕榮華、故に利なり、罰は誅殘戮辱、故に害なり」とあり。即ち賞罰を嚴にして民に利害を示して導くなり、故に敎の末と云ふ。五刑之辟とは辟は法なり、五刑は墨、劓、刖、宮、大辟（死刑）。賞を擧げずして罰（五刑）を擧ぐるは、罰行はるること多きが故ならんか。）○禮法度數形名比詳、治之末也（形字爲本刑に作る、下文によれば形に作るを是なり、然れ共刑形相通ずるが故に意義に於ては異なることなし、且つ韓非子には刑に作る。形名とは後に韓非が主唱したる特種の賞罰法なり、即ち臣下の議論（名）と實際の成績（形）との一致不一致を比較對照して賞罰黜陟をなすなり。比詳とは形と名とを比較審査すること。釋文に比校詳審するを云ふとあり。）○鐘鼓之音羽旄之容、樂之末也（成疏に「羽は鳥羽、旄は獸毛、鳥獸の羽毛を采して以て其の器を飾るを言ふなり。」即ち舞に用ふる道具を飾ること。林希逸は上の句と併せ解して「禮法度數鐘鼓羽旄は皆禮樂の本に非ず、猶ほ玉帛鐘鼓をしも云はんや（論語陽貨篇に、子曰、禮云禮云、玉帛云乎哉、樂云樂云、鐘鼓云乎哉。と曰ふが如し」と云ふ。善く此の句を解すと謂ふべし。）○哭泣衰絰、隆殺之服、哀之末也（哭泣は喪に於ける哭泣の禮なり。衰は音サイ、縗に同じ、喪服なり、斬衰、齊（音シ）衰の如し。絰は音テツ、喪服を著るときに首や腰に卷く麻の帶。隆殺は猶ほ昇降の如し、喪禮に五等あり斬衰（二十七ケ月、所謂三年の喪）齊衰（十三ケ月、所謂一年の喪）大功（九ケ月）小功（五ケ月）緦麻（三ケ月）是れなり、哭泣の仕方も喪服の種類も喪期の長短によつて皆差異あり。成疏に「哭泣衣裳各差降あり此れ是れ數迹外儀、情の實より發するに非ず故に哀の末なり」とあり。林希逸は又論語を引いて「哀の末也とは即ち與二其易一也寧戚（八佾篇）の意なりと解せり。）○此五末者云云（宣注に「五末は有爲の粗迹、精神心術は乃ち本の在る所、此の處得れば則ち無爲にして自ら正し。」）○末學者古人有レ之云云（宣穎又曰ふ「見るべし、莊子是れ禮制を把りて一切屛絕し了るにあらず、たゞ是れ人の輕重を知り得んことを要するのみ。他處は猶ほ激昂して之を言ふ、惟だ此の處は最も和平なり。」）

利害五刑之辟、敎之末也。禮法度數形名比詳、治之末也。鐘鼓之音、羽旄之容、樂之末也。哭泣衰絰、隆殺之服、哀之末也。此五末者、須精神之運、心術之動、然後從之者也。末學者古人有之、而非所以先也。

訓讀　本は上に在り、末は下に在り、要は主に在り、詳は臣に在り。三軍五兵の運は、德の末なり。賞罰利害五刑の辟は、敎の末なり。禮法度數形名比詳は治の末なり。鐘鼓の音、羽旄の容は樂の末なり。哭泣、衰絰、隆殺の服は哀の末なり。此の五末なるものは、精神の運、心術の動を須ちて、然る後之に從ふものなり。末學なるものは古人にも之れあり、而れども先ずる所以に非ざるなり。

大意　無爲は本なり有爲は末なり、五末有爲の事は廢すべからずと雖も先きにすべきに非ざるを說く。

通釋　さて本たる無爲は君上の道であり、末たる有爲は臣下の道であり、又事の要を握るのは主上のすることであり、繁雜な事務は臣下のする仕事である。然らば末とは何んであるかと云ふに、三軍を動かし、五兵を用ふるが如きは道德の末であり、賞罰によりて利害を示し、五刑に關する法規の如きは效果の末であり、禮儀法律制度文物の制定や實際と議論との比較審査などは政治の末であり、鐘鼓の音や羽毛の裝飾などは舞樂の末であり、葬儀に於ける哭泣の仕方や衰絰の如き喪服が時によつて丁寧であつたり簡略であつたりするなどは哀情の末である。以上の

通釋 されば古の天下に王たる者は、其の知は明達にして能く天地を蓋ふに足る程であるが自ら思慮を用ひない。又其の辯說は流るゝが如く能く萬事を美しく飾るに足れども、自ら進んで辯舌を弄しない、又其の才能は天下の庶政を爲し盡すに足る程であるが、自ら手を下して爲すことなく、凡て賢能の士に委ねて自らは垂拱南面するのみである。彼の天は物を產するに意なけれども萬物は自ら化生し、地は物を長ずるに心なけれども萬物自ら成育す、帝王は天地を宗となすが故に無爲に居りて、天下の事自ら成功を爲す。されば古語にも「天より神秘なるはなく、地より富饒なるはなく、帝王より偉大なるはなし」とあり、又同じく「帝王の德は天地に合す」とも曰つてある。要するに此の無爲の道は天地の化に順應し、萬物を使役し、天下の億兆を任用する要道である。

語釋 知雖レ落ニ天地一、不ニ自慮一也(口義に「落は絡と同じ、籠絡するなり」とあり。成疏に「知照明達、二儀を籠落して垂拱無爲、之を臣下に委ね、知者をして爲す故に自ら慮からざるなり。」陸樹芝も亦曰ふ「知は高く天地の上に出で其の外に周ねしと雖ども自ら其の知を用ひて以て之を慮らず」と。) ○辯雖レ彫ニ萬物一不ニ自說一也(口義に「萬物を彫るとは其の巧なるを言ふなり。」成疏には「宏辯流るゝが如く、萬物を彫飾して之を有敍に付し終に自ら言はざるなり。」陸樹芝も亦曰く「辯は以て雕鏤刻畫、萬物の情態を極むべしと雖も、自ら其の辯を逞うして以て之を說かず」と。釋文に說を悅とあるは非。) ○能雖レ窮ニ海內一云云(陸樹芝曰く「能は以て宏く海內を濟ふべしと雖も、自ら其の能を用ひて事々自ら之を爲さず。」) ○天不レ產而萬物化、地不レ長而萬物育(成疏に「天は生產に情なくして萬物化生す、地は長成に心なくして萬物成育す。」) ○帝王之德配ニ天地一(成疏に「配は合なり、聖人の德、天地の無爲に合するを言ふ。」) ○乘ニ天地一(逍遙遊に天地の正に乘ずとあり。參照。天地自然に順應することなり。)

本ハ在リ於上ニ、末ハ在リ於下ニ、要ハ在リ於主ニ、詳ハ在リ於臣ニ。三軍五兵之運ハ、德之末也。賞罰

なつて主君の主君たる所以を失ふことになる。されば君上たるものは必ず無爲にして天下萬民を治め、臣下たるものは必ず有爲にして天下の爲めに用ひられると云ふのが千古不易の常道である。

語釋 以無爲爲常(宣注に「天地道德、總べて是れ無爲、故に之に法りて身を終る。」)　○同德。同道(互文なり、二字の間、別意あるに非ず。)

故古之王天下者、知雖落天地、不自慮也。辯雖彫萬物、不自說也。能雖窮海內、不自爲也。天不產而萬物化、地不長而萬物育、帝王無爲而天下功。故曰、莫神於天、莫富於地、莫大於帝王。故曰、帝王之德配天地。此乘天地、馳萬物、而用人群之道也。

訓讀 故に古の天下に王たるものは、知、天地を落ふと雖も、自ら慮らざるなり。辯、萬物を彫ると雖も、自ら說かざるなり。能、海內を窮むと雖も、自ら爲さざるなり。天は產せずして萬物化し、地は長ぜずして萬物育ち、帝王は無爲にして天下功あり。故に曰く、天より神なるは莫く、地より富めるは莫く、帝王より大なるは莫しと。故に曰く、帝王の德は天地に配すと。此れ天地に乘じ、萬物を馳せて、人群を用ふるの道なり。

大意 上を承けて古帝王の無爲を說く、其の德無爲、故に能く天地に配するなり。

此不易之道也。

訓讀 夫れ帝王の德は、天地を以て宗と爲し、道德を以て主と爲し、無爲を以て常と爲す。無爲なれば則ち天下を用ひて餘りあり。有爲なれば、則ち天下の用となりて足らず。故に古の人は夫の無爲を貴ぶなり。上も無爲なり、下も亦無爲なれば、是れ下、上と德を同じうするなり。下と上と德を同じうすれば、則ち臣たらず。下も有爲なり、上も亦有爲なれば、是れ上と下と道を同じうするなり、上と下と道を同じうすれば、則ち主たらず。上は必ず無爲にして天下を用ひ、下は必ず有爲にして天下の用と爲るは、此れ不易の道なり。

大意 無爲は帝王たるものゝ不易の常道なることを說く。有爲を以て臣道となすも亦無爲中の事に過ぎずして、有爲を貴ぶの意に非ず。林西仲曰く「此れ又無爲中より有爲を飜出し來り、無爲の理の虛空廢事に落ちざるの意を見はす。正に上面の靜能く動を生ずる旨と相應ず。」

通釋 一體帝王の德は天地を以て本となし、道德を以て主となし、無爲を以て常道となすものである。無爲なる時は無窮に應ずるが故に天下を使役して猶ほ餘裕あれども、有爲なる時は天下に使役せられて汲々として日も亦足らぬのである。されば古人は無爲を以て最上の德として貴んだのである。然しながら此に注意すべきは君上も無爲、臣下も亦無爲であつたならば、是れ臣下が人君と德を同じうすることになつて、臣として君の德を僭し臣道にたがふことになる。されば と云つて臣下も有爲、人君も亦有爲であつたならば、是れ人君が臣下と道を同じうすることに

通釋　古語にも曰く「天樂を知るものは其の存命中は天道に順つて行ひ、其の死するや萬物の變化に隨つて逝き、そして靜なる時は天地の氣たる陰と德を同じうし、動くときは陽氣と流を同じうして活動するものである。」されば天樂を知るものは天と同ずるが故に天の怨なく、人と和するが故に人の非なく、無欲なるが故に外物の累なく、無心なるが故に鬼神の責がない。又古語に「動くことは天の如く、靜なることは地の如く、一心虛無に定まつて能く天下に王となり、鬼神は德に服して祟らず、精神は靜寂にして疲るゝことなく、一心定まつて萬物服す」とあるが、是れ卽ち虛靜の德を以て天地萬物の間に推行するを言つたのであつて、之をば天樂と謂ふのである。要するに天樂なるものは聖人無爲の心、能く天下を畜養するを謂ふに外ならず。

語釋　天行（口義に「天理の自然を行ふなり。」）○物化（又「萬物に隨つて化するなり」と。物化の字面は齊物論にも見ゆ意は少しく異なる。）○同レ波（口義に流を同じうすとあり、）○一心定云云（其の心、虛無に安住するを云ふ。）○以二虛靜一推二於天地一云云（口義に「虛靜の理を以て天地萬物の間に行ふ」とあり。）

夫帝王之德、以二天地一爲レ宗、以二道德一爲レ主、以二無爲一爲レ常、無爲也則用二天下一而有レ餘。有爲也則爲二天下一用而不レ足。故古之人貴二夫無爲一也。上無爲也、下亦無爲也、是下與レ上同レ德。下與レ上同レ德則不レ臣。下有爲也、上亦有爲也、是上與レ下同レ道。上與レ下同レ道則不レ主。上必無爲而用二天下一、下必有爲爲二天下用一

問答に至るまでの大段を荘叟の手筆に非ずとなせば亦解し得るも、叟の手筆となす時は解に苦しむ。古人自ら稱するの例と見ゆ妥ならず、或は下文に故曰書曰と多くあり故に之と區別せんが爲めに平日言ふ所を擧ぐるに當り特に荘子の二字を添へしものか、姑らく後考を待つ。大宗師には戻を整に作る、戻は暴なり、大宗師參見。）

故曰、知天樂者、其生也天行、其死也物化。靜而與陰同德、動而與陽同波。故知天樂者、無天怨、無人非、無物累、無鬼責。故曰、其動也天、其靜也地。一心定而王天下、其鬼不祟、其魂不疲、一心定而萬物服。言以虛靜推於天地、通於萬物。此之謂天樂。天樂者、聖人之心、以畜天下也。

訓讀 故に曰く、天樂を知るものは、其の生や天行、其の死や物化。靜かなれば陰と德を同じくし、動けば陽と波を同じくすと。故に天樂を知るものは、天怨なく、人非なく、物累なく、鬼責なし。故に曰く、其の動くや天、其の靜かなるや地。一心定まつて、天下に王たり、其の鬼祟らず、其の魂疲れず、一心定まつて萬物服すと。虛靜を以て天地に推し、萬物に通ずるを言ふなり。此を之れ天樂と謂ふ。天樂なるものは、聖人の心、以て天下を畜ふなり。

大意 天樂の意義を再申す。

と和するもの之を人樂と謂ひ、天と和するもの之を天樂と謂ふ。莊子曰く、吾が師か、吾が師か、萬物を整すれども戾と爲さず、澤萬世に及べども仁と爲さず、上古より長ずれども壽と爲さず、天地を覆載し、衆形を刻彫すれども、巧と爲さずと。此を之れ天樂と謂ふ。

大意 無爲の道は萬物の大本、天下の大宗であつて、天人の至樂を享くる所以なるを說く。

通釋 さて虛靜なる時は聖人となり、無心にして動く時は帝王となる。無爲なれば天下之より尊きはなく、素樸なれば之と美を爭ふものがない。一體此の天地間の大德たる無爲を明白に覺つて居る者をば萬物の大本天下の大宗と名づけ、天と和合して一體となり、天下を平治して萬民と和合する人である。そして人と和合するのを人樂と謂ひ、天と和合するのを天樂と謂ふ、卽ち無爲の德を得る時は人樂天樂兩ながら享くることが出來るのである。莊子の言に「吾が自然の大道は萬物を紛碎しても、自ら以て暴とは思はず、恩澤を萬世に及ぼしても、自らは以て仁とは思はず、又上古より存在して居ても、自ら之を壽なりと思はず、天地を覆載し、萬物を種々の形に創造しても巧妙だとは思つて居ない」とある如く、此の無心無爲こそ天樂と謂ふのである。

語釋 靜而聖、動而王（口義に「靜なれば聖となり、動なれば王と爲るとは即ち是れ內聖外王の四字なり」とあり。宣穎は之より下四句を前節の總贊となして上に屬す、亦一解なり。）○均調（調は理なり、治なり。天下を均等に治むることにて無心無爲にして始めて能くする所。成疏には「均は平なり、調は順なり、萬有を均平し物情に大順して迹を混じ塵を同じうす故に人と和するなり」とありて、衆に順隨するの意に解す。一說に具ふ。）○莊子曰、吾師乎云云（莊子の二字解に苦しむ。口義は「此の數句は大宗師篇と同じ、却つて又莊子曰の三字を著く、前には許由の言と曰ひ、今は以て自言となす、件々寓言なることを見るべし、豈に把つて實話となして看るべけんや」と云つて「莊子の二字をアッサリ片付けて居るが、常理を以て見ると解りにくい。又林西仲のやうに篇首より下舜舜

道を以て進み仕へ世の中を治むる時は功業大に、名望高くして天下一に歸するであらう。

語釋 虛靜云云（成疏に「虛靜恬淡寂寞無爲の四者は名を異にして實を同じうする者なり。無爲の美を歎ず故に此の四名を具ふ。」） ○天地之平、而道德之至（奚侗曰く「平は中道なり。」郭嵩燾曰く「至は質と同じ、至は質なり。」） ○倫矣（郭注に倫は理なりとあり。） ○任レ事者責矣（又「夫れ無爲なれば群才萬品各其の事に任じて自ら其の責に當る。」とあり。） ○兪兪（又「從容自得の貌。」とあり。） ○南鄉（鄉は一に嚮に作る、向に同じ。南面なり。） ○玄聖素王（成疏に「其の道ありて其の爵なき者は所謂玄聖素王自ら貴き者なり、即ち老君尼父（老子孔子）是れなり。」口義には「聖人の德ありて聖人の位なきなり」とあり。） ○進爲（成疏に「迹を顯はして出仕するなり」と。）

靜而聖、動而王、無爲也而尊、樸素而天下莫能與之爭美。夫明白於天地之德者、此之謂大本大宗、與天和者也。所以均調天下、與人和者也。與人和者謂之人樂、與天和者謂之天樂。莊子曰、吾師乎、吾師乎、齏萬物而不爲戾、澤及萬世而不爲仁、長於上古而不爲壽、覆載天地刻彫衆形而不爲巧。此之謂天樂。

訓讀 靜かなれば聖たり、動けば王たり。無爲なれば尊く、樸素なれば天下能く之と美を爭ふ莫し。夫れ天地の德に明白なるもの、此を之れ大本大宗と謂ふ、天と和するものなり。天下を均調し、人と和する所以の者なり。人

れば、則ち事に任ずる者責あり、無爲なれば則ち兪兪、兪兪なるものは憂患處ること能はずして、年壽長し。夫れ虛靜恬淡、寂寞無爲は、萬物の本なり。此を明かにして以て南鄕するは、堯の君たるなり。此を明かにして以て北面するは、舜の臣たるなり。此を以て上に處るは、帝王天子の德なり。此を以て下に處るは、玄聖素王の道なり。此を以て退居して閒遊すれば、江海山林の士服す。此を以て進爲して世を撫ずれば、則ち功大に名顯れて、天下一なり。

〔大意〕無爲の德を贊す。

〔通釋〕そも〳〵虛靜恬淡寂寞無爲の四者は其の名異なれども同じく一無爲に歸するものであつて實に天地の中道、道德の本質である。故に帝王聖人は此の德に安住して遷らず。此の德に安住すれば心は自ら虛しく、心虛しければ凡てを包容するから心が充實する、心が充實すれば何事も條理に適ふ。又心が虛となれば自ら靜か、靜かなればよく無心にして動く、無心にして動く時は、動いて其の空しきを失ふことがない。又心が安靜なれば無爲、無爲なる時は事に任ずる者各〻其の職責を盡す。且つ又無爲なる時は從容自得、如何なる憂患も心に入り込むこと能はずして其の年壽自から長きを得るは必定である。さて此の虛靜恬淡寂寞無爲なるものは萬物の根本である。此の道を明かにし、南面して天下に君臨したのは堯であり、此の道を明かにして以て北面よく堯に臣事したのは舜である。此の無爲の道を以て上位に居るのが眞の帝王天子の德であり、此の德を抱いて下位に居るのが玄德ある聖人であり、聖德あつて其の位なきものゝ道である。又此の德を以て隱退し、閒遊すれば江海山林の隱士は皆之に服從し、此の

無二不レ靜者一（副墨に「昧は混冥の義、老子云ふ、明道は昧きが若しと、蓋し六通四辟は明なり、明は晦を以て基となす故に其の自ら爲すや昧然たり、昧なれば靜に歸す。」）○非レ曰二靜也善故靜一也（宣注に「靜を以て善となして靜を圖れば、則ち是れ心あり、便ち靜なるに非ず。心撓まずして靜なれば則ち自から靜のみ、これ方に眞個の靜なり。」或は靜なりと曰ふに非ず、善故に靜なりと訓む、非なり。）○鐃レ心（鐃は撓に同じ。）○平中レ准大匠取レ法焉（水靜なれば平にして准に中り云々の意、平字は水靜に密着す。或は「平なれば准に中ると訓む」非なり。德充符に平者水停之盛也、其可三以爲二法也を參照せよ。）

夫虛靜恬淡、寂寞無爲者、天地之平、而道德之至、故帝王聖人休焉。休則虛、虛則實、實者倫矣。虛則靜、靜則動、動則得矣。靜則無爲、無爲也、則任事者責矣。無爲則兪兪、兪兪者、憂患不能處、年壽長矣。夫虛靜恬淡、寂漠無爲者、萬物之本也。明此以南鄕、堯之爲君也。明此以北面、舜之爲臣也。以此處上、帝王天子之德也。以此處下、玄聖素王之道也。以此退居而閒遊、江海山林之士服。以此進爲而撫世、則功大名顯而天下一也。

訓讀 夫れ虛靜恬淡、寂寞無爲は、天地の平にして、道德の至なり、故に帝王聖人は休す。休すれば則ち虛、虛なれば則ち實、實なるものは倫。虛なれば則ち靜、靜なれば則ち動、動なれば則ち得。靜なれば則ち無爲、無爲な

故に海內服す。天に明かに、聖に通じ、帝王の德に六通四辟する者、其の自ら爲すや、昧然として靜ならざる者なし。聖人の靜や、靜や善、故に靜なりと曰ふに非ざるなり。萬物以て心を鐃すに足るもの無し、故に靜なり。水靜なれば則ち明かにして鬚眉を燭し、平かにして准に中り、大匠法を取る。水靜なるも猶ほ明なり、而るを況んや精神なる聖人の心靜なるをや、天地の鑒なり、萬物の鏡なり。

大意 自然にして無爲なるは天道帝道聖道の三者を一貫した道である。從つて聖人の心は常に至靜なることを說く。

通釋 天道は自然に運行して滯ることがないから萬物が生成する。帝王聖人の道も無心に行はれて滯ることがないから、天下歸し海內服するのである。されば天道に明かに、聖道に通じ、帝王の德に六通四辟と十分に精通する者は、其の自ら爲す有樣は昧然と光をつゝみ跡方なく、卽ち無爲にして虛靜ならざるはない。されど聖人の靜は靜と云ふことが善であるから、務めて靜であると曰ふのではない。乃ち聖人の心は外界の何物を以てしても之を撓め動かすことが出來ぬから、靜を求むるに意なくして自然に靜かである。かの水は靜かなる時は自から透明であつて鬚や眉毛までハツキリうつし、又水面が自から平であつて準繩に中り、名匠は之を準據として物の水平を測るのである。水が靜かでも猶ほかくの如く明かである、況して純粹靈妙なる聖人の心の至靜はもとより水の比ではない、實に天地萬物の寶鑒明鏡であつて、何物をも徹照せざるはない。

語釋 無レ所レ積（積は滯積、滯礙の意。）○帝道（聖人治國の道を云ふ、聖道と同じ。別用するは文のアヤに過ぎず。）○六通四辟（辟は闢に同じ、開なり。）○其自爲也昧然

外篇天道第十三

敘說 此の篇は前二篇の意を承けて、亦虚靜恬淡寂寞無爲は古聖王天下を治むる要道であつて、彼の仁義禮法、形名法術の如きは政治の技葉末節であることを論ず。宣穎曰く「無爲の二字、相沿うて道家の常談と爲る。莊を看るに此の篇において人に精微の處、明確の處を說く。」

天道運而無所積、故萬物成。帝道運而無所積、故天下歸。聖道運而無所積、故海内服。明於天、通於聖、六通四辟於帝王之德者、其自爲也昧然、無不靜者矣。聖人之靜也、非曰靜也善故靜也。萬物無足以鐃心者、故靜也。水靜則明燭鬚眉、平中準、大匠取法焉。水靜猶明、而況精神聖人之心靜乎、天地之鑑也、萬物之鏡也。

訓讀 天道運つて積む所なし、故に萬物成る。帝道運つて積む所なし、故に天下歸す。聖道運つて積む所なし、

使性飛揚(趣舍は取捨、滑は亂なり。是非の取捨に心の亂さるゝこと。飛揚は踴躍浮動なり。)　○離跂(馬蹄篇の踶跂に同じ。成疏に力を用ふる貌とあり。)　○柴其内(成疏に「其の内府を柴塞す」とあり。心の働を邪魔すること。)

○皮弁鷸冠(成疏に皮弁は皮を以て冠を爲るなり。鷸は一に翠と名づく、燕に似て紺色、鬱林より出づ、其の羽毛を取りて以て冠を飾る。カハセミのことなり。)　○搢笏紳修(搢は挿なり、搢笏は帶に挿んだ笏なり。紳は大帶、修は長なり、紳修は前に垂れたる長き帶なり。)　○内支盈於柴柵(支は塞なり、盈は滿なり、柴柵(シガラミ)によりてスキマなく塞ぐこと。成疏に「取舍を以て内府を塞滿す故に柴柵にたくらぶ。」とあり。)　○外重纆繳(成疏に「纆繳は繩なり、搢紳、外形を約束す、譬を繳繩に取る。」)　○睆睆然(釋文に「李云ふ、窮視の貌、一に云ふ眼目の貌。」)　○交臂歷指(一堂曰く、「其の兩手を束して、指相軋歷するなり」と。)　○囊檻(檻字解しにくし、ふくろの如き出る所なきヲリの意か。或は牢の誤か。)

の切端は溝の中などへ捨てゝ、顧みない。さて此の犧樽を溝中に捨てた斷片に比べて見ると、一方は美しくして一方は惡くて非常な隔りがある、然しながら兩方とも切られて其の天然の本性を失つた上から云へば同一である。之と同じ道理で大泥棒の盜跖と君子と銘打つた曾參、史鰌とは其の行爲の上では間があるが、而かも人の本性たる虛無の道を失へる點から云へば全く相均しい。一體、人が其の本性を失ふ原因には五つある。一つには人の目を亂して不明ならしむる所の青黄赤白黑の五色、二つには人の耳を亂してよく聞えないやうにする所の宮商角徵羽の五聲、三つには鼻を刺戟して塞ぎ困しめ頭痛を起させる所の羶薫香腥腐の五臭、四つには口の働をにぶくし味覺を傷つける所の酸辛甘苦鹹の五味、五つには心の惑亂し性を動搖せしむる所の差別觀念、以上の五つは何れも生を害するものである。然るに楊朱墨翟の徒は一生懸命になつて或は爲我主義を說き或は兼愛主義を唱へて自ら得たりとして居る。かくの如き得意は吾が輩の所謂自得ではない。一體自得なる者は楊墨の如く困苦して以て自ら得たりとなし得るならば、鳩や小鳩が捕へられて籠の中に在るのも、やはり自得となすことが出來る。且つ取捨の心や聲色の欲を以て其の心を塞ぎ、皮の冠、羽の冠、笏や大帶などで以て外形を拘束し、內は取捨聲色の柴柵に取り圍まれ外は衣冠束帶の纏縛に取り卷かれ、かくの如く目を瞑つて繩目の中にありながら自からは得たりとなす者が本當の自得でありとするならば、彼の罪人が兩手を縛られ指がすれ合ひ、虎や豹が檻の中に閉ぢ込められて居るものも、皆自得の境と謂ふべきであらう。

語釋 困惾中ㇾ顙（成疏に「惾は塞なり、刺戟して通ぜざるを謂ふ、鼻を害して通りの悪ろくなつたこと、顙は額なり、中は傷なり。額が痛むこと、頭痛。」） ○厲爽（厲は病なり、爽は失なり、傷なり。） ○趣舍滑ㇾ心、

弁鷸冠搢笏紳修以約其外。內支盈於柴柵、外重纆繳、睆睆然在纆繳之中、而自以爲得、則是罪人交臂歷指、而虎豹在於囊檻、亦可以爲得矣。

訓讀 百年の木、破つて犧樽を爲り、青黃にして之を文る。其の斷や溝中に在り。犧樽を溝中の斷に比すれば、則ち美惡閒あれども、其の性を失ふに於ては一なり。跖と曾史と行義閒あり。然かも其の性を失ふは均し。且つ夫れ性を失ふに五あり。一に曰く、五色目を亂り目をして明ならざらしむ。二に曰く、五聲耳を亂り、耳をして聰ならざらしむ。三に曰く、五臭鼻を薰し、困惾顙に中る。四に曰く、五味口を濁らし、口をして厲爽ならしむ。五に曰く、趣舍心を滑り、性をして飛揚せしむ。此の五者は皆生の害なり。而るに楊墨乃ち始めて離跂して、自ら以て得たりと爲す。吾が所謂得たるに非ざるなり。夫れ得たるもの、困して以て得たりと爲すべくんば、則ち鳩鴞の籠に在るも亦以て得たりと爲すべし。且つ夫れ趣舍聲色、以て其の內を柴し、皮弁鷸冠搢笏紳修、以て其の外を約す。內は柴柵に支盈せられ、外は纆繳を重ね、睆睆然として纆繳の中に在つて、自ら以て得たりと爲さば、則ち是れ罪人の交臂歷指し、而して虎豹の囊檻に在るも、亦以て得たりと爲すべし。

大意 楊墨儒家の有爲の教は眞の自得に至る所以に非ざるを說き、無爲の眞道を反說して篇を結ぶ。然れども解莊に「此の條、馬蹄篇の錯簡に似たり」と云ふ、或は從ふべきに似たり。

通釋 今、百年も經た大木を伐り刻んで祭祀用の酒器を爲り、青や黃の色采で之を飾つて立派にする。而して其

く林西仲に從つて之を解す、曰く「二缶鐘は只字の如く解せよ、鐘は正音なり、缶は土缶（ホトギ）俗音なり。二缶を以て一鐘を惑（亂の意）せば則ち以ておのづから適ふなし。」案ずるに缶と言はずして二缶と言へるは上文の二人惑則勞而不レ至とあるの意を寓す、惑字亦此の句より出でたる、適の字は上文の適字を受くるも意自ら異なる。）

○釋レ之而不レ推（因に釋は舍なり、推は求なりとあり。）　○誰其比レ憂（口義に「比は近なり、之を不言に付すれば憂に近かず、此れ自から解くの言なり」因には相與に憂なしと云ふ、亦通ず。）

○厲之人云云（厲は癩なり、之字を簡するは前に適之缶とあると同一文法なり。口義宣注皆、厲を醜と解す、大旨に關するなし。此の喩話の意に就いても解說定まらず、姑らく宣穎の說に從ふ、曰く「醜人たゞ子の相似たるを恐る、今天下の惑へるを知つて已に乃ち得べからざる所を強ひんと欲するは又一惑を成すなり、獨り其の相似るを懼れざらんや。故に之を舍て、憂に遠ざかるに若くはなし。」つまり子が親に似るは自然の理なるに、其の似ざるを欲するは、得べからざるを知つて強ふるものである。陳碧虛は曰ふ「厲人子を生み、たゞ其の似るを恐るゝは乃ち好惡の本心なり、人自ら知るの明あらざることなからんや、而るに大愚大惑の人、乃ち修身解けず靈らざるに至る、曾て厲人にも之れ若かず、故に此の譬を設け、人の深思して之を得んことを欲す」と、亦以て一解となすに足る。）

百年之木、破爲二犧樽一、青黃而文レ之。其斷在二溝中一。比二犧樽於溝中之斷一、則美惡有レ閒矣。其於レ失レ性一也。跖與二曾史一行義有レ閒矣。然其失レ性均也。且夫失レ性有レ五。一曰、五色亂レ目、使二目不一レ明。二曰、五聲亂レ耳、使二耳不一レ聽。三曰、五臭薰レ鼻、困惾中レ顙。四曰、五味濁レ口、使二口厲爽一。五曰、趣舍滑レ心、使二性飛揚一。此五者皆生之害也。而楊墨乃始離跂自以爲レ得。非二吾所レ謂得一也。夫得者困可二以爲一レ得乎、則鳩鴞之在二於籠一也、亦可二以爲一レ得矣。且夫趣舍聲色以柴二其內一、皮

ない、それは迷ふたものが多いからである。然るに今や天下を擧げて皆惑うて居る始末だから、予のみ獨り道を求めて進まんとしても到底不可能なことで、誠に悲しいことではないか。一體咸池とか大韶の如き優雅な音樂は俗人の耳には解からぬが、折揚とか皇荂などゝ云ふ俗曲になると俗人にもよくわかるから聲をそろへて大笑する。之と同じことで高尙な言は俗人の注意を引かず、從つて至言が世に行はれないのは俗言の方が勢が强いからである。今、二缶の俗音を以て一鐘の正音を亂したならば、音律に適ふことは出來ぬ現代は之よりも甚しく天下を擧げて惑うて居るから、予のみ獨り道に向ひ至らんことを求めても、トテモ出來ない話だ。出來ないことが分かつて居りながら强ひて何んとかしやうとするのは、又一つの惑である。されば之を自然のまゝに打ち捨てゝ置いて强ひて求めぬに越したことはない、强ひて求めなければ互に憂に近づくことはなからう。或る癩病患者が夜中に子を産むや、いそいで燈火を取つて赤ん坊を熟視し、一生懸命になつて赤ん坊が自分の醜き姿に似て居りはせぬかと心配したと云ふ話だ。つまり天下の惑を解くことはトテモ出來ぬことを知りながら强ひて惑を解かんとするのは丁度今の話の癩病患者が其の子の己に似ることを恐るゝと同じことで、そんな出來ないことの爲めにくよくよするよりも之を打ち捨てゝ置いてかゝる憂より遠ざかるに越したことはない。

語釋 大愚不レ靈（釋文に「司馬云ふ靈は曉なりと」あり。論語に所謂下愚は移らずとは此の謂なり。） ○祈嚮（郭注に「天下都べて惑ふ、我れ至道に嚮はんことを求むるの情ありと雖も終に得べからず」とあり。祈は求なり。俞樾は所字の誤となす、亦一說なり。） ○大聲不レ入ニ於里耳一（名言なり。成疏に「大聲は、咸池（堯の音樂）大韶（舜の音樂）の樂なり。」） ○折揚皇荂、則嗑然而笑（成疏に「折揚皇荂は蓋し古の俗中の小曲なり、玩狎鄙野故に嗑然として容を動かし聲を同うして大笑するなり。」） ○以ニ二缶一鐘惑、而所レ適不レ得矣 釋文に「缶應に垂に作るべし、鐘應に踵に作るべし、言ふ心は脚を空中に垂るゝ時は必ず適くこと有るを得ず」と云へるより、諸說紛々、適く所を知らず。姑ら

憂。厲之人夜半生其子、遽取火而視之、汲汲然唯恐其似己也。

訓讀 其の愚を知るものは、大愚に非ざるなり。其の惑を知るものは大惑に非ざるなり。大惑なるものは終身解けず、大愚なるものは終身靈ならず。三人行いて一人惑ふも、適く所のもの猶ほ致すべきなり。惑ふもの少なければなり。二人惑へば則ち勞して至らず。惑ふもの勝てば也。而して今や天下を以て惑ふ。予、祈嚮するありと雖も、得べからざるなり、亦悲しからずや。大聲は里耳に入らず、折楊皇荂は則ち嗑然として笑ふ。是の故に高言は衆人の心に止まらず、至言の出でざるは、俗言勝てばなり。二缶を以て鐘を惑はさば、適ふ所得ざらん。而るに今や天下を以て惑ふ、予祈嚮ありと雖も、其れ庸んぞ得べけんや。其の得べからざるを知つて、之を強ふる、又一惑なり。故に之を釋てゝ推さざるに若くは莫し。推さずんば誰と其れ憂を比せんや。厲の人、夜半に其の子を生む、遽かに火を取つて之を視、汲汲然として唯ゞ其の己に似んことを恐るゝなり。

大意 天下を擧げて惑へるを慨歎し、之を救ふの道は自然に放任するに如くはなしと說く。

通釋 自ら其の愚なることに氣付くのは大愚ではない、又自ら惑へることに氣付くのは大惑ではない。大惑のものはどこまでも解からぬし、大愚の者はとても曉ることは出來ぬ。然し惑へるものが少ない間は何とか始末がつくが、多くなると手に追へぬ、例へば三人行く場合に、其の中の一人が道に迷つても、遂には目的地に到ることが出來る、それは迷ふ者が少ないからである。處が三人連の中、二人までが迷ふた場合には、どんなに苦勞しても行け

迎合諂諛と思はない。か様な辯者や僞君子を始めとし、又其の徒黨となつて同じく是とし非として附阿雷同をなしながら、自分では衆愚の仲間とは思はない連中は何んと天下の至愚ではないか。

語釋 道諛之人（道字解しにくし、林希逸は導に作り、導は順なりと解す。沈樹芝は道は導なり、導は奉迎の如しと曰ふ。宣注亦道は導に同じと云ふ。諸家概ね道を導と解す。獨り郭慶藩は「案ずるに道人は即ち諂人なり、漁父篇に曰く、意を希ひ道言する之を諂と謂ふと、道と諂と同義。荀子不苟篇に諂諛に非ざるなりと、賈子先醒篇に君諂諛を好みて言を聽むと、韓詩外傳に並に道諛に作る、諂と道と聲の轉なり。」今郭說を採る。） ○合レ譬飾レ辭云云（惠施公孫龍の徒を貶するか。） ○垂二衣裳一云云（儒家者流を斥すか。）

知其愚者非大愚也。知其惑者非大惑也。大惑者終身不解、大愚者終身不靈。三人行而一人惑、所適者猶可致也。惑者少也。二人惑則勞而不至。惑者勝也。而今也以天下惑。予雖有祈嚮、不可得也。不亦悲乎。大聲不入於里耳。折揚皇荂、則嗑然笑。是故高言不止於衆人之心。至言不出、俗言勝也。以二缶鐘惑、而所適不得矣。而今也以天下惑、予雖有祈嚮、其庸可得邪。知其不可得也而強之、又一惑也。故莫若釋之而不推。不推、誰其比

しとすれば、則ち之を道諛の人と謂はざるなり。然らば則ち俗は故より親より嚴にして、君より尊きか。己を道人と謂へば、則ち勃然として色を作し、己を諛人と謂へば、則ち怫然として色を作す、而かも終身道人なり、終身諛人なり。譬を合せ辭を飾りて衆を聚るなり。是れ終始本末相坐せず。衣裳を垂れ、釆色を設け、容貌を動かし、以て一世に媚びて、自ら道諛と謂ざると、夫の人の徒と爲りて、是非を通じて自ら衆人と謂ざるとは愚の至也。

大意 衆人皆世俗に媚びながら、自ら道諛の人たるに氣づかざるを歎ず。古來多く、此の章を前章に屬するは是に非ず、陸西星曰く「常情中より、一段の奇論を發出す。上文と相蒙らず」と。從ふべし。

通釋 そもそも眞の孝子は其の親に諛はず、眞の忠臣は其の君に諂はぬ。これが臣たり子たるものゝ立派な行である。もし親や君の言ふ所は何事でも贊成し、其の行ふ所は何事でも善いとするだけであるなら、世間の人々は之を不肖者と云ふであらう。然し此の世間の批評が必ず理にかなへるや否や知り難いのである。なぜならば今世間の人々が然りとし善しとする所を其のまゝ肯定し同意すれば世間では之を喜んで決して迎合阿諛の人とは謂はない。それなら世間と云ふものは親よりも君よりも尊嚴なものであると云へば、それは甚だ疑問である。して見れば世間に迎合してもやはり同樣に諂諛のそしりを免れることは出來ぬ。然るに人は誰でも迎合阿諛の人と云はれるとカッとして顏色を變へるが、その實はどこまでも、迎合阿諛の人である。今其の爲す所を見るに、先づ都合のよい例を引いて言辭を飾り立てゝ、衆愚を集めるが、其の話の終始本末を吟味して見ると少しも照應一致して居ない。又長い着物をだらりと着け、けばけばしく飾り立て、もつともらしい顏付をしてひたすら世間に媚びながら、自分では

彼の野鹿、君下の縛を絕つが如きなり。亮谷は猶ほ野鹿とは無知無欲を謂ふなりと解す。何れも皆通ず。

孝子不諛其親、忠臣不諂其君、臣子之盛也。親之所言而然、所行而善、則世俗謂之不肖子。君之所言而然、所行而善、則世俗謂之不肖臣。而未知此其必然邪。世俗之所謂然而然之、所謂善而善之、則不謂之道諛之人也。然則俗故嚴於親而尊於君邪。謂己道人、則勃然作色、謂己諛人、則怫然作色。而終身道人也、終身諛人也。合譬飾辭聚衆也。是終始本末不相坐。垂衣裳、設采色、動容貌、以媚一世、而不自謂道諛。與夫人之爲徒、通是非、而不自謂衆人、愚之至也。

〔訓讀〕孝子、其の親に諛はず、忠臣其の君に諂はざるは、臣子の盛なり。親の言ふ所を然りとし、行ふ所を善しとすれば、則ち世俗之を不肖の子と謂ふ。君の言ふ所を然りとし、行ふ所を善しとすれば、則ち世俗之を不肖の臣と謂ふ。而して未だ知らず、此れ其の必ず然るやを。世俗の然りと謂ふ所を之を然りとし、善しと謂ふ所を之を善

餘り顏色がやつれるのは世間の目から見れば感心なことであるが、眞の聖人から見ると親が病氣になつてから之を直すと云ふやうなことは羞かしく思ふことだ。されば有虞氏の世亦理想的ではない。然らば理想的至德の世は何如、卽ち理想の世に在りては無爲の治を事となすが故に賢人を尙ばず、能者を使はず、上位に在るものは高き木の枝の如く上にあれども自ら高しとせず、下民は野鹿の如く放縱自得して居る。而して其の行はおのづから端正でありながら、その義たるに氣がつかず、又互に親愛でありながら、その仁たるに氣がつかず、又おのづから誠實でありながら其の忠たるに氣がつかず、又其の言ふことがおのづから道理にかなつて居りながら、その信たるに氣がつかずうごめき働いて互に助け合ひながら、之を恩惠とも思はない。されば如何なる善行美事も其の迹が殘らず、從つて後世に傳ふることがない。」

語釋　不レ及二有虞氏一乎、故離二此患一也（離はカヽルなり、遭ふなり。宣注に云ふ「武德舜に及ばず、故に惟だ此の放伐の禍あり」と。副墨にも「禹武の德、虞舜に及ばず、故に天下をして此の禍に罹らしむ」とあり。秦鼎によれば「此れ天下、有虞の時に生れず、故に戰伐の患に罹るを言ふ、其の賢否を評するに非ず。」或は解して「滿稽自ら彼時に生れず故に此の患にかゝる」と爲す。姑らく通行の說に從ふ。）　〇天下均治之爲レ願、而何計下以二有虞氏一爲上（甕谷日く「言ふ心は天下均しく治まるは是れ人々願となす所以なり、既に已に均しく治まれば復た何ぞ有虞氏をして之を治めしむるを用ひん。」）　〇有虞氏之藥レ瘍也（瘍は成疏に頭瘡なりとあり。口義には「有虞氏の藥は瘍あればなり」と訓み、舜の仁政と云ふ藥は卜と云ふ病氣（瘍）があるからのことであると解す。亦一說なり。）　〇修二慈父一（修は病を直すこと。又修は進なり、藥をすゝめると解するも通ず。）　〇聖人羞レ之（正義に「何んぞ肉を養つて病まざらしむるに如かんや。此れ蓋し德に因りて治を求むるはもと亂を致さゞるの貴たゞに如かざるに喩ふ。」）　〇至德之世、不レ尙レ賢、不レ使レ能（口義に「世を擧げて淳一なり、未だ賢能の名あらず、故に賢を尙ばず、能を使はずと曰ふ。」）　〇上如二標枝一（郭注に「物の上に出で、自ら高しとせざるなり」とあり。成疏にも「君、民の上に居り恬淡虛忘、猶ほ高樹の枝の榮貴に心なきが如し。」甕谷は標枝を解して、高懸の枝となす是なり。）　〇民如　野鹿一（郭注には「放たれて自得する也」とあり。成疏には「上既に無爲、下亦淳樸、譬へば

訓讀 門無鬼、赤張滿稽と與に武王の師を觀る。赤張滿稽曰く、有虞氏に及ばざるか、故に此の患に離れりと。門無鬼曰く、天下均しく治まりて、有虞氏之を治めたるか。其れ亂れて後之を治めたるかと。赤張滿稽曰く、天下均しく治まるを之れ願となせば、何ぞ有虞氏を以て爲すを計らん。有虞氏は瘍に藥するなり。禿にして髢を施し病んで醫を求む。孝子藥を操つて以て慈父を修む。其の色燋然たり。聖人之を羞づ。至德の世は、賢を尙ばず、能を使はず、上標枝の如く、民野鹿の如し。端正にして以て義たるを知らず、相愛して以て仁たるを知らず、實にして以て忠たるを知らず、當つて以て信たるを知らず、蠢動して相使つて、以て賜と爲さず。是の故に行ひて迹無く、事ありて傳ふる無し。

大意 至德の世の狀態を說く。

通釋 門無鬼と赤張滿稽と云へる二人が、周の武王が殷を伐つ軍を觀た。滿稽が先づ語を發して曰ふには「武王の德は虞舜に及ばないから天下をして戰伐の患にかゝらしめたのである。」之を聞いて門無鬼が曰ふには「さう聞くと有虞氏は至德の君の樣だが、一體天下が既によく治まつて居るのを舜が更に之を治めたのか、それとも天下が亂れて居たのを治めて泰平を致したのか。」滿稽が曰ふには「天下がよく治まつて居れば萬民の願は既に滿足されて居るから、何にも舜などを推し立てゝ治めて貰ふことを考へる必要はない。だから舜が天下を治めたのは丁度頭瘡に藥をつけ、禿頭にカツラを着けたり、病氣になつて醫者を呼ぶが如く天下が亂れで後に治めたので元より無爲にして治めたのではない。孝行な子が親が病氣になると醫者から藥を貰ひなどして親の病氣を直すのに心を用ひ心配の

（口義に「情事は實事なり、盡く事々爲すべきの實を見て其の爲すべき所のものに順って之を行ふ。」）　○行言自爲而天下化（又「行ふ所、言ふ所皆是れ自らの爲めにし人の爲めに爲さず、天下ノ自然に之に化す。自爲とは己れが爲めにし、人の爲にするに非ず」。）
○手撓顧指（又「撓は動くなり、言ふ心は其の手を擧ぐれば顧みて之を指す所に隨って、民應ぜずとふことなし。」とあり。）　○四海之內、共利之之謂悅、共給之之爲安（郭注に「自ら私するの懷なきなり」とあり。郭慶藩曰く「謂悅と爲安と對文、謂は猶ほ爲の如し。古謂爲の字同義互に用ふ。」）　○怊乎（宣注には「意なきの貌」とあり。）　○儻乎（無心の貌、前章に見ゆ。）　○萬事銷亡（上の與形滅亡と句意同じ、萬事作爲の迹なきを言ふ。或は凡ての物皆消散すると解するも可。）　○混冥（林西仲曰く「昏々默々、至道の極なり、照曠其の明を極め、混冥其の幽を極め、之を合して神人見ゆ。」）

門無鬼與赤張滿稽觀於武王之師。赤張滿稽曰、不及有虞氏乎、故離此患也。門無鬼曰、天下均治而有虞氏治之邪。其亂而後治之與。赤張滿稽曰、天下均治之爲願、而何計以有虞氏爲。有虞氏之藥瘍也。禿而施髢、病而求醫。孝子操藥以修慈父。其色燋然。聖人羞之。至德之世、不尚賢、不使能、上如標枝、民如野鹿。端正而不知以爲義、相愛而不知以爲仁。實而不知以爲忠、當而不知以爲信。蠢動而相使不以爲賜。是故行而無迹、事而無傳。

最早や人間を治める氣はないのですか、どうか後學の爲めに聖人の治道に就いて御話を承りたい。」そこで諄芒が曰ふには「聖治か。それは外でもない、官を設け法を布いて、其の宜しきを失ふことなく、人を拔擢擧用して其の才能を失ふことなく、萬事に就いて其の實情を見拔いて其の當に爲すべき事を行ひ、言行ともに己の爲めにし、人の爲めにせなくて天下の民おのづから化し、手を擧げ顏で指圖すれば四方の民皆來り歸す。之をば聖人の治と謂ふのだ、」苑風曰く「然らば德人と云ふのは如何なる人であるか承りたい。」諄芒曰く「德人なるものは心があつて止まるのでもなく、考があつて行くのでもなく、物に對して是非善惡の念を抱くことが無い。天下の人々と共に利福を享くるを悅び、共に豐かにして足るに安んじ、そして人世に對しては恰も嬰兒が母を見失なへるが如く、又行く手の道に迷うて茫然たるが如くであり、又財用に對しては欲寡くして自ら常に餘りあつて、其の出所さへ知らず、飲食に對しては美味を貪らず腹に滿つれば足れりとして亦其の由つて來る所を知らぬ。かくの如く無心無知に徹底したのが德人の風である。」更に苑風が尋ねて曰ふには「次ぎに神人と云ふのは如何なる人であるか御話しを願ひたい。」諄芒又告げて曰く「至れる神人は日月の光に乘じて德を四表に光被せしめ、而も其の形迹を少しも遺すことがないから、之を照明の極と謂ふ。換言すれば神人は天命を全うし性情を盡し、天地と共に樂み、萬事作爲の迹なく、萬物等しく德化を蒙り其の性を遂げて本然の眞情に復る。之をば昏々默々たる至道の極と謂ふのである。

語釋　諄芒(釋文に「李云ふ、之を望めば諄々、之を察すれば芒々、故に諄芒と曰ふ。或は云ふ、霧氣なりと。」案ずるに霧の茫々然たるより名けて諄芒と曰へるか。前篇の雲將と同じく霧を擬人化せるなり。)　○大壑(壑字は大宗師にも見ゆ、大海なり或は東海と曰ふ。)　○苑風(釋文に「一に云ふ扶搖大風なり」ツムジ風。)　○橫目之民(因に云ふ「橫目は人を言ふ、人の目、橫に面に生ず、字を用ふること奇極。」)　○畢見其情事而行其所爲

と。曰く、將に大壑に之かんとすと。曰く、奚をか爲すと。曰く、夫れ大壑の物たるや、注げども滿たず、酌めども竭きず、吾れ將に遊ばんとすと。苑風曰く、夫子横目の民に意なきか。願はくば聖治を聞かんと。諄芒曰く、聖治か、官施して其の宜しきを失はず、拔擧して其の能を失はず。畢く其の情事を見て、其の爲す所を行ひ、行言自ら爲して天下化し、手撓顧指して、四方の民倶に至らざること莫し。此を之れ聖治と謂ふと。願はくば德人を聞かんと。曰く、德人なるものは居るに思なく、行くに慮なし。是非美惡を藏せず。四海の內、共に之を利する之を悅と謂ひ、共に之を給する之を安と爲す。怊乎として嬰兒の其の母を失ふが若く、儻乎として行くに其の道を失ふが若し。財用餘あつて、其の自りて來る所を知らず。飲食足るを取つて、其の從る所を知らず。此を德人の容と謂ふと。願はくば神人を聞かんと。曰く、上神光に乘じて、形と與に滅亡す。此を照曠と謂ふ。命を致し情を盡し、天地と樂しんで、銷亡し、萬物情に復る。此れを之れ混冥と謂ふ。

【大意】聖人、德人、神人三者の區別を說く。林西仲曰く「聖治は政を修むるなり。德人は德を修むるなり。神人は性に率つて修を忘るゝなり。三者は深淺の同じからざるなり。」

【通釋】諄芒と云ふ者が東の方大海に行かうとして、たま〳〵苑風と云ふ者に東海の濱で出遇つた。苑風が問うて曰ふには「貴方はこれから何處へ行かうとなさる。」諄芒曰く「これから大海へ行くのだ。」苑風更に問うて曰く「大海へ行つて何をなさる。」諄芒曰く「そも〳〵大海と云ふものは、どんなに注いでも滿たないし、どんなに酌んでも竭きない實に廣大深遠なものだ。だから吾れはそこで思ふ存分、遊んで見ようと思ふのだ。」苑風曰く「では貴方は

諄芒將東之大壑。適遇苑風於東海之濱。苑風曰、子將奚之。曰、將之大壑。曰、奚爲焉。曰、夫大壑之爲物也、注焉而不滿、酌焉而不竭、吾將遊焉。苑風曰、夫子無意于橫目之民乎。願聞聖治。諄芒曰、聖治乎、官施而不失其宜、拔擧而不失其能、畢見其情事而行其所爲、行言自爲而天下化、手撓顧指、四方之民莫不俱至。此之謂聖治。願聞德人。曰、德人者、居無思、行無慮、不藏是非美惡。四海之內、共利之之謂悅、共給之之爲安。怊乎若嬰兒之失其母也、儻乎若行而失其道也。財用有餘、而不知其所自來。飮食取足、而不知其所從。此謂德人之容。願聞神人。曰、上神乘光、與形滅亡。此謂照曠。致命盡情、天地樂而萬事銷亡、萬物復情。此之謂混冥。

訓讀　諄芒、將に東のかた大壑に之かんとす。適〻苑風に東海の濱に遇ふ。苑風曰く、子將に奚に之かんとする

通釋 子貢は魯に歸つて孔子に其の話をすると、孔子が曰はれるには「彼は無爲の道術を生かじりに修めたもので、本當に道を會得した者ではない。從つて道の一面を知つて他面を知らない、道の半面を治めて他の半面を治めて居ない。即ち徒らに古を守るを知つて時と共に推移するを知らぬもので、決して感心すべき人物でない。そもそも眞の道人は心知明白にして自然の道に悟入し、無爲にして純朴の眞性に復へり、性を全うし神を保ち、世俗と倶に推移し、衆人と異なりたることを爲す者でない。されば汝はあの道術を假修した老人を見ては驚いたが、今話したやうな眞の道術を得た人に遇つたら、もとより驚かされることが無いであらう。なぜならば此の人は時に隨ひ變に應ずるのであつて、特に異を顯はして人を驚かすが如きものでないからである。それは姑らくとして渾沌氏の術は渾沌氏の時代に適した道であつて今の時世に適するものでないから、吾々は何も之を識るに及ばない。況んや老人の半可通の道術を聞いて驚く要は尚ほさら無い。」

語釋 假修渾沌氏之術（渾沌は應帝王に見ゆ、もと云ふは窮初渾沌時代を擬人化して言ふなり。つまり無爲の道術の意。假修とは眞修の反、解莊に「其の學術を愛して未だ其の眞を知らざる者なり、假修の二字、玩ぶ可し。」郭注には「其の今に背きて古に向ひ世事を爲すを羞づるを以ての故に其の眞の渾沌に非ざるを知る」とあり。） ○識其一、不知其二（成疏に「其の一を識るとは古にして移らざるを謂ふなり。其の二を知らずとは今に順つて變に適く能はざるを謂ふなり。」） ○治其內、而不治其外（郭注に「夫れ眞の渾沌は都べて治めざるなり、豈に其の外內を以て異となし、偏して治むる所あらんや」と。成疏にも「道を抱き素を守るは內を治むるなり。時に隨ひ變に應ずる能はざるは外を治めざるなり」とあり。） ○夫明白入素、無爲復朴云云 郭注に「此れ眞の渾沌なり、故に世と波を同うして自ら失はず、則ち世俗に遊ぶと雖も泯然として迹なし、豈に必ずしも汝をして驚かさしめんや」とあり。兪樾曰く「固讀んで胡と爲す、胡固皆古の聲に從ふ故に通用するを得、汝將た胡(何)んぞ驚かんや。言ふ心は汝、眞の渾沌と遇はゞ驚かざるなり。郭注まさに其の意を得たり。」） ○且渾沌氏之術云云（且はしばらくの意、それは扨て措き。通義に「渾沌氏の世は渾沌の道を用ふ、今は其の時に非ず」とあり。）

淳備は口義に「純一渾全」とあり。窓彩神の三者が渾然として一となつて備はるを云ふ。）○忘二夫人之心一（口義に「此の人の心中に必ず利機巧の事なきを言ふ。此の忘は亡と同じ無なり」とあり。宣注にも「夫人の心、必ず此の四累なし」とあり。忘を字の如く訓むも亦通ず。）○雖下以二天下一譽レ之、得中其所上レ謂、謷然不レ顧。以二天下一非レ之、失二其所一レ謂、儻然不レ受（非譽得失の四者を巧に分用せしなり。得失は成功失敗の意。）

甕谷は「衆、其の言を善しとして靡然として之に從ふ、是れ其の謂ふ所を得るなり。衆、此と背馳して其の言に從はず、是れ其の謂ふ所を失ふなり」と解す。林希逸は「言ふ所、世に行はるゝを其の謂ふ所を得と曰ひ、言ふ所、世に行はれざるを其の謂ふ所を失ふと曰ふ」と解す。大意皆同じ。謂字を爲字と解するも亦通ず。謷然とは甕谷曰く「謷傲同じ、倨傲の貌。一に隱然とは疏に無心の貌とあり。正義は獨立の貌と解す、亦通ず。）○風波之民（成疏に「夫れ水の性、澄むと雖も、風に逢へば波起る、我が心定まらざること彼の波瀾に類す、故に之を風波の民と謂ふ」とあり。宣注にも「是非の爲めに動かされ易きを言ふ」とあり。郭注によれば「此れ（丈人を指す）宋榮子の徒（逍遙遊に見ゆ）未だ以て全德と爲すに足らず。子貢の此の人に迷沒するは即ち列子の季咸（應帝王に見ゆ）に心醉するが若し」と。

反二於魯一、以告二孔子一。孔子曰、彼假二修渾沌氏之術一者也。識二其一一、不レ知二其二一。治二其內一、而不レ治二其外一。夫明白入レ素、無爲復レ朴、體レ性抱レ神、以遊二世俗之閒一者、汝將固驚邪。且渾沌氏之術、予與レ汝何足二以識一レ之哉。

訓讀　魯に反つて以て孔子に告ぐ。孔子曰く、彼は渾沌氏の術を假修するものなり。其の一を識つて、其の二を知らず、其の內を治めて、其の外を治めず。夫れ明白にして素に入り、無爲にして朴に復り、性を體し神を抱いて、以て世俗の間に遊ぶもの、汝將た固より驚かんや。且つ渾沌氏の術は、予と汝と何ぞ以て之を識るに足らんやと。

大意　孔子が漢陰丈人の說を排して無爲の眞道を說き子貢の妄を聞く。

て顔色を變へボンヤリして仕舞ひ、一日中も元の氣分に立ち反れなかつたのですか」。子貢が曰ふには「これまで吾は我が先生孔子程の人は天下唯一人と思つて居たので、復たとあの老人の如き偉大なる人物があらうとは思はなかつた。吾は嘗て先生から斯う云ふことを聞いた「時世に適したことをやつて成功するやうに、そして勞力少くて功果の多いのが聖人の道である」と言ふことであつた。處が今老人の話をきくと全く、然うではない。道を把握すれば天性を完全に保ち得るし、天性が全ければ肉體も保全され、肉體が全ければ精神も自ら完全となる、かく道を把握して精神を完全にするのが聖人の道である。此の道に從つて聖人は生を此の世に受け人々と並び進めどもわざと歩を共にするのでなく無心にして行くまゝに任して居るのであつて、ボンヤリとして德形神の三者が聖人の人格中に淳和圓滿な姿を保つて居る。さればかの老人の如きにあつても、功利とか智巧と云ふ如き俗心は少しも無く、己が志に叶はざれば行かず、己が心に合はざれば行はず、天下中の人が譽めて呉れて、其の謂ふことが成功しても大きく構へて喜びもせず、天下を擧げて己を誹り、其の謂ふことが失敗に終つても無心にして氣にも留めない。世間の毀譽襃貶などは彼の本眞の性を増しもしなくば減じもしない、全く毀譽の外に超然として居る。かゝる人をば全德の人と謂ふのである。之に反して我々の如きは波が風に隨つて動くが如く心の定まらぬもので、呼んで風波の民と謂ふのである。

語釋 卑陬（成疏に「慙怍の貌」とあり。釋文には「李云ふ愧懼の貌」とあり。大意同じ。）○頊頊然（釋文に「李云ふ自失の貌」とあり。）○不二自反一（口義に「自ら其の常に復せざるを云ふ。」）○天下一人（又「孔夫子を言ふなり」とあり。）○託レ生與レ民並行（行の字行ふと訓むも通ず。宣注に云ふ「生を世に寄す、民と大同。」とあり。即ち民と行止を同じうするなり。）○汒乎淳備哉（汒茫同じ、前篇に見ゆ。ボーとして形迹なき貌。）

天下非之、失其所謂、儻然不受。天下之非譽無益損焉。是謂全德之人哉。我之謂風波之民。

【訓讀】子貢卑陬して色を失ひ、頊頊然として自得せず、行くこと三十里にして後愈ゆ。其の弟子曰く、向の人は何爲る者ぞ。夫子何が故に、之を見て容を變じ色を失ひ、終日自ら反らざるかと。曰く、始め吾れ以爲へらく、天下一人のみと、知らず復た夫の人有らんとは。吾れ之を夫子に聞く、事は可を求め、功は成を求め、力を用ふること少くして、功を見ること多きものは、聖人の道なりと。今徒、然らず道を執るものは德全し、德全きものは形全し、形全きものは神全し。神全きものは聖人の道なり。生を託して民と並び行けども、其の之く所を知らず。汒乎として淳備なるかな。功利機巧、必ず夫の人の心に忘し。夫の人の若きものは、其の志に非ざれば之かず。其の心に非ざれば爲さず。天下を以て之を譽めて、其の謂ふ所を得と雖も、謷然として顧みず。天下を以て之を非り、其の謂ふ所を失ふも、儻然として受けず。天下の非譽、益損する無し。是を全德の人と謂はん哉。我れは之れ風波の民と謂はむと。

【大意】子貢が漢陰の丈人に心醉して、これこそ功利機巧を脫したる全德の人であると妄信した。

【語釋】漢陰丈人の話を聞いて、子貢は心に慙ぢ顏色は青ざめ、ボンヤリして不安にかられ、三十里も行つた頃、やつと元の氣分になつた。弟子が彼に問うて曰ふには「先き程の人はどう云ふ人ですか。先生は何故其の話を聞い

語釋 反於晉（一堂曰く「下文に據れば晉當に衛に作るべし。」）○漢陰（漢は漢水、陰は水南を云ふ。漢水の南岸なり。）○丈人（長老の稱。）○圃畦（圃は蔬菜を作る地ハタケ也。畦は畦畔、アゼ。）○鑿隧而入井（隧は地道なり、掘り割のこと。甕谷曰く「地道を鑿ち、旋轉して下つて水處に至る。」）○滑滑然（力を用ふる貌、矻々と言はんが如し。）○百畦（釋文に說文を引いて云ふ、五十畝を畦と曰ふと。）○卬而視之（卬一本仰に作る。甕谷曰く「圃を爲るもの方さに地道中に在り、故に仰いで之を見ると曰ふ。」）○挈水若抽（挈は提なり。抽は引なり、司馬、崔本皆流に作る、優に似たり。）○瞞然（成疏に羞作の貌とあり。）○於于（諸說區々として定まらず。釋文に「司馬云ふ夸誕の貌、一に云ふ仁恩を行ふ貌」とあり成疏には佞媚の謂とあり。口義には自ら大にする貌とあり。甕谷は嗟嘆の聲なりと云ふ。郭嵩燾は應帝王に其覺于于とあるの于于に同じとし氣舒ぶる貌と解す。宣穎、林西仲、陳壽昌の諸家並司馬の說に從ふ、予も亦之に從つて解す。）○忘汝神氣、墮汝形骸（前篇に墮爾形體、吐爾聰明とあるに同じ。）○無乏吾事（乏は廢なり 前章に無落吾事とあるに同じ。）

子貢卑陬失色、頊頊然不自得、行三十里而後愈。其弟子曰、向之人何爲者邪。夫子何故見之、變容失色、終日不自反邪。曰、始吾以爲天下一人耳。不知復有夫人也。吾聞之夫子、事求可、功求成、用力少、見功多者、聖人之道。今徒不然。執道者德全、德全者形全、形全者神全。神全者聖人之道也。託生與民並行、而不知其所之。汒乎淳備哉。功利機巧、必忘夫人之心。若夫人者、非其志不之。非其心不爲。雖以天下譽之、得其所謂、謷然不顧。以

ふる氣はありませんか。」耕作の老人は首をあげて子貢を視ながら「それは何んな機械だ」と尋ねた。子貢が得意然と說明して曰ふには「それは木を細工して作つたもので、後が重くて前が輕い。これで水を汲みますと物をズルズルと抽き出すやうに容易で、且つ其の疾いことは沸湯の溢れ出すやうである。其の機械をばハネツルべと曰ふ。」之を聞いて老農夫はムツト顏色を變へ、セヽラ笑つて曰ふには「私は自分の師匠から聞いた、智巧を弄したカラクリ仕掛の道具を用ふることになると、色々とたくらんだ事が起つて來る、たくらみ事が起つて來ると必ず智巧の心が盛になつて來る。若し此の智巧の心が胸中に生ずる時は、純粹明白の天德が失せることになる。この純白の德が失せることになれば、精神が動搖して安定を缺くことになる。精神が安定を失ふ時は、道に安住することは思ひもよらぬ。されば私はハネツルべのこと位は知らぬではないが、心にはづかしくて、さ樣なことは爲ないのだ。」子貢は之を聞いて深く慙ぢ入り、首を垂れて何んとも言ふことが出來なかつた。暫らくして老農夫が思ひ出したやうに「一體汝はどう云ふ男だ」と尋ねたので、子貢はやつと口を開いて「私は孔子の弟子なんです」と答へた。そこで老農夫が曰ふには「それでは汝はあの博く學んで聖人を氣取り、仁とか義とかと出鱈目なことを誇張して民衆を籠絡し、獨り琴をひき悲しい歌をうたつて世道の衰へたるを嘆いて評判を天下に廣める者ではないか。若し汝がこれから心を入れ替へて、汝が聰明の智を去り外形に拘はるゝことから全く離れたならば、どうにか眞の道に近づくことが出來やう。全體汝は自分の一身さへも治めることが出來ないで、天下を治めるやうな餘裕があるものか、餘計なことを言つて俺の仕事を邪魔しないで疾く往け〳〵。」

く、數なること泆湯の如し。其の名を槹と爲すと。圃を爲るもの忿然として色を作して笑つて曰く、吾れ之を吾が師に聞けり。機械あれば、必らず機事あり。機事あれば、必ず機心あり。機心胸中に存すれば、則ち純白備はらず、純白備はらざれば、則ち神生じて定まらず。神生じて定まらざるものは、道の載せざる所なりと。吾れ知らざるに非ず。羞ぢて爲さざるなりと。子貢瞞然として慙ぢ、俯して對へず。間らく有りて、圃を爲るもの曰く、子は奚するものぞやと。曰く、孔丘の徒なり。圃を爲るもの曰く、子は夫の博學以て聖に擬し、於于以て衆を蓋ひ、獨弦哀歌、以て名聲を天下に賣るものに非ざるか。汝方將に汝の神氣を忘れ、汝の形骸を墮たば庶幾からんか。而身だも之れ治むる能はずして、何ぞ天下を治むるに暇あらんや。子往け、吾が事を乏しくする無かれと。

大意 機心ある時は道に居る能はざるを說く。此の章は論語微子篇の長沮桀溺章などによる後人の僞作か。林西仲曰く「此の段、言ふ其の機心を去つて方に能く道に入るべしと、圃畦を爲るを借りて許多の議論を發出す、大に漁父篇の意に類す。其の文絕へて停蓄蘊藉なし。中間又紕繆の語あり。此れ後人の竄入たること疑なし。」

通釋 孔子の弟子子貢が南方の楚に遊び、晉に歸らうとして、途中漢水の南を過ぎた時、一老人が畠を耕作するのを見た。老人は掘割道を作りそれを迂回して井戸の中に入り、水を汲んだ甕を抱へて出て來て畠に水を灌いで居たが、コツ／＼と非常に骨が折れるが其の割合に仕事が一向捗らない。子貢は之を見て居たが餘りもどかしいので口を出して曰ふには「御老體、そんな骨の折れることをやるよりも、此にかう云ふ機械がありますよ。之を使ふと一日に百畦の田畑に水をかけることが出來る。つまり骨が折れなくて仕事がウンと出來る道具です。何んと之を用

前輕、挈水若抽、數如泆湯。其名爲槔。爲圃者忿然作色而笑曰、吾聞之吾師。有機械者必有機事。有機事者必有機心。機心存於胸中、則純白不備。純白不備、則神生不定。神生不定者、道之所不載也。吾非不知。羞而不爲也。子貢瞞然慙、俯而不對。有閒、爲圃者曰、子奚爲者邪。曰、孔丘之徒也。爲圃者曰、子非夫博學以擬聖、於于以蓋衆、獨弦哀歌、以賣名聲於天下者乎。汝方將忘汝神氣、墮汝形骸、而庶幾乎。而身之不能治、而何暇治天下乎。子往矣、無乏吾事。

訓讀 子貢、南のかた、楚に遊びて、晉に反り、漢陰を過ぎて、一丈人を見る。方に將に圃畦を爲らんとす。隧を鑿つて井に入り、甕を抱きて出で灌ぐ。搰搰然として力を用ふること甚だ多くして、功を見ること寡し。子貢曰く、此に械有り、一日に百畦を浸す。力を用ふること甚だ寡くして、功を見ること多し。夫子欲せざるかと。圃を爲るもの卬いで之を視て曰く、奈何んと。曰く、木を鑿つて機を爲る、後重く前輕し。水を挈ぐること抽くが若

る、さ樣な風であつたならば、何にも堯舜の民の敎へ方をば優れたりとし、己れの自然に大同せる治をば卑下するに及ばない。要するに大聖は民が自然の德に大同して其の心常に安らかならんことを欲するのみである。」

語釋 胥靡（胥は試なり、宣注に云ふ「言へる所を陳べて以て正に就かんと欲す。」）○不レ輯（輯は和なり。）○局局然（成疏に「身を俛して笑ふなり。」因には「笑つて聲を出さざる貌。」クスクスと笑ふことなり。釋文には大笑の貌とあり。カラカラ笑ふこと。）○車軼（車轍に同じ。）○自爲處レ危、其觀臺多レ物、云云（諸解多くは處字にて句を切り危字を下に屬して訓む。即ち「自ら處ることを爲し、其の觀臺を危（たか）くし物を多くせば云々。」かく訓む時は爲處の二字解に苦しむ、故に從はず。觀臺は臺上に屋を構へて遠觀すべきもの。）○覤覤然（釋文に驚懼の貌とあり。）○汒若（茫然に同じ。）○言二其風一（口義に「風は遺風の風なり、亦猶ほ其の路を言へと曰はんが如し。」）○獨志（獨立獨歩の志なり、解莊には「他に求めず、他に假りずして己れ獨り志を立てゝ以て其の道に進むなり」とあり、若し之を淺解と思はゞ天眞獨露の本心と解しては何んと。）○搖二蕩民心一（太宗師篇に搖蕩恣睢轉徙とあり。搖蕩は逍遙自在の意なり。言ふ心は民心を自適の境に放任して束縛せざるなり。）○豈兄二堯舜之敎レ民、溟涬然弟レ之哉（兄弟とは尊卑の意、即ち口義に所謂、堯舜を以て高しとなし、我を以て之に次ぐとなすなり。陳壽昌曰く「敎レ民は有レ爲者なり、溟は即ち雲將篇（在宥）に溟涬（在宥には涬溟に作る）に大同すとある義、無レ爲者なり。」溟涬は在宥に所謂涬溟に同じ、成疏に自然の氣なりとあり。本文の言ふ心は、堯舜有爲の治を尊び、己れ自然に大同せる無爲の治を卑む要はない。つまり堯舜の治に優るとも劣ることはないとの意。）○欲下同二乎德一而心居上矣（口義に「自然の德に同せば其の心安し。居は安なり。欲は聖人は其の民かくの如くならんことを欲するなり。」）

子貢南遊二此楚一、反二於晉一、過二漢陰一、見二一丈人一。方將レ爲二圃畦一。鑿レ隧而入レ井。抱レ甕而出灌。搰搰然用レ力甚多而見レ功寡。子貢曰。有レ械二於此一、一日浸二百畦一。用レ力甚寡而見レ功多。夫子不レ欲乎。爲レ圃者卬而視レ之曰、奈何。曰、鑿レ木爲レ機、後重

大意 大聖の天下を治むるは無爲無心なるを述ぶ。

通釋 蔣閭葂と云ふ人あり、季徹と云ふ人に見えて云ふには「先日魯の君が私に向つて是非教を受けたいと申された。私が固く辭退しても御許し下さらなかつたので、止むを得ず遂に御話し申し上げた。然し其の申し上げたことが果して道理に適つて居るや否や疑はしいので、試みに先生に申上げて、誤あらば正して頂きたいと思ふ。さて私は魯君に向つて必ず人に對しては恭敬、自ら行をひきしめることに努力し、公明忠誠の士を拔擢して、依怙偏陂のことなくば、人民は必ず和ぎ安んずるに相違ないと、斯う申し上げたが、どんなものでしやう。」之を聞いて季徹はクス／＼と笑つて曰ふには「貴方の言ふことは人君たるものゝ政治道德としては三文の値もない。それは丁度カマキリが臂を振り起てゝ車輪にハムカウやうなもので、さ樣なやり方では、どんなにガンバツて見た所でトテモ重荷に勝へるものでない。且つか樣なことをやれば、自らシヤチガイて危險な地に居ることになる。譬へば物觀臺を作つて眺望をよくすれば、人の喜んで足を運ぶものが多くなると同樣で、人君が若しも恭儉を服膺し、公忠の徒を拔擢する樣なことを行つたら、人心は攪亂されて天下騷然たること請合である。」かくと聞いて蔣閭葂はひどく驚いて曰ふには「私には先生の言はるゝことが、ボンヤリとして居て解かりません。何うかもう一度ザツト御話しを願ひたい。」そこで季徹が曰ふには「大聖が天下を治めるには、民心の動くに順つて治を施し少しも束縛せず、民心に因つて教を成し、自然に風俗を易へ、盡く其の知巧の害心を滅し、皆其の獨立獨行の志を盛ならしむるのである。要するに人の本性の自然に順つて爲すが故に民は誰の力で然うなるのか氣つかず、自然と化して行くことにな

覷覷然驚曰、葂也汒若於夫子之所言矣。雖然願先生之言其風也。季徹曰、大聖之治天下也、搖蕩民心、使之成教易俗、舉滅其賊心、而皆進其獨志。若性之自爲、而民不知其所由然。若然者、豈兄堯舜之教民、溟涬然弟之哉。欲同乎德而心居矣。

訓讀 蔣閭葂、季徹に見えて曰く、魯君、葂也に謂つて曰く、請ふ教を受けんと。辭すれども命を獲ず、既に已に告げたり、未だ知らず中るや否や。請ふ嘗みに之を薦めん。吾れ魯君に謂つて曰く、必ず恭儉を服し、公忠の屬を拔き出して、阿私する無くんば、民孰れか敢へて輯がざらんやと。季徹局局然として笑つて曰く、夫子の言の若きは、帝王の德に於て、猶ほ蟷螂の臂を怒らして以て車軼に當るがごとし、則ち必らず任に勝へざらん。且つ是の如きは、則ち其れ自ら危きに處るなり。其の觀臺、物を多くすれば、將に往いて迹を投ずるもの衆からんとすと。蔣閭葂覷覷然として驚いて曰く、葂や、夫子の言ふ所に汒若たり。然りと雖も願くば先生の其の風を言はんことをと。季徹曰く、大聖の天下を治むるや、民心を搖蕩して、之をして教を成し俗を易へ、擧げて其の賊心を滅して、皆其の獨志を進めしむ。性の自ら爲すに若つて、民其の由つて然る所を知らず。然るが若きものは、豈に堯舜の民を教ふるを兄とし、溟涬然として之に弟たらんや。德を同じうして心居らんと欲すと。

の關與する所でなく凡て道の力である。從つて物を治めると云ふことなどは、言ふまでもなく人爲に亙ることであつて自然の關知する所ではない。されば凡ての物を忘れ天まで忘れ、一切合切自然に打ち任すことを忘己と謂つて獨り客觀ばかりでなく主觀をも忘れた所謂物我兩忘の妙境である。此の自己超越の妙境に遊ぶ人をば渾然として大自然と冥合すと謂ふのである。

語釋　有レ人治レ道、若レ相二放可不可、然不然辯一者上(古來異說多くして適從に苦しむ、姑らく東條一堂の說に從ふ、曰く「可不可、然不然は公孫龍の語なり、辯者の二字は宜しく上に屬して看るべし。放倣同じ、學なり、習なり。」) ○離二堅白一若レ縣レ寓(口義に「堅白同異紛々として多端なりと雖も、我能く之を分辯して天宇の間に縣くるが若くにす。能く曉然として掲げて人に示すを謂ふなり。離は分析なり。」) ○胥易技係、勞レ形怵レ心者也(應帝王篇に於て詳說せり、就いて見よ。) ○執狸之狗成レ思(狸一本に留に作り、緊縛して止むるの意に解す。然れども應帝王篇には斄に作る斄は狸なり故に狸に作る優れり。成思とは口義に「人に緊縛せられて其の愁思を成すなり。」) ○有レ首有レ趾(五體を具ふる貌。) ○無レ心無レ耳(口義に「其の知なく見なきを言ふ。」) ○無形無狀(道なり。) ○動止(口義に起居なりとあり。) ○廢起(又興廢とあり。)

將閭葂見二季徹一曰、魯君謂二葂也一曰、請受レ教。辭不レ獲レ命。既已告矣、未レ知二中否一。請嘗薦レ之。吾謂二魯君一曰、必服二恭儉一、拔二出公忠之屬一、而無二阿私一、民孰敢不レ輯。季徹局局然笑曰、若二夫子之言一、於二帝王之德一、猶三螳螂之怒レ臂以當二車軼一、則必不レ勝レ任矣。且若レ是則其自爲處レ危、其觀臺多レ物、將往投レ迹者衆二將閭葂

はざる所と、而が言ふこと能はざる所とを告げん。凡そ首あり趾あつて、心無く耳無きものは衆し。有形の者、無形無狀と與にして、皆存するものは盡く無し。其の動止や、其の死生や、其の廢起や、此れ又其の以てする所に非ざるなり。治むることあるは人に在り。物を忘れ天を忘る。其の名を忘己と爲す。己れを忘るゝの人、是を之れ天に入ると謂ふと。

大意 有爲有能は禍を招き、無爲無心は道に入るを說く。

通釋 孔子が或る時老子に問うて曰ふには「此に人あり、其の修めたる道は此の頃流行の可不可、然不然等の是非に亙る辯論を習得せしものゝやうである、そして自ら大言して『堅白同異の義を分別論斷することは恰も物を天空に懸けたるが如く明瞭である』と曰つて居る。かくの如き人は聖人と謂ふことが出來るでせうか。」老子が答へて曰ふには「そんな人物は恰も人夫が賦役を治め技術者がその技術ゆゑに反つて束縛せらるゝ如く、才能あるが爲めに吾れと吾が身を勞し色々心配する人物であつてトテモ聖人などゝ謂ふことは出來ぬ。あの狸を執へる狗はしばられて憂思をなし、身輕な猿は山から捕へられて來る。凡て有爲有能のものは自分の能ゆゑに身を縛られ苦しみに陷るものであつて決して尊ぶに足らない。孔丘よ、予は今汝に汝の力ではトテモ聞くことも言ふことも出來ない深遠な道理を聞かしてやらう。凡そ世の中に首もあり足もあつて人間並の身體を具へながら、心もない耳もないツマリ知覺聞見の能力を缺いて居る者が隨分多い。か樣な始末であるから人間らしい形體こそは有して居るが、かの無形無狀無聲無臭の玄道を完全に保有する者は皆無であると斷言してよい。人の起居、死生、窮達等々はもとより人

鳴に合す、鳥鳴既に是非に無心なり、聖言豈に偏愛に情あらんや。」）　○喙鳴合、與天地爲合（喙鳴合は合喙鳴に同じ、變文のみ。○成疏に「言、既に鳥鳴に合すれば德亦天地に合す、天地は覆載に無心、聖人は言說に無心、故に天地と合するなり。」）

○緡緡（泯々に同じ、泯々は廣く暗くして分明でないこと。茫々、ボンヤリ。）

夫子問於老聃曰、有人治道、若相放、可不可、然不然、辯者有言曰、離堅白、若縣寓。若是則可謂聖人乎。老聃曰、是胥易技係、勞形怵心者也。執狸之狗成思、猨狙之便自山林來。丘、予告若而所不能聞、與而所不能言。凡有首有趾、無心無耳者衆。有形者與無形無狀而皆存者盡無。其動止也、其死生也、其廢起也、此又非其所以也。有治在人。忘乎物、忘乎天。其名爲忘己。忘己之人、是之謂入於天。

訓讀　夫子、老聃に問うて曰く、人あり道を治め、可不可、然不然の辯を相放ふ者の若く、言へるあり、曰く、堅白を離るゝことと寓に縣くるが若しと。是の若きは則ち聖人と謂ふべきかと。老聃曰く、是れ胥易技係のごとく、形を勞し心を怵へしむるものなり。執狸の狗は思を成し、猨狙の便は山林より來る。丘、予若に、而が聞くこと能

通釋 泰初とて天地創生の極初には唯々絶對の無あるのみである。凡ての有と云ふものが絶對に無いから、勿論物の名と云ふやうなものがあらう筈がない。此の絶對の無こそ一元氣の由つて起る所である。此の一氣は未だ何等の形を具へて居ないが、萬物は其の力に由つて始めて生ず。かく物が之を得て始めて生ずると云ふ所より之を德と名づけるのである。而して此の一氣は無形ではあるが、其の中に自ら分化の勢を有して居る。分化の勢をはらんでは居るが一氣それ自身はやはり渾然として一であつて少しの間隙を有しない、此の分化能力をば命と謂ふのである。かくて渾然たる一氣は個有の分化能力によりて流動發展して萬物を生成するのである。かく物が生成して食息起居等凡て生を保つ道が自然と具はつて居るのを形と謂ふ。此の形體が内に精神を保ち、そして形體も精神も各自然の法則に從つて活動するのを性と謂ふが。扨て物の性はかゝる發展の過程を經て居るから、其の性を傷ふことなく修め養へばおのづから本然の德に立ち反ることが出來、德の地に反り至れば初即ち道と一つになることが出來る。道に大同すれば心は虛無となり廣大無邊となり、其の言ふ所は恰かも鳥が喙を動かして鳴くが如く少しの私意私心もなく極めて自然的となる。かくなれば自から天地と冥合し、其の樣子はボンヤリとして愚なるが如く昏きが如く見える。之を幽妙の德と謂つて、自然に順ひ無心無爲の妙境に玄同した狀態と謂ふ。

語釋 泰初（成疏に「泰は大、初は始なり。元氣始めて萌す之を太初と謂ふ。言ふ心は其の氣廣大にして能く萬物の始本となる、故に太初と名く。」）○有ㇾ無、無ㇾ有無ㇾ名（林西仲は無無あり、無名ありと讀み、無無とは無の一字を迯ね、無名とは即ち老子の所謂無名は天地の始なりと稱す。亦一說なり。）○物得以生謂ニ之德一（德の言たる得なり、物は一を得て以て生ず故に一を名けて德と謂ふ。）○留動而生ㇾ物、物成生理謂ニ之形一（蒐谷曰く「留は流に通ず、所謂一なる者流動して物を生じ、物成る時は食息起居の理、亦此に因つて生ず、是れ形の立つを得る所以なり。理は生を保つ理を謂ふ、所謂食息起居是れなり。」）○合ニ喙鳴一（成疏に「喙は鳥口なり、心既に虛空、迹復た物に冥す、故に其の說かの鳥

【語釋】夫子闔行（夫字を上句に附けて讀むもよし。闔は盍に同じ。何不の約語なり。行は去なり。）○無落吾事（宣注に「落は荒廢なり、事は耕事なり」。つまり耕作を妨げることなり。）○俋々乎（又「俋首の貌」とあり。成疏には「地を耕すの貌」とあり。其の意は同じ。）

泰初有無、無有無名、一之所起。有一而未形。物得以生謂之德。未形者有分、且然無閒、謂之命。留動而生物。物成生理謂之形。形體保神、各有儀則、謂之性。性修反德、德至同於初。同乃虛、虛乃大、合喙鳴。喙鳴合、與天地爲合。其合緡緡、若愚若昏。是謂玄德、同乎大順。

【訓讀】泰初に無あり、有ること無ければ名なし、一の起る所なり。一有りて未だ形あらず。物得て以て生ずる、之を德と謂ふ。未だ形あらざるものに分あり、且つ然かも閒無し、之を命と謂ふ。留動して物を生ず。物成りて生理ある、之を形と謂ふ。形體神を保ちて、各々儀則ある、之を性と謂ふ。性修つて德に反り、德至れば初に同ず。同ずれば乃ち虛、虛なれば乃ち大、喙鳴に合す。喙鳴に合すれば、天地と合を爲す。其の合ふや緡緡たり、愚の若く、昏の若し。是を玄德と謂ひ。大順に同ず。

【大意】人性の本源は道なり、性を養つて無心無我の妙境に至れば道と玄同することを述ぶ。

故何ぞやと。子高曰く、昔堯の天下を治むるや、賞せずして民勸み、罰せずして民畏る。今子賞罰して民且つ不仁なり。德此れより衰へ、刑此れより立ち、後世の亂此れより始まらん。夫子闔ぞ行らざる。吾が事を落すこと無かれと。俋俋乎として耕して顧みず。

大意 堯舜無爲の治を揚げ、大禹有爲の政を斥く。林西仲又曰く「莊の稱せらるゝ所以の者は、其の奇宕の氣、雋永の理、千古常に新にして、愈々熟して愈々好きを以てなり。此くの如く淺率直遂にして、其れ何を以て莊と爲さんや。噫、事を好む者、之を僞るなり。」

通釋 昔、堯が天下を治めた時、伯成子高と云ふ人が諸侯となつた。其の後、堯が天下を舜に授け、舜は又禹に授けた。禹の時になつて子高は諸侯を辭退して農民となつた。或る時禹が往つて見ると、子高は野に耕して居た。そこで禹は小走りに行き、下手に立つて問うて曰ふには「昔、堯が天下を治めた時、尊公は諸侯となつて居たが、堯が舜に位を授け、舜が予に授くるや、尊公は諸侯をやめて農民となつて仕舞れたが、それは一體何う云ふわけなんですか。」子高が曰ふには「昔、堯が天下を治めた頃は、民は賞しなくても善事に勵み、罰しなくても上を畏れて惡をしなかつたのである。然るに尊公が天子になられてからと云ふものは盛に賞罰を用ひしも民は不道德で少しもウマク治まらぬ。道德はこれより衰へ、刑罰はこれより盛に用ひられ、かくて後世天下の亂はこれより始まるであらう。尊公はトテモ堯舜無爲の大政治家の比ではない。つまらぬことを言つて居て、此の方の仕事を邪魔しないで、早く御歸り召され。」かう云つて首をたれたまゝ耕作をして居て、顧みもしなかつた。

語釋 堯觀ニ乎華一（觀は遊なり、或は巡観とも解す。孟子梁惠王下に「觀ニ於轉附朝儛一」とあるの觀に同じ。） ○華封人（論語八佾篇にも儀封人と云ふのがある、朱注によると、封人は封疆を掌どるの官、とある。つまり境界の番人である。且つ朱子は儀封人を以て蓋し賢にして下位に隱るゝ者と爲して居る。華封人も亦蓋し此の類か。） ○鶉居（宣注に「鶉は常居なし、安きを求めざるを言ふなり。」） ○鷇食（齊物論にし「以爲レ異ニ於鷇音一」と見ゆ、其の成疏に凡そ鳥、初めて生じ、母の哺を待つ者を鷇と曰ふとあり。鷇食とは鷇の母の哺を仰ぎて滿足する如く、食を擇ぶことなきを云ふ。） ○鳥行而無レ彰（宣注に「虛際を行きて自ら顯著せず」とあり。正義にも「鳥、虛空を行く如く、過ぎて跡なし」とあり。つまり聖人の行は鳥の虛空を行くが如く其の蹤方なきを云ふ。） ○三患莫レ至（林西仲曰く「三患は病老死なり。」秦册によれば上の多懼多事多辱の三事となす。今は林說に從ふ。）

堯治ニ天下一、伯成子高立爲ニ諸侯一。堯授レ舜、舜授レ禹。伯成子高辭爲ニ諸侯一而耕。禹往見レ之、則耕在レ野。禹趨就ニ下風一立而問焉。曰、昔堯治ニ天下一、吾子立爲ニ諸侯一。堯授レ舜、舜授レ予、而吾子辭爲ニ諸侯一而耕。敢問其故何也。子高曰、昔堯治ニ天下一、不レ賞而民勸、不レ罰而民畏。今子賞罰而民且不仁。德自レ此衰、刑自レ此立、後世之亂自レ此始矣。夫子闔レ行邪。無レ落ニ吾事一。俋俋乎耕而不レ顧。

訓讀 堯、天下を治むるや、伯成子高、立つて諸侯と爲る。堯、舜に授け、舜、禹に授く。伯成子高、諸侯たるを辭して耕す。禹往いて之を見れば、則ち耕して野に在り。禹趨つて下風に就き、立つて問ふ。曰く、昔堯天下を治めしとき、吾子立つて諸侯たり。堯舜に授け、舜、予に授けて、吾子諸侯たるを辭して耕す。敢へて問ふ、其の

つて之を欲しないのは何うしたことですか」と尋ねると、堯が曰ふには「男の子が多いと、中には不肖な子などが出來て色々と心配が多くなるし、金持ちになると色々と煩さいことが多くなり、長生すると其のうちにはシクジリなどを仕出かして辱をかくことが多くなる。されば此の三つの者は德を養ふ助にはたらぬから御斷りする次第である。」そこで封人が曰ふには「これまで私は貴方をば聖人だと思つて居たが、今の話を聞いて見ると聖人よりも遙かに下つた君子たるに過ぎぬ。そも〳〵天が萬民を生ずるや、必ず之に職業を授けるものであるから、男の子が多くても各々之に天分にかなつた職業を授けてやれば、彼等は各自個性に從つて進むべき道を進んで行くから、何の心配もありはせぬ。又金持ちとなつたら、獨り之を私しないで世間の人々に分けてやれば何のウルサイことがあるものか。一體聖人と云ふものは其の居は鶉の常居なきが如く、之によつて安きを求めることなく、又其の食は雛が親鳥の哺を貰つて滿足する如く、食を擇ぶと云ふことがない、又其の行は鳥が虛空を飛ぶが如く自ら行の跡方を彰かにすることなく、凡て無心無我である。そして天下道あれば物と倶に榮へ、天下道なければ獨り德を修めて隱退し、千歳の壽を保ちて世の中に厭きたる時は、此の世を去つて天に上り、彼の白雲に乘じて、天帝のいます處に行くのである。其處には最早や此の世に見るが如き老病死の如き三患もやつて來ず、身は常に幸福である。されば長生きして何で辱の多いことがあらうか。」か樣に言ひ終つて封人は其の場を去つた。堯は封人の後を追ひかけて、「尋ねたいことがあるから待つて貰ひたい」と曰ふと、封人は「何も用事はない歸れ〳〵。」と曰つてどん〳〵行つて仕舞つた。

んと。聖人をして富ましめんと。堯曰く、辭せんと。聖人をして男子多からしめんと。堯曰く、辭せんと。封人曰く、壽富にして、男子多きは、人の欲する所なり。女獨り欲せざるは何ぞやと。堯曰く、男子多ければ則ち懼れ多く、富めば則ち事多く、壽なれば則ち辱多し。是の三つの者は德を養ふ所以に非ざるなり。故に辭すと。封人曰く、始めや、我れ女を以て聖人かと爲へり。今は然らば君子なり。天の萬民を生ずる、必ず之に職を授く。男子多くして之に職を授けば、則ち何の懼れか之れ有らん。富んで人をして之を分たしめば、則ち何の事か之れ有らん。夫れ聖人は鶉居して鷇食し、鳥行して彰るゝ無し。天下道有れば、則ち物と皆昌え、天下道無ければ、則ち德を修め閒に就く。千歲世を厭はば、去つて上僊し、彼の白雲に乘じて、帝鄕に至らん。三患至るなく、身常に殃無くば、則ち何の辱か之れ有らんと。封人之を去る。堯之に隨ひて曰く、請ふ問はんと。封人曰く、退かんのみと。

大意 至德の聖人は無心無爲、從つて患至るなく、身常に多福なるを說く。林西仲曰く「此の段、義、着落なく、其の詞頗る時趨に近し。疑らくは莊叟が眞筆に非ず」と。或は然らんか。

通釋 昔、堯が華と云ふ所へ遊びに參つた時に、華の境界番が堯に御目にかゝつて「聖人よ、私は貴方の將來を祝福し、貴方の長命を御祈りします」と申上げると、堯は「それは御斷りしよう」と曰つた。そこで番人は又「それでは貴方の富まれんことを御祈りします」と申すと、堯は又「それも御斷りしよう」と曰つた。そこで又番人が「それでは貴方に男の子が多く授かることを御祈りします」と申すと、堯は又「それもやはり御斷りしよう」と曰つたので、番人は不思議に思つて「命が長くて、金持ちで、男の子の多いのは皆人の欲する所であるのに貴方に限

足らざる）を言ふ。」

堯觀乎華。華封人曰、嘻、聖人。請祝聖人。使聖人壽。堯曰、辭。使聖人富。堯曰、辭。使聖人多男子。堯曰、辭。封人曰、壽富多男子、人之所欲也。女獨不欲何邪。堯曰、多男子則多懼、富則多事、壽則多辱。是三者、非所以養德也。故辭。封人曰、始也我以女爲聖人邪。今然君子也。天生萬民、必授之職。多男子而授之職、則何懼之有。富而使人分之、則何事之有。夫聖人鶉居而鷇食、鳥行而無彰。天下有道、則與物皆昌。天下無道、則修德就閒。千歲厭世、去而上僊、乘彼白雲、至於帝鄕。三患莫至、身常無殃、則何辱之有。封人去之。堯隨之曰、請問。封人曰、退已。

訓讀 堯、華に觀ぶ。華の封人曰く、嘻、聖人よ、請ふ聖人を祝し、聖人をして壽ならしめんと。堯曰く、辭せ

て生ずる根本に氣がつかぬ。されば若し彼に天下を與へて天子としたならば、彼は益々聰明の人知を恃んで無爲の天道を無視するであらうし、又自己を本にして物と區別し、物我の差別觀から脱することが出來ず、知を尊んで火のもえ移る如くドン／＼と外物を逐うて馳せまはり、果ては細事に使役せられ、外物に拘束せられ、あたりに氣をくばり心を勞して物に接し、頭を使つて多くの事をうまくやらうとし、かくて外物の變化につれて心が動搖し、全然恒常の本心を保つことが出來なくなるであらう。か樣な人物が、何うして天に配する資格があらうか。さりながら譬へば此に一大家族がありとする、そこには必ず此の大家族の宗祖と云ふものがあり、其の下に多くの支族分家の長たる衆父と云ふものがある。齧缺の如きは此の支族分家の衆父となる資格ぐらゐはあるが、衆父の父たる宗祖となる資格はない。先づ大名ぐらゐが關の山、トテモ天子の器でない。要するに有爲を以て天下を治めることは亂の本であり、臣下の禍であり、人君の賊である。」

語釋　配レ天（正義に「天子と爲すなり、堯蓋し天下を讓らんと欲す。」）○圾乎天下（又「圾、岌に通ず、危なり。」）○給レ數以敏（數は煩冗なり、正義に「其の敏捷は以て煩數に應ずるに足る。」）○以レ人受レ天（又「人事を參めて以て天理に應ず。」）○乘レ人而無レ天（人は上の聰明叡知、乘は恃むなり、即ち有爲を恃んで無爲を無みするなり。口義に「其の有爲を盡して無爲を知らざるを言ふ」とあり。）○本レ身而異レ形（身は我なり、形は物なり、物我相對の見地を脱却せぬこと。正義には「我相未だ忘れず、彼を分ち此を分つ」とあり。）〔○火馳（口義に「火の馳するが如く、其の急なるを言ふ。」）○爲二緒使一（宣注に「細事に役せらるゝなり」とあり。）○爲二物絯一（又「絯は纒束なり、物に拘せらるゝを言ふ」とあり。）○四顧而物應（又「酬接暇あらず。」）○應二衆宜一（又、「事々宜しきを求む」と。）○與レ物化而未二始有一レ恒（口義に「物に洎（みだ）されて其の自然の常を失ふ者は未く定まりて應ずるに未ず。化は事物に變動せらるゝなり。」）○治亂之率也云々（林希仲曰く「有爲を以て天下を治むるは適に之を亂す所以なり、君たり臣たるもの倶に禍害を免れざるのみ。此れ知を用ふるものは以て天下を治むるに

【訓讀】堯の師を許由と曰ひ、許由の師を齧缺と曰ひ、齧缺の師を王倪と曰ひ、王倪の師を被衣と曰ふ。堯、許由に問うて曰く、齧缺以て天に配すべきか、吾れ王倪に藉つて以て之を要せん。許由曰く、殆い哉、圾乎たり天下。齧缺の人と爲りや、聰明叡知、數に給して以て敏、其の性人に過ぐ。而して又乃ち人を以て天を受けんとす。彼れ過を禁ずるに審かにして、過の由て生ずる所を知らず。之に與へて天に配せんか、彼れ且に人に乘じて天を無みせんとす。方に且に身を本にして形を異にせんとす。方に且に知を尊んで火馳せんとす。方に且に緒使たらんとす。方に且に物絯たらんとす。方に且に四顧して物應ぜんとす。方に且に衆宜に應ぜんとす。方に且に物と化して未だ始めより恆有らざらんとす。夫れ何ぞ以て天に配するに足らんや。然りと雖も、族有れば祖有り。以て衆父と爲すべくして、以て衆父の父と爲すべからず。治は亂の率なり。北面の禍なり、南面の賊なり。

【大意】聰明叡知は天下を亂すことを述ぶ。宣穎曰く「齧缺の失は總べて未だ無心なる能はず、未だ無爲なる能はざるに在り。能く無心無爲なる時は衆父の父と爲すべし。」

【通釋】堯の師を許由と曰ひ、許由の師を齧缺と曰ひ、齧缺の師を王倪と曰ひ、王倪の師を被衣と曰つた。或る時、堯が許由に問うて曰く「貴方の先生の齧缺は天子となすべき人物でしやうか、若し然うであるならば、私は彼の先生たる王倪の力をかりて是非とも彼を迎へて天下を讓らうと思ふ。」許由の曰く「齧缺を天子としたら、天下はトテモ危いものだ。齧缺の性格は聰明叡知、どんな煩はしいことでも敏捷にやつてのけ、其の頭腦は常人の及ぶ所でない。而して又彼は人事を修めて天道に合せんことを求めて居る。彼は過を禁ずる法には明かであるが、過の由つ

なことぢやないか」と言つたと謂ふことである。

語釋　赤水之北(宣注に「赤は南方の明色、其の北は玄境なり」卽ち赤は方位に配すれば南に當る、北は色に配すれば黑に當る。故に此の注あり。)　○南望還歸、遺其玄珠(又「南は明察の方、已に玄境に遊び久しく守る能はずして復た明處を望めば玄亡ぶなり。玄珠の二字、道を喩ふること妙絕。」)　○使知索之(知慧を擬人化して云ふ。)　○離朱(前にしばしば見ゆ。此にては聰明に喩ふ。)　○喫詬(口辯ある者に喩ふ。胠篋篇には解垢に作る。)　○使象罔(毓谷曰く「象罔は形象罔然たるを謂ふ。宣注には「象あるに似て實は無し、蓋し無心の謂なり。」要するに知明言を絕したる無心の境を擬人化して云へるなり。林西仲曰く「知明言皆索むと曰ひて象罔には索むと言はず、其の索むるを待つなきを以てなり。」參照。)

堯之師曰許由、許由之師曰齧缺、齧缺之師曰王倪、王倪之師曰被衣。堯問於許由曰、齧缺可以配天乎、吾藉王倪以要之。許由曰、殆哉、圾乎天下。齧缺之爲人也、聰明叡知、給數以敏、其性過人。而又乃以人受天。彼審乎禁過、而不知過之所由生。與之配天乎、彼且乘人而無天。方且本身而異形。方且尊知而火馳。方且爲緒使。方且爲物絯。方且四顧而物應。方且應衆宜。方且與物化而未始有恆。夫何足以配天乎。雖然、有族有祖。可以爲衆父、而不可以爲衆父父。治亂之率也、北面之禍也、南面之賊也。

○時馳而要其宿（郭象曰く「言ふ心は時に隨つて馳騁し、而して又必ず其の歸宿する所を要す。漫然底止する所なきに非ざるなり。」）　○大小長短修遠（修は長なり、上の長字と重複す、林希逸は以て近字の誤となす。或は以て修遠の二字を註文の竄入となす。郭象曰く「遠近と曰はずして、修遠と曰ふものは變文のみ、且つ遠を擧ぐれば近を兼ぬ。」姑らく郭象に從ふ。）

黄帝遊乎赤水之北、登乎崑崙之丘、而南望還歸、遺其玄珠。使知索之而不得、使離朱索之而不得、使喫詬索之而不得也。乃使象罔。象罔得之。黄帝曰、異哉。象罔乃可以得之乎。

訓讀　黄帝、赤水の北に遊び、崑崙の丘に登つて、南望して還歸し、其の玄珠を遺せり。知をして之を索めしむれども得ず、離朱をして之を索めしむれども得ず、喫詬をして之を索めしむれども得ざるなり。乃ち象罔を使せしむ。象罔之を得たり。黄帝曰く、異なる哉。象罔乃ち以て之を得べき乎と。

大意　道に聰明叡知を以てしては得られず、無心無我に依つてのみ得られることを說く。

通釋　昔、黄帝が赤水と云へる川の北に遊び、有名なる崑崙山に登つて南方を望み、淸興を盡して都に歸つたが、此の旅行中に於て大切な黒玉をおとして仕舞つた。そこで黄帝は知と云ふ家來に命じて之を捜させたがわからず、有名な目きゝ離朱に索させてもわからず、喫詬と云ふ家來に求めしめてもわからなかつた。そこで最後に象罔と云ふ男に命じて捜させたら、彼は造作なく見つけた。黄帝は驚いて「ほかでもない、象罔が捜し得たとは誠に不思議

然の道を立て、其の知は神明の如く深遠である。從つて其の德は廣大であつて、天地に等し。其の心は外物來つて始めて之に應ずるのであつて自ら求めることがない。扨て道は萬物の本原であるから凡ての物の形は道に非ざれば生ずることなし、而して人の生命は德の力に由らねば明かとならぬ。故に形體を保ち生命を全うし、德を立て道を明かにするものは王德を具へたる人である。されば其の德は蕩々乎として廣大であり、出づるにも動くにも無我無心であつて萬物皆之に從ひ歸するのである。かくの如き人を王德の人と謂ふ。此の人は能く無形の中に有形を視、無聲の中に有聲を聽く、人は以て無形無聲となすも王德の人は獨り無象中に有象を視ること恰も曉光を望むが如く、無聲中に有聲を聞くこと八音の相和するを聞くが如し。故に王德の人は深遠の上にも深遠にして衆人の到底測るべからざる場合に於ても能く物の形を認識す、又神秘の上にも神秘にして衆智の窺ふべからざる場合に在りても能く精微を窮めることが出來る。故に其の外界の事物に接するや、無我無心であつて物の求めに應ずること窮り無く、時に隨つて自由に物と馳騁して物の歸宿する所を要約して居る。卽ち事の大小、時の長短、處の遠近等々、凡て物の不同なるものを能く至無に歸して之を同ずることが出來る。

語釋　夫道淵乎其居也、漻乎其淸也(口義に「淵乎其居とは靜なり、居は不動なり、定なり。漻乎其淸とは混ぜず雜はらざるなり。」漻乎は淸澄の貌。)　○不レ考不レ鳴(正義に「考は叩なり、聲ありと雖も必ず叩くを待って而る後鳴る。道ありと雖も必ず感を待って而る後應ず。」)　○王德之人(又曰ふ「德盛なるを王と曰ふ。」王は旺なり、盛なりとの解は既に養生主篇に見ゆ。或は以て天下に王たるの德を具有する人と解するも採らず。)　○素逝而恥レ通二於事一(素は虛靜無爲、逝は世と俱に推逝するなり。恥の字、或は以て知の字の誤となす、或は然らむ。)　○立二之本原一而知通二於神一(本原は道なり、正義に「一を抱いて式と爲す、知を用ひずして前知すること神の若し。」)　○其心之出、有二物採一レ之(正義に「出は猶ほ應の如し。採は猶ほ感の如し。感ずるあれば、斯ち應ず、其の心、もと湛然。」)　○形非レ道不レ生(又「道は卽ち本原なり、天を生じ地を生ずるには皆是れ此の道、人身知るべし。」)

求、時騁而要其宿。大小長短修遠。

訓讀 夫子曰く、夫れ道は淵乎として其れ居り、漻乎として其れ淸む。金石も得ざれば以て鳴ること無し。故に金石、聲あるも、考たざれば鳴らず、萬物孰れか能く之を定めん。夫れ王德の人は、素逝して事に通ずるを恥ぢ、之が本原を立てゝ、知、神に通ず。故に其の德廣し。其の心の出づる、物之を採るあり。故に形は道に非ざれば生ぜず、生は德に非ざれば明かならず。形を存し、生を窮め、德を立て道を明かにするは、王德の者に非ずや。蕩蕩乎たり、急然として出で、勃然として動いて、萬物之に從はんか、此を王德の人と謂ふ。冥冥に視、無聲に聽く、冥冥の中、獨り曉を見、無聲の中、獨り和を聞く、故に深の又深にして、能く物あり。神の又神にして能く精あり。故に其の萬物と接するや、至無にして其の求めに供し、時に騁せて其の宿を要す。大小長短修遠なり。

大意 王德の人は物來つて而る後之に應じ、自ら爲すことなし。是れ亦無爲の意を明かにするなり。

通釋 又我が先生の言に「それ道は靜かにして動かず、淸澄にて汚染なし。金石は其の道を得ざれば鳴らない。即ち金石が鳴るべき聲を持つて居ても、擊たなくば鳴らないと同樣に道も亦明鏡止水の如く淸澄であるが物來りて感ずるに非ざれば之に應じない、即ち感を待つて始めて應ずるのである。道を始めとして凡ての物に具つて居る感に應ずる能力は誰が定めたものでもなく、自然にして然るのである。此の自然性を體得した人が盛德の士である」とある。そも〳〵盛德の大人は無心無爲、世と與に逝き、小賢しく物事に通ずるを恥となし、物の本原たる無爲自

語釋 夫子（釋文に「司馬云ふ、莊子なり。」又正義に「門人莊子の言を記す」とある。是なり。宣穎は下文に夫子問二老聃一とあるに依りて孔子となす。） ○刳レ心（成疏には「刳は去なり、洒なり。言ふ心は道の無爲に法り、有心の累を洗ひ去らざる可けんや。」口義には剔去と解す。エグルと訓ず。何れに從ふも可。） ○無爲爲レ之（無心にして爲すと言はんが如し。） ○無爲言レ之（上に同じく、無心にして言ふと言はんが如し。） ○不同同レ之（下文の萬物一府の意に同じ。） ○行不レ崖異一（崖は際なり、行に於て人と際立った相異なきこと。所謂和光同塵の意。） ○君子明二於此十者一、則韜乎其事レ心之大也、沛乎其爲二萬物逝一也（林西仲曰く「此の十德に明かならば、天下に遺珠なし、故に心に懸するもの大にして窮らず、萬物の歸往する所となる。」） ○一世之利（下の王二天下一に對するが故に王者の富を云ふ。） ○顯則明（蘇谷曰く「古注文の竄入するもの、刪去して可なり」と、朱注亦衍文となす。今姑らく之に從ふ。） ○萬物一府（萬物を同一府庫中のものとなすことにて萬物を一體と見る意。） ○死生同狀（死生を同一狀態となすことにて死生不二と見る意。何れも至人の見識である。）

夫子曰、夫道淵乎其居也、漻乎其清也。金石不レ得無二以鳴一、故金石有レ聲、不レ考不レ鳴。萬物孰能定レ之。夫王德之人、素逝而恥レ通二於事一、立二之本原一、而知通二於神一。故其德廣。其心之出、有レ物採レ之。故形非レ道不レ生、生非レ德不レ明。存レ形窮レ生、立レ德明レ道、非二王德一者邪。蕩蕩乎、忽然出、勃然動、而萬物從レ之乎、此謂二王德之人一。視二乎冥冥一、聽二乎無聲一、冥冥之中、獨見レ曉焉、無聲之中、獨聞レ和焉。故深之又深、而能物焉。神之又神、而能精焉。故其與二萬物一接也、至無而供二其

さず、（顯なれば則ち明、）萬物は一府、死生は同狀なり。

【大意】道に體達した至人の境界を説く。

【通釋】我が先生の言に「それ道は萬物を包容するものであつて、水の滿々と漲れる如く廣大である。學者たるものは、私心を除き去らなければ廣大なる道を體得することは出來ぬ。」とあるが、全く其の通りであつて、作爲の心なく專ら自然に從つて事を爲すのを天と謂ひ、作爲の心なく、止むを得ずして言ふのを德と謂ひ、人を愛し物を利するを仁と謂ひ、萬物は不同であるが之を同一視するを大と謂ひ、行が際立つて他と異なる所なきを寛と謂ひ、萬物を不同のまゝに受込み、取捨選擇をしないのを富と謂ふ、從つて又德の把握は萬物のしめくゝりとなるが故に之を紀と謂ひ、德は之によつて物が確立する所以であるから德の完成を立と謂ひ、道に循へば萬事備はらざることなきが故に之を備と謂ひ、外物の爲めに志を挫かざるを完と謂ふ。君子たるものが以上の十德に明かであつたならば、其の心の働きは廣大であつて萬物を包藏して餘りあり。其の萬物の適き歸することは沛然として大雨の至るが如き有樣である。此の境地に至れる者は萬物皆我が有であるから黃金は之を其の自然の在り場所である山に藏め、珠玉は亦其の自然のあり場所である淵に藏め置いて、特に之を自家の府庫に藏める要はない。從つて又貨財を貪らず、富貴を求めず、長壽を樂まず、若死を哀しまず、出世を譽とせず、零落を恥とせず、一世に名高き富に執着して、之を以て己が所有とは思はず、天下に王たることを以て、己れ顯榮なる地位に居るとは思はず、そして萬物は一體にして、死生は一如であると達觀して居るのである。

異之謂寛、有萬不同之謂富。故執德之謂紀、德成之謂立、循於道之謂備、不以物挫志之謂完。君子明於此十者、則韜乎其事心之大也、沛乎其爲萬物逝也。若然者、藏金於山、藏珠於淵。不利貨財、不近富貴、不樂壽、不哀夭、不榮通、不醜窮、不拘一世之利以爲己私分、不以王天下爲己處顯。(顯則明、)萬物一府、死生同狀。

訓讀 夫子曰く、夫れ道は萬物を覆載するものなり。洋洋乎として大なる哉。君子以て心を刳らざるべからず。無爲にして之を爲す、之を天と謂ひ、無爲にして之を言ふ、之を德と謂ひ、人を愛し物を利する、之を仁と謂ひ、不同にして之を同うする、之を大と謂ひ、行の崖異ならざる、之を寛と謂ひ、萬不同を有つ、之を富と謂ふ。故に德を執る、之を紀と謂ひ、德成る、之を立と謂ひ、道に循ふ之を備と謂ひ、物を以て志を挫かざる、之を完と謂ふ。君子此の十の者に明なれば、則ち韜乎として其れ心を事とするや大なり、沛乎として其の萬物の逝たり。然かるが若き者は、金を山に藏し、珠を淵に藏す。貨財を利とせず、貴富に近づかず、壽を樂しまず、夭を哀しまず、通を榮とせず、窮を醜とせず、一世の利に拘りて、以て己が私の分と爲さず、天下に王たるを以て、己れ顯に處ると爲

れば一として應對を失つて孤獨のものはない。されば天地萬物を貫通して行はれて居るものは天德即ち自然の道である。爲政者が民を治める具は禮樂刑政等の事であり、才能ある者が身に習得する所のことは技藝であるが、かゝる技藝は政治上必要なる禮樂刑政などに兼ね統べられ、禮樂等の事は道理に兼ね統べられ、道理は德に統べられ、德は道に統べられ、道は天に統べられるので、つまり天即ち自然が凡ての歸結となるのである。されば古語に「古の治者は天に則り、無欲を以て天下に臨むによつて人民も自ら欲少なく物々充足と云ふことになる。又自然に從つて作爲を弄することがないから、萬物自から生成化育することになる。又天何をか云はんや、此の無言の天に則り深淵の如き沈默を守るによつて百姓おのづから其の土に安んずると云ふことになる」と曰はれて居り、又古書にも「無爲の道に通ずるときは萬事が完成し、無欲であつて有所得の心がなかつたならば鬼神も爲めに畏服す」と曰うてある。

語釋 玄（天德即ち道の形容詞である。宣穎は、玄は天地の根なり、後面若干の文、無心無爲を說く、都べて此の一個の字を發すと述べて居る。） ○上治レ人事也（宣註に「事とは禮樂刑政の如し。」） ○技兼ニ於事一（又「兼は統の如し。」） ○道兼ニ於天一（又「總べて天に歸する、要は無爲に在るを見るべし。」） ○故曰（莊書に好んで用ふる語である。古語を引用する場合にも用ひ、上を結んで曰ふ場合にも用ふ。これは各句韻を叶ふ所より見れば蓋し古語なるべし。） ○通ニ於一一（一とは無爲の道を謂ふ。） ○無レ心得（欲心なきこと。佛語の所謂有所得の心なきを云ふ。）

夫子曰、夫道覆ニ載萬物一者也。洋洋乎大哉。君子不レ可ニ以不一レ刳レ心焉。無爲爲レ之之謂レ天、無爲言レ之之謂レ德、愛レ人利レ物之謂レ仁、不同同レ之之謂レ大、行不レ崖

萬事畢、無レ心レ得而鬼神服。

訓讀 天地大と雖も、其の化は均し。萬物多しと雖も、其の治は一なり。人卒衆しと雖も、其の主は君なり。君は德に原づいて天に成る、故に玄と曰ふ。古の天下に君たるは無爲なり、天德のみ。道を以て言を觀れば、天下の君正しく、道を以て分を觀れば、君臣の義明かに、道を以て能を觀れば、天下の官治まり、道を以て汎く觀れば、萬物の應備はる。故に天地に通ずるものは德なり。萬物に行はるゝものは道なり。上の人を治むるものは事なり。能の藝とする所ある者は技なり。技は事に兼ねられ、事は義に兼ねられ、義は德に兼ねられ、德は道に兼ねられ、道は天に兼ねらる。故に曰く、古の天下を畜ふものは、無欲にして天下足り、無爲にして萬物化し、淵靜にして百姓定まると。記に曰く、一に通じて萬物畢り、得るに心無くして、鬼神服すと。

大意 天は萬物の根元である、故に天下を治むるものも天に則りて無欲無爲であれば天下おのづから治まる。

通釋 天地は廣大であるが、其の化育は普遍であり、又萬物は數限りもないが一樣によく治められて居る。それは天地萬物を支配して居る自然の道があるからである。從つて多數の人民を主宰する國君も自然の道卽ち天德に從ふことによつて治道を全うすることが出來る。されば此の天德と云ふ不思議な力を玄と曰ふのである。古の天下に君となつた人は無爲を以て治めた。無爲こそ幽玄なる天德である。無爲の玄道に立脚して言論を觀察すれば人君の行は自から正しくなるし、又道に立脚して人間の分際を觀察すれば、君臣間のつとめは自から明らかになるし、又道に立脚して人の才能を觀察すれば、凡ての官職は自からよく治まるし、又道を立場として廣く萬物を觀察す

外篇天地第十二

叙説 道は天地萬物を貫通し主宰するものである、故に天下に君たるものも道に從つて無心無爲を以て天下に臨めばおのづから治まることを論ず。宣穎曰く「道の大源は天に出づ。物の指すべきありて之を道と爲すに非ず。無聲無臭、玄のみ。人須らく無心無爲にして後、之を得べし、一毫の機巧も倶に用ひ得ず、是れ此の篇の大意なり。」

天地雖大、其化均也。萬物雖多、其治一也。人卒雖衆、其主君也。君原於德而成於天、故曰玄。古之君天下、無爲也、天德而已矣。以道觀言、而天下之君正、以道觀分、而君臣之義明、以道觀能、而天下之官治、以道汎觀、而萬物之應備。故通於天地者德也、行於萬物者道也。上治人者事也。能有所藝者技也。技兼於事、事兼於義、義兼於德、德兼於道、道兼於天。故曰、古之畜天下者、無欲而天下足、無爲而萬物化、淵靜而百姓定。記曰、通於一而

語釋 賤而不レ可レ不レ任者物也（口義に云ふ「道を以てィとすれば、物は賤となす。人豈に能く物をすてんや。任は用なり。」）○卑而不レ可レ不レ因者民也（又云ふ「道を以て貴とすれば、人に在る者は卑し、然れども豈に能く人を離れて獨立せんや。因るとは相依るなり。」相依るとは、助け合ふこと。）○匿而不レ可レ不レ爲者事也（又云ふ「匿は隱なり、晦昧なり、明白なるものは道なり、事を以て道に對すれば、事は晦昧なり、然れども豈に能く盡く世事をすてんや。」）○遠而不レ可レ不レ居者義也（又云ふ「義を言ふ時は道を去ること遠く、而も義豈にすつべけんや。」）○親而不レ可レ不レ廣者仁也（又云ふ「道は親疎なし、仁は則ち愛あり至道に非ずと雖も而も豈に能く仁をすてんや、必ず之を推し廣む。」）○節而不レ可レ不レ積者禮也（又云ふ「禮は節文あり、世に强ふるに似たり、而も爲さゞるべからず。」積は積習の義、習熟することなり）○神而不レ可レ不レ爲者天也（又云ふ「知るべからざる、之を神と謂ふ。天の爲す所は皆知らべからざれども、人事は以て爲さゞるべからず、豈に盡く之を知る可からざるに委すべけんや。」）○不レ助（又云ふ「此の助の字は助長の字と同じ。」）○不レ累（又云ふ。「累積して高くせざるなり、累積して以て高くする時は是れ心を容れて自然ならず。」）○會二於仁一而不レ恃（會は合なり、かなふこと。不レ恃とは必ずしも之を恃んで以て美と爲さゞる意。口義は自ら以て恩となさずと解す。）○薄二於義一（薄は近なり。）○無二自而可一（口義に「往くとして當礙せざるなきなり。」）

くことは出來ぬ。義は道を去る遠しと雖も之を乘てゝ由らずに居るわけに參らぬ。仁は道の親疎なきが如くではないが、やはり之を廣めねばならぬ。禮は折目、切目をやかましく云つて人に強ふる嫌はあるが、やはり之に習熟せねばならぬ。德は人の同じく天に得る所なれども、之を修めて益ゝ高くせねばならぬ。道は唯一不變のものであるが、道の眞性を顯はすには之を變易せねばならぬ。天は神秘にして其の爲す所は知るべからずと雖も之を知らざるがまゝに打ち棄てゝ置くことは出來ぬ。以上は人道の常として已むを得ざることである。されば聖人は天道即ち自然に立脚して人道に反せぬやうにして居る。即ち聖人は天の無爲なるを觀て凡て自然に任せて強ひて助長せず、自然に德の成るに任せて自ら累ねて高くせず、自然の道に立脚して事の成敗を謀らず、自然に仁に合ひて、之を恃みて至道とは思はず、行ふ所自然と義に近づいて、強ひて義を行はんとせず、禮を行ふ要ある時はおのづから之に應じて、之を忌み避けない。世事に應接する要あれば、必ずしも辭せずして之に應接し、行ふ所おのづから法にかなつて亂行なく、民を重んじて輕視せず、物の自然性に從つて之を治め棄て去ることが無い。物は道に比すれば治むるに足らないが、人間生活の上から云へば治めねばならぬから、之を棄てゝ置かないのである。扨て天道に明かに通じないものは其の德、純一ならず、何事に於ても不可である。されば道に明かでない者は誠に悲しむべきである。然らば道とは何であるか、道には天道あり、人道あり、天道は無爲にして尊きものであり、人道は有爲にして累らはしきものである。君臣を以て喩へば天道は本體であつて君主にあたり、人道は作用であつて臣下になる。かく天道と人道とは相去ること遠きが故に之を識別せねばならぬ。

ども高くせざるべからざるものは徳なり。一なれども易へざるべからざるものは道なり。神なれども爲さざるべからさる者は天なり。故に聖人、天に觀て助けず、徳に成りて累ねず、道に出でゝ謀らず、仁に會して恃まず、義に薄りて積まず、禮に應じて諱まず、事に接して辭せず、法に齊しくして亂れず、民を恃んで輕んぜず、物に因りて去らず。物なるものは爲すに足る莫けれども、而かも爲さざるべからず。天に明ならざるものは、徳に純ならず。道に通ぜざるものは、自りて可なる無し。道に明ならざるものは、悲しいかな。何をか道と謂ふ。天道有り、人道有り。無爲にして尊きものは天道なり。有爲にして累はしきものは人道なり。主なるものは天道なり。臣なるものは人道なり。天道と人道と相去る遠し、察せざるべからざるなり。

大意 初めに人道を說き、次に聖人の天道に立脚して人道に從ふ態度を述べ、最後に天道と人道との區別を明かにして文を結ぶ。

此の一節は注家多く後人の竄入となす。宣穎曰く「此の一段、意膚にして文雜、本篇の義と甚だ切ならず、全く莊子の筆に似ず、蓋し本篇の正文は上段に依りて已に完し。此の段は後人の續貂に係かる、未だ知る可からず。」

通釋 扨て天下を治むるには在宥即ち無爲自然に如くはなしと雖も、人の世の道として亦爲さゞる可からざることあり。例へば凡て物は道の貴きに較ぶれば賤しいけれども人が生を營む以上は之を是非とも用ひねばならぬ。又人は道に比すれば卑しいけれども人が生を遂げるには互に依存せねばならぬ。又人事は道の明白なるに比すれば晦昧なれども之を治めずに打ち棄てゝ置くことは出來ぬ。法は道の精なるに比すれば粗雜なれども民に陳ね示さずに置

而不可不陳者法也。遠而不可不居者義也。親而不可不廣者仁也。節而不可不積者禮也。中而不可不高者德也。一而不可不易者道也。神而不可不爲者天也。故聖人觀於天而不助、成於德而不累、出於道而不謀、會於仁而不恃。薄於義而不積、應於禮而不諱、接於事而不辭、齊於法而不亂、恃於民而不輕、因於物而不去。物者莫足爲也、而不可不爲。不明於天者、不純於德。不通於道者、無自而可。不明於道者、悲夫。何謂道。有天道有人道。無爲而尊者天道也。有爲而累者人道也。主者天道也。臣者人道也。天道之與人道也相去遠矣、不可不察也。

訓讀　賤なれども任ぜざるべからざるものは物なり。卑なれども因らざるべからざるものは民なり。匿なれども爲さざるべからざる者は事なり。麤なれども陳ねざるべからざるものは法なり。遠なれども居らざるべからざるものは義なり。親なれども廣めざるべからざるものは仁なり。節なれども積まざるべからざるものは禮なり。中なれ

めて之に應じ、其の懷ふ所を十分述べて、天下の人々の相手になるのである。そして常に無我無心の境地に行住し、天下の人々を各〻自適の境に携へ行き、往くも歸るも宛轉自由であつて無窮の天地に遊び戲むれ、其の出づるも入るも亦他の助を假ることなく、日と倶に新たにして窮りあることがない。若し大人形體の狀を論贊すれば、衆と一體一如である。既に衆と一體一如である以上、自己と云ふものが無い。自己を否定すれば、勿論他我のあらう筈はない。然るに人我兩忘の境地に達せず、他我を認め人を治めんとする者は、昔の君子即ち所謂三王の徒である。之に反して一切虛無と大觀し、無爲玄默を守るものは天地を友とする大人の境界である。

語釋 處二乎無響一、行二乎無方一（無響は所謂無聲無臭の境、無方は方所を絕したる境、即ち無念無想、無我無心の境地を曰ふ。）○挈レ汝適、復之撓撓、以遊二無端一（此の句、古來諸家の說を叢すこと多し。郭注に從へば「撓撓は自ら動くなり、萬物を提挈して自動の性に復歸せしむ。即ち無爲の至なり」と。之によれば「汝を挈げて之が撓々に適復す」と訓む。林西仲は「汝を挈げて適き、復るも之くも撓々として以て無端に遊ぶ」と訓み「挈レ汝適とは天下を携へて道に適くなり。復は來なり。之は行なり。復之撓々、以遊二無端一とは其の往來自如、無極に撓挑するなり」と解す。宣注亦林說と大同小異なり。要するに撓々の句古來明解なし、郭注自動と解するも據る所なし、寧ろ林說宣注が太宗師の撓挑無極の句を以て之を解するは稍〻從ふべきに似たり。今之に依りて解せば撓々は宛轉自在の義か。兪樾は全然別個の說をなして曰ふ「爾雅釋古に適は往なりと、然らば則ち適復は猶ほ往復の如し。撓々は亂なり。廣雅釋古に撓は亂なり、之を重言すれば則ち撓々となる。適復の撓々は此れ世俗の人、獨往獨來する能はざる所以なり、惟大人は則ち其の適復の撓々者を提挈して、之と共に無端に遊ぶ、故に汝が適復の撓々を挈げて以て無端に遊ぶと曰ふ。二句もとより唯一句、郭注は其の解を失ひ並に其の讀を失ふ。」諸說紛々適從を知らず、姑らく宣注に從ふ。）○出入無レ旁（林西仲曰く「獨往獨來、依傍する所なきなり。」）○與レ日無レ始（成疏に「日と倶に新なり、故に終始なし」とあり。）○合二乎大同一（宣注に「大人の體は萬物と一體たり」と。林西仲は衆と異なるなきなりと解す、是なり。）○無レ己惡乎得レ有レ有（既に自己がなくば之に對立せる物の存在と云ふものは無い、即ち人我兩忘、物我一體である。）○覩レ有者（人我の差別觀に立つて、どこまでも人を治めて行かうとする者を云ふ。）

賤而不レ可レ不レ任者物也。卑而不レ可レ不レ因者民也。匿而不レ可レ不レ爲者事也。麤

解すれば、天下の如き大物を有つ者は之を大物なりと思ふべからず。かゝる大物をも別に大物と思はずして始めて能く天下を自由に治めることが出來る。）

○是謂至貴（郭注に「夫れ衆と玄同なるものは衆より貴ばるゝを求むるに非ずして衆人貴ばざる能はず、斯れ至貴なり。」）

大人之教、若形之於影、聲之於響。有問而應之、盡其所懷、爲天下配。處乎無響、行乎無方。挈汝適復之撓撓、以遊無端。出入無旁、與日無始。頌論形軀、合乎大同。大同而無己。無己惡乎得有。覩有者昔之君子、覩無者天地之友。

訓讀 大人の教は、形の影に於ける、聲の響に於けるが若し。問ふこと有つて之に應じ、其の懷く所を盡くして、天下の配たり。無響に處り、無方に行く。汝を挈げて適き、復るも之くも撓撓として、以て無端に遊ぶ。出入旁無く、日と與に始め無し。形軀を頌論すれば、大同に合す。大同なれば己れ無し。己れ無くんば惡んぞ有を有とするを得ん。有を觀るものは昔の君子、無を觀る者は天地の友たり。

大意 天下を在宥する大人の境界を說く。

通釋 天下の至貴たる大人が教を天下に垂れるには、影の形に隨ひ、響の聲に應ずるが如く、問ふものありて始

有二獨有一之人、是之謂二至貴一。

訓讀 夫れ土を有つ者は大物を有てるなり。大物を有つ者は、以て物を物とすべからず。而して物とせざるが故に能く物を物とす。物を物とするものの物に非ざるを明かにせば、豈に獨り天下百姓を治むる而已ならんや。六合に出入し、九州に遊び、獨往獨來す。是を獨有と謂ふ。獨有の人、是を之れ至貴と謂ふ。

大意 天下を治むるには物我一如の境地に立つべきを說く。物我の相對を脫却するは天下を在宥する所以である。

通釋 一體國土を有つ者は人の有する所のものゝ中で最も大きな物を所有する者である。かゝる大物を有する者の見識は自ら高くなくてはならぬ。卽ち物と我とを對立せしめ、物と我とを區別して見るやうな低い見識であつてはならぬ。而して物我の對立を設けぬからして、物を物として自在に主宰することが出來る。さて物を物として自由に主宰する者の見地よりすれば物は最早や物ではないと云ふ道理を明かに領得したならば、獨り天下を治め得るのみならず、天地四方の六合に出入し全天下に悠遊し、獨立獨行、往來自由を得るに至るであらう。か樣な境界を絕對的存在と謂ふのである。さうして斯かる人をば至貴の人と謂ふのであつて、彼の己れの知を恃んで自ら衆人の上に出でやうとする者とは比較にならぬ。

語釋 有二大物一者、不レ可三以物レ物。而不レ物故能物レ物（上句の物物の意と下句の物物の意とは大に異なる、玩味すべし。然れども兪樾は不レ可二以物一を一句とし物而不レ物を一句となす。此の句讀に從つて

するの義を明かにするなり。

【通釋】世間の人〻は誰しも人が己と意見を同じくするを喜んで、人が己と意見を異にするを惡むものである。かく人が己と同意見なことを欲し、意見の異なるを欲しないのは、つまり衆人の上に出やうとする心があるからである。一體衆人の上に出やうなどと云ふ狹い心を持つて居る者は決して衆人の上に出ることは出來ぬ。されば衆人と競爭する如き心を絶つて、衆人に從ひ、衆人に同ずれば安寧である。然るに己れの聞く所は衆人の技能の多きに及ばざるに係らず、己の知能を頼みて人の國を治めんと欲する者は禹湯文武の如き古の明君主が其の明知仁義を以て天下を治めた利益方面のみを見て其の弊害を見ざるものであつて、かゝる人物は人の國を私してこぼれ幸を得んとするものである。萬一を僥倖して人の國を治めて、國を亡ぼすに至らぬものは幾何あるであらうか。かくの如くにして其の國を無事に保つたのは萬に一つも無く、國を亡ぼすものは萬と數へても餘る程であつて、唯の一つも成るものは無い。國を有つものが此に目ざめぬのは悲しいことである。

【語釋】曷常（曷は何なり、常一本甞に作る、カツテと訓む。）○因レ衆以寧、所レ聞不レ如二衆技衆一矣（所聞の下にて句となす說あるも採らず。所聞云云の一句は上を說明し下を起す。郭注に「吾一人の聞く所は衆技の多きに如かず、故に衆に因れば則ち寧し、若し衆に因らざれば則ち衆の千萬皆我が敵なり。」）

夫有レ土者有二大物一也。有二大物一者不レ可二以物一。物而不レ物故能物レ物。明二乎物レ物者之非一レ物也、豈獨治二天下一而已哉。出二入六合一、遊二乎九州一、獨往獨來。是謂二獨

世俗之人、皆喜人之同乎己、而惡人之異於己也。同於己而欲之。異於己而不欲者、以出乎衆爲心也。夫以出乎衆爲心者、曷常出乎衆哉。因衆以寧。所聞、不如衆技衆矣。而欲爲人之國者、此攬乎三王之利、而不見其患者也。此以人之國僥倖也。幾何僥倖而不喪人之國乎。其存人之國也無萬分之一、而喪人之國也、一不成而萬有餘喪矣。悲夫、有土者之不知也。

訓讀 世俗の人、皆、人の、己に同じきを喜んで、人の、己に異なるを惡む。己に同じければ之を欲し、己に異なれば欲せざるものは、衆に出づるを以て心と爲すなり。夫れ衆に出づるを以て心と爲すものは、曷ぞ常て衆に出でんや。衆に因れば以て寧し。聞く所衆技の衆に如かずして、而も人の國を爲めんと欲するものは、此れ三王の利を攬て、其の患を見ざるものなり。此れ人の國を以て僥倖するなり。幾何か僥倖して人の國を喪はざる。其の人の國を存するや、萬分の一なくして、人の國を喪ふや、一も成らずして、萬に餘喪あり。悲しい夫。土を有つ者の知らざることや。

大意 天下を治むるは己の知能に依るべきでなく衆人の心に因りて自然の治に任かすべきを說く。亦天下を在宥

問ふことも鬪ふこともなく、自然に任せて置けば、物は故より自ら生々化々するのである。」此の教を聽き終つて雲將は厚く御禮を申し上げて曰ふには「貴方樣には有難くも私に自然の妙德を御與へ下され、幽玄なる沈默を御示し下された。私は長い間自ら之を求めて居りましたが、今ヤツト體得することが出來ました。」そこで雲將は再拜稽首して起ち上がり、暇を告げて去つた。

語釋　意、毒哉（正義に「其の害を受くる己に深きを歎ず」とあり。）○僊僊乎（口義に「急去の貌」とある。一說には、輕擧の貌とあり。雲がフワリ〳〵と高く擧る樣。）○心養（口義に云ふ「言ふ心は、たゞ汝が此の心自ら養ひ得て便ち是なり。養心と曰はずして心養と曰ふ、當に子細に分別すべし。」）○汝徒處二無爲一、而物自化（徒は但なり、而は則に同じ。口義に云ふ「汝たゞ無爲の中に處らば物自化せんとなり。自化とは往來息まずして自生自化するの意なり。」）○墮二爾形體一、吐二爾聰明一、倫與レ物忘（上の二句は大宗師篇に墮二枝體一黜二聰明一とあるに同じ。吐字解しにくし、王引之によれば、吐當に咄に作るべし、咄は黜と同じと。兪樾によれば、吐當に杜に作るべし、其の聰明を杜塞するを言ふなりと。林希逸は字を改めずして曰ふ「從前許多の聰明をもつて皆吐去して之を留むるなかれ」と。陳壽昌は吐は猶ほ棄の如しと云ふ。必ずしも字を改むるを要せず今陳說に從ふ。成疏に「形體を墮つは身を忘るゝなり、聰明を吐くは心を忘るゝなり。身心兩ながら忘れ、物我雙らべ遣る。是れ心を養ふなり。」倫字の解、諸說紛々、皆採らず。倫は對なり、身と心と對をなす故に身心を謂つて倫となす。即ち我（身心）と物と相忘る故に倫與レ物忘と曰ふなり。）○大二同乎涬溟一（正義に「元氣滓然、眹なく兆なき、之を涬溟と謂ふ。是に大同せば、たゞ物を忘るゝのみならず、且つ己あるを知らず。」）○解レ心釋レ神（正義に「其の憧擾の心を解き、其の思慮の神を釋くなり。」又口義にも「其の有心の心を解き去り、其の有知の神を釋て去るなり。解心の心と心養の心とは自ら異なり、釋神の神と抱レ神以靜の神と自ら異なり。」要するに心知を捨て去ること。）○莫然無レ魂（林西仲曰く「莫然は坐忘の象、無魂は槁木死灰の如く全く動念なきを云ふ。」）○萬物云云（正義に「云は芸と通ず、衆なる貌。」諸說皆衆となす亦通ず。）○渾々沌々云云（口義に「無知無覺の貌、渾沌なれば、身を終るまで道を離れず。」）○若彼知レ之乃是離レ之（正義に「知識纔かに開く時は便ち已に道を離る、所謂七竅鑿たれて混沌死するなり。」）○降レ朕以レ德、示レ朕以レ默（口義に「降は我に賜ふと言はんが如し、默は不言なり、我に賜ふに自然の德を以てし、我に示すに不言の理を以てす。」）○躬身（躬自に同じ、ミヅカラと訓む。口義は躬を親と解し、自ら吾が身に於て求むと解す。）

天に遇ふこと難し。願はくば一言を聞かん。鴻蒙曰く、意、心養のみ。汝徒無爲に處れば、物自ら化せん。爾の形體を墮ち、爾の聰明を吐き、倫と物と忘るれば、涬溟に大同す。心を解き神を釋き、莫然として魂無くば、萬物云云として、各〻其の根に復る。各〻其の根に復りて知らず。渾渾沌沌、終身離れず。若し彼れ之を知らば、乃ち是れ之を離る。其の名を問ふこと無く、其の情を闚ふこと無かれ、物故より自ら生ずと。雲將曰く、天朕に降すに德を以てし、朕に示すに默を以てす。躬身ら之を求めて、乃ち今や得たりと。再拜稽首して起ち、辭して行けり。

大意 心知を斥けて自然に任かすべきを說く、皆在宥の義を明かにするなり。

通釋 雲將は未だ悟ることを得ずして問うて曰く「それならば結局私は何うしたらよいでしやうか。」鴻蒙曰く「あゝ、汝の不心得から自ら毒し人を害すること甚だし、下らぬことを尋ねて居ないで、サッサと歸るがよい。」雲將曰く「私は滅多に貴方樣に御目にかゝることが出來ぬ、何卒一言の御示敎を仰ぎたい。」そこで鴻蒙が敎へて曰ふには「あゝ、心の修養、それ以外に途はないのぢや。汝はたゞ無爲を立場とし作爲する所なくば、物はおのづから生々化々するのである。汝の肉體を忘れ聰明を捨て、身も心も外界の事物に對して超然として相忘るゝ時は、自然の一氣と冥合することが出來る。これが卽ち心養の道である。而して有爲の心知を解放し、寂然として妄念を動かすことなくば、萬物は盛に自生自化して各〻其の根元に復る。而も自然に打ち任せて作爲を用ひないから萬物其の根に復りながら自ら之を知らないのである。渾沌として無知覺だから終身道を離るゝことが無い。然るに若し知を用ひ念を動かす時は、直に道を離れて邪道に入る。されば心知を用ひて物の形を問ふたり實を闚づたりするな。

以て人を治めんとするより起る過である。」

語釋 有宋之野(有は發語の辭、有周、有唐等の有に同じ。) ○天忘レ我邪(天とは尊んで呼ぶの辭。前文に黄帝が廣成子を天と曰へるに同じ。) ○猖狂(正義に放佚の貌とあり。物に捉はれず自在なるを曰ふ。) ○鞅掌(釋文に自得して正しきなりとあり。諸解紛々、今釋文に從ふ。) ○不レ得レ已二於民一今則民之放也(口義に「言ふ心は之を謝絶せんと欲するも不可なり。放は效なり、民我を以て法となすなり。」つまり民に從はれて已むを得ず之を治めることになり、今では民の手本となつて居るとの意。)

雲將曰、然則吾奈何。鴻蒙曰、意、毒哉、僊僊乎歸矣。雲將曰、吾遇レ天難。願聞二一言一。鴻蒙曰、意、心養。汝徒處二無爲一而物自化。墮二爾形體一、吐二爾聰明一、倫與レ物忘、大同二乎涬溟一。解レ心釋レ神、莫然無レ魂、萬物云云、各復二其根一。各復二其根一而不レ知。渾渾沌沌、終身不レ離。若彼知レ之、乃是離レ之。無レ問二其名一、無レ闚二其情一、物故自生。雲將曰、天降レ朕以レ德、示レ朕以レ默。躬身求レ之、乃今也得。再拜稽首、起辭而行。

訓讀 雲將曰く、然らば則ち吾奈何せんと。鴻蒙曰く、意、毒なるかな、僊僊乎として歸れと。雲將曰く、吾れ

忘るゝや、天、朕を忘るゝやと。再拜稽首して鴻蒙に聞かんことを願ふ。鴻蒙曰く、浮遊して求むる所を知らず。猖狂して往く所を知らず。遊ぶ者は鞅掌して以て無妄を觀る。朕又何をか知らん。雲將曰く、朕は自ら以て猖狂となす。而るに民予が往く所に隨ふ。朕は民に已むを得ず。今や則ち民に放はる。願はくば一言を聞かんと。鴻蒙曰く、天下の經を亂し、物の情に逆へば、玄天成らず。獸の羣を解いて、鳥皆夜鳴き、災草木に及び、禍昆蟲に及ぶ。意、人を治むるの過なりと。

大意 有意を以て人を治むるの過を說く。

通釋 雲將は其の後、又三年にして東方に遊び、宋國の野を過ぎた時、ふと鴻蒙に遭つたので、大に喜び趨り進んで「貴方樣には私を御忘れになりましたか、覺えて御出でゝせう」と曰ひながら、再拜稽首して鴻蒙に敎を聞かんことを願つた。そこで鴻蒙が曰ふには「自分は悠遊自適、何の求むる所なく、放逸自得、どこと定めて往く所がない。かく遊ぶ者は自得自適、其の心自ら正しくして、眞實無妄なる至道を觀想するのであつて、是れ以外に自分は何事も知らないのである。」雲將曰く「私も自分自身としては放逸にして自得して居るつもりですが、何にしても民が私の往く所に隨つて來ますので、捨てゝも置けず止むを得ず民を治めることになり、今では民の手本となつて居る次第であります。何卒民を治める道について一言の御示敎を願いたい。」鴻蒙曰く「自然無爲の道に從はないで、天道の常經を亂し、萬物の眞性に逆へば、幽玄なる天の化育は行はれぬことになり、獸類は恐れて群を解き、鳥類は驚いて皆夜鳴をなし、災禍は草木や昆蟲にまで及ぶことになる。是れ全く自然に從はずして、區々の人智を

て六氣のモトを和合して萬物を生育せしめたいと思ひますが、それには如何致したら宜しいでせうか。」鴻蒙は相變らず股をたゝき小躍し、首をふりながら「自分は其の樣なことは一向知らないよ」と曰ふのみで、少しも敎へて吳れなかつた。雲將はそれ以上何んとも問ふことが出來なかつたので、其のまゝ去つた。

語釋　雲將（正義に雲に喩ふるなりとあり。つまりクモを擬人化していつたのである。）○扶搖之枝（釋文に「李云ふ、扶搖は神木なり、東海に生ず、一に云ふ、風なり。」）○鴻蒙（釋文に「司馬云ふ、自然の元氣なり、一に云ふ、海上の氣なり。」正義に天に喩ふとあり。）○倘然（成疏に驚き疑ふの貌とあり。雲將が鴻蒙の躍つて居る樣を見て、驚き且つ不思議に思つて止まつた樣子を形容した副詞。）○贄然（成疏に不動なりとあり。ジツトして動きもせぬ樣。）○吁（嗟嘆の聲なり。雲將は有爲の治を思ひ、鴻蒙は無爲の遊をなす、見る所同じからず、故に唯くあゝと嘆聲をもらせるなり。）○六氣（逍遙遊第一に見ゆ。）○吾弗知（成疏に「萬物みな自然に稟く、若し意を措きて之を治むれば、必ず造化に乖く、故に頭を掉りて答へず。）

又三年、東遊過有宋之野、而適遭鴻蒙。雲將大喜、行趨而進曰、天忘朕邪、天忘朕邪。再拜稽首、願聞於鴻蒙。鴻蒙曰、浮遊不知所求。猖狂不知所往。遊者鞅掌以觀無妄。朕又何知。雲將曰、朕也自以爲猖狂、而民隨予所往。朕也不得已於民。今則民之放也。願聞一言。鴻蒙曰、亂天下之經、逆物之情、玄天弗成。解獸之群、而鳥皆夜鳴、災及草木、禍及昆蟲。意、治人之過也。

訓讀　又三年、東遊して有宋の野を過ぎて、適〻鴻蒙に遭ふ。雲將大に喜び、行き趨つて進んで曰く、天、朕を

雀躍掉頭曰、吾弗知。吾弗知。雲將不得問。

【訓讀】雲將東遊して扶搖の枝を過ぎて、適〻鴻蒙に遭ふ。鴻蒙方將に髀を拊ち、雀躍して遊ぶ。雲將之を見て、倘然として止まり、贄然として立つ。曰く、叟は何人ぞや。叟何ぞ此を爲すと。鴻蒙髀を拊ち雀躍して輟まず。雲將に對へて曰く、遊ぶと。雲將曰く、朕願はくば問ふこと有らん。鴻蒙仰いで雲將を視て曰く、吁と。雲將曰く、天氣和せず、地氣鬱結し、六氣調はず、四時節あらず。今我れ願はくば六氣の精を合して、以て羣生を育せん、之を爲す奈何んと。鴻蒙髀を拊ち、雀躍して頭を掉つて曰く、吾れ知らず、吾れ知らずと。雲將問ふことを得ず。

【大意】此の章、亦意を用ひて治むることの不可を述ぶ、故に先づ弗知の二字を掲ぐ。

【通釋】雲將と名づくる雲の主將が東國に遊びて扶搖と云ふ神木の枝のあたりを通過したとき、たま〳〵天地間の元氣たる鴻蒙に出會つた。鴻蒙は丁度その時股を打つて小躍して遊んで居た。雲將は之を見て不思議に思つて踏み止まり身動きもせずに立つたまゝ口を發いて「御老人は一體どう云ふ方で、又何故そんなことをして居るのですか。」と尋ねて見ると、鴻蒙は之には一向おかまいなく矢張り股をたゝいて小躍りしてやまず、たゞ「自分はかうして遊んで居るのだ」と答へたのみであつた。そこで雲將が更に「私は是非とも御老體に御伺ひしたいことがあります」と曰へば、鴻蒙は初めて雲將を仰ぎ見て曰ふには「あゝ……。」そこで雲將が問うて曰ふやう「今や、天氣は和せず、地氣は結ぼれ、陰陽風雨晦明の六氣は調はず、春夏秋冬の四時は順を誤つて居りますから、私は何んとかし

無極の野とも云ふべき至道に悟入せしめやうと思ふ。かく云ふ吾こそはかの日月と光を同じうし、天地と等しく恒久である。そして物、我れに向ひ來るも無心であり、我れに背き去るも亦無心であつて、凡て物の向背去來は物それ自からに打ち任せて置く。されば人盡く死すとも我のみは常住獨存である哩。之と云ふのも自分に至道を體得悟了して居るからのことである。」

語釋 廣成子之謂レ天矣(宣注に「天と德を合するを言ふなり。」要するに讃嘆の辭。) ○彼其物(又云ふ「道なり。」物を萬物と見る說もあり。) ○得二吾道一者、上爲レ皇而下爲レ王(郭注に「皇王の稱は世の上下に隨ふのみ、其の通變の道を得て以て無窮に應ずるに於ては一なり。」成疏にも云ふ「自然の道を得ば、上み淳樸の世に逢ふ時は則ち羲農(伏羲、神農)となり、下も澆季の時に遇へば應さに湯武となるべし。皇王迹自ら夷險あり、道は則ち一なり。」) ○失二吾道一者、上見レ光、而下爲レ土(宣注に「生れては則ち光を見、死しては腐土となる。」) ○百昌皆生二於土一而反二於土一(又「百昌は物なり、人若し道を得ざれば物と何ぞ異ならんや。」) ○入二無窮之門一、以遊二無極之野一(上文の無窮、無測の字面を承く。至道を形容して云ふのみ。) ○當レ我緡乎、遠レ我昏乎。(下義に「緡昏皆無心の謂なり、言ふ心は物或は我に當りて來り、或は我に遠りて去るも、其の自然に任せて、我れ與かるなし。」)

雲將東遊、過二扶搖之枝一、而適遭二鴻蒙一。鴻蒙方將レ拊レ脾雀躍而遊。雲將見レ之、倘然止、贄然立。曰、叟何人邪。叟何爲レ此。鴻蒙拊レ脾雀躍不レ輟。對二雲將一曰、遊。雲將曰、朕願有レ問也。鴻蒙仰而視二雲將一曰、吁。雲將曰、天氣不レ和、地氣鬱結、六氣不レ調、四時不レ節。今我願合二六氣之精一、以育二群生一、爲レ之奈何。鴻蒙拊レ脾

無窮之門、以遊無極之野。吾與日月參光。吾與天地爲常。當我緡乎、遠我昏乎。人其盡死、而我獨存乎。

訓讀 黄帝再拜稽首して曰く、廣成子をば天と謂はんと。廣成子曰く、來れ、余女に語げん。彼の其の物は、窮り無し 而るに人皆以て終ると爲す。彼の其の物は測る無し、而るに人皆以て極まると爲す。吾が道を得る者は、上、皇と爲りて下、王と爲る。吾が道を失ふものは、上、光を見て、下、土と爲る。今夫れ百昌は、皆土に生じて土に反る。故に余將に女を去りて、無窮の門に入りて、以て無極の野に遊ばしめんとす。吾、日月と光を參へ、吾、天地と常を爲す。我に當たるも緡乎たり、我に遠ざかるも昏乎たり、人其れ盡く死して我れ獨り存するかと。

大意 至道を得たる者の境界を說く。

通釋 そこで黄帝は再拜稽首して曰ふには「廣成子よ、貴所は天と申してもよい程偉大な方である。」廣成子は更に告げて曰ふやうには「モツト近く寄れ、重ねて汝に語るであらう。そも〳〵かの道なるものは無窮である、然るに世人は之を終りありとして居る。又道は測るべからざるものである、然るに世人は之を極限ありとして居る。至道の無窮無極なることを體得した者は上にしては皇となり、下にしては王となつて天下の法となる。之を悟り得ざるものは上は日月の光を仰ぎ見てヤツト其の日〳〵を送り、死しては土と化するのみで、かの地上の百物が土から生じて土に反ると同樣で、其處に何の取りえもない。そんなことではならぬから吾はこれから汝を導いてかの無窮の門、

ち、外物に對する慾を閉ぢよ。勿論多知は失敗を招くが故に智を用ひてはならぬ。吾は汝を敎へて天地陰陽の本原即ち至道の精髓に悟入せしめやうと思ふ。元來天地は各〻司どる所あり、陰陽には各無盡の府庫ありて萬物自ら生成化育するのである。されば汝も天地陰陽自然の道に則りて愼んで汝の身を守る時は物も亦汝と共におのづから壯んに伸び行くであらう。吾は唯一の至道を守りて德の極致に安住するが故に吾れ身を修むること、こゝに千二百歲、而も吾が形體は未だ嘗て衰へないのである。」

【語釋】蹙然（驚き起つ貌を形容した副詞。）○善哉問乎（口義に「天下を治むと曰はずして身を治むと曰ふ故に以て善問と爲す。」正義にも「其の復た天下を治むるの見に非ざるを驚喜す」とあり。）○至道之精、窈々冥々、至道之極、昏々默々（口義に「窈々冥々は遠くして窮むべからざるなり。昏々默々は微にして見るべからざるなり。」正義に云ふ「道體是くの如し、老子に所謂窈兮たり冥兮たり、其の中精ありとは此の義と同じ。」）○無レ視無レ聽、抱レ神以靜（口義に「無レ視無レ聽とは耳目倶に忘るゝなり。神、心に存するを抱と曰ふ。」）○愼二汝內一、閉二汝外一（口義に「愼二汝內一とは其の心を動かさゞるなり。閉二汝外一とは外物をして以て吾が心を動すことを得せしめざるなり。」）○我爲レ女遂二於大明之上一矣、至二彼至陽之原一也云云（口義に「爲レ汝とは汝を敎ゆるなり。遂は從なり、猶ほ往の如し、入は窮なり、言ふ心は汝を敎へて極めて此に至らしめんと欲するなり。」大明は天、窈冥は地なり、此の四句は上の取二天地之精一、官二天地一の語より生じ來る。即ち天地陰陽の本原たる至道を體達するを謂ふ。）

黃帝再拜稽首曰、廣成子之謂レ天矣。廣成子曰、來、余語レ女。彼其物無レ窮、而人皆以爲レ終。彼其物無レ測、而人皆以爲レ極。得二吾道一者、上爲レ皇而下爲レ王。失二吾道一者、上見レ光而下爲レ土。今夫百昌皆生二於土一而反二於土一。故余將レ去レ女入二

將二自壯一。我守二其一一以處二其和一。故我修レ身、千二百歳矣。吾形未二嘗衰一。

訓讀 廣成子蹶然として起つて曰く、善いかな問や。來れ、吾、汝に至道を語げん。至道の精は窈窈冥冥、至道の極は昏昏默默。視ること無く、聽くこと無く、神を抱いて以て靜かにせば、形將に自ら正しからんとす。必らず靜、必らず淸、女の形を勞することなく、女の精を搖かすこと無くば、乃ち以て長生すべし。目見る所無く、耳聞く所無く、心知る所無くば、女の神將に形を守らんとす。形乃ち長生す。女の內を愼み、女の外を閉ぢよ。多知は敗を爲す。我れ女を爲へて大明の上に遂き、彼の至陽の原に至らしめん。女を爲へて窈冥の門に入り、彼の至陰の原に至らしめん。天地官有り、陰陽藏有り、愼んで女の身を守れ、物將に自ら壯ならんとす。我、其の一を守つて、以て其の和に處る。故に我、身を修むること千二百歳、吾が形未だ常て衰へずと。

大意 至道に合する道を說く。

通釋 廣成子は黃帝の問を聞き、蹶然と驚き起つて曰ふには「誠に善い質問だ。近く寄れ。これから汝に至道を語らう。そも〳〵至道の精髓は深遠にして容易に見極めることが出來ぬし、至道の極意は微妙にして容易に聽くことが出來ぬ。されば外物に對して耳目を使役することなく沈思默想、精神を落着けて安靜にして居る時は身も心と同じく自ら正しくなるであらう。そしてどこまでも汝の身體と精神を安靜に且つ淸淨に保ち、苦勞をかけず動搖せしめなかつたならば長生を保ち得るであらう。要するに視覺聽覺は言ふも更なり、一切の知覺を働かすことが無かつたならば、汝の精神は能く肉體を守護し、肉體は之によつて長生を得るであらう。されば汝は其の心を靜かに保

を問ふ。奈何にして以て長久たる可きと。

大意 通釋によつて明かなり。

通釋 そこで黄帝は引きさがつて御所に歸り、遂に決心をして、天下を捨て、平民となり、靜かな特別な家を作り、清潔なる白き茅を布き、俗事を絶ち、閑居すること三月の後、再び廣成子の許へ往つて、面會を請うた。その時廣成子は南枕で寢ころんで居た。黄帝は下座の方から膝摺しながら進み、再拜稽首して問うて曰く「貴方は至道に體達して居られると承ります。どうか此の一身を治める道を御伺ひ致します。どの樣にしたならば長久な壽命を保つことが出來るでしやうか。」

語釋 邀之（求なり、請なり。）○再拜（再或は載に作る、同じ。）

廣成子蹶然而起曰、善哉問乎。來、吾語女至道。至道之精、窈窈冥冥、至道之極、昏昏默默。無視無聽、抱神以靜、形將自正。必靜必清、無勞女形、無搖女精、乃可以長生。目無所見、耳無所聞、心無所知、女神將守形。形乃長生。愼女內、閉女外。多知爲敗。我爲女遂於大明之上矣、至彼至陽之原也。爲女入於窈冥之門矣、至彼至陰之原也。天地有官、陰陽有藏、愼守女身、物

【通釋】廣成子答へて曰く「汝の問はんと欲する所は物の本質卽ち至道の精であるのに、汝の治めんと欲する所は物の本質が散じたる殘骸に過ぎない。どうも汝は能く天下を治むることと至道の精髓とを混同して居るやうだが、それは根本的に間違つて居るよ。全體汝が餘計なことにも天下を治め出してからと云ふものは、天地萬物が皆其の自然を失つて、雲氣も未だ十分集らないのに雨が驟かに降り、草木も黃葉しない中に落ちて仕舞ひ、日月の光も段々と暗くなつて來た。それはツマリ汝が仁義の政治を行つて人心を搔き亂した惡影響である。要するに汝は小利口で、心の狹い男だから、トテモ至極の道などを話してやる資格がない。」

【語釋】物之質（陳壽昌曰く「猶ほ未だ散ぜざるの朴と云はんが如し。至道の精を指して言ふ。」）○物之殘（又曰く「猶ほ朴、散ずるの餘と云はんが如し、民人を養ひ群生を遂ぐる者を指して言ふ。」）○雲氣不待族而雨（釋文に司馬云ふ「族は聚なり、未だ聚らずして雨ふる、澤少なきを言ふ。」）○翦々（釋文に李云ふ「淺短の貌」と、或は云ふ「狹小の貌」と。成疏には「狹劣の貌」とあり。心が淺はかで、狹いこと。）

黃帝退、捐天下、築特室、席白茅、閒居三月、復往邀之、廣成子南首而臥。黃帝順下風、膝行而進、再拜稽首而問曰、聞吾子達於至道。敢問治身。奈何而可以長久。

【訓讀】黃帝退いて、天下を捐て、特室を築き、白茅を席き、閒居する三月、復往いて之を邀ふ。廣成子南首して臥す。黃帝下風に順ひ、膝行して進み、再拜稽首して問うて曰く、聞く吾子至道に達すと。敢て身を治むること

安心をして或る時廣成子と云ふ賢人が空同と云ふ山の上に居ることを聞き、わざ〳〵往いて御目にかゝり問うて曰ふには「貴方は至極の道に通達して居られると聞きましたが、どうか至道の精髓を御伺ひ致したい、私の考には天地の精氣を取りて五穀の生育を助け、それによつて人民を撫育したいと思ひます。又私は陰陽二氣を能く調和し、それによつて萬物の生を遂げしめたいと存じますが、それには如何樣にしたならば宜しいでせうか。」

語釋 廣成子（釋文には老子となす。成疏も老子の別號となすも要するに寓言の人。）○空同（釋文に司馬云ふ「北斗の下に當る山なり。」亦作者の寓言なり。）○官陰陽（官は德充符に官天地とあるに同じ、己れが屬官、下役のやうに自由に使ふこと。即ち陰陽二氣を能く調和せしめて相戾ることなからしむるなり。）

廣成子曰、而所欲問者、物之質也。而所欲官者、物之殘也。自而治天下、雲氣不待族而雨、草木不待黃而落、日月之光益以荒矣。而佞人之心翦翦者、又奚足以語至道。

訓讀 廣成子曰く、而の問はんと欲する所のものは、物の質なり。而の官せんと欲する所のものは、物の殘なり。而の天下を治めてより、雲氣族るを待たずして雨ふり、草木黃ばむを得たずして落ち、日月の光益〻以て荒めり。而は佞人の心翦翦たる者、又奚ぞ以て至道を語るに足らんと。

大意 天下を治むることの惡影響を述ぶ。

○殊死者相枕也（殊は斷なり、決なり、誅なり。罪に斷ぜられて死刑に處せられた者が相互に枕になり藉なるを謂ふ。）　○桁楊（釋文に崔云ふ「械の頸及び脛を夾む者皆桁楊と曰ふ。」下の桎梏の類なり。）　○椄槢（桁楊の楔、クサビなり。）　○鑿枘（鑿は桎梏の孔、アナなり枘は孔中に納るゝ栓なり。）　○嚆矢（響箭カブラヤ、先聲に喩ふ。）　○脊脊（成疏に相踐藉なはとあり。）　○嵁巖（嵁は平かならざる貌、けはしきこと。）　○離跂攘臂（陳壽昌曰く「離跂は足を企てること。攘臂は臂を擧げること。」攘臂の字面は人間世篇にも見ゆ。）　○意（噫に通ず、アヽ。）　○其無レ愧而不レ知レ恥也（陳壽昌曰く「もと儒墨の致す所なり、乃ち猶ほ揭々得意、其の間に於て匡救の術を修談す、恥なきに非ずや。」愧は人に對して愧ぢること、恥は内自ら恥ずること。仁義を提唱した爲めに世の亂れたるを思はず、其の責任を忘れ、反つて復た仁義を說いて民を桎梏の間に救はんとするは愧なきこと甚しとなり。）

黄帝立爲天子十九年、令行天下。聞廣成子在於空同之上、故往見之曰、我聞吾子達於至道。敢問至道之精。吾欲取天地之精、以佐五穀、以養民人。吾又欲官陰陽以遂群生。爲之奈何。

訓讀　黄帝立つて天子たること十九年、令天下に行はる。廣成子、空同の上に在りと聞き、故に往きて之を見て曰く、我聞く、吾子至道に達すと。敢て至道の精を問ふ。吾、天地の精を取りて、以て五穀を佐け、以て民人を養はんと欲す。吾又陰陽を官して、以て群生を遂げしめんと欲す。之を爲す奈何。

大意　前章に同じく、天下を治むるは天下を亂す所以を說く爲めに再び黄帝を引く。令行天下、是れ其の病根を顯はす。

通釋　昔、黄帝は天子の位に立つこと十九年にして、命令が思ふ通りに天下に行はれることになつたから、大に

を知らざることや、甚し。吾、未だ聖知の桁楊の椄槢たらざるや、仁義の桎梏の鑿枘たらざるやを知らず。焉ぞ曾史の桀跖の嚆矢たらざるを知らん。故に曰く、聖を絶ち知を棄てて、天下大に治まらんと。

大意　後世の大亂は仁義聖知を以て人心を亂すにあり、故に絶聖棄知、天下大治と說く。

通釋　そこで掻き亂された人心を取締まる爲めに斫鋸の如き刑具を制定せられ、墨繩で引いたやうに罪を正して罪人を殺し、椎鑿の如き刑具を以て肉刑を施したから、天下の人々は互に踐み合ひへし合ひして混亂するに至つた。その罪は言ふまでもなく仁義を以て人心を掻き亂したことに在るのだ。かくて賢者を避けて太山巖穴に隱れ、大國の君主は廟堂の上に慄れ憂ふることになり、更に近世に至つては死罪に處せられたものが相重なりあひ、クビカセ、アシカセをはめられた罪人が推し合ひ、刑戮せらるゝ者が相つゞくことになつた。然るに儒墨の輩は是等多數の罪人の間に於て、過去の失敗にも懲りず、臆面もなく足を爪立て大手を振つて仁義の道を說き廻つて居る。彼等はそれを人に對して愧ぢるでもなく、内自ら恥ぢることさへも知らないと云ふのは餘りひど過ぎるではないか。吾輩の考では聖知仁義が人心を亂した爲めに桁楊桎梏の必要が起つたのであるから、聖知は桁楊の楔であり、仁義は桎梏の桎に相當するものであると思ふ。又仁義が人心惡化の源である點から觀て曾參史鰌の如き君子は桀王盜跖の如き小人の先驅をなすものであると云へよう。故に吾輩は聖知を棄絕して天眞の本性に立ち復れば天下は大に治まると斷言するものである。

語釋　繩墨殺焉（壽陳昌曰く「繩墨は木の曲直を正す者、殺とは殫正して之を殺すを謂ふなり。」繩墨を法律と解するものあり、通ず。）　○椎鑿決焉（釋文に崔云ふ「肉刑もと椎鑿を用ふ。」決は裂なり。斷なり。肉を裂き骨を斷ずるなり。）

語釋 施及三王、而天下大駭矣（成疏に「施は延なり、黄帝より堯舜に逮んで聖迹滯り、物擾亂す、延いて三王に及んで驚駭更に甚だし。」陳壽昌曰く「大に駭くとは其の性に安んぜざるなり。」） ○爛漫（成疏に散亂なりとあり、） ○求竭（幾谷曰く「其の求むる所、窮竭して餘りなきを謂ふ。」） ○下有桀跖、上有曾史（陳壽昌曰く「上下は人品を以て言ふ。」成疏にも「桀跖は小人の行を行ふ下となす。曾史は君子の行を行ふ上となす。」）

於是乎釿鋸制焉、繩墨殺焉、椎鑿決焉。天下脊脊大亂。罪在攖人心。故賢者伏處太山嵁巖之下、而萬乘之君、憂慄乎廟堂之上。今世殊死者相枕也、桁楊者相推也、刑戮者相望也。而儒墨乃始離跂攘臂乎桎梏之閒。意甚矣哉、其無愧而不知恥也、甚矣。吾未知聖知之不為桁楊椄槢也、仁義之不為桎梏鑿枘也。焉知曾史之不為桀跖嚆矢也。故曰、絕聖棄知、而天下大治。

訓讀 是に於てか、釿鋸制し、繩墨殺し、椎鑿決す。天下脊脊として大に亂る。罪、人心を攖すに在り。故に賢者、太山嵁巖の下に伏處して、萬乘の君、廟堂の上に憂慄す。今の世、殊死の者相枕し、桁楊の者相推し、刑戮の者相望めり。而して儒墨乃ち始めて離跂として臂を桎梏の閒に攘ぐ。意甚しい哉、其の愧づること無くして、恥

施及三王而天下大駭矣。下有桀跖、上有曾史、而儒墨畢起。於是乎喜怒相疑、愚知相欺、善否相非、誕信相譏、而天下衰矣。大德不同、而性命爛漫矣。天下好知、而百姓求竭矣。

訓讀 施いて三王に及んで、天下大に駭く。下に桀跖有り、上に曾史ありて、儒墨畢く起る。是に於てか、喜怒相疑ひ、愚知相欺き、善否相非り、誕信相譏りて、天下衰ふ。大德、同ならずして性命爛漫す。天下知を好んで、百姓の求竭く。

大意 仁義の說一たび唱へられてより三代に至りて愈ゝ其の人心を擾亂するを說く。

通釋 一たび仁義の說が提唱されてより、降りて禹湯文武の時代になると天下は之が爲めに愈ゝ騷ぎ出し、下には桀王や盜跖が出で、上には曾參や史鰌が現るゝに至つて、儒者墨家の徒が群り起つた。是に於て彼等は己れに同じきものは喜び、己れに異なるものは怒つて、互に疑ひあひ、相手を愚とし己れを知として互に欺きあひ、己れの說を善とし相手の說を否として互に非議し、相手の言を誕とし己れの言を信として互に誹謗し、天下は治まるどころか益ゝ衰微するに至つた。かくて天下の人心は玄同の大德に一致せずして天眞の本性亦散亂することになり、人々益ゝ知を好み巧を弄びて民衆の欲求は一つも充されなくなつた。

形。愁其五藏以爲仁義。矜其血氣以規法度。然猶有不勝也。堯於是放讙兜於崇山、投三苗於三峗、流共工於幽都。此不勝天下也夫。

訓讀 昔者黃帝、始めて仁義を以て人の心を攖す。堯舜是に於てか股に胈無く、脛に毛無く、以て天下の形を養ふ。其の五藏を愁へしめて以て仁義を爲し、其の血氣に矜りて以て法度を規す。然れども猶ほ勝へざることあるなり。堯、是に於て讙兜を崇山に放ち、三苗を三峗に投じ、共工を幽都に流す。此れ、天下に勝へざるかな。

大意 黃帝始めて仁義を唱へて人心を亂し、堯舜其の跡を承けて益〻天下を亂すを說く。

通釋 昔、黃帝が始めて仁義を說き出して人の心を搔き亂してから、堯舜は其の後を承け、股の肉が落ち、脛の毛が無くなる程東奔西走して天下人民の形體を養ふに骨折り、其の五藏即ち精神を苦しめて仁義の政をなし、又其の血氣に任かせて法律制度を規定した。然しそれぐらゐでは仲々天下多數の人々を治め終ほせることは出來なかつた。そこで堯は讙兜と云ふ惡人を崇山に放逐し、三苗と云ふ種族を三峗といふ山に追ひ込み、共工氏を幽都に流した。して見ると堯を以てしても天下の人々を治め終ほせなかつたと見える哩。

語釋 股無胈、脛無毛（成疏に「胈は白肉なり、堯舜、黃帝の迹を行ひ、形瘦弊し、股瘦せ白肉なく、脛禿げて細毛なし。」） 〇此不勝天下也夫。（諸本皆夫字を下文に屬して讀む。也字と連ねて感嘆の詞となす。優なり。）

通釋 崔瞿と云ふものが老子に問うて曰く「先生の日頃の御說では天下を治めずに放任して置けとのことでありますが、どうも天下を捨てゝ置いて治めなかつたならば、人の心を善導することが出來ないではありませんか。」老子が答へて云はれるには「汝はよく氣をつけて人の心を搔き亂すやうなことをしてはならぬ。そも〳〵人の心と云ふものは抑へると銷沈し、オダテルと附け上り、且つ上下に動搖する際、其の自ら苦しむことは囚へられ殺されるやうである。又處女の如き柔弱な態度を以てよく壯士の如き剛强をやはらげ、角張つた心を削り圓める。又その熱中する時に燃ゆる火の如く、冷靜な時は凝結せる氷の如く、其の活動の敏速なることは一俯仰の間に二度も地球を廻るほどであり、又其の靜かなる時は淵の如く、動く時は高く中天に登るが如く、又强傲にして束縛することが容易でない。右の如き摩迦不思議なるものが人の心であるから、ウツカリ之を搔き亂すやうなことがあつてはならぬ。

語釋 臧人心（臧は美なり、淑なり。）○攖人心（攖は撓亂なり。かき亂すこと。）○排下而進上（陳壽昌曰く「排抑に遭ふ時に降下し、稍や進歩せしむれば亢上す。」）○上下囚殺（堯谷曰く「上下の間、自ら累らひ、自ら苦しむこと囚係せられて殺に就くが如し、故に上下囚殺すと曰ふ。」）○綽約（逍遙遊篇に見ゆ、綽約若處子。柔美、柔弱の意。）○廉劌彫琢（廉は稜なり、劌は利なり。圭角ありて鋭利なるを云ふ。彫琢は之を削りてまろめること。）○撫四海之外（口義に「一俯仰の間にして其の心の往來すること再び四海の外に臨むが如し、其の急疾なること此の如し。撫は臨撫なり。猶ほ行くこと一過すと言はんがごとし。」）○僨驕而不可係者（口義に「僨は憤と同じ、僨驕は亢戻の狀なり、係ぐべからずとは即ち制すべからざるなり。」陳壽昌曰く「僨驕は强傲なり、係は縛なり。」）

昔者黃帝始以仁義攖人之心。堯舜於是乎股無胈、脛無毛、以養天下之

こと。）○尸居而龍見（尸は逍遙遊篇の尸祝に同じ、カタシロ。カタシロは行儀よく何も爲すことなく坐し居るものなり、以て無爲無作に喩ふ。龍は神變不思議の靈物、以て偉大なる働に喩ふ。）○淵默而雷聲（淵は深淵なり、深淵の如く靜に沈默を守ること。雷聲とは不言の言、卽ち其の德化が自ら廣く行き渡ること。默とあるから雷聲と曰ふのみ。或は以て雷聲とは人を感動すとなし、或は名聲天下に轟くとなす。皆通ず。）○萬物炊累焉（炊累の二字、解に苦しむ。釋文には「炊或は吹に作る同じ。司馬云ふ、炊累は猶ほ動升の如きなり。」郭注には「遊塵の自動するが若し」とあり。卽ち炊は吹に同じ、累は微塵の累聚するなり、言ふ心は萬物は遊塵の自動するが如く各自作自息、他の力を要せずとなり。）

崔瞿問於老聃曰、不治天下、安臧人心。老聃曰、汝愼無攖人心。人心排下而進上、上下囚殺。淖約柔乎剛强、廉劌彫琢。其熱焦火、其寒凝氷、其疾俛仰之閒而再撫四海之外。其居也淵而靜、其動也縣而天。僨驕而不可係者、其惟人心乎。

訓讀 崔瞿、老聃に問うて曰く、天下を治めずんば、安ぞ人心を臧くせんと。老聃曰く、汝愼んで人心を攖すこと無かれ。人心は排すれば下り、進めば上り、上下囚殺す。淖約として剛强を柔かにし、廉劌して彫琢す。其の熱するや焦火、其の寒なるや凝氷、其の疾きこと俛仰の閒にして再び四海の外を撫す。其の居るや淵にして靜、其の動くや縣りて天、僨驕にして係ぐ可らざるものは、其れ唯ゝ人心か。

大意 仁義聖智の天下を亂す所以を說く伏線として、人の心の作用の不思議を說く。

故に身を以て、天下を爲むるよりも貴べば則ち以て天下を託すべし。身を以て天下を爲むるよりも愛すれば則ち以て天下を寄すべし。故に君子苟くも能く其の五藏を解くこと無く、其の聰明を擢くこと無ければ、尸居して龍見し、淵默して雷聲し、神動して天隨し、從容無爲にして萬物炊累す。吾、又何ぞ天下を治むるに暇あらんや。

【大意】從容無爲、天下を治むる無くんば、天下自ら治まる。

【通釋】されば君子たるものが已むを得ずして天下に君臨する時に作爲を用ふることなく自然に打任かして置くに越したことはない。無爲であつてこそ人は皆其の性命の天眞に安住することが出來る。從つて己れの身心をば天下を治むる以上に貴び愛する人であつてこそ、安心して天下を寄託することが出來る。されば君子たるものが、若し能く其の五臟を解放して內に蓄藏されたる仁義等を振りかざすことなく、わけて聰明の睿智を用ふることなくば、居ることカタシロの如く無爲なるも、龍の如き神變不思議の働が自然に現はれ、又深淵の如く沈默を守つて居ても、其の不言の言はよく雷聲の如く廣く天下に傳はり、又其の精神の動く所、自ら道に隨つて違ふことなく、從容無爲にして萬物は遊塵の自ら行動するが如く生々化々するであらう。されば何もわざ〳〵天下を治むる要はない。

【語釋】貴以レ身於レ爲ニ天下一、則可三以託ニ天下一。愛ニ以レ身於レ爲ニ天下一、則可三以寄ニ天下一（老子に見ゆ。陳壽昌曰く「言ふ心は身を以て至貴となし、更に天下を爲さむるよりも貴ぶなり。貴と愛とは義同じ。」即ち自己を以て重しとなし、外物を以て輕しとなし、如何なる物も以て己を動かすを得ざる人にして初めて天下を託すべしとなり。）○無レ解ニ其五藏一、無レ擢ニ其聰明一（成疏に「五藏は精靈の宅、聰明は耳目の用なり。若し五藏の情識を分辨し、聰明の用を顯擢せば、精神は內に奔馳し、耳目は外に竭喪せん。」呂注には「五藏を解くこと無くんば、散じて仁義に淫せず、聰明を擢くこと無くんば引いて聲色に麗せず。」仁義等と五藏との關係は駢拇篇にも見ゆ。要するに仁義の道、聰明の智を用ひぬ

語釋 說レ明邪、是淫ニ於色一也云云（說は悅。聰明を好めば聲色に惑溺す。說は駢拇第八に詳かなり。） ○說レ仁邪、是亂ニ於德一也云云（口義に「德と理とは自然なるものなり、仁と義とは心ありて以て之を爲す。故に以て德を亂して理に悖ると爲す。」） ○說レ禮邪、是相ニ於技一也（相は助なり。褒谷曰く「禮には坐跪周旋の節あり。故に技を助くと曰ふ。」） ○說レ樂邪、是相ニ於淫一也（褒谷曰く「淫とは關雎は樂んで淫せず（論語八佾）の淫と同じ。」樂しみ過ぎて其の正を失ふを曰ふ。） ○說レ聖邪、是相ニ於藝一也（又曰く「聖人、禮樂刑政の設、庠序學校の教あり、故に藝を助くと曰ふ」） ○說レ知邪、是相ニ於疵一也（成疏に「智計を愛すれば是非の疵病を益すなり。」物に對して是非の別を設けたがる病氣を助長すとなり。） ○之八者、存可也、亡可也（口義に「八者は明聰仁義禮樂聖知なり、其自然に安んずれば、八つの者ありと雖も、亦累を爲す能はず、故に存するも可、亡ぶるも可なりと曰ふ。」） ○之八者、乃始臠卷𤺥囊而亂ニ天下一也（又云ふ「其の自然に安んぜざれば、八つの者能く害をなす。臠卷は局束の貌、𤺥囊は多事の貌。」成疏に「臠卷は舒放ならざる貌、𤺥囊は息遽の貌」とあり、皆同じ。） ○豈直過也而去レ之邪（口義には「言ふ心は特だ獵涉一過、隨つて卽ち休止するのみならずとなり。」尊び方の一通りならざるを云ふ。） ○齋戒以言々々（口義に「鄭重して之を誦說するを謂ふ。跪坐して以て進むとは、恭を致して禮を盡して相傳授するを謂ふ。鼓歌して以て之を儛ふとは之を言ふて足らず、手舞足踏するを謂ふ。此れ皆一時の學者を譏る。」）

故ニ君子不レ得レ已而臨ニ莅天下一、莫レ若ニ無爲一。無爲也而後安ニ其性命之情一。故貴ニ以レ身於レ爲ニ天下一、則可ニ以託ニ天下一。愛ニ以レ身於レ爲ニ天下一、則可ニ以寄ニ天下一。故ニ君子苟能無レ解ニ其五藏一、無レ擢ニ其聰明一、尸居而龍見、淵默而雷聲、神動而天隨、從容無爲、而萬物炊累焉。吾又何暇レ治ニ天下一哉。

訓讀 故に君子已むを得ずして、天下に臨莅せば、無爲に若くは莫し。無爲なり、而る後其の性命の情に安んず。

へるや。豈に直に過つて之を去らんや。乃ち齋戒して以て之を言ひ、跪坐して以て之を進め、鼓歌して以て之を儛はす。吾れ是の若きを何んせんや。

大意　仁義禮智等の天下を亂すを述ぶ。

通釋　上にも云へる如く、政刑を事とするは人の天眞を害ふ所以である、然るに更に又、明聰仁義禮樂聖知の如きものを悦び好んだならば益々人を邪道に入らしむるものである。即ち若し明を悦ばんか、色に耽溺することになり、聽を悦ばんか、聲に耽溺することになり、仁を悦ばんか、天德を亂すことになり、義を悦べば、天理に悖ることになり、禮を悦べば技巧を助長することになり、樂を悦べば、淫聲を助長することになり、聖を悦べば藝能を助長することになり、智を悦べば、是非の差別病を助長することになる。天下に無爲自然の道が行はれて人が性命の天眞に安んじて居る時世には、此の八つの者の存否は全然問題にならぬが、天下に道行はれずして、人が性命の天眞に安んじ得ない時世になると、此の八つの者は勢に乘じて人心を拘束して伸びないやうにし、人をして多事多忙ならしめ、愈々以て天下を亂すことになる。然るに天下の人々は愚かにも此の八つの者を尊敬愛惜して措かないと謂ふのは惑へるも實に甚だしい次第である、それも此の八者に對して、一時立ち寄つて事が濟めば立ち去ると云つたやうな並大抵な尊敬風ならまだしもだが、中々そんな程度でなくつて、先づ齋戒、身を淸めて之を說き、跪いて丁寧に之を傳授し、果ては鳴物入りで以て之を宣傳して居ると云ふ有様で、どうもいやはや何んとも手がつけられぬ次第である。

り、鷙は猛戾なり。此の四字は不和の意を形容す。」）　○㑋々焉（成疏に「讙譁なり、競逐するの謂なり。」がん〳〵騷ぎ立てること。）

而且說明邪、是淫於色也。說聰邪、是亂於聲也。說仁邪、是亂於德也。說義邪、是悖於理也。說禮邪、是相於技也。說樂邪、是相於淫也。說聖邪、是相於藝也。說知邪、是相於疵也。天下將安其性命之情、之八者、存可也、亡可也。天下將不安其性命之情、之八者、乃始臠卷愴囊而亂天下也。而天下乃始尊之惜之。甚矣天下之惑也。豈直過也而去之邪。乃齋戒以言之。跪坐以進之、鼓歌以儛之。吾若是何哉。

訓讀　而して且つ明を說ぶか、是れ色に淫するなり。聰を說ぶか、是れ聲に淫するなり。仁を說ぶか、是れ德に亂るゝなり。義を說ぶか、是れ理に悖るなり。禮を說ぶか、是れ技を相くるなり。樂を說ぶか、是れ淫を相くるなり。聖を說ぶか、是れ藝を相くるなり。知を說ぶか、是れ疵を相くるなり。天下將に其の性命の情に安んぜんとすれば、之の八つの者、存するも可なり、亡きも可なり。天下將に其の性命の情に安んぜざらんとすれば、之の八つの者、乃ち始めて臠卷愴囊して、天下を亂す。而るに天下乃ち始めて之を尊び之を惜む。甚だしいかな、天下の惑

賞して足らず、天下を擧げて以て其の惡なるものを罰して給らず。故に天下の大も以て賞罰するに足らず。三代より以下は匈匈焉として終に賞罰を以て事と爲す。彼れ何ぞ其の性命の情に安んずるに暇あらんや。

大意 上を受けて政治刑罰が人の自然性を害するを說く。

通釋 凡て物事は度に過ぎると弊害がある。例へば人が大に喜ぶ時は陽氣に過ぎ、大に怒ると陰氣に片寄るものである。自然界に在つても陰陽の二氣が共に一方に片寄ると、春夏秋冬が順序通りには來ず、暑さ寒さも其の調子が狂ふことになる。之と同じことで人の身體でも喜怒の爲めに陰陽二氣が片寄ると之を傷ふことになる。然るに上に述べた如く古の聖王暴君は餘計なことをして民を樂ましめたり苦しましめたりしたので、民は其の喜怒、度を失ひ、居處すらも定らず、思慮も亂れて落着を得ず、何事をやり出しても途中で駄目になつて立派に完成することがない。是に於て天下は始めて不平の心を起し、不平の行を爲すことになり、遂に一方には桀や盜跖の如き惡人が現はれ、一方には曾參や史鰌の如き善人が出ることになつた。かくて世の中に善人や惡人が出だすと、天下は廣いから、其の善人を賞し惡人を罰しやうとしてもトテモ手が廻らないからして、如何に天下の大を以てしても賞罰を十分實行するに足らない。されば三代以還の政治家は賞だの罰だのとやかましく騷ぎ立てゝ之を大切な仕事とすることになつた。上爲政者が政刑を事とするやうではトテモ人民は性命の天眞に安んずることは出來ぬ。

語釋 人大喜邪、毗二於陽一云云（毗は釋文に司馬云ふ助なりと。口義には益なりとあり、皆同じ。人の喜怒は陰陽二氣を助長する意なり。兪樾は毗を傷と解す、說の詳なるは其の著諸子平議に就いて見よ。）○喜怒失レ位云云（郭注に「此れ皆堯桀の流、物をして喜怒はなはだ過ぎ以て斯の患を致さしむるなり。」）○喬詰卓鷙（陳壽昌曰く「喬詰とは意平かならざるなり、卓鷙とは行ひ平かならざるなり。」口義には「喬は高きを好みて過當なり、詰は議論して相詰責するなり、卓は孤立な

たもので、人の本性の靜けさを擾したものである。又夏の桀王が暴政を以て天下を治め、天下の民をしてクヨ〳〵と苦勞せしめたが、是れも亦餘計な心配をかけて、民の本性の樂しさを亂したものである。一體靜かでなく、樂しくない狀態は人の自然の持前に反する、自然性に背いたまゝで長つゞきするものは天下に其の例がない。

語釋 不恬（恬は靜なり。）○瘁瘁焉（釋文に病なり・憂なりとあり。奚谷曰く「悴敗の貌」奚谷に從へばヘト〳〵の意か。）

人大喜邪、毗於陽。大怒邪、毗於陰。陰陽幷毗、四時不至、寒暑之和不成。其反傷人之形乎。使人喜怒失位、居處無常、思慮不自得、中道不成章。於是乎天下始喬詰卓鷙、而後有桀跖曾史之行。故擧天下以賞其善者不足、擧天下以罰其惡者不給。故天下之大、不足以賞罰。自三代以下者、匈匈焉終以賞罰爲事。彼何暇安其性命之情哉。

訓讀 人、大に喜ばんか、陽を毗け。大に怒らんか、陰を毗く。陰陽幷び毗くれば、四時至らず、寒暑の和、成らず。其れ反つて人の形を傷らんか。人をして喜怒位を失ひ、居處常無く、思慮自得せず、中道にして章を成さゞらしむ。是に於てか、天下始めて喬詰卓鷙して而して後盜跖曾史の行あり。故に天下を擧げて以て其の善なるものを

は何の爲めかと云ふと、それは他から干渉して萬民の本性を亂すことを恐るゝからであり、又天下の人民を寬容なる態度を以て取扱ふのは、其の天性の美德を變ずるを恐れるからである。天下を在宥する結果として萬民が其の本性を亂さず、其の天德を變ずることなくば、最早や天下は治まりたるものなれば、何も其の上わざ／＼天下を治める必要はない。

語釋　在宥（成疏に「宥は寬なり、在は自在なり。」干渉せず自然に任せ置くことなり。）

昔堯之治天下也、使天下欣欣焉人樂其性。是不恬也。桀之治天下也、使天下瘁瘁焉人苦其性。是不愉也。夫不恬不愉、非德也。非德也而可長久者、天下無之。

訓讀　昔、堯の天下を治むるや、天下をして欣欣焉として、人〻其の性を樂しましむ。是れ恬ならざるなり。桀の天下を治むるや、天下をして瘁瘁焉として、人〻其の性を苦しましむ。是れ愉ならざるなり。夫れ恬ならず、愉ならざるは德に非ざるなり。德に非ずして長久なるべきものは、天下に之れ無し。

大意　天下を治むるの弊を述ぶ。

通釋　昔、堯が天下を治めた時、仁政を行つて萬民をしてイソ／＼と樂しましめた。然しこれは餘計なことをし

外篇　在宥第十一

叙説　天下を治むるには作爲を弄することなく、自然の道に任すべきを論ず。篇首に聞レ在ニ宥天下一、不レ聞レ治ニ天下一也とあるは全篇の眼目なり、在宥の意義は本文に就いて見よ。

聞レ在ニ宥天下一、不レ聞レ治ニ天下一也。在レ之也者、恐ニ天下之淫ニ其性一也。宥レ之也者、恐ニ天下之遷ニ其德一也。天下不レ淫ニ其性一、不レ遷ニ其德一、有下治ニ天下一者上哉。

訓讀　天下を在宥するを聞く、天下を治むるを聞かざるなり。之を在するは、天下の、其の性を淫せんことを恐るゝなり。之を宥するは、天下の、其の德を遷さんことを恐るゝなり。天下其の性を淫せず。其の德を遷さずんば、天下を治むる者あらんや。

大意　在宥の必要を說く。

通釋　天下を治むるに、寛容なる態度を以て自由に放任して置いて自然に治まつた話は聞いたが、手段方法を用ひて能く天下を治めた話は聞いたことがない。一體天下を治むるに作爲を用ひずして、其の自由に任かして置くの

得の知識を省察して之に一段の深みを與ふることに氣がつかぬ。又自分が非と認めたことは、どこまでも非であると思ひ込み、既に是なりと認めたことでも時に非なることあるに氣がつかず、偏に無反省な已見に執れて居る。かく人々知を好むの餘り内省を忘れ已見に執はれて居るが爲めに天下は大に亂れるのである。人心亂るゝが故に天地自然界までも其の餘怏を崇り、上は日月の明を亂して陰晴定まらず、下は山川の精を消して山崩洪水などが起り、中は四時の巡行をやぶりて寒暑時を得ず、果てはズル〳〵這ひ廻る蝸牛やトカケ、或は、又ヒラ〳〵輕く飛び廻る蜂や蝶などの如き蟲ケラに至るまで皆其の本性を失つて、色々變態奇形なものが生ずるやうになる。かくの如く智を好むことの天下を亂すは實に甚しいものである。以上は空談ではなく、夏殷周三代以後は皆斯様な有様である。即ちかの淳朴敦厚な民を捨てゝコセ〳〵した利口ものを悦び、かの無欲にして作爲せざる美俗を釋て、多言多辯の悪風を悦んで居るが、此の多言多辯こそ實に天下を亂すものである。

語釋 惴耎（口義に「微息して動く物、地に跗ける者なり、蝎蜓の類なり。」） ○肖翹（口義に「肖は小なり、翹は輕なり、飛物なり、蜂蝶の類。」） ○種種（釋文に「本云ふ、謹愨の貌、一に云ふ淳厚なり」と。淳朴篤實の貌。） ○役役（口義に「外を務めて作爲の貌。」コセツク様。） ○啍啍（林西仲曰く、多言なる者なりと。釋文に司馬を引きて少智の貌とあり、亦通ず。）

故天下皆知求其所不知、而莫知求其所已知者。皆知非其所不善、而莫知非其所已善者。是以大亂。故上悖日月之明、下爍山川之精、中墮四時之施、惴耎之蟲、肖翹之物、莫不失其性。甚矣夫好知之亂天下也。自三代以下者是已。舍夫種種之民、而悅夫役役之佞、釋夫恬淡無爲、而悅夫哼哼之意。哼哼已亂天下矣。

訓讀　故に天下皆其の知らざる所を求むるを知つて、其の已に知る所を求むるを知るもの莫し。皆其の善しとせざる所を非とするを知つて、其の已に善とする所を非とするを知る者莫し。是を以て大に亂る。故に上、日月の明を悖り、下、山川の精を爍し、中、四時の施を墮り、惴耎の蟲、肖翹の物、其の性を失はざる莫し。甚しいかな、夫の知を好むの天下を亂だすことや。三代より以下のものは是れのみ。夫の種種の民を舍てゝ、夫の役役の佞を悅び、夫の恬淡無爲を釋てゝ、夫の哼哼の意を悅ぶ。哼哼已に天下を亂だす。

大意　三代以下の亂は皆知を好み多言多辯を弄するに因ることを說く。

通釋　天下知を好むが故に人々は皆徒に外に向つて未知の事實を探求するに熱心であつて、心を内に潜めて既

訓讀 何を以て其の然るを知るや。夫れ弓弩、畢弋、機變の知多ければ、則ち鳥、上に亂る。鉤餌、罔罟、罾笱の知多ければ、則ち魚、水に亂る。削格、羅落、罝罘の知多ければ、則ち獸、澤に亂る。知詐、漸毒、頡滑、堅白、解垢、同異の變多ければ、則ち俗、辯に惑ふ。故に天下每每として大に亂るゝは、罪知を好むに在り。

大意 世亂の因は知を好むに在るを云ふ。

通釋 どうして然う云ふことがわかるかとならば、一體、弓や網やイグルミや仕掛道具類を使ふ智慧が多くなると鳥類は其の居に安んぜず空中に亂れ飛ぶことになり、ツリバリやヱサや大網小網、四つ手網やヤナを用ふる智慧が多くなると魚は水中に亂れることになり。網杙や鳥網や兎網を作る智慧が多くなると獸は澤中に亂れ走ることになる。人間社會でも之と同じことで、知術を以て欺き漸次社會に害毒を流したり、狡猾な堅白の論や詐僞的同異の辯の如き奇激な言論を弄することが多くなれば世人はそれに迷はされ、天下は眞暗となつて大に亂れて仕舞ふ、其の罪は外にない、唯人々知を好むに因るのである。

語釋 畢弋（成疏に「網小にして柄あり形畢星に似たり、故に名づけて畢となす」と又云ふ「繩を以て箭に繫けて射る、之を弋と謂ふ。」イグルミ。） ○機變（口義には「變詐なり」とあり、然れども下文に例する時は機械仕掛の道具類の意と解すべきか。） ○罾笱（罾は四ツ手網、笱は魚梁、ヤナ。） ○削格（口義に「今の木柵の如し」と、禽獸を遮へぎり止めて捕獲する仕掛なり。） ○羅落罝罘（釋文に爾雅を引いて云ふ「鳥罟を羅と謂ひ、兎罟を罝と謂ふ。」蓋し鳥網兎網の類を云ふか。） ○知詐漸毒頡滑堅白解垢同異之變（成疏に「智しば〱詐僞して毒害を物に漸漬するなり。頡滑は滑稽なり、亦姦黠なり、解垢は詐僞なり。夫れ滑稽堅白の智、譎詭同異の談はまことに眞理を虧くあり、世敎に益なし。」此の解によれば知詐漸毒にて一意、頡滑堅白にて一意、解垢同異にて一意なり、林西仲は釋文に依りて、頡滑は不正の語、解垢は詭曲の辭と解す。之によれば、頡滑、堅白、解垢、同異、各二字一意なり。姑らく成疏に從ふ。） ○每每（釋文に李云ふ、猶ほ昏々の如しと。郭慶藩云ふ、「每々は卽ち芒々なり」と。）

通釋 さて／＼かの至れる道徳の行れた上古の世を見るに、昔、容成氏より神農氏に至るまで十二代の帝王があつたが、此の時代に當りては、民は繩を結びて約束の證とし、粗末なる食物衣服に甘んじ、質朴なる風俗住居に安んじ、隣國は互に境土を接し、其の鷄犬の聲が互に聞える程、接近して居ても、人民は利を營む要なければ老いて死に至るまで互に往來しなかつた。かくの如き時代こそ至治の世と謂つてよいのだ。然るに今世の狀態は之と異なり、人々は首をさし延ばし足をつまだてゝ、某の所に賢者が居ると云つて、糧をつゝみて其の許に赴きて敎を受けるやうになつた。其の結果として內は其の親を見棄て、外は其の主君の仕事を投げやりにして、其の足跡は諸侯の國中に引きつゞき、千里の遠方まで縱横十文字に車の軌をつける始末となつた。かくなつたのも要する所、上の人々が知を好める過である。かく上の人々が知を好み、道を無視すれば、天下は必ず大亂となるのである。

語釋 子獨不レ知ニ至德之世一乎（突然、子の字を出す、解し難し。姑らく太古の世を詠嘆する語法と解す。即ち詩に若不レ見などゝあるに同じきか。）　○民結繩而用レ之（以下不相往來に至るまで皆老子に見ゆ。）

何ヲ以テ知ル二其ノ然ルヲ一邪。夫レ弓弩畢弋機變之知多ケレバ、則チ鳥亂ル二於上ニ一矣。鉤餌網罟罾笱之知多ケレバ、則チ魚亂ル二於水ニ一矣。削格羅落罝罘之知多ケレバ、則チ獸亂ル二於澤ニ一矣。知詐漸毒頡滑堅白解垢同異之變多ケレバ、則チ俗惑フ二於辯ニ一矣。故ニ天下每每トシテ大ニ亂ル、罪在リ二於好ムニ一レ知ヲ。

氏、軒轅氏、赫胥氏、尊盧氏、祝融氏、伏戲氏、神農氏。當是時也、民結繩而用之、甘其食、美其服、樂其俗、安其居、鄰國相望、鷄犬之音相聞、民至老死而不相往來。若此之時、則至治已。今遂至使民延頸擧踵、曰某所有賢者、贏糧而趨之。則內棄其親、而外去其主之事、足迹接諸侯之境、車軌結乎千里之外。則是上好知之過也。上誠好知而無道、則天下大亂矣。

訓讀 子獨り至德の世を知らずや。昔は容成氏、大庭氏、伯皇氏、中央氏、栗陸氏、驪畜氏、軒轅氏、赫胥氏、尊盧氏、祝融氏、伏戲氏、神農氏。是の時に當つてや、民結繩して之を用ひ、其の食を甘しとし、其の服を美とし、其の俗を樂み、其の居に安んず。鄰國相望み、鷄犬の音相聞えて、民老死に至るまで相往來せず。此の時の若きは則ち至治のみ。今遂に民をして頸を延べ踵を擧げ、某の處に賢者有りと曰ひて、糧を贏みて之に趣かしむるに至る。則ち內、其の親を棄てゝ、外其の主の事を去て、足迹諸侯の境に接し、車軌千里の外に結ぶ。則ち是れ上、知を好むの過なり。上誠に知を好みて道なければ、則ち天下大に亂る。

大意 古、至治にして今亂るゝは上、知を好むの過に因ることを說く。

巧は一見した所では拙きが如く見える」とあるのは、如上の消息を語つたものである。されば道德に就いて云つても之と同じことで、かの曾參や史鰌などの德行を除き去り、楊朱墨翟の辯口を封鉗し、聖賢仁義の說を廢棄して、始めて天下の人々が均しく天眞の德性に立ち歸るであらう。右の如くにして人々各々其の天眞の聰明知德を內に保つて居る時には、外物の爲めに其の心が燒き亡ぼされたり、累はされたりすることもなく、疑惑邪僻に陷ることもない。然るに彼の曾史楊墨師曠工倕離朱などは皆其の天德を內に保全するに務めずして徒らに技藝道德の如き外面的なことに天賦の能力を使役して、天下の人心を散亂する者であつて、眞の道德を修める法から云ふと無用の長物である。

語釋　故曰、魚不可云云(魚云云以下の二句は老子の語、故に故曰と冠す。)　○絶聖棄知(亦老子に出づ。)　○彼聖知者、天下之利器也(諸本皆聖知を聖人に作る林西仲獨り聖知に作る、優に似たり。)　○摘玉(擿は擲なり。)　○殫殘(盡く夫るなり。)　○民始可ニ與論議一(與に道を論ずべしとなり。)　○鑠ニ絶竽瑟一(鑠絶は焚いて棄つるなり。竽は笙に似たる樂器。瑟は琴の類。)　○人含ニ其聰一矣(口義に「人の耆、皆自然に合つて此等の造作なけん。」天眞の聰を保全するを謂ふ。)　○攦ニ工倕之指一(攦は折なり、工倕は堯の時の名工。)　○大巧若レ拙(亦老子に見ゆ、故に故日を冠す、)　○鉗(閉なり。)　○玄同(亦老子に見ゆ。解莊に云ふ「其性の自得は一任して、彼我巧拙を別たざるを謂ふ」と。無差別絶對の天眞に復歸するの意。)　○不レ鑠(燒けざるなり、口義には消散せざるなりとあり。)　○不レ累(口義には係累なきなりとあり。)　○外立ニ其德一(口義には「外物を重んじて、本心を失ふなり。」解莊には「皆心を外に役して、以て其の性を技藝行義の上に立つ。」)　○爚亂(爚は散なり。)　○法之所レ無レ用也(莊解に「道德を修むるの法に於て用なき者なり。」口義に「正法を以て之を言へば、皆用ふる所なし。」)

子獨リ不レ知ニ至德之世一ヲ乎。昔者ヘ容成氏、大庭氏、伯皇氏、中央氏、栗陸氏、驪畜

【通釋】古人の言にも「魚が深淵を脱して淺瀬に出づる時は、捕へられる虞があるから淵を離れてはならぬ、之と同じく國の利器は人に示す時は惡用せられる虞があるから之を示してはならぬ」とある。かの聖知なるものは天下の利器であるから、天下の人々に明示すべきものではない。故に聖人が誤つて示した所の聖知の法を絶棄すれば大盜は知巧の借り所がなくなつて自ら無くなるであらう。又今の人が大切にして居る珠玉の類を擲ち碎いて之を寶としなくば、之を盜み取つても利益にならぬから、泥棒が自然なくなるであらう。又今の人が證據として大事にして居る割符や印鑑を焚いたり割つたりして仕舞へば、反つて詐欺などがなくなつて民は純朴に立ち歸るであらう。又枡や衡の類を掊つたり折つたりして物の輕重や分量を計る方法を絶つて仕舞へば、民は反つて正直になつて利を爭はないやうになるであらう。かくの如く聖人の考案した文明の法を盡く亡くして仕舞つて、始めて天下の民は眞の道德について論議するやうになる。更に之を詳細に論ずるならば、かの六律六呂の如き音樂の調子を搔き亂し、竽や瑟の如き樂器を燒き拂ひ、其の上師曠の如き音樂の名人達の耳を塞いで仕舞へば、天下の人々は始めて天然の音樂に耳を傾け心を潛め、其の天眞の聰を保有して亡ふことがないであらう。又かの文采の美を滅し、五色の觀を散じ、且つ離朱の如き色彩に精通した人々の目を閉ぢて仕舞へば、天下の人々は、始めて人爲的色彩に眩惑することがなくなり、天然の美に目を樂しましむることになつて、天眞の明を內に保ち、傷けることがないであらう。又かの鉤繩規矩の如き曲直方圓を作る道具を毀ち棄て、且つ工倕の如き大工の名人達の指を折つて仕舞へば、天下の人々は始めて人爲的技巧に心を奪はれることなく、天眞の妙技を保有することになるであらう。古人の言に「大

之德始玄同矣。彼人含其明、則天下不鑠矣。人含其聰、則天下不累矣。人含其知、則天下不惑矣。人含其德、則天下不僻矣。彼曾史・楊墨・師曠・工倕・離朱者、皆外立其德、而以爚亂天下者也。法之所無用也。

訓讀 故に曰く、魚は淵を脱すべからず、國の利器は以て人に示すべからずと。彼の聖知なるものは天下の利器なり。天下に明にする所以に非ざるなり。故に聖を絶ち知を棄てば、大盜乃ち止まん。玉を擿ち珠を毀たば、小盜起らず。符を焚き璽を破りて、民朴鄙ならん。斗を掊き衡を折りて民爭はず。殫く天下の聖法を殘ひて民始めて與に論議すべし、六律を擢亂し、竽瑟を鑠絕し、瞽曠の耳を塞ぎて、天下始めて人其の聰を含まん。文章を滅し、五采を散じ。離朱の目に膠して、天下始めて人其の明を含まん。鉤繩を毀絕して、規矩を棄て、工倕の指を攦りて、天下始めて人其の巧あらん。故に曰く、大巧は拙の若しと。曾史の行を削り、楊墨の口を鉗し、仁義を攘棄して、天下の德始めて玄同ならん。彼の人、其の明を含まば、則ち天下鑠せられず。人其の聰を含まば、則ち天下累せられず。人其の知を含まば、則ち天下惑はず。人其の德を含まば、則ち天下僻まず。彼の曾史、楊墨、師曠、工倕、離朱は、皆外、其の德を立てゝ、以て天下を爚亂する者なり。法の用ふるなき所なり。

大意 老子の所謂絕聖棄知、民利百倍の意を述ぶ。

れば斯かる大泥棒の利益を追求し、諸侯と云ふ名號を稱へ、仁義並びに斗斛權衡符璽の利益を竊まんとする大姦になると、賞するに高い地位官職を以てしても、それぐらゐなことでは善事を勸むること能はず、又威すに重い刑罰を以てしても、惡事を禁ずること能はず、飽くまで國と共に聖人の法をも併せ竊まなくては承知をしない。斯く重ね〴〵盜跖の如き大泥棒に利益を與へ、大姦を禁ずることが出來ないやうにしたのは、正しく聖人の過である。

語釋 軒冕（軒は大夫の乘る車。冕は大夫の戴く冠。高位高官の意なり。）○斧鉞（大小のヲノ、こゝでは重い刑罰の意。）

故曰、魚不可脫於淵、國之利器不可以示人。彼聖知者、天下之利器也。非所以明天下也。故絕聖棄知、大盜乃止。擿玉毀珠、小盜不起。焚符破璽、而民朴鄙。掊斗折衡、而民不爭。殫殘天下之聖法、而民始可與論議。擢亂六律、鑠絕竽瑟、塞瞽曠之耳、而天下始人含其聰矣。滅文章、散五采、膠離朱之目、而天下始人含其明矣。毀絕鉤繩、而棄規矩、攦工倕之指、而天下始人有其巧矣。故曰、大巧若拙。削曾史之行、鉗楊墨之口、攘棄仁義、而天下

何以知其然邪。彼竊鉤者誅、竊國者爲諸侯。諸侯之門、而仁義存焉、則是非竊仁義聖知邪。故逐於大盜、揭諸侯、竊仁義并斗斛權衡符璽之利者、雖有軒冕之賞弗能勸、斧鉞之威弗能禁。此重利盜跖而使不可禁者、是乃聖人之過也。

訓讀 何を以て其の然るを知るや。彼の鉤を竊むものは誅せられ、國を竊むものは諸侯と爲る。諸侯の門にして仁義存すれば、則ち是れ仁義聖知を竊むに非ずや。故に大盜を逐ひ、諸侯を揭げ仁義を竊み、斗斛權衡符璽の利を并する者は軒冕の賞有りと雖も勸むること能はず、斧鉞の威も禁ずること能はざらん。此く重ねて盜跖を利して、禁ず可らざらしむる者は、是れ乃ち聖人の過なり。

大意 前節を受けて聖人の法が大盜の用に供せらるゝ理由を述ぶ。

通釋 何に由つて上の如きことが云へるかとならば、等しく泥棒なれども、彼の帶鉤ぐらゐを竊む小泥棒は直に捕へられて誅罰されるが、國を竊むやうな大泥棒になると、誅罰を受けぬばかりでなく、反つて出世して大名となつて仕舞ふ。既に大名となつて仕舞ふと、聖人の定めた仁義などを行つて一門の繁榮や永續を計るものである。して見ると大泥棒は國を竊むばかりでなく、聖人の定められた仁義聖知の法をも併せて竊むものではあるまいか。さ

凡て物には因果關係があつて川の水が竭きる時に谷間の水は自然に虚となり、高き丘が崩れて平らかになると深い淵が自ら埋つて來る、それと同じことで聖人が死んで仕舞へば大盜も智慧の借り所がなくなつて自然と起らず、天下は太平で何の事故も起らぬことになるであらう。されば智慧の源である聖人が死なゝくば大盜は決して止まないのであるから、いくら聖人が引き續いて出現して天下を治めやうとしても、それは益〻盜跖のやうな大泥棒を利するのみで、天下は愈〻亂れるばかりである。今其の例證を擧げて見るならば、先きにも云つたやうに彼の田成子の如き大盜になると、聖人が世の人々が互に相欺きて私利を計るを防がんが爲めに、大小の桝を造つて正確に物を量ることにすると、大盜は桝ぐるみに竊んで仕舞ふし、又秤を造つて物の目方を正確に稱らうとすれば、秤ぐるみに竊んで仕舞ふし、又割符や印璽を造つて證據の用とすれば、大盜は其の符印ぐるみに竊んで仕舞ふし、又仁義の道を立てゝ人民を正しくせんとすれば、仁義までも併せて竊んで、己が大盜を行ふ助けとして仕舞ふ。されば聖智の法は少しも國の爲めにならずして、徒に大盜の用に供するのみである。

語釋 脣竭則齒寒（左傳僖公五年には輔車相依、脣亡齒寒とあり。深い關係ある意に用ふ。） ○魯酒薄而邯鄲圍（釋文に「楚の宣王、諸侯を朝せしむ、魯の恭公後れて至る、而して酒薄し。宣王怒（中略）り、乃ち兵を發して齊と與に魯を攻む。梁の惠王常に趙を擊たんと欲するも楚の救を畏る、楚、魯を以て事と爲すが故に梁は邯鄲を圍むを得たり」。又許愼の淮南子注を引いて曰ふ「楚、諸侯を會す、魯趙俱に酒を楚王に獻ず。魯の酒薄くして、趙の酒厚し。楚の酒を主どる吏、酒を趙に求む、趙與へず、吏怒りて乃ち趙の厚酒を以て魯の薄酒に易へて之を奏す。楚王、趙の酒薄きを以ての故に邯鄲を圍む」。未だ孰れか是なるを知らず、姑らく二說を掲ぐ。） ○掊₌擊聖人₋（成疏に「掊は打なり。聖人は猶ほ聖迹の如し。夫れ聖人は智萬物に周ねく、道天下を濟ふ。今掊擊すと言ふものは亦仁義を毀斥し聖を絕ち智を棄つるの意を示すなり。」解莊に「脣齒魯趙の事を以て之を觀れば、則ち聖人の生ずるは大盜の備なり。盜は責むべく、聖人は責むべからずと雖も、聖人出づる無んば、則ち盜は聖知を竊んで以て其の私を濟すに因るなし、故に聖法を掊擊し、盜賊を縱舍するに非ずんば天下常に治まらず。」）

而竊之、爲之符璽以信之、則幷與符璽而竊之、爲之仁義以矯之、則幷與仁義而竊之。

訓讀 故に曰く、脣竭くれば則ち齒寒く、魯酒薄くして邯鄲圍まれ、聖人生まれて大盜起ると。聖人を掊擊し、盜賊を縱舍して天下始めて治まらん。夫れ川竭きて谷虛しく、丘夷にして淵實つ、聖人已に死せば則ち大盜起らず、天下平にして故なからん。聖人死せずんば大盜止まず。聖人を重ねて天下を治むと雖も、則ち是れ重ねて盜跖を利するなり。之が斗斛を爲りて以て之を量れば、則ち斗斛とを幷せて之を竊み、之が權衡を爲りて以て之を稱れば、則ち權衡とを幷せて之を竊み、之が符璽を爲りて以て之を信にすれば、則ち符璽とを幷せて之を竊み、之が仁義を爲りて以て之を矯むれば、則ち仁義とを幷せて之を竊む。

大意 聖智の法は國を利せざるのみならず、反つて大盜の用となるを說く。

通釋 古語に「脣が無くなると齒が自ら寒さを感じ、楚に獻じた魯の酒が薄かつた爲めに趙の都邯鄲が圍まれたと同じことで、聖人と大盜とは一見無關係のやうではあるが、自ら其の間に深い關係があつて、聖人が此の世に出た爲めに大盜が起つて來たのである」と謂はれて居る。つまり聖人出でゝ法を定めたので、之を惡用する大盜が起つたのである。されば聖人こそ國を亂し民を脅かす原因をなすものであるから、此の聖人の定めたる仁義法制を打ちくだき、賊を解放して無爲自然の狀態に立ち歸つたならば、此の亂れた天下は始めてよく治まることであらう。

するは仁である。以上の五者が備はらないで、能く大泥棒となり得た者は未だ嘗てない。」此の答から考へて見ると、善人も聖人の道たる聖知勇仁義を得なければ、其の身を立てることが出來ないし、盜跖の如き惡人も之を得なければ泥棒が出來ぬ。即ち聖人の道は善人にも惡人にも通じて必要なものである。處が此の世の中には善人が少くて、惡人が多いからして、折角の聖人の道も世の中を利することが少なくて、害する方が多い、誠に厄介なものである。

語釋 龍逢斬比干剖（既に人間世篇に見ゆ。剖は胸をさかれたこと。）○萇弘胣（萇弘は周の靈王の賢臣。胣は腸を刳ぐること。）○子胥靡（子胥は呉王夫差に仕へ讒を以て殺さる。靡は爛なり、屍を江になげ靡爛せしむるなり。）○四子之賢云云（陸樹芝曰く「按ずるに四子の死を引きて、聖人の道は賢者之を得るも以て其の身を保つに足らず、反つて以て其の身を害するを見はし、以て大盜之を假り、反つて以て其の惡を濟すに足るを跌起す。」）○妄意（郭慶藩曰く「意は度なり、億と同じ。妄とは據る所なくして億測するなり。」）○聖人之道（上の聖勇義知仁の五者を謂ふ。）

故曰、脣竭則齒寒、魯酒薄而邯鄲圍、聖人生而大盜起。掊擊聖人、縱舍盜賊、而天下始治矣。夫川竭而谷虛、丘夷而淵實、聖人已死、則大盜不起、天下平而無故矣。聖人不死、大盜不止。雖重聖人而治天下、則是重利盜跖也。爲之斗斛以量之、則幷與斗斛而竊之、爲之權衡以稱之、則幷與權衡

は胣られ、子胥は靡せらる。故に四子の賢にして身、戮を免れず。故に跖の徒、跖に問うて曰く、盜も亦、道有るかと。跖曰く、何くに適くとして道有ること無からんや。夫れ室中の藏を妄意するは聖なり。入るに先だつは勇なり。出づるに後るゝは義なり。可否を知るは知なり。分つこと均しきは仁なり。五者備らずして、能く大盜を成すものは、天下未だ之れあらざるなり。是に由つて之を觀れば、善人も聖人の道を得ざれば立たず。跖も聖人の道を得ざれば行はれず。天下の善人少く、不善人多ければ、則ち聖人の天下を利するや少くして、天下を害するや多し。

大意　聖智の道の天下に害多きを說く。

通釋　更に進んで論ぜんに、世間で謂ふ智者は大盜の爲めに盜品を積んでやるやうなものであり、又世間で謂ふ聖人なるものは大盜の爲めに番をしてやるやうなものでは無からうか。どうして然う云ふことが云へるかとならば、昔、夏の忠臣關龍逢は斬られ、殷の王子比干は胸を剖かれ、周の賢臣萇弘は腸をゑぐり出され、吳の忠臣伍子胥は屍を靡爛せられた。して見ると此の四人は賢人であつたから、反つてそれが身の仇となり、暴君の爲めに刑戮せられて仕舞つたのである。されば盜跖の乾兒が或る時盜跖に向つて「泥棒仲間にも道德と云ふものがありますか」と尋ねたらば、盜跖が曰ふには「どんな社會にだつて道德の無いと云ふことがあるものか。吾々泥棒社會に就いて云へば、人家の室中に藏むる財寶を推知してうまく中るのは聖であり、人家に侵入する際、人に先だちて入るは勇であり、引き揚げる際に人より後れて出づるのは義であり、仕事の可否を判別するは智であり、贓品を公平に分配

二世有齊國（釋文に「敬仲より莊子（成疏には莊公に作る）に至る九世、齊の政を知す。太公和より威王に至る三世、齊侯となる、故に十二世と云ふなり」とあり。兪樾に說あり、其の著諸子平議及び郭慶藩が集釋に就いて見よ。）

嘗試論之。世俗之所謂至知者、有不爲大盜積者乎。所謂至聖者、有不爲大盜守者乎。何以知其然邪。昔者龍逢斬、比干剖、萇弘胣、子胥靡。故四子之賢、而身不免乎戮。故跖之徒問於跖曰、盜亦有道乎。跖曰、何適而無有道邪。夫妄意室中之藏、聖也。入先、勇也。出後、義也。知可否、知也。分均、仁也。五者不備而能成大盜者、天下未之有也。由是觀之、善人不得聖人之道不立。跖不得聖人之道不行。天下之善人少不善人多、則聖人之利天下也少、而害天下也多。

訓讀 嘗試みに之を論ぜん。世俗の所謂至知なる者は、大盜の爲めに積まざるものあるか。所謂至聖なるものは、大盜の爲めに守らざるものあるか。何を以てか其の然るを知るや。昔者、龍逢は斬られ、比干は剖かれ、萇弘

ならば、昔、齊の國は村里が相つゞいて居て、隣村の鷄や犬の啼き聲が聞こえ合ふ程であり、又網を張つて魚鳥をとる山林沼澤や、鋤鍬で耕やす田畝などが方二千餘里の廣さに亘る程であつた。又其の國内をよく統一し、祖先の御廟と土地穀物の神を祀る御社を立て、市町村などを治める方法は常に聖人を手本として居たのであつた。然るに田成子と云ふ御家老が一旦謀叛をして齊君を弑して國を盜んで仕舞つたが、其の盜んだものはたゞ國ばかりではなく、齊の開國以來用ひられて來た聖人智者の定めた治國の法までも一緒に盜んで仕舞つた。故に田成子は簒奪者の名は受けたが、身は堯舜の如き聖王と同じ安全なる地位に居ることが出來た。即ち小國は敢て誹謗せず、大國は敢て誅伐せず、其の子孫は十二世の長きに亘りて齊の國王となつた。是れはツマリ齊の國と其の聖人智者の定めた治國の法とを一緒に竊んで、其の身を守つたからではなからうか。

語釋　鷄犬之音相聞（國富み民多きを形容する言。）　○罔罟（罔は網に同じ、罟は釋文に網の通名とあり。）　○耒耨所ㇾ刺（釋文に李云ふ耒は犂なり耨は鋤なりとあり。刺は鋤耨にて土を掘り耕すこと。）　○闔二四竟之内一（闔は合なり、竟は境に同じ。國内を統一すること。）　○邑屋州閭鄕曲（成疏に「司馬法に云ふ六尺を步となし、步百を畝となし、畝百を夫となし、夫三を屋となし、屋三を井となし、井四を邑となすと。又云ふ、五家を比となし、五比を閭となし、五閭を族となし、五族を黨となし、五黨を州となし、五州を鄕となすと。鄭玄云ふ、二十五家を閭となし、二千五百家を州となし、萬二千五百家を鄕となす。」とあり。）　○田成子云云（成疏に「田成子は齊の大夫陳恒なり、是れ敬仲七世の孫なり。初め敬仲、齊に適き菜を田に食む、故に改めて田氏となす。魯の哀公十四年陳恒、其の君を弑す、君は即ち簡公なり。安平より瑯邪に至るまでを割きて自ら封邑となす。恒の曾孫太公和に至り、齊の康公を海上に遷し、乃ち自ら立つて齊侯となる」とあり。）　○所ㇾ盜者豈獨其國邪。并ㇾ與二其聖知之法一而盜ㇾ之（郭注に「其の聖法を盜まざれば、乃ち以て其の國を取るなし。」成疏に「田恒盜む所、豈に唯だ齊國のみならんや。先づ聖智を盜む故に諸侯を得たり。是れ仁義の陳迹を知りて盜の本と爲すなり」とあり。即ち左傳によれば陳恒、民に穀物を貸すには私量とて普通のマスより故意に大きく作つたマスを用ひ、民から年貢を取る時には公量とて普通のマスを用ひ、務めて小惠を民に施して遂に國を奪ひ大欲を成せり。つまり、仁義の法を借りて其の盜賊の陰謀を成し遂げたのである。）　○十

其國邪。并與其聖知之法而盜之。故田成子有乎盜賊之名、而身處堯舜之安。小國不敢非、大國不敢誅、十二世有齊國。則是不乃竊齊國、并與其聖知之法、以守其盜賊之身乎。

訓讀 故に嘗試みに之を論ぜん。世俗の所謂知なるものは、大盜の爲めに積まざる者あるか。所謂聖なるものは、大盜の爲めに守らざるものあるか。何を以てか其の然るを知るや。昔は齊國鄰邑相望み、鷄犬の音相聞こえ、罔罟の布く所、耒耨の刺す所、方二千餘里、四竟の內を闔はせ、宗廟社稷を立て、邑屋、州閭、鄉曲を治むる所以のもの、曷ぞ嘗て聖人に法らざらんや。然り而して田成子一旦齊君を殺して其の國を盜む。盜む所のもの豈に獨り其の國のみならんや。其の聖知の法とを幷せて之を盜めり。故に田成子、盜賊の名あつて、身堯舜の安きに處れり。小國敢て非らず、大國敢へて誅せず、十二世齊國を有つ。則ち是れ、乃ち齊國を竊み、其の聖知の法とを幷せて、其の盜賊の身を守るにあらずや。

大意 聖人定むる所の仁義法制も稀世の姦雄起れば反つて利用せられて國を奪ふの具となるを說く。

通釋 更に進んで論じて見るならば、世間で謂ふ智者は大盜の爲めに盜品を積んでやるやうなものであり、又世間で謂ふ聖人なるものは大盜の爲めに番をしてやるやうなものでは無からうか。何して然う云ふことが云へるかと

【大意】小泥棒の用心が反つて大泥棒に利用せらるゝを說き、以てかの仁義が姦雄に利用せらるゝに喩ふ。

【通釋】今、竹行李をあけたり、嚢底を探つたり箱を開いたりする小泥棒の爲めに用心をしやうとすれば、必ず封じ紐で以て固く結び、錠前をしつかりおろして置けばよい。これが世間で謂ふ智者のやることだ。然しながら大泥棒がやつて來ると箱を負ひ行李を荷ひ嚢を擔いで持ち逃げして、反つて紐や錠前が固くなくて途中で開きはせぬかと氣使ふ位である。して見ると前きに謂へる智者なるものは、何んと大泥棒の爲めに盜品を積み重ねて便宜を計つてやつたやうなものではないか。

【語釋】胠篋（胠は開なり、篋は竹にて作れる箱なり。）○攝緘縢（緘は結束なり、縢は共にヒモなり。）○扃鐍（扃は管鑰、鐍は鎖なり。錠前のこと。）○鄕（鄕は嚮に同じ、サキニと讀す。）○積（積聚して之が助を爲すなり。）

故嘗試論之。世俗所謂知者、有不爲大盜積者乎。所謂聖者、有不爲大盜守者乎。何以知其然邪。昔者齊國隣邑相望、鷄犬之音相聞、罔罟之所布、耒耨之所刺、方二千餘里。闔四竟之內、所以立宗廟社稷、治邑屋州閭鄕曲者、曷嘗不法聖人哉。然而田成子一旦殺齊君而盜其國。所盜者豈獨

外篇 胠篋第十

叙説 此の篇は前二篇の意を承けて、聖人定むる所の仁義法制は姦雄簒奪の具に供せらるゝのみならず、天下好智の弊風を醸生し大亂を惹起するの因たるを痛論し、更にかく仁義は國に害あるが故に、聖を絶ち智を棄つる時は、大盜乃ち止むと說きて、老子の思想を祖述して居る。

將爲胠篋探囊發匱之盜而爲守備、則必攝緘縢固扃鐍。此世俗之所謂知也。然而巨盜至、則負匱揭篋擔囊而趨。唯恐緘縢扃鐍之不固也。然則鄕之所謂知者、不乃爲大盜積者也。

訓讀 將に篋を胠き、囊を探り、匱を發くの盜の爲めに守備を爲さんとすれば、則ち必ず緘縢を攝び、扃鐍を固くす。此れ世俗の所謂知なり。然れども巨盜至れば、則ち匱を負ひ、篋を揭げ、囊を擔うて趨る。唯ゞ緘縢扃鐍の固からざるを恐るゝなり。然らば則ち鄕の所謂知なるものは、乃ち大盜の爲めに積むものならずや。

【通釋】そも〳〵太古赫胥氏と云ふ王樣の時代には、民は無知無欲であつたから家に居ても別にこれぞと云つて仕事をなすでもなく、家を出かけても特に何處へ行かねばならぬと云ふこともなく、食物を口にふくみ、腹つゞみを打つて樂み遊ぶと云ふ呑氣さであつて、民の能力はこれ位で十分であつた。然るに後世聖人の出づるに及んで禮儀を行ふ爲めに足腰を屈折して天下の人々の威儀動作を正し、仁義をば足をつまだて高く揭げて天下の人心を慰めてから民は始めて一生懸命になつて知を好み利益を目標として競爭し止ることが出來なくなつた。是れは何んと云つても聖人の過である。

【語釋】赫胥氏（成疏に上古の帝王なりとあり。）○縣跂（足をつまだて高く揭ぐること卽ち標榜高唱することなり。或は云ふ、仁義を高く揭げて民をして企て慕はしむと。）

來て、或は逃げ出さうとしてコツソリ横目で睨んだり、扼を曲げたり、御者に頭を突きつけたり、コツソリ銜を吐き出したり、轡を偸み嚙みしたりするやうになる。さればもと〳〵單純な馬の智慧位で以てそんなズルイことをするやうになつたのは、全く伯樂と云ふ男が人爲を加へた罪である。

語釋 相靡（郭慶藩曰く、「靡は古讀んで摩の若し、故に摩と通ず」と。相摩擦する意。）○相踶（踶は蹈なり、けること。）○衡扼（衡は轅端の横木、扼は軛なり、衡と馬頸とを結びつける道具。）○月題（成疏に馬の額上、額に當りて、形月に似たる者なりとあり。）○介倪（因に介倪は睥睨の如しと、横目をつかつて、スキを窺ふこと。或は怒り視るとあり。）○闉扼（闉は曲なり、クビキを曲げること。然し口義には頸を曲げて扼扭するなり、銜絡を受けざるの意なりとあり、つまり銜などをつけられることを頸を曲げて拒ぐことなり、之によれば扼は軛の意ではない。）○鷙曼（鷙は抵なり、曼は突なり。人に抵抗し突き當ること。）○馬之知而能至盜者（成疏本には能を態に作り、態とは姦詐なりと爲す。）

夫レ赫胥氏之時、民居リテ不レ知レ所レ爲ス、行クニ不レ知レ所レ之ク。含哺シテ而熙シミ、鼓腹シテ而遊ブ。民ノ能已ム二此ニ一矣。及レ至ルニ二聖人ニ一、屈二折シテ禮樂ヲ一以テ匡シ二天下之形ヲ一、縣二跂シテ仁義ヲ一以テ慰ム二天下之心ヲ一。而シテ民乃チ始メテ踶跂シテ好ミレ知ヲ、爭ウテ歸シテ二於利ニ一、不レ可カラレ止ム也。此レ亦聖人之過也。

訓讀 夫れ赫胥氏の時、民居りて爲す所を知らず、行くに之く所を知らず。含哺して熙しみ、鼓腹して遊ぶ。民の能此に已む。聖人に至るに及んで、禮樂に屈折して、以て天下の形を匡し、仁義を縣跂して以て天下の心を慰む。而して民乃ち始めて踶跂して知を好み、爭うて利に歸して、止む可らず。此れ亦聖人の過なり。

大意 至德の世には民含哺鼓腹して遊びしに後世聖人出づるに及んで民知を好み利を爭ふに至りしを說く。

語釋　蹩躠（成疏には力を用ふるの貌とあり。口義には勉强して行ふの貌とあり、皆同じ。）　○踶跂（釋文に李云ふ「蹩躠踶跂は皆心を用ひて仁義を爲すの貌。」）　○澶漫摘僻（成疏に澶漫は是れ從逸の心、摘僻は是れ曲拳の行とあり。口義には澶漫は流蕩の意、摘僻は手足を用ふるの貌とあり、大意皆同じ。僻一本擗に作る、是なり。）　○純樸（成疏に、全木なりとあり。其のまゝで完全なあら木のこと。）　○犧樽（祭に用ふる酒器、釋文に司馬云ふ、犧牛の象を畫きて以て樽を飾ると。王肅云ふ、刻して牛頭を爲すと。之によれば牛頭の象をした酒器の意。）　○珪璋（釋文に鋭上方下を珪と曰ひ、半珪を璋と曰ふとあり。上がとがり下が四角な形をした玉を珪と曰ひ、珪をタテに二分した玉を璋と曰ふなり。）○五色五聲六律（皆駢拇篇に出づ。）

夫馬陸居則食草飲水、喜則交頸相靡、怒則分背相踶。馬知已此矣。夫加之以衡扼、齊之以月題、而馬知介倪、闉扼、鷙曼、詭銜、竊轡。故馬之知而能至盜者、伯樂之罪也。

訓讀　夫れ馬は陸居すれば、則ち草を食ひ水を飲み、喜べば則ち頸を交へて相靡し、怒れば則ち背を分ちて相踶む。馬の知は此に已むのみ。夫れ之に加ふるに衡扼を以てし、之を齊ふるに月題を以てして、馬の知、介倪、闉扼、鷙曼、詭銜竊轡す。故に馬の知にして能く盜に至るものは、伯樂の罪なり。

大意　再び馬の喩をあげて人爲を加ふることの非なるを說く。

通釋　そもそも馬は野原に居て自由な時は腹がすけば草を食ひ喉がかわけば水を飲み、喜ぶ時は頭を交へて互に摩り合ひ、怒る時は背中を向けて互に蹴り合ふのであつて、馬の本來の智慧はたゞ此れだけである。然るに人が之に衡や扼を結びつけ、之を責め整へる爲に額に月題とて月形の道具を著けるやうになつて、始めて馬の智慧が出て

【訓讀】聖人に至るに及んで、蹩躠して仁を爲し、踶跂して義を爲して天下始めて疑ふ。澶漫して樂を爲し、摘僻して禮を爲して、天下始めて分る。故に純樸殘はずんば、孰れか犧尊を爲らん。白玉毀たずんば、孰れか珪璋を爲らん。道徳廢れずんば、安んぞ仁義を取らん。性情離れずんば、安んぞ禮樂を用ひん。五色亂れずんば、孰れか文采を爲らん。五聲亂れずんば、孰れか六律に應ぜん。夫れ樸を殘ひて以て器を爲りしは、工匠の罪なり。道徳を毀ちて以て仁義を爲りしは、聖人の過なり。

【大意】後の聖人が自然に從はずして仁義禮樂の如き不自然なものを作り出したことの過なるを說く。

【通釋】然るに聖人と云ふ者が世に出づるに及んで、自然のまゝにせずして勉強力行して仁義を行つてから天下の人心は漸く惑ひ始めた。又聖人が淫蕩な心から音樂を作り出し、手足を曲げて禮儀を定めてから天下の人々は漸く其の自然性より遠かり始めた。されば天下の物は皆もと區々たる小智を恃みて小細工を施すから自然の良性を破壞して仕舞ふのである、例へば其のまゝで完全な荒木を削つたり刻んだりしなくば犧樽とて御祭に使ふ酒器を爲ることは出來ぬ、又自然のまゝの白玉を切つたり磨いたりしなくば珪璋の如き玉を爲ることは出來ぬ。之と同じことで至上の道徳が廢棄せられなくば、仁義などを取り出しやうがない、又自然の純情から離れ遠ざからなくば禮樂などを用ひやうがない、又自然の五色が亂されなくば間色を用ひた種々な色模樣を爲ることが出來ぬし、自然の五聲が亂されなくば六律に應ずる色々の聲音を爲ることが出來ぬ。さて自然の荒木を殘つて犧樽の如き道具を爲つたのは工匠の罪であり、至上の道徳を廢毀して仁義を爲り出したのは聖人の過である。

來るし、カサ、ギの巣も木を登つて行つてのぞいても逃げることがない。さて至德の世には今云ふ通り人は禽獸と同居し、萬物と群居して居る程であるから、人の間に君子小人の區別などあらう筈がない。一樣に無知、無欲で、天德を失ふことがない。是れを素樸とてもとの荒木のまゝと謂ふのである。さて仁義禮樂の加工を加へることなくもとのあら木のまゝであつてこそ民は其の自然性を失ふことなく各〻其の生を遂げることが出來る。

語釋　常性（口義に「人の生ずるや、各其の生を業とす。或は耕し或は織る。皆是れ自然の天機なり、故に常性と曰ふ。常性とは即ち前篇に所謂常然なり」と。）○同德（又「之を天に得る者にして同じく然るなり」と。自然の持前、普遍性。）○一而不黨（又「黨は偏なり、治なり、純一にして偏倚する所なし」と。）○天放（自然的解放、自由の意、齊物論の天行、天鈞、天遊と同じく皆自然の樂を形容す。）○其行塡々、其視顚々（陸壽昌曰く「塡々は遲重、顚々は專一なり」と。口義には塡々は滿足の貌、顚々は直視の貌とある。今前註に從ふ。）○萬物群生（萬物は主として人を指すか。）○同與禽獸居（莊子因本は同を兩に作り、上の是故を故其にする。）○同乎無知云云（此の四句は同乎無知、同乎無欲、其德不離、是謂素樸に同じ　其の德とは無知無欲等の天德を指す。）

及至聖人、蹩躠爲仁、踶跂爲義、而天下始疑矣。澶漫爲樂、摘僻爲禮、而天下始分矣。故純樸不殘、孰爲犧樽。白玉不毀、孰爲珪璋。道德不廢、安取仁義。性情不離、安用禮樂。五色不亂、孰爲文采。五聲不亂、孰應六律。夫殘樸以爲器、工匠之罪也。毀道德以爲仁義、聖人之過也。

謂ふ。一にして黨せず、命じて天放と曰ふ。故に至德の世は、其の行くや塡塡たり、其の視るや顚顚たり。是の時に當りてや、山に蹊隧なく、澤に舟梁なし。萬物群生して、其の鄕に連屬す。禽獸は群を成し、草木は遂げ長ず。是の故に禽獸は係羈して遊ぶべく、烏鵲の巢は攀援して闚ふべし。夫れ至德の世は、同じく禽獸と居り、族りて萬物と並ぶ。惡にか君子小人を知らんや。同乎として無知、其の德離れず、同乎として無欲、是を素樸と謂ふ。素樸にして民の性、得たり。

大意 善く天下を治むるには物の自然性に從ふべきを說く。

通釋 吾輩の考では善く天下を治める者は上の例に見ゆるやうな人爲的方法を用ふるものではない。なぜならばかの民にはもと〳〵民としての自然の持前と云ふものがある。其の持前に從つて織つては衣、耕しては食ふのである。是れは凡ての民の爲す所であるから同德卽ち普遍性と謂ふのである。又民は自然のまゝでは純一中正であつて一方に片倚て居ると云ふことがない。之を自然的自由と曰ふのである。是れが民の固有の情態であるから至上道德の行はるゝ世の中卽ち仁義禮樂の如き人爲的方法を以て民の自然性を傷けない世の中に於ては、民は其の行くに當りてもユツクリとして居ていそぎあわてると云ふことなく、物を見るにも心が外に散ると云ふことがない。此の時に當つては民は各々自給自足、他鄕と交通したり移住する必要がないから、山には小徑や切通し無く、澤には舟や橋もなく、凡てが平穩無事であるから、人々は群り多く生じて各々其の鄕土に軒を並べて安住するはもとより禽獸も群り住み草木までも長成すると云ふ有樣である。されば禽獸も人を畏れないから之を紐で繫いで遊ぶことが出

規矩や鉤繩に中るやうな形になるのを望むものではあるまい。之も馬の例と同じことで陶器屋や大工によつて粘土や樹木が本然の性を損はれるわけである。然るにまあ世間の人達は之を稱揚して、伯樂は馬の調練が巧であり、陶匠は埴木を取扱ふことが上手であると云つて居る。是れは丁度天下を治むる者が仁義禮樂などを以て民の本性を矯めて置きながら之を上手に人を治めることだと謂つて居るのと同じ過である。

話釋　此亦治天下者之過也（李昌曰く「言ふ心は猶ほ天下を治むる者、民の性を矯め、而して反つて之を善く人を治むと謂ふ如きなり。」）

吾意善治天下者不然。彼民有常性。織而衣、耕而食。是謂同德。一而不黨、命曰天放。故至德之世、其行塡塡、其視顚顚。當是時也、山無蹊隧、澤無舟梁。萬物群生、連屬其鄉。禽獸成群、草木遂長。是故禽獸可係羈而遊、烏鵲之巢可攀援而闚。夫至德之世、同與禽獸居、族與萬物並。惡乎知君子小人哉。同乎無知、其德不離、同乎無欲、是謂素樸。素樸而民性得矣。

訓讀　吾れ意ふに、善く天下を治むるものは然らず、彼の民には常性あり。織りて衣、耕して食ふ。是を同德と

〇伯樂（釋文に「伯樂は姓は孫、名は陽、善く馬を馭す。石氏の星經に云ふ、伯樂は天星の名、主として天馬を典どる。孫陽馭を善くす、故に以て名となす。」）　〇燒レ之（毛を燒くなり。一說には鐵を熔して之を印すとあり。）　〇剔レ之（其の毛を剪ること。）　〇刻レ之（其の蹄を削ること。）　〇雒レ之（烙に同じ、蹄を燒いて形を整へること。或は烙印と解し、或は又雒絡に通ず、其の首をしばると解す。）　〇羈馽（羈は首をしばる紐、馽は兩足をしばる紐。）　〇編レ之以二皁棧一（編は列なり、皁はウマヤ、棧は地の濕氣をふせぐ爲めの木床、即ち木棚のこと。）　〇橛飾（馬啣を橛と曰ひ、馬纓を飾と曰ふ。）

陶者曰、我善治レ埴。圓者中レ規、方者中レ矩。匠人曰、我善治レ木。曲者中レ鉤、直者應レ繩。夫埴木之性、豈欲レ中二規矩鉤繩一哉。然且世世稱レ之曰、伯樂善治レ馬、而陶匠善治二埴木一。此亦治二天下一者之過也。

訓讀　陶者曰く、我は善く埴を治む。圓なる者は規に中り、方なる者は矩に中ると。匠人曰く、我は善く木を治む。曲なる者は鉤に中り、直なる者は繩に應ずと。夫れ埴木の性は、豈に規矩鉤繩に中るを欲せんや。然るに且世世之を稱して曰く、伯樂は善く馬を治め、而して陶匠は善く埴木を治むと。是れ亦天下を治むる者の過なり。

大意　更に埴木の喩をあげて仁義禮樂を以て天下を治むるの過なるを說く。

通釋　陶器屋は「自分は埴を取扱ふことが上手で、圓い器を作ればブンマワシに中り、四角い器を作ればサシガネに中る」と曰ひ、大工は「自分は木を取扱ふことが上手であつて、曲つたものを作れば曲り金に中り、眞直なものを作れば墨繩に應ず」と曰つて得意がつて居るが、一體粘土や樹木には各々自然の持ち前があるので、決して

之を剔り、之を刻し、之を雒し、之を連ぬるに羈䩭を以てし、之を編むに皁棧を以てす。馬の死するもの、十に二三あり。之を饑し、之を渴し、之を馳せ、之を驟せ、之を整へ之を齊へ、前に橛飾の患ありて、後に鞭筴の威あり。而して馬の死するもの已に半に過ぐ。

大意 馬は野生の時は長命、人爲を加ふるに至つて夭死するを說く。

通釋 馬は自然に與へられた蹄で以て冷たい霜や雪を踐むことが出來、又生れながらにして惠まれた毛で以て風や寒さをふせぐことが出來る。そして腹が減れば草をかみ、口が渴けば水を飲み、又時々足をあげてはね廻る。これが馬の天から受けた本性である。從つて馬に取つては人が禮儀を行ふ高臺や立派な座敷があつても何の用もない。然るに伯樂が世に出るに及んで、我こそ善く馬を仕入れるものであると曰つて、是れまで馬が自然的に風寒をふせいで居た毛を燒いたりそつたりし、或は又霜雪を踐んで居た蹄を削つたり燒いたりし、或は又幾匹となく首をしばり、足をくゝりつけて廐に列べるに至つて、馬は其の眞性を害せられて死ぬものが急に多くなり十匹のうちで二三匹も斃れることになつた。然るに伯樂はまだ之に懲りず、訓練の必要から或は時に飢やしたり渴かしたり、或は又ひどく馳せたり、少しくはせたりし、又色々自然のクセを矯めて一樣にし、前にはうるさいクツワや飾組などを着け、後からはムチを以て威すと云ふ有樣で、馬は益々其の本性を失つて、其の死するのが半數にも達することになつた。

語釋 翹レ足而陸（翹は擧なり、陸は踛に通ず、跳なり。）○義臺路寢（義は儀に同じ、禮儀を行ふ高臺なり。路は大なり、正なり、表座敷のこと。陳壽昌曰く「義臺は儀門の臺なり、儀臺は前に在り、路寢は後に在り、蓋し宮、室の全を總

外篇馬蹄第九

叙説 馬が野生のまゝの時は長生きしたが人が手をかけて仕入れる様になつてから早死するものが多くなつたことから説き出して、かの聖人が仁義禮樂を以て天下を治める様になつてから人民が知を好み利を爭ふ様になつたことを説く。卽ち仁義を以て天下を治むるは聖人の過である。人は須らく自然に歸るべきを説く。

馬、蹄可以踐霜雪、毛可以禦風寒。齕草飲水、翹足而陸、此馬之眞性也。雖有義臺路寢、無所用之。及至伯樂曰、我善治馬。燒之、剔之、刻之、雒之、連之以羈馽、編之以皁棧。馬之死者十二三矣。饑之、渴之、馳之、驟之、整之、齊之、前有橛飾之患、而後有鞭筴之威。而馬之死者已過半矣。

訓讀 馬は、蹄以て霜雪を踐むべく、毛以て風寒を禦ぐべし。草を齕み、水を飲み、足を翹げて陸る、此れ馬の眞性なり。義臺路寢有りと雖も、之を用ふる所なし。伯樂に至るに及んで曰く、吾れ善く馬を治むと、之を燒き、

眞の道德卽ち至正の道に對して及ばざるを愧づるが故に、不自然な仁義の道を敢へて固守しやうとせず、又名利などの外物に耽溺せるやうな行をしやうとせず、專ら自然に從つて行きたいと思ふ。

語釋 余愧二乎道德一（陳壽昌曰く「性命の實、自然なる者なり」と、上に云ふ所の至正の道なり。）　○上不三敢爲二仁義之操一云々（又曰く、「仁義と淫僻とは美惡を分つと雖も、同じく駢枝に屬す。故に均しく道を求むる者の敢て爲す所に非ざるなり。」）

人之適而不自適其適者也。夫適人之適而不自適其適、雖盜跖與伯夷、是同爲淫僻也。余愧乎道德。是以上不敢爲仁義之操、而下不敢爲淫僻之行也。

訓讀 夫れ自ら見ずして彼を見、自ら得ずして彼を得る者は、是れ人の得を得として、自ら其の得を得とせざる者なり、人の適を適として自ら其の適を適とせざる者なり。夫れ人の適を適として、自ら其の適を適とせざれば、盜跖と伯夷と雖も、是れ同じく淫僻たるなり。余は道德に愧づ。是を以て上、敢て仁義の操を爲さず、而して下、敢て淫僻の行を爲さざるなり。

大意 直に上文を承け、仁義は終に自得自適の道に非ざることを述べて此の篇を結ぶ。

通釋 一體物を自然のまゝに見ないで、人爲的の分類（例へば色に就いて云へば五色）に拘泥して見ようとしたり、自然の本性に從はずして人爲的の仁義などに強ひて從はんとするのは是れ人が勝手に作り出したものに（五色、仁義等）盲從するのであつて、己が自然性に從ふを得ざるものであり、又是れは他人の滿足して居る所に一時的の滿足を見出すものであつて、本當に自己の本心に滿足するものでない。かゝる有樣であつたならば、たとひ盜跖の如き小人と伯夷の如き君子との差異があつても、是れ同じく外物に耽溺するものであつて何の相違もない。吾人は

て、いかに仁義の道に精通すること彼の曾參史鰌の樣であつても、それは決して吾が善とする所ではない。其の他のことに就いても之と同樣であつて、例へば物の味に就いて考へて見ても、味に對する人の自然性を屈して强ひて人爲的に分類された五味に捕はれたならば、味に精通すること兪兒ほどであつても、吾が輩は本當の味に精通したものとは思はない。又聲についても同樣で、聲に對する人の本性を曲げて人爲的に分類された五聲に捕はれたならば、いかに聲に精通すること師曠の如くであつても、吾が輩はそれを以て聰とは認めない。又色に就いても同樣で、自己の本性を曲げて人爲の五色に捕はれたならば、物の色采に精通すること、離朱の樣であつても吾人はそれを以て明とは認めない。そも〱吾人の所謂善とは仁義の謂ではなく、自然の持ちまへを全うすることであり、換言すれば純なる自然性に從つて行くことに外ならぬのである。吾人の所謂聰とはかの人爲的の五聲などを聞き分けるを謂ふに非ずして、自然のまゝに聲を聞くを謂ふのである。又吾人の所謂明とはかの人爲的分類になる五色などを能く見分けるのを謂ふのでなくて、自然に從つて色を見るを謂ふのに外ならない。

語釋　屬其性（宣穎曰く、「强ひて合するなり」と。即ち自然性を曲げて强ひて人爲的なる仁義に合せしむこと。）　○五味（甘辛酸鹹苦。）　○兪兒（古の善く味を識れる人、或は黄帝の時の人と謂ふ。）　○任其性命之情（口義に曰く、「自然に順ふなり」と。）　○吾所謂聰者、非謂其聞彼也、自聞而已矣云云（成疏に云ふ「夫れ離（朱）を希ひ曠（師）を慕ひ、彼を見他を聞き、心神馳せ奔り、耳目竭喪す、此れ乃ち愚闇、豈に聰明と曰はんや。耳の聞く所を聽き、目の見る所を視、分を保ち眞に任かし、外に蕩せざる者は即ち聰明なり。」）

夫不自見而見彼、不自得而得彼者、是得人之得、而不自得其得者也、適

性乎五色、雖通如離朱、非吾所謂明也。吾所謂臧、非仁義之謂也。臧於其德而已矣。吾所謂臧者、非所謂仁義之謂也。任其性命之情而已矣。吾所謂聰者、非謂其聞彼也、自聞而已矣。吾所謂明者、非謂其見彼也。自見而已矣。

訓讀 且つ夫れ其の性を仁義に屬する者は、通ずること曾史の如しと雖も、吾が所謂臧に非ざるなり。其の性を五味に屬すれば、通ずること兪兒の如しと雖も、吾が所謂臧に非ざるなり。其の性を五聲に屬すれば、通ずること師曠の如しと雖も、吾が所謂聰に非ざるなり。其の性を五色に屬すれば、通ずること離朱の如しと雖も、吾が所謂明に非ざるなり。吾が所謂臧とは、仁義の謂に非ざるなり。其の德に臧きのみ。吾が所謂臧きは所謂仁義の謂に非ざるなり。其の性命の情に任するのみ。吾が所謂聰は、其の彼を聞くを謂ふに非ざるなり、自ら聞くのみ。吾が所謂明は其の彼を見るを謂ふに非ざるなり、自ら見るのみ。

大意 以上說き來りしことを總括し、作者の所見を述ぶ。

通釋 さて以上說き來りし所を總括するに、人の本性を屈して强ひて仁義に從はしめるのは不自然なことであつ

小人。其殉一也、則有君子焉、有小人焉。若其殘生損性、則盜跖亦伯夷已。又惡取君子小人於其閒哉。

【訓讀】天下盡く殉なり。彼れ其の殉ずる所、仁義なれば、則ち俗に之を君子と謂ふ。其の殉ずる所、貨財なれば、則ち俗に之を小人と謂ふ。其の殉は一なり、則ち君子あり、小人あり。其の生を殘ひ、性を損するが若きは、則ち盜跖も亦伯夷のみ。又惡んぞ君子小人を其の閒に取らんや。

【大意】上に同じく、至正の道より觀れば君子と小人と同じきを說く。

【通釋】今天下の人々は皆名利等の外物の爲に其の身を亡ぼして顧みない。たゞ其の中で仁義の爲に身を亡ぼせば、世間では之を君子とほめ、貨財の爲めに身を亡ぼせば、之を小人と云つて輕蔑する。然しながら其の何れにせよ身を亡ぼすと云ふことは同樣であるのに、世間では君子小人の別を立てゝ居る。然し其の生命を殘ひ、天性を損ふ點から云へば盜跖も伯夷と同じことで、決して其の閒に君子小人の別を立てることは出來ぬ。

【語釋】其殉一也、則有君子云々（甃谷曰く、「則は而と通ず」と。其の物は一なるに君子小人の別を設くるはいはれ無しとの意。）

且夫屬其性乎仁義者、雖通如曾史、非吾所謂臧也。屬其性於五味、雖通如俞兒、非吾所謂臧也。屬其性乎五聲、雖通如師曠、非吾所謂聰也。屬其

訓讀 臧と穀と二人相與に羊を牧うて、倶に其の羊を亡ふ。臧に奚をか事とせしと問へば、則ち筴を挾んで書を讀めりと。穀に奚をか事とせしと問へば、則ち博塞して以て遊べりと。二人の者、事業同じからざれども、其の羊を亡ふに於ては均しきなり。伯夷は名に首陽の下に死し、盜跖は利に東陵の上に死す。二人の者、死する所同じからざれども、其の生を殘ひ、性を傷るに於ては均しきなり。奚んぞ必ずしも伯夷の是にして、盜跖の非ならんや。

大意 上の意を承け臧穀の喩を設けて、至正の道より觀れば伯夷も盜跖も是非異なるなきをとく。

通釋 或る家の下男と下女とが何れも羊を牧畜して居たが、二人とも其の畜へる羊をにがして仕舞つたので、下男に向つて何をして居たかと聞けば、本を讀んで居たと答へ、下女の方に聞くと双六をして遊んで居たと云ふ。此の二人のして居たことは善惡同じでないが羊をにがしたと云ふ點は同じことである。それと同じ道理で、かの聖人の伯夷は名譽の爲に首陽山の下で餓死し、大泥棒の盜跖は利欲の爲に東陵山の上で死んだ。この二人の死んだ理由は同じでないが、其の生命をそこなひ、本然の性を傷けたと云ふ點に於ては同樣で、至正の道から觀れば何も伯夷の方が善くて、盜跖の方が惡いと限つたことはない。

語釋 臧與穀（宣穎曰く、「男にして婢に壻たるを臧と曰ひ、女にして奴に婦たるを穀と曰ふ。穀或は穀に作る」と。此の說釋文にも見えたり。或は穀は良家の子なりと。） ○挾レ筴（筴は策に同じ。口義に卷を執るなりと。） ○博塞（口義に「瓊を投ずるを博と曰ひ、瓊を投ぜざるを塞と曰ふ。瓊は猶ほ今の骰子（サイ）の如し、塞は簺と同じ。」） ○東陵（山の名。釋文に李云ふ。泰山を謂ふと。）

天下盡殉也。彼其所レ殉仁義也、則俗謂二之君子一。其所レ殉貨財也、則俗謂二之

有様になつた。して見れば仁義と云ふ大きな惑の爲めに其の本性を取り易へて折角の天良を失つたのであるまいか。されば試みに之を評論せんに、夏殷周の三代以下天下の人々は皆物を以て其の本性を易へるやうになつた。例へば人民は利益の爲めに一身を犠牲に供し、士君子は名譽の爲めに一身を捨てゝ顧みず、一國の大夫は一國の爲めに身を犠牲にし、聖賢の人は天下の爲めに一身を抛ちて顧みなくなつた。されば此等の連中は事業も同じからず名聲も一様ではないが、外物の爲めに其の本性を傷ひ折角の身體を犠牲にした點に於ては皆同一である。要するに仁義を以て天良を亡ふのも、名利の爲めに本性を傷けるのもつまりは同じことである。

語釋　自虞氏招仁義以撓天下也（虞氏は舜のこと。招は掲なり。撓は亂なり。）　○小人則以身殉利（小人は小人物と見てもよし、然し下の士大夫に對して一般人と解する是なり。殉とは釋文に崔云ふ、「身を殺して之に從ふを云ふ」と。副墨に「小人は則ち身を以て利に殉ふ、是れ利を以て性を易ふる也」とあり。以下之に傚へ。）

臧與穀二人相與牧羊、而倶亡其羊。問臧奚事、則挾策讀書。問穀奚事、則博塞以遊。二人者事業不同、其於亡羊均也。伯夷死名於首陽之下、盜跖死利於東陵之上。二人者所死不同、其於殘生傷性均也。奚必伯夷之是而盜跖之非乎。

莫不奔命於仁義。是非以仁義易其性與。故嘗試論之。自三代以下者、天下莫不以物易其性矣。小人則以身殉利、士則以身殉名、大夫則以身殉家、聖人則以身殉天下。故此數子者、事業不同、名聲異號、其於傷性以身爲殉一也。

訓讀 夫れ小惑は方を易へ、大惑は性を易ふ。何を以て其の然るを知るや。虞氏、仁義を招げて天下を撓せしより、天下、仁義に奔命せざる莫し。是れ仁義を以て其の性を易ふるに非ずや。故に嘗試みに之を論ぜん。三代より以下は天下物を以て其の性を易へざる莫し。小人は則ち身を以て利に殉じ、士は則ち身を以て名に殉じ、大夫は則ち身を以て家に殉じ、聖人は則ち身を以て天下に殉ず。故に此の數子の者は事業同じからず。名聲號を異にすれども、其の性を傷り、身を以て殉と爲すに於ては一なり。

大意 仁義は人を大に惑はせ、遂に其の本性を傷け一身を失はしむるに至るものなるを說く。

通釋 さて上に天下の人を惑はすと云つたが、此の惑にも種々あつて小なる惑は方角を取り違へる位であるが大きな惑になると自分の良い生れつきまで取り易へて仕舞ふことになる。何を以てさう云ふことを知るかとならば、かの虞舜が仁義の道を標榜して天下の人心を惑亂してから、天下の人々は仁義の爲めに奔走しない者はないと云ふ

下の人心を慰めようとするのは、即ち是れ人の自然の本性を失ふものである。世の中の凡ての物には本然の性と云ふものがある。本然の性とは曲がるものは曲り金を以て曲げなくても自然に曲り、直きものは墨縄を以て直くしなくても自然に直く、圓きものはコンパスを用ひなくても自ら圓く、方形なものは三角定木を用ひなくても自ら四角く、クツツクものは膠や漆を用ひなくても自然と附着するし、固く締るものは縄や紐を用ひなくても自然と引き締まるやうに、凡て人爲を用ひなくても自然に具合よく出來て居るのを謂ふのである。されば世の中のものは皆ゾク〳〵と生じながらどうして生じたやら自ら知らない、又同樣に各自其の德性を享けながらどうして之を得たか自ら知らない、即ち自然に生じ自然に得たのである。されば物の自然性は古今に亙りて變化なく、又人爲を以て增減することが出來ぬ。されど人も其の自然の本性に隨つて行けばよいのであつて、何も餘計なことにも仁義を說いて恰も物を膠漆纆索で以て結着するやうに强ひて人を束縛して道德の閒に遊ばせる必要はない。かくすることは徒に天下の人心を迷はしめるに過ぎないのである。

【語釋】屈二折禮樂一(釋文に「支體を屈折して禮樂を爲すを謂ふ。」)　○呴二兪仁義一(釋文に「顏色を呴喩して仁義の貌を爲すを謂ふ。」呴喩とは顏色を和げる意か。)　○附離(陳壽昌曰く「離は麗に通ず、依なり。」)　○纆索(副墨に云ふ、纆は索の兩股なる者と。即ち縄を二筋合せたもの。)　○誘然(口義に「誘は莠と同じ、莠然とは草木のゾク〳〵生ずる貌。」)　○古今不レ二、不レ可レ虧也(口義に云ふ「古今不二とは一なり。虧く可からずとは古に亘り今を窮めて加損せず。」)　○連々(釋文に司馬云ふ、仁義を連續して道德の閒に游ぶと。口義には已まざるの意と。つまり仁義を連續的に即ち絶え間なく說く意、)

夫小惑易レ方、大惑易レ性。何以知二其然一邪。自下虞氏招二仁義一以撓中天下上也、天下

束不以纆索。故天下誘然皆生、而不知其所以生。同焉皆得、而不知其所以得。故古今不二、不可虧也。則仁義又奚連連如膠漆纆索、而遊乎道德之閒爲哉。使天下惑矣。

訓讀 且つ夫れ鉤繩規矩を待つて、正しくするは、是れ其の性を削るなり。繩約膠漆を待つて固くするは、是れ其の德を侵すなり。禮樂に屈折し、仁義に呴兪して以て天下の心を慰むるは、此れ其の常然を失ふなり。天下に常然あり。常然とは曲る者鉤を以てせず、直き者繩を以てせず、圓き者規を以てせず、方なる者矩を以てせず、附離するもの膠漆を以てせず、約束するもの纆索を以てせず。故に天下誘然として皆生じて、其生ずる所以を知らず。同焉として皆得て、其の得る所以を知らず。故に古今二ならず、虧く可らざるなり。則ち仁義又奚ぞ連連として膠漆纆索の如くにして、道德の閒に遊ぶことを爲さんや。天下をして惑はしむ。

大意 人は自然に從つて行けばよい何も仁義を以て人を束縛する要なきを說く。

通釋 今少しく論を進めて見よう。かの曲り金、墨繩、ブンマハシ、サシガネ等を用ひて始めて其の形を正しくするのは物の本性を削り矯めるのである。又、繩、紐、膠、漆などを用ひて始めて堅くするのは物の自然のもち前を侵害するのである。之と同樣に無理に身を曲げて禮樂をなし、强ひて顏色を和げて仁義を行ひ、さうして以て天

で、或は切り開いたり、齕み切つたりしたならば、何れも痛くて泣き叫ぶことであらう。此の兩者は、一は指が六本あつて常數より一本餘計であり、一は四本しかなくて普通より一本足らない、即ち數に過不足の別はあるが其の切り開かれたり齕み切られたりする心配は同樣である。これと同一の道理にて、今時の仁人は心配さうな目つきをして世の中の心配事を苦にしてヤキモキして居るが、是れはかの不仁の人は天より受けた性命の本眞を決潰して富貴を貪ぼつて居るのと、其の爲し方は異ふが、何れも人の自然性を亂す點は同樣である。されば此等の點から考へて見ると仁義はどうしても人の眞情ではないらしい。其の證據には夏殷周の三代より此の方、仁義を唱へ出した爲めに天下は何んとマアがん〳〵と口やかましいことでないか。

語釋 決之則泣云々（成疏に云ふ、「決は離析なり、齕は齧斷なり」と。）○其於憂一也（陳壽昌曰く、「駢枝を以て決齕の憂を招く、餘りあると足らざると皆病なり」と。）○蒿目（宣穎曰く「愁視すれば睫毛蓬茸として蒿の如し」と。）○決性命之情（決は潰亂なり。）○自三代以下者、天下何其囂々也（三代は夏殷周。口義に云ふ「囂々は嘈雜なり、三代より以下此の說盛に行はる、何ぞ其れ嘈雜なるや。」仁義の併稱は周代に始まるも其の思想の淵源は遠し、故に三代より以下云云と曰ふ。）

且夫待鉤繩規矩而正者、是削其性也。待繩約膠漆而固者、是侵其德也。屈折禮樂、呴俞仁義、以慰天下之心者、此失其常然也。天下有常然。常然者、曲者不以鉤、直者不以繩、圓者不以規、方者不以矩、附離不以膠漆、約

が說を徵す、是に非ず。」）○枝者不爲跂（羅谷曰く、跂は岐と通ずと）○無所去憂（又曰く「肩は憂を用ふる所なしと言はんが如し。」宜穎曰く「其の本然に率へば則ち自ら憂なし、何ぞ去るを待たん。」）○意（口義には噫と同じ、嘆なりとあり、又通ず。）○彼仁義何其多憂也（宣穎云ふ「仁義は性命の實に非ず、性命の情に著けば則ち本自ら憂なし。」つまり仁義を行ふに憂多きは人情に非ざる確證である。仁義の二字、舊本皆仁人に作るも今宣本に從ふ。口義本は仁義へに作る。）

且夫駢於拇者、決之則泣。枝於手者、齕之則啼。二者或有餘於數、或不足於數、其於憂一也。今世之仁人、蒿目而憂世之患、不仁之人、決性命之情而饕貴富。故意仁義其非人情乎。自三代以下者、天下何其囂囂也。

訓讀 且つ夫れ拇に駢なる者、之を決かば則ち泣かん。手に枝なる者、之を齕まば則ち啼かん。二つの者、或は數に餘りあり、或は數に足らず、其の憂に於けるは一なり。今、世の仁人は蒿目にして世の患を憂へ、不仁の人は性命の情を決して、貴富を饕る。故に意ふに仁義は其れ人の情に非ざるか。三代より以下は、天下何ぞ其れ囂囂たるや。

大意 再び手足の喩を引きて仁義の人情に非ざるを說く。

通釋 更に再び手足について考へて見ても、足の四本指の者や手の六本指の者が天然のまゝに任かせて置かない

り。意ふに仁義は其れ人の情に非ざるか。彼の仁義は何ぞ其れ憂多きや。

大意 至正の道を明かにし、仁義は性命の情、道徳の正に非ざるを説く。

通釋 彼の至正の道とは如何なるものなるか、そは人が天から受けて生れた性命の眞實を失はないで、自然のまゝに任かせて置くことである。されば至正の道よりすれば、足の指がくつついて四つ指であつても駢指として惡まうとはしない、又手の指が一本多くて六つ指であつても岐指として厭がらうとしない。又物の長短に就いても同樣で、長いからと云つて餘計だとは思はず、短かいからとて不足とは思はぬ。されば鳧の脚は短かくてもそれが生れつきで別に不自由を感じないから、何かで之を續ぎ足したならば定めて憂ふることであらう。鶴の脚は長くても別に不自由をしないから、オセツカイにも之を切り取つて短かくしたならば定めて悲しむことであらう。されば生れつき長い物はわざ〳〵斷つて短かくする必要はないし、生來短かいものは續ぎ足して長くする要はない。つまり生れつきの長短に任かせて置けばよいので、何も斷つの足すのとヤキモキ心配する必要はない。是等の點から考へて見ると、仁義と云ふやうな餘計なことを唱へ出して强ひて人を導かうとするのは、どうも人間の自惚性に適ふもので無いやうである。若し仁義が人情に合ふものなら、之を行ふにそれ程骨の折れるものでない筈だが、どう云ふものか彼の仁義を行ふには中々困ることが多いではないか。

語釋 彼至正者（至字舊本多く正字に作るも、宣本に從つて至字に改む。兪樾も云ふ「上の正字は乃ち至字の誤、上文に故此皆多駢旁枝之道、非天下之至正也と云ひ、此に彼至正者不失其性命之情と云ひ、兩文相承く。今誤つて正正に作る義通ずべからず。郭曲げて之

の末を見たと云ふ程目のよく見えた人。孟子には離婁に作る。是已とは是也に同じ。）○五聲（宮、商、角、徴、羽。）○六律（黄鐘、太族、姑洗、蕤賓、夷則、無射を云ふ、是れ皆陽聲なり、之に對して六呂とて陰聲のものあり、下の大呂は此の一なり。）○金石絲竹（金は鐘、石は磬、絲は琴瑟、竹は笙簧。）○師曠（晉の平公の樂師、生れながらにして目なしと云ふ。）○簧鼓（簧は笙、鼓は大鼓、禮樂を以て仁義の道を敎へることで、恐ろく言へば鳴りもの入りで仁義を宣傳するの類。）○不及之法（一般人にはとても行へさうもない掟、即ち仁義禮智信の如き定めを云ふ。）○曾史（曾は孔子の弟子曾參。史は衛の大夫史䲡。論語に直哉史魚とある人。）○纍瓦結繩竄句（釋文に崔云ふ「無用の語を聚むること瓦の纍、繩の結の如し」と。又司馬云ふ「竄句とは邪說微隱、文句を穿鑿するを謂ふ」と。六ケしい文句を穿鑿して微妙にコヂツケルこと。）○敝跬譽二無用之言一（釋文に「敝跬は分外に力を用ふる貌」とあり、ヘトヘトに敝れる程力を用ふること宜穎は跬は跛の誤なりと云ふ。之によれば「無用の言を毀譽するに敝ろ」と訓む。集釋にも異說をあげて居るが略す。）○非二天下之至正一（上の非道德之正の句に應ず。）

彼至正者、不レ失二其性命之情一。故合者不レ爲レ駢、而枝者不レ爲レ跂、長者不レ爲レ有レ餘、短者不レ爲レ不レ足。是故鳧脛雖レ短、續レ之則憂。鶴脛雖レ長、斷レ之則悲。故性長非レ所レ斷、性短非レ所レ續。無レ所レ去レ憂也。意仁義其非二人情一乎。彼仁義何其多レ憂也。

訓讀 彼の至正なる者は、其の性命の情を失はず。故に合する者を駢と爲さず、而して枝ある者を跂と爲さず、長き者を餘り有りと爲さず、短き者を足らずと爲さず、是の故に鳧脛短しと雖も、之を續がば則ち憂へん。鶴脛長しと雖も、之を斷たば則ち悲しまん。故に性の長きは斷つ所に非ず、性の短きは續ぐ所に非ず。憂を去る所無きな

大意 上文を承けて、仁義は道德の正に非ざることを類例を擧げて申明す。

通釋 さ樣なわけで以て目に就いて云つても餘計に視覺を用ふる者は五色の眞正を亂し物の色彩に耽溺するものである。かの青色や黄色や黼や黻の如き柄模樣の麗しさは人爲的に作り出された餘計なものであるまいか、而して離朱は此の方面の代表的人物である。又耳に就いて云つても餘計に聽覺を用ふるものは五聲の眞正を害し、六律に淫するものである。かの金石絲竹黄鐘大呂の聲の如きは亦人爲的に作り出された餘計なものであるまいか、而して音樂の達人と銘打つた師曠の如きは其の代表者である。之と同じことで餘計なことにも仁などゝ云ふことを唱導する者は、天德を除き去り、天性の發露を閉ぢ塞ぎ、卽ち人の折角良い自然美を破壞して、聖人君子と云つたやうな名譽を取り、天下の人々をして笙を吹き太鼓をたゝき所謂鳴り物入りで宣傳し廻つて、無理な掟を奉ぜしむるもので、實に餘計なことではあるまいか、而して曾參や史鰌などは其の代表者である。又餘計に辯說を振ふものは瓦を積み重ね繩を結ぶが如く無用の言を集め、解からぬ文句を穿鑿して、堅石は石に非ずとか、白馬は馬に非ずと云つた樣な詭辯を弄する爲めに心を使ひ、そんなことにへト〳〵になる程力を用ひ、役にも立たぬ言論を樂屋譽をして得意がつて居る連中で是れは實に無用な業ではあるまいか。而して楊朱や墨翟は此の方面の代表的人物である。されば此等の連中は皆無用のことを爲すもので、天下の正道を行ふものではない。

語釋 亂五色（五色は青黄赤白黑。）○黼黻之煌煌非乎（黼黻の解は大宗師に見ゆ、斧形の模樣を黼と謂ひ、二つの己の字が背中合せになつて居る模樣を黻と謂ふ、何れも禮服に用ふる模樣である。煌煌は目に眩ゆき貌。キラ〳〵と美しい。非乎とは宣穎によればこれは是れ非なるものにあらざる乎」との意。卽ち人爲的に色々美しい色采模樣を作るのは自然の正色を亂すもので、是れは實に餘計なことであるまいかとの意。下皆此の意にならへ。）○離朱是已（黄帝の時の人で、百歩の距離で以て秋毫

駢枝とか又は多駢旁枝と湊用して居る點から見ると駢枝と同樣の意味で餘計なことの意。五藏は肝心脾肺腎の五臟を云ふ、以て内臟機關の凡てを意味す。言ふ心は仁や義は人の五臟六腑が持つて居る智慧のありたけを搾り出してわざ〳〵考へ出されたものである。）○多ニ方駢ニ枝於五藏之情ニ（朱得之は多方の二字を衍文となすも今取らず、五藏之情とは五臟の眞情、純情の意。）

是故駢於明者、亂五色、淫文章。青黃黼黻之煌煌非乎。而離朱是已。多於聰者、亂五聲、淫六律。金石絲竹黃鐘大呂之聲非乎。而師曠是已。枝於仁者、擢德塞性、以收名聲、使天下簧鼓以奉不及之法非乎。而曾史是已。駢於辯者、纍瓦結繩竄句、遊心於堅白同異之閒、而敝跬譽無用之言非乎。而楊墨是已。故此皆多駢旁枝之道、非天下之至正也。

訓讀 是の故に、明に駢なる者は、五色を亂し、文章に淫す。青黃黼黻の煌煌たる、非か。而して離朱は是れのみ。聰に多なる者は五聲を亂し、六律に淫す。金石絲竹、黃鐘大呂の聲は、非か。而して師曠は是れのみ。仁に枝なる者は、德を擢き、性を塞ぎて、以て名聲を收め、天下をして簧鼓して以て不及の法を奉ぜしむ、非か。而して曾史是れのみ。辯に駢なる者は、纍瓦結繩竄句、心を堅白同異の閒に遊ばして、敝跬して無用の言を譽むる、非か。而して楊墨是れのみ。故に此れ皆、多駢旁枝の道にして、天下の至正に非ざるなり。

訓讀 駢拇枝指、性に出でたるかな、而も德に侈れり。附贅縣疣、形に出でたるかな、而も性に侈れり。仁義に多方にして之を用ふる者は、五藏に列なれるかな、而かも道德の正に非ざるなり。是の故に足に駢なる者は、無用の肉を連ぬるなり。手に枝なる無は無用の指を樹つるなり。五藏の情に多方駢枝なる者は、仁義の行に淫僻にして、聰明の用に多方なるなり。

大意 拇指贅疣の二つの喩を擧げて仁義が道德の正に非ざる論を起す。

通釋 足の指が四本であつたり、手の指が六本であつたりするのは、生れつきであるが然し人の普通の持ち前たる五本指と云ふ常形から見れば餘計なものである。又肉に附着せる瘤やぶら下れる疣は自然と身體の上に出來たものであるが、然し生れつきから見れば餘計なものである。之と同じく仁義を餘計な手段として用ふるものは、成程仁義は人の五臟六腑から搾り出されたものであるが、然し道德の眞正なものでは無い。さ樣なわけで足が四つ指なのは餘計な肉がくつついて居るのであり、手が六つ指なのは一本だけ餘計な指が立つて居るのである。之と同じく四つ指や六つ指のやうに餘計な手だてとして仁義なぞを利口ぶつて五臟の純情中から案出するのは仁義の行に耽溺して、餘計な手だてとして聰明を亂用するものである。

語釋 駢拇枝指、出ニ乎性一哉、而侈ニ於德一(拇は足の大指、駢は合なり、つまり餘計な肉があつてその大指と第二指とがクツツイて居るのを駢拇と云ふ、卽ち足の四つ指のことなり。指は手の指、枝は旁生なり、つまり餘計な指が一本あること、卽ち手の六つ指のことを枝指と云ふ。そして此の四つ指や六つ指は人の生れ落ちた時からのものであるから性に出づと曰つたのである。侈は過なり剩なり、餘分なものであるとの意。德は道德の意に非ず、人の通有性ぐらゐの意か。釋文に崔云ふ「德は猶ほ容の如し」と。之に從へば人の常形の意。)
○附贅縣疣、出ニ乎形一哉(附贅縣疣は大宗師にも見ゆ。此等は人が旣に生るゝの後に出來るものであるから形に出づと曰ふ。) ○多ニ方乎仁義一而用レ之者、列ニ於五藏一(多方は下文に多方

外篇 駢拇第八

叙説 内篇逍遙遊の叙説に於て既に述べた如く、外篇は内篇に對する辭であつて、凡てゞ十五篇から成立つて居る。内篇に在りては特に一篇の題目を立てゝ居るが外篇に在りては多く篇首の二字乃至三字を取りて篇名として居る、從つて篇名に何の意味もないのである。

一篇の大意は駢拇枝指が人の身に取りて餘計なものであると同樣に仁義禮樂の如きも人の本性に出づるものでなく、聖人が勝手に作り出した餘計なものであると說く。

駢拇枝指、出乎性哉、而侈於德。附贅縣疣、出乎形哉、而侈於性。多方乎仁義而用之者、列於五藏哉、而非道德之正也。是故駢於足者、連無用之肉也。枝於手者、樹無用之指也。多方駢枝於五藏之情者、淫僻於仁義之行、而多方於聰明之用也。

ふ。渾沌之を待つ甚だ善し。儵と忽と渾沌の德に報いんことを謀る。曰く、人皆七竅あり、以て視聽食息す、此れ獨り有ること無し。嘗試みに之を鑿たんと。日に一竅を鑿つ。七日にして渾沌死す。

大意 帝王の道は有爲を斥け無爲自然を貴ぶべきを再說す。此の一場の說話玩味津々、或は智を斥けて無智を貴ぶとも解せらる。

通釋 南海を支配して居る神を儵と名づけ、北海を支配して居る神を忽と名づけ、中央を支配して居る神を渾沌と名づく。儵と忽とが或る時ヒヨツコリ渾沌の領地であつた。渾沌は此の兩神を大層よくもてなしたので、兩神は渾沌の好意に報いんことを相談して曰ふには「誰れでも皆目耳口鼻、合せて七つの穴があつて、視たり、聽いたり、食べたり、息をしたりすることが出來る、處が渾沌は可哀相にも之がない。御恩返へしに穴を掘てやらうぢやないか。」かくて兩神が日に一穴を掘つて行くと、七日目に渾沌が死んで仕舞つたと云ふことである。

語釋 儵、忽、渾沌（釋文に簡文云ふ「儵忽は神速に取りて名となす、渾沌は合和を以て貌と爲す、神速は有爲に譬へ、合和は無爲に譬ふ」と。又李云ふ「渾沌は淸濁未だ分れざるなり、此れ自然に喩ふ」と。）

つて、物の善惡美醜によつて排斥したり歡迎したりしない、美人來らば美人を映じ、醜婦來らば醜婦を寫すが如く、凡ての物に應じて之を映寫し、而も物去る時は少しもその跡方を留めない、故にあとから〳〵いくらでも物を寫すことが出來て少しも本來の明を傷つけることがないのである。至人の用心も正にその通りで、物に對して差別の見なく執着の見がない、故に物と與に樂んで盡くることがない。

語釋 無爲名尸（四の無爲を「なる無れ」と訓む説があるが取らない。林西仲曰く「爲すこと無くして爲さざる無し、故に茫茫こもごも至虛の中に集る。無は禁止の詞に非ず、諸解妥を缺く」と。名尸の尸は主なり、目標、焦點の意。郭注によれば「物に因る時は則ち物各自ら其の名に當る」と。即ち物各自をして名譽を分擔せしめ、己れ自ら名譽の焦點とならぬこと。）○謀府（府は庫なり。）○體盡無窮而遊無朕（朱得之曰く「無窮は道の大なり、無朕は道の微なり、身この道を恒にするを體と曰ひ、動靜、愧づるなきを盡と曰ひ、周遊、離れざるを遊と曰ふ」と。つまり無窮無朕は皆大道を形容して云つたのである、道の廣大より謂つて無窮と曰ひ、その微妙より謂つて無朕と曰ふ。）○盡其所受乎天而無見得（王先謙曰く「天より受くる所を全うして而も自ら以て得と爲すの見なきを言ふ」と。）○亦虛而已（林西仲曰く「言ふ心は始終只だ一無爲の心」と。）○不將不逆（將は送なり、逆は迎なり。鏡は決して醜物だから寫すことを斥け、美物だから之を歡迎すると云ふことがない。聖人が物に對して是非善惡の差別見を持たぬことに喩ふ。）○應而不藏（鏡が何物にも應じて之を寫し、而も物去る時は少しもその影を殘さないこと。聖人の物に對して執着なきことに喩ふ。）

南海之帝爲儵、北海之帝爲忽、中央之帝爲渾沌。儵與忽時相與遇於渾沌之地。渾沌待之甚善。儵與忽謀報渾沌之德。曰、人皆有七竅、以視聽食息、此獨無有。嘗試鑿之。日鑿一竅。七日而渾沌死。

訓讀 南海の帝を儵と爲し、北海の帝を忽と爲し、中央の帝を渾沌と爲す。儵と忽と、時に相與に渾沌の地に遇

無レ爲二名尸一、無レ爲二謀府一、無レ爲二事任一、無レ爲二知主一、體二盡無窮一而遊二無朕一、盡二其所一レ受二乎天一而無レ見レ得。亦虛而已。至人之用レ心若レ鏡。不レ將不レ逆、應而不レ藏、故能勝レ物而不レ傷。

訓讀　名の尸となること無く、謀の府となること無く、事の任となること無く、知の主となること無く、無窮を體盡して、無朕に遊び、其の天に受くる所を盡して、得を見ること無し。亦虛なるのみ。至人の心を用ふるは鏡の若し。將らず逆へず、應じて藏めず、故に能く物に勝へて傷はず。

大意　應帝王の道は無爲に在り、故に本章四無爲を擧示す、無爲は卽ち虛のみ。虛無こそ帝王治道の樞たるを說く。

通釋　至德の聖人は虛無因應、物をして各々其の名に當らしむるのであつて、自ら名譽の焦點、標的となることがない、又物をして各々自ら謀らしむるのであつて自ら進んで參謀の中心となることがない、又物をして各々自らその責任を負はしめ、己れ自ら事件の責任者となることがない、又物をして各々自らその知を用ひしめ、己れ自ら知慧を授ける主人公とならない。そして無窮の大道を體得して優遊自適し、その天より受けた所の本性を全うして而も之を以て得意と思ふことがない、要するに至人は虛無そのものである。至人の心の用ひ方は恰も鏡のやうであ

順し、誰彼の區別を忘れ、恰も茅の風に靡くが如く水が風に從つて波立つが如き順應三昧の精神狀態を以て彼に會つたのである。故に彼は全然何んとも窺ひが付かなかつたから茫然としてとう〳〵逃げ出して仕舞つたのだよ。かくの如く道の實體を得て居れば決して巫風情から人相を見立てられるやうなことはない。汝も今一段と勵んで道の實を體得せねばならんぞよ。」此の事があつて後。列子はツク〴〵自分はテンデ是れまで本當の學問をして居なかつたと考へて、自分の家に歸り三年間も閉ぢこもり專心修養した。自分の妻の爲に御飯をたき、人を養ふと同じ態度を以て豕を養つた。つまり貴賤尊卑を忘れ、人と物とを平等に視、何事に對しても親疎の別を設けず、虛飾を去つて素朴に歸り、全く無我無心、何等の慾念なく、恰も人形のやうに形骸だけで立つて行くことになり、從つてゴテ〳〵と物に對して區別や境界などを立てることが無くなつた。かくて彼は一生此の態度を以て終つたのである。

語釋　已滅矣、已失矣、吾弗ㇾ及已（陳壽昌曰く「已滅矣とは其の形を見ざるを言ひ已失矣とは往く所を知らざるを言ふ」と。弗及已の已はノミと訓みて可なり。一本には也に作り、又矣に作る。甕谷によれば、已は矣に通ず、たゞ文を變ずるのみと。どちらにしても大きい問題ではない。）　○未始出吾宗（やはり道求修觀の名であらうと思ふ。故に音讀する方がよいと思ふ。宗は道なり、陰陽未萌以前の大虛渾沌たる狀態よりも更に以前卽ち道さへも出現せぬ前の狀態、所謂未だ始めより始めあらざる所を謂ふ。理の上より云へば虛無の根本義と云ふことである。）　○委蛇（成疏に云ふ、隨順の貌と。）　○因以爲二弟靡一云云（因は物のなりにつれての意。弟音頹。成疏によれば頹は放任、靡は順從と、甕谷は弟靡は頹靡なり、逆忤する所なきを謂ふと。卽ち外界の事物のまゝに順應する意である。案ずるに列子に或は茅靡に作る。よつて茅の風に靡くが如く物に隨應すると解してはどんなものか。波流は崔本に波隨に作りて常に隨從すと云つて居る、王念孫は波隨に作る是なりと曰つて居る。意味は弟靡と同じことで、順應の意である。諸葛晃の列子考によると。弟靡波流は並に季咸が全く參つた有樣を說いたのである。舊說並に壺子に屬して居るのは誤であると。參考に供す。）　○爲二其妻一爨、食ㇾ豕如ㇾ食ㇾ人（陳壽昌曰く、「彼此相忘れ、人物平視を言ふなり」と。）　○雕琢復ㇾ朴（又曰く、「飾を去りて眞に歸るを言ふ」と。）　○塊然獨以ㇾ形立（塊然は無心の貌。陳壽昌曰く、「形あれども情なし」と。林希逸曰く、「木偶人の如し」と。）　○紛而封哉（甕谷曰く、「豈に復た紛々然として封畛（さかひ）あらんやと言ふが如し」と。）

與レ之虛而委蛇。不レ知二其誰何一。因以爲二弟靡一、因以爲二波流一、故逃也。然後列子自以爲レ未二始學一而歸。三年不レ出。爲二其妻一爨、食レ豕如レ食レ人、於レ事無二與親一。雕琢復レ朴、塊然獨以レ形立、紛而封哉。一以レ是終。

訓讀　明日又之と與に壺子を見る。立つて未だ定らず、自失して走る。壺子曰く、之を追へと。列子之を追へども及ばず、反りて以て壺子に報じて曰く、已に滅せり已に失せり、吾れ及ばざる已と。壺子曰く、鄕に吾れ之に示すに未始出吾宗を以てす。吾れ之と與に虛にして委蛇す。其の誰何たるを知らず。因つて以て弟靡たり、因つて以て波流たり、故に逃れたるなりと。然る後列子自ら以て未だ始めより學ばずとなして、歸る。三年出でず。其の妻の爲に爨ぎ、豕を食ふこと人を食ふが如く、事に於て與に親む無し。雕琢朴に復り、塊然として獨り形を以て立ち、紛として封あらんや。一に是を以て終れり。

通釋　明日、列子は又季咸をつれて壺子にあつた。處がどうしたものか、季咸は立つたまゝで、まだ座席にも着かぬうちに、ボンヤリして仕舞ひ、果ては遁げ出して仕舞つた。壺子が「彼を追驅よ」と曰つたので、列子は追つかけたが及ばなかつた。引つかへして來て壺子に報告して曰ふには「トテモ追つつけませんでした。もう何處にも姿が見えませんでした。又どの方向へ行つたかそれも分かりませんでした。」壺子が曰ふには「先き程、此の方は季咸に未始出吾宗とて陰陽未萌以前の渾沌たる相を示してやつた。即ち此の方は心を虛しうして物の變化のまゝに隨

つて曰ふには「貴下の先生は人相が變り易くて一定して居ないから、何んとも見立ることが出來ぬ。何んとか相好を一定するやうにして貰つた上で、もう一度見ませう。今日はどうも見立がつかぬ。」列子は壺子の部屋へ這入つて行つて此のことを話した。壺子が曰ふには「此の方は先き程季咸に太冲莫勝とて大虛即ち陰陽の二氣渾同して把捉すべからざる相を示してやつた。彼は恐らく衡氣機とて陰陽の二氣を平均にたもつ妙術即ち生ともつかず死ともつかぬ狀態を見たから、此の方を不齊などと言ふのであらう。鯢が躍つて渦を巻いて居る所を淵と名づけ、止まれる水が靜かに渦巻いて居る所を淵と名づけ、流水の渦巻く所を淵と名づける。其の他、淵には九通もあるが、以上のものは其の三種である。かく淵に幾種もあるやうに此の方の心術にも幾通りもある。今まで示したのは其の一部に過ぎないから、試みにもう一度伴れて來い、もつと外の相を示して彼を驚かしてやるから。」

語釋 太冲莫勝（林希逸曰く「太冲は大虛なり、莫勝は捉摸すべからざるなり」と。列子には勝を朕に作る。朕は迹の意。） ○衡氣機（陳壽昌曰く「衡は平なり、動靜互に根ざし混一にして平なり、平なる時は則ち二氣分かず、是れ坦然として渾化の一機なり」と。） ○鯢桓之審（釋文に簡文云ふ「鯢は鯨魚なり桓は盤桓（をどり廻る）なり」と。審は列子に潘に作り、崔本にも亦潘に作りて云ふ、回流の鍾まる所の域なりと。陳壽昌曰く「鯢桓の水は靜に非ず動に非ず、衡氣機に喩ふ。止水は靜、杜德機に喩ふ。流水は動、善者機に喩ふ。三者同じからざれども、其の淵の深くして測るなきは一なり」と。） ○淵有二九名一（列子には九淵の名をあげて居る。九淵の名を全部あげるなどは又として頗る拙である。列子が莊子に採つた馬脚が現れてゐる。）

明日又與レ之見二壺子一。立未レ定、自失而走。壺子曰、追レ之。列子追レ之不レ及。反以報二壺子一曰、已滅矣、已失矣、吾弗レ及已。壺子曰、鄕吾示レ之以二未レ始レ出二吾宗一。吾

語釋 杜權(陳壽昌曰く「杜閉の中に於て權變あるを覺ゆ、其の塞ゆるあることを決する所以なり」と。) ○天壤 亦道家觀法の名ならん。成疏に云ふ「壤は地なり、之に示すに天壤を以てするは、示すに應に動くべきの容を以てするを謂ふなり」と。) ○名實不入。而機發於踵(陳壽昌曰く「天と壤と合すれば、物を生ずるの本となる、地文の孤陰、生ぜざるに視ぶれば間あり矣。尙ほ名象の指ざすべき無し、但だ一綫の生氣、下よりして上るを覺ゆ」と。堯谷亦曰く「生機ありと雖も、未だ以て全く生に就く者と爲すべからず、故に名實不入と曰ふ」と。) ○善者機(堯谷曰く「善者機とは猶ほ生に就くの機と言ふが如し、蓋し善惡を以て言へば、生は善なり、死は惡なり」と。)

明日又與之見壺子。出而謂列子曰、子之先生不齊。吾無得而相焉。試齊、且復相之。列子入以告壺子。壺子曰、吾鄕示之以太冲莫勝。是殆見吾衡氣機也。鯢桓之審爲淵、止水之審爲淵、流水之審爲淵。淵有九名。此處三焉。嘗又與來。

訓讀 明日又之と與に壺子を見る。出でて列子に謂つて曰く、子の先生は齊しからず。吾得て相する無し。試みに齊しくせよ。且に復た之を相せんとすと。列子入つて以て壺子に告ぐ。壺子曰く、吾鄕に之に示すに太冲莫勝を以てす。是れ殆ど吾が衡氣機を見たるなり。鯢桓の審を淵と爲し、止水の審を淵と爲し、流水の審を淵と爲す。淵に九名あり。此れ三に處る。嘗みに又與に來れと。

通釋 列子は其の翌日又季咸を伴れて壺子にあつた。例の如く季咸は壺子の人相を見てから、外へ出て列子に向

有生矣。吾見其杜權矣。列子入以告壺子。壺子曰、鄕吾示之以天壤。名實不入。而機發於踵。是殆見吾善者機也。嘗又與來。

訓讀 明日又之と與に壺子を見る。出でて列子に謂つて曰く、幸なり、子の先生、我れに遇うて瘳ゆる有り、全然生有り。吾れ其の杜權を見たりと。列子入つて以て壺子に告ぐ。壺子曰く、鄕に吾れ之に示すに天壤を以てす。名實入らず。而して機、踵に發す。是れ殆ど吾が善者機を見る。嘗みに又與に來れと。

通釋 明日又列子は季咸と同行して壺子を見た。季咸は退出して列子に謂つて曰ふには「誠に幸であつた。貴下の先生は私に遇はれた御蔭で、昨日はトテモ生きる見込がなかつたのが、今日はそれが回復して十分生きる見込がある。私は先生の人相の內で、杜權とて今まで杜ぢられて居たものが活氣づいて動き出した徵候を認めたのである。だからもう先生は死なれるやうなことはない、安心なさい。」之を聞いて列子は喜んで先生の部屋へ這入つて行つて壺子に此のことを告げた。そこで壺子が曰ふには「さき程、此の方は季咸に天壤とて天地陰陽の二氣、卽ち靜中に動ある相を示してやつた。此の天地の相に在つては靜中に動あり、死中に生氣をはらめども、尙ほこれぞと名づけ指ざすことが出來ない、たゞ一縷の生氣が踵よりして立ち上るを覺えるのみである。彼は恐らく善者機とて此の方の死を轉じて生となす妙術を見て、先生はもう生きる、大丈夫だなどゝ言ふのであらう。要するに彼は此の方の心術に操られて居るのである。ためしに、もう一度一緒に伴れて來い。」

れと。

通釋 あけの日、列子は季咸と同行して壺子に御目にかかつた。季咸は壺子の前から引き退がつて列子に向つて曰ふには「あゝ、お氣の毒なことだ、貴下の先生は確かに死なれる、トテモ活きる見込はない。而も死ぬのはゴク近々のことで、何十日などゝは數へらない。吾は先生の人相の中に怪しい點を認めた、即ち濕れた灰のやうな全く生氣のない相を認めた。」列子はかくと聞くや、先生の部屋へ這入つて行つて、襟までぬらす程、涙を流しながら壺子に此のことを話した。處が壺子が曰ふには「先き程、此の方は季咸に地文とて地上の無心にして靜かなる模樣即ち不動の相を示してやつた。此の不動の相は外から窺ひ見る時ボートして居て、少しも動かず、かうだとハツキリ指定して言ふことが出來ない狀態であるから、彼れは恐らく此の方が杜德機とて生機を杜ぢて居る妙術を見て、それとは氣がつかずに生氣がないから、もう死ぬものだと早合點したのであらう。だからそんなことを云ふのだ、誠に笑止千萬なことだ。ためしにもう一度一緒にやつて來い。」

語釋 不レ以二旬數一矣（以は單位としての意、十日を單位として數へることが出來ぬ。何十日とは生きられぬ、十日前後しか生きられぬ意。） ○鄕吾示レ之以二地文一（鄕は嚮又は向に同じ。因本には向に作る。成疏に云ふ「文は象なり。震は動なり。地は無心にして寧靜なるを以て地文となすなり」と。蓋し地文とは道家修觀の名で、心を不動にもつ觀法であらう。） ○萌乎、不レ震不レ正。是殆見二吾杜德機一也（林希逸曰く「萌乎とは生ずるがごとくにして生せざるの意。不正とは指定して言ふ可からざるなり。德機とは生の意なり。杜は閉なり。其の機を閉ざして動かず、故に生意滅せんと欲するの狀あり。季咸遂に以て活きずとなすなり」と。）

明日又與レ之見二壺子一。出而謂二列子一曰、幸矣、子之先生遇レ我也、有レ瘳矣、全然

と實、形式と實質と二つ合して全いのだ、文だけでは雌鳥ばかりと同じことで何の役にも立たぬ。然るに汝は半可通の道を振りかざして世間とハリアツて、どこまでも自分を賣り出さうとして居るのか、それはとんでもない間違ひだ。そんな野心を持つて居るから、季咸のやうな男にスツカリ己れの人相をみられて仕舞つたのだ。ためしに季咸をつれて來て此の方を彼に見せて見よ、仲々窺ひなどの立つものでないから。」

語釋 皆棄而走（成疏に云ふ「人皆豫め凶禍を聞くを喜ばず、是を以て棄てて走るなり」と。列子には棄を避に作る。） ○吾與汝既其文（與は及なり。成疏には與は授なりと解す、亦通ず。既は盡なり。文は文章、即ち表面とか形式の意） ○以道與世亢、必信夫（道は列子のなまかぢりの道。林西仲曰く「亢は抵なり、言ふ心は汝、己の道を以て世と抵敵して、必ず外に伸びんことを求むるか」と。即ち林氏は信を伸と解して居る。一説には信を信用と讀んで、己の信用を人から得ようとして居るのかと解す。亦通ず、夫をかなと讀むも亦通ず。） ○嘗試（二字にてコヽロミニと訓む。嘗一字でもコヽロミニと訓む、下を見よ。）

明日列子與之見壺子。出而謂列子曰、嘻、子之先生死矣、弗活矣、不以旬數矣、吾見怪焉、見濕灰焉。列子入、泣涕沾襟、以告壺子。壺子曰、鄉吾示之以地文。萌乎、不震不正。是殆見吾杜德機也。嘗又與來。

訓讀 明日、列子之と與に壺子を見る。出でて、列子に謂つて曰く、嘻、子の先生は死なん、活きず、旬を以て數へじ、吾れ怪を見たり、濕灰を見たりと。列子入り、泣涕して襟を沾して以て壺子に告ぐ。壺子曰く、鄉に吾れ之に示すに地文を以てせり。萌乎として震かず正しからず。是れ殆ど吾が杜德機を見たるなり。嘗に、又與に來

訓讀 鄭に神巫あり、季咸と曰ふ。人の死生存亡、禍福壽夭を知る。期するに歲月旬日を以てすること神の若し。鄭人之を見て、皆棄てゝ走る。列子之を見て心醉し、歸りて以て壺子に告げて曰く、始め吾れ夫子の道を以て至れりと爲せり、則ち又焉より至れる者ありと。壺子曰く、吾は汝と其の文を旣くして、未だ其の實を旣くさず。而、固く道を得たりとするか。衆雌あるも、而かも雄無くんば、又奚ぞ卵せん。而、道を以て世と亢して必ず信びんとするか。故に人をして得て汝を相せしむ、嘗試に與に來り、予を以て之に示せと。

大意 此の一節は列子黃帝篇に見ゆ、列子は疑ふべき書、之を莊子に採りしは言を俟たず。帝王の道は虛無因應卽ち順應三昧に在ることを說く。

通釋 鄭の國に季咸と名づくる不思議な巫が居た。人の死生や吉凶や壽命をよく知つて居て、その年月日まで豫言することが神樣のやうにたしかであつた。鄭の人々は途中で季咸に遇ふと、何かイヤなことでも言はれやしないかとキビワルがつて皆近づかない內に、逃げて仕舞ふと云ふ有樣であつた。列子は季咸にあつて、その豫言が如何にもよく的中するので、スツカリ心醉して仕舞つて、先生の壺子の所へ歸つて來て季咸のことを色々話して曰ふには「是れまで私は先生の敎をば此の上もない結構だと思つて居りました。然るに世間には之よりもモツト勝れた敎があります。先生の敎はトテモ季咸にはかなひませんよ。」先生の壺子が曰はれるには「吾は汝に吾が道の表面形式だけは全部敎へたが、まだ道の眞實は十分敎へてない。然るに汝はどこまでも吾が道の眞髓を悟り得たと思つて居るのか。雌鳥ばかり澤山居ても雄鳥がなかつたらトテモ卵は產めない、產んでも空卵だ。それと同じことで道も文

語釋　嚮疾彊梁（嚮は響に通ず、成疏に云ふ「素性聰達、神智捷疾なること猶ほ響應（響の聲に應ずるが如く疾き意）の如し、事に渉り務を理むること強幹果決なり」と。）　○物徹疏明（又云ふ「物を鑒ろ洞徹、疏通明敏なり」と。）　○胥易技係（郭慶藩によれば胥は周禮の鄭注に胥徒は民の徭役に給する者とある、是れなり。易は猶ほ治の如し。胥易とは胥徒の役に供し事を治むるを謂ふ。技係とは王制に凡そ技を執つて以て上に事ふる者は事を貳にせず官を移さずとあるが如く、技に繫がるゝを謂ふなりと。即ち古は技藝を以て仕官したものは、專門の技術以外に亘る事はやらせない、又いつまでも同じ官職に釘づけられる、是れはよいやうであるが一方から云へば不自由なことで、つまり技藝ゆゑに束縛せられることになる。）　○虎豹之文來ㇾ田（成疏に云ふ「虎豹の皮は文章あり、故に田獵を來す」と。つまり皮が美しいから取られる。）　○猨狙之便、執ㇾ斄之狗來ㇾ藉（猨狙は「サル」のこと、便は便捷、斄は狸に通ず。陳壽昌云ふ「猨狙狸狗は技巧あるに因つて人の係縛を致す。藉は繫係なり」と。）　○似ㇾ不ㇾ自ㇾ己云云（林西仲云ふ「似不自己とは己れ其の功を忘るゝを言ふなり。貸は施なり。民不ㇾ恃とは民その化を忘るゝを言ふなり」と。）　○有ㇾ莫ㇾ擧ㇾ名云云（陳壽昌云ふ「言ふ心は蕩々として名づけ難し、而も天下欣悅」と。）　○立二乎不測一、而遊二於無有一（魏谷曰ふ「測度すべからざるの地に居りて跡の尋ぬべき無し」と。即ち不測とは常人の窺知すべからざる境地で無念無想の心境を云ふ。遊於無有とは逍遙遊に無何有之鄕に遊ぶと云ふに同じく無爲無作の境地を云ふ。此の二句は次の章の伏線であつて次章に壺子の云ふ所と併せ考ふべきである。）

鄭有二神巫一、曰二季咸一。知二人之死生存亡、禍福壽夭一、期以二歳月旬日一若ㇾ神。鄭人見ㇾ之、皆棄而走。列子見ㇾ之而心醉、歸以告二壺子一曰、始吾以二夫子之道一爲ㇾ至矣。則又有二至ㇾ焉者一矣。壺子曰、吾與ㇾ汝既二其文一、未ㇾ既二其實一。而固得ㇾ道與。衆雌而無ㇾ雄、而又奚ㇾ卵焉。而以ㇾ道與ㇾ世亢必信夫。故使二人得而相一ㇾ汝。嘗試與來、以ㇾ予示ㇾ之。

に應ずる響のやうに疾く、且つ事をなすに意志が强固で果斷に富んで居る。又物の道理を底まで見通し、何事にも通達して居る。而も益々精進して道を學んで倦むことがない。か樣な人物は、古の聖王に比べて差しつかへないでせうか。」老子が答へて曰ふには「そんな人物は古の聖王に較べて見ると恰も人夫が賦役を治め技藝者がその技藝ゆゑに反つて束縛せらるゝやうに、學問や智慧がある爲にわれと吾が身を勞らし心配する人物であつて、トテモ古の聖王とは比較にならぬ。更に之を例をあげて說明するならば、あの虎や豹が狩り立てられるのは其の皮の模樣が美しいからであり、猿や犬が縛られるのは、猿は身輕で藝などをやるし、犬は狸などを捕へて獵に役立つからのことである。之と同じことでか樣な人物も己が學問智慧ゆゑに自繩自縛に陷る連中でトテモ〳〵明王とは比較にならぬ。」陽子居は老子の答が案外であつたので大に驚いて更に問うて曰ふには「然らばその明王の政治と云ふものはどのやうなものでありまするか、恐れ入りますがお示敎に預りたい。」そこで老子が敎へて曰ふには「明王の政治と云ふものは、其の功績は天下の偶から偶まで遍ねく行き渡つて居るにも拘らず、明王自らは其の廣大なる功績は自分がしたのではないやうに思つて居る。又その德化は普ねく萬物に施して居るにもかゝはらず、下人民も明王の御蔭を恃として居ないやうである。其の功績や德化はあつても、餘りに廣大であり普遍であるから何んとも名のつけやうがないが、而も凡ての物をして各々自得、欣々然たらしめて居る。そして己れ自らは常人の測度す可からざるの地たる忘我の心境に安住し、何事も有ること無き鄕たる無爲の境界に悠々自適して居る。是れが明王の治と云ふのであるぞ。」

陽子居見老聃曰、有人於此、嚮疾彊梁、物徹疏明、學道不勌。如是者可比明王乎。老聃曰、是於聖人也、胥易技係、勞形怵心者也。且也虎豹之文來田、猨狙之便、執斄之狗來藉。如是者可比明王乎。陽子居蹵然曰、敢問明王之治。老聃曰、明王之治、功蓋天下、而似不自己。化貸萬物、而民不恃。有莫舉名、使物自喜。立乎不測、而遊於無有者也。

訓讀 陽子居、老聃を見て曰く、此に人あり、嚮疾彊梁にして物徹疏明なり。道を學んで勌まず。是の如き者は明王に比すべきかと。老聃曰く、是れ聖人に於けるや、胥易技係の如く形を勞し心を怵へしむる者なり。且や虎豹の文は田を來し、猨狙の便と、斄を執ふるの狗とは藉を來す。是の如き者は明王に比す可けんやと。陽子居蹵然として曰く、敢て明王の治を問ふと。老聃曰く、明王の治は、功、天下を蓋へども己よりせざるに似たり。化、萬物に貸せども民恃まず。有れども名を擧ぐる莫く、物をして自ら喜ばしむ。不測に立つて、無有に遊ぶ者なり。

大意 帝王の道は有爲有智を斥け、無爲無我を貴ぶことを說く。

通釋 陽子居と云ふ人が老子にあつて問うて曰ふには「此にかう云ふ人がある、頭腦の働きの敏捷なることは響

に順うて、而して私を容るゝこと無くんば、天下治まらんと。

大意 天下を爲むるの秘訣は恬淡虚靜に在ることを說く。

通釋 天根と云ふ人が殷山と云ふ山の南に遊び、蓼水のほとりまで行つたが、そこでヒヨツコリ無名人と云ふ人に遭つたので、尋ねて曰ふには「天下の治方を御伺ひ致します。」そこで無名人が曰ふには「退け〳〵、汝は誠に鄙しい人物だ、何んと不愉快な問をするぢやないか。予は今も今とて大自然と友となり、それが厭いたら又あの莽眇とて輕い〳〵鳥に乘つて、此の世の外に出かけて、見渡す限り何物も無き村里に遊び、ひろ〳〵とした野原に處らうと思つて居る、然るに汝は何とて天下を治めることなどを云ひ出して予の靜かな心を掻き擾さうとするのだ。」無名人がかやうに叱つても天根が又重ねて問うたので、無名人は已むを得ず天下を治むる道を說いて曰ふには「汝は心を恬淡にし、氣を寂漠にして、物の自然性に順つて決して私意をさしはさまなかつたならば、必ず天下はよく治まるであらう。」

語釋 天根・無名人（皆寓言の人。） ○殷陽（山南水北を陽と云ふ。） ○何問之不豫也（成疏に云ふ「問ふ所の旨、甚だ我が心を悦豫せしめず」と。） ○莽眇之鳥（釋文によれば、輕虛の貌とある。） ○六極之外（上下四方を六極と云ふ、天地の外、四海の外の意。） ○遊二無何有之鄕一、以處二壙埌之野一。（無何有之鄕は逍遙遊に見ゆ、壙埌之野は逍遙遊には廣莫之野に作る、釋文の崔說によれば「壙埌とは猶ほ曠蕩の如きなり」と。） ○何帠（釋文によれば「帠音藝、法なり、一本に寱に作り、崔本には爲に作る」と。案ずるに爲に作る是に似たり。） ○感二予之心一爲（感は憾なり、動かすこと。） ○而天下治矣（而は則と通ず。）

後行（成疏に「其の正性に順って而る後、化を行ふ」とある、自然の本性に順って教化を行ふこと、やはり外部から無理をせぬことである。）○能二其事一而已矣（郭注には「其の能はざる所を爲さざるを言ふ」とある。卽ち、己に自然に備はった出來ることだけをする意。）○而曾二蟲之無レ知（成氏疏に云ふ、「それ鳥鼠、患を避くるに、曾て教を待たず、況んや民の知ある、豈に二蟲に如かざらんや、而るに必ず經式義度を作爲して以て其の常性を擾亂せんや」と。郭注は而を汝と讀むも今は採らず。）

天根遊二於殷陽一、至二蓼水之上一。適遭二無名人一而問焉曰、請問爲二天下一。無名人曰、去、女鄙人也。何問之不豫也。予方將下與二造物者一爲上レ人、厭則又乘二夫莽眇之鳥一、以出二六極之外一、而遊二無何有之鄕一、以處二壙埌之野一。汝又何帠以レ治二天下一感二予之心一爲。又復問。無名人曰、汝遊二心於淡一、合二氣於漠一、順二物自然一而無レ容レ私焉、而天下治矣。

訓讀 天根、殷の陽に遊びて蓼水の上に至る。適〻無名人に遭うて問うて曰く、天下を爲むることを請問すと。無名人曰く、去れ、女は鄙人なり。何ぞ問の不豫なる。予は方に將に造物者と人と爲り、厭けば則ち又夫の莽眇の鳥に乘じて、以て六極の外に出でて、無何有の鄕に遊び、以て壙埌の野に處らんとす。汝又何の帠ぞ、天下を治むるを以て予の心を感ずることを爲すと。又復問ふ。無名人曰く、汝、心を淡に遊ばし、氣を漠に合はせ、物の自然

深く神丘の下に穴して、以て熏鑿の患を避く。而かも曾て二蟲より之れ知無からんやと。

大意 天下を治むるには物の本性に順ふべきもので、法律制度を以て外部的に治むべきでないことを說く。

通釋 隱者の肩吾が或る時同じ隱者の狂接輿に會つた。接輿が曰ふには「近頃日中始は何か汝に話したか。」肩吾が曰ふには「私にかう云ふことを告げて吳れました、人君たるものは、己の身を中心として格式法度を割り出して下を治めて行つたならば、人民は凡て法に從ひ敎に化せないものはない」と。接輿が曰ふには「日中始の云ふことは人の本性を喪なふ似而非道德であつて、そんな遣方で天下を治めるのは丁度大海を徒步で渡り大河を手で掘るやうなことであり、又蚊に山を負はせると同じやうな話で、トテモ出來ないことである。全體聖人が天下を治むるには法律制度などを以て無理に外部を治めようとはしないで自分が正しくなつて、自然の性命を矯めるやうな無理をしなくなつて始めて敎化を行ひ、そしてどこまでも自己に備はり自己に出來ることを行ふのみである。さて鳥は敎へずとも自然に高く飛んで以てアミやイグルミの危害を避け、ハツカネヅミもやはり自然と社壇の下に深い穴を掘つて、人がくすべたり掘出したりする危害を避ける。か樣につまらぬ鳥獸でも敎へなくとも自ら身の危害を避けることを知つて居る。そして人間はと云へば固より是等の二蟲よりも智慧があるから何もワザ〳〵敎へなくとも自ら難を避け安らかに生を送ることを知つて居る。されば何も法度などを以て之を導く必要はない。」

語釋 經式義度(王念孫曰く、「義讀んで儀と爲す、義儀古字通ず、經式儀度とは皆法度を謂ふなり」と。) ○欺德(成疏に云ふ、「それ己を以て物を制せば、物その眞を喪ふ、欺誑の德、實道に非ずと」。卽ち物の眞性を喪ふ似而非道德の意。) ○涉レ海鑿レ河云云(孟子に所謂泰山を挾んで北海を超ゆと言はんが如く、とても不可能なことに喩へて云ふ。) ○治レ外乎(郭注に「其の性分の內を全うするのみ」とある。つまり法度などを以て無理に外部を治めないこと。) ○正而

太昊伏羲なり」と。釋文に司馬云ふ、「上古の帝王」と。） ○藏仁以要人（釋文に「崔云ふ、仁心を懷いて以て人を結ぶ」と。覺谷云ふ、「要人とは天下の民をして己に從はしめんことを邀むるを言ふ」と。） ○未始出於非人（成疏に云ふ、「未だ是非の域を出でず」と。即ち智心以て人を是非する境界を脱出せざること。） ○徐々（釋文に「安穩の貌」とあり。） ○于々（又、「知る所なき貌」とあり。成疏によれば「自得の貌」とあり。） ○一以己爲馬、一以己爲牛（成疏に云ふ、「物我を忘れ、是非を遣る、或は馬と云ふも或は牛と云ふも人の呼召に隨ふ」と。） ○未始入於非人（成疏に云ふ、「能く心知の境を超出す、是非の域に入らざる者なり」と。）

肩吾見狂接輿。狂接輿曰、日中始何以語女。肩吾曰、告我君人者、以己出經式義度、人孰敢不聽而化諸。接輿曰、是欺德也。其於治天下也、猶渉海鑿河、而使蚊負山也。夫聖人之治也、治外乎。正而後行、確乎能其事者而已矣。且鳥高飛以避矰弋之害、鼷鼠深穴乎神丘之下、以避熏鑿之患。而曾二蟲之無知。

訓讀 肩吾、狂接輿を見る。狂接輿曰く、日中始何を以て女に語れると。肩吾曰く、我に告ぐ、人に君たる者は、己を以て經式義度を出さば、人孰か敢へて聽いて諸に化せざらんやと。接輿曰く、是れ欺德なり。其の天下を治むるに於けるや、猶ほ海を渉り、河を鑿ち、而して蚊をして山を負はしむるがごときなり。夫れ聖人の治たる、外を治めんや。正しくして後行ふ、確乎として其の事を能くするのみ。且つ鳥は高飛して以て矰弋の害を避け、鼷鼠は

【訓讀】齧缺、王倪に問ふ。四たび問うて四たび知らずといふ。齧缺因つて躍つて大に喜び、行いて以て蒲衣子に告ぐ。蒲衣子曰く、而、乃ち今之を知るか。有虞氏は泰氏に及ばず。有虞氏は其れ猶ほ仁を藏して、以て人に要め、亦人を得たり。而れども未だ始めより非人を出でず。泰氏は其の臥するや徐徐、其の覺むるや于于。一は己を以て馬と爲し、一は己を以て牛と爲す。其の知情に信、其の德甚だ眞。而して未だ始めより非人に入らずと。

【大意】老子曰く、絕聖棄智、民利百倍。帝王の道は智を去るに如くなきを說く。

【通釋】古の隱者齧缺が其の師王倪に道を尋ねたが、四たび問うて四たびながら知らずと答へたので、齧缺は小躍し、大に喜び、わざ〱出かけて行つて此のことをば時の賢人蒲衣子に話した。之を聞いて蒲衣子が曰ふには「汝はやつと今頃そんなことを知つたのか。王倪のやうに知らぬが眞に知つて居るのである。其の例を擧げて云ふならば、あの虞舜は古の帝王泰氏には及ばない。なぜなれば有虞氏は偉いは偉いが、それでもやはり仁德を身に體して廣く之を施し天下の民をして己の德に懷かしめんことを要め、望み通りに人を從へることが出來た。然しながらまだテンデ智を以て人を是非する境界から脫して居ない。處がかの泰氏は其の寢ぬるや安靜、其の覺むるや自得するもの丶如く、人が己を馬と呼ばうと、或は牛と呼ばうと、人の呼ぶのに任せて、其の智には少しも僞なく、其の人格はあくまで自然のまゝであつて、未だ嘗て人を是非するやうな境界に墮して居ない。凡てそのやうに至人の貴ぶ所は知を忘るゝに在るから、王倪が四たびとも不知を以て答へたのも當然のことである。」

【語釋】齧缺問二於王倪一。四問而四不レ知（事は齊物論に見ゆ、參照すべし。）　○齧缺因躍而大喜（齧缺、不知の眞知たるを知る、故に大に喜ぶなり。）　○泰氏（成疏に云ふ「卽ち

內篇應帝王第七

【敘說】篇中に說く所は皆應に帝王たるべきの道である。故に篇に名づく。さて虛無因應の道は獨り匹夫全生の方たるのみではない、また以て王侯將相、國を治め下を御する要諦である。莊叟の說く所、多くは自然に順つて其の生を遂ぐるに在れども、また支那思想の通有性を失はずして帝王たるの道に說き至る。此の虛無を以て王侯の心術となすべき老莊の敎はのち法家者流に取り入れられて其の政治哲學の基本をなすものである。司馬遷が韓非の學說を述べて其の歸は黃老（老莊）に本づくと云つたのもつまり是れが爲めである。

齧缺問於王倪。四問而四不知。齧缺因躍而大喜、行以告蒲衣子。蒲衣子曰、而乃今知之乎。有虞氏不及泰氏。有虞氏、其猶藏仁以要人、亦得人矣。而未始出於非人。泰氏其臥徐徐、其覺于于。一以己爲馬、一以己爲牛。其知情信、其德甚眞。而未始入於非人。

上、そこに何の悶もなく、貧來れば貧に順ひ、富來れば富に應ずるのみである。」

語釋 霖雨（成疏に云ふ、「雨三日已上を霖となす」と。） ○有ㇾ不ㇾ任二其聲一、而趨擧二其詩一焉（宣穎曰く、「趨遽と爲す、力微にして歌聲と相かなふ能はず、急に其の詞を卒へんと欲す」と。即ち飢えて衰へて居る爲めに歌の調子をとりて歌ふことが出來ないから、文句だけを早口に唱へること。） ○子之歌ㇾ詩、何故若ㇾ是（成疏によれば、「子、詩を歌ふ、怨望なるに似たり、故に門を入り對怪しく其の由る所を問ふなり」と、即ち歌ふ調子が怨んで居るやうだがどう云ふわけだと疑して居るが、今姑らく通釋の如く見る。） ○然而至二此極一者、命也夫（林希逸に從へば、「然而を然則とし 我をして此の極に至らしめしものは旣に天でも地でもなく父でも母でもないとすれば、そはたゞ命數である。命とは自然の理であつて、天地の上に在り、所謂大宗師なり」と。）

載無し。天地豈に私に我を貧しくせんや。其の之を爲す者を求むれども得ざるなり。然り而して此の極に至る者は、命なるかなと。

大意 道を認得したる聖人は貧富窮達皆天命に出づることを達觀することを說く。

通釋 子輿は子桑と友人であつた。或る時長雨が十日もつゞいたので、子輿が曰ふには「こんなに雨が降りつゞいては何も仕事が出來ず金も儲からぬから貧乏な子桑は恐らく飢ゑて病氣して居ることであらう。」そこでお飯を持つて行つて食べさせようと思つて、子桑の門まで來て見ると、家の中では子桑が歌つて居るやうな哭いて居るやうな調子で以て琴を彈いて歌つて曰ふには「吾をして斯くも衰へ果てしめしは、そは父母なるか、將た天か人か。」飢ゑて其の聲を出し兼ねる爲めか、歌の文句を疾口で唱へて居るのである。子輿は家の內に入つて曰ふには「そこ許の歌ふ詩をきくに「父か母か天か人か」とあるが、何故にそのやうなことを曰ふのだ」子桑が曰ふには「一體誰が我をば此のやうに困窮のどん底に至らしめたかを考へても分からない、吾々に對して支配の力を持つて居るものは父母か天地かであるが、吾を生み育てゝ吳れた父母がマサカ吾が貧乏を欲する筈がない、又天地も極めて公平に萬物を覆載し化育するものなるが故に亦決して他人を富まし我れだけを貧乏にする筈がない。然らば全く誰の所爲かと他に求めて見てもチツトモ分からない。誰の所爲だか分からないが、自分が此のやうに困窮になつたのは、ツマリ是れぞと名指し得るものゝ所爲ではなく唯だ命即ち自然の命數自然の成り行きであるわい。故に父か（非ず）母か（非ず）天か（非ず）人か（あらず）、そは命なるかなと歌つたわけである。且貧富窮達皆命數に在りと達觀し居る以

に遁るの意、又齊物論に吾喪レ我の意である。）

○同則無レ好也。化則無レ常也、（同と化とは分けて用ひたので、大道に同じ大道に化す意であらうと思ふ、大道に同化すとは道と一つになること。無好とは好惡愛憎なき意。無常とは一物に拘泥執着せぬ意。）

子輿與子桑友、而霖雨十日。子輿曰、子桑殆病矣。裹レ飯而往食レ之。至子桑之門、則若レ歌若レ哭、鼓レ琴曰、父邪、母邪、天乎人乎。有レ不レ任其聲、而趨擧其詩焉。子輿入曰、子之歌レ詩、何故若レ是。曰、吾思夫使我至此極者、而弗レ得也。父母豈欲吾貧哉。天無私覆、地無私載。天地豈私貧レ我哉。求其爲レ之者、而不レ得也。然而至此極者命也夫。

訓讀 子輿、子桑と友たり、而して霖雨十日。子輿曰く、子桑殆ど病まんと。飯を裹んで、往いて之に食はしめんとす。子桑の門に至れば、則ち歌ふが若く、哭するが若く、琴を鼓して曰く、父か母か、天か人かと。其の聲に任へざる有りて、趨かに其の詩を擧ぐ。子輿入りて曰く、子の詩を歌ふ、何が故に是の若くなると。曰く、吾れ、夫の我をして此の極に至らしむる者を思へども、得ざるなり。父母豈に吾が貧を欲せんや。天に私覆無く、地に私

丘や請ふ而が後に從はんと。

【大意】知道の士は仁義禮樂を忘れ、聰明睿知を去る。所謂坐忘的の人物なるを說く。

【通釋】孔子の弟子、顏回が或る時孔子に申すには「私は大儲しました。」孔子が曰はれるには「何のことだ。」回が申すには「私は人の大切な道である仁義からスツカリ超脫することが出來ました。」孔子が曰はれるには「それは結構であるが、然しまだ十分ではないぞ。」他日また顏回がお目にかゝつて申すには「今度こそ大まうけしました。」孔子が曰はれるには「何のことだ。」回曰く「實は修養の大切な道である禮樂をスツカリ忘れて仕舞ひました。」孔子曰く「それは結構だ、然しまだ十分ではないぞ。」他日またお目にかゝつて申すには「私は大まうけしました。」「何のことだ。」回曰く「坐忘しました。」孔子が驚いて曰はれるには「坐忘とは初耳だか、一體何んのことだ。」そこで回の申すには「坐忘と申すのは形體を離脫し、知的作用を黜けること、即ち物の外形に捉はれず、是非の見を去りて大道に一致することを申します。」そこで孔子が曰はれるには「大道に同化する時は物に對して好惡の情、愛憎の念が起らないのみならず、物の常態に執着することがない。それこそ聖人の境界だ。汝はヤツパリ頭がいゝわい。俺は汝の先生だが、かうなつて見ると、今からは汝の後について勉强をしやう。」

【語釋】回益矣(忘れたるを以て益となす、忘の意義を悟るべし。)　○可矣(未だ盡さざるの辭。)　○蹵然(前にも出づ、立つて安からざるの貌、即ち不安さらに。成疏に云ふ、驚悚の貌と。)　○離レ形去レ知(上の二句を總べて云ふ。)　○同二於大通一(同は玄同なり、冥合一致すること。疏に云ふ、「大通は猶ほ大道の如し、道よく萬物を通生す、故に道を謂つて大通と爲す」と。)　○坐忘(宣穎曰く、「居然として萬有を遺去す」と。禪家の言に有無俱

○此所遊已（林希逸曰く「吾が遊ぶ所のもの此のく如きなり」）

顏回曰、回益矣。仲尼曰、何謂也。曰、回忘仁義矣。曰、可矣、猶未也。它日復見曰、回益矣。曰、何謂也。曰、回忘禮樂矣。曰、可矣、猶未也。它日復見曰、回益矣。曰、何謂也。曰、回坐忘矣。仲尼蹵然曰、何謂坐忘。顏回曰、墮枝體、黜聰明、離形去知、同於大通。此謂坐忘。仲尼曰、同則無好也。化則無常也。而果其賢乎、丘也請從而後也。

訓讀 顏回曰く、回、益せりと。仲尼曰く、何の謂ぞやと。曰く、回、仁義を忘れたり、と。曰く、可なり、猶ほ未だしと。它日復た見えて曰く、回、益せりと。曰く、何の謂ぞやと。曰く、回、禮樂を忘れたりと。曰く、可なり、猶ほ未だしと。它日復た見えて曰く、回、益せりと。曰く、何の謂ぞやと。曰く、回、坐忘せりと、仲尼蹵然として曰く、何をか坐忘と謂ふと。顏回曰く、枝體を墮て、聰明を黜け、形を離れ、知を去つて、大通に同ず。之を坐忘と謂ふと。仲尼曰く、同ずれば則ち好すること無きなり。化すれば則ち常無きなり。而果して其れ賢なるか、

が、折角の懇望だから道の大略を話して聞かせよう。さて俺の大先生（大宗師、大道）はな、大義によつて天地間の萬物を粉碎しても、自ら以て義とは思はず、恩澤を萬世に及ぼしても、自らは仁とは思ひ居らず、又天地開闢以前より存在して居ても年長者とは思はず、萬物を覆載して居る大なる天地をば更に之を覆ひ載せ、萬物を種々の形に創造し彫刻しても巧妙だとは思つて居らぬ。かくの如きが我が大先生の態度であつて、かの仁義を事とし是れを明辨するを以て得々たるものゝ比ではない。此の大先生即ち自然の大道こそ我が心を遊ばしむる所である。」

語釋　無莊之失ニ其美一云云（羅勉道曰く「無莊は莊飾を假らず、據梁は其の强梁に據る。」即ち裝飾を用ひずして自ら美、故に無莊を以て美人の名となす。强梁に據るは多力の義あり、故に據梁を以て强力者の名とす、共に假託の人なり。失、亡同じ、忘却蛻脱の意。成疏に云ふ「無莊は古の美人、道を聞く爲めの故に復た莊飾せず、而して自ら其の美色を忘る。據梁は古の多力の人、道を聞き雄を守るが爲めの故に其の力に勇まず。黃帝は軒轅なり、聖知あり、亦道を聞く爲めの故に能く其の知を忘遺せり。」三の其の字重し、固有の意あり。）　○皆在ニ鑪錘之閒一耳（成疏に云ふ「鑪は竈なり、錘は鍛なり。以上三人皆道を聞くに因つて然る後其の恃む所を忘れて以て其の眞に契ふ、猶ほ世閒の器物、鑪冶の打鍛を假りて以て其の用を成すものゝ如きのみ。今何ぞ自然の理として夫子をして我に敎示して以て其の道を成さしむるに妨あらんや。」林西仲曰く「至人敎ふるあらば、能く人をして其本質を失はしむ。況んや後に在つて傷を受くる者をや。」即ち林注の意は、無莊の美、據梁の力、黃帝の知は其の固有の質である。それでも至人の敎を受けて遂に各其の素質を失つて眞の道に悟入した。況んや我が黥や劓は堯から後でつけられたのであるから先生の敎を受けたら必ず直りさうに思ふ。）　○庸詎知夫造物者云云（林西仲曰く「黥劓傷の後、安んぞ天、我を息補して完成に歸へし、我をして以て鑪錘を受けしめんと欲するに非ざるを知らんや。則ち此に來るも亦益なきに非ざるなり。」郭慶藩は乘を載と解して曰く「黥劓せらるゝ時は則ち形體備はらず、之を息し之を補へば後完成す。言ふ心は造物者我をして先生に遇はしむ。安んぞ我をして一成體を載せて以て相隨はしめざるを知らんや。」かく見る時は乘成の二字、成るを乘じてと訓む。甕谷は此の二字を「天地生々の化に則る」と解す。今は林氏に從ふ。）　○噫未レ可レ知也（噫は歎辭、道を得るの容易ならざるを嘆ずるなり。林希逸曰く「未だ知るべからずとは言ふ心は未だ汝が便ち能く此くの如くなるを得ることを見ず」）　○吾師乎吾師乎云云（林希逸曰く「吾師乎より以下の數句は方に是れ箇の篇の名の大宗師の字を說き出す。皆是れ自然の道を形容す。」）　○虀ニ萬物一而不レ爲レ義云云（虀は碎なり。成疏に云ふ「素秋、霜降り、萬物を碎落するが如きに至ては、豈に情ありて斷割して義と爲さんや。青春の和氣、萬物を生育す、豈に情ありて恩愛して仁となさんや。」）　○長ニ於上古一而不レ爲レ老（林希逸曰く「天地の先に在るを言ふなり。千古萬古、常に此くの如く、安んぞ老少を以て之に名つくることを得んや。」）

所レ遊已。

訓讀　意而子曰く、夫れ無莊の其の美を失ひ、據梁の其の力を失ひ、黃帝の其の知を亡へる、皆鑪錘の閒に在るのみ。庸詎んぞ、夫の造物者の、我が黥を息して我が劓を補ひ、我をして成るに乘じて、以て先生に隨はしめざるを知らんやと。許由曰く、噫、未だ知る可からざるなり。我れ汝の爲めに其の大略を言はん。吾が師か、吾が師か。萬物を齏すれども義と爲さず。澤、萬世に及べども仁と爲さず。上古より長ずれども老と爲さず。天地を覆載し、衆形を刻彫すれども巧と爲さず。此れ遊ぶ所のみと。

通釋　かく云はれても意而子は退がずして曰ふには「かの古の美人無莊が己が美貌を忘れ、古の力士據梁が其の多力を忘れ、黃帝が其の叡知を忘れて眞の人となつたのは、恰も世間の器物が鍛冶師の手で爐中で金を鎔かし鍛へて作り出されると同樣に、此の三人が皆至人の敎化鍛錬を受けた爲めに外ならず。されば私が堯に散々に傷け殘はれてから先生の所へ慕ひ參つたのも、或はかの造物者が私の入れ墨を消したり、そがれた鼻を足して具れて、元々通りに完全の身體となつたのに勢込んで私をば先生に從つて敎を受けさせようとして居るのかも知れません。つまり無莊や據梁や黃帝等が何れも道を聞くことによつて各其の固有の性質まで打ち忘れて眞人間になつた位であるから私も先生に敎を受けたら堯から一時的につけられた黥や劓は或は消したり補つたりして眞の道に入ることが出來ようかと思ひます。そこで許由が云ふには「あゝ、其のやうに容易に道に入ることが出來るかどうか疑はしい

が曰ふには「成程さ樣かも知れぬが、然し折角來たことであるから、自由無碍なる大道に遊ぶことが出來なくとも、せめて大道の垣根ぐろでもよいから遊んで見たいと思ひますから是非御敎を願いたいものである。」許由が曰ふには「駄目〱、かの盲瞽の人は眉目秀麗なる容貌や靑や黃や色々な模樣を觀る資格がない。それと同じことで、今汝は最早やかの堯に散々傷けられて片輪になつて居るから、とても俺の敎を受ける資格がない。」

語釋　意而子（寓言の人。）　○資レ汝（林希逸は「汝を敎ふ。」林西仲は「資は猶ほ益の如し。」皆通ず。）　○明言二是非一（林希逸曰く「是非を辨別するなり。」）　○奚來爲軹（何爲ぞ來るやと言ふに同じ、何にしに來た。軹は語助。）　○黥劓（五等の刑（墨劓刖宮大辟）の二つ。）　○遙蕩恣睢轉徙之塗（林希逸曰く「前に所謂無極に摽挑し、塵垢の外に彷徨する意。遙蕩は放蕩なり、恣睢は縱橫なり、轉徙は變動なり。」林西仲曰く「遙蕩は義の拘はる所に非ず、恣睢は仁の拘はる所に非ず、轉徙は是非の拘はる所に非ず、此れ大道なり。」）　○藩（カキネ。林希逸曰く「藩は藩籬なり。言ふ心は我れ敢て其の堂奥を求めず、且らく願くは藩籬に至らん。卽ち是れ願くは其の略を聞んとなり。」）　○盲者瞽者云（盲は瞳子なくして見えざるもの、瞽は瞳子ありて見えざるもの。禮服の模樣、斧形を作すを黼と云ひ、兩己相背くを黻と云ふ。逍遙遊に瞽者は以て文章の觀に與かる無く、聾者は以て鐘鼓の聲に與かる無しとあるに同じ。）

意而子曰、夫無莊之失二其美一、據梁之失二其力一、黃帝之亡二其知一、皆在二鑪錘之間一耳。庸詎知夫造物者之不下息二我黥一而補中我劓上、使三我乘レ成以隨二先生一邪。許由曰、噫、未レ可レ知也。我爲レ汝言二其大略一。吾師乎、吾師乎。齏二萬物一而不レ爲レ義。澤及二萬世一而不レ爲レ仁。長二於上古一而不レ爲レ老。覆二載天地一、刻二彫衆形一而不レ爲レ巧。此

由曰、不ㇾ然。夫盲者無㆔以與㆓乎眉目顏色之好㆒、瞽者無㆔以與㆓乎靑黃黼黻之觀㆒。

訓讀 意而子、許由を見る。許由曰く、堯、何を以て汝に資せると。意而子曰く、堯、我に謂ふ、汝、必ず躬に仁義を服して、明かに是非を言へと。許由曰く、而、奚ぞ來ることをするや。夫の堯、既に已に汝を黥するに仁義を以てして、汝を劓るに是非を以てせり。汝將に何を以て夫の遙蕩恣睢轉徙の塗に遊ばんとするかと。意而子曰く、然りと雖も、吾、願はくは其の藩に遊ばんと。許由曰く、然らず。夫れ盲者は以て眉目顏色の好きに與ることなく、瞽者は以て靑黃黼黻の觀に與ることなし。

大意 道を知るの人は仁義を忘れ、是非の知見を去ることを說く。

通譯 意而子と云ふ隱者が或る時例の許由に面會した。許由が曰ふには「汝は此頃堯に會つたと云ふことだが、堯は汝に何を敎へたか。」意而子曰く「堯は私に向つて汝はあくまで仁義を實行し、ハツキリと是非の區別を立てるやうにと申しました。」許由が曰く「汝はとんでもないことを聞いた。それなら今頃俺の所へ來ても駄目だが、一體なにしにわざ／＼來たのだ。あの堯の奴目、最早や仁義と云ふつまらぬものを以て折角完全な汝の身體に入れ墨し、是非と云ふ物騷なものを以て汝の鼻をそいで仕舞つた。もう斯うなつては汝はとても仁義や是非と云ふやうな俗つぽいものに拘束されない自由無碍なる境地に遊ぶことは出來ぬ。もう俺の所に用はないから早く歸れ／＼。」意而子

自ら樂しく、又笑ふべきことに遇へば其の事（笑の原因となつて居る事變、即ち自然の排列）を吟味しなくても自然と可笑しいものである。されば自然の排列である死生窮達等々の事變に從容として直面し、變化のまに／＼推し移る時は廓然たる自然の大道に悟入することが出來る。孟孫氏の如きは此の寥天一に入れる人であるから母の喪に對してかくあることが出來、世間も之を善喪と褒めたゝへて居るのである。

語釋　相與吾レ之耳矣云々（甕谷曰く「人各其の見る所を是として、以て我にしくなしと爲す。是れ之を吾れとするなり。然れども我れの見る所、果して能く彼にまさることありや否や。是れ未だ知るべからず。故に詎んぞ吾が所謂之を吾れとするを知らんや、此を言ひて以て下文の自然にまかすことのまされりと爲すに如かざるを起す」と。）　○汝夢爲レ鳥而厲乎天云々（此の數句は上の夢覺の字面より起し來る。甕谷曰く「夢に鳥となり、夢に魚となるものは方に夢むる時、必ず夢を以て眞となす。則ち今の言ふものと雖も覺となすか、將た夢となすか、皆未だ知るべからず、此れ其の自然にまかするのまされりとなすに如かざる所以なり。」厲戾同じ、至なり。甕谷に漢書注によりて疾飛と解す。）　○造レ適不レ及レ笑、獻レ笑不レ及レ排（造は至なり、適は適意なり。笑ふに及ばずとは笑ふことを要せずとの意。獻レ笑とは物に對して笑を致すこと、排とは自然の排列即ち此の世の中の種々の出來事を云ふ。林希逸は下の排字を造物の排定と解し、此の排字を安排と解す、之によれば不及排とは笑ふべきことに會ふ時は思はずふき出すのであつて、其のことを安排して思案熟考するに及ばずとの意。）　○安レ排而去レ化（林希逸曰く「造物の間事々皆排定す、死生窮達得喪禍福皆已に定る、我れたゞ其の排する所に安んじ造化に隨つて去る時は乃ち以て造化の妙に入る可しと。」）　○寥天一（寥は寥廓なり、天一を形容せし辭。天は自然、一は唯一絶對の意にて道を云ふ、故に天一とは猶は天道と言はんが如し、即ち大宗師を云ふ。）

意而子見許由。許由曰、堯何以資レ汝。意而子曰、堯謂レ我、汝必躬服仁義而明言是非。許由曰、而奚來爲軹。夫堯既已黥レ汝以仁義、而劓レ汝以是非矣。汝將何以遊夫遙蕩恣睢轉徙之塗乎。意而子曰、雖レ然吾願遊於其藩。許

且也相與吾之耳矣。庸詎知吾所謂吾之乎。且汝夢爲鳥而厲乎天、夢爲魚而沒於淵。不識今之言者、其覺者乎、其夢者乎。造適不及笑、獻笑不及排。安排而去化、乃入於寥天一。

訓讀 且つや相與に之を吾とするのみ。庸詎ぞ吾が所謂之を吾とするを知らん。且つ汝、夢に鳥と爲つて天に厲り、夢に魚と爲つて淵に沒す。識らず、今の言ふ者、其れ覺めたる者か。其れ夢むる者か、適に造れば笑ふに及ばず、笑を獻ずれば排するに及ばず。排に安んじて、化を去れば、乃ち寥天一に入ると。

通釋 更に一歩を進めて論ぜんに、元來人は互に自己を是なりと思ふものだから汝が孟孫氏の喪に對する態度を怪むのも無理ならぬことであるが、然し自己が是なりと考へて居ることが果して是なりや否や容易に知ることは出來ぬ。假りに例を擧げて見ると、汝が夢を見て居る時は或は鳥となりすまして高く空に上り至り、或は魚となりすまして深く淵に沈んで行くのであつて、幻夢を以て現實だと思ひ少しも疑はない。して見るとかうして汝と話をして居るのも現で話をして居るのやら夢の中で話をして居るやら容易に定めることは出來ぬ。夢覺すら然り、況んや是非など云ふことは、にはかに定め得るものでない。されば是非の見を去つて自然に任し自然に安んずるに越したことはない。元來が世の中の仕組と云ふものは自然的であつて、愉快なことに遇へばわざ〳〵笑はなくても胸中

でも全く死んでなくなつて仕舞ふとは考へない。生を以て暫時の居宅と考へて居て、生の變化たる死を以て眞實の死とは認めない。孟孫氏は實に死生の夢より覺めて居るから喪に當りて人が哭すれば己も亦哭するのである、之は和光同塵、世と共に推し移る覺者として自から然かあるべき所である。

語釋　以ニ善喪ニ蓋ニ魯國ニ（郭注、喪字にて絕句し、蓋字を發語の辭となすも今取らず。林希逸曰く「蓋ニ魯國ニとは喪を善くするの名を以て一國に高きなり。」）　○進ニ於知ニ矣（養生主に進ニ乎技ニ矣とあるに句法同じ。喪禮を知る者よりも遙かに上に出づ。進は過ぐるの意。）　○惟簡レ之而不レ得。夫已有レ所レ簡矣（郭注は簡を擇ぶと解するも是ならず、簡は簡略の意。又此の二句を以て孟孫氏にかけて說く、亦是ならず。集解に姚說を引きて云ふ「常人は生死の情に束せられて以て哀痛を爲し、之を簡にせんとして得ず、性命の眞に於て已に簡にする所あるを知らず。」）　○不レ知レ所ニ以生ニ 不レ知レ所ニ以死ニ、不レ知レ就レ先、不レ知レ就レ後（林西仲曰く「就字は疑らくは孰字の誤」と、是に似たり。今之に從つて說く。四句の意は前章に所謂惡知ニ死生先後之所ニレ在と云ひ、反覆終始。不レ知ニ端倪ニ。と云ふに同じ。即ち先後は優劣の意。死生を超越して兩つながら忘る。況んや何れを優何れを劣とせんやとの意。岡松甕谷は後の二句を解して「先は生を謂ひ、後は死を謂ふ、生に就くの果して喜ぶべしと爲するを知らず、死に就くの果して悲むべしと爲すを知らず」と、亦通ず。）　○若レ化爲レ物、以待ニ其所レ不レ知之化ニ已乎（甕谷曰く「物は人なり。上の化字は造化を謂ひ、下の化字は死を謂ふ。若は順ふなり。言化生々の運に順つて人と爲り、以て其の世を終るを待つ」と。其所レ不レ知之化とは自ら念頭に置いて居らぬ死の意、上の不知所以死の不知に同じ。）　○且方將レ化云々（以下の四句は上の所レ不レ知之化の意を說明す。其の意味は通釋の如し。）　○吾特與レ汝、其夢未ニ始覺ニ者耶（宣穎曰く「未だ孟孫の知より進む若くなる能はざるなり」と。即ち死生を達觀し得ずして、禮の形式に捉はれて、孟孫氏の仕業を怪むに至るを云ふ。）　○有ニ駭形ニ而無ニ損心ニ（郭注に「變化を以て形の駭動と爲すのみ。故より死生を以て其の心を損せず。」又林西仲曰く「居喪の形あれども其の性を毀たず」と。）　○有ニ且宅ニ而無ニ情死ニ（情は實なり。且宅に就いては諸解あれども未だ安んぜず。姑らく且を一時暫時の意と解し、通釋の如く見る。且を夜旦の旦と解するもの皆取らず。）　○是自其所ニ以乃ニ（郭注に「夫れ常に覺める者は往くとして逆ふことある無し。故に人哭すれば亦哭す、正に自ら是れ其の宜しき所なり。」と解するにより、說く者或は郭象見る所の本、乃の字、下文の且字と合して且字に作られしものゝ如く看做し、下文且也の二字を上文に連ねて讀む。莊書、字を用ふること奇し。今姑らく林希逸林西仲等に從ひ乃にて句し、通釋の如く解す。）

に母の死を痛みもせず、喪中でも一向悲む樣子がない。か樣に涙も流さず、痛みもせず、悲しみもせないのに、善く母の喪を勤めたと云ふ評判が我が國中にゆきわたつて居る。一體世の中には其の事實がないのに善い評判を得ると云ふことがあるものでしやうか。私は實に不思議なことだと思ひます。」孔子が答へて曰はれるには「かの孟孫氏はあれで以て喪に居る禮を十分つくしたのだ。而も世間の喪禮を心得て居る者よりも遙かに進んだ所がある。元來死生は一體であると云ふ高所から觀れば喪禮の如きは虛飾を廢し簡略にすべき筋合のものであるのに、惟だ世人は之を簡略にせんとして而も未だ悟り切れないと見えて之を省き得ないのである。然るに孟孫氏は死生ふたつながら忘れて心にかけること無く、況んや又其の何れが勝り何れが劣つて居るなどゝ云ふことは少しも念頭に置いて居らず、たゞ造化の命に從つて眇たる人間に生れ、そして以て其の念頭にかけて居らぬ死を靜かに待つて居るのみである。孟孫氏はかゝる人であるから母の喪に當り能く涕なく慼まず哀しまざることを得たのである。孟孫氏のことは扨て置いて全く死生と云ふものは不可解のもので丁度死んで行くことが眞實の不死に歸することであるかも知れぬし、又化せずして生きて行くことが即ち已に死んで居ることかも知れぬ。孟孫氏は死生の夢より覺めて母の死に直面しても悲しむことがないのに獨り吾と汝とは全然此の夢から覺めて居らぬわい。汝が孟孫氏のことを怪むのも無理ならぬことである。且つ孟孫氏は世と共に推移する人物であるから母の死に當つてもわざと哭を立てることなく世間並に從つて外形の變化即ち喪服を着けたり、哭泣の禮などはするが、然し死生の一體たるを識る者なれば母の死の爲めに心を痛め悲しむことがない。又彼は死と云ふものに就いて一時の居宅たる肉體の變化を認むるが精神ま

將化、惡知不化哉。方將不化、惡知已化哉。吾特與汝其夢未始覺者邪。且彼有駭形而無損心、有旦宅而無情死。孟孫氏特覺。人哭亦哭。是自其所以乃。

訓讀　顏回仲尼に問うて曰く、孟孫才は、其の母死して、哭泣するに涕無く、中心慼まず、喪に居て哀しまず。是の三者無くして、善喪を以て魯國を蓋へり。固に其の實無くして其の名を得る者有るか。回一に之を怪むと。仲尼曰く、夫の孟孫氏は之を盡くせり。知よりも進めり。惟之を簡にせんとして得ず。夫れ已に簡にする所あり。孟孫氏は生くる所以を知らず、死する所以を知らず、先に就くを知らず、後に就くを知らず。化に若うて物と爲り、以て其の知らざる所の化を待つのみ。且つ方に將に化せんとするの、惡んぞ化せざるを知らんや。方に將に化せざらんとするの、惡んぞ已に化せるを知らんや。吾れ特り汝と其夢未だ始めより覺めざる者か。且つ彼は駭形有れども損心無く、旦宅有れども情死なし。孟孫氏は特り覺めたり。人哭すれば亦哭す。是れ自から其の乃る所以なり。

大意　前章に同じ。但し道を得るの士は和光同塵、世俗の禮に從つて推移す、必ずしも喪に臨みて歌ふの奇を爲すものに限らざることを說く。

通釋　顏回が孔子に問うて曰ふには「あの孟孫才は其の母親が死んだ時、哭泣する場合に一滴の涙も流さず、心

くに、人は離る可からざる道を眞に我がものとすることによつてこそ逍遙自在であることが出來るのである。」

子貢が孔子に問うて曰く、「世に畸人と謂ふのは如何なる人柄を指して申すのでせうか。」孔子曰く、「畸人とは其の態度が獨り常人と異つて居て、天卽ち自然と合一するものを謂ふ。つまり曰つて見れば、天から視たる小人物は人から視たる大人物であり、人から視たる大人物は天から視て小人物であるのだ。」

語釋 丘天之戮民也（陳壽昌曰く、「猶ほ帝縣未だ解けずと言はんが如し」と。又德充符に孔子を評して天刑レ之、安可レ解乎と云へる語を參照すべし。） ○與レ汝共レ之（宣穎曰く、「吾れ汝と姑らく我の以て道と爲す所に由らんとするなり」と。） ○魚相二造乎水一、人相二造乎道一云々（魚の水を離るゝこと能はざるが如く、人は道を離るゝこと能はず、自ら道に向上するが人の性である、たゞ物欲に囚はるる時に道に害あり。是れなくば道に向ふの本性の安定を失ふことなく益々向上の道を辿ることが出來るとなり。生は性に通ず。） ○故曰（上を結んで云ふこと。） ○相忘（我と物と一つになり自由無碍なる心境を云ふ。） ○子貢曰、敢問二畸人一（此の一節は胡方も云へる如く、別に是れ一時の言で、之を引いて以て上文の孔子の意を發明したのである。畸人とは獨異の人、卽ち獨り常人と態度の異なつて居る人物、成疏に云ふ、「畸は不耦の名なり」と。） ○侔（等なり、合なり。）

顏回問二仲尼一曰、孟孫才其母死、哭泣無レ涕、中心不レ慼、居レ喪不レ哀。無二是三者一、以レ善喪蓋二魯國一。固有下無二其實一而得二其名一者上乎。回一怪レ之。仲尼曰、夫孟孫氏盡レ之矣。進二於知一矣。惟簡レ之而不レ得。夫已有レ所レ簡矣。孟孫氏不レ知レ所二以生一、不レ知レ所二以死一。不レ知レ就レ先、不レ知レ就レ後。若レ化爲レ物、以待二其所レ不レ知之化一已乎。且方

共にせんと。子貢曰く、敢へて其の方を問ふと。孔子曰く、魚は水に相造り、人は道に相造る。水に相造る者は、池を穿ちて、養ひ給し、道に相造る者は、事無くして生定まる。故に曰く、魚は江湖に相忘れ、人は道術に相忘ると。子貢曰く、敢へて畸人を問ふと。曰く、畸人なる者は、人に畸にして天に侔し。故に曰く、天の小人は人の君子、人の君子は天の小人なりと。

通釋　そこで子貢が尋ねて曰ふには、「方の外に遊ぶ彼の三子の態度は御敎によつてよく分かりましたが、先生は一體如何なる態度に從つて居られまするか。」孔子が曰はれるには「自分の如きは方の内に束縛せられて居るもので、云はゞ天より刑戮を受けて居る罪人であつて、是れぞと云つて聞かせる程の態度がありはしない。然しながら吾は汝を始めとして多くの弟子たちと共に姑らく吾が信ずる道に由つて行きたいと思ふ。」そこで子貢が又問うて曰ふには「失禮では御座いますが、其の道に從つて行く具體的の方法を御尋ね致します。」孔子が敎へて曰はれるには「道と云ふ者はしばらくも離るゝことの出來ないもので、離るゝことの出來るのはそれは道ではない、道と人との關係はか樣な有樣だから道に從つて行くには何も六ケしい方法があるものでない。譬ば魚はその本性として自然に水に向つて行くものである如く、人は何人でも生れつきとして自然に道に向つて進み至るものである。自然と水に向ふ魚は池を掘つて少しでも水さへ得れば營養は十分である如く、自然と道に向上するを以て本性として居る人は心が俗事に囚はれることさへなかつたならば道に向ふの本性は安定を失ふことはない。だから之を約めて曰ふならば、魚は、その本性に適へる水の滿々たる江や湖の中に於てこそ吾と水と一つになつて游泳自在であることが出來る如

たネブト、つぶれたヨウ。）　○惡知死生先後之所在（成疏に云ふ、「先は勝なり後は劣なり」と。俗情よりすれば生は優、死は劣、彼等よりすれば、死生一如、何れに優劣があるか、そんなことは念頭に置いて居ない。）　○假於異物、託於同體、忘其肝膽、遺其耳目。（宣穎曰く、「卽ち圓覺經に地・風・水・火・四大合して體を成すの說なり、蓋し生の偶然たるを視るのみ」と。つまり異物に假るとは人の身體は地・風・水・火の如き異なつた物を假りて出來たとの意。同體に託すとは上のやうな異つた物が集つて同じ人間と云ふ身體を作りそれに生命が一時的に宿つたとの意。成玄英曰く、「既に形質の虛假、欣愛すべきなきを知る、故に能く內は則ち臟腑を忘れ外は則ち其の根竅を忘るゝなり」と。）　反覆終始、不知端倪（成玄英曰く、「端は緒なり、倪は畔なり、反覆は猶ほ往來の如きなり、終始は猶ほ生死の如きなり」と。林西仲曰く、「生はいづこより來り、死は何處に從つて去るや、總べて不知に付す」と。）　○芒然（成玄英曰く、「無知の貌」と、釋文に「李云ふ、無係の貌」と。つまり無念無想の意。）　○彷徨（成玄英曰く、「彷徨逍遙は皆自得逸豫の名なり」と。）　○憒憒然（又曰く、「憒憒は猶ほ煩亂の如きなり」と。）　○觀（示すなり。見せびらかすこと。）

子貢曰、然則夫子何方之依。曰、丘天之戮民也。雖然吾與汝共之。子貢曰、敢問其方。孔子曰、魚相造乎水、人相造乎道。相造乎水者、穿池而養給。相造乎道者、無事而生定。故曰、魚相忘乎江湖、人相忘乎道術。子貢曰、敢問畸人。曰、畸人者、畸於人而侔於天。故曰、天之小人、人之君子、人之君子、天之小人也。

訓讀　子貢曰く、然らば則ち夫子は何の方にか之れ依ると。曰く、丘は天の戮民なり。然りと雖も吾れ汝と之を

生活の態度に於て非常な距離がある。然るにさう云ふ人々の所へ此の方が汝を弔問に往かせたと云ふのは此の方の考が陋劣であつた。汝が彼等にヒドイことを云はれたのも無理はない。實に彼等は大自然の友となり、天地渾沌の元氣たる大道に心を遊ばしむる者で、人の生をばイボやコブのやうに邪魔物と考へ、死をばネブトや癰がつぶれたやうに氣もちのよいことだと思つて居る。全體彼等の態度が此の様であるから、死生の中、どちらが勝つて居るか劣つて居るかなどと云ふことは少しも念頭に置いて居ない。そして彼等は元來人と云ふものは色々異つた物質が假りに和合して人間と云ふ同じ姿が出來、それに生命が一時託せられたに過ぎないものであると云ふことを合點して居るから、内はよく肝膽を始めとして凡ての内臓機關を忘れ、外はよく耳目等の外部的機關を忘れて、一切外物の誘惑から超脱して居る。そして無始以來、反覆往來窮りなき死生終始に關して、其の究極如何と云ふが如きは凡て之を不知に付して念慮を煩はさない。そして全く無念無想、俗世間の外に超越し、無爲恬淡の行に自適して居るのである。されば何とて彼等はうるさくも俗世間の禮儀などを行つて、世人の耳目に示して得意がると云ふやうなことをしようや、そんなことは彼等には思ひもよらぬことである。」

語釋 修行無レ有（甕谷曰く、「絶えて其の自ら修むるの迹あるを見ることなし」と。） ○外二其形骸一（外は忘れること、形骸は體の如く凡て外形を作ること。） ○方之外、方之内（方は方域を謂ふ、卽ち世間のこと、方の内外とは世間の禮法の内外を云ふ、外に遊ぶとは之に拘泥せぬこと、内に遊ぶとは之に從つて行くこと。） ○不二相及一（おつつかないこと、卽ち隔りのあること。） ○與二造物者一爲レ人（人は友の意。自然と冥合一致すること。） ○遊二乎天地之一氣一（林希逸曰く、「造物の初に遊ぶを言ふなり」と。天地未萌前の沖氣、卽ち大道を云ふ。） ○附贅縣疣（くつついて居るイボ、ぶらさがつて居るコブ。） ○決疣潰癰（破れ

端倪。芒然彷徨乎塵垢之外、逍遙乎無爲之業。彼又惡能憒憒然爲世俗之禮、以觀衆人之耳目哉。

訓讀 子貢反つて以て孔子に告げて曰く、彼は何人ぞや。修行有ること無くして、其の形骸を外にす。尸に臨んで歌ひ、顏色變ぜず。以て之に命ずる無し、彼れ何人ぞやと。孔子曰く、彼は方の外に遊ぶ者なり、而して丘は方の內に遊ぶ者なり。外內相及ばず、而るに丘女をして往いて之を弔せしむ。丘は則ち陋なり。彼れ方に且に造物者と人たり、而して天地の一氣に遊ばんとす。彼は生を以て附贅縣疣と爲し、死を以て決疣潰癰と爲す。夫れ然るが若くば、又惡んぞ死生先後の在る所を知らんや。異物に假り、同體に託し、其の肝膽を忘れ、其の耳目を遺れ、反覆終始、端倪を知らず、芒然として塵垢の外に彷徨し、無爲の業に逍遙す。彼れ又惡んぞ能く憒憒然として世俗の禮を爲して、以て衆人の耳目に觀さんやと。

通釋 子貢は二人にヒドイことを云はれて、いそいで孔子のもとへ歸つて來て、告げて曰ふには、「彼等は一體どう云ふ人物でせうか。特に身を修め行を正しくする樣子もなく、外形と云ふものを全く度外視して居る。人の死骸に面と向つて平氣で歌をうたつて、少しも哀しさうな顏をして居ない。實になんともかんとも名のつけやうがない代物で、一體どう云ふ人間どもでせうか。」そこで孔子が申されるには、「彼等は世間の禮法に捕はれない自由の人々であつて、自分の如きは世間の禮法に從つて行く者であるから、禮儀に拘泥しない者と之に從つて行く者とは

人の死骸に臨んで歌ふのは禮儀と云ふものでせうか。」孟子反・子琴張の二人が互に顏を見合はせて笑つて曰ふには、「此の連中にはトテモ禮の本意などは分かりやしない。」

語釋 莫然有レ閒（堯谷曰く、「莫は漠に同じ虛靜の貌、事なきを言ふなり」と。有レ閒とは暫らく時日が經過するを云ふ。）○待レ事（宜穎曰く、「喪事を助治するを言ふなり」と。）○編レ曲（又曰く、「歌曲を編次するを言ふ」と。）○嗟來（來は助語。堯谷曰く、「來は哉と通ず、孟子の盍歸乎來は此と同じ」と。）○而已反二其眞一（而は汝なり、林希逸曰く、「猶ほ其の初に復ると言はんが如し」と。最初の出どころ、一番の本元に立ち歸ること。）○猗（林西仲曰く、「歎辭なり」と、成疏には相和する聲と云ふ、堯谷は猗は猶ほ矣の如しと。林說によればア、と訓じ、意味は通解の如くであらう。下の二說に從へばイーと音し、歌の餘韻をあらはす爲めの助語である。）○是惡知二禮意一（是は子貢を指して云ふも、自ら孔子一派を含めて云ふ。禮意は禮の本意。孔子は禮と云ひ禮と云ふ、玉帛を謂はんやとか、又は喪はをさまらんよりは寧ろかなしめとか申して居られる程であるから、もとより禮の本意を知つて居られたから、二人の此の評は中らないが、當時一般の社會に在りては、虛禮に流れて禮の本意を忘れて居た。此の時代的弊風を刺つたのであらう。）

子貢反以告二孔子一曰、彼何人者邪。修行無レ有、而外二其形骸一。臨レ尸而歌、顏色不レ變。無二以命一レ之、彼何人者邪。孔子曰、彼遊二方之外一者也、而丘遊二方之內一者也。外內不二相及一、而丘使二女往弔一レ之。丘則陋矣。彼方且與二造物者一爲レ人、而遊二乎天地之一氣一。彼以レ生爲二附贅縣疣一、以レ死爲二決疣潰癰一。夫若レ然、又惡知二死生先後之所一レ在。假二於異物一、託二於同體一、忘二其肝膽一、遺二其耳目一、反覆終始、不レ知二

○相忘以生（郭象曰く、「其の生を以て意となさゞるを謂ふ」と。） ○無所終窮（成玄英曰く、「終窮は死なり、相與に生を忘れ、復た死を忘れ、死生混一、故に化に順つて窮りなきなり」と。卽ち生死を超脫して不死不生の門に入るを云ふ。）

莫然有閒而子桑戶死。未葬。孔子聞之、使子貢往待事焉。或編曲、或鼓琴、相和而歌曰、嗟來桑戶乎、嗟來桑戶乎。而已反其眞。而我猶爲人猗。子貢趨而進曰、敢問、臨尸而歌、禮乎。二人相視而笑曰、是惡知禮意。

訓讀 莫然として閒有りて子桑戶死す。未だ葬らず。孔子之を聞き、子貢をして往いて事を待たしむ。或は曲を編し、或は琴を鼓し、相和して歌つて曰く、嗟來、桑戶や、嗟來桑戶や。而已に其の眞に反る。而るに我れ猶人たり、猗と。子貢趨つて進んで曰く、敢へて問ふ、尸に臨んで歌ふは禮かと。二人相視て笑つて曰く、是れ惡んぞ禮の意を知らんと。

通釋 其の後、靜かに何事もなく暮れたが、程經て三人の中の子桑が死んだのである。まだ葬式が濟まなかつたので、孔子が之を聞いて、弟子の子貢をして往いて葬儀を助けしめた。處が子貢が行つて見ると、一人が歌の節を作り、一人が琴の調子を合はせて居る。そして一緒にそろへて歌つて曰ふには、「あゝ桑戶や桑戶や、汝は死して本當の落着所に立ち歸つたのに、俺たちは死ぬことも出來ないで、矢張りかうして人間として生き殘つて居る。あゝなさけないことだ。」子貢は此の有樣を見て大に驚き、小走りに近よつて曰ふには「失禮ながら御たづねしますが、

爲。孰能登天遊霧、撓挑無極、相忘以生、無所終窮。三人相視而笑、莫逆於心、遂相與友。

訓讀 子桑戸・孟子反・子琴張、三人相與に語りて曰く、孰か能く相與する無きに相與し、相爲す無きに相爲さん。孰か能く天に登り、霧に遊び、無極に撓挑して、相忘れて以て生き、終窮する所無からんと。三人相視て笑ひ、心に逆ふこと莫く、遂に相與に友たり。

大意 前章に同じ。

通釋 子桑戸・孟子反・子琴張と云へる三人が相ともに語つて曰ふには、「今の世に何等の野心もなく、全く無我無心の態度で相交はり、少しも作爲的の考なく、全く無爲自然のまゝに行爲し得る人があるだらうか。又此の俗世間を超脱して清淨なる天空に登り雲霧に遊び、無窮の天地に躍り廻り、其の生を超脱して不死の境地に遊び得る人があるだらうか。若しかゝる人あらば與に友たらん。」か樣に曰つて三人が互に顔見合はせてニツコリ笑つた。互に心に少しもわだかまりなく仲のよい友だちとなつた。

語釋 相與於無相與（林希逸曰く、「相くみするに無心を以てするを言ふなり」と。）　○相爲於無相爲（又曰く、「無爲にして爲すを言ふなり」と。）　○登天遊霧（又曰く「物の外に遊ぶを言ふなり」と、卽ち一切の物欲を離れたる無執着の境界を形容したのである。）　○撓挑無極（撓挑は跳躍の意。逍遙遊に遊無窮者とあるに同じ。卽ち萬物に順應し、之と與に推移して極りなきを云ふ。所謂自在無碍の天地に逍遙するを謂ふなり。）

鑄型にはめられて始めて人間と云ふ形をもつて生れて來て居りながら、俺は人間だ、人間だ、人間以外のものになることはいやだと曰つたならば、かの造化の神は必ずや之を不吉な代物だと思ふであらう。今假りに天地をば一大鎔鑛鑪と見立て、造化卽ち自然の作用をば大鑄物師と考へ、吾々人間を始めとして凡ての物をば鑄型にはめられて作り出される金としたならば、如何なる物にならうと又何處へ生れて行かうとそれは凡て造化の神の自由であつて吾々が之をいけないと拒むことは出來ぬ。だから吾れは死んで鼠肝にならうと蟲臂にならうと、そんなことは何とも思つて居らぬ、たゞ從容死に就くのみである」と。子來はかく云ひ終つて、スヤ〳〵と眠り、又急に醒めたるが如く、安らかに此の世を去つたのである。

語釋 喘喘（成疏に云ふ、「氣息急なり」と、いきのせはしいこと。） ○叱避、無レ怛レ化（又云ふ、「訶聲なり」と。林希逸曰く、「怛は驚なり、その哭泣を以て將に化せんとする人を驚怛する無きを謂ふなり」と。化は死を云ふ。） ○以レ汝爲二鼠肝一乎、以レ汝爲二蟲臂一乎（釋文に王云ふ、「鼠肝蟲臂は微蔑至賤に取るなり」と。子犂の心では、子來が臨終に當り死生の道に關して迷つて居りはしないかと、ワザと至微至賤のものを捉へ來つて之を試みたのである。） ○悍（忤逆なり、不順の意。） ○大塊（前に出づ、天地の意、天地は自然の總名、故に又自然の意となる。） ○善二吾生一者、乃所三以善二吾死一也（此に於て死に處するの道を識るべきである。孔子曰く、生を知らず、いづくんぞ死を知らんやと。生を知れば自ら死を知り得るのである。徒らに死のみを知らんとせば反つて之を知る能はず。） ○鏌鋣（古の名劍の名、吳人干將、吳王の爲めに劍を造る。妻の名は鏌鋣、因て雄劍を名けて干將と曰ひ、雌劍を名けて鏌鋣と曰ふ。） ○犯二人之形一（犯は遇なり、遇然人の形をして生れて來たこと。又犯は範なり、範は型なり。鑄型にはめられて人の形をして生れたこと。皆通ず。） ○成然寐、蘧然覺（寬谷曰く、「成然は恬々として睡に就く貌、言ふ心は從容として死に就く狀を謂ふなり」と。呂注に「死生の際、寤寐の從容として之が爲めに變せざるが若きを言ふなり」と。卽ち死生を寤寐（ねおき）ぐらゐにしか考へて居ない、スヤ〳〵ねむるやうな態度を以て死んで行つたとの意。）

子桑戸・孟子反・子琴張、三人相與語曰、孰能相二與於無一相與、相二爲於無一相

戸にもたれて平然として病人と語りて曰ふには、「造化の神は偉大なものだ、折角汝を人として生んで置きながら、今度は汝を何物にしようとして居るのかしら、又汝を何處へ行かしめようとして居るのかしら、即ち汝をばあの小さな鼠の肝にでもしようとして居るのか、それとも又汝をばあのつまらぬ蟲の臂にでもしようとして居るのかしら。即ち汝は死んだら鼠の肝か蟲の臂のやうなつまらぬものになるのかも知れぬが大丈夫か。」さすがに死生を達觀して居る子來は堂々と答へて曰ふには、「父母と子との關係は、父母の命なら子たるものは東西南北、何れの方向へでも從つて行かねばならぬ。處が陰陽即ち自然の作用と人との關係は、父が子に對する關係ぐらゐではなく、絶對不可抗力である。彼れ自然が我に死を近けたのに、すなほに之を聽かないで死ぬまいとするのは、こちらが自然に逆ふのであつて彼れには何の罪もありはしない。そも〳〵天地自然は我と云ふものを形體の上に積み込み、即ち我に形體を與へ、生きると云ふことによつて我を骨折らせ、年をとると云ふことによつて我に樂をさせ、死と云ふことによつて我に最後の休息を與へて居る。かく形生老死は皆天地自然の力より出で來れるものなるが故に吾が生を善しとして歡迎せば、吾が死をも亦善しとして歡迎するわけあひとなる。即ち生も自然の力、死も自然の力なれば生を好み死を惡むべき筋のものでない。更に譬をあげて自然と人間との關係を考へて見るに、今上手な鑄物師があつて金を鑄んとする時に、金がをどつて俺はつまらぬものになることはいやだ、是非とも鏌鋣の如き名劍になりたいと曰つたならば、その鑄物師は必ずから思ふであらう、「何を作らうと此の方の自由であるのに鏌鋣の名劍になりたいなど、注文がましいことを云ふ奴はどうも不吉な金である」と。それと同じことで、いま一たび造化の神の

往而不可哉。成然寐、蘧然覺。

訓讀 俄かにして子來、病有り。喘喘然として將に死せんとす。其の妻子環りて之を泣く。子犂往きて之を問うて曰く、叱、避けよ、化を怛かす無れと。其の戸に倚り之と語つて曰く、偉なるかな造化、又將に奚にか汝を以て爲さんとする、將に奚にか汝を以て適かしめんとする。汝を以て鼠肝と爲すか、汝を以て蟲臂と爲すかと。子來曰く、父母の子に於ける、東西南北、唯命に之れ從ふ。陰陽の人に於ける、翅父母に於けるのみならず。彼れ吾を死に近づけて、我れ聽かずんば、我れ則ち悍なり。彼れ何ぞ罪あらん。夫れ大塊、我を載するに形を以てし、我を勞するに生を以てし、我を佚するに老を以てし、我を息するに死を以てす。故に吾が生を善しとするは、乃ち吾が死を善しとする所以なり。今大冶、金を鑄んに、金踊躍して、我れ且に必ず鏌鋣たらんとすと曰はば、大冶必ず以て不祥の金と爲さん。今一たび、人の形を犯して人のみ人のみと曰はば、夫の造化は、必ず以て不祥の人と爲さん。今天地を以て大鑪と爲し、造化を以て大冶と爲さば、惡にか往いて不可ならんやと。成然として寐ね、蘧然として覺めぬ。

通釋 俄かにして今度は子來が病氣になつた。餘程病氣が重く、呼吸がはげしくて今にも死にさうであつたので其の妻子どもは子來を取り卷いて泣いて居た。そこへ友人の子犂が見舞に往つて此の有様を見て「シツ、そこを退きなさい、そんなに泣いて、靜かに往生せんとする人を驚かしてはならぬ。」と曰つて、家族を退け、己れは病室の

ぬ。

語釋 浸假（浸は漸なり、假は至るなり、病氣が漸次惡くなること。）○得者時也、失者順也云云（得失は猶ほ生死と言はんが如し、此の數句は既に養生主に見ゆ。）○古之所謂縣解也（林西仲本は也を懸字に作り解字にて句す、今從はず。）○物有結之（甕谷曰く、「生を貪ぼる心に囚はるゝを謂ふなり」と。）

俄而子來有病。喘喘然將死。其妻子環而泣之。子犁往問之、曰、叱、避、無怛化。倚其戶與之語曰、偉哉造化、又將奚以汝爲。將奚以汝適。以汝爲鼠肝乎、以汝爲蟲臂乎。子來曰、父母於子、東西南北、唯命之從。陰陽於人、不翅於父母。彼近吾死、而我不聽、我則悍矣。彼何罪焉。夫大塊載我以形、勞我以生、佚我以老、息我以死。故善吾生者、乃所以善吾死也。今大冶鑄金、金踊躍曰、我且必爲鏌鋣、大冶必以爲不祥之金。今一犯人之形、而曰、人耳人耳、夫造化者、必以爲不祥之人。今以天地爲大鑪、以造化爲大冶、惡乎

り。而して自ら解くこと能はざる者は、物之を結ぶ有り。且つ夫れ物天に勝たざること久し。吾れ又何ぞ惡まんやと。

通釋 そこで子祀が曰ふには「さう云ふ所を見ると汝は此の病に罹つたのを惱く思つて居るか。」子輿が曰ふには、「どうして吾れは之を惡まうぞ。なほそればかりでない。病氣が段々進んで來て、吾が左臂を變化して雞のやうな格好としたならば、自分は此の運命に逆ふことなく、寧ろ之をよいこと幸に、左臂に向つて夜明に時を告げることを求めるであらう。更に病氣が段々惡くなつて今度は右の臂を變化してヘジキユミとなしたならば、自分は之をよいこと幸にして、右臂に向つて小鳩の炙燒を求めるであらう。更に又病氣が惡くなつて、吾が尻を化して車の輪となし、精神をば馬となしたならば、自分は此の自家用の馬車に乘ることであらう。さうなれば更めて他の馬車に乘る必要がなくなつて、此の上もなく重寶なことゝなるぢやないか。元來人が生命を得て此の世に生れて來るのは生れる時節が來たからのことであり、又生命を失ふのは死ぬべき順番が來たからのことである。されば時が來て生れたからとて有頂天にならず、死すべき順番が來たからとて周章哀しまないで從容として之に處れば、死の哀も生の喜も心を動搖せしむることが出來ぬ。かく死生を超脱するのを古に於ては凡ての繫縛から解脱したと謂つて居る。然るに自ら解脱することが出來ない者は死生を始めとして凡ての物によりて繫縛されて居るからのことである。それはさて置き元來、人はもとより凡ての物が大自然の力に打ち勝つことの出來ないのは昔からのことである。自分は此の打ち勝ち得ざる造化の力によつて此の樣な病氣になつたのであるから今更之を憎いとは思は

語釋　拘拘（拘攣してのびざるの貌。或は云ふ、背曲るの貌と、皆同じ。）　○曲僂（傴僂なり、セムシ。）　○句贅（項椎なり、即ちウナジの處にある背骨で、少し高くなつて居る所を云ふ。人間世篇には會撮に作る。）　○陰陽之氣有沴（沴は亂なり。成疏に云ふ、「陰陽二氣陵亂して調はず、遂に一身をしてこの疾篤きに遭はしむ」と。）　○跰𨇤（林希逸云ふ、「扶曳して行くの貌」と。）

子祀曰、女惡之乎。曰、亡。予何惡。浸假而化予之左臂以爲雞、予因以求時夜。浸假而化予之右臂以爲彈、予因以求鴞炙。浸假而化予之尻以爲輪、以神爲馬、予因而乘之、豈更駕哉。且夫得者時也、失者順也。安時而處順、哀樂不能入也。此古之所謂縣解也。而不能自解者、物有結之。且夫物不勝天久矣、吾又何惡焉。

訓讀　子祀曰く、女之を惡むかと。曰く、亡し。予何ぞ惡まん。浸假して、予の左臂を化して以て鷄と爲さば、予は因つて以て時夜を求めん。浸假して予の右臂を化して以て彈と爲さば、予は因つて以て鴞炙を求めん。浸假して予の尻を化して以て輪と爲し、神を以て馬と爲さば、予は因つて之に乘らん、豈に更に駕せんや。且つ夫れ得るは時なり、失ふは順なり。時に安んじて順に處れば、哀樂入ること能はざるなり。此れ古の所謂縣解な

發背上有五管、頤隱於齊、肩高於項、句贅指天。陰陽之氣有沴、其心閒而無事、跰𨇤而鑑於井、曰、嗟乎、夫造物者、又將以予爲此拘拘也。

訓讀 俄にして子輿病あり、子祀往いて之を問ふ。曰く、偉なるかな、夫の造物者、將に予を以て此の拘拘たらしめんとす。曲僂背に發し、上に五管有り、頤齊に陰れ、肩項より高く、句贅天を指す。陰陽の氣沴るゝ有りと、其の心閒にして無事、跰𨇤として井に鑑みて曰く、嗟乎、夫の造物者、又將に予を以て此の拘拘たらしめんとするやと。

通釋 其の後、間もなくして子輿が病氣にかゝつたので、子祀が見舞に行つた。病人の子輿が曰ふには、「かの造物者の力は偉大なものである。俺をば此の樣に背中を曲げて仕舞はうとして居る。即ち脊椎病が背中に發し、背中が曲り頭を低く垂れて居るから五臟が反つて頭より上に在り、アゴは臍の所に隱れ、肩は頭の頂上よりも高く、句贅とてウナジの處にある背骨は天の方向を指して居ると云ふ有樣である。是れはつまり萬物構成の原動力である陰陽の二氣が亂れ調はずして遂に此の病をひき起したのであつて、人力では如何ともすることが出來ない。」かく云ふ彼れの心は靜かにしてゆとりあり、病を以て憂となさず、杖にすがり足をひきずりながら井戸端に行つて水鏡をして曰ふには「あゝ吾れながらあきれた。造物者は折角俺をば滿足な身體に生みつけて置きながら、又此のやうにセムシにして仕舞はうとして居る。」

爲レ友。

訓讀 子祀・子輿・子犂・子來、四人相與に語つて曰く、孰か能く無を以て首と爲し、生を以て脊と爲し、死を以て尻と爲さん。孰か死生存亡の一體たるを知る者ぞ、吾れ之と友たらんと。四人相視て笑ふ、心に逆ふ莫し。遂に相與に友たり。

大意 死生の一體たるを識り、死に直面して從容たる眞人的人物を描寫す。

通釋 子祀・子輿・子犂・子來と云ふ四人が或る時與に語り合つて曰ふには「世間に虚無自然の大道をば己が一身中の首と考へ、生をば脊と考へ、死をば尻と考へ得る人、即ち死生存亡と云ふものをば本來一體のものであると云ふことを悟つて居る人はないかしらん、若し斯かる至れる人があるならば吾々どもは是非ともその人と親友になるであらう。」から曰つて四人の者は互に顔を見合せて會心の笑を漏し、心の中に少しの蟠りもなく、意氣投合して遂に相與に親しい友達となつた。

語釋 四人相視而笑、莫レ逆ニ於心一（四人相視て笑つたのは御互こそ死生存亡を視て一となす悟道に入つて居るぢやないかとの會心の笑である、以心傳心、それを口で云はなくても、たゞ破顔一番しただけで以て、互に心が溶け合ひシックリ合つて莫逆の友となつた。）

俄而子輿有レ病、子祀往問レ之。曰、偉哉夫、造物者、將下以レ予爲中此拘拘上也。曲僂

爲の最初の修行である。次に洛誦の孫とて書物を誦讀すると云ふ過程を經、次に瞻明とて書物を審かに研究し、次には聶許とて書物で研究したことを小聲で曰つて見て心に納得し、次には需役とて道に關して心に納得したことを實行してたしかめる。次には於謳とて之を歌つて味ひ、次には玄冥とて之を冥想する。次には參寥とて廓然として大悟し、是に至つて疑始とて道を聞くを得たのである。かく樣に道を聞くには工夫の次第があるのであつて御前の如きはまだ中々そこまで至ることは出來ぬ。」

【語釋】副墨之子（副はそへる、助となる意、墨は文字、文字は道を傳ふるのに助となるものなるが故に文字を謂つて副墨と曰ふ。或は云ふ、副墨とは書物の意と亦通ず。子とは道を父と見立てゝ之を傳ふる文字を子と云へるなり。）○洛誦之孫（書物を讀むこと、洛は絡に通ず、書物は文字を聯絡して讀誦するものなるが故に書を讀むことを洛誦と云へり。文字が子ならば之を讀むことは孫になる故に洛誦の孫と云へり。一說には洛は樂に同じ。樂んで諷誦するなりと。）○瞻明（林西仲云ふ、「審かに視るなり」と。）○聶許（陳壽昌云ふ「耳に附けて私語し、之を聽きて心に許すなり」と、卽ち聶は囁に同じ。サヽヤクこと。道に關して學び得たことを口にさゝやきて心に了得する意。口にさゝやくは吾々が思索などの際に往々やることで、つまり小聲で云つて見て分つたかどうか念を押す所作である。）○需役（需は待つなり、役は行なり、行つて以て之を求むる意。）○於謳（陳壽昌云ふ、「詠歎して長吟するなり」と、心に得たる道を吟味して味ふこと。是れ心に得る所あるものゝ好んでなす所である。論語に見ゆる曾點詠歸の心境も恐らくは是なり。）○玄冥（宣穎云ふ、「寂寞の地」と。卽ち冥想の境地に入ること。）○參寥（又云ふ、「參は參悟。寥は空虛なり」と。廓然大悟の意か。）○疑始（又云ふ、「端倪なきに至つて乃ち道を聞くなり、疑始とは始あるに似て而も未だ嘗て始あらず」と、卽ち疑始とは道の異稱である。）

子祀・子輿・子犂・子來、四人相與語曰、孰能以無爲首、以生爲脊、以死爲尻。孰知死生存亡之一體者、吾與之友矣。四人相視而笑、莫逆於心。遂相與

（エターナル）の世界を見出した意、此の恒久の世界には死もなく生もない、故に此の世界の發見はやがて不死不生に入ると云ふことになる。而して不死不生に入ると云ふことは卽ち生成死滅の無き理である大道を認得悟了した意である。）○殺レ生者不死、生レ生者不生（此の二句は上の不死不生を說明したのである。）○無レ不レ將也、無レ不レ迎也（將は送なり、將迎は猶ほ死生と言はんが如し。）○攖寧（攖は拂なり擾なり、寧は安なり、卽ち萬物をみだし安んぜしむる意、卽ち大道は上文にいふが如く萬物の主宰にして之を破壞死滅せしむると同時に生成化育せしむるが故に此の名あり。）

南伯子葵曰、子獨惡乎聞之。曰、聞諸副墨之子。副墨之子聞諸洛誦之孫、洛誦之孫聞之瞻明、瞻明聞之聶許、聶許聞之需役、需役聞之於謳、於謳聞之玄冥、玄冥聞之參寥、參寥聞之疑始。

訓讀 南伯子葵曰く、子獨り惡にか之を聞けると。曰く、諸を副墨の子に聞けり。副墨の子は諸を洛誦の孫に聞き、洛誦の孫は之を瞻明に聞き、瞻明は之を聶許に聞き、聶許は之を需役に聞き、需役は之を於謳に聞き、於謳は之を玄冥に聞き、玄冥は之を參寥に聞き、參寥は之を疑始に聞けりと。

通釋 以上道を悟了することの容易ならざるを聞いて、子葵が尋ねて曰ふには「然らばそこ許は一體何處で道を聞かれたのです。」女偊が曰ふには「自分は道をば副墨と云ふ子卽ち文字を學ぶことによつて之を得たのである。」以下女偊が道を悟了するに至りし徑路を人の姓名に擬して說いたのである。先づ第一に文字を學ぶことが道を得る

ざる無し。毀らざる無く、成さざる無し。其の名を攖寧と爲す。攖寧なるものは、攖して而る後成す者なりと。

【通釋】それでも自分は大事を取つて、彼の側について居て敎へ込んだが、彼は三日かゝつて始めて此の世の中を遺れることが出來た。彼が既に此の世の中を超脱することが出來たから、自分は更に又色々敎へ込んで見た。處が彼は今度は七日かゝつて始めて一切の外物を遺れることが出來た。そこで吾は更に敎へた處が、彼は今度は九日かゝつて生の執着から超脱することが出來た。既に人生の重大事たる生を超越することが出來れば、始めて朝徹とて心に最早や何等の閊へなく朝旦澄徹の氣の如く胸中朗らかとなる。かくて始めて絶對の相を見極めることが出來、さうなれば最早や古今の別がなくなる。卽ち永久の相、恒久の流を認識することが出來、かくなつて始めて不死不生の門に入ることが出來る。然らば不死とは何ぞ、凡ての生あるものを死滅せしむるもの是れなり、不生とは凡ての生物を生成せしむるものであつて、つまり不死不生とは大自然の力、卽ち大道を謂ふのである。卽ち大道と云ふものは死の原理であり、又生の原理であり、更に破壞の原理であり、又構成の原理である。故にその異名を攖寧と曰ふ。攖寧と云ふのは凡ての物を拂亂して而る後に成就せしむとの意である。」

【語釋】外二天下一（外は遺るゝ意、天下は社會、世間の意。世の愛慾名利等々より超脱することは必ずしも困難でない。故に三日間の修養を要した。不死不生の門に入る最初の階段である。）　○外レ物（物は一切萬物の意で、天下より遙かに範圍が廣い、故に之を忘るゝ爲めには一段の工夫を要す、是れ七日を要したる所以なり。以下幾多の修養を經て、遂に不死不生の門たる大道を認得するを得となり。）　○朝徹（成疏に朝は旦なり、徹は明なり、死生一觀、物我兼忘、惠照豁然として朝陽の初めて啓くが如し、故に之を朝徹と謂ふ也と。林希逸によれば朝徹とは胸中朗然たること平旦澄徹の氣の如しと。卽ち眞理を徹見した時のスガ〳〵しき氣もちを云つたのだと見る。）　○見レ獨（相對的見地より脫して絶對觀を得たるを云ふ。）　○無二古今一（時間觀念を超越すること、卽ち永久

へた聖人となることが出來るかしらん、甚だ心もとなし。若し敎へて聖人となすことが可能ならば、聖人の德を得て居る自分が聖人の智を有して居る彼に敎へるのであるから、さう六ケ敷しいことはないと思ふ。

【語釋】南伯子葵（齊物論に見えた南郭子綦のこと、葵は綦の誤なるべし。）○庶幾其果爲聖人乎（陳壽昌曰く、「之を冀しとするの詞」と。どうか希望通りに聖人となつて異れゝばよいがなあ、中々六ケしさうだとの意。）

吾猶守而告之、三日而後能外天下。已外天下矣、吾又守之。七日而後能外物。已外物矣、吾又守之。九日而後能外生。已外生矣、而後能朝徹。朝徹而後能見獨。見獨而後能無古今。無古今而後能入於不死不生。殺生者不死、生生者不生。其爲物無不將也、無不迎也。無不毀也、無不成也。其名爲攖寧。攖寧也者、攖而後成者也。

【訓讀】吾猶ほ守りて之に告ぐ、三日にして而る後に、能く天下を外にす。已に天下を外にす、吾又之を守る。七日にして而る後に能く物を外にす。已に物を外にす、吾又之を守る。九日にして而る後に能く生を外にす。已に生を外にす、而る後に能く朝徹す。朝徹して而る後に能く獨を見る。獨を見て而る後に能く古今無し。古今無くして而る後に能く不死不生に入る。生を殺す者は不死、生を生ずる者は不生なり。其の物たるや、將らざる無く、迎へ

聖人之道、我有聖人之道、而無聖人之才。吾欲以教之、庶幾其果爲聖人乎。不然、以聖人之道、告聖人之才、亦易矣。

訓讀 南伯子葵、女偶に問うて曰く、子の年長ぜり、而して色孺子の若きは何ぞやと。曰く、吾道を聞けばなりと。南伯子葵曰く、道は學ぶを得べきやと。曰く、惡、惡んぞ可ならん、子は其の人に非ざるなり。夫の卜梁倚は、聖人の才有れども、聖人の道無く、我は聖人の道有れども、聖人の才無し。吾以て之を敎へんと欲す、庶幾くは、其れ果して聖人たらんか。然らずんば、聖人の道を以て、聖人の才に告ぐ、亦易し。

大意 道を認得することの容易ならざるを說き明かす。殊に末段に言ふ所は是れ莊生自らの修養の過程を說述したもので、而も行文極めて奇である。

通釋 南伯子葵が女偶と云ふ人に問うて曰ふには「そこ許は年を取つて居られるのに、顏色は若々として小供のやうであるのは、一體どう云ふわけです。」女偶が答へて曰ふには「それは自分が聖人の道を聞いて吾がものにして居るからである。」子葵が曰ふには「その聖人の道を自分の如きものは學ぶことが出來るでせうか。」女偶曰く「ああどうして出來ようや、そこ許の如きはまだ中々さう云ふ資格はない。あの卜梁倚と云ふ人物は聖人の智を持つて居るけれども聖人の德を備へて居ない。自分は聖人の德を持つて居るが聖人の智を持つて居ない。そこで自分は彼れ卜梁倚を敎へ込んで、聖人の德を備へさせようと思つて居るが、どうかさうありたいものだが、うまく智德兼ね備

【語釋】狶韋氏得レ之以挈二天地一（口義に「狶韋氏より下に十三箇の得の字あり、皆此の道を得て而る後に能く此くの如くなるを言ふなり。狶韋氏は古の帝王なり。挈天地とは猶ほ乾坤を整齊すと言はんが如し。」）○襲二氣母一（釋文に崔云ふ「元氣の本を取る」と、萬物生成の力を取得する意か。）○維斗得レ之終古不レ忒（成疏に「維斗は北斗なり、衆星の綱維となる故に之を維斗と謂ふ。忒は差なり。」終古とは釋文に猶ほ常と言はんが如しと、成疏には古は始なりと。今之に從ふ。又釋文に崔云ふ、「終古は久なり」と、千古、太古の意、亦通ず。）○堪坏得レ之以襲二崑崙一（成疏に「崑崙は山の名なり、北海の北に在り。堪坏は崑崙山の神名なり、襲は入なり、堪坏は人面獸身、道を得て崑崙山へ入りて神と爲る」）○馮夷（水神の名。）○大川（黄河なり。）○肩吾得レ之以處二太山一（肩吾上に見ゆるものとは違ふ。成疏に「肩吾は神の名、道を得るが故に東岳に處りて太山の神となる。」釋文に司馬云ふ「肩吾は山神なり死せずして孔子の時に至る」と。太一）○黄帝云云（事は十八史略にも見ゆ。參照。）○顓頊云云（成疏に「顓頊は黄帝の孫、卽ち帝高陽なり、亦玄帝と曰ふ、云云、道を得て北方の帝となる。玄は北方の色、故に玄宮に處るなり。」玄は黑色、五色五方に配すれば黑は北に當る。）○禺强云云（成疏に「禺强は水神なり、亦禺京と曰ふ。人面鳥身、龍に乘りて行く、顓頊と並に軒轅（黄帝）の胤なり、復た道を得と雖も、帝位に居らずして水神と爲る。水の位は北方、故に位を北極と號す。」釋文に簡文云ふ「北海の神なり。」五行（木火土金水）を五方に配すれば水は北に當る。）○西王母云云、成疏云ふ「少廣は西極の山名なり。王母は太陰の精なり、豹尾虎齒善く笑ふ、舜の時、王母使を遣し玉琯を獻ず、漢の武帝の時、靑桃を獻ず、顏容十六七の女子の若く、甚だ端正なり常に西方少廣の山に坐す。復た生死せず故に始終を知るなし。」）○彭祖云云（彭祖のことは逍遙遊に見ゆ、成疏に云ふ「五伯は昆吾を夏伯となし、大彭豕韋を殷伯となし、齊桓晉文を周伯となす、合して五伯となす。彭祖道を得、長年にして上は有虞に至り下は殷周に及ぶ、凡八百年なる所以なり。」五伯に就いては諸說あり、三代に求むるあり、周一代に求むるあり、周一代に求むるにも數說ありて一定せず、齊桓、晉文、宋襄、秦穆、楚莊是れ一說。姑らく殷に求むる說に從ふ。）○傅說云云、成疏に云ふ「武丁は殷王の名なり、號して高宗と曰ふ、高宗夢に傅說を得、之を天下に求めしめ、陝州河北縣傅巖版築の所に於て之を得たり、武帝を相けて奄然淸泰、傅說星の精なり。而して傅說の一星は箕尾の上に在り、然れども箕尾は是れ二十八宿の數にして東方を維持す、故に東維に乘り、箕尾に騎すと言ふ、而して角亢（二星の名、各二十八宿の一）等の星と比並行列す故に列星に比すと言ふ。」又釋文に崔云ふ「傅說は死して其の精神東維に乘り龍尾に託して乃ち宿に列す。」）

南伯子葵問二乎女偊一曰、子之年長矣、而色若二孺子一、何也。曰、吾聞レ道矣。南伯子葵曰、道可レ得レ學邪。曰、惡、惡可。子非二其人一也。夫卜梁倚、有二聖人之才一、而無二

其の始めを知ること莫く、其の終りを知ること莫し。彭祖之を得て、上有虞に及び、下五伯に及ぶ。傅説之を得て以て武丁に相として、天下を奄有し、東維に乘り、箕尾に騎して、列星に比せり。

【大意】 上文の神レ鬼神レ帝の句を敷衍しつゝ道の力の偉大を説く。

【通釋】 古の帝王豨韋氏が天地を統整したのも道を會得した爲めであり、伏戯が萬物生成の元氣を我が物にしたのも此の道を會得したからであり、北斗が常に衆星を統卒して誤ることがないのも此の道を得たからであり、日月が終始休息することなく健やかに運行して下土を照すのも、道を得たからであり、堪坏と云ふ神が、烟波縹緲たる北海の彼方にある崑崙山の主となつたのも、此の道を得たからであり、馮夷と云ふ水神が濁浪滔々たる黄河の神となつたのも、此の道を得たからであり、肩吾が泰山の神となつたのも、道を得た爲めであり、黄帝が雲に乘り、龍に駕して上天したのも、此の道を得たからであり、帝顓頊が玄宮に居て北方を支配したのも此の道を得たからであり、禺強と云ふ水神が北極に立つて北海を治めたのも、此の道を得たからであり、西王母が西方の少廣山に座して不老不死の淸福を得たのも亦此の道を會得した爲めであり、彭祖が上は虞舜の時から下は周の五覇時代までも長壽を保つたのも亦此の道を得たからであり、傅説が殷の武丁の宰相として天下を全有し、死して後ち星となり東維と云ふ星に乘り、箕と云ふ星の尾に騎つて、角亢の如き多くの星と並び位したのも亦此の道を會得したからである、之を要するに道なるものは宇宙を貫き、古今を通じて實在する所の力であつて鬼神帝王を始めとし凡てのものに偉大なる力を與へるものである。此の道を體得したものを眞人と謂ふのである。

體得。）　○在₂太極之先₁而不ㇾ爲ㇾ高云云（太極を易の太極の意に解するは非。成疏に「太極は五氣なり、六極は六合なり、道は五氣の上に在りて高遠となさず、六合の下に在りて深邃と爲さず。」と此の解之を得たり。五氣は五方の氣即ち全空間の意。先は下文に照して上字と看なすべし。六極は應帝王にも見ゆ、天地四方即ち全宇宙を謂ふ。）　○先₂天地₁生而不ㇾ爲ㇾ久云云（成疏に「天地に先んじて生ずるも長久となさず、上古より長じて耆艾となさず。」下の句は下文にも見ゆ。先天地生は老子に見ゆ。呂注に「高深は其の形を言ひ、久老は其の時を言ふ」と。）

狶韋氏得ㇾ之、以挈₂天地₁、伏戲得ㇾ之、以襲₂氣母₁、維斗得ㇾ之、終古不ㇾ忒、日月得ㇾ之、終古不ㇾ息、堪坏得ㇾ之、以襲₂崑崙₁、馮夷得ㇾ之、以遊₂大川₁、肩吾得ㇾ之、以處₂太山₁、黃帝得ㇾ之、以登₂雲天₁、顓頊得ㇾ之、以處₂玄宮₁、禺强得ㇾ之、立₂乎北極₁、西王母得ㇾ之、坐₂乎少廣₁。莫ㇾ知₂其始₁、莫ㇾ知₂其終₁。彭祖得ㇾ之、上及₂有虞₁、下及₂五伯₁。傅說得ㇾ之、以相₂武丁₁、奄₂有天下₁、乘₂東維₁、騎₂箕尾₁、而比₂於列星₁。

訓讀　狶韋氏之を得て以て天地を挈げ、伏戲之を得て以て氣母を襲どり、維斗之を得て終古忒はず、日月之を得て終古息まず、堪坏之を得て以て崑崙を襲どり、馮夷之を得て以て大川に遊び、肩吾之を得て以て太山に處り、黃帝之を得て以て雲天に登り、顓頊之を得て以て玄宮に處り、禺强之を得て北極に立ち、西王母之を得て少廣に坐す。

ら本となり、自ら根となり、未だ天地あらざる古より以て固より存す。鬼を神にし帝を神にし、天を生じ、地を生ず。太極の先に在つて、高しと爲さず、六極の下に在つて、深しと爲さず。天地に先だちて生じて久しと爲さず。上古より長じて、老いたりと爲さず。

大意 此に至りて始めて道の字を點出す、是れ大宗師なり。即ち道の偉大性を說く。

通釋 さて大宗師即ち自然の大道は、既に齊物論にも述べた如く、實際の力（作用）と其の力の證徵とあれども、固より道自からが手を下して事をなすとか、或は又道其のものゝ形態と云ふものはない。道の實體が既に斯くの如きものであるから之を傳ふるには心を以て心に傳ふることは出來るが、品物のやうに手から手へ受け渡しすることは出來ぬ。從つて心に會得することが出來るが、目を以て見ることは出來ぬ。又道は自生自發的のもので自分自身が自己の本となり根となつて生じたもので外の物が生み出したものでない。且つ未だ天地あらざる太古より存在して居て其の起原が分からぬ。そうして鬼神や帝王も神聖にし天や地を生み出すのも皆道の力である。又道は全宇宙に遍在するものであるから、全空間の最上位に在つても高遠なりと思はず、全世界の最下部に在つても深遠なりと思はぬし、天地より先きに生じて居ても長久とは思はず、上古より成長して今日に至つて居ても長壽とは思つて居ない、即ち道は形の上からは至高至深であり、時の上からは至長至久である。

語釋 道有レ情有レ信。無レ爲無レ形（齊物論に若有眞宰。而特不得其朕。可行已信。而不見其形。有情而無形。とあるを參照せよ。情は實なり、即ち道の實際の力、作用、働きを云ふ。信は信證、即ち道の力によつて萬物が構成されたり破壞されたりすることで、即ち道の證徵、らはれを云ふ 此の句は齊物論の有情、可行已信の意に同じ。無爲無形の句は其の不得其朕、無形とあるに同じ。道は其の所謂眞宰に同じ。）○可レ傳（禪語の所謂以心傳心の意。）○可レ得（禪語の所謂冷暖自知の意。）

ば人は猶ほ之を師として學び效はんとするであらう。況して一切萬物が世話になり、凡ての物の變化のもとづく所である大道卽ち大宗師に從はんとするは云ふまでもない。

語釋 夫藏₂舟於壑₁云云(口義に「壑中の舟、澤中の山は藏することのまことに密なりと謂ふべし。而れども時あつてか之を失ふ。夜半有力は造化を言ふなり、負之而走とは失ふなり。」) ○藏₂小大₁有ㇾ宜。猶有ㇾ所ㇾ遯(口義に「小大とは舟と壑と山と澤となり、壑の大なる、以て舟を藏くす可し。澤の大なる、以て山を藏くすべし。大を以て小を藏くす。是れ宜しきあり。」甕谷曰く「遯は猶ほ遯逃して去ると言はんが如し。蓋し物に就いて言ふ。我に在りては失ふなり。」) ○藏₂天下於天下₁(成疏に「夫れ天下を天下に藏す者は豈に之を藏さんや、蓋し藏くす所なきなり」と。林西仲曰く「藏くすあれば遯るゝあり、藏くすなければ遯るゝなし」と。口義に「之を自然に付するなり」と。) ○恒物之大情(恒物とは萬物の意、大情とは一般の情態。換言すれば自然の眞理と言はんが如し。) ○犯₂人之形₁(下文にも見ゆ、犯は範なり、造化の型にはめられて人と生れたこと。) ○遊₂於物之所₁ㇾ不ㇾ得ㇾ遯而皆存₁(所字は存字まで管到す。諸說多く遯字まで管到すとなすも、從はず。) ○善ㇾ夭善ㇾ老。善ㇾ始善ㇾ終(善とは上文の善吾生の善に同じ、始終は猶ほ生死と言はんが如し。言ふ心は壽夭死生皆天命卽ち自然の力である。故に聖人は其の來るがまゝに受け込んで心を動かすことが無い。上文に古の眞人、生を悅ぶを知らず、死を惡むを知らずとの意。) ○萬物之所ㇾ係、而一化之所ㇾ待(口義に「萬物の所ㇾ係者は道なり、一化の待つ所の者も道なり。此れ所謂大宗師なり。」)

夫道有ㇾ情有ㇾ信。無ㇾ爲無ㇾ形。可ㇾ傳而不ㇾ可ㇾ受。可ㇾ得而不ㇾ可ㇾ見。自本自根、未ㇾ有₂天地₁、自ㇾ古以固存。神ㇾ鬼神ㇾ帝、生ㇾ天生ㇾ地。在₂太極之先₁而不ㇾ爲ㇾ高、在₂六極之下₁而不ㇾ爲ㇾ深。先₂天地₁生而不ㇾ爲ㇾ久。長₂於上古₁而不ㇾ爲ㇾ老。

訓讀 夫れ道は情有り、信有り。爲す無く、形無し。傳ふ可くして、受く可からず。得べくして見る可らず。自

【大意】凡ての物が自然(道)の支配を受けて居るから、何もかも凡て自然に打ち任かすべきを説く。

【通釋】さて〳〵舟を海岸の入り込んだ谷間に藏し、山を大きな澤の中に藏して、シツカリ藏しおほせたと思つて居ても、夜中に力の強い者が知らぬ間に舟や山を負うて走り去ることがある、卽ち大自然と云ふものは、どの樣にシツカリ藏して置いたものでも、何時の間にか之を移し易へて行衞のわからぬ樣にして仕舞ふものである。然るに道理に暗い者は之を知らずして何時までも大丈夫であると思ひ込んで居るのは滑稽である。か樣に小なる舟や山を大なる壑や澤に藏す樣に大小の形に從つてうまく藏しても、何處かへ拔け出て仕舞ふものである。まして然らざる場合に於ては猶更である。ところが若し天下を天下に藏すときは、藏して藏さず從つて逃げうせる心配なし、卽ち凡て自然に打ち任かして置く時は物皆其の所を得て何一つとして逃げうせることがない。是れが凡ての物の一般の情態卽ち自然の眞理である。然るに常人は人と云ふ形を稟けて生れた位なことを馬鹿に喜んで先き程の話の舟や山を藏したやうに何んとかして之を失はないやうにと手を盡して居るが、人の形體の如きものは、千變萬化してもと〳〵際限しの無いもので、トテモ常人の思惑通りに行くものでないから、人の形を稟けたことなどは樂んで執着すべきでない、これ位なことが樂しいなら世の中には樂しいことがザラにあつて困る程だ。されば聖人は常人の如く區々たる人身を喜び、之を保持せんが爲めに色々手を盡して結局徒勞に歸すると云ふやうなことをせず、凡ての物が逃げうせずして皆安全に存在する場所とも云ふべき物の自然性に順應し、夭來れば夭を是認し、壽來れば壽を是認し、生來れば生を是認し、死來れば死を是認し、凡て大自然のなすがまゝに打ち任せて置く。かゝる聖人あら

堯而非桀、不如兩忘而閉其所譽とあり、參照。）　○夫大塊云々（大塊の字面は齊物論に見ゆ、天地の意、天地は自然の總名、故に又自然の意となる。以下數句下文にも見ゆ。）

夫藏舟於壑、藏山於澤、謂之固矣。然而夜半有力者、負之而走、昧者不知也。藏小大有宜。猶有所遯。若夫藏天下於天下、而不得所遯。是恆物之大情也。特犯人之形、而猶喜之。若人之形者、萬化而未始有極也。其爲樂可勝計邪。故聖人將遊於物之所不得遯而皆存。善夭善老。善始善終。人猶效之。又況萬物之所係、而一化之所待乎。

訓讀　夫れ舟を壑に藏し、山を澤に藏して、之を固しと謂ふ。然かも夜半、力有る者、之を負うて走る、昧者は知らざるなり。小大を藏して、宜しきことあるも、猶ほ遯るゝ所あり。若し夫れ、天下を天下に藏せば、遯るゝ所を得ず。是れ恆物の大情なり。特人の形を犯して猶ほ之を喜ぶ。人の形の若き者は萬化して未だ始めより極まり有らざるなり。其の樂みたる計るに勝ふ可けんや。故に聖人將た物の遯るゝを得ずして皆存する所に遊び、夭を善しとし、老を善しとし、始を善しとし、終を善しとす。人猶ほ之に效ふ。又況んや萬物の係る所にして、一化の待つ所をや。

【訓読】泉涸れて、魚相與に陸に處り、相呴するに濕を以てし、相濡するに沫を以てするは、江湖に相忘るゝに如かず。其の堯を譽めて桀を非らんよりは、兩ながら忘れて、其の道に化するに如かず。夫れ大塊我を載するに形を以てし、我を勞するに生を以てし、我を佚するに老を以てし、我を息するに死を以てす。故に吾が生を善しとするは、乃ち吾が死を善しとする所以なり。

【大意】人は道に同化すべきを説く。

【通釋】泉の水が涸れて魚がとも〴〵に陸上に横たはつた時、互に助け合はんとして口から少しばかりの濕氣や水沫を吹き出して濕し合つても何の役にも立たぬ。それよりも大きな河や廣い湖の中で我と水と一つになつて自在に泳ぎ廻るに越したことはない。之と同様に吾々人間も堯を譽めたり桀を毀つたりするよりも毀譽善惡是非兩ながら忘れて自然の大道に同化するに越したことはない。そも〳〵天地即ち大自然は我を生じ之に形體を與へ、生きると云ふことによつて我を骨折らせ、年をとると云ふことによつて我に樂をさせ、死と云ふことによつて我に最後の休息を與へて居る。かく形生老死は皆天地自然の力より出で來り、生死畢竟一に歸すべきものなる故、吾が生を是認するのは、やがて吾が死をも亦是認するわけあひとなる。是れ古の眞人が生を説ぶを知らず、死を惡むを知らざる所以である。

【語釋】泉涸云々（以下四句、天運篇に見ゆるも大意少しく異る。參照せよ。副墨に「人の此の道を離るゝ能はざるは猶ほ魚の水を離るゝ能はざるが如し。苟も此より離るゝ時は則ち一は一ならず、而して是非毀譽、棼然として以て生ぜん、兩ながら忘れて道に化する者の得たるにいづれぞや」と此の一節を解し得て明快である。下文に孔子が子貢に說いて魚相忘乎江湖、人相忘乎道術と云へる一節參照せよ。甕谷曰く「呴煦同じ、口氣を以て之を濕ほすを謂ふ。」濡一に溽に作る、音ジュ、濕の意。）　○與其譽堯云々（外物篇には與其譽

父と爲す。而して身猶ほ之を愛す、而るを況んや其の卓なるをや。人特君あるを以て、己れに愈れりと爲す。而して身猶ほ之に死す、而るを況んや其の眞なるをや。

【大意】死生をはじめとして凡ての支配力である道の愛敬し尊貴すべきを說く。

【通釋】そも〳〵生あれば必ず死あるは猶ほ晝あれば必ず夜あるが如く、皆天命卽ち自然の法則である。獨り死生晝夜のみならず、凡て人力では如何ともし得ざる所の偉大なる力の支配を受けて居るのが一切萬物の實情である。彼れ人は天を以て吾が身の自りて出づる所と考へて居る。而して其の吾が身さへも愛して居るのであるから、まして身の本である卓越せる天を愛すべきは當然である。又人は君と云ふものをば己よりも勝れるものと考へ、君の爲めに死するを厭はない程であるから、まして眞君とも云ふべき天道を尊ぶべきは當然である。

【語釋】死生命也云々（副墨に「死生命あるは天に夜旦の常あるが如く、人力の得て與かるべきに非ず、此れ物の實理、所謂卓と眞となる者なり」。）○彼特以レ天爲レ父（彼は人を云ふ、此に彼と云ひ、下に人と云ふは文を變ずるのみ。以天爲父とは李注に人はたゞ天を以て吾が自りて出づる所と爲すとあり、今之に從ふ。或は此の句を以て倒裝の句となし。或は天父の二字入れ替ふべしと爲すも、今皆採らず。）○其卓乎（卓は卓越、卓絕の意。天卽ち道を斥す。下の眞亦同じ。齊物論の所謂眞君。）

泉涸魚相與處於陸、相呴以濕、相濡以沫、不如相忘於江湖。與其譽堯而非桀也、不如兩忘而化其道。夫大塊載我以形、勞我以生、佚我以老、息我以死。故善吾生者、乃所以善吾死也。

又好惡兩ながら之を忘れ之を同一となす場合に於ては固り道に適つて居るが、聖人世と共に推し移る所から好惡を以て同一ならずとなす場合に於ても亦道に違ふことがない。即ち眞人が好惡を以て同一となす場合には天と仲間を爲すのであり、好惡を以て同一ならずとなす場合には世間の人と仲間を爲すのである。かくて眞人の人格內に於ては天人が合一して居るのであつて、兩者が對立して互に勝を爭ふことがないのである。以上の如き狀態の所有者を眞人と謂ふのである。

語釋 以刑爲體 云々（德充符にも見ゆる如く知を孽となし、約を膠となし、德を接となし、工を商と爲すのが眞人の本來の面目であるから固より刑禮知德などを用ふる要はない。然し和光同塵、世と推移する所から是等を用ふることはあるが、それは形に於て同じであつて其の之を用ふる心術に至つては世俗と大に異るものがある。綽乎其殺也とか所以行於世也等の說明語は如上の意味を明かにせんが爲に特に下したのである。此の點諸說明快を缺く、故に特に之を釋す。） ○不得已於事（人間世に寓於不得已とあるを參照。） ○以德爲循云云（下文に人は道に相違るとあるを參照。） ○故其好之也一云云（故は結語の辭。口義に「一は自然なり造化なり、大宗師なり。其の一とは同なり、其の不一とは異なり」と。同じく一とあるも意自ら異る。玩味すべし。又本文の意は德充符の不以好惡內傷其身云云の句を參照。） ○與天爲徒、與人爲徒（既に人間世に見ゆる字面なり。參照。）

死生命也。其有夜旦之常天也。人之有所不得與、皆物之情也。彼特以天爲父。而身猶愛之、而況其卓乎。人特以有君爲愈乎己。而身猶死之、而況其眞乎。

訓讀 死生は命なり。其の夜旦の常あるは天なり。人の與るを得ざる所有るは、皆物の情なり。彼れ特天を以て

り。德を以て循と爲す者は、其の足ある者と丘に至るを言ふなり。而して人は眞に以て勤め行ふ者と爲すなり。故に其の之を好むも也一、其の之を好まざるも也一。其の一なるも也一、其の一ならざるも也一。其の一なるは天と徒たり。其の一ならざるは人と徒たり。天と人と相勝たざるなり。是れを之れ眞人と謂ふ。

【通釋】更に眞人の狀態を說き明さんに、眞人は和光同塵、世と共に推移するが故に、世俗と同じく刑罰を以て政治の本となし、禮儀を以て敎化を布く助となし、知識を以て時に應ずる具となし、道德を以て人の由り順ふべきものとなして居る。然しながら眞人が刑を以て體となして居ると云ふことは世の法家者流のそれとは遙かに異なり、殺すも殺さゞるも凡て法の發動に任せ決して、己意を挾さまないから、たとひ殺す場合でも、心に綽々たる餘裕を以て殺すと云ふ意味で、つまり形は似て居ても實は大に違つて居るのである。又禮を以て翼となすと云つても世の儒家者流の如く禮儀の助をかりて强ひて敎化を行はんとするのでなく、敎化の世に行はれることを自然に任かして置くと云ふ意味である。知を以て時に應ずる手段となすと云つても、孔子の如く時の可不可を見て動くと云ふことでなく、事の已むを得ざるに至つて始めて智慧を用ふると云ふ意味である。又德を以て人の由り順ふべきものとなして居ると云つても、儒家者流のそれとは異り、例へば足のあるものと與に獨でに丘に上つて行くと同樣に自然と德に進むを云ふのである。然るに世の俗人ばらは其人が之を勤めて行つて居るものと見て居るのは笑ふべきことである。之を要するに眞人は外界の事物に對して愛好の情を惹す場合にも道に適ひ、憎惡の情を起す場合にも亦道に適ふ、卽ち喜怒二つながら之を忘れ之を同一視し、好惡を以て內其の身を傷らず常に自然に因るのである。從つて

に見はる。）○與乎止ニ我德一也（德充符の德不形者、物不能離の句參照。）○厲乎其似レ世乎（口義に「厲は嚴毅の意、之を望めば厲然として亦世人と同じ。」郭注に「至人厲なし、世と行を同うす故に厲きが如し。」と、成疏に、「厲は危なり、眞人は安危を一にし禍福を冥す、而して和光世に同ず、亦厲乎たるに似たり。」と亦通ず。姑く林說に從ふ。）○警乎其未レ可レ制也（成疏に「聖德廣大、警然として高遠、世表に超ゆ、故に禁制すべからず。」と。口義には「世に屈する所なし故に未だ制すべからずと曰ふ。」亦通ず。）○連乎其似レ好レ閉也、悗乎忘ニ其言一也（連乎は長貌、超えず沈默を守る意。林西仲は連は檢括の意と解す、之によればムツツリとして緘默を好むの意となる。亦通ず。悗乎は俯下の貌、首を垂れる樣なり。成疏には無心の貌と解す。今之に從ふ。口義に「好閉とは口を開くを欲せざるなり。連は合なり密なり。其の未だ言はざるに方りては言ふを欲せざるに似たり。其の既に言ふに及んでは亦言はざるが若し。故に悗乎として其言を忘ると曰ふ。兩句即ち一意なり。」）

以レ刑爲レ體、以レ禮爲レ翼、以レ知爲レ時、以レ德爲レ循。以レ刑爲レ體者、綽乎其殺也。以レ禮爲レ翼者、所三以行二於世一也。以レ知爲レ時者、不レ得レ已二於事一也。以レ德爲レ循者、言下其與二有レ足者一至中於丘上也。而人眞以爲二勤行者一也。故其好レ之也一、其弗レ好レ之也一。其一也一、其不レ一也一。其一與レ天爲レ徒。其不レ一與レ人爲レ徒。天與レ人不二相勝一也。是之謂二眞人一。

訓讀 刑を以て體と爲し、禮を以て翼と爲し、知を以て時と爲し、德を以て循と爲す。刑を以て體と爲す者は、綽乎として其れ殺す。禮を以て翼と爲す者は、世に行はるゝ所以なり。知を以て時と爲す者は、事に已むを得ざるな

を得ざるか。滀乎として我が色を進め、與乎として我が德を止む。厲乎として其れ世に似たるか、謷乎として其れ未だ制すべからず。連乎として其れ閉を好むに似、悗乎として其の言を忘る。

大意　以下二節皆古の眞人の狀態を寫す。

通釋　古の眞人は、其の行狀が自ら事の宜しきに合ひ、一方に偏することがない。又常に謙虛にして足らざるが如くなれども人の心を承け卑下することがない。又從容として獨り遊べども固陋ではない。又曠然として心は淸虛なれども行動堅實にして浮華ならず。又常にイソ〳〵として喜びあるが如くであり、又止むを得ざるに至りて始めて動くが如くであり、又常に喜が心中に充滿して自ら顏色に現れ、從容自得、德を內に蓄へて外を飾らず、眞人はもとより嚴厲の氣なけれども、世と共に推し移つるが故に時として其の態度が厲しく見ゆるは世上の凡俗に似たる所がある。其の德は高大にして何ものも之を抑制することが出來ない。又眞人は絕えず緘默を好むが如くであつて、既に言ひ終つた後では無心にして其の言へることを忘れて居るが如くである。

語釋　義而不レ朋（郭注に「物と宜しきを同じうして、朋黨するに非ず」口義に「中立して倚らず」とあり。）○若レ不レ足而不レ承（口義に「儽然として足らざるが若くにして自ら卑らせず。承とは奉承して自ら卑らするの意。」）○與乎其觚而不レ堅（與乎は容與なり、ゆとりあること。釋文に「王云ふ。觚は特立して群せざるなり。」郭注に「常に獨に游びて固守するに非ず。」）○張乎其虛而不レ華（成疏に廣大の貌とあり。郭注に「曠然として懷ふなきも乃ち實に至る。」華は實なくして浮華の意。）○邴邴乎其似レ喜乎（成疏に「邴々は喜ぶ貌なり、變に隨ひ化に任せ、遇ふ所斯ち適、實に喜怒を忘る。故に喜ぶものに似たりと云ふ。」）○崔乎其不レ得レ已乎（又云ふ「崔は動なり。已は止り。眞人凝寂、物に應ずるに方なし、迫りて而る後動く。先唱に關るに非ず。故に已むを得ずして之に應ずる者なり。」人間世篇に一宅而寓於不得已則幾矣とある參照。）○滀乎進二我色一（口義に「滀は聚なり、充悅の貌、其の色に生ずるや、睟然として面

○有レ親非レ仁也(又曰く「無心なる時は親疎なし、疎あり親あるは有心なり。有心なる時は仁に非ず。」集解に云ふ「至仁は則ち私親なし。」) ○天時非レ賢也(成疏云ふ「玄象の盈虛を占ひ、天本の去就を候ふは此れ乃ち小智なり、豈に是れ大賢なる者ならんや。」賓穎曰く「時を擇んで動くは便ち成敗を計較するの心あり。」) ○利害不レ通。非二君子一也(利を好み、害を惡むは衆人の心、利害を通じて一とするを得ざるは君子に非ずとの意。) ○行レ名失レ己非士也(郭注に「善く士たる者は名を遺れて自得す。」成疏に「行を矯め名を求め、其の己の性を失ふは此れ乃ち流俗の人、道を徇ふの士に非ず。」) ○亡レ身不レ眞非レ役レ人也(林希逸曰く「眞は自然なり。自然を知らずして勞苦して以て其の身を喪ふは是れ人に役せらるゝ者にして人を役する者に非ざるなり。」亡レ身は上句を受け、名の爲めに身をほろぼす意。人間世篇の關龍逢、王子比干、是好レ名者也云云參照。) ○狐不偕(成疏に「姓は狐、字は不偕、堯の時の賢人なり、堯の讓を受けず、河に投じて死す。」) ○務光(又云ふ「湯天下を讓らんとす。受けずして自ら石を負ひて廬水に沈む。」) ○胥餘(比干の名なりと云ふ、或は又伍子胥のことなりと云ふ。比干は箕子微子と共に殷の三仁と云はれた人、紂を諫めて殺さる。伍子胥は呉王夫差を諫めて殺され、屍を江に沈められた人。) ○紀他、申徒狄(成疏に「姓は紀、名は他、湯の時の逸人なり、湯が務光に讓らんとするを聞き、己に及ばんことを恐れ、遂に弟子を將ゐて窾水に陷りて死す。申徒狄も之を聞き因りて以て河に踣す。此の數子は皆情を矯め行を僞り、志を亢げ名を立て、分外波蕩し、遂に此に至る。自ら餓ゑ自ら沈み、天命を促齡し、而して芳名令譽、之を史籍に傳ふ。斯れ乃ち他に驅使せらる。何ぞ能く人を役せん。衆人の耳目を悅樂するも、焉んぞ能く自ら其の情性を適せんや。」)

古之眞人、其狀義而不レ朋。若レ不レ足而不レ承。與乎其觚而不レ堅也。張乎其虛而不レ華也。邴邴乎其似レ喜乎。崔乎其不レ得レ已乎。滀乎進二我色一也。與乎止二我德一也。厲乎其似レ世乎。謷乎其未レ可レ制也。連乎其似レ好レ閉也。悗乎忘二其言一也。

訓讀 古の眞人は、其の狀、義にして朋せず。足らざるが若くにして、承けず。與乎として其れ觚なれども堅からざるなり。張乎として其れ虛なれども華ならざるなり。邴邴乎として其れ喜ぶに似たるか、崔乎として其れ已む

温和にして春の氣の如くである。其の喜怒の發すること極めて自然的なるは恰も春夏の萬物を生成し、秋冬の萬物を肅殺するのに似通つて居る。そして外界の事物と應接よろしきを得て其の際限を知らないのである。聖人卽ち眞人の心術旣にかくの如きが故に其の時あつて兵を用ひて國を亡ぼすも固より私欲の爲めにしたのでなく人心の欲する所に從つてしたのであるから其の國の民心を失ふことがない。其の恩澤は萬世に垂れ施せども人を愛して人に德を施して居るとは思はない。かくの如きが眞人の面目である、故に强ひて物をして其の所を得しむるを樂むのは聖人でない。物に對して親疎の區別を設くるのは仁者ではない。殊更に天の時に合はんとするは賢者ではない。利害通じて一なりと達觀し得ないのは君子でない。世間の名聲を求めて己の本性を失ふは士と謂ふを得ず。名の爲めに身を亡ぼし自然に隨ふを得ざるは、人に使役せらるゝものであつて人を使役するものでない。かの狐不偕、務光、伯夷、叔齊、箕子、胥餘、紀伊、申徒狄の如き人々は何れも皆人の使役となりて働き、人の愉快の道具となり、己れ自らは愉快を味ひ得なかつた憐れむべき人物であつた。

語釋　其心忘（忘の字、諸本多く志の字に作る。焦氏筆乘に云ふ「趙氏正に忘字に爲る、容寂と義協ふ。其の論當るに似たり。」林西仲も亦忘字に作りて曰ふ「俗本、志に作るは非なり」と。今之に從ふ。）　○其顙頯（顙は額なり。頯は郭注に大朴の貌と。林西仲曰く「寬平の貌。」）　○喜怒通二四時一（林希逸曰く、「淒然は怒るなり、煖然は喜ぶなり。無心にして喜怒すること猶ほ四時の春秋の如しと。」通は似の意。）　○與レ物有レ宜而莫レ知二其極一（德充符に使二日夜無一レ郤。而與レ物爲レ春とあるに同じ。與レ物有レ宜とは與レ物爲レ春の意、莫レ知二其極一とは使二日夜無一レ郤の意、卽ち句に前後あるのみ。）　○亡レ國而不レ失二人心一（郭注に、人心の亡ぼさんと欲する所に因りて之を亡ぼす、故に人心を失はずと。）　○樂レ通レ物非二聖人一也（林希逸曰く「通は所を得るなり、物の窮通に任せずして此を以て樂と爲すは聖人と爲すに足らず。」）　○不レ爲レ愛レ人（變谷曰く「自ら以て人を愛すると爲さず。」下章に澤及二萬世一而不レ爲レ仁とあるに同じ。）

宜而莫知其極。故聖人之用兵也、亡國而不失人心。利澤施乎萬世、不爲愛人。故樂通物、非聖人也。有親非仁也。天時非賢也。利害不通、非君子也。行名失己、非士也。亡身不眞、非役人也。若狐不偕・務光・伯夷・叔齊・箕子・胥餘・紀他・申徒狄、是役人之役、適人之適、而不自適其適者也。

訓讀 然るが若き者は、其の心は忘れ、其の容は寂、其の顙は頯。凄然として秋に似たり、煖然として春に似たり。喜怒四時に通じ、物と宜しき有りて、其の極を知る莫し。故に聖人の兵を用ふるや、國を亡ぼすも人心を失はず。利澤、萬世に施すも、人を愛すると爲さず。故に物を通ずることを樂しむは聖人に非ざるなり。親有るは仁に非ざるなり。天時は賢に非ざるなり。利害通ぜざるは君子に非ざるなり。名を行うて、己を失ふは士に非ざるなり。身を亡ぼして眞ならざるは、人を役するに非ざるなり。狐不偕、務光、伯夷、叔齊、箕子、胥餘、紀他、申徒狄の若きは、是れ人の役を役し、人の適を適として、自ら其の適を適とせざる者なり。

大意 眞人は事物に對して凡て無心なることを説く。

通釋 かくの如き眞人は、其の心常に紛々たる外界の事々物々に對して超然たり。從つて其の容貌は自から寂然として安靜であり。其の額は廣くて平でのび〳〵して居る。其の氣象は時には嚴として秋の氣の如く、又時には

之れ心を以て道を損てず、人を以て天を助けずと謂ふ。是を之れ眞人と謂ふ。

大意 眞人は死生を視ること一の如くなるを說く。

通釋 古の眞人は死生有レ命の理を悟り居るが故に、生を悅ぶとか死を惡むが如きことは少しも念頭にない。だから生れることがあつても殊更に喜ぶことなく、死することがあつても強ひて拒み逆ふことなく、素直に死し素直に生れ來るのみで、少しも死生に關して執着を持たない。そして眞人は人生の始まる所たる生を忘れて居ないし、又人生の終る所たる死を強ひて求めるやうなことはないから、此の世に生を受けて生れて來れば、そのまゝ喜んで受け、此の世に生れたことを、殊更にいやがることがない。又死が來れば今まで受けて居た生命をかへして何等の執着がない。か樣な態度をば狹い小さな心を以て天道を無視せず、人の小さな力を以て天の廣大なる働を助けないと謂ふのであつて、か樣な人をば眞人と謂ふのである。

語釋 其出不レ訢、其入不レ距(出入は猶ほ生死の如し、訢は悅なり、距は拒に同じ、逆ふなり。) ○翛然而往、翛然而來(翛然とは釋文に引く向秀の說によれば自然無心にして自爾の謂とある、又成疏には無係の貌とある。つまり執着なき態度を形容したのである。往來亦猶ほ死生と言はんが如し。) ○不レ忘ニ其所一レ始、不レ求ニ其所一レ終(宣穎曰く、「生の源を知り、死の歸に任かす」と。即ち生を忘れず、死を求めずとの意で、つまり死生、一に天命によることを識つて居るから、懸遁をしたり、又は世を厭つて死を求めるやうなことがない。) ○受而喜レ之、忘而復レ之(喜んで生を受け、生を復へして死を忘るの意である。受而喜の句は上の不レ知レ說レ生とか其出不レ訢と矛盾するやうに見えるがさうではない、即ち受而喜ぶとは俗情から悅ぶのでない、ゴク自然の喜びを謂ふのである。宣穎云ふ、「生を受けての後、常に自得す」と。忘は無執着の意である死の時が來れば即ち生を天に歸して何等の執着を持たないこと。)

若レ然者、其心忘、其容寂、其顙頯。凄然似レ秋、煖然似レ春。喜怒通ニ四時一、與レ物有

出る言は物を吐き出すやうに苦しさうだ。衆人の呼吸は眞人の安らかなる呼吸に比べると、丁度此のやうである。衆人の息がか樣なわけは耆欲深きによるのであつて、凡て耆欲ふかき者は天の賦與せる機根（性分）が淺少である。眞人は無欲、故に天機豐かで、衆人と異なる。

語釋 其食不レ甘（玄英曰く、「食、滋味に耽らず、故に其の美を知らず」と、即ち食は腹を滿すのみ、その甘と不甘とは問ふ所でない。） ○眞人之息以レ踵云云（林希逸曰く、「神定まるときは則ち其の出入の息、深々として皆踵より上りて口鼻に至る。神、養ふ所なきときは、則ち其の出入の息、喉間に止まるのみ。靜躁、同じからず、身に體する者之を見る」と。至人の呼吸は靜かで深いことを形容して踵を以てすと云ひ、衆人の呼吸は落つきがなくて淺いのを形容して喉を以てすと云つたのである。）
○屈服者其嗌言若レ哇（陳壽昌曰く、「屈服者とは議論して人に屈せらるゝ者を謂ふ、嗌は聲の入、言は聲の出、哇は吐なり、言ふ心は人に屈せらるゝ時は、則ち喉間の吞吐、哇かんと欲するが如き狀あり。息、喉を以てする者は之に類す」と。つまり此の句は衆人の呼吸は眞人のに比べて落つきがなくて淺いことを、もう一度形容したのである。嗌を咽喉と見る說もあり。） ○天機（佛敎で云ふ機根の意であらう。人の持つて生れた天分。）

古之眞人、不レ知レ說レ生、不レ知レ惡レ死。其出不レ訢、其入不レ距。翛然而往、翛然而來而已矣。不レ忘二其所一レ始、不レ求二其所一レ終。受而喜レ之、忘而復レ之。是之謂レ不下以レ心捐上レ道、不中以レ人助上レ天。是之謂二眞人一。

訓讀 古の眞人は生を說ぶを知らず、死を惡むを知らず。其の出づるも訢ばず、其の入るも距まず。翛然として往き、翛然として來るのみ。其の始まる所を忘れず、其の終る所を求めず。受て之を喜び、忘れて之を復す。是を

語釋　眞人(逍遙遊に神人至人聖人とあるに同じ、道の至極に達した人を云ふ。)　○不逆寡、不雄成(林西仲曰く、「寡は約なり、成は全なり、順にして受け、謙にして承け、窮通計らざるなり」と。つまり寡は困約、窮約の意で逆境を云ひ、成は成功の意で順境を云ふ、即ち逆境に處しては其の境遇に順應して安んじて居り、得意の際には謙抑して之を鼻にかけない。境遇の如何によりて心を變へない、境遇に超越して居ること、雄は誇なり。)　○不謩士(林西仲曰く、「士は事なり、謀らずじてまかす。成敗計らざるなり」と。謩は謀に同じ。)事の成否を謀らず自然に一任する意。)　○過而不悔、當而不自得也(林希逸曰く、「過は失なり、猶ほ蹉跎と言はんが如し。自得とは自ら多とするなり」と。宣穎曰く「當は行つて當るを謂ふ」と。即ち過當とは失敗成功の意。自得は得意になる意。)　○登高不慄、入水不濡云云(成玄英曰く、「眞人は生死の二ならざるに達し、安危の一たるを體す、故に能く水に入り火に入るも曾て懷に介せず、高きに登り危きを履むも、豈にまた驚懼せんや、眞知の士は此の功あり、能く昇りて玄道に至る、故に是の如き者を得るなり」と。登假は昇り至る、或は假を遐と解し、はるかに高く登ると見てもよし。つまり至道に到達すること、上句に登高とあるからこゝにも登假と云ふ字面を用ひたまでなり。)

古之眞人、其寢不夢、其覺無憂、其食不甘、其息深深。眞人之息以踵、衆人之息以喉。屈服者其嗌言若哇。其耆欲深者其天機淺。

訓讀　古の眞人は其の寢るや夢みず、其の覺るや憂無し、其の食ふや甘しとせず、其の息や深深。眞人の息は踵を以てし、衆人の息は喉を以てす。屈服する者は其の嗌言哇くが若し。其の耆欲深き者は其の天機淺し。

大意　眞人は無欲、故に覺夢ともに安きを說く。

通釋　古の眞人は心が常に安らかで少しの悶もないから寢た時に夢を見ない。又醒めた時には何等の心配がない。物を食べる時に貪り食ふと云ふことがない。そして其の呼吸は靜かで深い。眞人の呼吸は踵即ち身體の奧深き所に於てなすのであつて、衆人の呼吸は口先きで以てなすのである。議論をしてヤリコメられた者はその咽から

者、過而弗レ悔、當而不二自得一也。若レ然者、登レ高不レ慄、入レ水不レ濡、入レ火不レ熱。知之能登二假於道一也若レ此。

訓讀 且つ眞人有りて而る後眞知有り。何をか眞人と謂ふ。古の眞人は、寡に逆らはず、成を雄らず、士を謩らず。然るが若き者は、過てども悔いず。當れども自ら得たりとせざるなり。然るが若き者は、高きに登りて慄れず、水に入りて濡はず、火に入りて熱せず。知の能く道に登假するや此の如し。

大意 以下數節、眞知卽ち大道の體現者眞人の境界を說く。本節は眞人は境遇の順逆、事功の成否、皆天に任せて謀らざることを說く。

通釋 それはさて置き眞に至れる人にして始めて少しも缺陷なき大知を有することが出來る。然らば眞知の所有者である眞人とは何如なる人を謂ふか。乃ち古の眞人は失意困窮の時にも其の境遇に逆はない。又得意成功の時にも誇ることがない。又凡て事の成敗利鈍を考慮して心を惱すことがない。卽ち成敗窮達一に天に任せて居るのである。隨つてかくの如き眞人は失敗をしても悔いなげくと云ふこともなく、成功しても得意にならない。か様な哲人は高い所へ登つても恐れ震ふと云ふこともなく、水に這入つてもぬれないし、火の中へ這入つてもあつくならないと云ふが如く、凡て外界の安危によつて心を動搖せしむることがなく、常に湛然たる水の如き安靜を保つて居るのである。是れはつまり眞知の人が道の至極に到達して居るから此のやうな離れ業が出來るのである。

まらざるや、庸詎ぞ吾が所謂天の人に非ざるか、所謂人の天に非ざるかを知らんや。

大意 常人の智は如何に至れりと雖も尙ほ缺陷あるを述べ、次節に眞人ありて而る後眞知あることを說き出す伏線とす。

通釋 天道に關して明であり、又人事に就いても審かなる者は至れる人である。天道をよく心得て居る人は自然のまゝに任せて生を送る人である。人事に就いてよく心得て居る人はその智を以て旣に知れる點（人事）を基礎として、其の智を以て未だ知らない點（天道）を自然に知り、その天壽を全うして途中で以て若死せぬ人であつて、是れは立派なる智者と謂つてよろしい。然しながら智と云ふものには缺陷があるのである。卽ち一體智と云ふものは力とたのむ所の過去の經驗（旣得の智識）があつて始めて未知の事實に對する判斷が當るのである。處がその力と恃む旣得の智識と云ふものが未だ十分に定まつて居ない時には、自分には天道なりと考へたことが人事であるかも知れぬし、又反對に是れは人事であると考へたことが或は天道に屬することかも知れないのである。か樣に、一般の智識には缺陷があつて絕對獨立の眞智と云ふものは中々得ることは六ケしいのである。

語釋 知二天之所一レ爲（甕谷曰く、「天道に明かなるを謂ふなり」と。天地の本然を了知すること。）　○知二人之所一レ爲（又曰く、「人事に審かなるを謂ふ」と。人爲の必然を了得する意。）　○天而生也（又曰く、「天に循つて行ひ、以て其生を終ろを謂ふなり」と。天然自然のまゝに任せて生きて行くこと。）　○養（林西仲曰く、「從容として以て俟ち、作爲する所なきなり。」）

且有二眞人一而後有二眞知一。何謂二眞人一。古之眞人、不レ逆レ寡、不レ雄レ成、不レ謩レ士。若レ然

內篇大宗師第六

叙說 大宗師とは大道の謂である。莊子好んで奇言を用ふ。故に道を謂つて大に尊ぶべき師と言へるなり。此の篇、大道を體現せる聖人卽ち眞人の境界を說く、故に篇に名づけて大宗師と言ふ。

知天之所爲、知人之所爲者、至矣。知天之所爲者、天而生也。知人之所爲者、以其知之所知、以養其知之所不知、終其天年、而不中道夭者。是知之盛也。雖然有患。夫知有所待而後當。其所待者特未定也、庸詎知吾所謂天之非人乎、所謂人之非天乎。

訓讀 天の爲す所を知り、人の爲す所を知る者は至れり。天の爲す所を知る者は、天にして生くるなり。人の爲す所を知る者は、其の知の知る所を以て、以て其の知の知らざる所を養ひ、其の天年を終へて、中道にして夭せざる者なり。是れ知の盛なるなり。然りと雖も患あり。夫れ知は待つ所ありて後當る。其の待つ所の者、特に未だ定

はゆる情なしとは喜怒哀樂等の感情がないとの意ではなく、人が好惡の感情によつて自己の肉體を傷ふことなく、常に自然に循ひ　強ひて人爲を以て生きんとする力を助長しようとしないことを意味するのである。」惠子曰く「人爲を盡して生を資けなかつたならば此の肉體を保つて行くことが出來ないではないか。」莊子曰く「天道が身體及び視聽言動の如き作用を賦與して、吾人に自然と是等の生活機關が具つて居る以上、強ひて人爲を盡して生を資けずとも身を保つことが出來る。たゞ外物に對する好惡の感情によつて吾が身を害しないやうにして居ればよいのだ。然るにそこ許は此の道理が分からなくて御自分の精神を外に向けて使役し、御自身の精根をつからして仕舞ひ疲勞の餘り、或は樹にもたれてうめき　或は几によりかゝつて瞑目せざるを得ないのである。天がそこ許に特に人間と云ふよい形體を賦與して呉れたのに、そこもとは天意即ち自然に從ふことをせずに、徒に堅白同異の詭辯を弄して騒いで居られるのは何と云ふ心得違ひのことだ。」

語釋　無レ情（惠莊二子の情に關する論旨が違つて居る。惠子は喜怒哀樂等の七情倶に無きを以て無情となす、莊子は喜怒哀樂の感情を超脱して、之によつて身を害せざるを無情となす。）　○道與ニ之貌ー、天與ニ之形ー（林西仲云ふ、「道の用を得て、視聽言動を爲し、天の氣を受けて五官百骸を賓す」と。胡方曰く、「貌は形の動、道は天の氣化、二句只一義」と。）　○據ニ槁梧ー瞑（槁梧は枯れた桐なり、以て几を作る。故に槁梧を几と釋せり。瞑は閉目深思なり。）　○天選ニ子之形ー（形體を有する多くの生物の中より選んで人の形體を賦與せるを云ふ。林西仲曰く、「此の句、上面の道與天與の二句に照應す、此の形めと得やすからず、しかるに其の用を得ざるを致すは殊に惜むべしと爲す、此の意却つて言外に在り。草々に看過す可からず」と。）　○子以ニ堅白ー鳴（鳴と云ふは堅白同異の詭辯をそしつての言、かゝる詭辯は鳥獸の鳴くが如く、何の意味もなく、極めて無價値のものであるとの意。或は云ふ鳴とは評判高しの意と。甕谷云ふ、「鳴字は上の精瞑形と音を諧ふ」と。惠子堅白のことは齊物論にも見ゆ。）

而瞑。天選子之形、子以堅白鳴。

【訓讀】惠子、莊子に謂つて曰く、人故より情無きかと。莊子曰く、然りと。惠子曰く、人にして情無ければ、何を以て之を人と謂ふやと。莊子曰く、道之に貌を與へ、天之に形を與ふ、惡んぞ之を人と謂はざることを得んやと。惠子曰く、既に之を人と謂ふ、惡んぞ情無きを得んやと。莊子曰く、是れ吾が所謂情に非ざるなり。吾が所謂情無しとは、人の好惡を以て、內、其の身を傷らず、常に自然に因つて、生を益さざるを言ふなりと。惠子曰く、生を益さずんば、何を以て其の身を有たんやと。莊子曰く、道之に貌を與へ、天之に形を與ふ、好惡を以て、內、其の身を傷ること無からんのみ。今、子は、子の神を外にし、子の精を勞し、樹に倚つて吟じ、槁梧に據つて瞑す、天、子の形を選べるに、子、堅白を以て鳴ると。

【大意】德の內に充實する者は必ず好惡を以て內その身を傷ふに至らざるを說く。

【通釋】惠子が莊子に向つて曰ふには「そこ許は日頃から聖人は人の形あれども、人の情なしと云ふことを申して居られるが、人は本來情のないものだらうか。」莊子答へて曰く「さ樣、聖人にはもとより情がないのだ。」惠子曰く「人でありながら情がなかつたならば、それは木石と同じであつて、之を人と云ふことは出來ないではないか。」莊子曰く「天道卽ち自然の力が人に貌卽ち視聽言動の如き作用を授け、又五官百骸の如き形體を與へて居るからには、之を人と云はざるを得ないではないか。」惠子曰く「既にか樣な理由で、之を人と謂ふ以上は、人に情なしと云ふを得ず。」そこで莊子が曰ふには「そこ許の情に關する論旨と吾輩の論ずる本旨とは大に相違して居る。卽ち吾輩の謂

○德有レ所レ長而云々（而は則に同じ。）　○人不レ忘二其所一レ忘、而忘二其所一レ不レ忘　此謂二誠忘一（林西仲曰く、「所レ忘とは當に忘るべき所の者、形を指して言ふ。所レ不レ忘とは當に忘るべからざる所の者、德を指して言ふ。形を忘れずして德を忘る、是れ眞に善忘の病あるなり」と。）　○聖人有レ所レ遊（林希逸曰く、「所謂心に天遊ありとは是なり。」）　○知爲レ孽（孽は木の根もとより旁出する若芽、ヒコバエ。林希逸は孽は蠧なりと解せり。要するに老莊思想に在りては智を斥けて居る、老子の如きも絶レ聖棄レ智民利百倍と云つて居る。）　○聖人不レ謀、惡用レ知（用レ知、用レ膠、用レ德、用レ商は文を互にしたので、作者が巧を弄した所である、つまり上の知約德工の四を指して云ふのだ。）

○四者天鬻也（四は不謀・不斷・無喪・不貨を指す。鬻は養也。）　○天鬻也者天食也（作者自ら天鬻の語を解說したのである。古の文には此の例多し、孟子滕文公下に洚水者洪水也とか、離婁上に泄泄猶二沓沓一也とか皆同じ句法也。）

○又惡用レ人（林西仲曰く、「知膠德商を用ひざる所以は此れなり」と、つまり天食を受けて居る以上、最早や人が好んで用ひたがる知約德工を用ふる必要がないとの意。）　○眇乎小哉所三以屬二於人一也（眇上に形の字を加へて看よ、眇は少なる貌。此の句は聖人は形を眼中に置かず、所謂其の忘るべき所を忘れて居る所以を述べたのである。）　○謷乎大哉、獨成二其天一（謷上に德の字を加へて看よ、謷乎は大なる貌。此の句は聖人は德を重んじ、上に所謂その忘るべからざる所を忘れざる所以を述べたのである。獨成二其天一とは襲谷曰ふ「天に稟くる所のものを成就するを謂ふ」と。）

惠子謂二莊子一曰、人故無レ情乎。莊子曰、然。惠子曰、人而無レ情、何以謂二之人一。莊子曰、道與二之貌一、天與二之形一、惡得レ不レ謂二之人一。惠子曰、既謂二之人一、惡得レ無レ情。莊子曰、是非二吾所レ謂情一也。吾所レ謂無レ情者、言乙人之不下以二好惡一內傷中其身上、常因二自然一而不甲レ益レ生也。惠子曰、不レ益レ生、何以有二其身一。莊子曰、道與二之貌一、天與二之形一、無下以二好惡一內傷中其身上。今子外二乎子之神一、勞二乎子之精一、倚レ樹而吟、據二槁梧一

らクツツケたものだと考へ、藝能を以て自己を世に賣り出す手段だと考へて居る。即ち此の知約德工の四者は聖人に取つては何の價値もない。なぜならば聖人は凡て自然の成行に任せ、事の成否利不利を眼中に置いて居ないから決して智慧を用ふる必要はない。又聖人は凡て物の素樸を尊んで彫琢を加へないから膠などを用ひて形を整へる必要がない（外形の修飾をしないから禮法の必要がないとの意）。又聖人は最初より天與の德性を完全に保有して居るから、何も修養などして德を得る必要がない。又聖人は自分を世に賣り出して大に聲名を揚げようと云ふ考などは少しもないから、自己を世に賣る手段を講ずる必要がない（即ち藝能を研くの要なき意）。以上の不謀・不斲・無喪・不貨の四者は天鬻である。天鬻とは大自然が聖人を養ふ所の御扶持である。かく聖人がお扶持を天から受けて居る以上決して常人の如く知膠德商を用ひる必要がない。即ち聖人は人としての形體を備へて居るが、普通の人情即ち欲望を持つて居ない。人としての形貌を備へて居るから、強ひて人間を離れようとせず、自然に從つて世の人々の仲間入をして居るが、然し普通の人情を超脱して居るから、是とか非と云ふやうな差別的觀念が起らない。聖人から見れば形體と云ふものは極めて小さな、即ち價値なきものだから、俗人ばらの仲間入りをして平氣で暮して居るわけであるが、德と云ふものは極めて大なるもの、即ち價値の大きいものだから、どこまでも天が人に賦與した德性を保つて之を充實せしむるのである。

語釋　闉跂支離無脤（林西仲曰く、「闉跂は曲足、趾を以て行き、踵が地につかざるなり」と。支離は前に出づ、セムシ。無脤は無唇に同じ、ミツクチ。三拍子揃つた不具者で、之を以て名となす。勿論寓言の人である。）○其脰肩々（脰はクビ、肩々は細長の貌。德に心醉するの餘り、不具の格好までが美はしく思はれ、反つて德なき全人の形が不格好に思はれた。）○甕盎大癭（甕はカメ、盎はホトギ、癭はコブ、クビのあたりにカメ大のコブがあるので、以て名となす。）○視（くらべて見るの意）

約を膠と爲し、德を接と爲し、工を商と爲す。聖人は謀らず、惡んぞ知を用ひん。斲らず、惡んぞ膠を用ひん。喪ふ無し、惡んぞ德を用ひん。貨らず、惡んぞ商を用ひん。四つの者は天鬻なり。天鬻なる者は天食なり。既に食を天に受く、又惡んぞ人を用ひん。人の形有つて、人の情無し。人の形有り、故に人に羣す。人の情無し、故に是非身に得ず。眇乎として小なる哉、人に屬する所以なり。謷乎として大なる哉、獨り其の天を成す。

大意 德さへ充實して居れば外形の不具も反つて人に悦ばれるものである。

通譯 昔し闉跂支離無脤と云ふ人あり、ビツコでセムシでミツクチと云ふ三拍子そろつた不具者であつた。或る時、此の男が衛の靈公に教を說いたが、靈公はスツカリ此の男が氣に入つてしまつた。そして此の男を見た目で外の滿足な身體を持つて居る人々を見ると、反つて其の人々の頸が細長く見えてトテモ見ともなく思はれた。又甕瓷大癭と云ふ男あり、頸に甕のやうな大きい癭があつた。ある時、齊の桓公に教を說いたが、桓公悦ぶこと斜ならず、その男を見た目で他の完全な身體を持つて居る人を見ると反つてその方が頸が細長く見えて見ともなく思はれたと云ふことである。されば道德さへ高ければ、形體の美醜具不具などは丸で忘れられて仕舞ふものだ。然るに世人は忘れられて仕舞ふ樣な價値のない形態に心を捕はれて、外形をよくすることに力を用ひ、どうしても忘れられない程貴い道德を高めることを忘れて居る、之をホントウの忘れと謂ふのだ。されば眞の聖人は形に捕はれず、心を德に遊ばしめて居るのであつて、知慧を以て木のヒコバエの如く餘計なものだと認め、世の中の約束即ち禮や法などを膠のやうに强ひて物をクツツケるものだと考へ、德（上の德とは意を異にす）即ち修養を以て人爲的に外か

（奚侗云ふ、「之を全するに德を以てするを謂ふ」と。）

闉跂支離無脤說衛靈公。靈公說之。而視全人其脰肩肩。甕盎大癭說齊桓公。桓公說之。而視全人其脰肩肩。故德有所長、而形有所忘。人不忘其所忘、而忘其所不忘、此謂誠忘。故聖人有所遊、而知爲孽、約爲膠、德爲接、工爲商。聖人不謀、惡用知。不斲、惡用膠。無喪、惡用德。不貨、惡用商。四者天鬻也。天鬻者天食也。既受食於天、又惡用人。有人之形、無人之情。有人之形、故羣於人。無人之情、故是非不得於身。眇乎小哉、所以屬於人也。謷乎大哉、獨成其天。

訓讀　闉跂支離無脤、衛の靈公に說く。靈公之を說ぶ。而して全人を視れば其の脰肩肩たり。甕盎大癭、齊の桓公に說く。桓公之を說ぶ。而して全人を視れば其の脰肩肩たり。故に德長ずる所有れば、形忘るゝ所有り。人其の忘るゝ所を忘れずして、其の忘れざる所を忘る、此れ誠忘と謂ふ。故に聖人は遊ぶ所有り、而して知を孽と爲し、

哀公異日以告閔子曰、始也吾以南面而君天下、執民之紀而憂其死、自以爲至通矣。今吾聞至人之言、恐吾無其實、輕用吾身而亡吾國。吾與孔丘非君臣也。德友而已矣。

訓讀 哀公異日以て閔子に告げて曰く、始めや吾れ南面して天下に君たり、民の紀を執りて、其の死を憂ふるを以て、自ら以て至通と爲せり。今吾れ至人の言を聞いて、吾れ其の實無く、輕ふしく吾が身を用ひて、吾が國を亡さんことを恐る。吾と孔丘とは君臣に非ざるなり、德友のみと。

通釋 哀公は他日此の話をば孔子の弟子閔子騫に告げて曰はれるには、「是れまで此の方は南面君主の位置について天下に君臨し、民を治むる法政を大切に行ひ、國民が或は飢死するやうなことがありはしないかと心配してやることなどを以て、政治に最も明るいことだと自ら思ひ込んで居た。處が今回孔子から至人に關する話を聞いて、つくづく自分には君主たるの實力なく、輕るはずみの振舞をして、吾が國を亡ぼすやうになりはしないかと恐ろしくなつて來た。かく自分が反省するやうになつたのも、孔子の御蔭である、して見れば此の方と孔子とは最早や君と臣との關係でなく、實に孔子は此の方に取つて道德を以て益して吳れる友人であるのだ。」

語釋 執民之紀而憂其死（宣穎云ふ、「執民之紀とは民を治むるの法を執るを謂ふ、憂其死とは其の或は飢えて死に至らんことを憂ふるを謂ふ」と。） ○至通（陳壽昌云ふ、「治術に通達するを言ふ」と。） ○德友

來ないのであります。從つて才全の人は此れ等外界の事變に對して平和な愉快な少しも逆らはない態度を以て應接して決して心の悅樂を失はない。實に日となく夜となく悅ばざる時はないのであつて、變化多樣なる外界の事物に對して春の如き溫和なる心情を以て接するのであります。即ち此の人は外界の煩雜なる事物に接して少しも心を亂すことなく、絕えず心中に萬物生成の時即ち溫和なる氣分を漂はして居るのであります。斯くの如き人をば才全しと評するのであります。「然らば德形はれずとはどう云ふことだ。」孔子對へて曰く「世の中で最も完全(盛)なる水平は、水が湛然として靜止してゐる狀態であつて、それこそ凡ての水準の規範となすことが出來ます。なぜならば水が停止して居る時は、內には澄み切つた水の本性を完全に保持し、外は物によつて動かされて居ないからであります。之と同じく德と云ふものは胸中の和氣を完全に修め得たる心境を云ふのであります。德が內に充實して居れば、自ら符驗があつて、招かずと雖も物の方から慕ひ來つて離れんとして離るゝことが出來ないのであります。之を德不レ形と申します。」

語釋　不レ能レ規(規は推原なり、推し計る。)　○滑レ和(滑は滑亂、みだす意。)　○不レ可レ入二於靈府一(靈府は精神。入は動なり即ち如何なる事變も、心を動搖せしむること能はずとの意。)　○使二之和豫通一而不レ失二於兌一。(堯谷によれば、使之の之字は死生存亡以下、凡そ事變の來つて我に接する者を指して言ふと。林希逸によれば、和豫通の三字は一意なり、豫は悅なり、通は流通なり。兌も亦悅なり」と。)　○使二日夜無一レ郤(郤は隙と同じ、悅ぶこと日夜隙なしとの意、即ち悅ばざる時なきなり。)　○是接而生二時於心一者也(接は外界の事變に應接するなり。宣穎云ふ、「生レ時の字は春字に因つて來る」と、即ち時を生ずと云ふ文字は上句に春の字があるに因つて用ひたのであつて、其の意味は春時の如き溫和なる氣分を漂へて居ることを云ふ。)　○平者水停之盛也(句法妙々、郭象云ふ、「天下の平は停水より過なるはなし」と。即ち水の靜止せる狀態が天下で一等立派な水平である、是れ以上水平のものはない。)　○內保レ之而外不レ蕩也(王先謙云ふ、「靈は動なり內に其の明を保ち、外は物に動かされず」と。)　○德者成和之修也(句法亦妙。堯谷云ふ、「胸中の和氣が全成して修まれるに至るを謂ふ」と。)

訓讀 哀公曰く、何をか才全しと謂ふやと。仲尼曰く、死生存亡、窮達貧富、賢と不肖、毀譽饑渴寒暑は、是れ事の變にして、命の行はるゝなり。日夜前に相代はれども、而かも知も其の始を規ること能はざる者なり。故に以て和を滑るに足らず、靈府に入る可からず。之をして和豫通ぜしめて、而して兌を失はず。日夜郤無からしめて、物と春を爲す。是れ接して時を心に生ずる者なり。是を之れ才全しと謂ふと。何をか德、形れずと謂ふやと。曰く平は水停の盛なるなり。其れ以て法と爲すべし。內之を保ちて外蕩せざればなり。德は成和の修なり。德、形れざる者は、物離るゝこと能はざるなりと。

大意 才全、德不形の意を說く。

通釋 哀公が尋ねて曰はれるには「其の方が只今哀駘它に就いて才全しと云ふことを申したが、それは一體どう云ふ意味だ。」孔子對へて曰く「すべて此の世の中に於て、或は死んだり生きたり、無事であつたり亡んだりするとか、或は落ちぶれたり出世をしたり、貧乏したり金持ちになつたりするとか、或は又賢こいとか愚かとか、又は人から毀られたり譽られたり、或は饑ゑたり渴えたり、寒い目をしたり暑い目に遇つたりするのは、凡て是れ人事の浮き沈み、天命の運り合せであつて、此の世から取り除くことの出來ない自然の現象であります。是等の事變は日夜の區別なく、絕えず吾々の眼前に代はる〲現はれて來るが、如何なる知識を以てしても其の由來する所を推知することが出來ぬ性質のものであります。されば才全の人は此等の事變が如何に千變萬化しても、自然の成り行きに打ち任せて置くから、外界の變化も心の平和を亂すに足りないし、又靈府とて其の人の心靈を動搖することが出

は、必ず此の男は彼が天から受けた才能が完全であり、己れの修養によつて得たる道德が中に充實して居る人物に相違ありません。

語釋　㹠子食於其死母（㹠は豚に同じ、食は乳なり。）○眴若（驚く様子）○不見己焉爾。不得類焉爾（己は豚の子に就いて言つたので、その意味は母が最早や死んで居るから今迄のやうに自分を見て與れぬこと。不得類とは今まで自分に乳を與れた時とは樣子が似て居らぬとの意。）○不以翣、資刖者之屨（一說には資にて句を切り、翣を以て資らずと讀む。翣は武功を飾る道具で、形は方扇（四角な團扇）に似たもので、柩車の兩邊に立てるもの。）○止於外不得復使（外は私宅を云ふ、官府を中心として云ふからのことである。）○才全而德（林西仲云ふ、「才は天より賦したものであり、德は己に成つたものである」と。つまり才は先天的、德は後天的のもの。）

哀公曰、何謂才全。仲尼曰、死生存亡、窮達貧富、賢與不肖、毀譽饑渴寒暑、是事之變、命之行也。日夜相代乎前、而知不能規乎其始者也。故不足以滑和、不可入於靈府。使之和豫通、而不失於兌。使日夜無郤、而與物爲春。是接而生時於心者也。是之謂才全。何謂德不形。曰、平者水停之盛也。其可以爲法也。內保之而外不蕩也。德者成和之修也。德不形者、物不能離也。

豚の子が死んだ親豚の乳を飲んで居るのを見ましたが、何んでも其の子豚どもは暫らく乳を飲んで居て、ビツクリして皆母豚を棄て置いて走り去つて仕舞ひました。子豚どもが、か様に走り去つたのは、親豚が生きて居た時のやうに慈愛深き目でもう自分たちを見て呉れないし、又今までとは親の様子が全く違つて仕舞つて居る（死んで魂が無くなつて居るから）。それが爲めに逃げ去つたのであります。して見ると子豚が其の母を愛するのは、母の肉體を愛するのでなくて、その肉體を支配して居る母の心を愛するのであります。此の事によつて我が君には形は末であり、心は本である、そして本が何よりも大切であることを御承知ありたい。戰に敗れて死んだものゝ葬儀には翣と申して戰功を表彰する所の飾物を用ひない。又刖刑に處せられた人に屨を贈つても之を愛着すると云ふことはない。是れは共に其の根本がないからであります。即ち前者にあつては翣を立てゝ表彰すべき戰功がなく、後者は屨をはくべき足がないからであります。又天子に侍る女官は其の容姿を傷つけんことを慮り、輕しく爪を切つたり、耳をホヂつたり致しませぬ。又新に妻を娶つた者は宿直を免じ、家に歸つて宿ることが出來、今まで通りにはげしく使役しないことになつて居る。かくして、形體の完全なものでも猶ほ一は以て天子の愛をつなぐに足り、一は以て新婚の愛を保つに足るのであります。まして人格の完全な人に在つては衆人より敬慕せられることは申すまでもないことであります。さて御尋ねの哀駘它と申す男が、御話しのやうに格別何も言はないのに人々が信用し、是れぞと云ふ功もないのに人が親み、果てはもと〱深い知り合でもない我が君までが、御自分の大切な國を渡して置きながら、どうか斷らないで受けて呉れゝばよいがと、そればかり御心配なさる程に御親任なさつたと云ふの

而死者、其人之葬也不以翣。資刖者之屨、無爲愛之。皆無其本矣。爲天子之諸御、不爪翦、不穿耳。取妻者、止於外、不得復使。形全猶足以爲爾、而況全德之人乎。今哀駘它未言而信、無功而親。使人授己國、唯恐其不受也。是必才全、而德不形者也。

訓讀　仲尼曰く、丘や嘗て楚に使す、適〻㹠子の其の死母に食む者を見る。少焉して眴若として皆之を棄てて走る。己を見ざるのみ。類するを得ざるのみ。其の母を愛する所の者は、其の形を愛するに非ざるなり。其の形を使ふ者を愛するなり。戰つて死する者は、其の人の葬や翣を以てせず。刖者に資るの屨は之を愛することを爲す無し。皆其の本無ければなり。天子の諸御と爲れば、爪翦らず耳を穿たず。妻を取る者は外に止めて、復た使ふを得ず。形の全きも猶ほ以て爾りと爲すに足れり、而るを況んや全德の人をや。今、哀駘它未だ言はずして信ぜられ、功なくして親しまる。人をして己の國を授けて、惟其の受けざるを恐れしむ。是れ必ず才全く、而して德形れざる者なりと。

大意　哀駘它が能く衆人より慕はれるのは、才全く德あらはれざるが爲めである。

通釋　孔子が哀公の問に答へて曰はれるには「私は嘗て楚の國へ使に參つたことがあります。其の節たま〱

の人々を驚かさんばかりであつた。然し此の哀駘它が此の方と一處に居ること、一月とたゝぬ中に、此の方は其の人柄を慕はしく思ふやうになり、それから一年とたゝぬ中に、此の方はスツカリ彼を信頼することになつた。たま〲國に適當な宰相がなかつたので、幸ひ國政を彼に委ねようとした。處が哀駘它はしぶ〲ながら返答をして、宰相の地位などは少しも心に係けることなく、何うも辭退したいらしい。此の方もつまらないことを言ひ出したことを心にはづかしく思つたが、卒に思ひ切つて彼に國政を一任して仕舞つた。處が幾日もたゝぬ中に此の方の許を去つていつて仕舞つた。それからと云ふものは、此の方は悲歎にくれて、何か大事なものでも失つたやうにボンヤリして居る。そして最早や一處に魯の國の富貴を樂しむ相手がなくなつたやうに思はれる。一體此の哀駘它と云ふ男は如何なる人物だらうか、此の方には今において分らないが、一つ説明をして貰ひたいものだ。」

語釋 惡人（惡は醜なり。容貌の見にくきを云ふ。） ○哀駘它（疏に曰ふ、「哀駘は醜き貌、因つて以て名となす」と。） ○望二人之腹一（月滿を望と曰ふ、人の腹飽くは猶ほ月の滿つるが如し、故に望字を假りて腹の飽く意に用ひしなり。用字例の如く奇なり。） ○知不レ出二乎四域一（知識の範圍が四方の國境を出でない、即ち國外のことまでは知らぬ、知識の範圍狹きを云ふ。） ○且而雌雄合二乎前一（雌雄は上文の丈夫と婦人を指す。即ち男子も女子も哀駘它を慕つて集り來るを云ふ。一說には雌雄は禽獸の類を云ふ、蓋し哀駘它德高し、故に禽獸すら自ら前に群集すとなり●一說には且を衍字とす。又一本には且を且に作る。岡松甕谷に異說あれども略す、考についで見るべし。） ○傳レ國（宣穎の經解本には傳を傳に作る） ○悶然（王先謙云ふ、「其の意に合はざるを云ふ」と。） ○氾然（又云ふ、其の心に係らざるを云ふと。即ち執着なき貌なり。） ○醜乎（醜は愧なり。） ○卹焉（卹恤同じ、憂恤悲愁の貌。）

仲尼曰、丘也嘗使二於楚一矣。適見下㹠子食二於其死母一者上。少焉眴若、皆棄レ之而走。不レ見レ己焉爾。不レ得レ類焉爾。所レ愛二其母一者、非レ愛二其形一也。愛下使二其形一者上也。戰

して、寡人國を傳へんとす。悶然として而る後應じ、氾然として辭するが若し。寡人醜乎たり、卒に之に國を授く。幾何も無く寡人を去つて行く。寡人卹焉として亡ふ有るが若く、與に是の國を樂しむもの無きが若し。是れ何人ぞやと。

大意 哀駘它は天下の醜である、且つ位もなく富もなく智もなし、而も丈夫の之と處る者は去る能はず、婦人之を見れば妾たらんことを請ふ。其の故何ぞや。

通釋 魯の哀公が孔子に問うて曰はれるには「衛の國に顏の醜い人があつて、その名を哀駘它と曰ふ。男子が彼と共に居ればなつかしく思つて其處を去ることが出來ぬし、女子が彼を見れば、その親たちに請うて外の人の正妻となるよりも、哀駘它先生の妾となりたいと曰ひ出す者が數十人でもまだキカない程で、ステキな人氣者である。然らば餘程えらい人物かと云へば、必ずしもさうではない、卽ち彼れ哀駘它は未だ嘗て首唱者となつて事をなしたことが無くて、いつでも人に調子を合はせて、後からついてゆくのみである。又人君たる位があつて、人の死を救ふやうな權力もないし、澤山な祿があつて、人の腹を滿たすやうな財力もない。おまけに顏が醜くて滿天下の人々を驚かす程である。先きにも云ふやうに、常に人の意見に調子を合せるだけで自ら意見を主張すると云ふことがない。又其の知識と云つた所で、魯の國內のことを知つて居る程度で、決して遠方のことまで知つては居ない。而るにどう云ふものか、女も男も彼に親み、その前に集つて來る。是れにはキツト何か常人と違た所があるに相違ないと思つて、此の方はわざ〳〵哀駘它を招いて篤と觀察した處が、案にたがはず其の醜いことゝ云つたら、實に天下

有聞其唱也、常和人而已矣。無君人之位、以濟乎人之死、無聚祿以望人之腹。又以惡駭天下。和而不唱、知不出乎四域、且而雌雄合乎前。是必有異乎人者也。寡人召而觀之、果以惡駭天下。與寡人處、不至以月數、而寡人有意乎其爲人也。不至乎期年、而寡人信之。國無宰、而寡人傳國焉。悶然而後應、氾然而若辭。寡人醜乎、卒授之國。無幾何也、去寡人而行。寡人卹焉若有亡也、若無與樂是國也。是何人也。

【訓讀】魯の哀公、仲尼に問うて曰く、衞に惡人あり、哀駘它と曰ふ。丈夫の之と處る者は思うて去ること能はざるなり。婦人之を見れば、父母に請うて、人に妻たらんよりは、寧ろ夫子の妾たらんと曰ふ者、十數にして未だ止まらざるなり。未だ嘗て其の唱ふるを聞くこと有らず、常に人に和するのみ。人に君たるの位、以て人の死を濟ふ無く、聚祿の以て人の腹を望す無し。又惡を以て天下を駭かす。和して唱へず、知は四域を出でずして、且つ而も雌雄前に合ふ。是れ必ず人に異なる者有らん。寡人召して之を觀るに、果して惡を以て天下を駭かす。寡人と處ること月を以て數ふるに至らずして、寡人其の人と爲りを意ふあり。期年に至らずして寡人之を信ぜり。國に宰なく

かと。無趾曰く、天之を刑す、安んぞ解く可けんやと。

【大意】德充符の人より見れば、外形や名譽に捉はれた孔子は天刑の人であり、桎梏の人である。

【通釋】孔子の所から去つた無趾は老子の所へ行つて語つて曰ふには「孔丘と云ふ男は至德の聖人にくらべて見るとまだ〲及びもつかぬと見える。彼はしきりに弟子どもを敎へ込んで居るが、こんなことを種にして將來怪體な名聲を天下に擧げようと思つて居るらしい。そして至德の人から見れば、名譽などと云ふものは、凡て足かせ手かせのやうに思つて居ると云ふことに氣がつかないらしい、誠に氣の毒な男だ。」そこで老子が「そんな惡口ばかり曰つて居ないで、死生を同樣に考へ、是非を一樣に考へて居る至德の人をして何ぜ氣の毒な孔丘の足かせ手かせをサツサと解かしめないのか、さうしてやつたらいゝじやないか。」と云へば、無趾が曰ふには「孔子が名譽などと云ふ外面的のものに捕はれて居るのは天が孔子を罰して居るのであつて、今更どうも救ひやうがない。」

【語釋】孔丘（孔丘とわざ〲云へるは孔子を見さげてのことなり。）○賓賓以學子爲（賓賓は頻々なり、學子は學人即ち從學の弟子なり、以學子爲とは色々と弟子どもを敎ふるを云ふ。一說には賓々は恭勤の貌と解し、以學子爲を「子に學ぶを以て爲す」と訓む。卽ち孔子が恭敬勤勉の態度を以て子（老子を指す）に就いて學問をなすと解す。）○諔詭幻怪之名（諔詭は釋文によれば奇異なりと解す、無趾より見れば名譽の如きものは怪しげなつまらぬものなるが故に然か云ふ。）

魯哀公問於仲尼曰、衞有惡人焉、曰哀駘它。丈夫與之處者、思而不能去也。婦人見之、請於父母曰、與人爲妻、寧爲夫子妾者、十數而未止也。未嘗

しよう。」と孔子が急に言葉を更めたが、無趾は最早や孔子を見限つて居るから、だまつて其のまゝ罷り出て仕舞つた。あとで孔子が弟子どもに向つて申されるには「弟子どもよ、勉強をせよ。あの無趾と云ふ男は兀者である。でも猶ほ學問に骨を折つて今までの惡い行を取り返へさうとして居る。まして今まで惡い行のない、人格に缺點のない、汝等に於ては、猶更十分に勉めねばならぬぞ。」と訓へられた。

語釋 叔山無趾（叔山は姓。無趾は名、疏に云ふ、足趾なし、因つて其の名となすと。）○踵（趾なし、故にカヽトで步み行くなり。林西仲云ふ、「踵字は兀者の脚迹を畫き出して妙」と。一說には踵は頻なり、しば〳〵の意。）○子不レ謹、前既犯レ患若レ是矣（一說には前字を以て絕句とす、言ふ心は子前行を謹まず云云。亦通ず。）○有尊足者（足字の上に於の字を省く。）○若是也（也邪と通ず。）○丘則陋矣夫。子胡不レ入乎（夫字にて絕句、嘆辭なり。一說には矣にて絕句、夫子は無趾を指すと。胡は何なり。）

無趾語老聃曰、孔丘之於至人其未邪。彼何賓賓以學子爲。彼且蘄以諔詭幻怪之名聞。不知至人之以是爲己桎梏邪。老聃曰、胡不直使彼以死生爲一條、以可不可爲一貫者解其桎梏、其可乎。無趾曰、天刑之、安可解。

訓讀 無趾、老聃に語つて曰く、孔丘の至人に於ける其れ未だしや。彼れ何ぞ賓賓として學子を以て爲す。彼れ且に諔詭幻怪の名を以て聞えんことを蘄めんとす。至人の是れを以て己が桎梏と爲すを知らざるかと。老聃曰く、胡ぞ直に彼の死生を以て一條と爲し、可不可を以て一貫と爲す者をして、其の桎梏を解かしめざる、其れ可ならん

今吾が來るは、猶ほ足より尊き者有つて存すればなり。吾れ是を以て之を全うせんことを務むるなり。夫れ天は覆はざるなく地は載せざるなし。吾れ夫子を以て天地と爲す。安んぞ夫子の猶ほ是の若くなるを知らんやと。孔子曰く、丘は則ち陋しいかな。子胡ぞ入らざるや。請ふ、講ずるに聞く所を以てせんと。無趾出づ。孔子曰く、弟子之を勉めよ。夫の無趾は兀者なり、猶ほ學を務めて以て前行の惡を復補せんとす。而るを況んや全德の人をやと。

大意　叔山無趾も亦刑餘の人である、罪によつて足を亡なへども、足よりも尚ほ尊きものを全うせんことを務めた。

通釋　魯の國に兀者で叔山無趾と云ふ人があつた。ビツコ引きつゝ孔子に敎を受けんとて御目にかゝりに來た。孔子が申されるには「そこ許は不謹愼であつたから、既に刑罰に觸れて、そのやうに足を切られて仕舞はれた。そんなになつてから來たとて、もうとても間に合はない。」そこで無趾が曰ふには「吾は人としての眞の務を知らずして、名譽などを得んが爲めに輕がるしく此の身を使つた爲めに吾は足を無くして仕舞つた。然し自分が今かうして來たのは、足は無くしたがそれでもまだ足より尊い者が失はれずにチヤンとあるからである。だから自分はそれをどうか、全うしたいのである。さて天は何物でも覆ひ、地は何物でも載せる、即ち天地ほど惠深い包容力の大きいものはないが、吾は是れまで先生をば其の惠深い天地のやうに包容力の大きい方だと思つて居ましたのに、さて來て見て驚きました。先生ともあらう方が、私が刑餘の人だとて相手になさらぬとは實に思ひも寄りませんでした。」孔子が申されるには「わしの考が固陋であつたわい。さあ奥へ御這入なさい。失禮だが聞き覺えたことをば御話

ず殘傷せらるゝ）　○廢然（自失の意。ケロリト忘れて。）　○十九年（養生主篇に詳かなり。長き年月の意。）　○而未㆔嘗知㆓吾兀者㆒也（此の句の主語は上の句の吾なり、吾は兀者でありながら自分の兀者であることを忘れて居た。是れと云ふのも先生が人の精神を重んじ外形などは少しも問題にせられぬ結果である。又伯昏無人を主語として解するも通ず。）　○形骸之内云云（形骸の内とは道徳を云ふ。形骸の外とは外形を云ふ。甕谷は「内外の二字は須らく前後相易ふべし、蓋し誤寫なり」と謂ふも、從はず。）　○蹴然（驚き愧づるの貌とあり、又立つて安からざるの貌とあり。）

魯有㆓兀者叔山無趾㆒、踵見㆓仲尼㆒。仲尼曰、子不レ謹、前既犯レ患若レ是矣。雖㆓今來㆒、何及矣。無趾曰、吾惟不レ知レ務、而輕用㆓吾身㆒、吾是以亡レ足。今吾來也、猶有㆓尊足者㆒存。吾是以務レ全レ之也。夫天無レ不レ覆、地無レ不レ載。吾以㆓夫子㆒爲㆓天地㆒、安知㆓夫子之猶若㆒レ是也。孔子曰、丘則陋矣。夫子胡不レ入乎。請講以レ所レ聞。無趾出。孔子曰、弟子勉レ之。夫無趾兀者也、猶務レ學以復㆓補前行之惡㆒。而況全德之人乎。

訓讀　魯に兀者、叔山無趾あり、踵して仲尼に見ゆ。仲尼曰く、子謹まず、前に既に患を犯すこと是の若し。今來ると雖も、何ぞ及ばんと。無趾曰く、吾れ惟務を知らずして、輕しく吾が身を用ひ、吾れ是を以て足を亡へり。今

されば罪を犯して同じく足を切られた人の中にも、その心の用ひ方に色々別があるから、たゞ形の上ばかりから見て一概に前科者呼をするものでない、形は兀者でも其の心術に於ては全人（滿足なからだを有する者）よりも勝つたものがあるかも知れない。古の弓の達人、羿の矢の達する範圍内に遊び、中央の所は必ず矢の命中する地點である。その中央の所に遊んで居ても中らないのは運命である。人が此の世に於ける亦斯くの如く、その罪に觸れずして足を全うするは實に天運の強き人なり、然るにその全く僥倖なるに氣付かずして、已れたま〳〵足を全うするの故を以て、吾が兀者なるを笑ふ者少なからず、そこ許の如きもその一人である。處が伯昏無人先生だけは違つたものだ、我輩が人から笑はれた爲めにムツト癪にさはつて、先生の所へ行くと、ケロリと忘れて歸つて來ることが出來る。是れは先生が汚れた我輩を善德を以て洗ひ清めて下さるのか、自分には一向分らぬが、何にしても不思議なことだ。吾輩が無人先生の門下に遊ぶことは十有九年の久しきに及んで居る。然るにその長い間先生は未だ嘗て吾輩が兀者であることを氣にとめられたことがないから吾輩も亦自ら兀者なることを忘れて居た。か樣な大先生の門下生であるそこ許と吾輩との交際も勿論精神的交遊であるべきである。然るにそこ許は我が眞價を外形に求めて居られるのは何んと間違つて居るではないか。」そこで子産はヒドク恐縮して、今までの傲慢な顏つきや姿勢を改めて曰ふには「よく解つたもう十分だ、それ以上云ふ心要はないよ。」

語釋 子既若レ是矣（若レ是とはそのやうに兀者になつて仕舞つたとの意。） ○自狀二其過一、以レ不レ當レ亡者衆。（狀は述なり、辯解の意。以は思ふなり。亡は失ふなり、足を切られること。） ○若レ命（運命に順ふ意。） ○遊二於羿之彀中一、中央者中地也（成疏によれば、羿は堯の時、射を善くする者なり。其の矢の及ぶ所を彀中と謂ふ。言ふ心は羿は弓の達人だから射る矢には空矢がない、故に其の矢の届く範圍内に居るものは必

を笑ふ者衆し。我れ怫然として怒る、而かも先生の所に適けば、則ち廢然として返る。知らず、先生の我を洗ふに善を以てするか。吾れ夫子と遊ぶこと十九年、而して未だ嘗て吾が兀者なるを知らざるなり。今子と我と形骸の内に遊ぶ、而るに子我を形骸の外に索む。亦過たずやと。子產蹴然として容を改め貌を更へて曰く、子乃ち稱すること無かれと。

大意 兀者たると否とは共に天命であつて悲しむに足らず、喜ぶに足らず、故に至人は外形を忘れ常に心を德に遊ばしむとなり。

通釋 子產も中々負けて居ない、にくまれ口をたゝいて云ふには「そこもとは最早や見らるゝ通りの足を切られた人のいやがる前科者ではないか。今更えらさうな理窟を並べて見た所が通るものでない。そのくせ大聖人堯とでも善に就いて競爭し兼ねないと云ふやうな氣位だ。どうせ、そこ許は足を切られる位の人格だから、自分はとても堯には及ばぬと云ふことを反省するだけの頭はないでせう、要するに足を切られた前科者のくせに、えらさうなことを云ふものでない。」そこで申徒嘉が曰ふには「兎かく人は自分を善くしたがるもので、自ら罪を犯して置きながら、それを兎や角くと辯解して、それが可なり大きな罪でありながら、自分では是れぐらゐの罪では足を切らるべきでないと思ふ者は多い、多くの人は皆さうである。之に反して自分の犯した罪を辯解せず、これだけの罪を犯せば足を切られないで濟むべきでないと觀念する者は極めて少ないのである。かうなるのも運命だ、人力ではどうすることも出來ないと悟つて、從容として運命に順ひ、成り行きに任せることは、たゞ有德者のみに出來る業である。

子產曰、子既若是矣、猶與堯爭善。計子之德不足以自反邪。申徒嘉曰、自狀其過、以不當亡者衆。不狀其過、以不當存者寡。知不可奈何、而安之若命、惟有德者能之。遊於羿之彀中、中央者中地也。然而不中者命也。人以其全足、笑吾不全足者衆矣。我怫然而怒、而適先生之所、則廢然而返。不知先生洗我以善邪。吾與夫子遊十九年、而未嘗知吾兀者也。今子與我遊於形骸之內、而子索我於形骸之外。不亦過乎。子產蹴然改容更貌曰、子無乃稱。

訓讀 子產曰く、子既に是の若し、猶ほ堯と善を爭はんとす。子の德を計るに、以て自ら反するに足らざるかと。申徒嘉曰く、自ら其の過を狀して、亡ふ當からずと以ふ者は衆し。其の過を狀せずして、存す當からずと以ふ者は寡し。奈何ともすべからざるを知つて、而して之に安んじて命に若ふは、唯有德者のみ之を能くす。羿の彀中に遊ぶ、中央は中るの地なり。然り而して中らざる者は命なり。人其の足を全うするを以て、吾が足を全うせざる

に殘つて居て貰ひたいものだが、御承知だらうね、然しそれとも不承知かナ。どうもそこ許は無遠慮で困る、執政たる此の方を見ても、少しも敬意を表して、避けることをせられない。そこ許は此の方と同じ樣に執政の重職にでも居るつもりかナ。」子産は申徒嘉が中々承知しさうもないやうだから、少し笠にきてかう云つて見た。處が申徒嘉先生、承知せざるはもとよりのこと、大に理窟を云ひ出した「伯昏無人先生の門では、もとより執政と云ふやうな人爵は問題にならぬ。だれもかゝる人爵などは念頭に置いて居ない。たゞそこ許だけがご自分の執政と云ふ地位を嬉しがつて人を輕蔑して居られる、そこ許は餘程御目出たい。吾れはかう云ふことを聞いて居る、鏡がよく拭つてあつて曇りがないと塵垢が止まらない、塵垢が止まると鏡が曇つてよく見えなくなる。それと同じやうに久しく賢者と一處に居ると自然と心は澄んで行に過がなくなると云ふことである。さてそこ許が識見を廣め、人格を大ならしめんとして仕へて居られる人は、伯昏無人と云ふ大先生である。だから此の諺の通りに今少しく心の曇りがとれて、過がなくてよささうなものだのに、そこ許の言はれることは、相も變らずこの樣であるとは、さて〳〵何んと間違つた話ではないか。そこ許は餘程頭が悪るくて大先生でも手がつけられぬと見える。」

語釋 申徒嘉（姓は申徒、名は嘉、鄭の賢人なり。） ○子産（姓は公孫、名は僑、字は子産、鄭の賢大夫なり。その事績は左傳に詳しく見ゆ。） ○伯昏無人（物我を忘れ德高くして測るべからざを意に取る、莊子の寓言的人物なり。） ○同レ席（席の幅は三尺、長さ九尺ぐらゐのムシロ、同席とは其の同じムシロに坐ることで、相接近して坐る意。禮によれば一席に四人坐す、故に余程相接近す男女七才なれば席を同うせずとの意も自ら分かる。） ○子而說ニ子之執政一而後レ人者（子而の而は則の如し、而則古文通用、則字は二者を對げて區別をあらはす時の助語として用ふ、卽ち外の弟子たちは（則）執政などゝ云ふ人爵は眼中に置いて居ない、然るにそこ許だけは（則）執政の地位を無上に悅んで居られる。怨則不レ可レ不レ忘、德則不レ可レ忘の如く用ふ。後レ人とは猶ほ人を輕んずと言はんが如し。一說には人に後れる、そこ許がかゝる低い考だから人に後れてしまふとの意。今取らず。）

訓讀 申徒嘉は兀者なり。而して鄭の子產と同じく伯昏無人を師とす。子產、申徒嘉に謂ひて曰く、我れ先きに出づれば則ち子止まれ、子先きに出づれば則ち我れ止まらんと。其の明日又與に堂を合し席を同うして坐す。子產申徒嘉に謂ひて曰く、我れ先きに出づれば則ち子止まれ、子先きに出づれば則ち我れ止まらん。今、我れ將に出でんとす。子以て止まる可きか、其れ未だしや。且子、執政を見て違けず、子は齊しく執政かと。申徒嘉曰く、先生の門固より執政有る此の如くならんや。子は、子の執政を說びて、而して人を後にする者なり。之を聞く、曰く、鑑明かなれば則ち塵垢止まらず、止まれば卽ち明かならざるなり。久しく賢者と處れば、則ち過無しと。今子の大を取る所の者は先生なり、而も猶ほ言を出す是の若し、亦過たずやと。

大意 兀者申徒嘉が鄭の執政子產の過を指摘す。

通釋 昔し鄭の國に申徒嘉と云ふ人あり、王駘と同じやうに兀者であつたが、鄭の宰相、子產と同じく伯昏無人と云ふ人を師匠として居た。或る時、子產は同じ弟子仲間とは云へ、時めく宰相が兀者風情と同行するのはいやだから、申徒嘉に向つて曰ふには「是れからは我輩が先生の所から先きへ出た時には、そこ許は暫らく後に止つて居て貰ひたい、その代りそこ許が先きへ出られた時には、我輩が後に殘らう」。それまで言はれたことだから、少し遠慮すればよいのに、さうはせずに其の翌日も、いつもの如く與に一堂に會し而も座席まで同うして平氣で坐つた。そこで子產は念の爲めに申徒嘉に向つて曰ふには「昨日も約束したやうに我輩が先きに出たならば、そこ許は後に殘り、そこ許が先きに出られたら我輩が後に殘らう。處が今日は我輩が先きに出かけようと思ふから、そこ許は後

なうし保つこと。徴は象徴、徴驗の意。）　○雄入二於九軍一（林希逸云ふ、「九軍は衆兵を謂ふなり」と。雄入とは奮つて突き入る意。）　○能自要者（要は期なり、必なり。岡松甕谷云ふ、「自要とは其の力を致して必ず初めに期する所に違はざるなきを謂ふなり」と。どこまでも勇名を揚げんとガンバル意。）　○直寓二六骸一（宣穎云ふ、「直は猶ほ特（タヾ）の如し。六骸を以て吾が寄寓となすなり」と。六骸とは身首四肢、即ち首と胴と四本の手足。）　○象二耳目一（林西仲によれば、即ち上文の不レ知二耳目之所一レ宜の意。耳や目をホンノ額のかざりぐらゐにしか考へて居ない。即ち耳目を通して受け込む感覺から超越して居ること。上文參照。）　○一二知之所一レ知（又林氏によれば此の句も亦上文の物視二其所一レ一、而不レ見二其所一レ喪の意、知の對象たる萬物を一體視して其の間に何等の得喪を認めないこと。）　○未二嘗死一者（又林氏によれば、即ち上文の死生不レ變、猶堅不レ遺の意。即ち恒常不變の心を云ふ。）　○擇レ日而登レ假（假は至るなり。陳壽昌云ふ、「假は遐（ハルカ）に通ず　時の至るを待つて高遠に昇るなり」と。宣穎云ふ、「此れ世を遣れて獨立するを借言するなり」と。）　○以レ物爲レ事（物は衆人の從逐を云ふ。）

申徒嘉兀者也。而與二鄭子產一同師二於伯昏無人一。子產謂二申徒嘉一曰、我先出則子止、子先出則我止。其明日又與合レ堂同レ席而坐。子產謂二申徒嘉一曰、我先出則子止、子先出則我止。今我將レ出。子可二以止一乎、其未邪。且子見二執政一而不レ違、子齊二執政一乎。申徒嘉曰、先生之門、固有二執政一焉如レ此哉。子而說二子之執政一而後レ人者也。聞レ之、曰、鑑明則塵垢不レ止、止則不レ明也。久與二賢者一處則無レ過。今子之所レ取レ大者先生也、而猶出レ言若レ是、不二亦過一乎。

懼れないと云ふ事實である。即ち物に懼れないと云ふ事實が本始の性命を保守して居ると云ふ象徴である。勇士はたゞ一人でも、雄々しく雲霞の如き大軍に突き入るものである。かく勇名を轟かさんことを求めて、どこまでも所期の目的を達せんとする者でさへ、猶ほかくの如く少しも懼るゝことなく雄々しく九軍に入ると云ふ有様である。況して此の大なる天地を以て恰も己が自由に使ひ得る屬官の如くに考へ、萬物を以て自家の府庫の如くに考へ、ただ肉體を己が假りの住家と考へ、耳や目を顏のカザリぐらゐに考へ、更に又智の對象たる事々物々を一體視して、その心は未だ嘗て死生に臨むも變ぜず、覆墜に處しても與に墜ちざる不變不動の心術を會得して居る彼の王駘の如きに在つては、もとより何物にも懼るゝ所はない。彼れ王駘は實に時の至るを待つて、高く天に登り至らんとして居る。即ち世を遺れて悠々自適して居るのに、人々の方ではウルサクも彼に從遊せんとして居る。彼れの方ではもとより衆人が自分に從ふと云ふやうな事は少しも眼中に置いて居ないが、衆人の方では押すな〱の勢で以て彼に從遊せんとして居る。

【語釋】彼爲レ己云云（爲は修なり、己の身を修めること。一説には爲をタメと訓み、彼れ王駘は己の爲めにし人の爲めにするに非ず（古の人、學爲レ己非レ爲レ人と云ふ論語の句、參照）と解す。四の其字は皆王駘自身を指す。得二其常心一とは、林西仲によれば、物と遷らざる心を得ること。最は聚なり、衆人の從遊するを云ふ。一説には尊なりと、亦通ず。）○鑑二於止水一（止水は靜かに湛へたる水、明鏡止水は靜かな心に喩へ、宋儒が好んで用ひた言葉。）○惟止能止二衆止一（惟止の上に止水の二字を加へて看よ。宣穎云ふ、「惟だ自ら止、故に能く衆の止を求むる者を止む」と。林西仲云ふ、「惟だ常心を得たる者のみ、能く人をして各其の常心を得せしむ」と。胡方云ふ「水定れば即ち形乃ち定まりて鑑すべし、故に鑑する者は必ず止水に於てす。德未だ定まらざれば則ち人去り、德定まれば則ち人滿するに嗑ふ」と。）○受二命於地一（草木は地より生ず、故に然か云ふ。）○惟松柏獨也在。冬夏靑靑。受二命於天一、惟堯舜獨也正（在は陳壽昌によれば、其の凋まざるを言ふなりと。論語子罕篇に子曰、歲寒、然後知二松柏之後一レ凋也とある參照。此の數句、一本には惟松柏獨也正、在二冬夏一靑靑。受二命於天一、惟堯舜獨也正、在二萬物之首一に作る。今取らず。二の獨也の也は助語、意なし。）○保レ始之徵（人が始めて天から受けた純良なる本性を

猶ほ是の若し。而るを況んや天地を官とし、萬物を府とし、直六骸を寓とし、耳目を象とし、知の知る所を一にして、而して心未だ嘗て死せざる者をや、彼れ且た日を擇んで登假せんとす。人即ち是に從ふなり。彼れ且た何ぞ肯へて物を以て事とせんやと。

大意 王駘の心は止水の如く靜かであつて死生覆墜何物にも懼れざるを說く。

通釋 常季更に問うて曰く「彼れ王駘が己を修むるには、自己の智慧の光によつて、容易に把捉し難き己の心を會得し、更に會得したる精神力を以て、恒常不變の心術を悟り得た。其の修養はあくまで自己の爲めの修養であつて、人を敎へ世を導かんが爲めの修養でなかつた。況んや人に知られ、人に尊ばれんが爲めではなかつた。然るに世人が彼れに聚り、彼れに從遊すること斯くの如くなるは何の爲めでせうか。」孔子答へて曰く「人が自分の姿を水鏡に照し寫すには、流れる水に照し寫すことなく、靜止せる水に寫すのである。止水はたゞ自ら靜止して居ればこそ、能く己が姿を寫さんとして止水を求むる衆人の足を止めしむることが出來る。若し靜止せずして流動したらんには何ぞ能く衆止を止めんや。乃ち王駘の心は常に湛然として止水の如し。故に彼れ招かずと雖も、自ら衆人を聚めることが出來る。凡そ生命を地上に受けて居るものゝ中で、松や柏のみが冬夏にわたりて少しも凋まず靑々として居る。生命を天に受けて居るものゝ中で、堯と舜のみが獨り正しく、幸にも能く己れの性を正しく保ち、其の德化によつて衆人を正しく導いた。王駘の如きは先づ木で云はゞ松柏、人で云はゞ堯舜と云つてもよい人物だ。人々が自から從遊するのも無理はない。そも〱天から受けた性命を完全に保つて居ると云ふ象徵は、何物にも

○物視二其所一レ一、而不レ見二其所一レ喪（宣穎云ふ、「萬物を視て一致となす、烏んぞ得喪あらんや」と）
（萬物を一體視して居るから利害得喪の感がないとなり。）

常季曰、彼爲レ己、以二其知一得二其心一、以二其心一得二其常心一。物何爲最レ之哉。仲尼曰、人莫レ鑑二於流水一、而鑑二於止水一。惟止能止二衆止一。受二命於地一、惟松柏獨也在。冬夏靑靑。受二命於天一、惟堯舜獨也正。幸能正レ生、以正二衆生一。夫保レ始之徵、不レ懼之實。勇士一人、雄入二於九軍一。將レ求レ名而能自要者、而猶若レ是。而況官二天地一、府二萬物一、直寓二六骸一、象二耳目一、一二知之所一レ知、而心未二嘗死一者乎。彼且擇レ日而登假。人則從レ是也。彼且何肯以レ物爲レ事乎。

訓讀　常季曰く、彼れ己を爲むるに其の知を以て其の心を得、其の心を以て其の常心を得たり。物何爲れぞ之に最るやと。仲尼曰く、人、流水に鑑みるなくして、止水に鑑む。唯止のみ能く衆止を止む。命を地に受くる、惟松柏のみ獨り在り。冬夏靑々たり。命を天に受くる、唯堯舜のみ獨り正し。幸に能く生を正して以て衆生を正す。夫れ始を保つの徵は懼れざるの實なり。勇士一人、雄九軍に入る。將に名を求めんとして、能く自ら要する者すら、

きあわてると云ふやうなことがない。實に彼れは眞實無假なる彼の眞宰を認識して、外物に惹かれて遷り變ると云ふことがない。凡ての物の變化を以て運命なりと達觀して道の本源をつかんで居る。王駘の心の用ひ方は先づ此のやうである。」常季の曰く「先生のお說明は餘りに深遠で何んのことだか一向に分かりません。もう一度分かり易く御話下さいませんか。」孔子の曰く「平たく云ふとかう云ふことだ。兎角く物は視方によつてどうでもなるものだ、即ち差別的見地から視れば、殆んど同じと云つてもよい程密接の關係を有して居る肝と膽でも、遠く離れて風土の異なつて居る楚と越程違つて居る。之に反して無差別的見地から視れば、千差萬別である一切萬物も悉く同一である。そもそも王駘の如き達人は實に耳や目が外界の事物に接して感ずる所の快樂から超越して、心を道德の極地に遊ばしめ、萬物皆同一なる點に着目して、物の是非得喪と云ふやうなことは眼中に置かない。故に刑罰の爲めに自身の足を喪つたのを視ることは恰も一團の土が大地に崩れ落ちたるが如く、即ち元の物が元に還つたまでにて、そこに何等の得喪を認めないのである。」

語釋　王先生（林西仲云ふ、「人稱して王先生と爲す、おのづから是れ常人に非ずと。然るに成疏によれば、王は盛なり、先生は孔子なり、言ふ心は彼の王駘なる者は是れ殘兀の人なるに、門徒の侍從するは、尼父よりも盛なり」と。此の說によれば「先生よりも王（さかん）なり」と訓まねばならぬ。）　○死生亦大矣云云（死生について變と云ひ、覆墜について遺と云ふ、遺は落なり。要するに死生とか天地覆墜の如き大事變に遭つても心を動搖せしめぬ意。）　○審乎無假而不與物遷（宣穎云ふ、「無假を審かにすとは能く眞宰を知るなり、遷とは不變不遺を言ふなり」。即ち無假とは假りに非ざるもの、齊物論に所謂眞宰を云ふ。物とは上文の死生天地を始めとして凡ての外物を云ふ、遷らずとは上文の變ぜず遺ちすの意で心を動搖せしめぬこと。）　○命物之化（郭象云ふ、「言ふ心は化を以て命となし、而して乖違することなきなり」と。凡て萬物の變化をば運命なりと觀じて決して逆らはぬこと、即ち物のなり行きに任せる意。）　○自其異者視之云云（郭象云ふ、「夫れ其の異なる所に因りて、之を異にせば、即ち天下に異ならざるもの無し。而れども浩然大觀する者は天地を官とし、萬物を府とし、異の異とするに足らざるを知る、故に其の同じき所に因つて之を同じとする時は天下皆同じからざるものなし」と。）　○德之和（林西仲云ふ、「德の至美至樂の處なり」と。）

假而不與物遷、命物之化、而守其宗也。常季曰、何謂也。仲尼曰、自其異者視之、肝膽楚越也。自其同者視之、萬物皆一也。夫若然者、且不知耳目之所宜、而遊心乎德之和。物視其所一、而不見其所喪。視喪其足、猶遺土也。

訓讀　常季曰く、彼は兀者なり。而るに王先生たり。其れ庸と亦遠し。然るが若き者は、其の心を用ふるや、獨り之を若何んと。仲尼曰く、死生も亦大なり。而して之と變ずるを得ず。天地覆墜すと雖も、亦將に之と遺ちざらんとす。無假を審にして、物と遷らず、物の化を命として其の宗を守るなりと。常季曰く、何の謂ぞや。仲尼曰く、其の異なる者よりして之を視れば、肝膽も楚越なり。其の同じきものよりして之を視れば、萬物皆一なり。夫れ然るが若き者は、且た耳目の宜しき所を知らずして而して心を德の和に遊ばしむ。物其の一とする所を視て、而して其の喪ふ所を見ず。其の足を喪ふを視ること、猶ほ土を遺すがごとしと。

大意　王駘が能く心を德の至極に遊ばしめ、萬物を見て一となし、物の得喪を認めないことを說く。

通釋　常季が更に尋ねて云ふには「彼れ王駘は兀者にも拘らず、世人から王先生と云はれて尊ばれて居る點から觀ると、凡庸な人とは餘程違つて居るに相違ない。か樣な人物の心の用ひ方は一體どの樣でせうか。」孔子答へて曰く「死生と云ふことも中々重大なことだが、王駘は死生を超越して居るから、死生の爲めに心を變動することになり得ない。又天地が顚覆し墜落するやうな大事變が起つても、ヤハリ天地と共にオツコチル、つまりその爲めに驚

不思議なことには、彼に從遊して居る人々は、最初彼の所へ往く時には、全くカラで何等の見識もなかつたものが暫らく彼の所に居ると、どうしたものか其の歸る時には充實した者、十分な收穫を持つて歸へることが出來る。たしかに彼れには不言の敎即ち自然の感化力があつて、別に形にあらはれた敎と云つては無いが、從遊者の心に自然と人格的感化を與へて立派なものにする人ではありますまいか。一體彼れはどう云ふ人物なんでせうか。」孔子がそれに答へて曰はれるには「王駘先生は大人格者である。吾れも疾くに敎を仰ぎたいと思つて居たが、その機會がなくて、たゞ後れてまだ往かないまでのこと、行く／＼は先生を以て自分の師匠としたいと思つて居る。まして吾れに及ばぬ者どもは無論師匠と致すべきである。汝は魯の國を中分してとか申したが、中々どうしてたゞ魯の國ぐらゐのことでない、自分は行く／＼は天下中の人々を引きつれて、とも／＼に王先生に從遊しようと云ふ所存である。

語釋 兀者（刖刑に處せられた者、即ち罪を犯して足を切られた者。） ○常季（成疏には魯の賢人とあり、釋文には孔子の弟子とある。姑らく後に從ふ。） ○立不レ敎、坐不レ議（立と坐とは互文である。）
○虛而往、實而歸（名句である。林希逸云ふ、「往いて之に從ふ者は、皆空虛にして未だ見る所あらず、一見して歸らば、即ち充然として得るあり」と。） ○無レ形而心成者（林氏又云ふ、「無レ形とは見る所なきなり、心成とは之に感じて自ら化成するなり」と。目に見える敎とてはないが、自然に感化を受けて立派に成る意。岡松甕谷云ふ、聖人禮樂の敎の如きは、是れ形ある者なり、王駘は則ちしからず、故に形なしと曰ふと。） ○奚假（奚は何但と云はんが如し。）

常季曰、彼兀者也。而王先生。其與レ庸亦遠矣。若レ然者其用レ心也。獨若レ之何。

仲尼曰、死生亦大矣。而不レ得二與レ之變一。雖二天地覆墜一、亦將レ不二與レ之遺一。審二乎無

形而心成者邪。是何人也。仲尼曰、夫子聖人也。丘也直後而未往爾。丘將以爲師。而況不若丘者乎。奚假魯國。丘將引天下而與從之。

訓讀 魯に兀者王駘あり。之に從ひて遊ぶ者、仲尼と相若く。常季、仲尼に問うて曰く、王駘は兀者なり。之に從ひて遊ぶ者、夫子と魯を中分す。立ちて敎へず、坐して議せず。虛にして往き、實にして歸る。固より不言の敎あり。形なくして心に成れる者か。是れ何人ぞやと。仲尼曰く、夫子は聖人なり。丘や直後れて未だ往かざるのみ。丘將に以て師とせんとす。而るを況んや丘に若かざる者をや。奚ぞ假魯國のみならん。丘將に天下を引いて、與に之に從はんとすと。

大意 王駘は兀者である、而も從つて遊ぶものの多きこと孔子と相並ぶは何ぞ。

通釋 昔し魯の國に罪の爲めに足を切られた王駘と云ふ者があつた。刑餘の人であるにも拘らず之に從つて學ぶものが非常に多くて、其の弟子の數が孔子と同じ位であつた。そこで常季と云ふ人が孔子に尋ねて曰ふには「あの王駘と云ふ男は、罪を犯して足を切られた前科者ではないか。然るに之に從つて學ぶものが非常に多くて、數の割合から申すと、實に先生と魯の國を二分して、其の一分を彼が持つて居る程である。餘りに人氣があるので、定めて敎へ方が上手か或は又說く所が勝れて居るかと思つて、行つて見た所が、實に不思議なことには、彼は別に立つて敎へるでもなく、又坐つて議論するのでもなく、たゞボンヤリと弟子どもと遊んで居るだけです。然るに更に亦

内篇 德充符第五

叙説 是れ莊子内篇の第五である。謂へらく、道德、内に充實する時は必ず外に符あり、何ぞ外形を裝ふの要あらんやと。故に以て篇に名づく。莊子の時に當り、世人徒らに禮儀外形に拘りて、眞の道德を内に養ふことを忘れ所謂小人儒たる者比々として、皆是れなりと云ふ情態であつた。外形は云はずもがな、德すら猶ほ之を支離にし得た莊生から見れば沙汰の限りである。是れ莊生をして驅つて此の一篇を成さしめ篇内故らに兀者王駘を始め、種々畸形の人を擧げ來りて、德充符の人々の眞面目を示した所以である。篇中登場の人物は揃ひも揃つて不具畸形の人ばかりで、餘りに故意とらしい所がないではないが、蓋し德の符は全く是れ外邊的の事ならず、先づ形骸の一邊を抹去することを要するを明かにせんが爲めであつて、(宣穎の南華經解參照) 定めて當時の小人儒の徒輩をして啞然たらしめたものがあつたであらう。

魯有兀者王駘。從之遊者、與仲尼相若。常季問於仲尼曰、王駘兀者也。從之遊者、與夫子中分魯。立不教、坐不議。虛而往、實而歸。固有不言之教。無

然るに迷へる人々は之を取ることを知らない。禍の堪へ難きは大地よりも重き感がある、然るに世の愚かな人々は之を避けることを知らない。誠に氣の毒なことだ。止めたがよい、止めたがよい、道德を以て人の上に立たうとすることなぞはよしたがよい。それこそ大地よりも重き禍を招く所以である。あぶないよ、あぶないよ、地上に線を畫いて其の內を趨るやうにあの窮屈な禮儀などをやかましく說いて吾れと吾が身を拘束することは誠にあぶないことだ。人世の行路は危險千萬で、到る處荊棘や迷陽が生い茂つて居る。迷陽よ、迷陽よ、吾が步み行く足を傷ふ勿れ。吾に於ても障害物に遇はゞ一步退き之を避けて行き、冒險直行して自ら足を傷ふこと勿れ。山は能く木を生ずるからそれが身の寇となつて自らそこなはれるし、膏は火を點じて物を照らす能力があるから自らモヤされる。肉桂は食用になるから人に伐られ、漆の木は塗物として役に立つから劃かれて仕舞ふ。要するに世人は皆有用の用とて有能なものが役に立つことを知つて、無用の用とて無能なものが反つて役に立つことに氣がつかぬ。」

語釋 鳳兮鳳兮、何如德之衰也（論語の朱注に「鳳、道あれば見はれ、道なければ隱る、接輿以て孔子に比す、而して其の隱るゝ能はざるを譏りて德の衰と爲すなり。」） ○聖人成焉（宣穎曰く「其の功を成す」と。） ○聖人生焉（又曰く「其の生を全うす」と。） ○福輕乎羽（又曰く「取り易きを云ふ」と。福は生を全うするを云ふ。） ○禍重乎地（又曰く「堪へ難きを云ふ」と。禍は生を傷ふを云ふ。） ○已乎已乎、臨人以德（口義に云ふ「已乎已乎とは猶ほ休めよ休めよと言はんが如し。德を以て自ら尊くして下、他人に臨むは禍を取るの道なり。」） ○畫地而趨（又云ふ「其の自ら拘束して以て自ら苦むなり。」） ○迷陽（因に「微なり、芒ありて味苦し、山間の人、之を食ふ。」） ○吾行卻曲（宣穎曰く「卻步委曲、敢て直道せず」と、一步しさり回避して行く意。） ○山木自寇也。膏火自煎也（副墨に「山は木を生ずるを以て自ら戕はれ、膏は火を引くを以て自ら熬く」）

訓讀 孔子楚に適く。楚の狂接輿、其の門に遊びて曰く、鳳や鳳や、何如ぞ德の衰へたるや。來世は待つ可からず、往世は追ふ可からざるなり。天下道あれば、聖人成す。天下道なければ聖人生く。今の時に方りては、僅に刑を免れんのみ。福は羽よりも輕し、之を載するを知る莫し。禍は地よりも重し、之を避くるを知る莫し。已なんか、已みなんか、人に臨むに德を以てす。殆いかな、殆いかな、地を畫して趨る。迷陽、迷陽、吾が行くを傷ふ無れ。吾が行くは卻曲し、吾が足を傷ふ無れ。山は木にて自ら寇するなり。膏は火にて自ら煎るなり。桂は食ふ可し、故に之を伐る。漆は用ふべし、故に之を割く。人皆有用の用を知りて、無用の用を知る莫きなりと。

大意 前章に同じ。岡松甕谷曰く「此の一節は文辭淺陋、略ぼ漁父盜跖諸篇と相若く、蓋し後人の加ふる所、決して莊生の筆に非ず。且つ上文に又況支離其德者乎の一句、意已に竭きたり、豈に復た續ぐに長端を以てするを得んや。亟に刪去して可なり」と。論語微子篇狂接輿の章を觀れば甕谷の所說必ずしも所以なきに非ざるを見ん。

通釋 孔子が楚へ行つた時、狂接輿と云ふ隱者が遊びに來て次ぎのやうなことを曰つた「鳳よ鳳よ、汝は聖王出現の世に姿をあらはすものなるにコンナ亂世に出て來るとは、何うしてそのやうに德が衰へたのか。此のやうに亂れて居てはトテモ來るべき太平の世を待つことは出來ぬし、さればとて過ぎ去つた太平の世には追ひ着くことは出來ぬ。どちらにしても惡い時に出て來たものだ。古の聖人は天下が太平の時には出て仕へて功業を成し、天下が亂れた時には退きて野に居り、獨り其の身を全うす、之が聖人世に處するの道である。今の如き亂世に於ては遁れ隱れて、刑罰を免がるれば上乘であつて、決して世に出づべき時ではない。福の取り易きは輕い羽を取るやうである、

天壽を全うするに十分であるから、まして其の德を不具にする、卽ち自己の德を忘れることが出來たならば、それこそ無用反つて大用となつて、どれ程大きな利益を受けることが出來るやら想像も出來ない。

【語釋】支離疏（支は肢、離はハナレ〳〵、身體の不完全なることを形容した言葉、以て此の男の通り名となる。疏は此の男の名。勿論寓言の人なり。） ○頤隱於齊（頤はアゴ。齊は臍に同じ、ヘソ。成疏によれば頤が臍に隱れて臍の間に在りと。或は頤が臍をかくすと云ふ。） ○會撮（釋文によると「會撮は髻なり、古は髻、項中に在り、脊曲り、頭低る、故に髻、天を指すなり」と。又會撮は項椎なりと。ウナジの處にある背骨で、少し高くなつて居るものを云ふ。） ○挫鍼治繲（挫鍼は縫衣なり、治繲は浣衣なり。） ○鼓筴播精（鼓は簸出すること、筴は小さき箕。播は散なり、放なり、精米と粗米とを篩ひ分けること。一說には鼓筴播精は占卽ち賣卜のことであると、說は釋文に見ゆ。） ○不受功（徭役に任ぜず、仕事を申し付けられぬこと。） ○三鍾（六斛四斗を鍾と云ふ。） ○支離其德者（成疏に云ふ、「德を忘るると云ふが如し」と。）

孔子適楚。楚狂接輿遊其門曰、鳳兮鳳兮、何如德之衰也。來世不可待、往世不可追也。天下有道、聖人成焉。天下無道、聖人生焉。方今之時、僅免刑焉。福輕乎羽、莫之知載。禍重乎地、莫之知避。已乎已乎、臨人以德。殆乎殆乎、畫地而趨。迷陽迷陽、無傷吾行。吾行郤曲、無傷吾足。山木自寇也。膏火自煎也。桂可食、故伐之。漆可用、故割之。人皆知有用之用、而莫知無用之用也。

訓讀 支離疏なる者、頤、齊に隱れ、肩は項より高く、會撮は天を指す。五管は上に在り、兩髀脅と爲る。挫鍼治繲して、以て口を餬するに足る。筴を鼓し精を播して、以て十人を食ふに足る。上、武士を徵すれば、則ち支離、臂を其の閒に攘ぐ。上、大役あれば、則ち支離は常疾あるを以て、功を受けず。上、病者に粟を與ふれば、則ち三鍾と十束の薪とを受く。夫れ其の形を支離する者、猶ほ以て其の身を養うて其の天年を終ふるに足る。又況んや其の德を支離する者をや。

大意 此の章亦前三章と同じく莊子が處世の秘訣、無用の用を說いたのである。結句の支二離其德一は最も味あり。

通釋 支離疏と名づくる人あり、ひどいセムシの爲めにアゴはオヘソの所に隱れ、肩は突き立つて頭の頂上よりも高く、髻は天の方向を指し、頭を低く垂れて居るから、五臟が反つて頭より上にあり、又ひどく背が曲つて居るから兩股が脇の處に當つて居ると云ふ始末である。處が此の男、背が曲つて居るから反つて裁縫をしたり、洗濯をしたりするのに都合がよいので、人仕事をして立派に口スギをすることが出來る。又箕で簸出して良い米と粃とを篩ひ分ける段になると仕事が早くて優に一家十人を扶養するに十分である。又お上で兵士を召集する時には、支離サンは片輪で兵隊に取られる心配がないから、腕をまくつて大勢の中を威張つてあるく。又お上に大工事がある時は支離サンは持病があるから、勞役を受けないですむ。又お上で世のあはれな病人に米を施す時などは、支離サンは三鍾と十束の薪を貰ふことが出來る。そも〳〵肉體が片輪で無用の身となつてさへも、己が身を養ひ、その

〱のものは猿の杙を求むる者が伐つて仕舞ふし、三カ、ヘ四カ、ヘあるものは富豪の棟を求むる者が伐つて仕舞ふし、七カ、ヘ八カ、ヘあるものになると貴族豪商などで棺の一枚板を求むる者が伐つて仕舞ふ。されば皆其の天壽を全うせずして、斧斤に伐られて中途で若死して仕舞ふ。それは是等の木が役に立つ爲めに此の患へにかゝるのである。然るに河神を祓ひ祭るに白顙の牛、天狗鼻の豚、痔病の人は河神の犧牲にすることが出來ぬ。巫祝は三者皆共に祭神の用に供ることが出來ぬことを知りて不祥の物となして居る。處が至れる人は之を以て反つて大祥となして居るのである。

【語釋】荊氏（地名。）　○拱把（兩手を拱と曰ひ、一手を把と曰ふ。二ニギリ、一ニギリ。）　○杙（因に、狙猴を棲するの架とあり。トマリギ。）　○高名之麗（因に「高名は高名の家、麗は屋の棟梁。上の拳曲の句に應ず」。）　○亢鼻（釋文に司馬云ふ亢は高なりと、崔云ふ仰なりと。天狗鼻、或は上向き鼻。要するに鼻の形端正ならぬこと。）　○樿傍（又云ふ「棺の全邊なる者、上の軸解の句に應ず」。棺側の一枚板。）　○解（羅勉道の循本に「漢（書）の郊祀志に古天子常に春を以て祠に解す、言ふ心は罪を解き福を求むるなり」とあり。之によれば解は神を祭ることなり。）　○適河（河神を祭ること。）

支離疏者、頤隱於齊、肩高於項、會撮指天。五管在上、兩髀爲脅。挫鍼治繲、足以餬口。鼓筴播精、足以食十人。上徵武士、則支離攘臂於其閒。上有大役、則支離以有常疾不受功。上與病者粟、則受三鍾與十束薪。夫支離其形者、猶足以養其身、終其天年。又況支離其德者乎。

宋有荊氏者、宜楸柏桑。其拱把而上者、求狙猴之杙者斬之。三圍四圍、求高名之麗者斬之。七圍八圍、貴人富商之家求樿傍者斬之。故未終其天年而中道之夭於斧斤。此材之患也。故解之以牛之白顙者、與豚之亢鼻者、與人有痔病者、不可以適河。此皆巫祝以知之矣。所以爲不祥也。此乃神人之所以爲大祥也。

訓讀 宋に荊氏といふ者あり、楸、柏、桑に宜し。其の拱把より上なる者は、狙猴の杙を求むる者之を斬る。三圍四圍は高名の麗を求むる者之を斬る。七圍八圍は貴人富商の家の樿傍を求むる者之を斬る。故に未だ其の天年を終へずして、中道にして斧斤に夭せらる。此れ材の患なり。故に之を解する牛の白顙の者と、豚の亢鼻の者と、人の痔病ある者とを以てす、以て河に適く可らず。此れ皆巫祝以て之を知る。所以に不祥と爲すなり。此れ乃ち神人の大祥となす所以なり。

大意 上章に同じ。

通釋 宋の國に荊氏と云ふ所があつて、其の地は楸、柏、桑などに適してゐる。此等の木は其の一握か二握そこ

爛れて傷を爲す。之を嗅げば、則ち人をして狂酲三日にして已まざらしむ。子綦曰く、此れ果して不材の木なり。以て此の其の大なるに至るなり。嗟乎神人は此の不材を以てすと。

大意 前章に同じ。

通釋 南伯子綦が商が丘に遊びに行つた時、一本の大木を見たが、それはトテモ珍らしい大木であつた。四千匹の馬でも其の木の蔭に隱れ蔽はれる程である。そこで子綦が思はず「これは一體何んと云ふ大木であるか。きつと素敵な用材になるであらう」と感嘆しながら、仰いで其の小枝を視ると、曲りくねつて居て棟や梁などにはトテモ使ふことが出來ず、又俯向いて其の大きな幹を視ると、その中は空虚で棺などに用ふることが出來ぬ、葉をなめて見ると毒で口がたゞれて傷して仕舞ふし、臭をかいで見ると、其の臭氣の爲めに悪醉して三日たつても癒らぬ程である。そこで子綦が復た感嘆して云ふには「此の木は結局役に立たぬ木だ、役に立たぬからこんなに大きくなつたのだ。さて〳〵古の神人が其の生を全うしたのもヤハリ此の不材無用を以て處世の道としたからである。」

語釋 南伯子綦（齊物論に見ゆる南郭子綦に同じ。）○商之丘（之は「が」に同じ、丘の「が」の如きか。）○結駟千乘（結駟は連絡した四頭の馬、四馬を以て車一乘をひく、故に結駟千乘と云ふ。）○隱將芘其所藾（因に「藾は蔭なり、其の枝の蔭ふ所、千乘隱れて之に芘はる可し、大に異なる所以なり。」）○拳曲（追遙遊には卷曲に作る同じ。）○大根（追遙遊には大本に作る同じ。）○軸解（解莊に車輻の解隙あるが如く、大根の中、空處なりとあり。諸解多く木理旋散（モクメが亂れて居ること）となす。亦通ず。）○狂酲（因に酒病を酲と曰ふとあり。ワルヱヒなり。）○神人以此不材（口義に「古の神人、其の生を全うする所以の者も亦此の不才を以てのみ。」）

語釋　診其夢（診は「占ふ」と訓むが通行の說である。王念孫によれば、「診は當に讀んで畛と爲すべし、畛は告なり」と。今此の說に從ふ。王念孫には讀書雜志と云ふ有名な著述があつて極めて有用な書物である。その中に莊子に就いて三十五條の說が見えて居る。）○趣取無用、則爲社何邪（成玄英云ふ、「櫟木の趣意、無用を用となし、その生を全うするに取るならば、則ち何すれぞ社となりて以て自ら榮ゆるや、門人未だ解せず、故にこの問を起すなり」と。趣は趣意即ち主義の意。）○詬厲（釋文に司馬云ふ、「詬は辱なり、厲は病なり」と。はづかしめられ、いやがられること。）○而以義喩之云云（而は一說には汝と訓む、亦通ず。喩は諸本皆譽に作る、今林西仲本に從ふ。林西仲云ふ、「常義を以て揣度すべきに非ず」と。奚侗云ふ、譽は林西仲本喩に作る、亦未だ妥とせず、竊かに疑ふらくは當に謩に作るべし、蓋し形似たるを以て誤る。謩は議謀と爲す、大宗師に士を謩(はか)らずと是なり。言ふ心は彼れ保守する所已に衆と異なる、而るに汝が謩乃ち義に據つて以て之を議するは、此れ亦遠しと。一說として存す。）

南伯子綦遊乎商之丘、見大木焉有異。結駟千乘、隱將芘其所藾。子綦曰、此何木也哉。此必有異材夫。仰而視其細枝、則拳曲而不可以爲棟梁。俯而視其大根、則軸解而不可以爲棺槨。咶其葉、則口爛而爲傷。嗅之則使人狂酲三日而不已。子綦曰、此果不材之木也。以至於此其大也。嗟乎神人以此不材。

訓讀　南伯子綦、商の丘に遊びて、大木を見る、異なる有り。結駟千乘、隱れて其の藾する所に芘はれんとす。子綦曰く、此れ何の木なりや。此は必ず異材あらんかなと。仰いで其の細枝を視れば、則ち拳曲して、以て棟梁と爲す可からず。俯して其の大根を視れば、則ち軸解して、以て棺槨と爲す可からず。其の葉を咶むれば、則ち口

焉、以爲不知己者詬厲也。不爲社者、且幾有翦乎。且也彼其所保與衆異。而以義喩之、不亦遠乎。

訓讀 匠石覺めて其の夢を診ぐ、弟子曰く。趣きて無用を取らば、則ち社たるは何ぞやと。曰く、密にせよ。若、言ふ無れ。彼亦直ゞ焉に寄せ、以て己を知らざる者の詬厲と爲すなり。社と爲らざるも、且た幾ど翦らるゝ有らんや。且や彼れ其の保つ所は衆と異なる。而るに義を以て之を喩ふるは、亦遠からずやと。

通譯 匠石が夢からさめて後、夢の顚末を弟子に告げた處が、弟子が尋ねて曰ふには「櫟社の樹が無用を以て其の主義として居るならば、社木となつて最も人の目につき易い光榮なる地位に身を置くのは矛盾して居りはしないですか。」匠石が云ふには「內證〳〵。又聞えるといけないから、そんなつまらぬことは言はぬことだよ。彼れ櫟樹はホンの假りに社に身を托して居るだけだよ。そしてワザと人目を引き易い所に身を置いて、彼れの高い考を知らない人々から、役に立たずよ、ヤクザな木よと惡口いはれて居るのである。彼れの如き深い考を持つて居ればたとひ社木とならなくとも、恐らく人に伐られることはあるまい。且つ彼れ櫟樹が抱いて居る考は一般人と異つて居る。卽ち衆人は有用を以て有用と考へて居るに對して、彼れは無用を以て有用なりと考へて居る、テンデ考の根本が違つて居る。然るに汝等のやうに普通の道理を以て彼れの態度を批評するのは、何んと見當違ひぢやないか。」

様な木は何れも天壽を全うせずして途中で若死して仕舞ふ。これもつまりは自ら進んで世間のものから打ちたゝかれる者で、自業自得の話である。これは獨り是等の木ばかりでなく、世の中のものは皆この様でないものはない。處が俺はそれとは違つて、世の中に役に立たないことを願ひ求めて居ることが久しいことであつた。その間には幾度も殺されかけて、ヤツト今汝から散木呼ばはりをされて、始めてその願がかなつたのだ。此の役に立たぬことが俺に取つてステキに役に立つ譯だよ。なぜならば若し俺が役に立つ木であつたら、疾くに人に伐られて仕舞つて、トテモ此の様に大きくなることは出來なかつた筈だ。且つ俺にはまだ申し分がある。全體汝も俺も倶に皆大自然の支配を受けて居る萬物中の眇たる一物たるに過ぎないではないか、されば何とてつまらぬ物だと互に他の物を識る資格があらうや、そんな資格はない筈だよ。然るに汝は俺のことを散木と惡口を云つたが、無用を以て散と考へて居る汝こそ眞の意味に於て死にぞこなひの役に立たずだ。それがどうして自ら散木を以て任じて居る俺の妙用がわかるものか。」

語釋　文木（郭象云ふ「凡そ用ふべきの木を文木と爲す」と。役に立つ木のことで、下の柤梨橘柚などを指す。）○果蓏（果實の樹木に生ずるを果と云ひ、蔓草に生ずるを蓏と云ふ。）○實熟則剝、剝則辱（一本下の剝字なし。陳壽昌云ふ剝は擊ち落とす意。）○小枝泄（兪樾云ふ、「泄讀んで抴と爲す、牽引なり」と。引き曲げられる意。）○相物也（お互につまらぬ物だから、何も自分だけが偏りえらがつて他を物扱かひにすることは出來ぬ意。）○幾死之散人云云（匠石は不才無用を以て散と爲す、櫟樹は才有用を以て散となす。散人散木の義、玩味すべし。）

匠石覺而診其夢。弟子曰、趣取無用、則爲社何邪。曰、密若無言。彼亦直寄

久矣。幾死乃今得レ之、爲二予大用一。使二予也而有一レ用、且得レ有二此大一也邪。且也若與レ予皆物也。奈何哉其相物也。而幾死之散人、又惡知二散木一。

訓讀 匠石歸る。櫟社夢に見えて曰く、女、將た惡にか予を比するや、若將た予を文木に比するや。夫れ柤、梨、橘、柚、果蓏の屬、實熟すれば則ち剝がれ、剝がるれば則ち辱しめらる。大枝は折られ、小枝は泄げらる。此れ其の能を以て、其の生を苦しむる者なり。故に其の天年を終へずして中道に夭す。自ら世俗に掊擊せらるゝ者なり。物、是の若くならざる莫し。且予用ふべき所なきを求むる久し。幾ど死せんとして乃ち今之を得て、予が大用を爲せり。予をして用あらしめば、且た此の大あるを得んや。且や若と予と皆物なり。奈何ぞ、其れ相物とせんや。而、幾ど死するの散人、又惡んぞ散木を知らんと。

通釋 其の後、匠石が家に皈つた。或る夜のこと、櫟社の神が夢に現はれて曰ふには「汝は俺のことを散木なりと惡口を申したが、一體俺を何物に比べて、さう云ふ惡口を云ふのか。即ち汝は俺をあの文木とて世間の用に立つ木に比べてさ樣なことを云ふのか。若しさうだとすると、それは非常な間違ひだ。そも〳〵かのコボケ、ナシ、タチバナ、ユヅ、其の他果物、瓜類などは其の實が人に珍重がられて居るから、實が熟するともぎ取られ、もぎ取らるれば種々の恥辱を受ける。例へば大枝は折られるし、小枝は曲げられるし、散々な目にあはされる。此れは全く其の木がオイシイ果實を產する能力を持つて居るが爲めにかくの如く其の生命を苦しますものである。されば斯

ふ全く用材にならぬヤクザな木だよ。何處へも用ひやうがないから、あのやうに切られもしないでいつまでも長壽を保つことが出來たのだ。だから此の方が一瞥も吳れなかつた。」

語釋　匠石（匠は大工、石は名。職業を名に冠するは古へ例多し。）○曲轅（地名、里道の曲がるより名くるか。）○櫟社樹（古へ木を以て社主となす、論語に哀公問レ社。宰我對曰。夏后氏以レ松。殷人以レ柏。周人以レ栗とあるが如し。こゝは櫟（クヌギ）を以て社樹となしたのである。）○其大蔽レ牛（一本に其大蔽二數千牛一に作る、次の章に結駟千乘とある所から見ると、數千の二字があるのが正しいかも知れぬ。蔽二數千牛一とは木の枝朶が廣がり其の木の下蔭に數千匹の牛を蔽ふ意。）○絜レ之百圍（絜は匝なり、甕谷は「繩を繞らして之を度るを謂ふなり」と云つて居るが、必ずしも繩と限ることもあるまい、百圍の字面は齊物論にも見ゆ。）○其高臨レ山（山と云へば凡て高いものである、その高いのを更に上から、見下して居ると云ふのだから、此の木の高さが想像される。）○十仞（仞は七尺又は八尺を云ふ、木の根もとから度つて云つたのであらう。根もとから一の枝まで七八十尺もあるとの意。）○旁十數（十數は十もて數ふの意で數十本の意であらう。甕谷に從へば四旁各十數也と云つて居る。）○如レ市（市場は人の多く集まる所、故に如レ市とか如レ堵レ市と云つて人込の場合を形容する。）○匠伯（伯は匠石の字なりと云ふ、或は伯は長なり。大工の棟梁の意か。）○散木（林西仲云ふ、「用に合はざるを散と爲す」と、役に立たぬ木、ヤクザな木の意。）○液樠（釋文に司馬云ふ、「液は津液（ヤニ）なり、樠は脂出づること樠々然たるを謂ふなり」と、ヤニがだら〳〵出ること。李楨の說によれば、「樠は松の心なり、松の心には脂あり、液樠は正に此の義に取る、脂出づること松心の如きを謂ふなり、此れ莊子字法の妙」と。一說として存す。）

匠石歸。櫟社見レ夢曰、女將惡乎比レ予哉。若將比二予於文木一邪。夫柤梨橘柚果蓏之屬、實熟則剝、剝則辱。大枝折、小枝泄。此以二其能一苦二其生一者也。故不レ終二其天年一而中道夭。自掊二擊於世俗一者也。物莫レ不レ若レ是。且予求レ無レ所レ可レ用、

之れ壽なりと。

大意 櫟社の樹の能く大をなすは其の無用の散木なるが爲めであることを說く。卽ち無用反つて用あり、此に於て世に處するの道を覺るべきであるとの意を示す。岡松甕谷曰く「匠石の一節は意、下章と相犯す。文辭亦疎淺前後數節と相似ず。蓋し後人、下章に因りて、此の一節を撰し、之を此に竄す。删去するの愈れるに如かざるなり」と。理或は然らむ。姑らく揭げて參考に資す。

通釋 匠石と云ふ名工が、或る時齊の國へ行き、曲轅と云ふ所まで來て、その土地の社に在る有名な御神木の櫟樹を見た。その木の太さは牛をもかくすと云ふ大木で、手で以て度つて見ると百抱もあり、その高いこと實に驚くべきもので山を見下して居る程であり、根本から七八十尺にして始めて一の枝があり、而も其の枝で舟を作ることの出來るやうなのが一方だけでも數十本もあると云ふ次第である。さ樣に大きな木だから珍らしがつて見物する者が恰も市場のやうで押すな〳〵と云ふ有樣である。然るに此の大木のそばを通りかゝつた匠石棟梁は之に目もくれないで、その儘サツサと行つて止まらない。弟子どもは皆厭くほど見てから、走つて匠石に追ひついて曰ふには、「吾々どもがオノやマサカリを持つて先生の弟子になつてより以來、未だ嘗て此のやうな美ごとな材木を見たことがありません。然るに先生は少しも見ようとはしないでどん〳〵行つて仕舞れたのはどう云ふ譯ですか。匠石が曰ふには「やめよ、つまらぬことを云ふな、あれはヤクザな木だよ。例へばあの木で舟を作れば沈むし、棺を作れば直に腐るし、道具を作れば直にこはれるし、門の戸を作ればヤニがだら〳〵流れるし、柱を作れば蟲が食つて仕舞

匠石之齊、至於曲轅、見櫟社樹。其大蔽牛。絜之百圍。其高臨山。十仞而後有枝。其可以爲舟者旁十數。觀者如市。匠伯不顧、遂行不輟。弟子厭觀之、走及匠石曰、自吾執斧斤、以隨夫子、未嘗見材、如此其美也。先生不肯視、行不輟何邪。曰、已矣、勿言之矣、散木也。以爲舟則沈、以爲棺槨則速腐、以爲器則速毀、以爲門戶則液樠、以爲柱則蠹。是不材之木也。無所可用、故能若是之壽。

訓讀　匠石齊に之き、曲轅に至りて、櫟社の樹を見る。其の大さ牛を蔽ふ。之を絜るに百圍。其の高きこと山に臨む。十仞にして而る後枝あり。其の以て舟と爲すべきもの旁に十數。觀る者市の如し。匠伯、顧みず、遂に行きて輟まず。弟子厭くまで之を觀て、走り匠石に及びて、曰く、吾れ斧斤を執りて、以て夫子に隨ひてより、未だ嘗て材の此の如く其れ美なるを見ざるなり。先生肯て視ず、行きて輟まざるは何ぞやと。曰く、已めよ、之を言ふ勿れ、散木なり。以て舟と爲せば則ち沈み、以て棺槨と爲せば則ち速に腐ち、以て器と爲せば則ち速に毀れ、以て門戶と爲せば則ち液樠し、以て柱と爲せば則ち蠹む。是れ不材の木なり。用ふべき所なし、故に能く是の若く

は又あの虎を養ふ者を知つて居るであらう。彼は決して虎に生き物を與へない、それは虎が其の生き物を殺す時に怒氣を發するのを虞るからである。又決して丸の物を與へない、それも虎がこれを裂く時、亦怒氣を發するのを虞るからである。要するに彼は食物に注意して虎の腹加減を調節して、自然に其の怒氣を殺ぐやうにする。虎はもとより人とは類を異にして居るけれども、己を養つて呉れる者に媚びて自然に馴れて來るのは、虎の本性に順ひて之を導き逆らはないからである。之に反して虎が怒つて人を噬み殺しなどするのは、人がそれに逆らひ氣に入らぬことをするからである。又かの馬を愛する者は立派な筐に糞を盛り美しい大蛤の殼で小便を入れるほど馬を愛して居るに拘はらず、たまく蚊や虻が馬の體に群りついた時、時を見はからず不意に拊つ時は馬は驚いてクツワを損じ首を傷け胸を碎くやうなことになつて、蚊虻の螫す以上の損傷を生ずるのである。これは馬を愛する心は十分であるが注意を怠つた爲めに愛の實を亡ふことになつたのだ。か樣に虎は至つて荒いものだが氣に逆らはぬやうにして行けばよく馴れるし、馬は至つて從順なものだが之を驚かせば荒れ出して手にをへぬ。されば凡て物の性に逆らはぬやうに注意をせねばならぬ。つまり太子を導くにも此の手で行かなくてはならぬ。」

語釋　積伐（口義には「積は屢なり、伐は誇なり、屢〻其の才の美を誇る」とあり、成疏には「才能を蘊蓄して自ら汝の美を矜る」とあり、今前說に從ふ。）　○達二其怒心一（因に「之を順導して以て其の怒勢を殺ぐ」とあり。）　○僕緣（僕は附なり。）　○意有レ所レ至、而愛有レ所レ亡（竟谷曰く「夫れ蚉虻を拊ちて之を去らんと欲するは馬の爲めにする所以にして、其の意固より已に至れり。然れども馬の意を測ることある能はずして、遽かに之を拊た比、馬をして怒を發せしむるに至る、是れ馬を愛するに於て適〻亡失する所あるなり。」）

矢、以蜃盛溺。適有蚊虻僕緣、而拊之不時、則缺銜毀首碎胸。意有所至、而愛有所亡。可不愼邪。

訓讀　女は夫の螳螂を知らざるか。其の臂を怒らして、以て車轍に當る、其の任に勝へざるを知らざるなり。其の才の美を是とする者なり。之を戒め之を愼めよ。而が美なる者を積伐して、以て之を犯せば、幾し。女は夫の虎を養ふものを知らざるか。敢へて生物を以て之に與へざるは、其の之を殺すに怒るが爲なり。敢へて全物を以て之に與へざるは、其の之を決くに怒るが爲なり。其の饑飽を時にし、其の怒心を達す。虎の人と類を異にするも、己を養ふ者に媚ぶるは順なればなり。故に其の殺すものは逆なればなり。夫の馬を愛する者、筐を以て矢を盛り、蜃を以て溺を盛る。適ま蚊虻の僕緣するありて、之を拊つに時ならざれば、則ち銜を缺き、首を毀ち、胸を碎く。意至る所ありて、愛、亡ふ所あり、愼まざる可けんやと。

大意　前節に同じく、物の本性に逆はず順應主義によるべきを說く。

通釋　汝はあのカマキリを知つて居るであらう。あの蟲は小さなくせに其の臂を怒らして大車の輪に對抗つて、つぶされて仕舞ふが、彼は己が微力では大車を防ぎ止める任に勝へないことに氣が附かず、日頃臂を奮つて小蟲を捕ふる才能の立派なことを自惚れて居る者である。戒愼せよ、決して自惚れてはならぬ。若し汝が己の美才を屢〻鼻にかけて彼の太子の顏を犯して諫めたならば、それはあのカマキリが車轍に當ると同樣で危險此の上もない。汝

名聲を博することになり、果ては不祥な災難を招くことになるであらう。されば彼れ太子が若し嬰兒の如き愚をなさば、自分も亦同じく之をなし、彼れ若し無町畦とて放埒な仕業をなさば自分も同じく之をなし、又彼が若し無崖とてダラシナキ仕業をなさば自分もダラシナク振舞ふがよろしい。かくの如くどこまでも彼れと行動を共にし、其の間に在りて機に隨ひ折に際して自然と誘導して彼をして過なき所へ到達せしめよ。

語釋 正二女身一（因に「身は形心を兼ねて言ふ。正とは先づ自ら無過の地に立ちて人の過を知る者をして用ふる所なからしむ」とあり。要するに已に隙があつては人を導くことが出來ぬからである。）○形莫レ若レ就、心莫レ若レ和（口義に「就は從なり、之に隨順するなり、和は調和なり、之を誘導するなり。外は恭敬隨順の形をなし、内は調和誘導の心を蓄す」とあり。）○無町畦（甕谷曰く「小なる處に就いて言ふ、事に臨んで殆んど規度なきこと、田の町畦を分かたざるが如し、故に無町畦と曰ふ」）○無崖（崖一に涯に作る。甕谷又曰く「無涯は大なる處に就いて言ふ、己が逸蕩を縱まゝにして底止する所を知らざること、水の涯際なきが如し、故に無涯と曰ふ。」）○達レ之入二於無疵一（又曰く「吾れ且らく之と優游して漸次誘いて之を導き之をして自から進んで以て無瑕疵の地に入らしむ。」卽ち無過の地に到達進入せしむることなり。林希逸は之を達すとは之を覺悟せしむるなりと解す。亦一說なり。）

女不レ知二夫蟷螂一乎。怒二其臂一以當二車轍一、不レ知二其不一レ勝レ任也。是二其才之美一者也。戒レ之、愼レ之。積二伐而美者一以犯レ之、幾矣。女不レ知二夫養レ虎者一乎。不三敢以二生物一與一レ之、爲二其殺一レ之之怒一也。不三敢以二全物一與一レ之、爲二其決一レ之之怒一也。時二其飢飽一、達二其怒心一。虎之與レ人異レ類而媚二養レ己者一順也。故其殺者逆也。夫愛レ馬者、以レ筐盛

且為聲、為名、為妖、為孽。彼且為嬰兒、亦與之為嬰兒。彼且為無町畦、亦與之為無町畦。彼且為無崖、亦與之為無崖。達之入於無疵。

訓讀　蘧伯玉曰く、善い哉問や。之を戒め之を愼み、女の身を正せよや。形は就くに若くは莫く、心は和するに若くは莫し。然りと雖も、之の二つの者も患あり。就くも入るを欲せず、和するも出づるを欲せず。形就いて入らば且に顚をなし、滅をなし、崩をなし、蹶をなさんとす。心和して出づれば、且に聲をなし、名をなし、妖をなし、孽をなさんとす。彼、且に嬰兒たらんとせば亦之と嬰兒たれ。彼、且に無町畦たらんとせば、亦之と無町畦たれ。彼、且に無崖たらんとせば、亦之と無崖たれ。之を達して、無疵に入れよ。

大意　以下蘧伯玉の答。暴人を導く道として徹底的順應主義を說く。

通釋　蘧伯玉が答へて曰ふには「誠に善いことを尋ねられた。何を措いても先づ十分氣を附けて自身の行を正しうし、人の過に氣のつく皇太子に隙を見せぬが肝要である。それから表向きの行爲は太子の云ふがまゝに從ふがよろしく、內心に於ては太子と親和を保ちつゝ自然と誘導するがよろしい。然し就くにしても和するにしても共に弊害が伴ふから注意せねばならぬ。外形に於て太子に從ふもツヒ之に引きづられて邪道に入らないやうに、又內心に於て太子を善導せんとしても、それが外に現はれないやうにしなければならぬ。若し太子に引きづられて邪道に入るならば、汝自身が失敗破滅して仕舞ふであらうし、又太子を導く形迹が外に現はれたならば、偉い人物だと云ふ

訓讀 顏闔、將に衞の靈公の太子に傅たらんとして、蘧伯玉に問うて曰く、此に人あり、其の德天殺なり。之と無方をなせば、則ち吾が國を危くし、之と有方をなせば、則ち吾が身を危くす。其の知適に以て人の過を知るに足れども、而かも其の過つ所以を知らず。然るが若き者は、吾れ之を奈何せんと。

大意 以下三節、本篇の第三章なり。顏闔と伯玉との問答に假りて暴人を導く道を示す。先づ顏闔の問をあぐ。暴人を導くの道如何。

通釋 魯の賢人に顏闔と云ふ人あり、衞君靈公の皇太子の守役とならうとする時、衞の賢大夫蘧伯玉に問うて曰く「今此に人あり、其の天性薄德で若し放縱無法に任せて置いたならば國を危くし、之を諫めて法度あるやうにしやうとすれば吾が身を害するであらう。而も其の知は人の過失を知るに足りて己れの過には氣が付かぬ。か樣な人物に對しては如何にしたならばよいでせうか。」

語釋 靈公太子（蒯聵を云ふ。） ○有レ人二於此一（暗に太子を指す、諱んでかく云ふ。） ○天殺（音サイ、薄なり、薄德の意。或はサツと音し、天の物を殺すが如しと解す、即ち殺伐の意となる。） ○無方（方は道なり、法なり。）

蘧伯玉曰、善哉問乎。戒レ之愼レ之、正二女身一哉。形莫レ若レ就、心莫レ若レ和。雖レ然、之二者有レ患。就不レ欲レ入、和不レ欲レ出。形就而入、且爲レ顚爲レ滅、爲レ崩爲レ蹶。心和而出、

難者。

【訓讀】且つ夫れ物に乘じ以て心を遊ばしめ、已むを得ざるに託して、以て中を養はば至れり。何んぞ作爲して報ぜんや。命を致すを爲すに若くは莫し。此れ其の難き者なり

【大意】物事の自然に從ひ、作爲を弄せぬが使命を全うするの秘訣なりと說く。

【通釋】其の上尚ほ大切なことは、凡て物事の自然に任かせて、心を逍遙自適の境に遊ばしめ、必要に迫られて始めて止むを得ず應ずると云ふ態度で以て中正の道を守つて行つたならば、それで申し分なし。何も取り越し苦勞などをして色々と作爲を弄して君命を報ずる必要はない、たゞ〳〵君命をありのまゝに傳ふるに越したことはない。とは云ふものゝ是れは中々六ケしいことだから以上の敎をよく味つて參られるがよい。」

【語釋】乘㆑物以遊㆑心（口義に「事物の自然に乘じて、其の心を自然に遊ばしむ」とあり。）○託㆑不㆑得㆑已（上文に寓㆓於不㆑得㆑已㆒と云ふに同じ。必要に迫まられて始めて止むを得ず應ずるとの意、託と云ふは亦心を遊ばしむる意。或は上文の爲㆓人臣子㆒者、固有㆑所㆑不㆑得㆑已の意を取りて解し、從つて下句の致命を其の身を忘るると解するも、今は取らず。）

顏闔將㆑傅㆓衞靈公太子㆒、而問㆓於蘧伯玉㆒曰、有㆓人於㆑此、其德天殺。與㆑之爲㆓無方㆒、則危㆓吾國㆒、與㆑之爲㆓有方㆒則危㆓吾身㆒。其知適足㆓以知㆓人之過㆒、而不㆑知㆓其所㆓以過㆒。若㆑然者、吾奈㆑之何。

が心に起つて來たことに氣がつかぬ程腹が立つて上つて來ると、其の果てが何うなるか何人も想像し得られぬ程トテモひどいことになるであらう。されば古の格言にも「君の命令を傳へるに少しも改めてはならぬ、強ひて成功せんことを欲してはならぬ」と敎へてある。凡て言葉が適度を越えるのは私意私情を以て勝手に附け加へるからのことである。君命を改めたり無理に成功を望んだりするのは危險なことである。元來善事の完成は長い時を要するもので無理をして出來るものでない。卽ち無理して出來たものにはロクなものはない、多くは善くないものだ。そして善くない事が一旦出來上ると最早や取返しがつかぬ。されば使者として君命を傳ふるものは言葉によく注意し、決して增損したり、無理をしたりしてはならぬ。

語釋　言者風波也（言葉の增減し易いことを云ふ。上の溢美、溢惡の如きは皆言葉の增減性に富むに坐す。）　○行者實喪也（言は主、行を言ふは從なり。實喪とは集釋に「家世父（郭慶藩の父嵩燾）曰く、實喪は猶ほ得失と言はんが如し、實は有して之を存す、喪は忽ちにして之を忘る、」とある是なり。諸解あれども今之に從ふ。）　○茀然（葦の亂生するが如し。）　○並生二心厲一（成疏に「野獸將に死せんとするや鳴くに音を擇ばず、氣息茀鬱、心に疵疾を生じ、忽然として暴怒し、人を搏噬す、此れは是れ譬を起すなり。」集解にも亦「獸困みて死に就く時は、鳴くに音を擇ばず、忿氣餘りあり、其の時に於て且つ心に生じて惡厲を爲し、人を噬まんと欲するなり。獸の心厲を以て下の人に不肖の心にするに譬ふ」とあり、卽ち皆此の句を獸にかけて解す、是なり。）　○剋核泰至（因に「剋は急なり、核は覈に同じ、其の實を考ふるなり。」泰は太に同じ、ハナハダ。實を考へて責むること甚だ急迫なればとの意。）　○不肖之心（因に「相賊害せんと欲するなり」とあり。）　○而不レ知二其然一也（不肖の心が起りながら餘り怒り甚だしき爲め、自らは氣付かざる意。）　○無レ遷レ令（口義に「令は君命なり、其の令を遷移する無れと云ふは卽ち所謂其の常情を傳ふるなり。」卽ち君命を傳ふるに私志を以て變改してはならぬ、ありのまゝに傳へよとなり。）　○無レ勸レ成（口義に「事の成と不成とは亦其の自然にまかせて強ひて其の成を欲す可からず」とあり。）

且夫乘レ物以遊レ心、託レ不レ得レ已以養レ中、至矣。何作爲報也。莫レ若レ爲レ致レ命。此其

偏辭。獸死不擇音、氣息茀然。於是並生心厲。剋核泰至、則必有不肖之心應之、而不知其然也。苟爲不知其然也、孰知其所終。故法言曰、無遷令。無勸成。過度益也。遷令勸成殆事。美成在久。惡成不及改。可不愼與。

訓讀 言は風波なり、行は實喪なり。夫れ風波は以て動き易く、實喪は以て危かり易し。故に忿の設るは由なし。巧言偏辭なり。獸の死する音を擇ばず、氣息茀然たり。是に於て並に心厲を生ず。剋核泰だ至れば、則ち心ず不肖の心ありて之に應ず、而も其の然るを知らざるなり。苟くも其の然るを知らずと爲さば、孰れか其の終る所を知らん。故に法言に曰く、令を遷す無れ。成るを勸むる無れと。度を過ぐるは益せばなり。令を遷し、成るを勸むるは殆事なり。美の成るは久しきに在り。惡の成れるは改むるに及ばず。愼まざる可けんや。

大意 人の忿怒は言語に因る、愼むべきは言語である。

通釋 扨て言葉は極めて動き易い彼の風波の如きものであり、行には身を危くし易い利害得失の伴ふものである。されば忿怒の情の起るのは外の原因ではなく、動き(增損し)易い不實不正の言辭が因である。獸が死ぬ時、苦みに堪へずして聲を擇ぶ暇なく哀しさうな聲をたて、呼吸が茀然と亂れて來る。さうなるとどんな獸でも心狂ひ腹が立つて來て嚙みつかうとする。人も亦之と同じく問責の急迫なるに遇ふと、必ず苦しさの餘り腹が立つて相手を害すると云ふやうな善くない心を知らず識らずの間に起すに至るものである。苟くも自分自身さへも、かゝる惡心

者は、治に始まり、常に亂に卒る。泰だ至れば則ち奇樂多し。凡そ事も亦然り。諒に始まり、常に鄙に卒る。其の始めを作すや簡なれば、其の將に畢らんとするや必ず巨なり。

大意 何事も終りを全うするは少ない、殊に使者として言を傳ふるには一段の注意を要すとなり。

通釋 更に御注意申さう。世間の人々が互に亂れて角力などをとる時は、始めの中は陽氣な娯樂氣分でやるが終りには怒つて擊ち合ふやうに陰氣なものとなり、それが更に甚しくなると各〻奇巧な手段を案出して相殺傷するやうなことに立ち至るものである。又酒宴などでも始めの中は禮を守つて治まり返つて居るが終りには兎かく亂れがちである、それがひどくなると奇拔な振舞が多くなる。凡て世の中の事は皆同樣であつて、始めの中は信實をつくすが、終りには薄情になつて仕舞ふものである。況して事をなすに始めからよい加減なことをして置けば、終りには大事となつてトテも取りまとめがつかぬことになる。されば尊公に於かれても始めから終りまでよく氣をつけられるがよい。

語釋 且以レ巧鬭レ力者云云（且の字は前章にしば〳〵出づ、數を重ぬるの辭。泰は太に同じ、甚なり。因に「戲劇格鬪の如き始め喜んで相逢ふも、卒は怒りて相擊つに至る。戲れること過甚を以ての故に各〻其の奇巧を出し死傷に至る。」）〇以レ禮飮レ酒者云云（因に「賓筵飮酒の如き始は威儀、卒は號呶、飮むこと過甚を以ての故に各其の奇樂を逞うして猥褻に流る。」）〇始ニ乎諒一、常卒ニ乎鄙一（又曰く「諒は信、鄙は薄、凡そ人を待つ始め相信じ卒りは相薄んずるもの往々これあり。」）〇其作レ始也簡云云（又曰く「若し之を始に愼まずして苟簡を以て之を爲せば、其の時に成らんとするに及んで、其の事必ず大、收拾すべからず。」）

言者風波也、行者實喪也。夫風波易ニ以動一、實喪易ニ以危一。故忿設無レ由。巧言

難である。なぜならば元來雙方とも喜ぶ言葉には必ず實際よりも善く言ひ過ぎた言葉が多く、又雙方とも怒る言葉には必ず實際よりも惡るく言ひ過ぎた言葉が多いものである。凡そ善きにせよ惡しきにせよ、實際よりも過ぎた言葉は不誠實である、不誠實であれば相手が之を信ずることが莫然となる。信ずること莫然となれば自から其の言を傳へたものは殃に遇ふやうになる。されば古の格言に「日頃のありのまゝの情態を傳へて、美言も惡言も其の實際を過ぎなければ、殃を免れて、其の身は恐らく安全であらう」と云つてある。

語釋 交近則必相靡以レ信(交近とは隣國との交なり。靡は順なり。信は信實、信義。林西仲云ふ「近き者は親み易く、詞命を待たず。」) ○遠則必忠レ之以レ言(遠とは遠國との交なり。林西仲云ふ「遠き者は疎んじ易し、詞命に非ざれば以て其の誠をおこなふことなし。」口義には忠は情を盡すなりとあり。) ○言必或レ傳レ之(或は有に同じ、宣穎云ふ「必ず使に託して以て之を傳ふ。」) ○溢美之言(溢は過なり、善く言ひ過ぎる言葉。) ○莫(口義に疑を致す貌。莫然として疑ひ未だ盡く信ずる能はずとあり。因には無なりとあり。卽ち之を信ずること無しの意。今口義に從ふ。) ○法言(集解に曰く「古の格言を引いて言ふ。」或は古書の名と云ふ今前說に從ふ。) ○常情(飾のない日常ありのまゝの情態を云ふ。)

且以レ巧鬬レ力者、始乎陽、常卒乎陰。泰至則多奇巧。以レ禮飲レ酒者、始乎治、常卒乎亂。泰至則多奇樂。凡事亦然。始乎諒、常卒乎鄙。其作レ始也簡、其將レ畢也必巨。

訓讀 且つ巧を以て力を鬬はす者は、陽に始まり、常に陰に卒る。泰だ至れば則ち奇巧多し。禮を以て酒を飲む

傳兩喜兩怒之言、天下之難者也。夫兩喜必多溢美之言、兩怒必多溢惡之言。凡溢之類也妄。妄則其信之也莫。莫則傳言者殃。故法言曰、傳其常情、無傳其溢言、則幾乎全。

訓讀 丘請ふ、復た聞く所を以てせん。凡そ交、近ければ則ち必ず相靡ふに信を以てし、遠ければ則ち必ず之を忠にするに言を以てす。言は必ず之を傳ふるあり。夫れ兩喜兩怒の言を傳ふるは天下の難き者なり。夫れ兩喜は必ず溢美の言多く、兩怒は必ず溢惡の言多し。凡そ溢の類は妄なり。妄なれば則ち其の之を信ずるや莫なり。莫なれば則ち言を傳ふる者殃あり。故に法言に曰く、其の常情を傳へて、其の溢言を傳ふる無ければ、則ち全きに幾しと。

大意 使者として言を傳ふるの道を教ふ。卽ち言を傳ふるには增損あるべからず、ありのまゝを傳ふべしとなり。

通釋 なほ私が嘗て聞いて居ることをお話し申さう。凡そ交る國が近い場合には、日頃から自然と親みが出來て居るから、何もかれこれと口上を述べなくても、互に信義を以て相從うて疑はないが、之に反して交る國が遠隔の地なる場合には、どうしても日頃から疎遠であるから眞心をあらはすに言葉を以てせねばならぬ。して其の言葉は使者をして傳へしめることになる。處が双方とも喜ぶとか、怒るとか云ふやうな言葉をウマク傳へることは中々困

て其の君に事へる場合に、事の難易を選ばず、たゞ君命のまゝに、どんなことでも喜んでするのは立派な忠義である。されば人の臣子たる者が各自天から受けて居る忠孝の至性に率つて進む時は、得て人の心を動かし易い哀樂を始めとし、其の他種々な出來事が眼前に現はれても其の心を變動することが出來ない。君父の命なら、それは絶對命令であつて如何することも出來ないことを知つて事の難易禍福に頓着せず、從容その命に從ふのは道德の至極である。されば人の臣たり子たる者は、もとより先天的に君父に對しては避くべからざる所のツトメがあるから、命を受けたからには命ぜられた事の實際をどこまでも忠實に行つて、自己一身の利害の如きは之を忘るべきである。從つて自己の生を悦び死を惡むが如き餘裕は勿論あらう筈がない。されば夫子に於かれても、此の度かゝる大命を受けた以上は何等顧慮畏懼する所なく、凡てを運命に任せて大膽に齊へ乘り込みになつたがよろしい。

語釋　大戒（戒は法なり、自然の約束、自然の掟の意。）　○子之愛親命也、不可解於心（林希逸云ふ、「命は天に得る者なり、子の親に事ふるは、生と倶に此の心を生ず、豈に能く一日にして去らんや、故に解く可からずと曰ふ」と。）　○無所逃於天地之間（諸本皆、此の句の上に無適而非君也の一句あり、今姑く林西仲本に從つて之を省く。）　○不擇地而安之（林希逸云ふ、「親に事へて其の孝を盡す時は東西南北、惟だ父母の命のまゝなり、豈に地の安きを擇んで而る後之を爲さんや」と、父母の命ならば危地と雖も從容之に就くの意。）　○自事其心（其は固有の意、忠孝の至性は人の固有なるが故に云ふ、即ち人たる者が固有の至性に率ふとの意。）　○哀樂不易施乎前云云（林希逸云ふ、「此の心、忠に主となる時は哀樂の境、前に施くと雖も、變易すること能はず、蓋し事に難易あり、或は禍福あり、既に君命に出づれば、是れ自家の當に爲すべき事、此れ便ち是れ天命、又奈何ともすべけんや、たゞ安んじて之に順ふを得」と。即ち人が忠孝の至性に從つて進む時は如何なる哀しき場合、又如何なる樂しき場合に接しても、それが爲めに己が心を動かし易へることがないとの意。不可奈何とは哀しきアキラメの意でなく、強い自決的の意がこもつてゐる、即ち君臣父子の關係は自然の大戒であるから勇み勵んで其の事に從ふ意である。下の有所不得已の意亦同じ。）　○行事之情而忘其身（陳壽昌云ふ、「惟だ事の實を行ひ、身の計を爲さず」と。命ぜられた事を忠實に行つて、一身の爲めを計らぬこと。）

丘請復以所聞。凡交近則必相靡以信、遠則必忠之以言。言必或傳之。夫

者は、地を擇ばずして之に安んず、孝の至りなり。夫の其の君に事ふる者は、事を擇ばずして之に安んず、忠の盛なるなり。自ら其の心に事ふる者は、哀樂前に易施せず。其の奈何ともすべからざるを知りて、之に安んじて命に若ふは、德の至なり。人の臣子たる者、固より已むを得ざる所あり。事の情を行ひて其の身を忘る。何ぞ生を悅びて、死を惡むに至る暇あらん。夫子其れ行いて可なり。

大意 孔子、臣子の分として使者の患を避くるの非なるを說く。此の一段最もよく莊叟が君臣の義に關する見解を窺ふに足る。父子を說くは客なり、君臣を主となす。臣之事レ君義也。無レ所レ逃ニ於天地之間一とは論語微子篇に孔子の弟子、子路が荷篠丈人の二子に向つて君臣之義。如レ之何。其廢レ之。欲レ潔ニ其身一而亂ニ大倫一。と云つて居るのと全く同じで、醇乎たる儒家の思想である。既に解題に於て莊子の學は該博で闚はざる所なく、就中儒學に造詣が深かつたと述べて置いたが、儒學が莊子に與へた影響は此の邊に明らかに表れて居る。是れ莊子が已が身を潔くせんと欲して君臣の義を廢した他の隱遁者流と遙に異なる點である。

通釋 そこで孔子が申されるには「此の世の中には大切なる掟が二つある。其の一つは天命であり、もう一つは道義である。子が親を愛するのは天命であつて、心に忘れんとして忘るべからざる極めて自然の性情である。又臣が君に事ふるは道義であつて、天地間如何なる所へ行つても君臣の義は逃れる所がない。だから此の親子の愛と君臣の義の二者は此の世の大切な掟と謂ふのである。だから人の子として其の親に事へる場合に、所の善惡を選ばず唯だ親の命ずるがまゝに、如何なる所へでも喜んで行くと云ふのは此の上もなき孝行な態度である。又人の臣とし

致へて貰ひたいものだ。」

語釋 葉公子高（姓は沈、名は諸梁、子高はその字なり。葉は楚の縣名、子高葉縣の長官たり、僭して公と云ふ。論語に見える葉公のことで當時楚國第一流の人物であつた。）○不レ急（郭象曰く、「急に其の求に應ずるを肯んぜざるを言ふ」と。）○寡二不レ道以懽成一（懽は悦なり、正しき道に依らないで、望ましく成就する事は少ない意。）○人道之患（林西仲曰く、「事を誤つて罪を取るを言ふ也」と。）○陰陽之患（又曰く、「憂思して疾を致すを言ふ也」と。）○不レ臧（臧は善なり。岡松甕谷云ふ、「必ずしも其のよきを求めざるを言ふ」と。食物がうまくなくても我慢する意。）○欲レ凊（釋文に、「字宜ろしく冫に從ふべし、冫に從ふは假借なり、凊は涼なり」とあり。）○事之情（情は實なり。事件の實際。）○爲二人臣一者云云（甕谷云ふ。言ふ心は人臣たる某の如き者は以て此の難に當るに足らずと。）○來（ヤと訓む、前に解せり。）

仲尼曰、天下有二大戒二一。其一命也、其一義也。子之愛レ親命也、不レ可レ解二於心一。臣之事レ君義也、無レ所レ逃二於天地之間一。是之謂二大戒一。是以夫事二其親一者、不レ擇レ地而安レ之、孝之至也。夫事二其君一者、不レ擇レ事而安レ之、忠之盛也。自事二其心一者、哀樂不レ易二施乎前一。知二其不一レ可レ奈何一、而安レ之若レ命、德之至也。爲二人臣子一者、固有レ所レ不レ得レ已。行二事之情一而忘二其身一。何暇至二於悅レ生而惡一レ死。夫子其行可矣。

訓讀 仲尼曰く、天下に大戒二つ有り。其の一は命なり、其の一は義なり。子の親を愛するは命なり、心に解く可らず。臣の君に事ふるは義なり、天地の間に逃るゝ所なし。是を之れ大戒と謂ふ。是を以て夫の其の親に事ふる

渉は成るべく長引かせようと云ふ政略らしい。下賤な男でも、かうと定めたら、さう容易には動かすことは出來ないものだ、況して堂々たる大々名に在つてはもとよりのこと、斯くときめたらテコでも棒でも動きつこはない。拙者は之が心配でたまらぬ。そこで思ひ出したのは、いつぞやそこ許が拙者に語つて曰はれたのには「何事によらず小さい事でも大きい事でも、道に依らないで滿足に成就することは少ない。正しい道によらないですれば、事が若し出來そこねた時には、必ず事を誤つたカドを以て罰を受けることになるし、事がうまく行つた時には、正しい道が履んでないから良心のトガメを受け煩悶して病氣をひき起すことになる。事がうまく行かうが行くまいが何等後の心配なきは唯だ有德者のみが出來ることだ。つまり有德者は何事によらず正しき道に從つてやるからのことである」と。か樣にそこ許は拙者に話して下さつた。さて拙者は日頃から質素を旨として居るから、その食物は粗末なものを取り、必ずしも善いものを食べようとは思はぬ。又勝手場では火をたくさへも成るべく控へて居るから、炊事するのに涼しさを欲する者はない位である、勝手場でさへ然うであるから家の中が全體にひや〳〵して居て熱さを感ずると云ふことはないのである。然るに今回使者の命令を朝受けたら、もう其の晩に氷を飮まねばたまらなくなつた。自分は餘り使者のことを心配した爲めに內臟に熱をもつたのかもしらん、どうもさうらしい。自分はまだ使者としての實際の事件にぶつからぬのに、もう既に病氣に罹つてしまつたのだ。その上もし使者の用事がうまく行かなかつたら必ず罰を受けねばならぬ。して見れば拙者は一身に二つの災難を受けることになる。こんなことでは人の臣下として拙者の如き者は、とても難局に當る資格がない。就いては此の際如何にしたらよいか、是非とも

既有陰陽之患矣。事若不成、必有人道之患。是兩也。爲人臣者不足以任之。子其有以語我來。

訓讀 葉公子高、將に齊に使せんとす。仲尼に問うて曰く、王の諸梁を使ふや甚だ重し。齊の使者を待つ、蓋し將に甚だ敬して急にせざらんとす。匹夫猶ほ未だ動かす可らず。而るを況んや諸侯をや。吾れ甚だ之を慄る。子嘗て諸梁に語れり。曰く、凡そ事若しくは小、若しくは大、道ならずして以て懽成ずること寡し。事若し成らずんば、則ち必ず人道の患あり。事若し成らば、則ち必ず陰陽の患あり。若しくは成り若しくは成らずして、而る後、患なきは、惟有德者のみ之を能くすと。吾が食や、粗を執りて臧くせず。爨に凊を欲するの人無し。今、吾れ朝に命を受けて夕に氷を飲む。我れ其れ內、熱せるか。吾れ未だ事の情に至らず、而も既に陰陽の患あり。事若し成らずんば、必ず人道の患あり、是れ兩つなり。人臣たるもの以て之に任ふるに足らず。子其れ以て我に語る有れやと。

大意 以下六節、本篇の第二章である。葉公子高と孔子との問答をかりて臣子の要道、使者の心得を說く、而して本節は葉公が使者の患を畏避し、人臣の分を誤らんとするを寫す。

通釋 楚の葉公子高と云ふ人が、王命を奉じて齊に使に行くことになつた。そこで孔子に尋ねて曰ふには「わが君が此のたび拙者を使者に立てられたが、使命が中々重大である。齊が今度の使者を待遇する樣子を察してみるに、どうも表面は甚だ丁重に取扱つて、內部では急にこちらの要求に應じようとはしないらしい。卽ち肝要な用件の交

らねばならぬ。而も斯く籠の中に在り乍ら、遊とて徜徉自適あくまで心に餘裕を持てと言ふのである、即ち不自由中に大自由を見出せと言ふのである。或は樊に同じ心を動揺する意。名は富貴などを指す。つまり君侯の富や貴さに眩惑されることである。）○入則鳴、不入則止（入は言を聴き納れること。鳴は説の意、上の樊の字より出て來たのであるが、亦莊子の用字、他書と異なる點である。此の二句は殊に説を進める心得を云つたのである。即ち凡て遊説者は君侯が己が説に耳を傾けないと愈熱して君侯を説きつけようとするものであるが、それは害こそ招け少しも益がないから、汝に在つては決して斯くあつてはならぬぞとの教である。）○無門無毒（難解の句である。焦氏筆乘に云ふ、廣大にして門なく、澹泊にして毒なきを言ふなりと。つまり心を廣大に保つて人に乘ずべき隙を與へぬ、又心を澹泊にして人にいやがられぬ意。）○一宅而寓於不得已、則幾矣（岡松甕谷に從へば「一宅とは猶ほ一定と言はんが如し、言ふ心は汝の心をして一定にして移すなく、物至りて而る後、方に始めて之に應ぜしむ。幾は近にちかきなり」と。）○瞻彼闋者、虚室生白。吉祥止止（又甕谷曰く、「闋は鎖なり、言ふ心は室の密鎖する者と雖も、その中空虚ならば必ず明を生ず、以て我が心虚豁にして是非を計較するの私なくば、事を見ること必ず明にして、自ら差繆なく、此くの如き者は必ず福を得るに喩ふ。」陳壽昌曰く、「止止とは其の當に止まるべき所に止まるを言ふ」と。當に止るべき所とは虚を指して言ふ。即ち人生の幸福は虚靜恬淡なる心に集まる意である。然るに兪樾は淮南子の俶眞訓に虚室生白、吉祥止也に作つて居るから、恐らく此の下の止字は也字の誤であらうと云つて居るが如何なものであらうか。）○几蘧（古の帝王の名なりとの説があるが、不明である。例の如く寓言であらう。）○況散焉者乎（況んやこれより散なる者をやと訓んでもよい。散は衆なり、衆人、凡人の意。）

葉公子高將使於齊。問於仲尼曰、王使諸梁也甚重。齊之待使者、蓋將甚敬而不急。匹夫猶未可動也。而況諸侯乎。吾甚慄之。子嘗語諸梁也。曰、凡事若小若大、寡不道以懽成。事若不成、則必有人道之患。事若成、則必有陰陽之患。若成若不成、而後無患者、惟有德者能之。吾食也執粗而不臧。爨無欲清之人。今吾朝受命而夕飲冰。我其內熱與。吾未至乎事之情、而

のは、無我なるが故に人が之を欺むくことが出來ない。吾れは翼（知と慾）の助をかりて飛ぶ者（人使）は聞いたが、まだ翼の助をかりないで飛ぶ者（天使）は聞いたことがない、之と同じことで知慧の力で道理を知る者（人使）は聞いたが、まだ知慧の力を借りないで道理を知る者（天使）を聞かないのだが、この無知こそ眞知であり所謂虛である。虛を以て知る者こそ天使である、汝はどこまでも此の天使たるの心がけを以て進まねばならぬぞ。かの四方が鎖された部屋を觀るに、その中が空虛だと何んとなくドカツと明るい。それと同じやうに人の幸福もその止まるべき處とも云ふべき虛心に集まるのである。然るに世の人々は心を空虛ならしむることが出來ないから、之をば坐馳とて身は此に坐すと雖も、心は外に馳せ廻つて居ると謂ふのである。之に反して、外界の事物を耳目に映ずるがまゝに心に受け込んで、之に對して何等の執着を殘さず、分別を留めなかつたならば、神樣でさへ來ておとまりになるであらう。況して人が慕ひ來るのは云ふまでもない。されば此の心を虛に遊ばしむることこそ、其の暴人たると否とを問はず、凡て皆その感化を受けることになり、是れが昔の明君たる禹や舜が人民教化の樞紐とした所であり、又かの伏羲や几蘧などゝ云ふ聖王が一生涯行ひ通したことである。かゝる聖賢さへ然りである、況して尋常の者どもに在りては勿論之を至寶とせねばならぬぞ。」

語釋　回之未二始得一レ使云云（此の數句は顏子頓悟の言である。林希逸によれば、得レ使とは孔子の敎誨を得るを言ふなりと。岡松甕谷に從へば使とは夫子の之を敎へて此くの如くなら使むるを謂ふと。要するに未始得使とは顏回が孔子から心齋に就いての敎を聞かない前はと云ふ意なり。實自回也とは陳壽昌によれば猶ほ我ありと曰ふが如しと、つまりどこまでも自分は顏回だぞと云ふ強い自我意識から脫することが出來ないことである。從つて未始有回也とは陳壽昌も云へる如く我を忘れたことで、俺は顏回だと云ふ自我感念を超越した意である。忘我的心境は乃ち虛であるから可レ謂レ虛乎と云つたのである。）　○入二遊其樊一而無レ感二其名一（入は顏回が衞に入國すること。樊は養生主にも見えたやうに籠の意である、こゝでは衞君の權力範圍の意で、此の籠の中へ這入つたが最後、暴人衞君の自由にな

通釋 顏回はさすがに孔門第一の秀才であつて、孔子の敎誨を聞いて直に悟る所があつた。そこで孔子に申し上げるには「私がまだ先生から心齋の敎を承らなかつた時は、どこまでも、俺は顏回であると云ふ強い自我意識を持つて居たのでありました。處が今この結構な御敎誨を受けまするや、我と云ふものをスツカリ忘れて仕舞ひました。この精神狀態を先生の所謂虛と申してよろしいでせうか。」孔子は曰はれるには「それで十分だ。スツカリ心齋が出來たよ。では是れから暴人衞侯を說得させる道に就いて話をしてやらう。さて汝は衞の國へ參つて衞君の籠の中とも云ふべき其の勢力範圍の中で、どこまでも心にユトリを以て居らねばならぬ。勿論王侯富貴の名譽などに心を動かされてはならぬ。そして君侯が汝の言を聽き入れさうであつたら、意見を述べるがよいし、聽き入れさうでなかつたら何も言はないがよい。それから心を廣く大きく持つて外から容易に窺ひのつかないやうに心がけ、又心を澹泊に保つて人から惡どく思はれ、いやがられるやうなことがないやうに氣をつけねばならぬ。又汝の心を一定不變に保ち、外物が來つて始めて止むを得ず之に應ずる、卽ち君侯の方から是非敎を受けたいと申し出された際に、止むを得ず之に對して意見を述べる決して此方から押賣り的に意見を述べないやうに。以上の如き態度を以て進んだならば恐らく成功するであらう。それから尙ほ心得て置かねばならぬことがある、行かずに居て足跡をつけないことは雜作もないことだが、行く場合に地を踐まないで行くことは六ケ敷い、卽ち此の世を遁れて山奧で行ひすますことは易いことだが、此の俗世間に居し而も俗塵に染まないことは六ケしい。そして此の行路難なる人生に處するに當りて、我慾の念が強くて人に使役せらるゝものは欺かれ易く、我慾の念が無くて大自然の使役にまかせるも

以僞。聞以有翼飛者矣。未聞以無翼飛者也。聞以有知知者矣。未聞以無知知者也。瞻彼闋者、虛室生白。吉祥止止。夫且不止、是之謂坐馳。夫徇耳目內通、而外於心知、鬼神將來舍。而況人乎。是萬物之化也。禹舜之所紐也。伏羲几蘧之所行終。而況散焉者乎。

訓讀 顏回曰く、回の未だ始め使しむるを得ざるや、實に自ら回なり。之を使しむるを得るや、未だ始めより回あらざるなり、虛と謂ふ可きかと。夫子曰く、盡くせり。吾れ若に語らん。若、能く入りて其の樊に遊び、而して其の名に感ずること無れ。入らば則ち鳴き、入らざれば則ち止む。門なく、毒なく、一宅にして、已むを得ざるに寓すれば則ち幾し。迹を絕つは易く、地を行くこと無きは難し。人使とならば以て僞り易く、天使とならば以て僞り難し。翼あるを以て飛ぶ者を聞けり。未だ翼なきを以て飛ぶ者を聞かざるなり。知あるを以て知る者を聞けり。未だ知無きを以て知る者を聞かざるなり。彼の闋す者を瞻るに虛室に白を生ず。吉祥は止まるに止まる、夫れ且つ止まらず、是を之れ坐馳と謂ふ。夫れ耳目に徇ひて內通して心知を外にすれば、鬼神も將に來り舍らんとす、而るを況んや人をや。是れ萬物の化也。禹舜の紐とする所也。伏羲几蘧の行うて終はる所、而るを況んや散なる者をやと。

大意 虛心忘我こそ遊說の第一義である。

以て聽かないで、心を以て聽け、卽ち事物の外形に囚はれないで、道理に因りて之を判斷せねばならぬぞ、それから更に進んで、心を以て聽かないで、氣を以て聽け、卽ち道理に囚はれないで直覺を以て判斷せねばならぬぞ。なぜ斯樣にせねばならぬかと云ふと、耳は聽くと云ふ働きに止まつて居り、心は耳をはじめとし五官の作用によりて作られる感覺を受け入れて、推理等の作用によりて之を感念化(符)するに止まつて居る。然るに氣卽ち直覺作用は推理など〻云ふことなしで、卽ち全く空虛な姿を以て物に應接するものであるから事物の眞相をつかむことが出來る、乃ち眞の道は唯此の理窟を拔きにした忘我的空虛に集るのである。さて此の虛こそ謂ふ所の心齋であるぞ。」

語釋 一レ志(上文の道不レ欲レ雜に應ず。陳壽昌曰く、志を一にせよとは雜念なきを言ふなりと。) ○無二聽レ之以一レ耳云云(以下數句の解釋は未だ先輩の是正を經て居ない予が未定の説である。但し聽止二於耳一の句は俞樾も云へる如く當に耳止二於聽一に作るべきで、恐らく傳寫の際誤倒されたものであらう。符は符號卽ち感念或は概念を云ふのである、耳止二於聽一の聽は聽覺卽ち感覺を云ふのである、卽ち耳の如き感官は感覺を作るに止り、心は感覺を集めて感念或は概念を作るに止つて居て、決して物の眞相をつかむことが出來ない、卽ち物の相を僅かに冷たい感念や概念として眺めるに過ぎないのであつて、暖かい血や肉のままで認得することが出來ない、物の眞相をつかみ得るものはたゞ氣卽ち直感の作用である、直感には智慧も理窟も何もない、理窟を離れた所が直感の直感たる所以である、故に氣也者虛而待レ物者也、唯道集レ虛と曰ふのである。そして此の智も理も超越した忘我的心境が乃ち所謂心齋である。)

顏回曰、回之未始得使、實自回也。得使之也、未始有回也。可謂虛乎。夫子曰、盡矣。吾語若。若能入遊其樊、而無感其名。入則鳴、不入則止。無門無毒、一宅而寓於不得已、則幾矣。絕迹易、無行地難。爲人使易以僞、爲天使難

語釋　太多ニ政法ニ而不レ諜（太は甚なり、諜は音テフ安也、林希逸曰く、「政は正なり、法は方法なり、汝の言ふ所は事目方法はなはだ多くして終に是れ安諜ならず」と。武樋は太多レにて句を切り、太だ政多し、法にして諜せずと訓む。未だ妥ならず。又秦鼎は政正の法多きも間諜をなして以て人の隱を探らずと解するも、亦取らず。）　○雖ニ固亦無レ罪云云（林希逸曰く、「能く此の三者（天と徒たり、人と徒たり、古と徒なりを指す）の如くんば、固より亦非なしと雖も、然れども亦自ら免かるゝに止まるのみ、安んぞ以て人を化す可けんや。此れ其の病、何の處にか在る、蓋し汝三者の說、皆是れ有爲の心を師とす、便ち自然の道に非ず」と。郭象は雖固亦無罪の句を「固と雖も亦罪なし」と訓み、未だ宏大ならず（固陋の意）と雖も、亦咎責せられずと解して居るが、今は林說に從ってとく。）　○皡天（皡或は皞に作る、昊に通ず、皡とは元氣廣大の意、天を形容して謂ふなり。）　○心齋（岡松甕谷曰く、「猶ほ心喪と言はんが如し、心に就いて齋戒するを謂ふなり」と。外形飲食などの齋戒でなくて精神的の齋戒を云ふ。）

回曰、敢問ニ心齋。仲尼曰、若一レ志。無ニ聽レ之以レ耳、而聽レ之以レ心。無ニ聽レ之以レ心、而聽レ之以レ氣。聽止ニ於耳、心止ニ於符。氣也者虛而待レ物者也。唯道集レ虛。虛者心齋也。

訓讀　回曰く、敢て心齋を問ふと。仲尼曰く、若志を一にせよ。之を聽くに、耳を以てする無かれ、而して之を聽くに心を以てせよ。之を聽くに心を以てする無かれ、而して之を聽くに氣を以てせよ。聽くは耳に止まり、心は符に止まる。氣なるものは、虛にして物を待つ者なり。唯道は虛に集まる。虛は心齋なりと。

大意　心齋の意義を述ぶ。

通釋　顏回が申すには「敢てその心齋と申すのを御伺ひ致します。」孔子曰く「前にも敎へたやうに道は雜駁を欲しないから、若は何はさておき精神の働を集注して雜念を起さないやうにせよ。それからものを聽く場合に耳を

大意　孔子、自我の念を去るべきこと、卽ち心齋の必要を說く。

通釋　そこで孔子が敎へて言はれるには「そんな態度で行つてはとても駄目だ。なぜならば本來道は單純にして一のみである。然るに汝が態々一つには何、二つには何、三つには何と云ふやうに三段構の陣立で以てやつて行くと云ふのは、甚だ手段方法ばかりが多くて、どうも落着がない。汝の申すやうな態度で行けば勿論罪に陷つて暴人の前に死すると云ふやうなことは無い、けれども、然しそれは罪に陷らないまでのことで何等積極的の功果はない。そんなことでは亂暴な衞侯を感化すると云ふ處まではとても行かぬ。汝の云ふ所を聞いて見ると、やはり汝は無爲自然の道を手本とせずして、己が大に爲す有らんとする心を師匠として居るやうだ。」顏回が申すには「以上申し上げたことは私の智慧のありたけを搾つて考へた態度でありまして、これでも駄目と云ふことでしたら、私は最早や是れ以上一步も進む餘地は御座いません。甚だ恐れ入りますが衞君に說く方法を御伺ひ申し上げます。」そこで孔子が曰はれるには「先づものいみをせよ。それから汝に話をしてやらう。その方法は勿論あるが、之を實行することは決して容易ではないぞ。之を容易だと思ふやうな高慢な者は天意にかなはないぞ、だから齋戒をしてよく承るがよい。」顏回の申すには「齋戒せよとの仰せではありますが、私の家は貧乏でありまして、全然酒も飲まず、ネギ、ニンニクの如き臭草をたべないことが數ケ月もつゞいて居ります。此のやうな狀態でありますから旣に齋戒をして居ると申してよいと存じますが如何なものでせうか。」孔子の云はれるには「汝の申すのは神を祭る時の齋戒であつて、此の方が汝に要求する所の心齋ではない。此の心齋とて精神的齋戒をしなければ話をする譯に參らぬ。」

子必ずしも尊貴ならずと自己必ずしも卑賤ならずと考へる、此に天子をあぐるは天子既に然り況んや諸侯(衞侯の如き)をやの意を含むのである。)　○蘄乎而人(蘄は求、前に出づ。二の乎而は語助にして一說には而人をかの人と訓む。)　○與レ人之爲レ徒也(之の字亦語助。)　○其言雖レ教、讁之實也云云(岡松甕谷に從へば、その言、之を敎ふと曰ふと雖も、然れども言語の間、痛く彼れの非を斥ぞけ、譏讁の實を盡くす、彼れの非を斥ぞくと雖も、然れども要は之を古人に取る、吾れ自ら之を爲すに非ず。夫れかくの如くんば、其の言切直と雖も以て我を病むるを得ずと。胡方によれば教讁已に出でざるが若くす、己を尊ひ人を卑むの嫌なしと。卽ち古人の說に託して自己の意見を述べるのであつて、極めて巧妙なる進說の方わである。)

仲尼曰、惡、惡可。太多ニ政法一而不レ諜。雖ニ固亦無一レ罪、雖レ然、止ニ是耳一矣。夫胡可ニ以及一レ化。猶師レ心者也。顏回曰、吾無ニ以進一矣。敢問ニ其方一。仲尼曰、齋、吾將レ語レ若。有而爲レ之、其易邪。易レ之者、皡天不レ宜。顏回曰、回之家貧。唯不レ飮レ酒不レ茹レ葷者數月矣。若レ此則可ニ以爲一レ齋乎。曰、是祭祀之齋、非ニ心齋一也。

【訓讀】仲尼曰く、惡、惡んぞ可ならん。太だ政法多くして諜からず。固より亦罪なしと雖も、然りと雖も是に止まるのみ。夫れ胡ぞ以て化に及ぶべけんや。猶ほ心を師とする者なり。顏回曰く、吾れ以て進むなし、敢て其の方を問ふと。仲尼曰く、齋せよ、吾れ將に若に語げんとす。有れども之れを爲すは、其れ易からんや。之れを易しとする者は、皡天宜しからずと。顏回曰く、回の家は貧し。唯酒を飮まず、葷を茹はざる者數月なり。此の若きは則ち以て齋と爲す可きかと。曰く、是れ祭祀の齋にて、心齋にあらざるなりと。

位に立つものであることを知り、天子だとて別に恐ろしいことはない、況して諸侯をやと云ふ信念を持つのであります。從つて己の言論を人(天子・大名)が善いとしようが、善しとしまいが、そんなことは全く無頓着で、たゞ直き心に從つて進むのみであります。か樣な人をば天眞爛漫なる童子と謂ひ、純一無私なる天と仲間をなす者と申すのであります。次ぎに外形の恭しき者は世間の人々とよく調和を保ち、之と仲間をなす者であります。凡そ擎跽曲拳とて手を擎げて笏を執つたり、兩膝を折つて跪いたり、身を曲げ腰を低くしたりするのは、皆人臣たるの禮儀であつて、世間の人は皆之を爲すのであるから、己のみが獨り之をせずに置くわけにはゆきませぬ。世間の人のする事をして居れば、人もやはり之をそしると云ふやうなことがない。か樣な人をば人と徒たりと申すのであります。最後に己の說を成すにも上、古人の敎と一致を保つて行く者は、古人と仲間をなすのであります。か樣な人の說く所は表面は敎へ導いて居るやうであるが、內實に於ては相手の不心得を謫めて居るのである。然し內容に於て相手の不心得を責めて居ても、其の說き方が古人の敎に從つて說くのであつて、己の意見によつて相手を責めて居るのでない。か樣な人はその說く所が相手の肺腑をつくやうな直言であつても、相手からいやがられると云ふことがない、かゝる人は古人と仲間をなすと謂ふのであります。以上のやうに天にそむかず、人と調和し、古人と一致する如き態度を以て參りましたならば如何で御座いませうか。」

語釋 外曲(林希逸曰く、「外曲とは擎跽曲拳の禮を爲すを言ふなり」と。卽ち外形を曲げて恭敬な態度を取ること。) ○成而上比(林氏又曰く、「成とは自己の成說なり、比は合なり、自己の成說を以て上、古人に合す、いふ心は古人を引いて以て證となす也」と。自己の說をのべるに古人の說を引用して之と一致するやうに說くこと。) ○知ニ天子之與レ己皆天之所レ子(之與は與と同じ。古文によくある形である、天子の貴きも自己の賤きも同じく共に天卽ち自然の生む所で、生の本原から云へば天

人爲徒。成而上比者、與古爲徒。其言雖教、謫之實也。古之有也、非吾有也。若然者、雖直不爲病。是之謂與古爲徒。若是則可乎。

訓讀 曰く、然らば則ち我れ內直くして外曲り、成して上比せん。內直き者は天と徒たり。天と徒たるものは、天子と己と皆天の子とする所なるを知る。而して獨り己が言を以て、人の之れを善しとするを蘄め、人の之を善しとせざるを蘄めんや。然るが若きもの、人之を童子と謂ふ。是れを之れ天と徒たりと謂ふ。外曲る者は人と徒たるなり。擎跽曲拳は、人臣の禮なり。人皆之を爲す、吾れ敢て爲さざらんや。人の爲す所を爲す者は、人も亦疵る無し。是れを之れ人と徒たりと謂ふ。成して上比する者は、古と徒たり。其の言は敎ふと雖も、謫の實なり。古の有なり、吾が有に非ざるなり。然るが如き者は、直と雖も病となさず。是れを之れ古と徒たりと謂ふ。是の如くんば則ち可ならんかと。

大意 顔回が衛君を說く精一杯の方法を述べ、其の可否を孔子に問ふ。

通釋 顔回が申すには「端虛勉一と云ふ態度が駄目でしたら、更めて更のやうな態度を以て參りたいと思ひます。即ち私は心を眞直にし、外貌を恭順にし、自分の說を述べるにも古人の說を引用して證據とし、敢て卓見を衒はない態度を以て衛君に對して見たいと存じます。私がなぜ斯かる態度で參つたならばと存じまするのは、先づ心の眞直な者は大自然と仲間をなす者であつて、貴い天子も賤しい己も倶に皆同じく天の生みなした子で同一の地

とても駄目だ。」

【語釋】端而虛。勉而一（林希逸に從へば其の身を端正にし、其の心を虛豁にし、黽勉にして終を謹むこと始の如しと。即ち身を嚴肅に保ち、虛心平氣、動勉努力、終始一貫せる態度を云ふ。） ○惡、惡可（林西仲云ふ「上の惡字は歎息、下の惡字は其の不可を斷ずるなりと。」） ○以陽爲充孔揚（難解の句なり、姑く林希逸に從へば、志を得るの人は陽氣まさに充滿、其の貌甚だ揚々自得すと。） ○采色不定（郭注によれば、喜怒常なしと。） ○常人之所不違（關龍逢や王子比干の如き忠臣ならば、或は諫め逆らふことがあるかも知れないが、普通の人は逆らへば損だから、何でもハイ〳〵と從つて居る意。） ○案人之所感。以求容與其心（郭注に云ふ、「夫れ頑强の甚き、人快事を以て己を感ぜしめんとす、己れ陵藉して乃ち之を抑挫し、以て從容自放、而して其の修心を遂げんことを求むる也」と。即ち案は抑挫とて、說者を抑へ挫く、ヤリコメルこと。容與は己が心に適ふ、氣に入る意。林希逸は自快の意と注す、同じ。） ○日漸之德不成。而況大德乎（林西仲曰く、「這れ等の人は日日與に處ると雖も、亦漸やく漬して以て其の德を成すこと能はず、況んや暫く彼に到つて、而も其の過を聞かば喜び、諫に從ふこと流るゝが如きの大德あることを望むをや。」林希逸によれば日漸は小德也と、その意同じ） ○將執而不化（自分の意見を固執して同化しないこと。） ○外合而內不訾（表面多く外合して內そしられずとも云云と訓む、未だ妥當ならず。訾は思也。量也。姚鼐云ふ、君子の言を聞き、外違はざるが若きも、內その義を度量せずと。即ち外面は君子の言に同意を表しても、內心ではその說を眞面目に考へて見ない意。） ○庸詎（何なり。）

曰、然則我內直而外曲、成而上比。內直者、與天爲徒。與天爲徒者、知天子之與己皆天之所子。而獨以己言蘄乎而人善之、蘄乎而人不善之邪。若然者、人謂之童子。是之謂與天爲徒。外曲者、與人之爲徒也。擎跽曲拳、人臣之禮也。人皆爲之、吾敢不爲邪。爲人之所爲者、人亦無疵焉。是之謂與

訓讀 顏回曰く、端にして虛、勉めて一ならば、則ち可ならんかと。曰く、惡、惡んぞ可ならん。夫れ陽を以て充を爲し、孔だ揚り、采色定まらず、常人の違はざる所。因りて人の感ずる所を案じ、以て其の心を容與にせんことを求む。之を名けて日漸の德も成らずと曰ふ。而るを況んや大德をや。將に執りて化せざらんとす。外合ふも内訾らず。其れ庸詎ぞ可ならんやと。

大意 顏回が衛君を說かんとする態度の効果なきを云ふ。

通釋 顏回が答へて申すには「身持を正しくし、何等の野心を持たず、勤勉にして專一な態度を以て參りたいと存じますが、如何で御座いませうか。孔子が云はれるには「あゝ、どうしてそんな態度でよからうや。一體衛侯のやうな暴人と云ふものは、陽氣な得意な氣分に充ち滿ちて居て、其の外貌までが甚だ揚々として思ひ上つて居るものだ。そして顏色定まらずして、喜んで居るかと思へば怒つて居るし、怒つて居るかと思へば喜んで居ると云ふ始末である。されば前にあげたやうな關龍逢や王子比干の如き忠義な臣下ならば別だが、普通な人は逆へば害を招くから敢て之に逆はうとはしないで、唯ヘイ〳〵と云つて居る。それに調子づいて折角人が己を感動させようとして善い話をして與れるのを、ヤリコメて我儘な心を滿足させようとして居る。か樣な手に終へない男をば、名けて人の指導によつて漸次に進む小德さへも出來上がらない人物と云ふのである。か樣な人物にはもとより汝が望んで居るやうな理想的道德を具へさせることは思ひもよらぬ。か樣な暴人は己の我見を固執して他人の說に同化しようとしない、表面だけは調子を合はせても、心の內では考へても見ない。されば汝の云ふやうな態度を以て行つた處で

からである。汝も定めて聞いたことがあるだらうが、名實を求むるの念は、聖人すら之に打ち克つことが出來ないものだ。聖人すら然り、まして汝の如きにあつてはもとよりのことである。だから汝が衛へ行つたなら、どこ〳〵までも名實を求むる念を押へて居らねばならぬぞよ。少しでも此の慾念を起したら、忽ち關龍逢の如く、王子比干の如く、暴人の前に死することにならう。之を戒め之を愼めよ。さりながら名實の慾念に中々以て打ち克ち難い若い汝が亂暴者の衛君に道を說かうとして出かけるには、必ず何か理由即ち汝にそれだけの確信があつてのことであらうが、マア試しにその考を俺に話して御覽よ。」

語釋 傴拊人之民（傴拊は釋文に之を憐愛するを謂ふなりとある。人之民とは自分の民ではない他人たる人君の民の意。）○以下拂其上者也（以は身分をあらはす語、以兵衛尉の以に同じ。拂は違なり戻なり。其上は桀紂を指す。言ふ心は桀紂は暴君、民を虐げるを心とす、然るに關比二人が之を憐愛するは、是れ其の上に拂るなり。）○其君因其修（二人の人格高きを利用する意、即ち比干が紂を諫めた時、紂が何んでも聖人の心臟には穴が七つあると云ふことだ。御前は人格の高い聖人であるからキツト心臟には七穴があるに違ひない、是非見せて吳れと云つて比干を殺し解剖して其の心臟を見たと云ふ話だ。つまり此の種のことを指すのであらう。）○虛厲（釋文に居宅人なきを虛と曰ひ、死して後なきを厲と爲すとある。）○嘗以語我來（嘗は試に同じ、來はサアとかイザとか、さそひの助語、莊書に此の用例多し、陶淵明の歸去來辭の來亦同じ。）

顏回曰、端而虛、勉而一、則可乎。曰、惡、惡可。夫以陽爲充孔揚、采色不定、常人之所不違。因案人之所感、以求容與其心。名之曰日漸之德不成。而況大德乎。將執而不化。外合而內不訾。其庸詎可乎。

嘗以語レ我來。

訓讀　且つ昔者、桀は關龍逢を殺し、紂は王子比干を殺す。是れ皆其の身を修め、下を以て人の民を傴拊し、下を以て其の上に拂る者なり。故に其の君、其の修に因りて以て之を擠る。是れ名を好む者なり。昔者、堯は叢枝・胥敖を攻め、禹は有扈を攻む。國は虛厲と爲り、身は刑戮せらる。其の兵を用ひて止まず、其の實を求めて已む無し。是れ皆名實を求むる者なり。而獨り之を聞かざるか。名實は聖人すら勝つ能はざる所なり。而るを況んや若をや。然りと雖も若は必ず以あらん。嘗みに以て我に語げよやと。

大意　名利の念の去り難きを云ふ。

通釋　更に敎へるが、むかし夏の暴君桀王は、その忠臣關龍逢と云ふ者を殺し、殷の暗君紂王は王子の比干を殺したのである。なぜか樣なことが起つたかと云ふに、關龍逢も比干も共に皆その人格をみがき身持を善くして、自分が臣下のくせに勝手に人君の民を愛撫したので、つまり臣下の身分でありながら、その君上の御意に逆らつた男である。だから其の君たる桀紂が彼等二人の人格がよく修つて居るのを利用して陷れて仕舞つた。これはつまり彼等兩人が忠諫の名を好んだ結果である。又かう云ふ話がある。むかし聖天子堯は叢枝と胥敖と云ふ二つの國を攻め、夏の聖君禹王は有扈と云ふ國を攻めた。それが爲めこの二國は、その國土は廢墟となり、人民は死して祭られざる鬼となり、その君自身は刑戮に處せられることゝなつた。かく堯禹の二君が兵を用ひて止まず、その用兵の名に沿ふだけの實利を求めて已まなかつたのは、是れつまり堯も禹も共に名譽實利を求むるに汲々たる連中である

ないもので、途中からどんなにもり返さうとしても、とても駄目だ。此の膝一たび屈せば復た伸ぶべからず、是れが世の中の常だ。汝もよく〳〵最初の第一歩に氣をつけろ。然るに最初をよく氣をつけないで、まだ少しも信ぜられて居りもしない身を以て、深く立ち入つたことを言ふものなら、必ずあの亂暴者の衞君の前で命を落すことになるであらう。

語釋　無レ詔（詔は告なり。）　○而色將レ平レ之（前後の而字は皆ナンヂと訓む、之字は不定代名詞、特に指すものなし。成疏によれば縱ひ諫心あるも敢て反對を顯はさず、平和な顏色を裝ふ義。）　○口將レ營レ之（成疏の正義によると、吻間吐かんと欲して又呑むと云つて居る。即ち自分の意見が口先まで出て居るがそれをグツト呑んで仕舞つて王公の說に合ふやうにうまく言ひ繕ろふこと。）　○容將レ形レ之（容は態度、形之とは王公に對して恭順な態度を形はすこと。）　○心且レ成レ之（成疏によると豈にたゞ外形のみ從順ならんや、亦乃ち內心和同、善を進むること能はず、更に彼の惡を成すなりと。且字は上の將に同じ、但し郭注は且をシバラクと訓み、まあしばらく己の意見を捨てゝ彼に從つておかうと解して居る、かく解すると下の順始無窮の句と照應することになつて面白い。）　○厚言（猶ほ深言と言はんが如し、深く立ち入つて言ふこと。）

且昔者、桀殺二關龍逢一、紂殺二王子比干一。是皆修二其身一、以下傴二拊人之民一、以下拂二其上一者也。故其君因二其修一以擠レ之。是好レ名者也。昔者堯攻二叢枝・胥敖一、禹攻二有扈一。國爲二虛厲一、身爲二刑戮一。其用レ兵不レ止、其求レ實無レ已。是皆求二名實一者也。而獨不レ聞レ之乎。名實者、聖人之所レ不レ能レ勝也。而況若乎。雖レ然若必有レ以也。

にせんとし、口は將に之を營まんとし、容は將に之を形さんとし、心は且に之を成さんとす。是れ火を以て火を救ひ、水を以て水を救ふなり。之を名けて益多と曰ふ。始に順ひて窮なし。若し殆ど信ぜられざるを以て厚言せば、必ず暴人の前に死せん。

大意 王公の通癖を述べ遊說の難を說く。

通釋 更に申し聞かせるが、若し衞君が賢人を悅びて之を用ひ、不賢を惡んで之を斥ける如き明君であつたとしたならば、衞の朝廷へは賢人集りて定めて立派な政治を行つて居るに違ひないから、何にもわざ〳〵汝などを用ひてそれ等の賢人と異つた政治をして貰ふ必要は少しもない。然るにはる〴〵汝などを召す所から見ると、衞君は賢を悅び不肖を惡むが如き明君ではなく、評判以上の暴君に相違ないから、汝は次に俺が說く所をよく心に留めて參るがよいぞ。先づ第一に汝が最初衞へ行つたなら唯々沈默を守り、何事も申し上げてはならぬぞ。若し不用意にも何か申し上げたら最後、衞君は必ず王公たるの權威を笠にきて汝と論戰して勝ちを得ようとするのであらう。それが爲めに汝の目は先づ眩惑されて仕舞ふであらうし、次に汝の顏色は强ひて平和を裝ひ、口は口で以て、言ひたいことが口先まで出て居ても、それを言はずにうまく言ひ繕ろうてしまひ、又、身體全部が恭順の態度をとることになり、はては心までが遂に彼の說に贊成して仕舞ふことになる。かくの如きは火を以て火を救ひ、水を以て水を救ふと云ふやつで、益々以て水火の勢を助長せしむるのみである。かゝる態度を名づけて益多とて、人の惡を增し加へると言ふのである。何事によらず、始めにかくと極まつて仕舞ふと、そのまゝどん〳〵推し進んではてしが

語釋 知之所レ爲レ出（爲字に味あり、莊子から見れば知慧は人生の邪魔ものである、知慧などは出て來でもよいのに、ワザ〳〵それが出て來たのはの意なり、）〇二者凶器、非レ所二以盡一レ行也（二者は名と知とを指す、郭注に夫れ名智は世の用ふる所なり、而して名起る時は則ち相軋（郭注本は札に作る）る、智用ひらるゝ時は則ち爭興る、故に名智を遺れて而る後、行ひ盡くす可きなりと。）〇彊以二仁義繩墨之言一、術二暴人之前一者（彊は强に同じ、人心の機微にも達しないくせにタツテの意。繩墨は禮法を云ふ、或は仁義の如きカタクルしき話と見る、亦通ず。術は述に同じ、林西仲云ふ「術は江南古藏本には術に作る、義やゝ優る、應に之に從ふべし」と。之によると生まカジリの仁義禮法の說を衒たか〴〵とのべる意となる。）〇是以人惡レ有二其美一也（有其美とは、猶ほ其の美に居ると言はんが如く、つまり人を惡名の地に置き、自分は美名の地に居る、自分丈よい子になる、それでは他人が之を惡むは當然である。標注に引く一堂の說によると、是れ人の惡を許きて以て己が美を有する也とある。此の說に從へば「是れ人の惡を以て其の美を有する也」と訓むべきである。一說として存す。）〇若殆爲二人菑一夫（秦鼎によれば、此の句は前の往而刑の句と相應ず、前は危語を以て喝醒し、此は緩筆を以て沈吟すと、夫字舊本には下文に屬して讀む、林西仲上に屬して讀むは優なり。）

且苟爲三悅レ賢而惡二不肖一、惡用レ而求レ有二以異一。若唯無レ詔、王公必將三乘レ人而鬪二其捷一、而目將レ熒レ之、而色將レ平レ之、口將レ營レ之、容將レ形レ之、心且レ成レ之。是以レ火救レ火、以レ水救レ水。名レ之曰二益多一。順レ始無レ窮。若殆以レ不レ信厚言、必死二於暴人之前一矣。

訓讀 且つ苟くも賢を悅びて不肖を惡むとせば、惡んぞ而を用ひて以て異なること有るを求めん。若唯詔ること無れ、王公は必ず將に人に乘じて、其の捷を鬪はさんとす。而の目は將に之に熒はんとし、而の色は將に之を平か、

訓讀 且つ若亦夫の徳の蕩する所、知の出づるを爲す所を知るや。徳は名に蕩し、知は爭に出づ。名なる者は相軋るなり。知なる者は爭の器なり。二者は凶器、盡く行ふ所以に非ざるなり。且つ徳厚く信矼きも、未だ人氣に達せず、名聞爭はざるも未だ人心に達せず。而して彊ひて仁義繩墨の言を以て暴人の前に術ぶる者は、是を以て人其の美あるを惡むなり。之を命じて菑人と曰ふ。菑人は人必ず反つて之に菑す。若殆んど人に菑せられんかな。

大意 名を求め知を用ふるの危險なることを說く。

通釋 尙ほその上汝に聞かせることがある、汝もあの道德が失はれる原因と、それから知慧の出てくる原因とを知つて居るであらう。道德は名譽を求むるによつて失はれ、知慧は人と競爭する所から生れて來る。名譽と云ふ者は之を保ち之を求めんが爲めに他と軋轢を起すものであり、知慧と云ふ者は他人と競爭をする手段道具である。故に此の名知の二者は不吉な道具であつて、決して用ひてはならない。更に云つて聞かせるが、道德も高く信念が堅くても、まだ十分人情に通じて居ない、又名譽を求むるが爲めに他人と爭ふやうなことがなくても、未だ十分に人心の機微に達して居ないのに、强ひて仁義禮法に渡る話をば亂暴な人に向つて述べる者は、是れこそ他人から人のことを惡口いつて自分だけが善い子になつて居るのを惡まれるのである。か樣な者をば菑人とて他人に災難を及ぼす人間と云ふのである。人に災をかける人間は必ず人が逆に災を仕向けて來るものだ。是れは外ごとでない、つまり汝のことで、汝は今の態度を以て行つたら、人から偉い災難をかけられることであらう。

思ひもよらぬことだ、全體道と云ふものは國を治め人を救ふの道はもとより、その如何なる道たるを論ぜず、凡て純一を好むのであつて雜駁なるを厭ふのである。なぜならば雜駁だと自ら多岐となる。多岐の結果は自分の心が亂れる。心が亂れると自ら心配が多くなる、心配が多いやうではとても人を救ふことが出來ぬ。古の至れる人は先づ道を己が心に確立して然る後之を他人に傳へる、即ち前に謂ふ所の雜多を統一し無憂の心境を得て、始めて人を救ふのである。然るに汝のやうに己が心に存する所の道が不安定、即ち雜多擾憂を免れないやうなことで、どうして衞君のやうな亂暴な人の所行を救ふなど云ふ餘裕があらうぞ。

語釋 譆（養生主にも見ゆ、彼處では歎美の聲、此處は歎息の聲。玄英の疏によれば怪笑の聲とて顏回の云ふことが餘り突飛なので孔子が吹き出したと見る。）○憂而不救（而は則に同じ、不救は一說には自ら救ふ能はずと解す。）○存諸己（諸は之乎の約語、之は道をさす。）○至於暴人（至は立ち入る、干涉する意。暴人は衞君をさす。）

且若亦知夫德之所蕩、而知之所爲出乎哉。德蕩乎名、知出乎爭。名也者相軋也。知也者爭之器也。二者凶器、非所以盡行也。且德厚信矼、未達人氣、名聞不爭、未達人心。而彊以仁義繩墨之言、術暴人之前者、是以人惡有其美也。命之曰菑人。菑人者、人必反菑之。若殆爲人菑夫。

此の說に從へば「澤における蕉の若し」と訓むべきである。東條保の標註に引いて居る其の祖父一堂の說によると死者以レ國とは國を擧げて之に死する意。量ニ乎澤一とは尸を澤に積み、澤を以て量（マス）となす意。蕉は草菅なり、若レ蕉とは澤の草菅、蘊積するが如しとの意。呂覽の期賢篇に無罪之民。其死者量ニ於澤一矣とあるから量字と澤字は熟語として連用すべきであつて分用してはならぬと。卽ち一堂は上句の量字を此の句に附けて「澤に量るに蕉の若し」と訓んで居る。此の說は焦竑の翼に引く所の趙以夫にヒントを得た說で味のある解である。要するに以上の諸解は皆一家の見たるを失はないが姑らく林西仲に從つて乎を平の訛と做し、更に郭慶藩が集釋の說を參考として通譯す。卽ち田園荒蕪の甚だしきを形容したる言と見、死者の多きを形容せるの句と見ず。）

○民其無レ如（如はユクと訓む、適歸する所なき義、一說には「いかんともする無し」と訓む。）

○醫門多レ疾（此の句何を喩へたるや意を取りにくし、姑らく通解の如く見る。或は此の上下に一句を脫せしならんか、姑く疑を存す。）

○以レ所レ聞（以は準據の意、力にする、據り所にする意、或は用字の如く解して應用の意と見てもよし。）

○有レ瘳乎（瘳は癒に同じ、病のなほること、上の醫門多レ疾の句より出で來る、衞の亂を疾に喩へたるなり。）

仲尼曰、譆、若殆往而刑耳。夫道不レ欲レ雜。雜則多。多則擾。擾則憂。憂而不レ救。古之至人、先存ニ諸己一、而後存ニ諸人一。所レ存ニ於己一者未レ定、何暇至ニ於暴人之所一レ行。

訓讀　仲尼曰く、譆、若殆ど往いて刑せられんのみ。夫れ道は雜を欲せず。雜なれば則ち多。多なれば則ち擾る。擾るれば則ち憂ふ。憂ふれば救はれず。古の至人は先づ諸を己に存して、而る後に諸を人に存す。己に存する所の者、未だ定らず、何ぞ暴人の行ふ所に至る暇あらん。

大意　孔子の顏回に對する敎。人を正さんと欲せば先づ己を正すべきを云ふ。

通釋　そこで孔子が云はれるには「あゝ汝は行つたら最後、刑罰に處せられるだけのことで、人を救ふなどとは

通釋 孔子秘藏の弟子に顏回と云ふ者あり、或る時孔子にお目にかかつて、他所へ行くのでお暇乞を申した。孔子が尋ねて云はれるには「一體汝は何處へ行かうとするのだ。」顏回がお答へして申すには「これから衞の國に參らうと思ひます。」孔子が更に問うて、云はれるには「何をしに行くのだ。」顏回がお答へ申すには「私が承はる所によれば、衞の殿樣は年が若くて、自分勝手のことをして居られる。そして輕々しく國政を行ひ、御自分の落度に氣が着かぬ。又輕々しく戰爭などに人民の命を使ふので、死する者が一縣一郡位でない實に國全體に滿ちて居る。それが爲めに田畝はもとよりのこと、平原や藪澤に至るまで靑色なく、丸で火で焦げたやうであつて、國民は全く途方に暮れて落ち着く所がないと云ふことであります。私は嘗て先生から次の如きお言葉を承りました。即ち先生の仰せには「よく治つた國には最早や賢人の用はないから、いつまでも祿を貪つて居らずに、サツサと去るべきである。之に反して亂れた國は大に賢人の必要があるから、自ら進んで行つて之を救ふべきである。名醫の門には病人が多く集るごとく、賢者の下には亂國の哀れな民が多く集るから大に之を救つてやるべきである。」誠にご尤もなことだと存じます。そこで私もどうか日頃先生から仕込まれた敎を本にして亂國を治むるの法則をよく考へたならば、恐らく衞國の病氣を直してやることが出來ませう。

語釋 奚之（奚は何なり、之は行なり。） ○其年壯。其行獨（三十を壯と云ふ。獨は獨斷自ら用ふるなりヒトリギメで勝手な振舞をすること。） ○死者以レ國量（死者の多きを形容して云ふ。以字は以レ千數の以字に同じ、單位として又は標準としての意、即ち死者の多きこと縣や郡を以て量ること能はず、實に國と云ふ大桝を以て量る程であるとの意。或は量字を下句に附け「死者國を以てす」と訓む說もあり、その意は略同じ。） ○平澤若レ蕉（諸解極めて多くマチ〳〵なり。陳壽昌の正義によれば、蕉は草芥なり、死者相枕藉して其の澤を塡平（うめて平にする）すること、草の多きが如し。所謂老弱溝壑に轉ずるなりと、此の說に從へば「澤を平にすること蕉の若し」と訓むべきである。舊本には平を乎に作る。成玄英の疏によれば、國民を視ること藪澤中の草芥の如しと、

ならず、或は士となりて仕へ或は商となりて市し、或は農となりて耕す。而して無用の用は實に凡てに通ずる處世の秘、是れ後の五章ある所以なり。

顏回見仲尼請行。曰、奚之。曰、將之衞。曰、奚爲焉。曰、回聞衞君、其年壯、其行獨。輕用其國、而不見其過。輕用民死、死者以國量。平澤若蕉、民其無如矣。回嘗聞之夫子。曰、治國去之、亂國就之。醫門多疾。願以所聞思其則、庶幾其國有瘳乎。

訓讀 顏回、仲尼に見えて行かんことを請ふ。曰く、奚に之くと。曰く、將に衞に之かんとすと。曰く、奚をか爲さんとすと。曰く、回聞く、衞の君は、其の年壯にして其の行獨なり。輕ろしく其の國を用ひて、其の過を見ず。輕ろしく其の民の死を用ひて、死者國を以て量る。平澤蕉の若く、民其れ如くなしと。回嘗て之を夫子に聞けり。曰く、治國は之を去り、亂國は之に就く。醫門には疾多しと。願はくは聞く所を以て其の則を思へば、庶幾くは其の國瘳ゆるあらんかと。

大意 以下九節は本篇の首章である。孔子と顏回との問答に托して暴君を導くの難きを述べ、併せて之が教訓を説く。本節は顏回が衞を救ひに出かける理由を孔子に述べる所である。

内篇人間世第四

【叙説】此の編は本書の第四篇である。人間世とは人間社會即ち世の中の意である。此の世に處する道を說く、故に人間世と名づく。人が此の世に生を受けたる以上みだりに隱居高蹈すべきでない。何となれば此の世には二つの大戒がある。其の一は天命であり、其の二は道義である。子が親を愛するは天命であつて心に忘れんとして忘るべからざる極めて自然の心情である。又臣が君に事ふるは道義であつて、天地間如何なる所へ行つても君臣の義は逃れる所がない。此の故に君父にそむき巖穴に韜晦するは臣子の分でない。然れども人生の行路たる極めて難矣である。此の濁世を遁れて獨り行ひすますは反つて易いが、俗塵の中に在つて而も人世を超越することは難中の難である。卽ち出世は易く入世は難いのである。然らば入世の法、處世の第一義とは如何。曰く虛のみ、虛のみ。彼の闋せる者を瞻るに、虛室に白を生じ、吉祥此に止まるに非ずや。虛心忘我、以て世に對する時、鬼神も將に來り舍らんとす、況んや人間をや。然るに人は茫乎たり、知と名の凶器たるを知らずして、自ら才知の美を恃んで名實を求めんとす。是れ夫の螳蜋の臂を怒らして車轍に當りて、而も其の任に勝へざるを知らざるが如く、危殆とも殆矣。是れ實に莊叟が此の篇ある所以なり。而して人間世の急務は民難を救ふに在り、民難の原は國君の無道に在り、故に其の君をして過を改めて有道に就かしむれば則ち民難自ら解く是れ前三章を設くる所以。然れども人世の途一

の燃えた部分に就いて考へて見るとまだ燃えない前にあつた薪と云ふ形體は既に窮きて無くなつたことを認めることが出來る。然し之と同時になほ盛に燃え上りつゝある火に就いて考へて見ると、火は薪のある限りどん〳〵燃え傳つて行くのであつて何時消え盡きるとも分からないのである。薪は肉體であり火は生命である。吾れ死して肉體は滅ぶと雖も、吾が生命を繼いで生ずるものあり、或は又吾が生命の感化影響を受けたる者ありて、吾が生命は轉傳して盡くる期なし。」

語釋 老聃（五千言の著者、老子を云ふ。史記に終る所を知らずとあつて、此に其の死を云ふは、もとより寓言なり。） ○秦失（失は一に佚に作る假空の人、秦失に托して莊子自ら意見を述ぶ。林希逸曰ふ「莊子の學は老子に本づけりこゝに先づ老子を把りて貶剝するは即ち是れ堯舜夫子を貶剝せんが爲めの張本なり、道は我れ老子に於ても亦私する所なし、而るを況んや他人をや。」） ○三號而出（號は泣なり、通り一片の悔の仕方で、眞情がこもつて居ない。） ○以ㇾ爲其人一（其人とは非常の人、勝れた人の意。） ○倍ㇾ情（倍は加なり、俗情を增す意。一說には倍は背なり、自然の人情にそむくと解す。） ○適來夫子時也。適去夫子順也（來去は生死を云ふ。夫子は老子を指す、特に老子を指して夫子と云ふは竊かに老子の迷へる遺弟を訓へんとする語氣なり。） ○不ㇾ能ㇾ入（その心を動かす能はずとの意。） ○指ニ窮於爲ㇾ薪云々（指は認める意。窮は盡に同じ、爲ㇾ薪とは具體的の薪の意。此の句解しにくし、下のやうに解しても意味は通ると思ふ、此に一朶の薪あり、火が之を燒き盡したとする、之を眺めて居た人は其の一朶の薪が盡滅したことを認めるならん。然し之と同時に其の一朶の薪を燒き盡した火が其の側にある他の一朶の薪に燃え移つたのを認めた時、其の火は何處まで燃えつゞくやら、到底其の消え失せる時を推知することは出來ぬであらう。始めの一朶の薪は自己であり、他の一朶の薪は子或は自己の感化を受けた者を指す。）

彼が日頃死生有ㇾ命の理を教へて置かなかつた爲めで、若し善く死生の道に就いて教へ込んで置けばそんな筈はない。是れといふのも歸する所、老子が大聖人らしく裝つて居ても、實は未だ死生の道を悟了して居なかつたに由るので、彼は死んで始めてその馬脚を現はしたのである。斯樣に死生の道を悟り得ないで死に遇つて悲み泣く如き老子のやうな連中は天が死生に關して人に下した命令を遁れ避けて、徒に死を悲む俗情に拘はれ、人が受けて生れた天性の何物なるかを忘れた者である。今は澆季の世だから、さう云ふ高尚な刑罰はないが、昔に在つては斯かる人物を天命逃避と云ふ刑罰に當ると謂つて居る。つまり老子のやうな死生の道に迷へる人物は色々煩悶懊惱して所謂精神的刑罰を受けるのである。之に反してヒョツコリ生れて來るのは老聃先生の生れるべき時節が來たからのことであり、ヒョツコリ死んで行くのは先生の死ぬべき順番が廻つて來たからのことである。されば生れる時節が來ても有頂天になつて喜ばないで、心安らかに之に對し、又死すべき順番が來てもアワテ悲しまないで、從容として之に臨んだならば、死の哀と生の喜と云ふが如き俗情は決して其の心を動搖することが出來ない。かく死生の道を達觀せる哲人を、古は天帝が人間に下して居る生死と云ふ繫縛から解放された者と云つて居るのである。人は須らく遁天の刑を免れて帝の縣解の域に到達せねばならぬ。更に最後に教へて置くが、衆人はもとより、老子の如き人までが徒に死を恐れ悲むのは何の爲めであるかと云へば、つまり死は凡ての消滅であるとのみ考へて生命の不滅なることを知らないからである。一たび生命の不滅なることを悟り得たならば死の恐怖は雲霞霧消することであらう。故にこゝに譬喩を以て生命の不滅なることを說き明かして置かう。此に燃えつゝある薪がありとする、そ

を倍し、其の受くる所を忘る。古は之を遁天の刑と謂ふ。適〻來るは夫子の時なり。適〻去るは夫子の順なり。時に安んじて順に處れば、哀樂入る能はず。古は是を帝の縣解と謂ふ。窮るを薪たるに指ざすも、火の傳はるや、其の盡くるを知らざるなりと。

大意 死生の達觀は卽ち養生の至道なることを說く。死生は人生の一大事である、此の問題未だ決せざれば、煩悶懊惱その生命を傷ふこと決して少なからず、是れ本篇に此の一段ある所以である。

通釋 老子が死んだ時、その友人の秦失といふ人が悔に行つたが、僅か三度號泣したのみで退出して仕舞つた。そこで秦失の弟子が怪んで尋ねて曰ふには「老子は先生の友人ではありませんか。」「さうだよ。」「友人でしたら、悔の仕方が今なさつたやうな粗略な仕方で宜しいものですか、今少しく丁重であらねばならぬやうに存じますが。」秦失が曰ふには「あのやうな仕方で結構だよ。これまで俺はあの男こそ話せると思つて居た。處が今となつては全く見當違であつた。先き程、俺が家へ這入つて弔問した時、親戚緣者門人どもが老子の遺骸を取り圍んで泣いて居た。年をとつた連中はマルデ自分の子でも喪なつたやうに泣いて居たし、年の若い者どもはマルデ其の母でも亡くしたやうな泣きざまであつて、死生を達觀した俺達から見ると二目と見られぬ醜體さであつた。彼れ老子が人々の斯かるつまらぬ哀情を其の身に集めた理由は、必ず彼が日頃から人々に向つて俺が死んだら悔を言つて吳れとか、或は泣いて吳れとかと求めないでも自ら敎へを受けた人々の方で色々悔を言つたり或は泣いたりするやうに自然と敎へ込んで置いた爲めに相違なからう。つまり老子の感化を受けた連中が彼の死に於て斯かる醜體をなすのは、

と人體の相並んで居るを云ふ、こゝは兩足相並んで居るを指す。）　○雖王（王は旺に同じ、旺盛の意。）　○不善也（樂しからざる也に同じ。）

老聃死。秦失弔之。三號而出。弟子曰、非夫子之友邪。曰、然。然則弔焉若此可乎。曰、然。始也吾以爲其人也。而今非也。向吾入而弔焉、有老者哭之如哭其子、少者哭之如哭其母。彼其所以會之、必有不蘄言而言、不蘄哭而哭者。是遁天倍情、忘其所受。古者謂之遁天之刑。適來夫子時也。適去夫子順也。安時而處順、哀樂不能入也。古者謂是帝之縣解。指窮於爲薪、火傳也、不知其盡也。

訓讀　老聃死す。秦失之を弔す。三號して出づ。弟子曰く、夫子の友に非ずやと。曰く、然りと。然らば則ち弔すること、此の若くにして可なるかと。曰く、然り。始め、吾れ其の人と以爲へり。而るに今は非なり。向に吾れ入りて弔するや、老者は之を哭すること、其の子を哭するが如く、少者は之を哭すること、其の母を哭するが如き有り。彼れ其の之を會する所以は、必ず言を蘄めずして言ひ、哭を蘄めずして哭する者有らん。是れ天を遁れ、情

ればなりと。

大意 天命に安んずるは是れ亦生を養ふ道なることを説く。

通釋 公文軒と云ふ人が、或る右師と云ふ役をして居る人に會つたが、如何にもその樣子が變つて居るので、驚いて曰ふには「マア何んと云ふ姿です。どうしてその樣に足を切られて片足となつたのですか。天の所爲か、それとも人の所爲で斯くなられたのですか。」右師は之に答へて曰ふには「天の所爲であつて、人の所爲ではない。卽ち天が自分を生むのに、片足になるやうに運命づけたので、斯く足を切られたのである。凡そ人の形は兩足あつて相並んで行くものと定まつて居る。然るに自分のみは大勢の中で獨り此の樣に異つて居ることは、決して人事で出來るものでない、必ずや運命事であると考へるのである。だが斯うなつたのも天の所爲だ、廻り合せだと諦めてしまへば案外氣樂なものである。そこ許はあの雉を御承知だらう。彼は十歩行つては一つまみ、百歩あるいてヤツト水を一飲、極めて不自由のやうであるが、それでも籠の中で飼はれることを願はない。なぜならば籠の中で人に飼はれたら、成程食物は豐富で元氣は旺盛になるかも知れないが、自由な野原と違つて狹まい籠の中のことだから、心から樂しいと云ふことはないからである。此の雉と同じことで、片足は不自由なやうだが、不具は不具なりに暮して行つて、兩足揃つた人の眞似をして無理な企などをしなくば、極めて氣樂なもので、そこ許が見てビツクリせられる程のことは少しもない。

語釋 介也（介は獨なり、刖刑（墨劓刖宮大辟とて五等の刑の一）に處せられて片足となつたこと。） ○天之生レ是使レ獨也（是は是の人卽ち己れを指して云ふ、獨は片足なり。） ○有レ與也（兩眼兩耳兩手兩足

甘く解けたので得意げにあたりを見廻し、餘り手際良くいつたので其の場を立ち退くのが惜しくて暫し躊躇ひ、心から滿足して愛刀を拭つて大切に仕舞つて置くのでありまする。」文惠君は此の話を聽き終つて云はれるには「誠に結構な話である。吾は庖丁の話を聞いて養生の道を悟り得たのである。」と申された。

語釋　族庖（族は雜なり、衆なり、ザラにある意。）　○折也（一説には骨を撃ち折る意。）　○十九年（十は凡て物の一段落を付ける數、それに數の極である九を加へて、時の久しきをあらはしたのである。德充符篇にも吾與夫子遊十九年矣とあり。）　○發二於硎一（硎は砥石なり、一説には硎は型の假借で鑄型である、鑄型から取り出し立ての意と解す。）　○至二於族一（族は筋骨聚る處とありて料理しにくい處なり。）　○視爲止（外の物を見ないで、そこばかりを注視すること。）　○行爲遲（手を徐に動かす意。）　○謋然（物の解ける貌。）　○如二土委一レ地（委は落なり、この一句は肉が骨から綺麗に切り離された樣を形容したのである。）　○善レ刀（善は拭ふ意。一説にはヨクスと訓み、手入れする意。）　○得二養生一（郭注によると「刀の養ふべきを以ての故に生も亦養ふべきを知れり」と云つて居る。つまり刀も無理をしない樣に使へば、十九年も使へる、そこから吾々の生命の養ひ方も自ら悟り得る。）

公文軒見二右師一而驚曰、是何人也。惡乎介也。天與、其人與。曰、天也、非レ人也。天之生レ是使レ獨也。人之貌有レ與也。以レ是知二其天也非一レ人也。澤雉十歩一啄、百歩一飮、不レ蘄レ畜二乎樊中一。神雖レ王、不レ善也。

訓讀　公文軒、右師を見て驚いて曰く、是れ何人ぞや。惡ぞ介せらる。天なるか、其れ人なるか。曰く、天なり、人に非ざるなり、天の是を生ず、獨なら使めしなり。人の貌は與する有るなり。是を以て其の天なり、人に非ざるなりを知る。澤雉は十歩に一啄し、百歩に一飮するも、樊中に畜はるゝを蘄めず。神は王すと雖も善しからざるなり

る。恢恢乎として其の刃を遊ばすに於て、必ず餘地あり。是を以て十九年にして刀刃は新に硎より發したるが若し。然りと雖も族に至る每に、吾其の爲し難きを見て、怵然として爲めに戒む。視ること爲めに止まり、行くこと爲めに遲く、刀を動かすこと甚だ微なり。謋然として已に解く。土の地に委するが如し。刀を提げて立ち、之が爲めに四顧し、之が爲に躊躇滿志し、刀を善うて之を藏むと。文惠君曰く、善い哉、吾、庖丁の言を聞きて、養生を得たりと。

通釋 良い料理人は一年ぐらいで刀を取り代へるのであつて、度々とは取り更へない。それは骨肉の筋道に循つて劃くからである。處が平凡な料理人になると一月每に刀を更へるのである。それは骨などに中て刀を折るからである。然るに私の持てる刀は使ひ出してから今日までゞ十九年の久しきになります。其の間に料理ました牛は數千頭になりますが、刀の刃は少しもコボレて居りませんで、マルデ砥石でとぎ立てのやうであります。なぜかと申すと、彼の牛の骨節と申すものには隙間が有りますが、刀の刃は薄くて殆んど厚さがありません。薄いものを以て隙間のある處へ入れますから、ひろ〴〵として、刀の刃を動かす場合に必ず十分餘裕があるのであります。ですから十九年も久しいのに刀の刃はマルデ研ぎ立てのやうであります。さうは申すものゝ筋骨の絡み合つて居る處にぶつかりますと、私はその料理にくいのを見まして、怵然と懼れて警戒を致します。卽ち視力をそこに集注し、手の運び方も遲くなり、刀を動かすことも甚だ微かになりますが、間もなくしてガバリと音を立てゝ肉と骨とが離れますが、それは丁度土がドサリと大地の上に落ちるやうであります。かくて私は料理刀を手にさげて立ち上がり、

から段々進んで來て、妙境に入つたのであると見る。）　○神欲（欲は貪欲の意ではない。直覺と云ふぐらいの意か。）　○依ニ乎天理一（理はスヂ、牛體の自然の組織を云ふ、依は下句の因と同意で牛體の自然の組織即ち骨や節のなりに循つて刀を運び、少しも無理をせぬこと。）　○批ニ大郤一（批は開なり、或云ふ擊なり、ウツと訓む。）　○導ニ大窾一（窾は空なり、骨節の間、自ら大空缺の處あるを云ふ。導は刀を骨節の空隙のまに〳〵導き運ぶ意。）　○技經ニ肯綮一之未レ嘗（技未三嘗經ニ肯綮一と云ふ句の倒裝形である。語勢を強めんが爲めに斯く書き代へたのである。）

良庖歲更レ刀。割也。族庖月更レ刀。折也。今臣之刀十九年矣。所レ解數千牛矣。而刀刃若ニ新發ニ於硎一。彼節者有レ閒。而刀刃者無レ厚。以レ無レ厚入レ有レ閒。恢恢乎其於レ遊レ刃、必有ニ餘地一矣。是以十九年而刀刃若ニ新發ニ於硎一。雖レ然、每レ至ニ於族一、吾見ニ其難一レ爲、怵然爲戒。視爲止、行爲遲、動レ刀甚微。謋然已解。如ニ土委一レ地。提レ刀而立、爲レ之四顧、爲レ之躊躇滿志、善レ刀而藏レ之。文惠君曰、善哉、吾聞ニ庖丁之言一、得ニ養生一焉。

訓讀　良庖は歲に刀を更ふ。割けばなり。族庖は月に刀を更ふ。折ればなり。今臣の刀は十九年。解く所數千牛而も刀刃は新に硎より發したるが若し。彼の節なる者は閒ありて、刀刃には厚さなし。厚さ無きを以て閒あるに入

は牛に非ざる者無し。三年の後未だ嘗て全牛を見ざるなり。今の時に方りては、臣、神を以て遇して、目を以て視ず。官知止まつて、神欲行はる。天理に依りて、大郤を批き、大窾を導き、其の固然に因る。技、肯綮を經るだも未だ嘗てせず。而るを況んや大軱をや。

通釋 庖丁は文惠君の賛辭を聞いて、ヤオラ牛刀を前に置きて申すには「君には、私が解牛の技を非常に御賛めになりまするが、私は牛を料理するに當つて、自然の道理を味ひ樂むのであつて、私の業は技巧より上に出て居ります。回顧しますれば私が初めて牛を料理出しました頃は、目にうつるのは丸の牛ばかりで、骨肉の筋目などは少しも見ることが出來ませんでした。處が三年程立ちますると、流石に經驗の功が顯はれましたものか、最早や丸の牛が目にうつらなくなりまして、たゞ刀を通す理間ばかりが目につく樣になりました。更に經驗を十分に積みました今日となつては、私は牛を料理するに靈感を以て取扱ふのでありまして、肉眼を以ては見ないのであります。卽ち耳目手足等の機官の知覺は止まつて仕舞つて、獨り精神作用が活動することになります。そして牛の筋肉に存する自然の理道に從つて、大郤とて骨と肉との交接して居る處にある隙間の處を切り開き、大窾とて骨節の隙間のある處に刀を導き入れ、凡て牛の筋肉骨節の固有の組織に順つて料理致します。私の技術は骨や肉の絡み合つた處に刀を觸れることさへも未だしたことがありません。まして大なる骨節などに刀を觸れたことは決してありません。

語釋 臣之所レ好者道也。進二乎技一矣（道は解牛の道なり。所好者道也とは解牛の悟道に入つて居る意。技は解牛の技巧を云ふ。進乎技とは解牛の道が遙に技巧の上に出て居ること。一說には此の二句を解して、此の悟道的熟味も、技巧

る。それから肉を解く際に牛刀から發するバリ〳〵ミリ〳〵と云ふ音は、皆音律に協つて居て、ホカデモナイあの帝堯のなした經首の音樂を聞くやうである。文惠君は此の有樣を見て云はれるには「あゝ實にアザヤカなものだ、技術と云ふものは是ほどまで上達することが出來るものか」と贊嘆せられた。

語釋　庖丁（料理の名人、名は丁。古は職業を以て名とすることあり、人間世篇に見ゆる匠石も亦同じ、大工の名、人名は石なり。）　○文惠君（孟子の會つた梁の惠王。）　○膝之所レ踦（踦は微曲なりとあり、膝を少しく曲げること。）　○砉然嚮然、奏レ刀騞然（砉嚮騞三字皆刀を用ひ牛を解く時の聲、此の句奏レ刀砉然嚮然騞然と書くべきを、句を整へる爲めに斯樣にしたのである。奏は進め用ふること。）　○合ニ於桑林之舞一（此の句は上の手之所觸以上の四句を形容して云ふ、故に普通の行文ならば膝之所踦の下に在るべきである、是れ亦整句の上から此處に在るのである。故に其の意を以て解せねばならぬ。）　○中ニ經首之會一（此の句は砉然嚮然以下の三句を形容したのである、經首は堯の咸池の樂の一章である、會は音の聚なりとて、合奏の意。）　○譆（嘻に同じ、喜んで歎ずる聲。）

庖丁釋レ刀對曰、臣之所レ好者道也。進ニ乎技一矣。始臣之解レ牛之時、所レ見無レ非レ牛者。三年之後、未ニ嘗見ニ全牛一也。方ニ今之時一、臣以レ神遇、而不ニ以レ目視一。官知止而神欲行。依ニ乎天理一、批ニ大郤一、導ニ大窾一、因ニ其固然一。技經肯綮之未レ嘗。而況大軱乎。

訓讀　庖丁、刀を釋て對へて曰く、臣の好む所の者は道なり。技よりも進めり。始め臣の牛を解くの時、見る所

循つて行くのを常道とする意。）

庖丁爲文惠君解牛。手之所觸、肩之所倚、足之所履、膝之所踦、砉然嚮然、奏刀騞然、莫不中音。合於桑林之舞、乃中經首之會。文惠君曰、譆善哉、技蓋至此乎。

訓讀 庖丁、文惠君の爲に牛を解く。手の觸るゝ所、肩の倚る所、足の履む所、膝の踦る所、砉然、嚮然、刀を奏する騞然、音に中らざる莫し。桑林の舞に合し、乃ち經首の會に中る。文惠君の曰く、譆、善い哉、技も蓋し此に至るかと。

大意 以下三節庖丁解牛の說話である、之をかりて養生の要旨を述ぶ。依乎天理、因其固然の二句が其の眼目であつて、自然の儘に循ひ、少しの無理さへもしなくば、刀刃新に硎より發したるが如く、吾々の生命も常に活潑々地たることが出來ると說く。

通釋 昔、庖丁と云ふ料理人が魏の文惠君と云ふ大名の爲めに牛を料理したことがある。其の時、庖丁の身體のコナシ方は頗るアザヤカであつて、先づ牛に對して手の觸れ工合と云ひ、肩のもたれ方と云ひ、足で履む工合と云ひ、膝の曲げ方と云ひ、何んとも云ひ樣のない妙味があつて、マルデ昔し殷の湯王のなした桑林の舞そつくりであ

訓讀　吾が生や涯あり、而して知や涯無し。涯あるを以て、涯なきに隨ふ、殆き已。已にして知をなす者は殆きのみ。善を爲すも名に近づく無く、惡を爲すも刑に近づく無く、督に緣りて以て經と爲さば、以て身を保つべく、以て生を全うすべく、以て親を養ふべく、以て年を盡くすべし。

大意　知慾に從ふは危し、中道によるべきを說く。中道とは下文庖丁解牛の說話にあるが如く依二乎天理一因二其固然一、卽ち知慾から超越して自然に循ふの意である。

通釋　吾々の生命には限りがあるが、理知と慾望には限りがない。だから有限の生命を以て、限りなく延びて行く知と慾との後を追つかけることは、極めて危險である。極めて危險であることを知りながら仍ほ外物に對して知慾を働かすことは此の上もない危險なことである。善いことをしても名譽を得る程の善事をすること無く、惡いことをしても刑罰にふれるが如き大なる罪惡を犯すことなく、中庸に順つて行くことを自から常道としたならば、獨り肉體を無事に保つことが出來るのみならず、又精神生活を完全に營むことが出來、大切な父母に孝養することを得、果ては天壽を全うすることが出來るのである。

語釋　知也無レ涯（知字に慾字を含めて解せよ。）　○殆已（殆は危に同じ、已は此のこと以外に何もなき意、卽ち危いばかりで外のことなし。）　○已而爲レ知（含文である、其の殆を知り、而も猶ほ知を爲すと言はんが如し、莊子獨得の句法である。爲レ知とは知を事とすることで、外界の事物に對して色々と知慧を働かして名利を得んとすることを云ふ。）　○爲レ善無レ近レ名、爲レ惡無レ近レ刑（出る杭は波に打たれる、平凡な行爲が一等よい。既に善とか惡とか名の附くは出過ぎた行であるが、若し斯かる行爲をしても人の目に立たぬ程度のものでありたい。況んや名譽に近づく程の善を爲すはもとより不可である。爲惡の一句、誤解してはならぬ、決して莊子が惡を爲すことを是認したのではない、人は弱きものだから時に惡を爲し易し、然し過つて惡をなすも刑罰にふれる程の大惡をせぬやう氣をつくべきを云へるなり。）　○緣レ督以爲レ經（身體の中央に在つて上下に通つて居る脈を督と云ふ、又着物の背中の縫目を督と云ふ、轉じて中正中庸の意となる。緣は循なり。經は常道の意。衆事衆物に應ずる時中正の態度に

内篇　養生主第三

叙説　此の篇は内篇逍遥遊第一、齊物論第二の次にあるから第三と云ふ。生を養ふの主道を說くが故に養生主と名づく。生とは肉體と精神を兼ねて云ふ。卽ち全生命の意であつて、本文に身を保ち、生を全うし、親を養ひ、年を盡すと云つて居る所から推して之を知ることが出來る。故に養生とは後世の所謂養生、卽ち肉體を靜養するの意ではない。一說には生主を養ふと解す。生主とは吾々の肉體の主人公卽ち精神である。此の說必ずしも不通の說ではないが、本文に文惠君が吾聞庖丁之言得養生焉と云つて居る所から見ると生主を養ふと解するは如何かと思ふ。それは兎も角として吾々の眞生命を養ふの道は如何。請ふ下文に就いて之を識るべし。就中庖丁解牛の章、最も味あり。

吾生也有涯、而知也無涯。以有涯隨無涯、殆已。已而爲知者、殆而已矣。爲善無近名、爲惡無近刑、緣督以爲經、可以保身、可以全生、可以養親、可以盡年。

非の辨、彼我の分あらんや。

語釋 栩栩（口義に「蝶のとぶ貌」とあり。即ちヒラ〳〵と飛ぶ樣。）○自喩適レ志與（喩は愉と通ず。與は哉に同じ。口義に「自喩とは自樂なり。適志とは快意なり、言ふ心は夢中胡蝶たる快意に勝へず。復た我あるを知らず」）○遽々然（兎谷曰く「驚き覺むるの貌。」口義には「僵直の貌、此れ既に覺めて床に在る時を形容す。」とあり、亦通ず。）○不レ知周之夢爲二胡蝶一與云云（是非の辨は夢中の見であつて容易に定め得べきものに非ざるを寓す。即ち是が非なるか非が是なるか誰かよく之を定んとの意なり。）○周與二胡蝶一則必有レ分矣、此之謂二物化一（是非の分は物の變化相、道の源頭に立てば是もなく非もなしとの意。）

俄然として覺むれば蘧蘧然として周なり。知らず、周の夢に胡蝶と爲るか、胡蝶の夢に周と爲るか。周と胡蝶とは、則ち必ず分あり。此れを之れ物化と謂ふ。

大意 此の一段は上に夢を說く處より生れ來る。元來是非の辨、彼我の分は現象界の假りの相であつて、道の本源より見れば萬物一體萬株一如であつて、是非もなく、彼我もなしと說く。

林希逸曰く「此の篇、物論を齊うするを主とす。末後に却つて兩個の譬喩を撰出すること此くの如し。其の文はなはだ奇なり、其の意また奧妙なり。人能く此を悟らば、また何の是非をか爭ふべき。卽ち所謂死生も已に變なく、而るを況んや利害の端をやと云ふ意なり。首尾照應、斷つが如くにして復た連なる、相因るが若くにして相續かず。全く是れ一片の文字、筆勢此くの如く起伏せり。讀者讀み得て透徹せば自から無窮の味あらん。」

通釋 嘗て我れ莊周は夢に胡蝶となつた。ひら〳〵と飛び舞つて全く胡蝶になつて居た。それが如何にも樂しくて愉快に勝へず、自分が莊周であると云ふやうなことには少しも氣がつかなかつた。然しフト目が覺めて見ると、キヨロ〳〵と目を覺まして驚いて居る莊周であつた。扨て此の覺夢の一事をよく考へて見るに、元來が莊周であるのが夢に胡蝶となつたのか、それとも元來が胡蝶であるのが、夢に莊周となつて居るのか、覺夢何れが眞であるのか俺には一向分からぬ。然しそれがどうあらうとも、現實の相から云へば、莊周は莊周、胡蝶は胡蝶で、二者の間にハツキリした區別があつて、之をば萬物の變化相、卽ち現象界に於ける假りの相と謂ふ。世の衆愚は此の假りの相に拘泥して是非彼我の分を立て論爭是れ事とす。哲人より大觀すれば、萬物一形、萬形一化、萬化一神、何ぞ是

影が答へて曰く「俺は自分の思ふがまゝに動くことは出來なくて、俺の主なる形と云ふものに從つて始めて行動するのであるらしい。然し俺がたよりにして居る形と云ふものも亦自分の思ふがまゝに動くことは出來ないで、他に待つものあつて(造化眞宰)行止坐起するものらしい。俺が形を待つて動くは丁度蛇の腹のウロコや蜩の翼がそれぐ\主體の命令を待つて始めて動くことが出來ると同樣ではあるまいか。かく俺の行動は俺の自由にゆかぬから、何うして先きに行坐し今止起して居るのか、そんなことはトテモ俺には分からぬ。且つ汝の如きもかゝることに心知を勞することなく、一切を不問に附し之を自然に任かせて可なりであるぞ。」

語釋　罔兩(堯谷曰く「崔本に罔㒳に作る、前節の罔兩と音同じ、而して義も亦相通ず。林氏以て影邊の淡薄なる者となすは蓋し之を得たり。」)　○吾有待而然者邪云々(口義に「影の動いて待つ所の者は形なり、我れ形を待つと雖も、形も又待つ所の者あり、是れ造物を待つなり。待字は前節の待字より生じ來る。)　○蛇蚹(蚹は蛇の下腹にあるウロコ、蛇は之を以て行止す。)　○惡識所以然云云(然字は上の然字より來る。堯谷曰く「吾復た安んぞ其きの行く所以、坐する所以を知らんや、又安んぞ今の止りて行かざる所以、起つて坐せざる(原文坐而不起とあるは誤倒)所以を知らんや。」兩路より檢討するは莊子の慣手段にして然不然とは上の行止坐起を指す。)

昔者莊周夢爲胡蝶。栩栩然胡蝶也。自喩適志與、不知周也。俄然覺、則蘧蘧然周也。不知周之夢爲胡蝶與。胡蝶之夢爲周與。周與胡蝶、則必有分矣。此之謂物化。

訓讀　昔は莊周夢に胡蝶と爲る。栩栩然として胡蝶なり。自ら喩んで志に適するかな、周たるを知らざるなり。

振ニ於無竟ニ（口義に「此の振字は便ち是れ逍遙の意」とあり。竟一に境に作る。覺谷曰く「無境」とは是非の界限なきを謂ふ。」即ち是非の相對を超越せる絶對地に安住するなり。）

罔兩問レ景曰、曩子行、今子止。曩子坐、今子起。何其無ニ特操一與。景曰、吾有レ待而然者邪、吾所レ待、又有レ待而然者邪。吾待ニ蛇蚹蜩翼一邪。惡識レ所ニ以然一。惡識レ所ニ以不一レ然。

訓讀 罔兩、景に問うて曰く、曩に子行き、今は子止まる。曩に子坐し今は子起つ。何ぞ其れ特操なきやと。景曰く、吾は待つありて然る者か、吾が待つ所も又待つ有りて然る者か。吾が待つは蛇の蚹、蜩の翼か。惡んぞ然る所以を識らん。惡んぞ然らざる所以を識らん。

大意 萬物皆造化眞宰の支配を受く、其の間に在りて眇たる影の如き人間が獨り是非然不然の爭をなすの愚なるを說き、篇首に眞宰あるが如しとか、怒す者は誰ぞやと謂へるに應じて之を結ぶ。陸樹芝曰く「影の說を設け爲して人身の天地間に在る亦一の無形的影子の如きに喩ふ。即ち行止坐起倶に身の能く自ら主とする所に非ず。其の然不然を定むる能はず、又何ぞ物の是非を論ぜん。」

通釋 影の外邊の薄い影である罔兩が影に向うて曰く「貴公はさき程は歩み行けるが、今は止まつて居る。又さき程は坐つて居たが、今は起つて居る。貴公は何故そんなに獨立の操守なく始終物にばかり依つて行動するのだ。」

ぬ。又吾々と同意見のものであつたならば、此れも一理、彼れも一理と其の何ちらにも贊成して、トテモ正しい判定は出來ぬ。して見れば我と汝と第三者たる人とは終に共に其の是非を知ることが出來ぬ。そして此の上は彼の誰を待ちて是非を定めしめんとするか、そはたゞ自然に任かすより外はないであらう。斯くの如く是とか非とかと變化多樣なる物論の對立は、それが如何程相對立すればとて、終に其の是非を定め得るものなしとせば、結局其の初めから對立しないと同樣で、世の中にこれ程愚かなことはない。かるが故に大聖は是非の辯を齊うするに無心喪我と云ふ絶對的立場を以てし、大自由無拘束の態度を以て物論に因り順つて參る。是れが優游天壽を卒うる所以である。なほ之を和するに天倪を以てすると云ふ意味はどうかと云ふに、凡て一方に是あれば他方に不是あり、一方に然があれば他方に不然がある。されば是が若し果して眞に是ならば不是と異なる所あるべきは固より議論する要なく、又然が若し果して眞に然ならば不然と異なる所あるべきは固より議論する要がない。かるが故に哲人はかゝる相對論に捉はれないで、時間も理論も超越して死生是非の限界を脫御せる境地に逍遙して居る。されば哲人は是非の物論はもとより凡ての物を無差別平等の地に寄せて、自から之を齊うす。以上述べ來つた聖人の態度こそ實に物論を齊うする所以である。」

語釋 黮闇（正義に「黮は黒甚なり。闇は暗なり。」即ちマックラヤミで是非の識別がつかぬ。） ○待レ彼也邪（因に「此の外更に何の待つ所あらん、惟だ天あるのみ。」誰も是非の決定をして與れぬ。） ○化聲之相待（正義に、「是非の辯を化聲と爲す」と。此の說是なり。諸解あれども皆取らず。） ○和レ之以二天倪一、因レ之以二曼衍一（之字は化聲を指す。和は齊なり、天倪とは陸樹芝は端倪のまだ露はれざる者と解す、即ち造化混沌の初。下文によりて解すれば是非の限界を脫御せる心境、即ち無心喪我の境地を云ふ。因は順なり、曼衍は無窮なり。逍遙遊第一に無窮に遊ぶとある意。即ち束縛なき自由の境地を云ふ。） ○忘レ年忘レ義（陸注に「年を忘るゝ時は死生を一條となす。義を忘るゝ時は可不可を一貫となす」とあり。） ○

と若とに同じ、悪んぞ能く之を正さん。然らば則ち我と若と人と、倶に相知ること能はず、而して彼を待たんや。化聲の相待つは、其の相待たざるが若し。之を和するに天倪を以てし、之に因るに曼衍を以てす。年を窮むる所以なり。何をか之を和するに、天倪を以てすと謂ふ。曰く、是と不是と、然と不然とあり。是若し果して是ならば、則ち是の不是に異なるや、亦辯なし。然若し果して然ならば、則ち然の不然に異なるや亦辯なし。年を忘れ、義を忘れて、無竟に振ふ。故に諸を無竟に寓す。

大意　是非終に定むべからず。故に聖人は無我の絶對境に遊んで、自から之を齊うすと說く。

通釋　是非の辨は要するに夢中の見に過ぎずして、決して之を斷定することは出來ぬ。試みに我と汝と論辯せんに、汝が勝つて我が負けた場合には、果して汝が是で我が非であらうか。又我が勝つて汝が負けた場合には、果して我が是で汝が非であらうか。是れは共に容易に定められぬ。卽ち其のどちらかゞ是で、どちらかゞ非であるかも知れぬし、或は又雙方ともに是であるか、共に非であるかも知れぬが、是れは我も汝も共に知ることは出來ぬし、又大聖ならぬ第三者が聽いた所で、勿論眞くらやみで少しも解るものでない。して見れば吾々の議論の是非を誰にも決定させることは出來ぬ。假りに汝と同意見のものに定めさせるとしたならば、旣に汝と同意見である以上は汝と似たりよつたりの意見を述べるに過ぎなくてトテモ正しい決定が出來るものでない。又我と同意見のものに定めさせて見てもそれと同じことで正しい判定は出來ぬ。それから又吾々と意見の異つたものに批判させて見ても、旣に吾々と意見が異つて居る以上は其のどちらにも就かずして愈々議論が分れるばかりで、決して正しい批判は出來

既與若同矣、惡能正之。使同乎我者正之、既同乎我矣、惡能正之。使異乎我與若者正之、既異乎我與若矣、惡能正之。使同乎我與若者正之、既同乎我與若矣、惡能正之。然則我與若與人俱不能相知也、而待彼也邪。化聲之相待、若其不相待。和之以天倪、因之以曼衍。所以窮年也。何謂和之以天倪。曰、是不是、然不然。是若果是也、則是之異乎不是也亦無辯。然若果然也、則然之異乎不然也亦無辯。忘年忘義、振於無竟。故寓諸無竟。

訓讀 既に我と若とをして辯ぜしめんに、若、我に勝ちて、我、若に勝たざれば、若果して是にして、我果して非なるか。我、若に勝ちて、若、我に勝たざれば、我果して是にして、而果して非なるか。其れ或は是にして、其れ或は非なるか。其れ倶に是にして、其れ倶に非なるか。我と若と相知ること能はざれば、則ち人固より其の黮闇を受けん。吾れ誰にか之を正さしめん。若に同じき者をして之を正さしめば、既に若と同じ、惡んぞ能く之を正さん。我に同じき者をして之を正さしめば、既に我に同じ、惡んぞ能く之を正さん。我と若とに異なる者をして之を正さしめば、既に我と若とに異なる、惡んぞ能く之を正さん。我と若とに同じき者をして之を正さしめば、既に我

如何にも奇怪千萬のやうに思はれるが、決して然うではない。大聖の人に遇つたならば其の中に至極の道理が含まれて居ることがわかる。然し其の解のわかる大聖には容易に遇ひ難いのであつて、萬世の後にでも一たび遇ふことが出來たならば朝あつて又暮にも遇ふことが出來たと看做される程遇ひ難いのである。從つて人生は一場の夢たることを悟るものが殆んど無いわけである。

語釋 弱喪而不知歸者（口義に「喪は郷里を去るなり、弱喪とは弱年にして其の郷を去るなり。」）○王所（釋文に崔云ふ「六國の時、諸侯僭して王と稱す。此に因つて獻公を謂つて王と爲すなり。」）○筐牀（釋文に司馬云ふ「安牀なり。」）○竊々然云云（口義に小見の貌とあり、小ざかしきこと。林西仲曰く「君乎牧乎とは貴を分ち賤を分つなり。牧とは牧圉なり。此れ即ち上文に隸を以て相尊ぶの意。」）○固哉（或は下の丘也に冠す。是に非ず。）○是其言也、其名爲弔詭（口義に「弔は至なり、詭は怪なり。我れ此の言を爲す。至怪と謂ふべし。然れども至怪の中、實に至妙の理を存す。」）○萬世之後云云（林西仲曰く「萬世の遇、旦暮の若く然り、其の解を知るものゝ少きを言ふなり。其の解を知る大聖人は容易に世に出づるものでなく、萬世に一度遇ふことが出來ても、それは朝遇つて又暮にも遇ふことが出來きたと看做される程遇ひ難い。即ち其の出づること極めて稀なるを云ふ。韓非子の難勢篇に堯舜桀紂は千世にして一出するも、是れ比肩隨踵して生るゝなりとあるに文意同じく、稀に出づることを巧に形容せるなり。）

既使我與若辯矣、若勝我、我不若勝、若果是也、我果非也邪。我勝若、若不吾勝、我果是也、而果非也邪。其或是也、其或非也邪。其俱是也、其俱非也邪。我與若不能相知也、則人固受其黮闇。吾誰使正之。使同乎若者正之、

通釋 予は更に說をすゝめて、何故に聖人はかくの如く無差別平等觀を取つて居るかと云ふことを汝に妄言して見たいと思ふ。そもく人が一等悲喜の感情を持ち易いのは生死問題に對してゞあるが、然し此の生を悅ぶのは實際は迷かも知れず、死を惡むのは恰も弱年にして鄕關を出で、長く他鄕に留つて居た爲めに遂に故鄕に歸ることを忘れるのと同じことかも知れぬ。かの美人の麗姬はもと艾と云ふ土地の境守の娘であつた。彼女が始めて晉に連られて行つたときは、悲しんで襟のぬれる程泣いたが、やがて御所に入り、獻公の夫人となつて、一緒に樂な寢臺に臥し、甘い御馳走を食るやうになつてからは、先きに泣いたことを後悔したと云ふことだが、これと同じく死者も生前中に少しでも長生きしたいと望んだことを後悔して居るかも知れぬ。されば生も悅ぶに足らず、死も惡むに足らず、聖人より觀れば、人生もと一場の夢に過ぎぬ。夢に酒を飮んで喜んだ者が、朝になつて泣き悲しむことがあるし、其の反對に夢で泣き悲しんだ者が、朝になつて喜んで獵に出かけることもある。夢を見て居る間はそれが夢であるとは氣づかず、夢の中で又其の夢の吉凶を占ひ樂しんだり心配したりして居るが、夢が覺めてからやつとそれが皆夢であつたことに氣がつく。扨てそれと同じことで、人は大悟徹底して始めて世は一つの大きな夢に過ぎないことを知るであらう。然るに愚者は自ら迷いながら覺めたつもりで、小賢しく之が殿樣で之が牛飼だなどゝ貴賤尊卑の別を立てゝ、知慧者ぶつて居るのは誠に固陋なことだ。先き程汝が孔子は孟浪の言だと云ふが俺は妙道の行だと思ふなどゝ得意がつて申したが、その孔子と云ひ汝と云ひ共に皆大きな夢を見て居るのだ。それぱかりでない、予が今汝を夢を見て居るのだと云ふのも亦夢であつて本當に覺めたものではない。かく凡てを夢だと說くと

者、旦而哭泣、夢哭泣者、旦而田獵。方其夢也、不知其夢也。夢之中又占其夢焉、覺而後知其夢也。且有大覺而後知此其大夢也。而愚者自以爲覺、竊竊然知之君乎牧乎。固哉。丘也與女皆夢也。予謂女夢亦夢也。是其言也、其名爲弔詭。萬世之後而一遇大聖知其解者、是旦暮遇之也。

訓讀 予惡ぞ、生を說ぶの、惑に非ざるを知らんや。予惡ぞ死を惡むの弱喪して歸るを知らざる者に非ざるを知らんや。麗の姬は艾の封人の子なり。晉國の始めて之を得るや、涕泣して襟を沾せり。其の王所に至り、王と筐牀を同じくし、芻豢を食ふに及んで、而る後其の泣きしを悔いたり。予惡ぞ夫の死者の其始めの生を蘄めしを悔いざるを知らんや。夢に酒を飲む者、旦にして哭泣し、夢に哭泣する者、旦にして田獵す。其の夢みるに方りてや、其の夢なるを知らざるなり。夢の中に又其の夢を占ひ、覺めて後に其の夢なりしを知るなり。且大覺ありて而る後に此れ其の大夢なるを知るなり。而るに愚者は自ら以て覺めたりと爲し、竊竊然として之が君か牧かを知る。固なる哉。丘や女と皆夢みるなり。予、女を夢みると謂ふも亦た夢なり。是れ其の言や、其の名を弔詭と爲す。萬世の後にして一たび大聖の其解を知るものに遇はば、是れ旦暮に之に遇ふなり。

大意 聖人が是非好惡の別を立てぬ所以は人生が一場の夢たるに過ぎぬ爲めであることを說く。

らに心智を使役するが、聖人は不知を以て知となすが故に外觀愚鈍の如くに見えて、而も萬古の長きに亙りて不易不變、專ら純眞の天德を保つて失ふことがない。而して此の天德を保有することは、獨り聖人ばかりでない。萬物盡く然りである。故に聖人は等しく之を包容し相互の間に是非優劣の別を設くることがない。以上が先づ聖人の境界に就いての妄言であるぞ。

語釋 聽熒（林西仲曰く「熒は猶ほ惑の如きなり、言ふ心は此の道は知り難し、即ち黃帝之を聽くも猶ほ惑ふなり。」） ○丘也（孔丘の丘なり。釋文に崔云ふ、「長梧子名は丘」と。取らず。） ○時夜（司夜なり。大宗師第六にも見ゆ。） ○妄言（成疏に「夫れ至理は言ふなし、言へば則ち孟浪、我試みに汝の爲めに妄說せん、汝亦妄聽かば何如。」或は孔子が孟浪と云へるに對して皮肉りて妄言と云ふと解するも可。） ○奚（何如なり、或は下の句に冠するものあり、是に非ず。） ○爲其脗合（釋文に向云ふ、「兩脣の相合するが若し」と。萬物を一體となす意。） ○置其滑涽以隸相尊（口義に「滑は汨々なり、涽は昏昧なり、人世汨々涽々として隸を以て相尊ぶ者は皆之を置て言はず。士は大夫を尊ぶ。大夫は士を以て隸となす。大夫は卿を尊ぶ。卿は又大夫を以て隸となす。推して之を上ぐれば彼此皆隸なり。而して却つて自ら尊卑を爲す。」要谷も曰く「世間紛紜、隸を以て相尊ぶ等の事は之を置いて論ずるなくして可なり。」或は滑涽にて句す、從はず。） ○役々（郭注に「是非の境に馳騖するなり。」要するに心智を勞すること。上文にも見ゆ。） ○愚芚（釋文に司馬云ふ「芚とは渾沌として分察せざるなり」と。ボンヤリして居ること。） ○一成純（一は專なり。德充符第五に獨成其天とあるに同じ。）

予惡乎知說生之非惑邪。予惡乎知惡死之非弱喪而不知歸者邪。麗之姬、艾封人之子也。晉國之始得之也、涕泣沾襟。及其至於王所、與王同筐牀、食芻豢、而後悔其泣也。予惡乎知夫死者不悔其始之蘄生乎。夢飲酒

宙、爲其脗合、置其滑涽、以隸相尊。衆人役役。聖人愚芚。參萬歲而一成純。萬物盡然。而以是相蘊。

訓讀 長梧子曰く、是れ黃帝も聽きて熒ふ所なり。而るを丘や何ぞ以て之を知るに足らん。且女も亦太だ早計なり。卵を見て時夜を求め、彈を見て鴞炙を求む。予嘗みに女が爲に之を妄言せん。女以て之を妄聽せば、奚。日月に旁ひ、宇宙を挾み、其の脗合を爲し、其の滑涽にして隸を以て相尊ぶことを置く。衆人は役役たり。聖人は愚芚たり。萬歲に參し、一にして純を成す。萬物盡く然り。而して是を以て相蘊む。

大意 長梧子が聖人は萬物を一體とし、是非を設けぬと答ふ。

通釋 長梧子答へて曰く「かくの如き聖人の境界は黃帝の如き明知の人でも聽いて惑ふ所である。然るに孔丘の如きが何うして解る筈があらうか。且つ汝がそれが妙道の行だなどゝ速斷するのも甚だ早まつたことだ。其の早まりさ加減を譬へて見れば、鷄の卵を見て、それに夜の時を告ぐることを求め、彈を見て、それに小鳩の炙燒を求めるやうなものだ。要するに聖人の境界は容易に述べることの出來るものでないが、自分は試みに汝の爲めに出たら目に云つて見ようから汝も宜いかげんに聽いて置いたら何うだ。さて聖人と云ふものは其の人格の光は日月と相並び、包容力大にして無限の宇宙を小脇にかゝへ、萬物を一體となし物の間に少しの差別を認むることなく、世の人々が道理に暗くて互に人を隸屬視して尊大ぶるが如きは凡て措いて論じない。凡俗の輩は世事にかゝはりて徒

以て孟浪の言と爲し、而して我は以て妙道の行と爲すなり。吾子は以て奚若と爲すと。

大意 瞿鵲子が聖人の道を長梧子に問ふ。

通釋 瞿鵲子と云へる人あり、其の友長梧子に問うて曰く「吾は次ぎの如き話を孔夫子から聞いた。即ち聖人と云ふものは俗世間の務に從事せず、利に就くことも、害を避けることもなく、世人が己を求め用ふるからとて喜ぶことなく、ことさらに道に緣り從つて行ふと云ふやうなことなく、沈默せる時はそれが自ら不言の言となつて大なる敎を說いて居ることになり、口を開く時は無心にして言を發するが故にわざ〳〵言ふと云ふやうな跡方がなく、常に俗世間の外に逍遙遊して居るとのことである。孔子の話はこれ丈であつて而も孔子自身はかゝる聖人に關する說明は出たら目の法螺であるとして居る。然し私はそれが本當に妙道を會得した聖人の行であると思つて居るが、足下はどう思はれるか。」

語釋 夫子（口義に孔子とある、是なり。成疏には瞿鵲は是れ長梧の弟子、故に師を謂つて夫子と爲すとあるも從はず。兪樾に詳說あるも省く。）○不就利不違害（口義に「就くことあり、違くることとあるは、是れ利害あるを知ればなり、利害を知らずんば何の就違か之れあらん。」）○不緣道（又云ふ「道を行ふの跡なし。」）○無謂有謂（又云ふ「不言の言なり。」）○有謂無謂（又云ふ「言つて言はず。」）○孟浪之言（又云ふ「著實ならざるなり。」釋文に「向云ふ孟浪は、濶舍する所なきの譚と、崔云ふ精要あらざるの貌と。」要するに眞面目を缺いた、定見もなき言なり。）○奚若（何如なり。）

長梧子曰、是黃帝之所聽熒也。而丘也何足以知之。且女亦太早計。見卵而求時夜、見彈而求鴞炙。予嘗爲女妄言之。女以妄聽之奚。旁日月、挾宇

謂はれる以上、利害損得と云ふことも自ら念頭に置いて居られぬでしやうか。そして至人と云ふやうな人も矢張利害を超越して居るものでせうか。」王倪答へて曰く「至人は神妙不思議なもので、俗人とは境界が丸で違ふ。草木の茂れる大澤が焚けても熱することは出來ず、黃河や漢水の如き大河が氷結しても、寒えさせることは出來ず、迅雷が山を劈き、烈風が海を振ひ動かすことがあつても、至人を驚かすことは出來ない。かゝる境界な人は雲氣に乘じ、日月に騎りて、此の世の外に自由に遊び廻つて居る。至人はかゝる神變不思議なものであるから、死生の如きも其の心を變動すること能はず、況んや區々たる利害の如き固より念頭に置いて居ない。」

語釋 子不レ知ニ利害ニ(上の是非の辨を知らざる意を受けて此の如く云へるなり、即ち是非の判る所、利害之に生ず、子既に是非を辨ぜずと謂へば亦利害を知らざるかとなり。)○大澤焚而不レ能レ熱云云(以下此句は莊子が好んで至人神人の境地を形容するの常套語、既に逍遙遊第一に見え、又大宗師第六にも見ゆ。)

瞿鵲子問ニ乎長梧子ニ曰、吾聞ニ諸夫子ニ、聖人不レ從ニ事於務ニ、不レ就レ利、不レ違レ害、不レ喜レ求、不レ緣レ道、無レ謂有レ謂、有レ謂無レ謂、而遊ニ乎塵垢之外ニ。夫子以爲ニ孟浪之言ト、而我以爲ニ妙道之行ト也。吾子以爲ニ奚若ト。

訓讀 瞿鵲子、長梧子に問うて曰く、吾れ諸を夫子に聞く、聖人は務に從事せず、利に就かず、害を違らず、求むるを喜ばず、道に緣らず、謂ふこと無きも謂ふ有り、謂ふこと有るも謂ふ無くして、塵垢の外に遊ぶと。夫子は

とは出來ぬ。以上の如く凡ての物は各〻其の好惡是非を異にするものであると云ふことを考へて觀ると、人の仁義とか是非とか云ふやうなことも、其の限界や區別がごた〳〵と入り亂れて、トテも辨別のつくものでない。」

語釋 腰疾（リユウマチスや中風などを云ふ。）○偏死（半身不隨。）○惴慄恂懼（皆安んぜずして恐るゝ意。）○芻豢（芻は草を食ふ動物、牛羊の類、豢は穀を食ふもの、犬豕の屬。）○食レ薦（薦は草なり。）○蝍蛆甘レ帶（蜈蚣、ムカデ。帶は蛇のこと。）○猨猵狚以爲レ雌（正義に「猵狚は猨の別類、其の雌は喜んで猨と交る」と釋文に崔云ふ「猵狚は一名猵牂、其の雄は喜んで猨の雌と牝牡となる」）○毛嬙（越王の愛妾。）○麗姫（麗は驪と通ず、晉の獻公の寵姫。）○決驟（決起して驟走するなり。）○樊然殽亂（紛然として錯雜するなり。）

齧缺曰、子不レ知二利害一、則至人固不レ知二利害一乎。王倪曰、至人神矣。大澤焚而不レ能レ熱。河漢沍而不レ能レ寒、疾雷破レ山、風振レ海而不レ能レ驚。若レ然者、乘二雲氣一騎二日月一、而遊二乎四海之外一。死生無レ變二於己一、而況利害之端乎。

訓讀 齧缺曰く、子は利害を知らず、則ち至人は固より利害を知らざるかと。王倪曰く、至人は神なり。大澤焚くれども熱する能はず。河漢沍れども寒する能はず、疾雷山を破り、風、海を振へども驚かす能はず。然るが若きものは、雲氣に乘り、日月に騎りて、四海の外に游ぶ。死生も己を變ずるなし、而るを況んや利害の端をやと。

大意 是れ得失を超越せる至人の境界を說く。

通釋 そこで齧缺が問うて曰ふには「凡そ是非が分れて利害が生ずるものであるが、先生は既に是非を辨せずと

す。猨猴は然るか。三者孰れか正處を知らん。民は芻豢を食ひ、麋鹿は薦を食ひ、蝍且は帶を甘しとし、鴟鴉は鼠を耆む。四者孰れか正味を知らん。猨は猵狙以て雌と爲し、麋は鹿と交り、鰌は魚と游ぶ。毛嬙麗姫は人の美とする所なり、魚は之を見て深く入り、鳥は之を見て高く飛び、麋鹿は之を見て、決驟す。四者孰れか天下の正色を知らんや。我よりして之を觀れば、仁義の端、是非の塗は、樊然として殽亂す。吾れ惡んぞ能く其の辯を知らんと。

大意 仁義是非の一定すべからざるを說く。

通釋 さて試みに汝に問はんに、今、人が濕氣の多い土地に寢て居たならば、腰の疾に罹つて半身不隨となるであらうが、鰌は果して然うなるかどうか。固より然うはならぬのである。又人は木の上に處ればぶる〱と慄へてこはがるが、猿は果して然うなるかどうか。固より然うはならぬのである。されば此の人と鰌と猿との居處は各〻彼等に取つて正しい居處であつて、客觀的の見地からどれが一等正しい居處であるなどゝ云ふことはトテも定められるものでない。又食物に就いて見ても同樣である。卽ち人は牛や豚を食ふが、鹿の類は草を食ひ、ムカデは蛇を好んで食ひ、鴟や鴉は鼠を喜んで食ふのである。これもそれ〲の天性であつて、四者の中どれが最も正しい味であることを定められるものでない。又色情に就いても同樣である。猨は人から見れば醜い猵狙と云ふ猿は之を雌となし、麋は鹿と交尾し、鰌は魚とつれそうて遊ぶ。美人として有名な毛嬙や驪姫は人間から見れば美しいが、魚が之を見たならば恐れて深く水中にもぐり込み、鳥が見たならば驚いて高く飛び去り、鹿が見たならば思ひ切り逃げ走るであらう。さればこの猨と鹿と魚と美人の四者は果して何れが天下に於ける眞正な美色であるかは定めるこ

ふには「それも知らんよ、俺は何にも知らんよ。だが折角御前が尋ねるのだから、試に少しく言つて見よう。一體物事は見方次第、立場次第のものであつて、見方が違ひ立場が異なると自ら違つて來るもので、絶對不變の是もなく非もないのである。例へば今俺が何もかも知らぬと答へたが、俺が知つて居ると謂つても、それが知らぬことであるかも知れぬし、又知らぬと謂つてもそれが知つて居ることかも知れぬ。

語釋 齧缺問乎王倪（成疏に「齧缺は許由の師にして、王倪の弟子、並に堯の時の賢人なり」應帝王第七にも、齧缺問於王倪、四問而四不知とあり。共に隱者であつて其の傳知るべからず。）○嘗試（嘗は試なり、二字にてコヽロミと訓む。重言なり。）○庸詎（二字にてナンゾと訓む。亦重言なり。大宗師第六にも庸詎知吾所謂天之非人乎、所謂之非天乎とあり句法相似たり。）

且吾嘗試問乎汝。民溼寢則腰疾偏死。鰌然乎哉。木處則惴慄恂懼。猨猴然乎哉。三者孰知正處。民食芻豢、麋鹿食薦、蝍蛆甘帶、鴟鴉耆鼠。四者孰知正味。猨猵狙以爲雌、麋與鹿交、鰌與魚游。毛嬙麗姬、人之所美也、魚見之深入、鳥見之高飛、麋鹿見之決驟。四者孰知天下之正色哉。自我觀之、仁義之端、是非之塗、樊然殽亂。吾惡能知其辯。

訓讀 且つ吾れ嘗試みに汝に問はん。民、溼寢すれば、則ち腰疾偏死す。鰌は然るか。木處すれば、則ち惴慄恂懼

釋に詳なり。）

齧缺問乎王倪曰、子知物之所同是乎。曰、吾惡乎知之。子知子之所不知邪。曰、吾惡乎知之。然則物無知邪。曰、吾惡乎知之。雖然、嘗試言之。庸詎知吾所謂知之非不知邪。庸詎知吾所謂不知之非知邪。

訓讀 齧缺王倪に問うて曰く、子は物の同じく是とする所を知るかと。曰く、吾惡んぞ之を知らん。子は子の知らざる所を知れりやと。曰く、吾惡んぞ之を知らん。然らば則ち物知るべき無きやと。曰く、吾惡んぞ之を知らん。然りと雖も嘗試に之を言はん。庸詎ぞ吾が所謂知るの知らざるに非ざるを知らんや。庸詎ぞ吾が所謂知らざるの知るに非ざるを知らんや。

大意 齧缺王倪の問答にかりて因是の思想を明かにす。

通釋 昔、齧缺と云ふ隱者が其の師王倪に問うて「先生は凡ての物が一様に是と認める所の萬物に一貫せる眞理を御存じですか。」と曰へば、王倪は「自分はとてもそんなものは知らんよ」と答へた。そこで齧缺が更に問うて、「それでは先生がそれを御存じないと云ふことを御存じですか。」と曰へば、王倪は又「それも知らんよ」と答へた。そこで齧缺が「それでは物の眞相と云ふものは知ることが出來ぬものでしやうか」と問うたので、王倪が答へて曰

やと。舜の曰く、夫の三子は猶ほ蓬艾の間に存す。釋然たらざるが若きは何ぞや。昔者十日並び出で萬物皆照らさる。而るを況んや德の日より進むものをやと。

大意 例を擧げて葆光の意を說く。

通釋 そこで昔の例をあげて上の說を補つて見よう。かの名天子堯が或る時舜に向うて曰ふには「我は宗、膾、胥敖の三國を討伐したいと思ふ。南面して天子の位にありながら、此の三國のことが氣にかゝりて心中不快でならぬのは何故であらうか。」舜が答へて曰ふには「かの三國の君は蓬草生ひ茂る僻陬の地に居つて、未だ王化を蒙ることの出來ぬつまらぬものであります。然るにそれを不快に思つて討伐したいなどゝ思召しになるのは何うしたことでしやう。昔、十個の太陽が一緒に出て、萬物等しく照らされて、何一つとして日蔭ものがなかつたと云ふことであります。太陽の光でさへさ樣なわけでありますから、況して太陽よりも勝つた德化力を持つて居る者に在つては申すまでもなく、如何なる僻陬の地と雖も其の德化を蒙らしめられぬ筈はない。然るに我が君の德化がなほ彼の三國に及ばぬのは、まだ〳〵我が君に於かれては葆光と云ふ域に達して居られぬと存ぜられます。尙ほ一段と勵んで不道の道を會得し葆光の域に進まねばなりませぬ。」

語釋 故昔者（口義に「昔者の上に一の故の字を著く、便ち是れ上文に因て引證するなり。」）○宗膾胥敖（又云ふ「宗膾胥敖の事、經に見ゆることなし。亦寓言のみ。」人間世篇にも堯、胥敖を攻むること見ゆ。）○不ニ釋然一（心に解けぬことで、不快の意なり。）○蓬艾之間（未だ王化を蒙らざる片田舍の意。）○若レ不ニ釋然一何哉（若を汝と讀む說あるも採らず。）○十日並出云云（亦莊子が寓言なり、十日並び出づることは淮南子にも見ゆ。十日と云ふものは、一個の日猶ほ能く萬物を照す。況んや十日なれば一物として照さゞる所なきを云ひ、下の句を起すのみ。所謂鼓舞の詞なり。）○德之進ニ乎日一者（葆光の大德を云ふ。日の字を用ふるは葆光の意を示さん爲めなり。句意は通

不可思議の力があるか分からない。これこそ無限の耀光を内に保ち蓄ふる者と謂ふべきである。

語釋　大道不稱（稱は稱名、大道は特に道と名づくべき迹方がないとの意。）○大辯不言（言說を離れたるが眞の大辯であるとの意。）○大仁不仁（大仁は仁の形迹がないとの意。）○大廉不嗛（甕谷曰く「嗛は慊と同じ。意に足らざる所あるなり、廉節を務むる者は常に自ら檢束し、其の意に足らざる所あるを免れず、是を慊となす、不嗛とは其の此くの如くならざるを謂ふ。」）○大勇不忮（又曰く「不忮とは人を賊はざるなり。」）○道昭而不道（而は則に同じ。口義に「昭は明なり、道は以て指し名づくべからず。昭然として指し名づく時は則ち道に非ず。」）○五者园而幾向方矣（口義に「园は圓なり、言ふ心は此れより以上の五者は（大道、大辯、大仁、大廉、大勇）皆是れこの圓物なり、其のもと混成するを謂ふ。若し稍〻迹（昭、辯、常、清、忮を指す）ある時は則ち四方（四角）の物に近し。其の圭角あるを謂ふ、幾は近なり、向の字は於の字と意を同ふす。」甕谷は別解を爲して曰く「园は刓と同じ、刓は缺なり、大道以下の五者は渾然として天成す、譬へば正圓形の如し、不道不及等の五者に至りては是れ圓形の四旁刓缺して稍方稜を成す、故に刓して幾んど方に向ふと曰ふ」と。今口義に從ふ。）○知止其所不知至矣。（其所不知とは凡智の知らざる所の意にて大道を指す。止とは此に止りて他に遷らざるの意、卽ち大道に安住し、決して道を昭明にする如きことをせぬ意。口義には「天下の眞知は必ず不知に至つて、知となして止む時は知の至となす」卽ち不知こそ眞知であるとの意此の說によつて下文を解すれば、不知こそ眞知であると同樣に不言こそ大辯であり、不道こそ大道であることを知るは容易でないとの意となる。亦通ず。）○天府（成疏に自然の府藏とあり。所謂造物者の無盡藏なり。卽ち大道を指す。）○葆光（口義に、「葆光とは滑疑の意あり、葆は藏なり、其の光を藏して露さず」とあり。天府より下、此に至る、大道不稱を申明す。）

故昔者堯問於舜曰、我欲伐宗膾胥敖。南面而不釋然。其故何也。舜曰、夫三子者、猶存乎蓬艾之間。若不釋然何哉。昔者十日並出、萬物皆照。而況德之進乎日者乎。

訓讀　故に昔堯、舜に問うて、曰く、我れ宗、膾、胥敖を伐たんと欲す。南面して釋然たらざるは、其の故何ぞ

能く知る有らば、此れを之れ天府と謂ふ。注げども滿たず、酌めども竭きず。而も其の由つて來る所を知らず。此れを之れ葆光と謂ふ。

大意 大道は稱謂なく、言說を離る、是非の論を以てしては窺ひ知るを得ざるを說く。大道が主、大辯以下は客。

通釋 夫れ大道は至大至廣なるが故に特別に名づくべき名なく、大言は言はずして既に信ぜらるゝものなれば言ふを要しない、大仁は其の慈愛自から施されて仁の跡方なく、大廉はかの務めて廉節を行ふものとは異つて意に不足を感ずることなく、大勇は血氣の小勇と異りて人を害ふことがない。之に反して若し道が道として明示せらるゝに至らば眞の道たる價値がなくなり、言にしても同樣辯論を要するに至れば間に合はざること多くなつて言の眞價亡び、仁にしても亦常に目につくやうな跡方を示すに至れば、仁の大成とはならず、廉に於ても亦ことさらに淸廉を務むる時は眞實の廉でなく、勇にしても人を害ふやうでは大成の勇でない。大道以下の五者は元來圓滿無礙なるものなれども昭辯常淸忮の五者の爲めに圓滿を缺いで圭角を生ずるに至るのである。されば常知を以て知り得ざる所の大道に安住し、決して之を昭らかにせんとするが如き邪道に陷らぬのが至れる知慧である。然し中々此の言はざるこそ眞の大辯であり、道と稱すべき迹方なきが眞の大道であると云ふことは、何人にも容易なことではないが、若し能く之を知る者があつたならば、かゝる者は天然の寶藏を開き得たのであると謂へる。此の天府は廣大無邊であるから如何程注ぎ込んでも滿つることなく、如何程酌み取りても盡きることがない。而も何によりて斯かる

も知る可からざる所を知らんことを求めざるを謂ふ。夫の日月星辰は聖人藉りて以て推測の用に供し、民の時を定むるのみ。未だ必ずしも深く日月星辰を求むることあらず。」）　○六合之內、云云（又曰く「六合の內とは宇宙の間を謂ふ。物の兩間に存する者は、聖人未だ必ずしも論說すること無くばあらず、然れども覆載生成の偏（天地が萬物を覆ひ載せ生み成す上に於て偏跛なことあり）寒暑災祥の其の正を得ざるが如きは、聖人と雖も豈に議して之を正すを得んや。此れ其の論じて議せざる所以なり。」）　○春秋經レ世、先王之志云云（又曰く、「春秋の載する所は前世行事の跡なり、聖人議して之を正さゞるにあらざれども、然れども先王の是とする所は從つて之を是とし、其の非とする所は從つて之を非とし、未だ必ずしも分辨を其の間に置かず。故に議而不辨と曰ふ。志は識と通ず。先王之志は先王の識る所を謂ふ。」「春秋は上代の一般の史書を曰ふ、必ずしも孔子の春秋と爲すを要せず。口義に云ふ「春秋は史書の名なり」と。）　○分也者有レ不レ分也、辯也者有レ不レ辯（口義に「天下の理、惟だ其れ言はざれば則ち至言たり。纔かに分辨の處に到れば便ち是れ汝の胸中自ら見得して透徹せず。」）　○聖人懷レ之云云（之を懷にすと云ふは退て密に藏すの意なり、聖人は卷て之を懷にす、衆人は必ず辯じて之を明かにし以て相誇示す、纔かに分辨あれば便ち是れ見識なき處。」）

夫レ大道ハ不レ稱、大辯ハ不レ言、大仁ハ不レ仁ナラ、大廉ハ不レ嗛ナラ、大勇ハ不レ忮ハ。道ハ昭カナレバ而不レ道ナラ、言ハ辯ズレバ而不レ及バ、仁ハ常ナレバ而不レ成ラ、廉ハ淸ケレバ而不レ信ナラ、勇ハ忮ヘバ而不レ成ラ。五ツノ者ハ园ナレドモ而幾シレ向フニレ方ニ矣。故ニ知ハ止マルニ其ノ所ニ不ルニ知ラ至レリ矣。孰レカ知ランニ不言之辯、不道之道ヲ。若シ有ラバニ能ク知ル、此ヲ之レ謂フニ天府ト。注ゲドモ焉而不レ滿タ、酌メドモ焉而不レ竭キ、而モ不レ知ラ其ノ所ノ由ツテ來ル。此ヲ之レ謂フニ葆光ト。

訓讀　夫れ大道は稱あらず、大辯は言はず。大仁は仁ならず、大廉は嗛ならず、大勇は忮はず。道は昭かなれば道ならず、言は辯ずれば及ばず、仁は常なれば成らず、廉は淸ければ信ならず、勇は忮へば成らず。五つの者は园なれども方に向ふに幾し。故に知は其の知らざる所に止まるは至れり。孰れか不言の辯、不道の道を知らん。若し

證するが故に自然に順つて是非の論議を事としない。即ち天地四方の外には或は深遠にして不思議なことがあるかも知れないが、聖人は其のまゝに存し置いて大體論さへも試みない。又此の世界の內には色々の事柄や道理があるであらうが、聖人は唯だ之が大體論を試みるが、微に入り細に渡りて議することをしない。又春秋の書に世を治むる道を說いて居るが、是れは皆先王の識す所である。聖人は是等の記錄について詳論はするが、然し先王の是とする所は從つて是とし、其の非とする所は從つて非とし、決して其の間に是非の分辨を設けない。されば此の聖人の態度に從ふべきであるのに、かくはせずして是非の分辨に務むる者はもと其の胸中の見識が分明を缺いて居るのである。それ故強ひて分析辨別を試みんとするのである。其の故如何んとならば、聖人は胸中の見識を藏めてあらはさぬが、衆人は得て自らを是なりと辯別して相誇示するではないか。是れ上に辨ずる者は其の見識分明を缺くと曰へるわけである。

語釋 夫道未二始有一レ封云云（口義に「此の段又是の字の上より生起す、封ありとは即ち彼我あるなり、常ありとは主あるなり。至道至言もと彼此なし。人心の私に因りてこの是の字あり、故に許多の疆界を生出す。畛は疆界なり。」甕谷曰く「至道もと封域なく、至言もと常定なし、たゞ人々固執して以て是となすに因りて、方めて疆界あり。」）○有レ左有レ右、有レ倫有レ義、有レ分有レ辯、有レ競有レ爭（口義に「八德の名は只だ是れ物我對立の意なり。却つて其の文を鼓舞して四句を做し出す。左右は彼此對立の名なり。倫は理なり、義は事の宜しきなり、纔かに彼此の對立ある時は理を說き事を說くこと各主意あり。分は分析なり、辯は辯別なり、分辨皆同じ、但だ字に輕重あり、纔かに主意ある時は各々自ら分析辯別す、競と爭とは亦一意なり、但だ競は爭よりも甚だし、既に分辨ある時は大なる者は必ず競ひ、小なる者は必ず爭ふ。」釋文に、崔本は有倫有義を有論有議に作るとあり。兪樾は之に從つて說をなして曰ふ「下文に云ふ、六合之外、聖人存而不論、六合之內、聖人論而不議。又曰、故分也者有不分也、辯也者有不辯也。彼の所謂分辯は即ち此の分あり辯あるなり。然らば則ち彼の所謂論議は即ち此の論あり議あるなり。」從ふべきに似たれども、姑らく舊說による。）○六合之外、聖人存而不レ論（甕谷曰く「六合の外は天地の外を謂ふ。存而不論とは其の有る所に從ひ、必ずし

辯也者、有不辯也。曰、何也。聖人懷之。衆人辯之以相示也。故曰、辯也者、有不見也。

訓讀 夫れ道は未だ始めより封あらず。言は未だ始めより常あらず。是となせば畛あり、請ふ其の畛を言はん。左あり右あり、倫あり義あり、分あり辯あり、競あり爭あり。此を之れ八德と謂ふ。六合の外は聖人存して論せず。六合の內は聖人論じて議せず。春秋の世を經するは先王の志なり。聖人議して辯ぜず。故に分つ者は分たざる有り。辯ずる者は辯ぜざる有り。曰く、何ぞや。聖人は之を懷く。衆人は之を辯じて以て相示すなり。故に曰く、辯ずる者は見ざる有り。

大意 大道もと是非なし、是非の起るは只だ是れ我執に因る、聖人は我執を絕し至道を體す。故に是非の論議をなさずとなり。

通釋 夫れ大道は往くとして存せざるなきが故に始めより封域なく、至言は存すとして可ならざるなきが故に始めより一定したものでない。たゞ人が我執に捉はれて自らを是とし他を非とするが爲めに始めて彊界を生ず。今試みに其の所謂彊界なるものを擧げて見るならば、先づ方位に就いては左右の對立あり、言論に於いては抽象的に理論を說けば、之に對して具體的に事例を擧げるし、一方で分折を試みれば他方で辨別を企てる、同じ競爭にも大小の別があると云ふ有樣である。以上を八德と名けるが、之が先づ普通人の持前である。然るに聖人は我執を絕し至道を

れ亦我と同じく道の所生なれば、何れも皆一に歸すべきものである。既に萬物と我と一體たる以上は大小是非の論はもとより其の間に挿み得られぬ。處が萬物と我と一たることを口で云ひあらはすことになると、それが卽一つの言となるから、全く言なしと云ふを得ないのである。かくて萬物と我と一である上に又此處で言を以て一と云へば合せて二となる。此の二と(萬物と我との本たる)道とを合せて三となる。これから次第に數が增して、千となり萬となり、數限りがなくなるのであつて、厤數に巧みな者でも到底數へ切れないのである。況して凡人に於ては云ふまでもない。されば萬物一體であつて言語を超絶(無)して居るのを、已むを得ざる爲めに言葉を以て說明(有)してさへも、上に云へる如く二となり三となるに至つたのである。かく一たび發すれば多くなるのが言語の有勝ちなるに、況して最初から議論を以て他の議論に向へば、是非の論爭が並び起るのは怪しむに足らぬ。さればかゝる是非論爭の地に適くことなく、是非超越の大是たる虛無の道に安住するに若くはない。

語釋 大山(泰山に同じ。) ○殤子(幼にして死するもの。) ○彭祖(逍遙遊に見ゆ。)

夫道未始有封。言未始有常。爲是而有畛也。請言其畛。有左有右、有倫有義、有分有辯、有競有爭。此之謂八德。六合之外、聖人存而不論。六合之內、聖人論而不議。春秋經世、先王之志。聖人議而不辯。故分也者、有不分也、

天下莫大於秋毫之末、而大山爲小。莫壽乎殤子、而彭祖爲夭。天地與我並生、而萬物與我爲一。既已爲一矣、且得有言乎。既已謂之一矣、且得無言乎。一與言爲二。二與一爲三。自此以往、巧歷不能得。而況其凡乎。故自無適有以至於三。而況自有適有乎。無適焉、因是已。

訓讀　天下、秋毫の末より大なるは莫し、而して大山を小と爲す。殤子より壽なるは莫し。而して彭祖を夭と爲す。天地我と並び生じて、萬物我と一たり。既に已に一たり、且言有るを得んや。既に已に之を一と謂ふ、且言無きを得んや。一と言と二と爲る。二と一と三と爲る。此より以往は巧歷も得る能はず。而るを況んや其の凡をや。故に無より有に適くも、以て三に至る。而るを況んや有より有に適くをや。適くこと無くして、是に因るのみ。

大意　道と物と言との關係を述べ、是に因るべきを說く。

通釋　更に大道と萬物と言葉との關係を述べて見ようならば、萬物は道の所生であつて、其の大小壽夭の如きは僅かに比較上言はれるに過ぎなくて、道の根本から觀れば秋の兎の毛の尖端は必ずしも小ならず、泰山亦必ずしも大ならず、幼死者は長命、彭祖は若死とも看做される。又大なる天地も小なる我も道の力によりて並び生じたものなれば、道の大よりすれば何れか大、何れか小と定め得られぬ。又萬物は萬と數へられる程多種多樣であるが、是

未㆓始有㆒始也者とて始の前の狀態卽ち無始とでも云ふべき狀態があつたに相違ない。之を更に溯れば未㆔始有㆓夫未㆓始有㆒始也者とて無始の更に前の無無始とでも云ふべき狀態があつたに違いない。かく宇宙成立の根源と云ふことに思を致して見ると、凡ての物の存在と云ふことも同樣で、現在物が有つても其の源に溯れば無と云ふ狀態に達する、それより更に溯れば未㆓始有㆒無也者とて無無とでも云ふものがあり、更に其の前に未㆔始有㆓夫未㆓始有㆒無也者とて無無無とでも云ふものがあつた。かくの如く無限に溯つて際限もなく進み得る譯である。要するに物の本源は虛無である、虛無こそ道の本體である。さて此の道の本體たる虛無より忽然として萬物が生じ、有無とか大小とか是非と云ふやうな對立が次第に起つて來た。然し有無と云ふやうな相對はもと絕對の虛無より生じたものなるが故に、卽ち大道の一時的顯現なるが故に之は有、之は無と決定することは出來ぬ。大小是非の如きもとより之と同樣である。從つて今吾が輩が世の是非の議論を齊うすべく虛無の眞道を說き來つて居るが、吾が謂ふ所とても果して是にして謂れありや無しや決定することは出來ぬ。卽ち徹底せる虛無の道よりすれば正に斯の如きものである。

語釋 不知其與㆑是類乎云云（是と云ひ彼と云ふは共に上文惠施の如き是非の論者を指す。）○有㆓始也者㆒云云（覺谷曰く「大塊の鉅なる、亦必ず初め結ぶの時あり、是れ之を始と謂ふ。其の未だ結ぶことあらざるに方りては、是れ未だ始より始あらざるなり（未始有始）。若し更に其の初めに就いて之を求めば、必ず未だ始めより夫の未だ始より始あるざることあらざるの時あり（未始有夫未始有始）。凡そ物の天地の間にある皆然り（有）、未だ此物あらざるに方りては、是れ無なり。若し溯りて之を尋ねば、必ず未始有無あり、又必ず未始有夫未始有無あり。」）

而未レ知吾所レ謂之其果有レ謂乎。其果無レ謂乎。

訓讀 今且く此に言あり。知らず、其の是れと類するか、其れ是れと類せざるか。類すると類せざると、相與に類を爲せば、則ち彼と以て異なるなし。然りと雖も請ふ嘗みに之を言はん。始といふものあり。未だ始めより始めあらずといふ者あり、未だ始めより夫の未だ始めより、始めあらざることあらずといふものあり。有といふものあり。無といふものあり。未だ始めより無あらずといふものあり。未だ始めより夫の未だ始めより無あらざることあらずといふ者あり。俄にして有無あり、而して未だ知らず、有無の果して孰か有に、孰か無なるかを。今我は則ち已に謂ふ有り、而して未だ知らず。吾が謂ふ所の其れ果して謂有るか、其れ果して謂無きかを。

大意 天地萬物生成の根源に溯り、虛無の道を明かにす。

通釋 大道は虛無、もとより言語を絶したものであるが、今しばらく言葉をかりて道には成も虧も、是も非もないなど〻說いて見たが、さて吾が此の說話は世の是非の論者と同種類のものであらうか、異種類のものであらうか。然しそれが同種類のものであらうと、異種類のものであらうとに論なく、既に言論に渡りてかれこれと說話するからには畢に同類たるを免れない。即ち結局是非の議論に陷りて世上の論者と何等異なることなきに至る。されば全く沈默を守るに越したことはないが、然しそれでは亦物の道理を明かにする由がないから、已むを得ず姑らく言葉をかりて說いて見よう。一體此の宇宙と云ふものが出來上るには必ず其の始と云ふものがある。然し更に溯れば、

昭父子と解すべきである。）○師曠之枝策也（成疏に「師曠字は子野、晉の平公の樂師、甚だ音律を知る」と。枝策とは釋文に崔云ふ、「杖を擧げて以て節を擊つ」と。或は杖を柱又は支と解し、杖に身をさゝへて音を聽くと釋す。又通ず。）○惠子之據梧也（梧は机なり、古は桐にて作る故に机を梧と云ふ。德充符にも「子槁梧に據りて瞑す」とあり。机によりかゝつて大に議論せしものと思はる、）○幾乎皆其盛者也（郭注は乎にて句し、「幾は盡なりと釋す。東條一堂曰く、「幾乎皆其盛者也は當に一句となして讀むべし」と今之に從ふ。幾は近なり。）○載之末年（釋文に崔云ふ、「之を今に書す」と。一堂曰く、「之を後世に傳ふ」と。今一堂に從ふ。惠子莊子時を同うす、後世と曰ふは穩やかならざるに似たれども昭氏を主とする文なれば必ずしも不通ならず。一說には「之を末年までコトとす」と訓み、晚年まで從事すと解す。）○唯其好之也、以異於彼。其好之也、欲以明之彼。（林西仲。兩彼字にて句す、是なり、彼は衆人なり。）○以堅白之昧終、（堅白は堅白同異の辯、戰國時代に好んで用ひられた詭辯である、堅石は石に非ず、白馬は馬に非ずと云ふのは公孫龍の徒が好んで用ひた論法で、之が當時流行の詭辯の代表的のものである。惠施亦是等詭辯派の一人である故にしか云ふ。德充符にも見ゆ。）○其子又以文之綸終、終身無成。（口義に「昭文既に琴を鼓するを以て其の身を終る、而して昭文の子、又父の緖業を傳へて亦其の身を終る、綸は緖業なり。上には惠子を言ひ、下の句は又昭文の子を以て結ぶ」此は是れ筆端鼓舞の處なり。終身無成とは只かれ一人自ら會す。別人に敎ふることを得ず、故に成るなしと曰ふ。「陸註には文は恐らく父字の誤とあり。又林西仲は綸終の終を緖に作りて曰ふ「惠子既に終り、其の子又堅白の書に絨る者を以て其の綸緖を尋ね竟に得る所なし」と。今は口義に從ふ。）○滑疑之耀、聖人之所圖也（口義に「滑疑とは不分不曉、滑亂して疑ふべく、明なるに似て明ならざるなり。耀は明なり。圖は欲なり。」不分不曉の明とは明暗を絕した、大光明の意にて成虧、是非等の相對を超越したる無心喪我の境地を云ふ。）

今且有言於此。不知其與是類乎、其與是不類乎。類與不類、相與爲類、則與彼無以異矣。雖然、請嘗言之。有始也者。有未始有始也者、有未始有夫未始有始也者。有有也者。有無也者。有未始有無也者。有未始有夫未始有無也者。俄而有無矣。而未知有無之果孰有孰無也。今我則已有謂矣。

は策を擧げて調子をとり、惠子は机に倚りて雄辯を振つて居るが、此の三人は各〻其の道の知識にかけては何れも皆殆んど盛大の域に達して居ると謂つてよろしい。されば何れも皆後の世までも書物に載せ傳へられて居る程である。かく彼等が其の道に達したのは各〻其の道を好む熱心が世の衆人と異つて居た爲めである。こゝまでは彼等は成功したが、之を好むこと甚だしき餘り、各〻好む所を衆人に明示して己れの好む所に同じからしめやうとした。然し之はどこまでも自得に甘んじて敢へて他に說き明すべきものに非ざるに強いて之を明かにせんとしたのであつて、失敗と謂ふべきである。されば流石に惠施の雄辯も結局曖昧な堅白同異の詭辯に終つて仕舞ひ、又昭文の子も父の遺業を受けて一生を終へ、終身これぞと云ふ成功を見なかつた。若し彼等の如くであつて成功と云ひ得るならば、我々のやうな一向何も出來ない者でも矢張成功して居ると云へよう。然し又彼等の程度まで成功して、それが成功と云へないならば、如何なる物でも如何なる人でも成功と云ふことはあり得ない。是等の例によつても明かなる如く成虧は一時的現象であつて一方に成るあれば他方に虧くるあつて、事の全體終始を通觀する時は成ともつかず虧ともつかず其の何れとも解決し難い。故に聖人は成虧の念に捉はるゝことなく、成虧超越の境地に安住して居る。之を外の言葉で形容して見ると、滑疑の耀とて薄すぼんやりした光、卽ち明暗超越の大光明こそ聖人の望む所である。されば聖人は上にも既に述べたる如く是非の己見を用ひずして尋常平凡の所卽ち物のあるがまゝの情態に心を遊ばしめて居る。是れこそ上章に所謂明を以てすと謂ふのである。

【語釋】故昭氏之鼓ㇾ琴也（故字に就いて說多し、上句に連讀して事と訓む說あり、固と同じくもとよりと訓む說あり。今姑らく宣穎に從つて古と訓む。昭氏は成疏に姓は昭、名は文、古の善く琴を鼓する者なりとあり。下文に昭文とあり、此に昭氏とあれば、

是不用而寓諸庸、此之謂以明。

訓讀 成と虧と有るは、故昭氏の琴を鼓するなり。成と虧となきは、故昭氏の琴を鼓せざるなり。昭文の琴を鼓するや、師曠の策を枝つや、惠子の梧に據るや、三子の知は皆其の盛なるに幾き者なり、故に之を末年に載す。唯其の之を好める、彼に異なるを以てなり。其の之を好むや、以て之を彼に明にせんと欲す。明にする所に非ずして之を明にす、故に堅白の昧を以て終る。而して其の子又文の綸を以て終り、終身成る無し。是の若くして成ると謂ふ可きか、我と雖も亦成るなり。是の若くして成ると謂ふ可からざるか。物と我と成る無きなり。是故に滑疑の耀は聖人の圖る所なり。是が爲めに用ひずして諸を庸に寓す。此を之れ明を以てすと謂ふ。

大意 上章の物に成毀なく通じて一たりの意を申明す。即ち成虧は一時的現象であつて聖人は決して之に捉はれないことを說く。

通釋 道は不增不減、もとより成もなく虧もないのに其の成虧あるは例へば古の音樂家昭氏父子の琴を鼓するが如きであり、其の成虧なきは昭氏父子の琴を鼓せざるが如きに當る。即ち昭氏父子が始めから琴を鼓せざれば父の代に成功(成)し子の代に失敗(虧)すると云ふが如きことが起らぬ。然るに琴をひき始めたから父の成功(成)子の不成功(虧)と云ふことが起つたのである。要するに道に成虧あるは一時的現象であつて道自體には成もなく虧もないのである。此の道理を外の例をも併せ擧げて說明して見やうならば、彼の昭氏の父である昭文は琴をひき、師曠

少しも設けないのである。即ち是非の見に捉はれない者である。之は何れも古人の境界であつたが、後世になると是非の偏見が盛に彰れて來た。かく是非の見があらはれることになると、大道は自ら毀損せられて完全でなくなる。かくて道が虧けると愛憎の念が成立して己に親しきものは之を愛し、疎ましきものは之を惡むことになる。かくて凡ての爭が此に生ずるのである。然しながら大道の本原に溯つて見れば果してかくの如き成虧の差別相ありや否や、無論成もなく虧もないのである。然るに一偏の見に捉はれて是だの非だのと爭つて居るのは誠に哀れなことで、所謂朝三暮四のそしりを免れない。

語釋　封（封域卽ち境界の意である。林西仲は封を對に作り、對待卽ち相對の意に解するも、必ずしも字を改むるを要せず。）

有成與虧、故昭氏之鼓琴也。無成與虧、故昭氏之不鼓琴也。昭文之鼓琴也、師曠之枝策也、惠子之據梧也、三子之知幾乎、皆其盛者也、故載之末年。唯其好之也、以異於彼。其好之也、欲以明之彼。非所明而明之、故以堅白之昧終。而其子又以文之綸終、終身無成。若是而可謂成乎、雖我亦成也。若是而不可謂成乎。物與我無成也。是故滑疑之耀、聖人之所圖也。爲

矣。其次以爲有物矣、而未始有封也。其次以爲有封焉、而未始有是非也。是非之彰也、道之所以虧也。道之所以虧、愛之所以成。果且有成與虧乎哉。果且無成與虧乎哉。

訓讀 古の人、其の知至る所あり。惡にか至る。以て未だ始めより物あらずと爲すもの有り。至れり、盡せり、以て加ふ可らず。其の次は以て物あり、而して未だ始より封有らずと爲すなり。其の次は以て封あり、而して未だ始めより是非あらずと爲すなり。是非の彰るゝや、道の虧くる所以なり。道の虧くる所以は、愛の成る所以なり。果して且た成と虧とありや、果して且た成と虧と無きや。

大意 古人の智は至れり、故に是非の見なし、後人は其の然らざるを說く。倂せて物に成毀なき意を再說す。

通釋 古の人は其の心智大に進んだ境地に至つて居る。それは如何なる境地にまで達して居るかと云ふに、中には一切皆空、萬物虛無と達觀した者があつた。其の心地能く此に達せる者は、至れり盡せり、最上至極、最早や何物も之に越すものはない。其の次ぎなる者は萬有皆空とまでは考へ至らざれども、さりながら彼れの此れのと云ふが如き物の間に境界などはチツトも設けないのである。卽ち萬物一體、萬株一如と達觀した者である。更に其の次ぎの者は彼我の對立を超越して萬物一體とまでは觀じ得ざるも我は是、彼は非と彼我の間に是非善惡の區別などは

それが爲めに心を勞することがない、然るに世の愚者は徒に精神を勞して一方に偏したる說をなし、大小是非通じて一であることに氣がつかぬ。かくの如き者を形容して朝三暮四と謂ふのである。朝三暮四とは何んなことかと云ふに、昔し或る所に狙公があつて多くの狙を飼つて居たが、或る時狙に茅を分けてやらうとして朝は三つ、暮には四つづゝやらうと云へば、狙どもは皆怒つた。そこで更めて、それなら朝は四つ暮には三つづゝやらうと云ふと皆喜んだと云ふ話である。之を朝三暮四と云ふのである。名實卽ち三と四と、四と三とは總數は共に七であつて少しも損失はないのに愚な狙どもは徒に喜怒の情を用ひて騷いで居る。世の愚者の是非の騷論も之に同じである。されぱやはり是非超越の大是に因るに如くはない。されば聖人は是非の一偏に捉はれず、よく之を調和し、自然的均等の地、卽ち是非超越の絕對境に安住して居る。この境地をば兩行とて是非二つながら行はれて少しも障碍なき境界と謂ふのである。

語釋　勞二神明一爲レ一、而不レ知二其同一也（口義に「神明は猶ほ精神の如し。精神を勞苦して自ら一偏の說をなし、相是非して理のもと同じきを知らざる者、之を朝三と謂ふ」。）○朝三（朝三暮四の略、猶ほ上文に方生方死を略して方生と言へるが如し。）○賦レ茅（賦は付與なり。）○名實云云（口義に「名は三と四なり、實は通じて七の數なり。名實未だ嘗て變ぜず、但だ朝暮を移し易へて衆狙の喜怒之に隨ふ。此れ是非の名、異なりと雖も理の實は則ち同じきに喩ふ。但だ能く是に因らば則ち世自ら爭なし。」因是の兩字三出。是とは上文の如く、是非超越の大是を謂ふ。口義の說之を得たり。或は衆狙の是とする所に因ると解す。是に非ず。）○是以聖人云云（成疏に「天均とは自然均平の理なり。夫れ達道の聖人は虛懷不執、故に能く是を無是に和し、非を無非に同ず、智を均平の鄕、心を自然の境に休する所以なり。」）○兩行（上文に是も亦一無窮、非も亦一無窮とあるに同じ。）

古之人、其知有レ所レ至矣。惡乎至。有下以爲二未始有一レ物者上。至矣、盡矣、不レ可二以加一。

むを遊ばしむと解す。庸は宣穎曰く私見を去つて尋常に同ずと、即ち物のあるがまゝの情態即ち自然を指して云ふ。要するに此の一句は上文に是以聖人不由而照之於天。亦因是也とあるに同じ、即ち爲是は是以、聖人は達者、不用は不由、寓諸庸は照之於天の謂である。）○庸者用也（宣穎曰く無用の用と。）○適レ得而幾矣（李注に「適は至るなり、得に至れば惟だ非なるものの息むのみに非ず、是なるものも亦息む、故に曰く幾（盡）くと」とあり。幾を「ちかし」と訓みて、道に近しと釋するもあり。）○因レ是已。已而不レ知二其然一。（因是の二字再出。一篇の眼目なり。已は「ノミ」と訓ず。下の已も亦「ノミ」と訓ず。或は「スデニ」と訓む。今從はず。已而云云は因是已而云云と云ふべき處を略したのであつて、下篇養生主に殆已。已而爲レ知者殆已矣とある語法に同じ。蓋し莊子獨創の語法なり。）

勞二神明一爲レ一、而不レ知二其同一也、謂二之朝三一。何謂二朝三一。曰、狙公賦レ茅、曰、朝三而暮四。衆狙皆怒。曰、然則朝四而暮三。衆狙皆悅。名實未レ虧、而喜怒爲レ用。亦因レ是也。是以聖人和レ之以二是非一、而休二乎天鈞一。是之謂二兩行一。

訓讀 神明を勞して一を爲して、其の同じきを知らざるなり。之を朝三と謂ふ。何をか朝三と謂ふ。曰く、狙公、茅を賦するに、曰く、朝は三にして暮は四と。衆狙皆怒る。曰く、然らば則ち朝は四にして暮は三と。衆狙皆悅ぶ。名實未だ虧けずして、喜怒用を爲す。亦是に因るなり。是を以て聖人之を和するに是非を以てして、天鈞に休す。是を之れ兩行と謂ふ。

大意 大小是非もと同じ。聖人之を知り、愚人之を知らざるを說く。

通釋 上述の如く達道の士は大小善惡を通じて一たることを知り、是は是、非は非と物のあるがまゝに受込み、

成し、一方に成れば他方に毀れるものである。して見れば成と云ひ毀と云ふは一時の相對的現象であつて、大道の上から觀れば固より成もなく毀もなく、成毀通じて一である。たゞ達道の士のみ此の萬事皆通じて一たるの理を知るが故に是非の己見を用ひずして尋常平凡の所即ち物のあるがまゝの情態即ち自然に心を遊ばしめて居る。さて尋常平凡と云へば如何にも役に立たぬやうなれども、之が反つて大に役に立つのであり、此の種の有用であれば何事に對しても自由無碍スラ〳〵と行き通り、果ては自得の境界に至るのである。さて此の自得の域に達すれば是非の對立などはスツカリ無くなつて仕舞ふ。されば達道の士は常に是非を超越せる大是即ち自然に從ふのみであつて、而も己れ自らは自然に從つて居ることを意識して居ない。たゞ〳〵無我無心自然に從ふのみである。之を稱して道に冥合すと謂ふのである。

語釋　莛與楹云云（口義に「莛は屋梁、楹は屋柱なり。梁は横にして柱は直なり。厲はみにくゝして施は美なり。恢大と褊狹、詭變と循常、譎詐と平直、妖怪と祥瑞とは皆同じからざる者なり。道を以て之を觀る時は横直の者各々其の用に當り、美善の者各々其の質を全うす、皆通じて一と爲すべし。言ふ心は皆之を造物に歸するなり」と。甕谷は異說をなして曰く「莛は（漢書の）東方朔傳に莛を以て鐘を撞くとある莛に同じ、義の叢なり（兪樾の說に據る）、楹は兩楹なり、莛は小、楹は大、厲は癩に通じ、恢は詼に同じく、恑は詭に同じく、憰は譎に同じ。恢恑憰怪は之を怪んで驚駭するを謂ふなり。夫れ大小美惡の天地間に並び立つは物の情なり。大道より之を觀れば、固より小を捨て大を取り、惡を斥ぞけ美を進むべからず。但だ人は大小美態の相距る甚だ遠きを觀、怪んで之を驚かざるなし。而も道は通じて一たり。」此の解に從へば本文は「故に是が爲めに莛と楹と厲と西施とを擧ぐれば恢恑憰怪す、道は通じて一たり」と訓むべきである。）　○其分也成也云云（口義に「成と毀とは物の相戻る者なり、然れども毀るること無ければ成ることなし、成ること無ければ毀るゝこと無し、譬へば木の山に在るが如し、伐つて之を用ふるは毀るなり。之を以て室を作れば物を成すと爲す（中略）筋（ツル）あり角ありて後に弓を成す、弓に在ては成ると爲すも筋角に在りては毀ると爲す、秦亡びざる時は漢興らず漢成ると雖も秦は毀る。此を以て之を觀る時は初めより成もなく亦毀もなし、故に復た通じて一と爲ると曰ふ。」）　○爲ㇾ是不ㇾ用而寓二諸庸一（爲是は上文のと同例であつて「是が爲めに」と訓む。或は是の不用をなすと訓み、或は是と爲すことを用ひずと訓むものあるも凡て採らず。不用とは是非の己見を用ひざる意。寓はカリズマヰと訓ず、暫らく留りて久しからざる意にて無執着、

故爲是擧莛與楹、厲與西施、恢恑憰怪、道通爲一。其分也成也。其成也毀也。凡物無成與毀。復通爲一。唯達者知通爲一。爲是不用而寓諸庸。庸也者用也。用也者通也。通也者得也。適得而幾矣。因是已。已而不知其然、謂之道。

訓讀 故に是が爲めに莛と楹と、厲と西施と、恢恑憰怪を擧ぐ、道は通じて一たり。其の分るゝは成るなり、其の成るは毀るなり。凡そ物には成と毀となし。復た通じて一たり。唯達者のみ通じて一たるを知る。是が爲めに、用ひずして諸を庸に寓す。庸なる者は用なり、用なる者は通なり、通なる者は得なり、得に適けば幾く。是に因るのみ。已にして其の然るを知らず、之を道と謂ふ。

大意 物の形は種々雜多であるが達人は大觀して一となすことを說く。

通釋 されば物に可不可なきことを明かにせんが爲めに横になつて居る梁と縱になつて居る柱と醜き癩病患者と美人の西施、更に又褊狹の反對である寛大、奇變の反對である循常、平直の反對である詭詐、祥瑞の反對である妖怪などを例に擧げて見るに、其の間非常に差異があるやうなれども各々其の用を爲し本來の面目を發揮して居る點から觀れば些の異同がない即ち大道の上から觀れば萬株一如である。又凡ての物は此處に分散すれば彼處に集

とす。惡にか然らずとす、然らざるを然らずとす。物固より然りとする所あり。物固より可とする所あり、物として然らざる無く、物として可ならざる無し。

【大意】萬物一體、可不可然不然の別なきを說く。

【通釋】凡そ世の中の人々が、物事に對して可不可の別を立てるのは後天的便宜的のことであつて先天的根本的に左樣定まつて居るものでない。例へば吾々の通る道路の如きもので、始めから道ではなかつたが同じ處を人々がしば／＼通行する爲めに自然に道になつたまでのことである。又物の名前でもさうである。始めから名前が定まつて居たのではないが同じやうに人々がしば／＼呼ぶから遂に猫とか犬とか云ふやうな特定の名が付いて仕舞つたのである、共に皆後天的便宜的のもので先天的本質的のものでない。物事に對する可とか不可と云ふことも全く之と同じことである。又然不然に於いても同じことが云へる、何を標準にして然とか不然と云ふことが定まるか、決して然不然を決定する先天的根本的の標準はない、たゞ人々が時と場合によつて一時的便宜的に或は然を然とし不然を不然とするまでのことである。凡そ世の中の事々物々には然なる所、可なる所があつて、其の然なる所可なる所に因つて云へば凡ての物に不然もなく不可も無い（之に反して其の不然不可なる所に就いて云へば物に然なく可なしである）要するに物に可不可然不然の別を立つるは一曲に偏し一端を執りて云ふことに過ぎぬのである。

【語釋】道行レ之而成。物謂レ之而然（宜頴や王先謙によれば道は路の意で道理の意ではない。謂之とは稱名の意で、物に名をつけることである。諸說紛々、今姑らく宜說に從ふ。）

大意 物の外形に捕はれず、本質に着眼すべきを說く。

通釋 彼の公孫龍一派の詭辯家の唱ふる樣に、指の外形上から指は指でない卽ち長い指、短い指、太い指、細い指等の指はあるが單に指と云ふものはないと云ふやうなことを人に言つて聞かせるよりも、指の眞實性の上から指は指でない卽ち萬物は一體であつて特に指と固執すべきものはないとよく諭すに越したことはない。馬に就いても亦同じことが云へる、卽ち馬の外形上から馬は馬でない卽ち白い馬、黑い馬、大きい馬、小さい馬等の馬はあるが單なる馬と云ふものはないと云ふやうなことを諭すよりも、馬の眞實性の上から馬は馬に非ず卽ち萬物一如、特に馬と固執すべきものはないと諭すに越したことはない。要するに天地萬物は一體であつて凡ての物が一本の指とも、一匹の馬とも考へ得られるのであつて、天地萬物の間に差別をつけるのは誤りである。

語釋 以指云云（指や馬を例に引いたのは公孫龍子の如き當時の詭辯家が指は指に非ずとか白馬は馬に非ずと云ふ議論をなしたのに依るのであつて指や馬に特に意味があるのではない。曰はんとする所は卽ち物の外形に捕はれずして本質について論ずべきである。卽ち差別觀を捨てゝ、無差別絕對觀を以つてすべきである。公孫龍子に指物白馬の二篇あり、就いて見よ。奚侗曰く、喩は玉篇に曉なり。又諭に作る。之を諭して通曉せしむるを謂ふと。）

可乎可、不可乎不可。道行之而成、物謂之而然。惡乎然。然於然。惡乎不然。不然於不然。物固有所然、物固有所可。無物不然。無物不可。

訓讀 可を可とし、不可を不可とす。道之を行いて成り、物之を謂つて然りとす。惡にか然りとす。然るを然り

中にも無限の眞理があり、非の中にも無限の眞理が含まれて居ることゝなり、つまり是もなく非もなきことになつて物論は止んで仕舞ふのである。故に自分は上に物論を齊うせんと欲せば明を以てするに若くは無しと曰つたのである。

語釋 方生之說（方生方死之說と云ふに同じ。卽ち生れると云ふことがあつて始めて死ぬと云ふことがあると云ふ說で、莊子の論敵惠子が好んで用ひた說である。莊子之を引いて是非の定まり無きに喩へたのである。林西仲云ふ「齊物論の一篇は全く惠子公孫龍等の爲めに發す、蓋し惠子輩、善辯を以て名を著はす、物論の齊しからざる所以なり、故に篇中多く其の言を引き、又其の事を指す」と。） ○方生方死云云（生死、可不可、是非と循環窮りなし、之を分別せんとするも能はず、是を以て聖人は相對方生の說に由らずして、自然の天則に照して根本の歸結を求むるのである。） ○亦因レ是也（聖人は是非を超越した大是に因つて衆論を齊うするのである。林西仲云ふ「因是の兩字は是れ齊物論の本旨、通篇倶に此義を發す」と。） ○偶（對なり、上文に喪二其耦一の耦に同じ。） ○樞始得二其環中一以應二無窮一（樞は扉の心棒のハジで環に嵌る部分。環は樞を受け止める仕掛、ヒヂツボのこと。此の一句は上の道樞の樞字より說き出されたので亦筆者の巧を弄した所である。樞は上の道樞卽ち道の樞紐、根本眞理に喩へ、環は圓いと云ふ處から絕對的無偶の地、卽ち絕對觀に喩へたのである。（禪僧も圓形を以て好んで大悟の妙境に喩へて見る。）其環の其字最も味あり、樞に環が附き物である如くに根本眞理には絕對的の觀察がもと〳〵其の附物であるとの意。）

以レ指喩二指之非一レ指。不レ若下以レ非レ指喩中指之非上レ指也。以レ馬喩二馬之非一レ馬、不レ若下以レ非レ馬喩中馬之非上レ馬也。天地一指也。萬物一馬也。

訓讀 指を以て、指の指に非ざるを喩すは、指に非ざるを以て、指の指に非ざるを喩すに若かざるなり。馬を以て馬の馬に非ざるを喩すは、馬に非ざるを以て馬の馬に非ざるを喩すに若かざるなり。天地は一指なり、萬物は一馬なり。

かりになれば天下に是と云ふものは無くなり、是ばかりになれば、天下に彼と云ふものは無くなる。彼もなく是も無くなれば萬物は同體となるのである。然るに是を豫想する彼即ち相對的の立場からすると此の道理が分からぬが、明知即ち絕對的の見地からすれば此の萬物一體の理が合點が行く。故に「彼と云ふ概念は是と云ふ概念から出たものであり、是はやはり彼あるに因つて出來たものである」と云へる。つまり彼是と云ふものは惠施が好んで用ひた生れると云ふことがあるから方めて死ぬと云ふことがあると云ふ說である。然しながら生れると云ふことがあつて方めて死ぬと云ふことがあり、死がありて方めて生があり、可ありて方めて不可あり、不可ありて方めて可あり、是と云ふ概念があるに因りて非と云ふ概念があり、非あるが故に是がある。斯かる方死方生說即ち相對論に拘つて居ては議論百出、絕對根本の解決がつかぬ。故に明知の人は斯かる方生說即ち相對的見地に從はないで、自然の天則即ち絕對的見地に照らして解決を試みるのである。乃ち聖人は是非の對立を越えたる大是によるのである。かくて聖人天に照して觀る時は萬物は一體にして是と彼、彼と是とは同じく一元に歸して、彼は非であり是は是であると云ふが如き相對觀は影失せて彼の中にも是非を包含し、此の中にも是非兩ながら相存することになる。斯くなりし以上は果して其處に彼是の別があらうか。勿論あらう筈はない。かくて彼と是とが融會統合して其の相手方を喪なつた情態即ち彼是の相對を超越したのを大道の樞紐即ち根本の眞理と謂ふのである。「トボソ」が「ヒヂツボ」の眞中に嵌め込まれて始めて無限の開閉に應ずることが出來る如くに、彼我の對立を超越した根本眞理も絕對觀を得て、即ち絕對的觀察を下し得られて始めて無窮の用に應じ、受用如意と云ふことになるのである。さうなれば是の

是因非、因非因是。是以聖人不由、而照之於天。亦因是也。是亦彼也。彼亦是也。彼亦一是非、此亦一是非。果且有彼是乎哉。果且無彼是乎哉。彼是莫得其偶。謂之道樞。樞始得其環中、以應無窮。是亦一無窮、非亦一無窮也。故曰、莫若以明。

訓讀 物、彼に非ざるは無く、物、是に非ざるは無し。彼よりすれば則ち見えず。知よりすれば則ち之を知る。故に曰く、彼は是に出で、是は亦彼に因ると。彼是は方生の說なり。然りと雖も、方に生ずれば方に死し、方に死すれば方に生ず。方に可なれば方に不可、方に不可なれば方に可なり。是に因れば非に因り、非に因れば是に因る。是を以て聖人は由らずして之を天に照す。亦是に因るなり。是れも亦彼なり。彼も亦是れなり、彼も亦一是非なり、此も亦一是非なり。果して且彼是ありや。果して且彼是なきや。彼是其の偶を得る莫し。之を道樞と謂ふ。樞始めて其の環中を得て、以て無窮に應ず。是も亦一無窮なり、非も亦一無窮なり。故に曰く、明を以てするに若くは莫しと。

大意 前節に物論を齊うするには明を以てするに若くはなしと說く、此にその理由を明にす。

通釋 凡そ世上の事物は何によらず、絕對的見地からすれば彼でないものはなく、又是でないものはない。彼ば

然るに言の眞實が何處に隱れて是非の論を生じたのか。道は宇宙に遍滿し、何處へ往つても存しない處はなく、言は何處にあつても本來可でないものはない。然るに道は隱れ、言に可不可を生じたるは何故なるか。乃ち道は小見に隱れ、言は虛榮に隱れて、共に眞實性を表はすことが出來なくなり、かくて儒者墨者の是非の論を生じ、各々一方の非とする所を是とし、又一方の是とする所を非と主張するが如きことになつたのである。さて斯かる論爭に於て一方の非とする所を是とし、又一方の是とする所を非とせんと欲したならば、是非の對立を超越し、虛無自然の絶對境に立つて批判するに若くはない。さすれば、囂々たる物論は自ら止んで、所謂衆竅の虛たるを見るのみである。

語釋　非吹（吹は上くの吹と不同の吹字より生じ來る。）○言者有言（言には言の理あり、風吹の無心なるとは同じからず。）○果有言邪。其未嘗有言邪（亦有辯乎、其無辯乎と同一句法、無言無辯と云ふを強めたるなり。）○異於鷇音（鷇は初生の鳥なり。當時の爭論を鷇音に比す、刺しり得て痛快である、）○小成（小見即ち一偏の見なり。）○榮華（自ら相誇りて名譽を求むる意。）○儒墨之是非（儒は孔子の敎を奉ずるもの、墨は墨翟の敎を奉ずるもの。儒者は文化を是とし、墨者は質素を是とす、儒は厚葬を是とし、墨は薄葬を是とす。儒者は差別的愛即ち仁義を是とし、墨は無差別的愛即ち兼愛を是とするが如し。當時の論爭は獨り儒墨のみでないが、ここは一例を擧ぐるのみ。）○明（虛無自然の對的見地を云ふ。林希逸は明は天理なり若し是非を一定せんと欲せば須らく之を自然に歸して方めて可なるべしと云へり。）

物無非彼、物無非是。自彼則不見、自知則知之。故曰、彼出於是、是亦因彼。彼是方生之說也。雖然、方生方死、方死方生。方可方不可、方不可方可。因

以レ明。

訓讀 夫れ言は吹に非ざるなり。言には言ふこと有り。其の言ふ所の者特に未だ定らざるや、果して言有りや、其れ未だ嘗て言有らざるや、其れ以て鷇の音に異なりと爲すも、亦た辨ありや、其れ辨無きか。道は惡くにか隱れて眞僞ある、言は惡にか隱れて是非ある。道は惡にか往くとして存せざる、言は惡にか存すとして可ならざる。道は小成に隱れ、言は榮華に隱る。故に儒墨の是非あり。以て其の非とする所を是とし、而して其の是とする所を非とす。其の非とする所を是とし、而して其の是とする所を非とせんと欲せば、則ち明を以てするに若くは莫し。

大意 上に物論の囂々たる所以を說き去り說き來る、此に於て始めて物論を齊うするの法あるを言ふ。卽ち齊物論の面目始めて露呈す。

通釋 抑も言葉と云ふものは風の音とは違ふ。なぜならば風の音には意味がないが言葉には言葉の意味がある。されば言葉を以て表はさんとする意見がハツキリ定まつて居ない場合には、そこに言葉と云ふものがあるだらうか、決して眞の意味の言葉と云ふものは無い。まだ意見が定まつて居ないのに吐かれたる言論は、意味のない雛の鳴き聲とは違うと思ふかも知れないが、何んと其の間に區別があるだらうか、それとも何等の區別がないだらうか、勿論かゝる意見未定の言論は雛音と何んの區別もない。滔々たる世の言論は皆然りで、雛の鳴き聲と同樣である。さて至道にはもとより眞僞がないのに、道の本質が何處に隱れて眞僞を生じたのか。至言にはもとより是非の辨なし、

立てるのは、是れ今日あの遠い越の國に出發しながら昨日も行つて來たのだと謂ふと同じ樣な、全然有り得ないことを有ると主張するが如き暴論をすることになる。而も滔々たる天下の論者然りである。是れ成心に隨はずして、己見に隨つて立論するが爲めである。斯く有り得ないことを有りと主張することになれば、神明の如き大禹が居ても、到底その論旨を知つて相手を說きさとすことが出來ぬ。神禹ならぬ吾れ人にあつては固より何うしようもない。是れ物論の囂々たる所以である。

語釋 成心（諸解ありて一ならず、姑らく林希逸の說に從つて說く。）○誰獨且無師乎（人々皆天與の本心を具有す故に然か云ふ、且は皆なり。）○知代（代は上文に日夜相代乎前の代、萬物を代がせしむる眞宰を云ふ、一說には化字の誤と見、造化の事と解す。）○心自取者（其の心に見る所ある者を云ふ、知代而心自取者とは聖賢の士を謂ふ也。）○未成乎心而有是非（其の成全の本心を失つて妄りに是非の意見を生ずるを云ふ）○今日適越而昔至也（未だ嘗て實に至らずして此の言をなす、全く是れ虛妄の詞。此れ當時辯士の語なり、之を取りて以て妄言の證となす。）

夫言非吹也。言者有言。其所言者特未定也。果有言邪、其未嘗有言邪、其以爲異於鷇音、亦有辨乎、其無辨乎。道惡乎隱而有眞僞、言惡乎隱而有是非。道惡乎往而不存、言惡乎存而不可。道隱於小成、言隱於榮華。故有儒墨之是非。以是其所非、而非其所是。欲是其所非、而非其所是、則莫若

有、雖有神禹、且不能知。吾獨且奈何哉。

訓讀 夫れ其の成心に隨つて之を師とせば、誰か獨り且た師なからんや。奚ぞ必ずしも代るを知りて、心に自ら取る者のみ之れあらん。愚者も與り有り、未だ心に成らずして是非あるは、是れ今日越に適きて昔至るなり。是れ有る無きを以て有るとなす。有る無きを有りと爲さば、神禹ありと雖も、且つ知ること能はじ。吾れ獨り且た奈何せんや。

大意 物論の由つて起る所以を述ぶ。尚ほ大知閑々より此に至るまでは、莊子自ら人心の變態が上に謂ふ所の風木の形聲と相似たるを摹寫し、遂に凡ての支配者たる眞君の存在に說き及び、眞君の賦與せる成形成心に隨へば行く〳〵師に遇ひ、道を誤ることがない。然るに人之に隨はず、故に是非の己見生じ、此に物論起ると論ず。殊に本節に於て始めて是非の二字を露呈し、後來議論の張本となす。凡そ是非の爭は物論の原なるが故に此に未成乎心而有是非と說くは一篇の眼目で、之が物論不齊の根本である。

通釋 抑も人の形體は既に天の成せるもの、心は固より天の賦與せるものなり。人たる者が天より與へられたる自然の心に隨つて之を師として行く時は、何人と雖も師なき者はない。萬物を代謝せしむる眞宰の妙用を認識して、其の心に識見ある者のみに師匠があるとは限らない。自然の妙用などには少しも氣の付かぬ愚昧な者にも到る處に指導者があるのである。然るに未だ成心に隨ふ能はず、卽ち心に確乎たる意見が成立せざるに、强ひて是非の論を

通釋 上に述べたるが如く此の宇宙には眞君が存在して居て、萬物は悉くその支配を受けて居る、故に人たる者も一たび眞君からその形體を受けて生れ出でた以上、各々分際と云ふものがあるから、アクセクして自ら身を亡ぼすやうなことをしないで、自然に從つて此の形體の盡きるのを靜かに待つべきである。然るに人々は自然に順應することは能はず。徒に外物と逆ひ、外物を追ひ、其の一生を行き盡すことは奔馬の馳せ過ぐるが如く、一息も自ら寧んずることが出來ない。何んと悲しいことではないか。一生涯骨折り苦しんで益する所なく、ヘトヘトに勞れ苦しんで其の落着き所を知らない。痛ましいことではないか。人生の自ら苦しむこと既に此の如く、長生きしたといつても何の益もない。かくて其の肉體が老衰するにつれて、其の心も亦衰弱して仕舞ふ。この上もない哀しいことと云はざるを得ない。さて人生と云ふものは元來此の樣に迷へるものだらうか。それとも自分のみ獨り迷つて居て、人の中には迷はない者もあるだらうか。否々世を擧げて迷へり、迷へるが此の世の常である。

語釋 成形（人の身は天の生じたものである、故に自然に成れる形體なるが故に成形と云ふ。） ○相刃相靡（刃は逆ふなり、靡は順、外物に惹かれ靡るゝを云ふ。一說には靡は切靡なり、刀刃を以て外物と切りちがへる意。） ○役々（自ら苦しむの貌。） ○苶然（苶一本に薾に作る、困苦の貌、ヘトヘトに疲れる様。） ○謂ㇾ之不ㇾ死（百年の長壽と雖もの意。） ○形化（幼より壯、壯より衰、衰より白髮となり白より老となる如く、次第に老衰するを云ふ。） ○芒（闇昧なり。又茫然として見識なき意。）

夫隨₂其成心₁而師ㇾ之、誰獨且無ㇾ師乎。奚必知ㇾ代而心自取者有ㇾ之。愚者與有焉。未ㇾ成₂乎心₁而有₂是非₁、是今日適ㇾ越而昔至也。是以ㇾ無ㇾ有爲ㇾ有。無ㇾ有爲

腎の五藏と、腎に有藏あり左は腎、右は命門、併せて六藏なり。）○賅（備なり、兼なり。）○我誰與爲親（此の句は下の二句、汝皆說之乎。其有私焉と照應す、皆說と有私とは與爲親の意。下の有眞君存焉に至るまで解しにくし。姑らく胡方の「解正」に從つて解す。）○其有私焉（焉は乎に同じ。）○如是（吾れ之を親愛せずとせばの意。）○其臣妾不足以相治也（其臣妾は上の臣妾の語をそのまゝ受く、身體の諸機關を指す。也字諸本乎字に作る、宣穎の南華解本に從つて也とす。或は爲字に作るを是となす。）○眞君（上の眞宰に同じ、造化自然の妙用を人格的に形容して云へるなり。）

一受其成形、不亡以待盡。與物相刃相靡、其行盡如馳、而莫之能止。不亦悲乎。終身役役而不見其成功、苶然疲役而不知其所歸。可不哀邪。人謂之不死、奚益。其形化、其心與之然。可不謂大哀乎。人之生也、固若是芒乎。其我獨芒、而人亦有不芒者乎。

訓讀　一たび其の成形を受くれば、亡さずして以て盡くるを待つ。物と相刃ひ相靡き、其の行き盡すこと馳するが如くにして、之を能く止むる莫し、亦悲しからずや。終身役役として、其の成功を見ず、苶然として疲役して、其の歸する所を知らず。哀しまざる可んや。人之を死せずと謂ふも奚ぞ益あらん。其の形化し、其の心も之と然り。大哀と謂はざる可けんや。人の生や、固より斯の若く芒たるか。其れ我獨り芒にして、人亦芒ならざる者あるか。

大意　人は皆自然に從ふべきに、反つて之に逆ひ、自ら求めて苦み迷へるを說く。

主人の爲めに働くが如く、特に忠勤を勵むと云ふことは恐らくあるまい。即ち汝は身體諸機關の君主ではない。其の臣妾即ち身體の諸機關は各自己を治める力が足りないから、彼等は相互に君となり臣となりて治め合ふだらうか。互に助け合ふことはあるにしても一が君として他を使役し、他は臣として一に使役せらるゝと云ふが如きことはない。即ち身體諸機關の中で君となるべきものはない。斯く觀來ると吾も諸機關の君でなく、諸機關中にも君となるべきものがない。而も身體諸機關の活動は極めて圓滿に行はれて居る。何と不思議ではないか。實にそこには冥々の主宰たる眞君即ち大自然の力が嚴として存して居る爲めに外ならぬ。聖者は眞君の實情を知り、凡人は之を知り得ないが、かく人が知らうが知るまいが、そんなことは眞君其のものゝ價値には何等增減がない、眞君として依然として妙用を發揮して居るのである。

語釋 慮嘆（慮は未來のことを心配すること、嘆は已往のことを嘆くこと。）○變慹（變は輕躁にして常心なき者、卽ち心の變り易いこと。慹は執に同じ、執着深いこと。）○姚佚（姚は姚冶眉を獻ずるに務むるを謂ふ。卽ち品を作つて人の機嫌を取ること、佚は逸に同じ縱逸無作法なこと。）○啓態（啓は開なり、開放的なこと、態は修飾とて態度を粧ひ、モツタイブルこと。）○樂出ㇾ虛、蒸成ㇾ菌（樂出ㇾ虛、菌成ㇾ蒸と書くべき所を、わざと形を變へたのである。一種の修辭法なり。）○已乎已乎（且つ嘆じ且つ止めむの辭。卽ち喜怒哀樂等の由つて生ずる所が中々分からんから一方に嘆きつゝも一方には倘もふんで之を知らうとする意なり。）○旦暮得ㇾ此、其所ㇾ由以生乎（一說には旦暮得ㇾ此。其所ㇾ由以生乎。即ち旦暮に此を得なり。其れ由つて以て生ずる所かと訓む。其の意は凡そ人は朝から暮れまで此れ（此字彼も重し、下の非ㇾ彼の彼と同物を指す、即ち下文の眞宰眞君を指す、自然の力、造物者の力を云ふ）の力を受けて一切の活動をなして居る。して見ると此の力こそ喜怒哀樂等の心的作用の原由ではあるまいか。かく深究すると自ら非ㇾ彼無ㇾ我。非ㇾ我無ㇾ所ㇾ取。是亦近矣の句も見方が違つて來る、即ち上の此字と彼字とは同じく眞宰を指す。萬種の本源である眞宰が無かつたならば我と云ふものは無い、然し我と云ふものが無かつたら喜怒哀樂等の現れる場所がない、卽ち眞宰の力の現はれる餘地がないのである。して見ると彼と我とは極めて近いものである。）○其眹（跡なり。）○有ㇾ情（情は實なり。）○百骸九竅六藏（骸は骨なり、百體中の多くの骨節を云ふ。九竅は目二、耳二、鼻二、口、陰門、肛門。六藏は心肝脾肺

れ等の源は中々知ることが出來ない。あゝ其の本源はとても分からぬ。とても分からぬが朝夕其の生ずる原因を知らんものをと努力して見ると、こんな風に考へられる。卽ち彼れ喜怒哀樂等の十二般の心的表現がなかつたら、外に我と云ふものゝ認むべきものがない。之と同時に我と云ふ全體がなかつたら、彼れ卽ち十二般の心的表現も現れ(形を取る)やうがない。かく彼と我とは相關的のものであると考へるのは確かに道理に近い考へ方である。卽ち相關的原因は斯く考へることによつて分かるが、然し我をして喜怒哀樂せしむる所の絕對的原因は依然として分からない。そこには確かに冥々の主宰、眞の支配者が有る樣に察せられるが、然し特に是れぞと云ふ眞宰の跡方を見ることが出來ない。そこに眞宰の作用が行はれて居ることは最早や疑ふ餘地はないが、然しどうも眞宰の正體、姿を見ることが出來ない。卽ち眞宰には實際の作用はあるが形と云ふものがない。形がないからとて其の存在は絕對に疑ふべきでない。(是亦近矣の近、若レ有二眞宰一の若、可レ行已信の信と一步一步考を進めて遂に眞宰の存在を諾かしめるのである。)以上は人の精神作用と眞宰との關係を述べたのであるが、更に人の肉體と眞宰との關係を說かんに、さて、人の體軀には百骸九竅六臟の如き機關が完備して居るものである。その主人公たる吾れは是等の諸機關の中で、どれに一等親しいのか、卽ち主人公たる汝(吾に同じ、書き方を變へたに過ぎない。)は吾が身のことだから全部可愛がつて居るのか、それとも或る一つ例へば目とか耳とか一つ丈を特に偏愛して居るのか。もと〳〵何れも同じ吾が身のことだから(不知不識の間、常に之を愛しては居るが)特に全體を愛するとか、況んや或る一つを愛すると云ふが如きことはあるまい。是の如く汝が特に是等を愛することが無いとすれば、身體全部も汝に對して下男下女が

存焉。如求得其情與不得、無益損乎其眞。

訓讀 喜怒、哀樂、慮嘆、變慹、姚佚、啓態、樂は虛より出で、蒸は菌を成す。日夜前に相代りて、其の萌す所を知る莫し。已みなん已みなん。旦暮此れ其の由つて以て生ずる所を得んか。彼に非ざれば我無し。我に非ざれば取る所無し。是れ亦近し。而も其の使しむるを爲す所を知らず。眞宰あるが若し。而も特に其の眹を得ず。行はるべきは已に信なり。而も其の形を見ず、情あれども形なし。百骸九竅六藏、賅ねて存す。吾、誰と與にか親を爲さん。汝皆之を說ぶか。其れ私有るか。是の如きは皆臣妾たることあるか。其の臣妾は以て相治むるに足らざるなり、其れ遞に君臣を相爲すか。其れ眞君ありて存す。其の情を求め得ると、得ざるとの如きは、其の眞に益損なし。

大意 人の心が外界に對する時に生ずる情態卽ち喜怒哀樂等、種々の心的表現はもとより、百骸九竅六藏の如き吾々の肉體も皆眞君卽ち道の支配を受けて居ることを說く。

通釋 以上の如く人の心が外界に對する時、喜怒哀樂とて喜んだり怒つたり、又は悲しんだり樂しんだり、或は先のことを取り越し苦勞したり、過去のことを嘆いたり、或は又心が變り易かつたり、執着深かつたり、姚佚として品を作つて人の心を迎へたり、之に反して放逸無作法であつたり、啓態とてあけつぱなしであつたり、もつたいぶつたりする。斯かる種々の情態は何處から起つて來るか。それ等は恰も音樂が樂器の空虛な處から鳴り出し、菌が濕氣の蒸せた處から生える如く、日となく夜となく吾等の眼の前に、入り代り立ち代りに起つて來るが、而もそ

てボンヤリとして事が手につかぬこと、）○其發若二機栝一、其司二是非一之謂也（此の句は通常の語法に従つて書き直すと其司二是非一若二機栝一となる。それをわざ〱倒裝法を用ひて斯様に書いたのは作者の巧み弄したのである。下の其留如二詛盟一、其守レ勝之一也、其殺如二秋冬一、以言二其日消一也。其厭也如レ緘、以言二其老洫一也の三句皆同じ句法である。其字は小知小言の人を指す。發とは言を發すること。機は弩に於いて居る石を射出す仕掛。栝は「ヤハズ」。司は主なり、取りさばくこと。）○其留如二詛盟一、其守レ勝之謂也（留は心を留める、念を入れること。詛盟とは大事を盟と曰ひ、小事を詛と曰ふ。大小の盟約を曰ふ。）○溺之所レ爲レ之、不レ可レ使二復之一也（溺は物欲に惑溺して居ること。一説に尿と解す。爲レ之の之は往也。復之の之字は上の字と同じく往くと讀む說あり、又衍文又は助詞となす說あり、又代名詞「コレ」と讀み、上の復字を「カヘス」と讀む說ありて一定せず。然れども復之の二字は下の復陽の二字に對す。二の復字は共に副詞なり、之字は陽字に對するが故に動詞として讀まざるべからず、然し或說の如く「往く」とよむ時は意味を取りにくし、或は又このまゝ之字を「カヘル」と訓む說あれど不安なり。恐らくこの文字は誤りならん。或は出字の誤か、姑く疑を存し、後考を俟つと云ふ。）○老洫（洫は溝なり、老いて愈々利欲の溝にはまること。一説には洫は恤に通ず、老年に至るまで憂恤を免かざる意となす。）○復陽（陽は要なり、若返らぬ意。）

喜怒、哀樂、慮嘆、變慹、姚佚、啓態、樂出レ虛、蒸成レ菌。日夜相二代乎前一、而莫レ知二其所一レ萌。已乎已乎。旦暮得レ此、其所二由以生一乎。非レ彼無レ我。非レ我無レ所レ取。是亦近矣。而不レ知二其所一レ爲レ使。若レ有二眞宰一。而特不レ得二其眹一。可レ行已信。而不レ見二其形一、有レ情而無レ形。百骸九竅六藏、賅而存焉。吾誰與爲レ親。汝皆說レ之乎。其有レ私焉。如レ是皆有レ爲二臣妾一乎。其臣妾不レ足二以相治一也。其遞相二爲君臣一乎。其有二眞君一

小言の人は寢た時でも心が休むことなく、絶えず互に交渉して夢を見る。目が覺めると肉體が活動し始めて、外界の事物と交接して色々面倒なことを惹き起し、毎日々々精神的闘爭をなして居るのが小人の常である。その中には事を爲すに怠緩でズボラな者もあり、或は穴藏のやうに心の用ひ方が深くて陰險な者もあり、又は事を爲すに極めて細かい者もある。斯く型は色々違ふが、要するに皆外物に對して心をこき使ひ、心に少しの落着がないから、何か小さな恐怖に遇つた時にはビク〱と縮み上り、大きな恐に遇つた時には、途方に暮れて事が手につかないのである。更に小人どもが我は是、人は非なりと主張する際に、その口のきゝ方の巧妙なことは恰も「ユハズ」や「ヤハズ」の様に巧且敏である。又彼等が自分の勝を頑張る時に心を留め念を入れることは全く誓盟の時のやうだ。又彼等が外物との爭闘の爲めに日に日に消耗して吾れと吾が身を殺して行くことは、かの秋冬の氣候が草木の葉を枯死せしむるに似て居る。かく惑溺者の自ら進んで往く所は、それは死滅の淵であつて、またと元へ還らしめることは出來ない。更に彼等が老いて益々深溺に落ち込んだやうに利欲の心が深くて全く物欲の爲めに心が蔽はれて居ることは恰も紙か布で封緘されたやうである。か様に殆んど死んだ心は、またと若返らせることが出來ない。誠に哀れなことである。

語釋　閑閑（活靜の貌、又は富裕の貌。）○閒閒（伺レ閒投レ隙の貌、閒は覗なり、好んで人のスキを伺つて突き込むこと。）○炎炎（熾盛有二光輝一貌、又に美盛の貌。）○詹詹（小言小辯の貌、又は詞費也とて無駄口の多いこと。）○魂交（夢を見ることを魂交とか或は神接と云ふ、眞人に夢なしとて大人は常に心の安靜を得て居るから夢を見ないが、小人は貪閒外物の刺戟を受け、寢ても心の落着きがない、從つて色々のことを夢に見るのである。）○縵者（縵縵にて果斷なく優柔な人を云ふ。）○窖者（アナグラ、心の用ひ方が深くて他の推測を許さぬ陰險な人に喩ふ。）○密者（一錢一厘位のことでも必ず較べて見ると云ふやうな細かい人を云ふ。）○惴々（小心恐懼の貌。）○縵々（散縵自失の貌、餘り恐れすぎ

非之謂也。其留如詛盟、其守勝之謂也。其殺如秋冬、以言其日消也。其溺之所爲之、不可使復之也。其厭也如緘、以言其老洫也。近死之心、莫使復陽也。

訓讀 大知は閑閑たり、小知は閒閒たり。大言は炎炎たり、小言は詹詹たり。其の寐ぬるや魂交はり、其の覺むるや形開き、與に接して構を爲し、日に心を以て鬭ふ。縵なる者あり、窖なる者あり、密なる者あり、小恐は惴惴たり、大恐は縵縵たり。其の發する機栝の若しとは、其の是非を司るの謂なり。其の留まる詛盟の如しとは、其の勝を守るの謂なり。其の殺す秋冬の如しとは、以て其の日に消するを言ふなり。其の溺るゝの之くを爲す所、復た之かしむ可からず。其の厭せらるゝや緘るが如しとは、以て其の老洫を言ふなり。死に近きの心、復た陽せしむる莫きなり。

大意 以下莊子自らの言である。此の一節は小知の者卽ち世の人々が外界の事物に對して心を驅使し、日に〳〵その本心を消耗せしむるを述ぶ。

通釋 以下莊子自らの言である。さて大知の人はしづかでゆつとりとして居るが、小知の人はコセ〳〵と人の言行を覗きたがる。大人の言は炎の立昇る如く美しく盛んであるが、小人の言はコマ〳〵と無駄口が多い。故に小知

つまみの土が横へで廣大となり大地を成す。故に大地を以て大塊と云ふ也。一說には天地自然の稱となす。）○是惟無レ作（作っざれば已むと云はんが如し。惟一本に唯に作る。）○萬竅怒呺（萬竅は萬木の穴。呺は號也、呼也。）○而獨不レ聞ニ之翏翏一乎（而は汝なり。翏翏は風聲の遠聞の貌。卽ち遠くから近づき來る風の聲なり。翏々……乎と云ふ句法は前篇にて說明せり。）○山林之畏隹（畏隹、難解の語。諸說あり、姑らく釋文に引く李頤の說に從ひ、畏佳は山阜貌とて山の高きを形容した語と見る。一說には扇動の貌とあり。卽ち風が樹木の枝を動搖せしむる形。）○似レ枅（枅は柱の上にある方形の横木で棟を承くるもの、スガタのこと。四角な穴を形容したのである。）○似レ圈（圈は屈曲の屬とあり、サカヅキのことなり圓形の穴を形容す。）○似レ洼者似レ汚者（洼は窪に同じ、洼汚皆地の掘れて窪んだ所を云ふ、洼は其の淺くして廣きもの、汚は深くして狹きものを云ふ。似鼻よりこゝに至る。皆穴の形の齊しからざるを形容す。）○激者（水流の激聲、卽ち水が岩などに當りて發するやうな聲。）○謞者（矢が飛び去る時に發する如き聲。）○譹者（哭する聲。）○宎者（深くして聲留まらなりとあり、卽ち太くて短かい聲。）○咬者（吠えて聲續くなりとあり、卽ち犬の遠なきの如く、低くて續づく聲。）○前者唱レ于、而隨者唱レ喁（于は輕い聲。喁は重い聲、風の前に來るものは「フウー」と輕い聲をたて、その後について行くものは「ゴウー」と重い聲を發し、吹き通る意。）○冷風則小和、飄風則大和（冷風は小風なり。風小なれば相和するの聲亦小なり。飄風は大風なり、風大なれば相和する聲亦大なり。）○厲風濟（厲風は猛風なり、濟は過也、止也。）○調調刁刁（共に風の爲めに樹枝の動搖するを形容した語、動搖の漸く微なるを刁刁と云ふ。）○比竹（笙や笛の類を云ふ。人籟は比竹のみでは無いが、特に其の一例を擧ぐるのみ。）○吹萬不同（吹は風なり。風の爲めに聲を發す物は、その多きこと萬ほどもあるが、皆各々相同じではない、大小高低の相違がある。）○使ニ其自一レ已也（其字は不同の風聲を指す。已は穴の如き風が當りて聲を發する物自身を云ふ。物とか穴とかと云ふ文字を用ひないで、已と云ふ字を用ひたのは、聲は凡て已れの力で出るのだと穴が自惚れて居る意味合をあらはさんが爲めである。使字に最も意味あり、穴は身に穴から聲が出ると、それは已の力で聲を出して居ると思つて居るが、實は大自然の力が斯くせしめて居るとの意あり。卽ち使字の主語は大自然であるが特に省いてある。）○咸其自取（咸は穴を指す。其字は強勢の助辭。自取とは穴自らの力で聲を出して居ると思ふ意。）○怒者其誰邪（怒はハゲマスと訓む。前篇の怒而飛の怒と同意。一句の意味は、穴の鳴るは風の力であるが、風を激しく吹かせるのは又誰の力であるか、云ふまでもなく冥々の主宰、卽ち大の力である。天籟の何物たるを云はずして而も言外に能く之を說けり。是れ所謂不言の答なり。）

大知閑閑、小知閒閒。大言炎炎、小言詹詹。其寐也魂交、其覺也形開、與レ接爲レ構、日以レ心鬭。縵者、窖者、密者。小恐惴惴、大恐縵縵。其發若ニ機栝一、其司ニ是

ば水が岩に當つて發するが如き聲もあり、又は矢が飛び去る時に發する如き聲もあり、或は人が叱かるやうな聲、息を吸ふやうな聲、叫ぶやうな聲、ス丶リ泣くやうな聲があり、はては太短い聲、細長い聲がある。それから前に吹き行く風は「フウー」と輕い聲を發し、後からついて行く風は「ゴウー」と重い聲を發し、小さい風はそれ相應の小さい聲を發し、大きい風は亦大きな聲を發して吹き渡るのである。然し此の烈しい風が通り過ぎて仕舞ふと、今まで音を立て丶居た多くの穴は靜かになる。大風一過後には最早や音は聞こえないが汝はいつも樹木の枝が尙大ゆれ小ゆれするのを見るであらう。是れが乃ち地籟の一つであるぞ。」子游が更に尋ねて曰ふには「して見ると地籟は只今御話しの多くの穴に風が當つて發する聲であり、人籟は御敎を待つまでもなく笙や笛の音を申すのだと存じます。誠に御面倒で恐縮の至りですが第三の天籟と申すのを御伺ひ致します。」そこで子綦先生が敎へて曰はれるには「そも〳〵凡て風の爲めに物（穴の如き）から發する聲は萬種もあつて而も皆同じでない。高低强弱の別がある。その異つた音が己れ卽ち穴から出ると、穴どもは皆自分の力で音が出るのだと思つて仕舞ひ、外に大きな力の働いて居ることに氣がつかない。さて音を誘ひ出す風を勢はげしく吹かせる者は一體誰であらうか、言はずと知れた虛無自然の大道卽ち下に謂ふ所の眞宰眞君である。此の眞宰こそ所謂天籟であるぞ。此の眞宰を認識し天籟を聞くやうにならなければ、吾れ、我を喪ると云ふ境地はとても分からぬぞ。此の境地に立つて始めて騒然たる物論を齊うすることを得るのであるぞ。」二子の問答、此に終る。

語釋　敢問二其方一（敢問とは卑者が尊者に對して用ふる有禮の語、尊者の煩勞をも省みず、已が疑を明かにせんが爲めに推して問ふの意。方は之也理也。已に三籟の名を聞けども、未だその義を解せず、故に問ふなり。）　〇大塊（大塊なり。一

耳に似たり、枅に似たり、圏に似たり、臼に似たり、洼に似たる者、汚に似たる者、激する者、謞する者、叱する者、吸ふ者、叫ぶ者、譹する者、宎する者、咬する者、前なる者は于と唱へて、隨ふ者は喁と唱ふ。冷風は卽ち小和し、飄風は則ち大和す、厲風濟れば、則ち衆竅虛と爲る。而、獨り之が調調と、之が刁刁とを見ざるかと。子游曰く、地籟は則ち衆竅是れのみ。人籟は則ち比竹是れのみ。敢て天籟を問ふと、子綦曰く、夫れ吹萬同じからず、而して其をして已よりせしむるや、咸其れ自ら取る。怒ます者は其れ誰ぞやと。

大意 三籟を說明す。地籟を以て物論の騷然たるに喩ふ。陳壽昌論じて曰く「此れ蓋し風聲を以て物論を形はすなり。聲は風に由つて生ず、倏ち起り倏ち滅す。論は心に由つて造る。何れか是、何れか非なる、必ず風なくして而る後に衆聲息む。必ず心なくして而る後衆論息む。此れ漆園（莊子のこと）物論を齊うせんと欲して、先づ我を喪るゝを言ふ所以なり。

通釋 弟子の子游が尋ねて曰ふには「御無禮ですが、三籟の何物なるか、其の意義を御尋ね致します。」子綦答へて曰く「そも〳〵大地が人の噫の如く吐き出す氣をば、名づけて風と云ふ。その風が起らなければ、それまでだが、起つたら最後、有らゆる樹木の穴が激しく叫び出す。汝も定めてあの遠くから次第に近づいて來る風の音を聞いたことがあるだらう、其の翏翏と音をたてゝ近づいて來る風が、山林の高い崖に生えて居る百抱もある大木の穴に當ると、其の穴の形が種々雜多であつて、人の鼻や口や耳に似たのがあり、或は「マスガタ」や盃や臼に似たのがあり、或は地の窪みに似たのがある。斯樣に形が違つて居るから穴に當つて發する風の音も自ら異つて居る。例へ

○喪₂其耦₁（耦は對なり、物我ノ相對を超越すること。一説には耦は身なり、身は心と對をなす。故に心を忘るゝことを耦を喪ると云ふ。）○何居乎（居は故に同じ。一説には居は乎に同じ。乎は下文に因りて衍すと、此の三字、下の四句を管到す、一氣に讀むべし。）○偃（子游の名。一説には、ふせよと訓み、坐せよとの意に解すれども取らず。孔子の弟子に子游あり。名は偃、則ち偃游の字相配す。）○吾喪レ我（吾は己が一身を云ふ。我は我に對して云ふ。吾喪レ我とは自我を忘却したこと、自我を忘却した際には内外物我の對なく、全く超然自得の境地たり。）○人籟地籟天籟（人籟は人の作つた音樂、管絃の音の如し。地籟は地上の音樂、松風の如し。天籟は天上の音樂、人籟地籟の本源をなす大自然の力を云ふ。下文に詳らかなり。）

子游曰、敢問其方。子綦曰、夫大塊噫氣、其名爲風。是惟無作。作則萬竅怒呺。而獨不聞之翏翏乎。山林之畏佳、大木百圍之竅穴、似鼻、似口、似耳、似枅、似圈、似臼、似洼者、似汚者、激者、謞者、叱者、吸者、叫者、譹者、宎者、咬者、前者唱于、而隨者唱喁。冷風則小和、飄風則大和。厲風濟則衆竅爲虛。而獨不見之調調之刁刁乎。子游曰、地籟則衆竅是已。人籟則比竹是已。敢問天籟。子綦曰、夫吹萬不同、而使其自己也、咸其自取。怒者其誰邪。

訓讀 子游曰く、敢て其の方を問ふと。子綦曰く、夫れ大塊の噫氣、其の名を風と爲す。是れ唯作るなし。作れば卽ち萬竅怒呺す。而、獨り之が翏翏を聞かざるか。山林の畏佳なる大木、百圍の竅穴、鼻に似たり、口に似たり、

三籟に關する問答にかりて物論を齊しくする宗旨を述べたのである。既に叙說に於て云へる如く「吾喪我」の一句は齊物論の樞紐である、卽ち虛心忘我は絕對の境であつて、この境地に逍遙してこそ物論を齊うすることを得るのである。堂々數千言は實に此の一句の注脚たるに過ぎぬ。

通釋 南郭子綦と云ふ人が、或る時机により掛つて坐し、天を仰いで緩やかに息をして居る。その樣は無我無心、全く物我の相對を忘れ、人我一體の絕對境に逍遙して居るやうに思はれる。顏成子游と云ふ弟子が立つて其の前に侍つて居たが、子綦に尋ねて曰ふには「元來人の肉體と云ふものは枯れ木の如く、生きた樣子なく、心は全く火の氣の無い灰の如く、何の心も起さないで居ることが出來るものですか。今先生が机にもたれて居らつしやる樣子は、是れまでとは違つて居りまして、全く槁木死灰の如く無心無我としか思はれません。是れには何か理由のあることでせうか、御教にあづかりたいもので御座います。子綦曰く「偃よ、汝の質問は如何にも善いではないか。誠に善い處へ氣がついた。今こそ吾は自我を忘却し、物我の相對を超越する境地に達することが出來たが、汝にはそれは分るまいなあ。汝は簫笛の如き人爲の音樂は、聞いたことがあるだらうが、まだ松風の如き地上の音樂は聞いたことがあるまい。或は地籟は聞いたことがあるだらうが、まだ天籟とて、萬物の源泉となる微妙の音樂を聞いたことはあるまいなあ。此の天籟を聞くやうにならなければ、吾れ、我を喪ると云ふ境地はとても分からないぞ。」

語釋 南郭子綦（楚の昭王の兄弟で、莊王の時司馬となつた人。字は子綦。南郭として城南の村に居たから之を號した。此の人道德高く虛心恬淡であつたから莊子は常に其の清高を慕つて居た。故に此の人に託して己が所見を述べたのである。）○隱几（隱は憑なり、几一本に机に作る意同じ。）○噓（緩息とて緩るやかに息をすること。）○嗒焉（嗒、一本に荅に作る、同じ。焉、一本に然に作る。無心貌又は相忘貌としてボンヤリとして我無心の有樣。一說には解體貌とてユッタリと見るから樂さうな樣。）

がない。若し夫れ物我の相對を忘却して、萬物一體の絶對境に安住する時は、我も無く物も無し、況んや是非正邪の論あらんや。世の物論を齊うする所以のもの、之を措いて他に求むべからず。是れ莊叟が「吾喪レ我」の一句を提して篇首に置く所以である。

南郭子綦、隱レ几而坐、仰レ天而噓。嗒焉似レ喪二其耦一。顏成子游、立二侍乎前一。曰、何居乎。形固可レ使レ如二槁木一、心固可レ使レ如二死灰一乎。今之隱レ几者、非二昔之隱レ几者一也。子綦曰、偃、不二亦善一乎、而問レ之也。今者吾喪レ我。汝知レ之乎。汝聞二人籟一而未レ聞二地籟一。汝聞二地籟一而未レ聞二天籟一夫。

訓讀　南郭子綦、几に隱りて坐し、天を仰いで噓す。嗒焉として其の耦を喪るるに似たり、顏成子游、立つて前に侍す。曰く、何居や。形は固より槁木の如くならしむべく、心は固より死灰の如くならしむべきか。今の几に隱る者は、昔の几に隱る者に非ざるなりと。子綦曰く、偃、亦善からずや、而の之を問ふや。今は吾、我を喪る。汝之を知るか。汝は人籟を聞きて、未だ地籟を聞かず。汝は地籟を聞きて、未だ天籟を聞かざるかと。

大意　虛無の眞人、南郭子綦の風貌を寫して問答の端を造す。尙ほ下文怒者其誰邪に至るまでは子綦と子游との

內篇齊物論第二

【叙說】是れ本書の第二篇なり。內七篇中に於て、最も大作にして最も難解の文である。

齊は整なり、ヒトシクスと訓ず。物論とは世間の騷がしき議論の意、當時の儒者墨者輩の是非の論を指す。さて前篇に在つては人心多く小知小見に拘はるを斥ぞけて大を貴んで居るが、本篇に於ては人心多く小知に拘はり、己見に泥めるを斥ぞけて虛を貴んで居る。物論の由つて起るのは小知小見に拘泥するに在る。故に之を排して、大の至極である虛無に安住するを敎へて居る。小知とは何である、物我の相對觀を云ふ。虛無とは何である、無我無心の境、卽ち物我一體の絕對觀を云ふ。毛利貞齋曰く「齊物論とは物論を同一齊に見よと云ふことを指示すると云ふ義なり。所謂天地同根、萬物一體と明らむることを敎へ示すなり。其の物論とは何ぞ、世上暗愚の徒が、人我の間を有し、是非の爭を喧しくして、一生の年月の久しきが間、波を起し塵を揚るの議論を云ふ。無ㇾ風起ㇾ波が如く本然の心地を泥塗を以て汚す樣なる騷動するを敎を垂れて頂門の眠を豁開させて、是非邪正曲直等千差萬別に轉ぜらるゝの亂を靜めて、湛然の地に到得させ、萬化を一如に曉さしむるの篇なる故に齊物論と號するなり。如ㇾ此云へばとて、强ひて齊しくすると云にはあらず、根元齊しきを不ㇾ知して、枝葉に亂るゝを本然の齊きを敎へ告るなり」と。說き得て明快である。我と人とを對立せしめ、所謂物我の相對觀に墮在して居ては論更に論を生じ底止する所

平日頃からよく承知して居る意。
本書に此の用例極めて多し）

て、コンパスも定木も中らない。買ひ手はないかと之を路傍に立てゝ置いても、大工などは振り返つても見ないと云ふ何とも手の着けられぬヤクザな木なんだ。處が丁度そこ許の言ふ所は此の木と同じく、大袈裟で役に立たぬ。是れ世人が尊公の許から去て相手にせぬ所以である。」莊子が曰ふには「尊公も定めてあのタヌキと云ふ奴を見たことがあるだらう。彼奴は身をこゞめて隱れて居り、呑氣に遊んで居る小動物を覗つて捕へようとし、或は東に又は西に躍り廻つて、地面の高低をかまはない。その活動風は如何にも小利口で役に立ちさうだが、却つてワナに罹つたり、網にかゝつたりして死んで仕舞ふ。處があの黑牛は其の大さは天の一方に垂れ下つた雲の樣である。これは確かに大きいが、鼠を執るやうな小器用さはない。然し又ワナや網にかゝつて死ぬやうなこともないのである。斯樣に物の働には色々あつて一寸小役に立ちさうでも却つてそれが爲めに命を縮めるものがあり、一向役に立ちさうもないが、却つてそれが役に立つて天年を全うするものがある。されば今尊公は大木を持つて居て、その役に立たないことを心配して居られるが、左樣な御心配は御無用である。何故其の木をば見渡す限り何物も無い村鄉か、或はひろ〱とした野原に植ゑて、ブラ〱と其の木の側に何事も爲すことなく、何ものにも束縛せられず氣樂に其の木の下で晝寢でもなさらんのか。左樣にすれば其の木はヤクザな木だから大工の斤や斧にかゝつて夭死することもなく、其の外の物も之を害することが無い。極めて安全地帶である。されば其の木が用ひやうがないからとて、何にも困つたり苦に病んだりする必要は御座らぬではないか。」

語釋 人謂二之樗一（實際は何ゝ木だか分らないが、世間の人は之をあの役に立たぬ臭い樗の木だと謂つて居るの意） ○子獨不レ見二狸狌一乎（狸狌は何人も平素見て居る所のもので尊公だけが獨り見ない筈はないだらう。無

死於罔罟。今夫斄牛、其大若垂天之雲。此能爲大矣。而不能執鼠。今子有大樹、患其無用。何不樹之於無何有之鄕、廣莫之野、彷徨乎無爲其側、逍遙乎寢臥其下。不夭斤斧、物無害者。無所可用、安所困苦哉。

訓讀 惠子、莊子に謂つて曰く、吾に大樹あり、人之を樗と謂ふ。其の大本は擁腫して繩墨に中らず。其の小枝は卷曲して規矩に中らず。之を塗に立つるも匠者顧みず。今、子の言大にして用なし。衆の同じく去る所なりと。莊子曰く、子、獨り狸狌を見ずや。身を卑くして伏し、以て敖ぶものを候ふ。東西に跳梁して高下を避けず。機辟に中り、罔罟に死す。今夫の斄牛、其の大さ垂天の雲の若し。此れ能く大と爲す。而れども鼠を執ふる能はず。今、子に大樹ありて、其の用なきを患ふ。何ぞ之を無何有の鄕、廣莫の野に樹ゑ、彷徨乎として其の側に爲す無く、逍遙乎として其の下に寢臥せざるや。斤斧に夭せられず、物、害する者なし。用ふ可き所なき、安ぞ困苦する所ならんやと。

大意 前節に同じ。岡松甕谷は、此の一節を以て後人の竄入となす。或は從ふべきに似たり。

通釋 或る時惠子が又莊子に向つて曰ふには「吾が家に大きな樹木がある。何んと云ふ名の木だか分からぬが、世間の人は之を樗と呼んで居る。其の幹は瘤々して居て、墨繩などはとても打てない。その小枝は曲りくねつて居

さないことの出來る點は宋人も此の客も同樣である。然し一方はその爲めに大名となり、他方は一生洴澼絖と云ふ賤しい家業から免れることが出來ないのは、此の技術の用ひ所が違つて居る爲めである。此の話の通り物も使ひ樣で、いくらでも役に立つものである。今そこ許が五石も這入るヒサゴを持つて居られたら、何んと之を大樽として川や湖に浮かべて呑氣に乘り廻ることを考へないで、そのヒサゴが平たくて物を容れ所がないことなどを心配するのですか。そんなことを心配して居る所を見ると、先生は相も變らず蓬草の曲つて短い如き一曲部に捉はれた小さな心を持つて居られて、素直に物の道理に達することが出來ないと見えるわい。」

語釋　惠子（姓は惠、名は施、宋人なり。魏の宰相となる。當時の思想家にて莊子と屢々議論した人。）○貽（遺なり。）○實五石（實は子なり、五石も容れる大きな實の意。或は五石をいると訓む。）○水漿（漿は酢・醬油・酒の類。）○堅（重なり。）○剖（分割なり。）○瓠（半瓠なり、杓として物を盛り、掬ふに用ふ。）○瓠落（平淺なり。）○呺然（虛大なり。）掊（打破なり。）○不龜手（龜音キン、皸の假借。皸は手足裂ずること。即ち手足にアカギレの切れることと云ふ。或は云ふ、龜音キ、アカギレの形が龜甲の文の如し。故に龜と云ふ。又云ふ、手が寒さの爲めに拘攣（チヂカム）すること龜の手縮するが如し、故に然か云ふと。）○洴澼絖（洴澼は洗なり漂なり。絖は絮（フルワタ）なり。古綿を水上に漂すこと。職業の名として三字直讀するを可とす。）○蓬之心（孟子盡心篇の茅塞子之心の句に據りて、外物が其の心を塞ぎ蔽ふと解するもあり、又其の心紛亂せること蓬の如しと解する說あれども、並に取らず。）

惠子謂莊子曰、吾有大樹、人謂之樗。其大本擁腫而不中繩墨、其小枝卷曲而不中規矩。立之塗、匠者不顧。今子之言、大而無用。衆所同去也。莊子曰、子獨不見狸狌乎。卑身而伏、以候敖者。東西跳梁、不避高下。中於機辟、

るなり。今、子に五石の瓠あり。何ぞ以て大樽と爲して、江湖に浮ぶことを慮らずして、其の瓠落として容るゝ所なきを憂ふるや。則ち夫子は猶ほ蓬の心あるかなと。

大意　此の一節は知見小なるものは無用のもの反つて用あるが如き妙理を知らざるを云ふ。

通釋　惠子と云ふ魏の宰相が、或る時莊子に向つて曰ふには「我が君が我に大ヒサゴの種子を贈つて下さつた。我は之を植ゑて、成長せしめた。處が五石も容れることの出來る實がなつた。それに水や飲みものを容れると、その重いことは到底自分一人の力で擧げることは出來ぬ。そこで之を分割して柄杓にして見ると、平淺くて物を容れる所がない。ガランと大きくないことはないが、役に立たぬから吾れは之を打ち割つてしまつた。」莊子が曰ふのに「元來先生は大きな物を使ふことが下手だ。昔し宋國の人にヒヾ、アカギレの妙藥を作るに上手な人があつた。代々古綿漂泊をば渡世として居たが、或る人が之を聞いて、藥の製法を百兩出すから敎へて吳れと申込んだ。そこで親族會議を開いて相談して曰ふには、我が家は代々古綿漂泊を商賣にして居るが、僅かばかりの利益しかない。今製藥の技術を賣れば一朝にして百兩の儲がある。だから此の技術を敎へてやらうと思ふ、皆さんどうか賛成して貰ひたい。」かくて客は此の製藥の法を學び得て、吳の王樣に藥の効能を說いた。たま〳〵吳の國と越の國と戰爭が起つたので、吳の王樣は試に此の男を一方の大將にして見た。處が此の大將、豫て習ひ覺えた不龜手の藥を最も有効に働かせる爲めに冬の眞最中に於て越人と水合戰をした處が藥の効力が十分あらはれて、大に敵を敗つた。そこで吳の王樣は此の男に知行所を與へて大名に取立てたとのことである。さて自分の作つた藥で、手にアカギレを切ら

洴澼絖爲事。客聞之、請買其方百金。聚族而謀曰、我世世爲洴澼絖、不過數金。今一朝而鬻技百金。請與之。客得之以說吳王。越有難。吳王使之將。冬與越人水戰、大敗越人。裂地而封之。能不龜手一也。或以封、或不免於洴澼絖。則所用之異也。今子有五石之瓠。何不慮以爲大樽、而浮乎江湖、而憂其瓠落無所容。則夫子猶有蓬之心也夫。

訓讀 惠子、莊子に謂つて曰く。魏王、我に大瓠の種を貽れり。我れ之を樹ゑて成る。而して實五石、以て水漿を盛れば、其の堅きこと自ら擧ぐる能はず。之を剖て以て瓢と爲せば、則ち瓠落として容るゝ所なし。呺然として大ならざるに非ざるなり。吾れ其の用なきが爲に之を掊けりと。莊子曰く、夫子は固より大を用ふるに拙なり。宋人に善く不龜手の藥を爲る者有り。世世洴澼絖を以て事と爲す。客之を聞きて、其の方を百金に買はんことを請ふ。族を聚めて謀つて曰く、我世世洴澼絖を爲すも、數金に過ぎず。今や一朝にして、技を百金に鬻ぐ。請ふ之を與へんと。客之を得て、以て吳王に說く。越に難あり。吳王之をして將たらしむ。冬越人と水戰して、大に越人を敗る。地を裂きて之を封ず。能く手を龜せざるは一なり。或は以て封ぜられ、或は洴澼絖を免れず。則ち用ふる所の異な

を短かく刈つて飾を用ひない。又イレズミをして美衣をつけないのが風俗であつたから、折角宋人の仕込んで來た冠を用ふる餘地がなかつた。そこで宋人は中がはづれてボンヤリ歸つたと云ふことだ。之と似た話がある。モツト大昔し堯と云ふ聖天子が、天下中の澤山な民をよく治め、廣い天下の政事を公平に行ひ得て、如何にも得意然と功名話でもするつもりで、四人の隱者に藐姑射の山へ會ひに行つた。然るにまだ山まで行かない中、やつと汾水の北まで來ると、自然と四子の德の力に打たれて、今までステキに大きく貴く見えた大切な天下をボンヤリと忘れて仕舞つたと云ふことである。

語釋　宋人（宋は殷の微子が始めて封ぜられた國である、從つて殷の朝廷に仕へた臣民が多く此の國に來つて居た。殷人は周の頑民などゝ呼ばれる位で、餘程律義な又融通のきかぬ人があつたと見え、その後をなす宋人も孟子韓非子莊子の如き周末の諸子に、トンマな人物の例として好んで用ひられて居る。これも同例であつて、我等の先代の國、殷に行はれた禮冠であるから、天下どこへ行つても喜んで用ひられると思ひ込んで、之を澤山仕入れて、全く風俗の違つた越に賣りに行つた所に、宋人の宋人たる特色があつて面白い。）○資（資本を下すこと。仕込む、仕入れる意。）○諸越（諸は於に同じ。發聲なり。或は云ふ、諸越は後世百越と言ふが如しと、亦通ず。）○四子（許由齧缺王倪被衣の四人を云ふと。何れも隱者なり。）○汾水之陽（汾水は山西省太原府に發し堯の都平陽の近くを流れ西河に入る。山南水北を陽と云ふ。故に汾水のキタと訓む。）○窅然喪其天下（窅然は茫然自失の貌、喪は忘なり、其字重し、貴重な大切な己れの天下の意を含む。）

惠子謂莊子曰、魏王貽我大瓠之種。我樹之成。而實五石、以盛水漿、其堅不能自擧也。剖之以爲瓢、則瓠落無所容。非不呺然大也。吾爲其無用而掊之。莊子曰、夫子固拙於用大矣。宋人有善爲不龜手之藥者。世世以洴

藐姑射（山名、實在の山にあらず。後世姑射と云ふ山あるに因り、又藐に遠の義あるに因つて、藐たる姑射の山にと讀む者あるも是ならず。藐姑射と三字に讀すべし。列子黄帝篇には列姑射に作る。參照すべし。）○淖約（柔媚なるべき貌。）○處子（處女。處は生々に處る、子はムスメ。未婚女を云ふ。）○五穀（黍稷麥菽、以下數句仙人の生活を爲す、もとより寓言、深く解するを要せぬ。）○其神凝云々（其の精神凝然として定まつ、居る所の地、百物自ら疵癘の病なく、而して年穀自ら熟すとの意。）○旁礴（混同なり。）

○狂（誑と同じ。）○是其言也。猶二時女一也（其言也とは上の肩吾以下の四句の言を指す。時はコレと訓み、女は汝なり。言は肩吾以下の四句に云ふ所は、汝のことを云つたのだ、汝は乃ち知識上の聾盲だ。）○物莫二之傷一（内定文に

○蘄二乎亂一（蘄は求なり。亂は治なり。漢字には其の字の有する本來の義と、別に反對の意を持つて居るものがある、亂に治の義あり、離に遭の意あるが如し。）○敝敝（弊々に同じ。經營の貌、アクセクの意。）

ありて動詞の目的詞が代名詞である時は、言葉の順序が變つて目的詞が動詞に先立つものである。）○礴（至なり。）○猶將（一本には將猶に作る。）

宋人資二章甫一而適二諸越一。越人斷髮文身、無レ所レ用レ之。堯治二天下之民一、平二海内之政一、往見二四子藐姑射之山一、汾水之陽、窅然喪二其天下一焉。

訓讀 宋人章甫を資して諸越に適く。越人、斷髮文身にして之を用ふる所なし。堯、天下の民を治め、海内の政を平にし、往いて四子を藐姑射の山に見る。汾水の陽に、窅然として其の天下を喪れたり。

大意 此の一節は至人無レ己の意を證す。堯を宋人に、四子を越人に喩へ、堯の目には天下も貴いが、彼我を超越し、物我を一體視して居る四子に取つては、天下の如き小物は念頭にない。天下はもとより、凡ての外物を忘れた至人には自己のあらう筈がない。

通釋 昔し宋國の人が章甫と名づくる殷の禮冠をドツサリ仕入れて、南方越の國に行商に行つた。越の國では髪

は之が爲めに疵もなく癘もない。又年々の穀物は爲めに豐熟するのであると。此の樣なことを話して吳れたのだ。だから吾れは是の話をば出鱈目なりと思つて信じないのである。」連叔が曰ふには「如何にも接輿の云ふ通りだ。目くらはあや模樣の美を見ることが出來ないし、ツンボは鐘や太鼓の聲を聞くことが出來ぬと云ふことを聞いて居るが、今汝の言ふことを聞いて見ると、何んと唯だ肉體だけに聾盲があるのでなく、あの知識にもやはり聾盲があると見える。斯く云ふ知的聾者とは、ほかでもない、汝のことだ。聾者に話をしても無駄だが、今少し詳しく話をしてやらう。抑もこの神人の人格は廣大無邊にて、一切の萬物を和合して一體となす。卽ち萬物一體觀とて凡ての外物を觀るに彼我の別を設けず、等しく皆大人格の中に包容して、各々其の所に安ぜしむるのである。從つて小なる俗情から世の人が此の亂れた世を泰平ならしめんことを神人に求め願つても、決してアクセクとして天下のやうな小さなものを仕事相手にはしない。この神人は何物と雖ども之を傷ふこと能はず。例へば大水が出て、天に屆く程でも決して溺れない。大旱で金石が鎔けて流れ、土や山が燒け焦げになつても熱くならないのである。して見ると此の神人は身體について居る塵垢や、その食べ殘りの糟で以て、世の人々が理想的人物と思つて居る堯舜を陶器や鑄物でも作るやうに造作もなく作り出すことの出來る程偉い人である。されば何とて天下位の物を仕事にすることを承知しようぞ。

語釋 肩吾連叔(共に古の賢人、傳不明) ○接輿(姓は陸、名は通、接輿は字、楚の賢人隱者なり。孔子と時を同じうす。佯狂して仕へず。常に耕作を以て事とす。楚王其の賢を知り、黄金百鎰、車駟二乘を以て聘するも受けず。山海に遊び終る所を知らずと云ふ。) ○無當(當は底なり。無當とは底拔の意。一說には道理に當らずと解するも取らず。) ○河漢(天上の天河。或は云ふ。黄河と漢水と。) ○逕庭(過差と云ふが如し、接輿の話は一般の話に比べるに甚だ差異ある意。) ○

じ、飛龍に御して、四海の外に遊ぶ。其の神凝りて物をして疵癘せず、年穀を熟せしむ。吾れ是を以て狂として信ぜざるなりと。連叔曰く、然り、瞽者は以て文章の觀に與る無く、聾者は以て鐘鼓の聲に與る無し。豈に唯だ形骸にのみ聾盲あらんや。夫の知にも亦之れあり。是れ其の言や、猶ほ時れ女の如きなり。之の人や、之の德や、將に萬物を旁礴して、以て一と爲さんとす。世、亂を蘄むるも、孰か敝々焉として天下を以て事となさん。之の人や、物之を傷ふなし。大浸、天に稽るも溺れず、大旱、金石流れ、土山焦ぐるも熱せず。是れ其の塵垢粃糠も、猶ほ將に堯舜を陶鑄せんとする者なり。孰れか肯へて物を以て事となさんやと。

大意 此の一節は上文の神人無功の意を例證したのである。藐姑射の神人はその德廣大にして萬物皆德化に浴して自然と疵癘の病なく、年穀亦爲めに豐熟す、此の人や萬物を一視同仁す。故に特に天下を治むるが如き小事を以て事とせず、從つて世の所謂功の有無の如きは問題にならぬ。是れ神人功なきなり。

通釋 昔肩吾と云ふ者が連叔と云ふ賢人に尋ねて云ふには「吾れ嘗て話を接輿から聞いたが、其の話たるや、大きな底拔話で、先きへ先きへとどん／＼話が進んで行つて締め括りがない。吾れは其の話に膽をつぶして居る。丸で天の川の際崖がないやうだ。大に一般の話とは距離があつて、普通の人の考とは違つた話だ。」之を聞いて連叔が云ふには「其の話と云ふのは一體どんなことを申したのだ。」肩吾が云ふには「藐姑射と云ふ山に神人が居られる。其の肌は氷や雪のやうに純白で、其の姿は柔和で媚かしくて處女のやうである。五穀を食はず、風を吸ひ露を飲み、雲氣に乘じ、飛龍に跨がりて、遠く世間の外に遊んで居る。其の精神の集注する所、廣大なる感化があつて、萬物

漢而無極也。大有逕庭、不近人情焉。連叔曰、其言謂何哉。曰、藐姑射之山有神人居焉。肌膚若冰雪、淖約若處子。不食五穀、吸風飲露、乘雲氣、御飛龍、而遊乎四海之外。其神凝、使物不疵癘、而年穀熟。吾以是狂而不信也。連叔曰、然。瞽者無以與乎文章之觀、聾者無以與乎鐘鼓之聲。豈唯形骸有聾盲哉。夫知亦有之。是其言也、猶時女也。之人也、之德也、將旁礴萬物、以爲一。世蘄乎亂、孰敝敝焉以天下爲事。之人也、物莫之傷。大浸稽天而不溺。大旱金石流、土山焦、而不熱。是其塵垢粃糠、猶將陶鑄堯舜者也。孰肯以物爲事。

訓讀　肩吾、連叔に問うて曰く、吾れ言を接輿に聞けり。大にして當なく、往いて反らず。吾れ其の言に驚怖す。猶ほ河漢の極りなきが如し。大に逕庭あり、人情に近からずと。連叔曰く、其の言、何とか謂へるや。曰く、藐姑射の山に神人ありて居る。肌膚氷雪の若く、淖約として處子の若し。五穀を食はず、風を吸ひ露を飲み、雲氣に乘

ない、つまりそれ程貴ぶに足らぬものである。然らば拙者は天子たるの實とも云ふべき天下の富を擅まゝにせんが爲めに尊公に代らんとするのか。考へても御覽、拙者が尊公に代つて天子になつたにしても、その我が身に得る所のものは、小さな部屋と僅かな食物に過ぎないぢやないか。例へばあのミソサヾイが繁つた林に巣を作つても、巣の爲めに用ふるのは一枝に過ぎない。モグラモチが大きな河から水を飲んでも、小さな腹を滿すに過ぎない。拙者に於ても、それと同じことぢやないか。サアそこ許は天子ぢやないか。早く御殿に歸つて御休み召され。拙者は天下なぞを治める氣は毛頭御座らぬ。且つ料理人が料理に手落ちがあつても、カタシロは祭器を飛び越えて、取つて代らうとはしない。凡そ物には自然に與へられた職分があるから、各〻その分に隨つて自ら安んずべきである。即ち尊公は天子、拙者は隱者、各〻分に安んじて然るべきだ。己の分を忘れて天下を渡さうなどゝ云ふことを申すべきでない。

語釋 夫子立而天下治（而は則に同じ。） ○吾將レ爲レ名乎。名者實之賓也。吾將レ爲レ賓乎（一説には、天下は旣によく治つて居るから、必ずしも別に治を致すの人を求める必要はない、而るに自分が天子に代つて天下を治めることになつたら、是れ我をして天下を早く治め得たと云ふ名を受けしむることになるのである。然し名は實の附き物であつて、必ず主人があつて始めて賓客がある如きものである。故に若し實なくして其の名に居る、らば自 は何んと主人なき御客となるのではあるまいか。そんなつまらぬことは眞平だ。斯様に解する說もあるが、今は姑らく岡松甕谷の說に從つて賓乎、實字の誤と做して解す。實とは天下の富を指す。必ず此の實ありて、乃ち天子の名あり、故に名は實の賓なりといふ。爲名爲賓の爲字は去聲、タメと訓む。） ○歸休乎君（帝たる身分を氣付けんが爲めに子と云はずして特に君と云ふ。） ○尸祝（カタシロ、祖先を祭る時、神の名代として祭壇に立たしむるもの。） ○樽俎（神前に供ふる祭器、樽は酒器、俎は魚肉を盛る器。）

肩吾問二於連叔一曰、吾聞二言於接輿一。大而無レ當、往而不レ反。吾驚二怖其言一。猶二河

を尸る。吾れ自ら視るに缺然たり。請ふ天下を致さんと。許由曰く、子、天下を治め、天下旣に已に治まる。而るに我れ猶ほ子に代らば、吾れ將に名の爲めにせんとするか。名は實の賓なり。吾れ將に賓の爲めにせんとするか。鷦鷯深林に巣ふ、一枝に過ぎず。偃鼠河に飲む、腹に滿つるに過ぎず。歸休せよや君。予、天下を用て爲す所無し。庖人、庖を治めずと雖とも、尸祝、樽俎を越えて之に代らずと。

大意 前節の聖人無レ名の意を例證したのである。即ち許由を聖人と見立て、堯が名譽ある天子の位を讓らうとしても、自ら分に安んじて、敢てその名に居らざるを以て、聖人名なきの例證としたのである。

通釋 昔堯と云ふ聖天子が、自分の治めて居る天下を、許由と云ふ隱者に讓り渡さんとして曰ふには「既に日や月が出て、世の中を照らして居るのに、炬火がまだ消えずに燃えて居る。炬火がどんなに日月に張り合つて、明るくならうと骨を折つたとて、その光り加減に於てとても比較にならぬ。適當な時に降る雨がドツサリ降つたのに、なほ田畑に水を灌いで居る、どんなに骨を折つて水をかけても、その濕潤に於ては比較にならぬ。之と同じ話で、今先生のやうな高徳の方が天子の位に即かれたならば、天下は容易に治まるであらう。然るに自分の如き不徳の者が、相も變らず、天下を司どり治めて居ることは、月夜に炬火、雨にかけ水と同じことで、吾れ自らミスボラしく感ぜざるを得ない。甚だ御無禮だが天下をお讓り致さう。」そこで許由が申すには「そこ許が天下を治め、天下は此の上なく善く治まつて居るのに、拙者が餘計なことにも尊公に代るとしたならば、拙者は天子と云ふ美名を受けんが爲めに尊公に代らんとするのか、然し名と謂ふものは實の附物で、實が主人なら名は賓客の如きものたるに過ぎ

分かてば、十五日は一氣なり。一氣變ずれば風も亦變ず。故は故所に反るなり。）　○若夫（轉換の詞、それとは事かはりと云ふ意。）　○乘二天地之正一而御二六氣之辨一以遊二無窮一者（至人の境地を述ぶ。乘御同じ。自由に乘り廻ること、こゝでは順應の意。天地は萬物の總稱、萬物は自然を以て正となす、故に乘二天地之正一とは萬物の本性に順ふ意。六氣は六つの自然の變化的現象、陰陽風雨晦明を云ふ、天地萬物即ち大自然の變化相を意味す。辨は變なり、御二六氣之辨一とは變化多様なる大自然の變化相に順應する意。要するに虛無因應とて虛心平氣を以て萬物の正相變相、あらゆる場合に應じ、あらゆる事物に順ひ、無窮の天地、自由無碍なる境界に優遊自適するを云ふ。これは是れ至人神人聖人（同一人の異稱）の能くする所、豈に小知小見の人の窺ひ知る所ならんや。）

堯讓天下於許由曰、日月出矣、而爝火不息。其於光也、不亦難乎。時雨降矣、而猶浸灌。其於澤也、不亦勞乎。夫子立而天下治。而我猶尸之。吾自視缺然。請致天下。許由曰、子治天下、天下既已治也。而我猶代子、吾將爲名乎。名者實之賓也。吾將爲賓乎。鷦鷯巢於深林、不過一枝。偃鼠飲河、不過滿腹。歸休乎君。予無所用天下爲。庖人雖不治庖、尸祝不越樽俎而代之矣。

訓讀　堯、天下を許由に讓らんとして曰く、日月出でぬ、而して爝火息まず。其の光に於けるや、亦難からずや。時雨降りぬ、而して猶ほ浸灌す。其の澤に於けるや、亦勞せずや。夫子立たば、天下治まらん。然るに我れ猶ほ之

であると云ふ區別を十分心得て居り、又自己を磨くことが光榮であり、外物を追ふことが恥辱であると云ふ境目をヘツキリと知つて居る爲めに外ならない。そして彼れ榮子の如き人物は此の世の中に於て、まだ餘り多くはないのである。然しながらまだ／＼物我の相對を忘れ、內外を一にし、十分獨立獨行たり得ないのである。處がかの列子は風に乘つて行くことが出來、如何にもスガ／＼しくて氣もちがよい。半月も飛び廻つて元へ歸つて來る。世の淸福を得た人の中でも、列子のやうな人はまだ餘り多くはない。然し彼は成程步行の難を免れては居るが、まだ恃む所卽ち風と云ふ相手を要するので、眞に獨立自由の人ではない。處がそれとは違つて、此に人あり、天地萬物の本性に順ひ、陰陽風雨晦明と變化多樣なる大自然の變化に順應して、かの無窮とて大自在大自由の境地に逍遙遊する者は、決して何物をも恃みとしない。絕對獨立獨行の人である。故に之を結んで云ふならば、至極の人は物我の相對を超越す。故に自己の認むべき者がない。神の如き勝れた人は無爲にして化す、故に特に功の認むべき者が無い。高德の人は分に安んじて名譽の位地に立たぬ、故に自から取り立てゝ謂ふ程の名譽がない。以下此の三句を例證せん。

語釋　比（親和する意。）○而徵ニ一國ー者（郭慶藩曰く「而字當に讀んで能字と爲すべし。能而古聲近く通用せり、官鄉君國相對し、知行德能亦相對す。則ち而字轉語の詞に非ざる明かなり。」）○若レ此矣（斥鴳が自ら以て飛ぶの至なりと思へるが如しとの意。）○宋榮子（宋は國名、榮は姓、子は美稱。）○猶然（笑ふ樣を形容した副詞。）○竟（境に同じ。）○辯（辨に同じ。）○斯已矣（宋榮子が世の毀譽から超然たり得るは彼が內外榮辱の分を悟つて居るのに因るのみとの意。）○未ニ數數然一ニ（數々は猶ほ頻々と云はんが如し。此の如き人を世に求むるも多く得べからずとの意。一說には數々を汲々と解し、世間の名を得るに汲々たらずと見る。）○列子（鄭國の人、莊子と同じく老子學を治め、莊子よりも少し先輩なり。）○冷然（涼しき貌。）○旬有五日而反（宇津木益夫曰く「此の句、諸解未だ說かず、愚按ずるに十五日は一氣なり、一年二十四氣是れなり、一氣轉ずれば風も亦轉ず、反らざる能はざるなり。」卽ち一年を二十四氣に

亦此の如し。而して宋榮子、猶然として之を笑ふ。且つ世を擧げて之を譽むるも勸むことを加へず。世を擧げて之を非るも沮むことを加へず。内外の分を定め、榮辱の竟を辯ず。斯れのみ。彼れ其の世に於ける、未だ數々然たらざるなり。然りと雖ども、猶ほ未だ樹たざる有るなり。夫の列子は風に御して行く。冷然として善し。旬有五日にして而る後反る。彼れ福を致す者に於て、未だ數數然たらざるなり。此れ行くに免ると雖ども、猶ほ待つ所ある者なり。若し夫れ天地の正に乘じて、六氣の辨に御して、以て無窮に遊ぶ者は、彼れ且た惡にか待たんや。故に曰く、至人、己なく、神人、功なく、聖人、名なしと。

大意 此の一節は前二節の小知大知の寓話を實説したのである。夫故效二一官一者は小知の人、宋榮子は中知の人、列子は大知にして僅かに塵あるもの、最後に逍遙遊的人物の境地を述ぶ。却説天地の正に乘じ、六氣の辨に御し、以て無窮に遊ぶ者は誰ぞ、莊夫子自らを謂ふなり。

通釋 物に既に小知大知の別あるが故に人にも自ら大小の別あり。此に人あり、その知識は與へられたる官職に於て十分成績を擧ぐるに足り、その行爲は一地方を親和することが出來、人格はその君の御意に適ひ、その才能は一國の政治に對して手柄がある。か樣な人物は兎角小成に安んじて、已れ自らを視ること恰もかの斥鷃が自ら以て飛の至りなりと自惚れて居る如く得々然として居るものである。是れは素より小人物であつて宋の榮子はニヤニヤと之を冷笑した。且つ榮子は世間が擧つて自分を譽めたとて、勵みを加へると云ふことがない。又世人が皆自分を毀つても意氣沮喪するやうなことはない。それは畢竟宋榮子が内なる自己は貴く、外なる外物は輕んずべきもの

の話は、乃ち先きにも述べたやうに小物と大物との境界の相違、即ち小知は大知に及ばざる意を端的にあらはしてゐる。

語釋　湯之問レ棘也是已（此の一條の話は列子湯問篇にも見ゆ。参照すべし。列子には棘を革に作る。二字古同聲通用せり。）○窮髮之北（地は草を以て毛髮となす、北方寒冱の地、草木生ぜず、故は窮髮と名づく、所謂不毛の地なり。）○有レ魚焉（終詞として用ひられた焉字は指示代名詞此・是・之と終詞也字とを含んで居る、故に有レ魚焉は有レ魚レ焉と讀んでもよい。）○泰山（山東省に在る名山。）○絶二雲氣一（絶を横切りとか或は渡りとか解する説もあるが、姑らく林希逸の説に從つて、鵬のとれる九萬里の上には、更に雲氣なしと解す。）○斥鴳（ウヅラの一種。）○仭（八尺なり。）○此小大之辨也（上の話を結び、更に下文を起す句なり。辨は辨別、區別なり。）

故夫知效二一官一、行比二一鄕一、德合二一君一、而徵二一國一者、其自視也、亦若レ此矣。而宋榮子猶然笑レ之。且擧レ世而譽レ之、而不レ加レ勸。擧レ世而非レ之、而不レ加レ沮。定二乎內外之分一、辯二乎榮辱之竟一。斯已矣。彼其於レ世、未二數數然一也。雖レ然、猶有レ未レ樹也。夫列子御レ風而行。冷然善也。旬有五日而後反。彼於レ致レ福者、未二數數然一也。此雖レ免二乎行一、猶有レ所レ待者也。若夫乘二天地之正一、而御二六氣之辯一、以遊二無窮一者、彼且惡乎待哉。故曰、至人無レ己、神人無レ功、聖人無レ名。

訓讀　故に夫の知、一官に效あり、行、一鄕に比し、德、一君に合ひ、而、一國に徵ある者、其の自ら視るや、

斥鴳之を笑つて曰く、彼れ且に奚に適かんとするや。我れ騰躍して上り、數仞に過ぎずして下り、蓬蒿の間に翺翔す。此れ亦飛ぶの至なり。而るに彼れ且に奚に適かんとするやと。此れ小大な辨なり。

大意 既に齊諧を引いて自說の虛妄ならざるを證し、今又湯問を擧げて其の荒唐ならざるを明かにす。寓言を何處までも事實らしく裝ふ所に寓言の妙味が津々として盡きない。且つ此の一節は前節と併せて、世の小人輩が大人の逍遙遊的心境を窺ひ知ることも出來ないで、徒らに大人の言動を以て誇大妄想であると冷笑し去るのは、自ら小成に安んずる井中の蛙見であることを寓したのである。

通釋 以上は荒唐無稽の說でない。昔殷の天子湯王が、其の賢大夫棘に尋ねたのも、之と同じことだ。乃ち草さへ生えぬ極北の地に、冥海と謂ふ海がある、それは天然に出來た廣い大きな池である。此の海に大魚あり、其の身幅だけでも數千里、其の首尾の長さに至つては、どれ程長いか知る者がない。その魚の名を鯤と謂ふ。又其の海に大きな鳥が居る。その名を鵬と謂ふ。鵬の背は泰山の如く、その翼は天の一方に垂れ下つた雲の如く大きい。その鵬が旋風に乘じて羊の角のやうに螺旋を畫いて上ることが九萬里、其處には最早や雲もなく霧もなく、唯見る青空を頂くのみ。そこで始めて南に飛ばんことを企て、ヤヲラ南冥に行かんとするのである。斥鴳と云ふ小鳥が大鵬を笑つて曰ふには「彼れ大鵬は一體何處へ行かうとするのか、餘りに大袈裟ぢやないか。我々は躍つて上ること、精精五六間で下りて仕舞ひ、低いヨモギ草の間を飛び廻る位が關の山である。然し此れでもやはり我々に相應した飛び方のステキなものだ。然るに彼れ大鵬は一體何處へ行かうとするのだ。餘りに大仕掛ぢやないか。」此の湯と棘と

ろキノコ、朝生じたものは暮に死し、暮に生じたものは朝に死すといふ。晦は暮、朔は朝。半日の生命しかないから、朝夕ともには知ることが出來ない。朝生じたものは夕を知らず、暮に生じたものは朝を知らず。）〇蟪蛄不レ知ニ春秋一（蟪蛄は蟬の一種、春鳴くものは秋に及ばず、秋鳴くものは春に及ばずと云ふ。從つて春も知り、秋も知ることは出來ぬ。或は云ふ、朝菌は糞土に生ず、暮に生じて日を見れば死す。彼れたゞ朝暮あるを知るのみ。安んぞ晦朔あるを知らんや、蟪蛄は春生じて夏死し、夏生じて秋死す。四時の全きを見ずと。）〇冥靈（冥海の靈龜、或は云ふ、木の名と。朝菌、冥靈、大椿のことは列子湯問篇にも見ゆ。參驗すべし。）〇彭祖（姓は籛、名は鏗、帝顓頊の玄孫にして堯の臣、彭城に封ぜらる。虞夏商を經て、周に在りて柱下史となる、年八百歳。世本神仙傳などに見ゆ。）〇乃今以レ久（乃今とはヤツトのことでの意、久は壽なり。）〇匹レ之（慕つて之に似んことを求むるなり。）〇不ニ亦悲一（亦はも亦の亦でない。感動の助語、何んとと譯してよい。）

湯之問棘也是已。窮髮之北、有冥海者。天池也。有魚焉、其廣數千里、未有知其脩者。其名爲鯤。有鳥焉、其名爲鵬。背若泰山、翼若垂天之雲。搏扶搖羊角而上者九萬里。絕雲氣、負青天、然後圖南、且適南冥也。斥鴳笑之曰、彼且奚適也。我騰躍而上、不過數仞而下、翺翔蓬蒿之間。此亦飛之至也。而彼且奚適也。此小大之辨也。

訓讀　湯の棘に問ふや是れのみ。窮髮の北に冥海なる者あり。天池なり。魚あり、其の廣さ數千里、未だ其の脩を知る者あらず。其の名を鯤と爲す。鳥あり、其の名を鵬と爲す。背は泰山の若く、翼は垂天の雲の若し。扶搖に搏つて羊角して上る者九萬里。雲氣を絕し、靑天を負ひ、然る後南せんことを圖り、且に南冥に適かんとするなり。

いからである。即ち智慧の大小は命數の大小に因るもので、殆ど宿命的先天的のものである。どうして左樣なことが分るかとならば、朝菌と云ふキノコは僅か半日の生命であつて、朝夕即ち一日全部を知らないし、ヒグラシは半年の生命であつて、春秋即ち一年全部を知らない。此れは皆壽命が短かいからである。つまり、命が短かいから其の知識も少ないのである。之に反して楚の國の南に冥靈と云ふ龜がある。五百歳をば一春となし、五百歳を一秋として居る。即ち此の龜の一年は人間の千年に相當して居る。又大昔に大椿と云ふ木があつた。八千歳を春となし、八千歳を秋となして居た。これは皆大年の生物であつて、從つて朝菌蟪蛄の如く僅かに晦朔春秋すら知らないのに比すれば、その知の廣大なることは同日の論でない。此についでながら申して置くが、世には斯かる長壽なものがあるのに、人間世界では彼の彭祖がヤレ長生したと云ふので特に評判が高い。それではどれ程生きたかと調べて見ると、ヤツトのことで八百歳生きたに過ぎない。然るに世の人どもは彼にアヤカリたいと願つて居るが、何と悲しいことではないか。

語釋　決起（奮起なり。）○搶（突なり。）○時則（則は猶ほ或はと云ふが如し。）○控（投なり。）○奚以二之九萬里而南一爲（奚を以て九萬里に之て南することを爲さんと訓讀する說もあるが今は取らない。）○三飡（三度の食事、一日分の御飯。）○果然（腹の飽く貌。）○三月（數字通りに見なくてよい、永い月日の意。）○之二蟲（之はコノと讀む、莊書の用例なり。二蟲は即ち蜩と鷽鳩となり、鳩は今では蟲と見ないが、昔は動物を凡て蟲と謂つた。人を裸蟲と云へる如し。）○小知不レ及二大知一。小年不レ及二大年一（小知は大知に及ばず、小年は大年に及ばず、と並列的に讀む說があるが、今は林西仲の說に從ふ。此の句は上句の二蟲又何知の知字より說き起され、小なる二蟲は大なる鵬の境界を絕對的、先天的に窺ひ知ることの出來ないことを面白く述べるために、命數の長短を借りて說いたのである、行文極めて奇にして而も知字は小知大知を生み、此の句又小年大年の字面を生み、更に朝菌蟪蛄冥靈大椿と次第に說き進められ、最後に人事を以て結ぶ。其の間毫末の滯礙を認めない、眞に大手筆の業である。）○奚以知二其然一也（知慧の大小は壽命の大小によると云ふことがどうして分かるかとならばとの意。）○朝菌不レ知二晦朔一（朝菌は馬糞などの上に生え

ばざればなり。奚を以て其の然るを知るや。朝菌は晦朔を知らず。蟪蛄は春秋を知らず。此れ小年なればなり。楚の南に冥靈なる者あり。五百歲を以て春となし、五百歲を秋となす。上古に大椿なる者あり。八千歲を以て春となし、八千歲を秋となす。而るに彭祖は乃ち今、久しきを以て特に聞ゆ。衆人之に匹せんとす。亦悲しからずや。

大意　蜩と鷽鳩とを以て小人に喩へ、小人は小成に安んじ、大人大成の境界を窺ひ知ることを得ずして、徒らにとかくの妄評をなすことを哂ふ。

通釋　ツク／＼ボウシと小鳩とが大鵬の南冥に飛ばんとするのを見て笑つて云ふには「我々どもはキバツテ楡や枋の如き小木に飛びつくが、時としては一の枝まで届かないで、地上に投げつけられることさへあるのである。だがそれでも飛ぶは、やはり飛んだのであつて、何も鵬のやうに九萬里も高く上つて南へ飛ぶやうな大袈裟なことをする必要はない。」蜩と鷽鳩は斯樣に云ふけれども、免角何事によらず、爲すことの大小に依つて準備にも自ら大小がある。例へば莽蒼とて叢生ひ茂りて青々と見える近郊へ行かうとする者は僅か一日分のお辨當を持つて行けば、晩に家へ歸つて來た時には、腹がまだ滿れて居る位である。然るに百里も行かうとする者は、前夜に於て糧食を舂いて準備をする。更に千里も遠方に行かんとする者は、三月かかつて、糧食を集めるのである。此の如く大鵬の南飛には自ら九萬里も高く上る準備を要するのであるが、境界の小さい此の蜩と鷽鳩とには鵬の大境界はとても分るものではない。凡そ小智の者が大智の者にかなはないのは、壽命の小さい者が壽命の大きい者にかなはな

ひて居るのは、鵬の南飛の大袈裟なことをあらはすための助語である。即ち色々手を盡し準備して始めて今の意。）○培レ風（風を重ねるとか又は風を養ふと云ふ解があるが、今は王念孫の說に從つて風に乘ると解す。）○夭閼（夭は折く、閼は遮ぐ。行手を遮ぎり阻む意。）○圖南（此に基づいて、後世は大事を計畫する意に用ひて居る。）

蜩與鷽鳩笑之曰、我決起而飛搶楡枋。時則不至、而控於地而已矣。奚以之九萬里而南爲。適莽蒼者、三飡而反、腹猶果然。適百里者、宿舂糧。適千里者、三月聚糧。之二蟲又何知。小知不及大知、小年不及大年。奚以知其然也。朝菌不知晦朔、蟪蛄不知春秋。此小年也。楚之南有冥靈者。以五百歲爲春、五百歲爲秋。上古有大椿者。以八千歲爲春、八千歲爲秋。而彭祖乃今以久特聞。衆人匹之。不亦悲乎。

訓讀 蜩と鷽鳩と之を笑つて曰く、我れ決起して飛び、楡枋を搶く。時に則ち至らずして地に控するのみ。奚ぞ之の九萬里にして南することを以て爲さんと。莽蒼に適く者は三飡して反る、腹猶ほ果然たり。百里に適く者は宿に糧を舂く。千里に適く者は三月糧を聚む。之の二蟲又何をか知らん。小知の大知に及ばざるは、小年の大年に及

里、則風斯在下矣。而後乃今培風、背負青天、而莫之夭閼者、而後乃今將圖南。

訓讀 且つ夫れ水の積むや厚からざれば、則ち大舟を負ふや力無し。杯水を坳堂の上に覆せば、則ち芥之が舟と爲る。杯を置けば、則ち膠す。水淺くして舟大なればなり。風の積むや厚からざれば、則ち其の大翼を負ふや力無し。故に九萬里なれば、則ち風斯に下に在り。而る後乃ち今、風に培り、背青天を負ひて之を夭閼する者莫し。而る後乃ち今、將に南を圖らんとす。

大意 大鵬が南へ飛ぶのに九萬里も高く上る理由を說く。

通釋 姑らく外の例を以て云ふならば、あの水の聚り方が深くないと、大舟を浮かべるのに力が足りない。然し今、一杯の水を堂上の凹だ處にこぼして見ると、細かな芥が舟となつて浮ぶのである。そしてその中に杯を置いて見ると、底がくつついて仕舞ふ。これは水が淺くて舟と見立てた杯が大きいからである。此の例と同じ樣に風の容積が厚くないと、風が鵬の大翼を負ふのに力が足りない、だから九萬里も高く上つて見ると凡ての風が下に在ることになる。然る後始めて自由に風に乘ることが出來、その背中には青空を負ひ、何一つとして之を塞ぎ邪魔するものはない。斯うなつて始めて今、南冥さして飛ばんことを圖るのである。

語釋 且（こゝでは且又の且でない。しばらくとか或は假にの意。） ○坳（陷なり、凹なり。） ○膠（粘着なり、杯のそこが地に着く意。） ○而後乃今（而後と乃今とは同じである。同意の語を重ね、更に又此の四字を下に重ね用

極邪。其視下也、亦若是則已矣。

訓讀 野馬や、塵埃や、生物の息を以て相吹くなり。天の蒼蒼たるは其の正色か、其の遠くして至極する所無きか。其の下を視るや、亦、是の若きのみ。

大意 此の一段は古來解釋がまちまちであるが、林希逸の説に從つて、鵬の飛ぶことの高きを面白く形容したのであると見るがよい。

通釋 さて鵬の上れる九萬里の上空はどんなに高いか、それを一寸説明して見るならば、日中地上より立昇る陽炎や、ちりほこり等は、凡ての生物が吐き出した息である。斯樣に地上は、ちりほこりに覆はれて居るが、天は靑々として美しい。然し天が靑々と見えるのは果して天の特有の色であらうか。或は天が餘り遠くて際涯が無い爲めであらうか。恐らく天が餘り遠くて見極めがつかない爲めに斯樣に美しく見えるのであらう。さて鵬が九萬里の上から地上を見下すに、やはり地上より天上を見たと同樣に靑々と美しく見えるに相違ない。つまり此のきたない地上が靑々と美しく見える程、高い所へ鵬は上つたのである。

語釋 野馬（陽春の候、日中に水氣多き所を見渡すと、立上る水蒸氣が恰も野馬の馳せるが如き樣に見える。故に之を野馬と謂ふ。陽炎のことなり。） ○生物（造物者と云ふ説があるが取らない。） ○則已（則は而に通ず、則已は而已に同じ。）

且夫水之積也不厚、則負大舟也無力。覆杯水於坳堂之上、則芥爲之舟。置杯焉則膠。水淺而舟大也。風之積也不厚、則其負大翼也無力。故九萬

者九萬里、去以六月息者也。

訓讀 齊諧なる者は怪を志す者なり。諧の言に曰く、鵬の南冥に徙るや、水撃三千里、扶搖に搏つて上る者九萬里、去るに六月の息を以てする者なり。

大意 此の段は前段の叙事が寓言即ち作り話でないことを古書を引用して、立證した形であるが、齊諧もとより怪を志せる書にて信ずべきものでないから、此の證明は寓言に更に輪をかけたやうなものである。是れ莊子の書が十が七八まで寓言なる所以である。

通釋 此の樣な話をすると又例の大ボラかと思ふものがあるだらうが是れには立派な根據がある。即ち齊諧と云ふのは奇怪なことを書いた本であるが、此の本に次のやうなことが曰はれて居る。「鵬が南冥に徙る時は、極めて大仕掛であつて、水はばたきをして水上を滑走すること三千里、そして旋風に乘じて大空に上ることが九萬里、然る後六月の氣候風に乘じて南に飛び去るのである。」して見ると上の話もマンザラ虛言とは云へまい。

語釋 齊諧（人名と云ふ說があるが今は取らない。）○水撃（水鳥が起つ前に羽撃をしながら水上を走るのを云ふ。）○搏扶搖（搏は撃に同じ、ハウチテとも訓む。扶搖は飄風、つむじ風。）○去以六月息者也（六月は前に謂ふ所の海動き風作るの時で、鵬は時を觀、風に乘じて南冥に徙るのである。息は風の義、下文に以息相吹とある息に同じ。一說には去るに六月を以て息ふ者也と讀み、南に飛び去るのに六ケ月間とび續けてから休息すると解す。此の說によれば高く上るには里數を以てあらはし、橫に遠く飛ぶには時を以てあらはして居ると見ることが出來て面白い。二說何れを取るもよろしい。）

野馬也、塵埃也、生物之以息相吹也。天之蒼蒼、其正色邪、其遠而無所至

訓讀 北冥に魚あり。其の名を鯤と爲す。鯤の大、其の幾千里なるを知らざるなり。化して鳥と爲る。其の名を鵬と爲す。鵬の背、其の幾千里なるを知らざるなり。怒んで飛ぶ、其の翼、垂天の雲の如し。是の鳥や、海運すれば將に南冥に徙らんとす、南冥は天池なり。

大意 莊子鵬大の筆を振つて開卷第一鵬鯤に寓して大人活動の天地を寫し出す。

通釋 北方の海に魚が居る、その名を鯤と云ふ。その大さは幾千里あるかわからない。その鯤が化して鳥となるとその名を鵬と云ふ。鵬の大さは背中だけでも幾千里あるか知れない。勢ひ込んで飛ぶと、その翼の大さは恰も天の一方に垂れ下つた雲のやうである。この鳥は海上の氣が動き大風が起ると、之に乘つて南方の海に飛び遷らうとする。さて其の南冥と云ふのは天然自然の大きな池である。

語釋 北冥（陳壽昌が正義に云ふ、冥は海なり、海と曰はずして冥と曰ふは、以て窈冥として其の中に精あるを示すなりと。即ち漠すぼんやり暗くて其の中に何か居りさうな趣を暗示したので、神秘の響がある。這の一語容易に下し得ない奇字である。） ○鯤（本來は小魚の名であるのを莊子がわざと大魚の名に用ひたのである。司馬遷が莊子の文を評して其の言恍洋自恣、以て己に適すと云つたのも是等の爲めであらう。一說には魚の子と云ふ、今は郭慶藩の說に從つてとく。） ○鵬（鳳に同じ。） ○怒（奮勵の意。憤怒の意に非ず。莊子字を用ふること奇、此の種の例多し、下文に泠然として善しは善惡の善に非ざるが如き皆是なり。） ○垂天之雲（釋文に「司馬彪云ふ、雲の天旁に垂るゝが如しと。崔云ふ、垂は猶ほ邊の如く、其の大さ天一面の雲の如し」と。今は司馬の說に從ふ。） ○海運（林西仲曰く、海氣動くなり、海氣動けば颶風大に作る、故に鵬この風力に乘じて南に徙らんと欲するなりと。鵬の身柄が大きいから大風を要するわけである。） ○南冥者天池（人爲的の小さな池でない、天然にある大きな池の義。此の句は北冥も亦天池なることを自らあらはして居る。）

齊諧者、志怪者也。諧之言曰、鵬之徙於南冥也、水擊三千里、摶扶搖而上

の文と題目なき文との二様がある。荀子韓非子の如きは前者であり、論語孟子の如きは後者に屬す。而して莊子は此の二様の文を兼ね有して居る、つまり篇名の上より云へば編纂の統一を缺いて居る。こんな點も内篇と外雜二篇との作者が違ふ、即ち内篇は莊子の手定する所であり、他二篇は後人が莊子の雜著を取りて之を編次したものや、或は又門流の手に出でたものであらうと云はれる理由である。

次に第一とあるのは篇の順位を示したので、此の篇が本書の首位に在るからのことである、論語の學而第一・爲政第二などと同じことである。さて逍遙遊とは何物の束縛も受けないで自由に優遊自適する、即ち謂ゆる心に天遊ありとの意で、此の三字は實に莊子一生の大本領を述べた言であるから、之を以て内篇の冠首と爲したのである。隨つて本篇に說く所も、小知小成を斥け、大知大成を貴んで居る。蓋し大知大成の人は所謂至人神人であつて、虛無因應即ち虛心坦懷以て天地萬物に順應し、無窮とて大自在無碍の境界に逍遙することを得るからである。されば世の人も小知を捨て、小成に安んぜず、大知を獲得し、無窮に遊ぶ境地に達すべきであると謂ふのである。

北冥有魚、其名爲鯤。鯤之大、不知其幾千里也。化而爲鳥、其名爲鵬。鵬之背、不知其幾千里也。怒而飛、其翼若垂天之雲。是鳥也、海運則將徙於南冥。南冥者、天池也。

荘子新釋 上巻

文學士 坂井喚三著

内篇 逍遙遊第一

叙説 内篇とは外篇に對して云うたので、解題の通り荘子の書が内外雜の三篇に分れて居るからのことである。そして内篇は七の論文から成立つて居て、多く荘子親ら書いたもので、難解であるが同時に味のある文が多い。従つて荘子の大旨は内七篇に十分述べ盡されて居るやうに思ふ。前述の通り晋時の註釋家が外雜二篇に在りては取捨各〻異つて居たに拘らず、獨り内篇のみは衆家皆此の七篇を以て之に充てたことから察しても、内七篇が自余の諸篇より遙かに立ち勝つて居ることが考へられる。故に荘子を研究せんとする者は内七篇を讀破すれば、先づ以て十分ではあるまいかと思ふ。

逍遙遊とは此の篇の名であつて、外篇雜篇に在りては各篇首の二字或は三字を採つて篇名として居るが、内篇に在りては一篇の意味を摘んで特に名を立てて居る。所謂内七篇は是れ題目あるの文である。凡そ古書には題目ある

莊子雕題略（寫本）　日本　中井　積德
莊子口義愚解　日本　渡邊　操
莊子新解　日本　川尻　義祐
莊子講義（支那文學全書ノ內）　日本　太田才次郎
莊子國字辨　日本　南霞　主人
莊子講義　日本　田中從吾軒
莊子私纂並講義　日本　土屋　弘
莊子釋義（早稻田文集ノ內）　日本　三島　毅
莊子新釋　日本　久保　得二
莊子（詳解全譯漢文叢書ノ內）　日本　西田長左衞門

右解題に於て不均合な程注解書のことを多く記述したのは、後の莊子を讀む學徒の便を慮つての老婆心に出づるもので、決して博覽を衒はんが爲めではない。看るもの幸に之を諒とせられんことを。

莊子札迻（札迻ノ內）　清　孫詒讓
莊子平議（諸子平議ノ內）　清　兪樾
莊子人名考（春在堂叢書ノ內）　同
莊子注二卷（湘綺樓全書ノ內）　民國　王闓運
莊子解故一卷（章氏叢書ノ內）　同　章炳麟
齊物論釋一卷（同）　同
莊子天下篇講疏　同　顧實
莊子瑣說二卷（謄寫版本）　日本　龜井昱
莊子集注十卷　日本　巖井文
莊子口義棧航　日本　小野壹
莊子解（帆足萬里先生全集ノ內）　日本　帆足萬里
莊子解（日本儒林叢書ノ內）　日本　照井南都
莊子南華眞經標注二十四卷（寫本）　日本　西山元

莊子內篇注四卷　明　德清
莊子南華全經句解四卷　明　陳榮選
南華經筌注(一名南華發覆)　明　性通
焦氏筆乘　明　焦竑
南華眞經評注十卷　明　歸有光
莊子解二卷(李卓吾叢書)　明　李贄
莊子獨見三十三卷　清　胡文英
南華經傳釋一卷(藝海珠塵ノ內)　清　周金然
莊子解二十三卷(船山遺書ノ內)　清　王夫之
莊子解十二卷　清　吳世尚
莊子故(集虛草堂叢書ノ內)　清　馬其昶
讀書雜志　清　王念孫
莊子章義五卷　清　姚鼐

南華眞經章句音義十四卷（影印正統道藏本莊子十種ノ內）　宋　陳碧虛
南華眞經章句餘事（同）　同
南華眞經章句雜錄（同）　同
南華眞經直音（同）　宋　賈善翔
南華邈（同）　同
南華眞經循本三十卷（同）　宋　羅勉道
南華眞經新傳二十卷（同）　宋　王元澤
南華眞經拾遺（同）　同
莊子內篇訂正（影印正統道藏本莊子十種ノ內）　元　吳澄
南華眞經本義十六卷（一名莊子𦤎注）　明　陳治安
南華眞經集注七卷　明　潘基慶
南華眞經三注大全二十一卷（一名莊子大全、和刻本アリ）　明　陳懿典
莊子闕誤一卷（函海ノ內、又百子全書ノ內ニモアリ）　明　楊愼

ほ宣穎の「南華經解」、胡方の「辨正」、陸樹芝の「雪」、陳壽昌の「正義」、郭慶藩の「集釋」、王先謙の「集解」等がある。「經解」は獨創の見多く、且つ文評に富む極めて好個の參考書である。「正義」も「集解」も皆之に據つて居る。「雪」は郭注、呂注、口義、循本等を引き且つ自說を加へて居る。是れ亦良書である。「辨正」も良書であるが割合に手に入りにくい。「集釋」は「郭注」、「成疏」、「釋文」の三者を掲げ、王念孫、兪樾、郭嵩燾等諸家の說を附して居る最も完備した書である。「雪」も「集釋」も「集解」も近頃上海にて石印本として盛に印行されて居るから、何時でも手に入れることが出來る。

我が邦には前記の外に尙ほ宇津木益夫の「解莊」と葛質（號因是）の「神解」とがある。前者は詳密であり、後者は簡明である。近時牧野謙次郎氏に「莊子國字解」の著あり、漢籍國字解全書として世に出づ、博引旁證、加ふるに新得を以てし、誠に良好の參考書である。我が友吉田義成君に「現代語譯莊子」あり、譯文平明、亦一讀に値する。

右に述ぶる所の諸書の外、予が目に觸れた莊子注解書を左に列擧して見るならば、

莊子旁注五卷（康熙十五年刊本）　晉　向　秀

莊子司馬彪注（十種古逸書ノ內、又問經堂叢書ノ內ニモアリ）　晉　司馬彪

には又成玄英の「莊子注疏」がある。郭注を疏したものである。同じく郭注を釋したものに、我が邦に杜多秋峰の「莊子覈玄」がある。共に郭注を研究するに必要な書である。宋には林希逸の「莊子口義」がある。郭注の難解なるに對して、之は極めて平易であるから、殊に初學に取りて良參考書である。此の書は我が德川時代に盛に讀まれた本で、毛利貞齋の「莊子俚諺鈔」は之に據つた國字解である。下つて松岡甕谷の「莊子考」も之に據り、加ふるに新得を以てして居る。又宋には褚伯秀の「南華眞經義海纂微」がある、其の卷數實に一百六卷、郭象以下宋以前の莊子の注釋は略ぼ此の書に具つて居る。此の書は容易に手に這入らなかつたものであるが、近時影印正統道藏本莊子十種として上海商務印書館から賣り出されて居るから誠に幸である。明には陸西星の「副墨」、朱得之の「莊子通義」焦竑の「莊子翼」が光つて居る。「翼」は漢文大系に收められて居り、「副墨」は最近、上海から石印本として出されて居るから共に手に入り易い、獨り「通義」のみは明版しかないから手に入りにくい。清には林雲銘の「莊子因」がある。此の書も我が學者に愛讀されたので、先きには秦鼎に「補義莊子因」の撰あり、後には東條保に「標注補義莊子因」の著がある。先師星野豐城先生も主として之によつて莊子を講じて居られた。其の解する所は郭注の如く高遠ではないが、明快な說に富む。淸には尙

時所撰の書目を列記してゐる。

崔譔注十卷二十七篇　清河人、晉議郎、內篇七、外篇二十。

向秀注二十卷二十六篇　一作㆓二十七篇㆒、一作㆓二十八篇㆒、亦無㆓雜篇㆒、爲㆓音三卷㆒。

司馬彪注二十一卷五十二篇　字紹統、河內人、晉祕書監、內篇七、外篇二十八、雜篇十四、解說三、爲㆓音三卷㆒。

郭象注三十三卷三十三篇　字子玄、河內人、晉太傅主簿、內篇七、外篇十五、雜篇十一、爲㆓音三卷㆒。

李頤集解三十卷三十篇　字景眞、潁川襄城人、晉丞、參軍、自號㆓玄道子㆒、一作㆓三十五篇㆒、爲㆓音一卷㆒。

孟氏注十八卷五十二篇　不㆑詳㆓何人㆒。

之によつて當時校定撰釋の一斑を窺ふことが出來、又現行の三十三篇が郭象の校定に成ると云ふことも解かる。右の如く郭象は五十二篇を取捨して內外雜三十三篇に定め、且つ之に注解を施した。之が世に推稱せらるゝ「郭注」である。然し郭注の大部分は同時の向秀が注を竊んだものだと云ふ說があつて、而もそれは事實らしい。斯樣な芳ばしくない說はあるが、兎に角「郭注」は莊子注解書の中で、最も古く且つ權威ある書である。唐の初には陸德明の「莊子音義」がある、亦古說を見るに足る。唐

無理はない。然しながら其の學說の大要は老子の虛無自然の思想に基づいて居る。其の文を作ることは上手、辯口は達者、其の上事實を指摘したり、類例を引くことが巧者、此の手で以て當時の去精されたやうな儒墨の徒を小ツピドク詆つたから、當世の宿學も、トテもうまく云ひ免れることが出來なかつた。且つ其の言、洸洋自恣とて、大袈裟な自分勝手なことを云つて、獨りで痛快がつて居たから、世の王公大人をはじめとし、莊周を使ひこなすことは思ひもよらなかつた。其の著書は十餘萬言、最初は幾篇あつたか不明である。漢書の藝文志には五十二篇とあるが、今日傳はつて居るのは內篇七、外篇十五、雜篇十一、併せて三十三篇である。而して內篇は文章內容の勝れた點から觀て、殆んど莊子の筆に成つたものであるが、外雜二篇に至つては、多く莊子の門流の手に出でたものであらう。隨つて漢志の五十二篇も悉くは莊周の書でない。故に漢晉の間、右五十二篇を整理して定本を作らんとしたものが少くなく、其の消息は唐の陸德明が、其の名著「經典釋文」に之を傳へて居る「漢書藝文志の莊子五十二篇は卽ち司馬彪、孟氏の注する所、是なり。言、詭誕多く、或は山海經に似、或は占夢の書に類す、故に注するもの、意を以て去取す。其の內篇は衆家並に同じ。自餘或は外(篇)ありて雜(篇)なし。唯だ子玄(郭象)注する所は殊に莊生の旨を會す、故に世の貴ぶ所となる。」且つ德明は晉

解題

「莊子」は周末の哲人莊子の書である。猶ほ孟子の書を「孟子」と稱するのと同じである。司馬遷の史記列傳に「莊子は蒙人なり。名は周。周嘗て蒙の漆園の吏となる。梁の惠王、齊の宣王と時を同うす。其の學、闚はざる所なし。然れども其の要は老子の言に本歸す。其の著書十餘萬言。」とある。蒙は古へ宋國の邑で、今は河南省歸德府に屬して居る。莊子は嘗て蒙の漆園の役人となつたが、其の後は全く出でゝ仕へなかつた。史記に據ると楚の威王が莊周の賢なるを聞き、はる〳〵使者を立て、手厚い進物を持たせて、而も宰相にすると云ふ條件で招聘したが、周は之を一笑に附して卻けて居る。其の生卒年月は得て詳らかでない。たゞ梁惠・齊宣と時を同うしたとあるから、孟子と亦時を同うしたことになる。孟子は齊・梁間に歴説した人であるから、自ら莊子に度々會ふべき筈であつたが、どうしたものか一度も會つて居ないらしい。若し此の兩雄をして一堂に會せしめたならば談論風發、眞に千古の偉觀であつたであらうに、誠に惜むべきことであつた。其の學は該博で闚はざる所なく、就中儒學に造詣が深かつた。唐の韓退之が子夏の徒、田子方の後、流れて莊周となると云つて居るのも

外篇

駢拇第八……二七一
馬蹄第九……二八九
胠篋第十……二九九
在宥第十一……三一九
天地第十二……三五七
天道第十三……四〇五

莊子新釋上卷目次

內篇

逍遙遊第一……一
齊物論第二……一九
養生主第三……九一
人閒世第四……一〇五
德充符第五……一五九
大宗師第六……一九三
應帝王第七……二五一

右は常に座右に置いたものである。最も右の外參考に供し益を受けた書物は擧ぐるに暇がない。何れも共の著者に對して深く恩を感ずる次第である。

一、本書の制作には多く亡友松村幾平君の助力を受くる筈であつたが、君は秋水篇の後半、至樂篇、達生篇の前半を最後の遺稿として長逝せられた。今本書の稿成るに當りて悵恨殊に深きものがある。

一、右の外、盜跖、說劍、漁父の三篇は第六高等學校教授林秀一君の起稿、庚桑楚、徐無鬼、則陽、外物、讓王、列御寇の六篇は松本高等學校教授吉田賢抗君の起稿、又田子方、知北遊の二篇は東京府立高等學校教授本多龍成君の起稿に待つものであり、校正は殆んど細谷清君の手を煩はしたのである。是れ亦厚く謝意を表する次第である。

昭和五年八月下浣

鎌倉積風莊にて　著　者　識　す

南華經解　清　宣穎（略稱宣注）
莊子辨正　清　胡方
莊子雪　清　陸樹芝
南華眞經正義　清　陳壽昌（略稱正義）
莊子集釋　清　郭慶藩
莊子集解　清　王先謙
莊子俚諺鈔　日本　毛利貞齋
補義莊子因　日本　秦鼎
標注補義莊子因　日本　東條保
莊子考　日本　岡松甕谷
解莊　日本　宇津木益夫
莊子國字解　日本　牧野謙次郎
現代語譯莊子　日本　吉田義成

增補する暇がなかつた爲めである。而して其の先人の説を擧ぐるに當り、或は書名を用ひ、或は著者名を用ひ、一定して居ない。且つ書名は多く略稱に從つて居る。例へば林希逸の莊子鬳齋口義の説を擧ぐるには口義と云ひ、又陳壽昌の南華眞經正義を引くには正義と云ふが如し。

一、本書の制作に當り最も多く參考にしたのは

莊子注　晉郭象（略稱郭注）
莊子音義　唐陸德明（略稱釋文）
莊子注疏　唐成玄英（略稱成疏）
莊子口義　宋林希逸
南華眞經義海纂微　宋褚伯秀
副墨　明陸西星
莊子翼　明焦竑
莊子因　清林西仲

緒言幷凡例

一、本書は本文、訓讀、大意、通釋、語釋の五項目に分けて原文の讀解を試みたのである。

(イ)本文。主として四部叢刊本南華眞經に據り、併せて諸本を參驗して校定した。

(ロ)訓讀。本文に既に句讀訓點を施してあるから、訓讀は不用の如く思はるゝが、莊子は尋常の書と異なり容易に讀み下しにくい所が少くないから、莊子に在つては訓讀は特に必要である。

(ハ)大意。難解の書であるから殊に大意が取りにくい。直裁簡明を主として置いた。

(ニ)通釋。本書は既刊の注釋書の多くが繁辭難解なるに鑑み、平易簡明を信條として作つたものであるから通釋の部分に最も力をそゝぎ、本文の字句に忠實に而も初學者にも能く解かることを期した。此の項が最も本書の眼目である。

(ホ)語釋。難解の字句を詳說したことは無論であるが、出來るだけ先人の說を擧げて通釋の據る所を明かにして置いた、蓋し先人の功を沒しない心からである。但し漢文講座として發表した部分の語釋は簡、自餘の部分は詳、其の間整齊を缺く憾みはあるが、之は刊行を急がねばならなかつたので、

BL
1410
C5525
v. 1

LIBRARY
APR 27 1971
UNIVERSITY OF TORONTO

大禮記念

昭和漢文叢書

BINDING SECT. JUN 12 1975

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

BL
1900
C5S25
v.1

Chuang-tzu
Soshi shinshaku

East
Asiatic
Studies